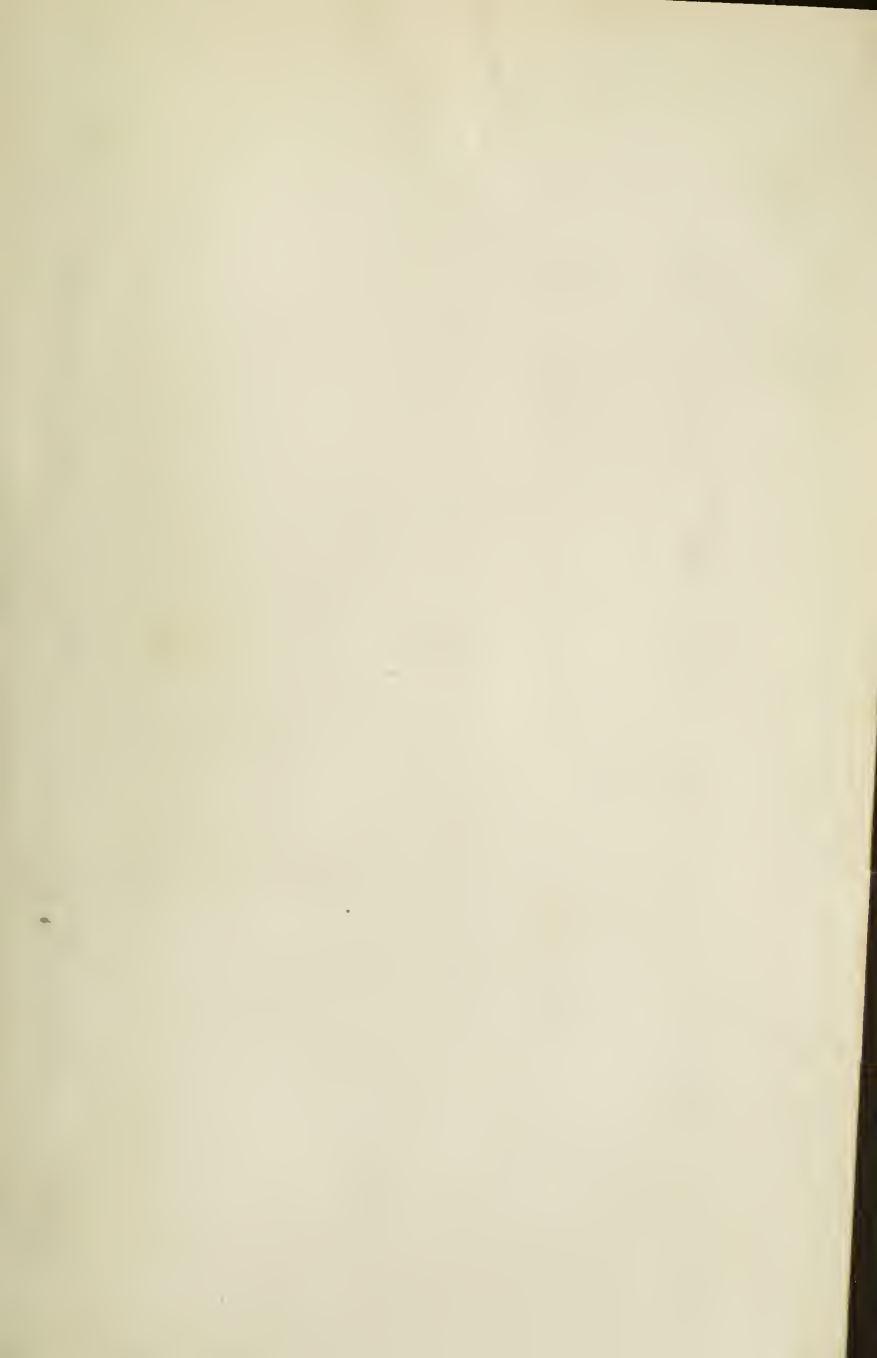


AC Zoku Gunsho ruiju
145
G856
1923
v.16
pt.2

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



大正十四年二月出版

續群書類從

第拾六輯下

東京

續群書類從完成會



AC
145
G856
1923
v. 16
pt. 2

續群書類從第拾六輯下目次

和歌部

卷第四百四十九

馬內侍集

四七三

源重之女集

四八六

殷富門院大輔集

四八七

民部卿典侍集

四九〇

權大納言典侍集

四九四

卷第四百五十

俊成卿萬葉集時代考〔萬時考〕

四九七

定家卿長歌短歌說

四九九

卷第四百五十二

顯昭法橋萬葉集時代難事

五一八

卷第四百五十三

親房卿古今集序註

五三七

卷第四百五十三

古今集讀入不知考〔古今和歌集隱名作者次第〕五七四

撰集作者異同考……………五八六

卷第四百五十四

後撰集正義……………五九九

卷第四百五十五

難後拾遺抄……………六二九

卷第四百五十六

秘藏抄〔古今打聞〕……………六四五

新撰髓腦……………六六三

卷第四百五十七

和歌深秘抄……………六六五

桂明抄……………六七六

卷第四百五十八

古來風躰抄……………六七八

卷第四百五十九

今來風躰抄……………七三九

愚問賢註……………七四八

卷第四百六十

袋草紙……………七六一

卷第四百六十一

袋草紙遺編

八一九

卷第四百六十二

井蛙抄

八六五

卷第四百六十三

清巖茶話

九二一

續群書類從第拾六輯下目次終

續群書類從卷第四百四十九

總檢校保己一集

男源忠寶校

和歌部八十四

馬内侍集

後涼殿の御つほねにうへわたらせ給て梅の花のす
くなくさきたるをけちめも見えしかくすくなけれ

はとおほせられしかは

さかりありてちらまういかにおしまし心のとけき春の花哉

おなしとしの三月に中宮の御かたに花をかめにさゝ

せ給ひてこれかちる心よめとおほせられしかは

ちらしとやたのめそめけんはかなくもとまらぬ花にそふ心哉

七月七日にはすのたまをつくりてさりにし人のを

こせたれば

思ひ餘りたのめし中のくやしきは此世とたにも契らさりしか

ともたちのもとよりあまに成なんとありしはいか

にといひたれば

後拾

しかすかにかなしき物は世の中をうきたつ程の心なりけり
さりにし人のもとよりいかにそ人やかたらひたる

とあれば

萬代
君か
新拾

とおもはぬ人のつらからは我も心はあくかれなまし
左大將ひさしくをともし給はて

あふことのなきさなればや都鳥かきりて跡もたえてとひこぬ

なとかそれよりもとあればかへし

秋風
とはぬ
續後

まは袖くちぬへし數ならぬ身よりあまれる涙こほれて
その夜たひなる所にきあひて枕もなければ草をむ

すひてしたれば

新古

あふ事はこれやかきりの旅ならん草の枕も霜枯にけり
あるきんたちいまくとてすかせは

頼めくる君しつらくは四方の海に身もなけつへき心ち社すれ

かへし

さしはへてかさしの花のその折もあたる物と見えにし物を

左大將こほりなつゝみて身にしてみてなんおもふと

あれは

^{後拾}あふとのとゝこほるまはいか計身にさへしみて歎くとかしる

人をよせねはしぬていりきたるかわひしければち

かことをたてゝ後に逢んとてやりたれば一日計あ

りて

祈りくるわかかたをかのちかとをそくたゝすの神にも有哉

返し

あふとをかた岡とのみ思ふ身はなにゝたゝすの神にかくらん

人に物いひはしめて

^{新右}わすれても人にかたるなうたゝねの夢みて後も長からぬよを

文をこするおとこの秋とたのめたる比なか月はか

りわつらひていひおこせたる

命あらはさりととのみたのみたる秋待つけん心ちこそせね

したのほかまのこしむすひて謙徳公の許に遣しけ

る

^{新千}人しれす思ふ心のしるければゆふととけよ君かしたひも

左大將こほりしたるかたなとかきたるあふきをわ

か心かほりなはおこせよとの給ひしかはたてまつ

るとてこほりたる池のつらにをんなをすへてけふ
りなたゝせてかく

もえ出るむねのけふりはたかけれと涙の川は猶氷りけり

十月ばかりにあからさまにきたる人のかへりなん

とするにしくれのすこしすれば

^{後拾}かきくもれ時雨とならば神無月けしき空なる人やとまると

しはすふたつ有し年忍ひてやみなん又はなこそと

いひし人のうるふ月はいかゝ思ふといひたれば

みそかにも有へき物を雪ふるにたもとのうるふ月の偲しき

人おほくかたらふとてあるきんたちのもとより

色くの花のなかに女郎花いかなる枝に露とまらむ

をんなのともたちのもとに久しくとはぬとゝいひ

て

つらからは扱もやみなて春の日のうらみまほしき蟹にも有哉

かへし

つらしてふ心ありけり春の日のわかうらなきにおもひける哉

しそく成し人のあるおとこにかたらはれてこれな

むひとつまつとてなこせたれば

ひとつ松むすひけりとも今そしるこころ心はときはならしを

左大將殿かへり給ひて雨ふるにいはると聞給ひて

つかのまも戀しき人はつれくとなかめに物や思ひますらん

ひさしくありておほしいてゝ

萬代

程ふればわすれやしにし春雨のふるものみそ我はこひしき

風

返し

風

いとゝしくぬれのみまさる衣手にあめふるとを何にかくらん

むげにおとつれ給はぬころ

後拾

くもてさへかきたえにけるさゝかにの命を今は何にかけまし

嘆きつゝふれ共數にあらぬ身はいかゝはすへき賤のをた卷

かへし

かくて社よそにふれ共さゝかにのいかに戀しき物とかはしる

雪のいみしくふるにおはしてあかつきにかくきな

らひてこぬはいかゝおもふへきとの給へは

新後拾

忘れなはこしちの雪の跡たえて消るためしになりぬ計そ

かへし

年ふともきゆるよもあらし白雪のちとせの松にふりし積れは

かくて忍ひてあるほとにえあはておとこきみ

今さらになにかわふへき君ならてこの世のとは思はさりしな

かへし

何かその露のほたしにあらぬ身も君とまるへき此世なられば

山さとなる人にゆきの降日

ふれはかつきえぬる雪と知なからなに山里のしゐて戀しき

かゝるへきとにあらすといひてあはぬ人の許より

長月はかりにまたなる草はをこせければ

人心またらにみゆる草なればかれぬる人のしるし成へし

かくてその冬うちとけてもあはさりければ年かへ

りて二月ついたち比につほみたる花にさして

あたにはたとのみし風しあらからは盛もなくて花や散なん

返し

風もあらく花も程なく散ゆかは憂身をいかゝなりぬとか思ふ

もとの人なと聞つけてさわかしくてえあはぬなり

けりおなし人心うきとやきゝけんこしたれば女も

むつかりてあはさりければ五月五日に男

うきをいづ忘れてか菖蒲草たえぬしたれを立ぬまつらん

かへし

忘れぬうきにつけても菖蒲草いかに下恨のなからぬやは

かくてあるにさばれなといふころくれなゐの花を

男の見せにおこせたれば

くるゝとて色にいつればあさえけり染てくやしき花をみる哉

五月宮の御まへに雨のいみしくふるに郭公のなき

てわたれば人に歌よませたまひしに

とふかたそまつしられける郭公いかになく音そ雨やとりせて

をとのしもし八字よむこゝろいひにおこせたる

かれいならずやありけん

しりめめしとやくやしき忍ふ草しる人もなしたえやしなまし

この男よをかねたる夜夢にや見えけん

思ひつゝぬるよの夢をしらぬ身は胸にたく戀さめたにもせよ
長閑なる春の浦にもすかためは猶こゆるきのいそかしやなそ

あるおとこのもとより

なきたむる涙のたまを衣手につゝむ人めに程そへにける

つかひあしくして見つけられてこひたる人さりぬ

と聞えてこの君

人しれずぬれわたる身は泪川いはれの池をあはれと思ふ

かへし

おもほえず涙の川にぬれきぬを我より外に誰かきるへき

たつた由に二日計ありてたつ田山もいかゝとて

吹風にけになひかすはをみなへし忍びにかゝる露をしらん

とあれば

さかのいろなるこゝろとやきく

といひしかば

をみなへしつゝむ我身は野へなれや

おなし君九月ばかりに

おもふ人やすすきぬとや菊の花雨ををきても露にぬるらむ

ほかにとてかへしつなとかをとほのといひたりし

かはみつからきたるにあはねは九月九日菊にさし

て

菊のうへの露をほちきて涙こそわたの衣の袖もかはかね

しのひたりし人のもとより

あきとになかるゝ床のまぐらかな我もうき水の心ちのみして

きりゝすのなきしをひとりとに

なき名たつそてもありしをきりゝす草露けし・何か鳴らん

五月五日にこのきみ

新古

ほとゝきすいつかと待し菖蒲草けふはいかなる音にか鳴らん

かへし

新古

五月雨の空くもらす郭公とよになくねば人もとかめす

その夜きたるにおくにおるかけは見えてなしとて

かへしたれば

新古

ほの見えし月を戀つゝかへるさの雲路の浪にぬれし袖被

いまばかきりといひたりしかばしかのうちにとの

みいひやる三日はかりありて

しかのうちにたのむ泪はつきせねとせきもとゝめぬ相坂の關

返しばせてしばしありていし山へまうつと聞て

あふ坂のせき山こゆるけふさへやなほや涙のつきせさるらん

といひたりしかば

白露のすゑゝこゆる相坂のいとはる雨に袖そぬれける

また七月七日に

けふとたに契らぬ中にあふ坂を雲ぬにのみと聞わたるかな
かへし

あふとをけふとなかけそ鵲のはしきくたにもゆゑしき物を
人のきたるにわたのころもとたのめやしけん

流れゆく言のほにこそ白露のいのちをかけてをきかへりつれ

これをきいてあきのふの朝臣

さ月山みやまかくれの草木とやとのはたにもかけて散こぬ

またあるおとしのふ草につけて

忍ぶ草しのふやつまといひなから夜深く露のをける袖哉

かへし

物思ふに秋は深くそ成にける軒のしのふの色かはるまで

このおとこげさかへりつるみちにほととぎすのな

きつるといへば

こゝろ見に空がよひて時鳥人たのめなる音こそなかるれ

大風のふきたるつとめてひはたにさしてあるおと

このもとに

けさみればとまれる宿もなかりけり忍ぶの草もいかゞ成にし

おとこのとをきところへいくとて

草枕たひねのころもかはかすは夢にもつけん思ひをこそよ

たひねのところより

獨ぬる宿にふするかやりひのさ夜更かたにもえかはりつゝ

ひさしくあはてなてしにさして

あふとはから撫子のはるけて思ひわつちふとこ夏の花

つゝむとありてふみなともかよはぬほとかきあつ

めてをくらせたる

萬代

井せきする岩まの水の打忍ひしのひかねてそれはなかれぬろ

後拾いかなればしらぬに生るうきぬなはくるしや心人しれすのみ

浮草にまくらやすらんをし鳥の夜はのとけきいやはれらるゝ

わか戀にくらへてし哉雨ふれば庭のうたかた敷をかそへて

ね覺には聞もしつらんよますから雨の聲にはおとりやはする

五月雨に夜ひとよ雨は忍ふれとそれより外の聲はせさりき

さいめんよりうつゑをたまへれば

なけきとそほと／＼思ふのをゝ音は祝の杖をきるにそ有ける

かへし

斧のをとも尋れさりせははま椿いはるの杖をいかてしらまし

人のもとにかれたるもみちの枝をやりたれば

霜枯のあふくなけきの枝なればふかき色とは見えすそ有ける

左大將ちかことふみをこそ給ひてかはりのふみ

をこそよとせめ給ひしかば

千

千早振かもの社の神もきけ君忘れすは我も忘れし
やすのふふみをこそれといひもはなたねはうりに

書て

うりふ山そのほとゝのみ頼めつゝ久しくなるはつらきわさ哉

左大將兵衛佐にておはせし時うつきに物をいひそ

めたまひて

^{新古今}郭公聲をはきけと花のえにまたふみなれぬ物をこそ思へ

かへしかしは木のわかき葉にさして

^{新古今}ほとゝさす忍ふる物をかしは木のもりても聲の聞えける哉

あせちの大納言むかしは物なと聞えたるをのちば

ほかにて人かたふとさきて

澤に告おりたちぬとも葉を若みわかかりそめし淀の菖蒲は

五月のなか雨にあやめのおちたるを宮御らんして

あはれ歌よめとおほせられしかば

菖蒲草いづれの澤にねをとめて身をはなかにくらしはつ覽

めある人のもとに物いふにつゝめばかきのした葉

にかきてをこせたる

露とけておもひもをかし物ゆへにしたにこかれて何か偲ふる

いもの葉に露のとまれるを

つれなくともか下葉に置露はいかにとまれる物とかはしる

おとこかひをこすとして

かすならて千尋の濱にひろひつゝかひや有とそげふを待つる

と聞てもとよりある人あしくするにむけにあはね

はいひをこせたりし

なか空にかくてやたゆるさゝかにのいと浅ましき心成けり

人のこんとてこさりしに風の吹しかば

^{萬代}頼めをきて君こぬ宿の風の音はよるとなればそ烈しかりける

こむといひし人きてよひと夜ありけれとあはてつ

とめてなとこす成にしといひやりたれば

終夜田子のうら波よせし音を富士の高根にきかさりけるに

忍ふる人にいひつかはしゝ

おこしひの炭をは灰にかくしつゝうつまれぬ名の戀を社思へ

兵衛のすけなる人かたらふとみな人きゝて後中將

にふみかよはしければ人のきゝていひたる

かしは木は雨も人めもしけしとて三笠の山にふみかよふとか

さらにわすれしとちきりたる人にたえてある所を

たにしらせねは

^{秋風}行かよふ跡たえぬるか水くきのなかれてとかや人のたのめし

人をかたらひてあふなりあはぬとき有しかはあふ

きのはなしてをきたるにかきてをこせたりし

月草のうつし心やいかならんむらゝしくもなりかへるかな

かたらひてとし比ありつる人のゆふさり人のむこ

になりぬと聞て筏のかたをつくりてかきてやる

^{新拾}大井河人めもらさぬけふやさば拙のいかたしくれをまつらん

正月に空のけしきなともよしよめと宮の仰られし
かは

浦とにあまはみるらんはつ春のけぬるき風に浪やなこまむ

^{吾右}おとこをうらみてひさしくおとせて

つらからは戀しきことは忘れなてそへてはなとかしつ心なき
かへし

かりにても心をかへて見ましかは今はのとかに成もしなまし

ひさしくこねはいひやる

姥すての月はいかにか出たりしなくさめかたき人は見るらん

此おとこつゝみてさるへきおりあふほとにいし山

へまうつときゝてかへりて三月ばかりに

相坂のせきのまに／＼花をみて春のきにける程もしられず

返し

もろともにあふともなくて相坂の關のまに／＼花を見にけん

人かたらふと聞給ひて中關白

あやしきはぬれぬ人なき染川のかゝらぬ神もくちばてぬへし

みちのくにのかみこうりをたちぬる月のなりとて

うたはわすれて侍らさりけりかへし

きり深くなく鹿を見よかりふの／＼けにかりもりの心成けり

きんとふのきみこそその春やりたりしむめの花を文

にさしてをこせたれば

むかしににたる梅の花かな

といひたれば

梅の花むかしのとをうたかへと空のけしきのかはれるやなそ

されかたの君えてきたりこのふみありけるを見て

うらやましちりくる跡や都鳥ならひありせはなくれましやは

すけゆきあふきををこせてこれはいかにわすれや

しにしといひやりたれば

ほとゝきす忘るらんこそ卯花のかけとそふへき我としらすや

みそきの目忍ひてかたらふ人のもとより

うしろめた神も聞いれぬとなれば我を忘るゝみそきしつらん

ある人心うきことやありけん

人心よしみつしほの今よりはわれつらくとも田子の浦なみ

中關白殿おはせんとのたまひてまへわたりたち花

のかきりおらせてすき給ひぬれば

こち風にこのみしるくてたち花のたのめしとのすきぬめる哉

つれ／＼なりし日人のふみをこせたるに

春日野にたれかまつとはつけつらんけふの子日に鶯の聲

かくてえあはぬころ風ふくつとめて

朝日さす草のしもとに家ぬしてすはへする日はとにかなしも

このおとこおなし人をぬ中へぬていきてきやうへ

のほるとて雪ふる日

山たかみ雪ふる里に君をきておほつかなくも思ふへき哉
このおとこ京よりふみをこせたるに雪なんおそろ
しくふりたるといひたれば

我おもひみやこの風とふきてゝはふりつむ雪は嵐とをしれ

秋風
ひころありて夢になん見つるいかゞといひたれば

人しれすねられぬ床のさひしさを誰とぬるよの夢にみつらん
るいなる人のせいすればあはてのみあるにおとこ
くれはいかにくしてかは大井川ぬ堰の水はもりぬへしやは

かへし

新勅撰三
大井河ぬせきにつゝむ我なれやけふ暮かたに嘆をそする
野方家集

おとりたる男やなきにふみをさしてをこせたれば
ふく風にひくくとやきく青柳のいと淡ましく思ひよるかな

わか心とかれにし人正月に

わかれては春にこそ又成にけれ年はたゝにそとまらさりける

またたれもノはなれて年比になりて三月計雨ふ

る日

思ひきや春のなかめののとけきに君を雲ぬになさん物とは

右大殿ものしたまてのころいきところもしらてほ

かにあれば

野千歳歌一
忍ふれば空に泪もきりみちて戀敗人やいつこなるらん

人のあくかれてこさりしころあるところ松虫の

なきければ

君をのみ松虫の音のある物をいつれの野への露にぬるらん

五せちのところに忍びてあるにおほとくの少將に
ておはせし時みつけたまうてかゝる事抔有しかは

三笠山日影まはゆき影見るもさしはなれすはかゝらましやは
と聞えしかは

つらしといふ君もとほり忘れられて人めをつゝむ我なうらみそ

おなしとてあるをこ

ほのかにも見はやなくさむと思ひしに心をしらぬ心成けり

この男文ををこするを女いみしくいふと聞て

岸ちかみうこかぬいはゝつれなきに何くたくらん浪の下水

しほるゝもといひたれば

かくれともうこかぬ岸の岩の上にいさ白波のくたけやはする

猶きせよと有に二日計有てわたをこせたれば

しつのえのまつにもあらす思ひよりあまりなかけそ岸の藤浪

ある人三月ばかりとをきところより

ぬて近きいれぬ宿の滞しきにいとゝかはつも聲はたてつゝ

またあき

秋風のふけはみたるゝ花薄むすひし心我につけなん

人をよせさりしかは

秋風
数妙にふしみふさすみ嘆けとも猶うかりける身をいかにせん

いせへくたる人みちより

鈴鹿山こえもならはぬ道すからこふるはいかに苦しとかしる

忍びたる人おらはいかと思ふ限りなめりかしとい

ひたれは

人とはいはいこたへん涙たにこゝろしてやは袖をぬらさぬ

あめふる日いみしくふるともかならずまいらんと

あれはさらなりとて

流れつゝしのふる袖にくらふればけふ降くらす雨はあめかは

つゝむとありてあはてのみあるに津の國へなんま

かりぬる有さまにしたかひてかれよりもまいらんと

といひたれは

^{秋風}忍びてもいかはすへき芦のやのそのやへ葺の隙もあらしを

ぬたるまへより人のいきけるにこゑきこゆるほと

なれはおほつかなくなむまかるといひいれたれ

は

待わひてたてつる聲によふこ鳥雲井なからもこたへつるかな

といはせたればかへし

喚子鳥ひなをもとめて鳴ならはよそなる聲になくさめもせよ

忍びたる人かはたけをうへよとてをこせたれは

風ふけば梢かたよる河竹のよになれなはねも絶ぬへし

あはたの右大殿夜ふかくかへらせたまひて日かけ

を給はせたりしかは御返きえさせし

つゝめ共うきに人めの惜ければあけは日影のまはゆからまし

もりといふ所を系にかきてよみしかは

^{萬代}春は花秋はもみちとさそはれて人もたちよる衣手の森

かめのかたを作りてこにうす物をはりて螢をいと

おほくこめたりさふらふ人々によませさせ給ひし

君か代をかめのおなしに見すとてや川邊の螢ひかりますらん

十月ばかりおもへるを讀とて宮より仰られしかは

^千れ覺してたれか問らんこの比の木葉にかゝるよはの時雨を

とし比諸ともにありふる人よそくになりてとし

とに人のもてきけるうりをききけるとありけると

しをこすとして

としとにしらすかほなるうり作りかりもりしつる秋にも有哉

なかつたえたる人あしるになん日ころあるとて紅葉

にひをうつみてをこせたるに

ひをへてもいかにとふらん綱代木に夜おもひ出る人ばとにて

かりそめばかり思ひし人のまめやかにかたるふ人

いてきぬと聞てうつろひたる萩のしたはにかき

て

^拾うつろふは下葉ばかりと見しほとにやかて秋にも成にける哉

人のこ松といふところに侍りしにゆきのいとうふ

りしかばつかはしゝ
あさほらけ思ひやるかな程もなきこ松は雪に埋れぬらん
かへし

埋むとも雪はきえなん春來ても問へき人のなきを社思へ

とをき所より便あるにとはぬ人に

年秋風ふともすくす便を見さりせは忘れぬ中と猶たのまゝし

さるへきところに夜々とのみしてあかつきにはく

るものゝほかにとまりたりければ

けさ見れば露むすほゝる朝米とくる物ともたのみける哉

忍ひたる所にある人ふみのかへりとせねは歌をえ

よまぬなめりとてなにはつをかきてをこせたれば

冬こもり忍ふとすればなにはつに咲やこの花散も社すれ

えしたる人のもとにふみをやりたりければかへり

ともせぬに

山彦もこたへぬ春のよふこ鳥なげとや聲のたえぬ限りは

むかし見ける人こゆみをたよりにつけていま身つ

からとりにこんといひけるかおほかたにきたれと

また見えねは

ひくらしにまち心みんあつさ弓はるたに人のおもひ出よと

かへし

日くらしに春のうらみもあつさ弓おもひためたるつらき心を

かたらふ人おほかるおとこのとほき所なりけるか
のほるときくにまたみる有ときとて

拾こよひ君いかなる里の月を見て都に誰をおもひ出らむ

かへし

宿とにねぬよの月はなかわれとともにみしよの影はせさりき

よにそらとをいばれてなげくにふみをこせかたく

侍人のたえてををつれねは

後拾らかりけるみのふの浦のうつせ貝空しき名のみたつは聞つや

まつ人なきはえあふましきを人々いひてこの比

しも日もくるゝとなといひて

たもとのみひるまもなくて此比のあさひにくるゝ空をみる哉

人のもとより今宵はいきやすへきとあれば

千さゝの葉にあられ降夜の寒けきに獨はねなん物とやは思ふ

かたらふ人えあふましきとありて外へゆくとして

新勅よしさらば戀しきとを忍ひ見てたえずはたえぬ命と思はん

かへし

戀戀しきの忍ふばかりにあらば社しぬるまつまの命とおもはめ

後拾こよひかならずこんとてこぬ人のもとに

やすらはてねなまし物をさ夜更てかたふくまでの月を見し哉

四月つこもりかたにむかしさふらひしともたちの

なきことをいひたれば

いまさらに忍びそわふる郭公もとつ人とはれのみなかれて

おなしとところにすへてたましつめしてまいらずと

て

身からこそにも角にもあくかれぬ通はん玉のを絶たにすな

とてまいらせたれば

よにも皆あくかれにたる玉なればうらなきつまに留る物かは

かたらふ人のあはぬころほとゝきずのなきつるは

きゝつやといひたれば

新古

こゝろのみ空になりつる郭公人たのめなるれこそなかるれ

むかしみし友たちの賀茂のまつりのしたいしにい

てゝかくなまいりたるといひたれば

新古

君しもあれ道のゆきゝをさたむらん過ぬる人はかつ忘れつゝ

くらまにまいりたるにとりぬのもとにさくらいと

さかりなるを見すへき人もかなと思ふにもあかれ

は

萬代

都にもなへてはいはしきくら花たれに匂ひをまつかたらまし

たきをおとせはいろくの花うきたり

山たかみみたれておつる瀧の糸はあやさたまらぬ錦成けり

つゝし椿の花さきたる所にて

鞍馬山おほつかなしと人とはゝ名にはたかへる道とこたへん

むかし見しところの花をある所にうへさせ給たり

ければまいりたれば

萬代
宿古

宿かへてにほひおとるな梅の花むかし忘れぬ人も有よに

またある人

秋風

梅の花いくとせ春をへたてゝかむかし忘れぬけふにあふらん

まいりたる人

しる人に匂ひなかけそ梅の花むかしのこともちかて忍はん

むかしの友たちのもとよりおほきなるたち花をふ

みのなかに入て

たくひなき戀する人のあたりに花たち花もかはかりやなる

かへし

思ひきや花たちはなのかはかりも戀しき人にならむものとは

正月ついたちの日いまばとしころともきこえつへ

しといひたれば

としはかくあらたまるめる世中に雪降まさる身をいかにせん

つゝむとのみある人に

秋風

みねの雪谷の氷にとちられて跡みえかたき三木の山本

かへし

三輪の山しるしの杉も見えぬまでふりつむ雪に跡たえてやは

ある人この人をかたらはんと人にもいひふみをも

をこせんと思ひける程にそゝるなるきんたちなん

との女かたらふときゝて菊にさして

ちらすとして菊に心をかけたれば花こそいたくうつるひにけれ
ともたちのもと成しこの人にはなれて又のとし中
の子の日の松をむすひてけふはなかのねの日とは
しらすやとて

後拾
たれをけふまつとはいはんかく計忘るゝ中のねたけなるよに

はしめのやうにもあらずなり侍人のねとこころにあ
ふきをわすれたるやるとて

朝またきあれ行床に我をゝきて又わすらるゝならひ有けり

しはしたのむへくもあらぬ人のもとに

ちる花に枕さたむと見し夢は明るよころを幾夜かそへむ

七月七日けふの空のけしきいかゝみるといひたれ

は

葛代
歎きつゝあまの川なみ詠ればたえまかちなる雲を渡れる
正
おなし日女郎花をうへよとて人のをこせたれば

ひこほしに忍ぶる人やかよふらんけふしも匂ふをみなへし哉

いたくあれたる人の家に紅葉ちりて人もおさく

なきに菊をもしろうたてり女なかめたるに

秋風
木枯のしける紅葉に踏たえて人も見えぬ宿のしら菊

いみしきとありともよそくにならしと契りける

人さしもなくなりてをかせたるてはこをさへにこ

ひにをこせたればやるとて

後拾
玉くしけ身はよそくになりぬともふたり契りしとな忘れそ

人ようさりこんとてこさりしを其おこたりをもし

らむとてようさりはかならずとあるに

後拾
まつ程のすきのみゆけは大井河たのむる暮もいかゝと思ふ

ときくみゆる人むまやそこにいりたるといひた

れは

あくかれて行へもしらぬ春駒の面影ならてみゆるよそなき

あるところの御まへにきくおはせ給ふとてあるも

のゝ月あかきこひありくを見て

月影にまかふと思ふきくの花うつるふ色ほことにも有かな

はらかななる人のほゝきといふところにてなと

もせねばたよりにつけて

後拾
ゆかはこそあはてもあらぬ母木々のありとはかりは音信よ君

中あしく成し人秋に成て此比いかにといひたれば

君しあればれ覺の風もしらさりき秋めつらしき比にも有哉

かへし

君により人を戀しとしらるれば君をあはれと思ひ初つる

ゆのこしまといふところをくのかみにすゑて

行かへりのとかならねほこし方の忍ふはかりに待人もあらし

世中のいとはかなき比むかしさふらひし所より

いかゝせんいかゝいはまし蜩のなきても餘る世のはかなさを

さるへきところにてしのひてよる／＼きける人ま
かて／＼とめて

秋ちかき萩のしたはのかけてたにもりにし露そよるは露けき
返し

かけ草の下葉にかゝる露にても戀しといかに思ひ出くらむ
ものへゆく人にかゝみとらすとて
みなれよとそふる鏡の影たにもくもらて過せ人わするとも

東三條の花をるりのつほにさしてたのこひのはこ
にすゑてこれはちりにけるをあたらしくさして參
らせよとて少納言のくら人といふ人につかはし
さくら花たれに心をかよはしていかに匂ひをとめさるらん
さふらひし人のほかなるにふみたまふとて

しめのうちの同しいかきの都鳥なれにし友を尋てそとふ
おろかならず契りける中いかありけんおとこ
秋風
君もいひ我も契りし言のはかくしもかれん物とやはみし
ふに女のものへまうてつる山路にいろ／＼の花ち

るをとまりて見る

色／＼の花の心をちさらばふるさとありとおもはましやは
この比もろともにある人つとめてのはきのけしき
なんいとあはれなるかならずおきて見むと契りて
みるつとめてしもつゆといふものなくせさひと（せんさい感）も

よくかはきたりうきとかきりなくて

萩の上の枝もたは／＼にをく露をつゆけさいかてかはきたる覽
このあかつきにとくおきむこれはおそきけなりと
ておきよといへは

結びをきてとくと思ふ共蜘蛛のいかにまとはん露ならぬ身は
物かたりする人いつこにかあらむわかやうにたへ
てねぬ人はあらしものをたれとかたらはんとおも
ひつゝねられぬに夜更てほとゝきすのこゑひとた
ひなきてやみぬれはいつこならむとおほえて
やと／＼に鳴音は夢かほとゝきすねぬ我計聞よしも哉
やむとなき人の御ふみひとたひありてまた音つれ
もなければ五月つこもり比に

とふ螢まとの戀にあらねともひかりゆゑしき夕やみの空

後拾
おとろへはて／＼うち院にすむにかへる鷹を聞て

とゝまらぬ心そ見えむかへる鷹花のさかりを人にかたるな
てん上にてなき名をいひたてければ

拾
もえこかれ萩のやけの／＼ゆる上に見えぬ無名をおほて成哉
拾羅素日野の原あるとも下全同

入道前太政大臣兵衛佐にて侍ける時一條左大臣家
にまかりそめてかくなんあるとはしりたりやとい
ひをこせて侍ける返事に

後拾
春雨のふるめかしくもつくら哉はやかしは木のもりにし物を

時々物申侍ける人の住吉にまうていはての杜の
紅葉こそまたしかりつれといひをこせて侍ける返
しに

留古
君にしも秋をしらせぬつの國のいはての森をわか身とも哉

拾遺集第九雜下 内侍馬か家に右大將實資かわら
はに侍ける時こうちにまかりたりければものかゝ
ぬさうしをかけ物にして侍けるを見侍て

小野宮太政大臣

いつしかとあけて見たれば濱千鳥跡あるとに跡のなき哉

かへし

とゝめても何にかはせん濱千鳥ふりぬる跡はなみに消つゝ

〔右馬内侍集正編卷第二百七十二所收也然據本書得補舊
本缺脱者不少矣故不敢從省略〕

源重之むすめの集

春たつひある所のおほせとにて

うはこほりとくるなるへし山川のいしまのし水をとまざる也

よしの山にゆきのうへにかずみのたなひくを見侍

りて

たにふかみゆきしきえれば吉野山春の色とはかすみを見ろ
むめのはなおそしといふ心を

こち風もけぬるくなれば我宿のむめの匂ひをおり／＼に見ろ
うくひすのこゑはきくやとゝひてはへるかへりと

に

山ふかみ人にしられぬ宿なればまたうくひすの音つれもせず
ものおもふころあをやきを見はへりて

えたわかみ風にかたよる青柳のいともみたれて物をこそ思へ
ふるさとの花のさかりものへまかりける人に

わかくさに駒ひきとめて古郷の花のさかりをみてもゆかなん

院のおほせとにてつかうまつる

なほさりにほりうゑしものを我宿のおきのは風に秋をしる哉

たなはたのまたの日ある所のおほせとに

袖ひちてけふはたなはたかへらん昨日のそらを思やりつゝ

月をなかもめはへりて

月影の雲かくれぬるものならば何をうきよのなくさめにせん

はきの花日とに色まさるといふたいを中宮にて

かりそめのよをかさねつゝ置露にイのうさのみまさる秋はきの花

たいしらす

法の海にうかへる船のこふをへてめくる浮木にあひにける哉

ふかき山にこもりはへりて五月五日

我もや人もみぬまのあやめ草さつきのよそにきえわたるらん
山てらにこもりてひとりこちはへる

なつふかく草しけりゆく我宿は誰かきわけてとはむとすらん
夜ふかき月をなかめてよめる

むらさきにたなひく雲のたえまよりみにしむ月の色を見る哉

〔右源重之女集以屋代弘賢自筆本校合〕

殷富門院大輔集

春

まきのとをあくれば春やいそくらん袂にさえし風ゆるふ也

くればつるとしを哀と思ひねにのこれるよはの空もしらみぬ

あらたまる光りしらてふるさとにひとり春めくうくひすの聲

春きぬときくにも物そあはれなる花まつほともしらぬ命に

賤のめかゑくくの若なはおいぬとや鳥羽田の面にあせつたひ行

ますらおかあら田のをたなへすまに鳴のふしとはあれやしぬ覽

みかくれてすたく蛙の聲なからまかせてけりな井手の小山田

よさの浦の春にうら／＼見渡せば外山の庭にわかめかりほす

かこ山の春のこくればしけれと空よりもらぬ月もすみけり

なつぬへき人もなき身はあくかるゝ心のまゝに花をこそみめ

霞たついでそらかさきのつり舟はこかぬ物からとみさかりゆく
かけきよきみきはの櫻うつろへは花にこつたふ池のにはとり
花もまたわかれん春に思ひ出よさきちるたひの心つくしを
うくひすもよはうき物と知にけり出しふる巢へ立歸るらん

なつ

河そひの卵花かきを白なみはさらす布とや思ひかくらん

夏狩のせこふみしたき分る野にしほりやすらんさゆりはの花

ふなてせぬともうきねに成にけり高瀬の淀の五月雨の空

いたつちに老にけらしなあはれわか友とほみすや杜の下草

夏ふかみはらみにけりなしの薄したはひまとふ葛の帯して

秋

ゆふすゝみあたれの床の明方にすたれうこかし秋はきにけり

秋來ぬと思ふよりこそわひしけれ覽に虫の鳴んとすらん

あすといへはなげきも色やかはる覽今更にまたしむ心ちする

露むすふ山田もるこか袖ぬれて物や思ふとはまほしくも

きり／＼雲井の鴈に何といひてかへのそこより聲あはす覽

古郷の一村萩の花さかりたれきてみよと色こかるらん

れさめして残れるよはの月みれば行ともなくて傾きにけり

月清みむこの高ねに雪ふりてつもり浦によする白たま

いまはとて見さらん秋の空までも思へはかなし秋のよの月

虫のねも心／＼にいそくなりはたなるあればつゝりさせてふ

正 なかき夜の友とそたのむきり／＼我もつめには蓬生のぬや
秋風にうらみ渡りし葛のはの猶あかすとや色とになる

秋の夜の物悲しさをいかにしてうき世の外にれて心みんとにかくに見るわれくるし秋萩の花はうつろひ下葉色つく
色かはるみ山おろしの濱風にふな木もはやく紅葉しにけり

このはちる残りすくなき風の音にしつゝきぬたの衣うちそふ
たぐひなく心ほそしや行秋のすこし残れる有あけの月
きり／＼すあなかましはしと思しにかれ行露を聞もわりなし

冬

かきくもり時雨もあへず出る日のかげよはり行冬はきにけり
柴の戸をたたく嵐の音さむみあくる物うき冬のつとめて

正 木のぬのよはりはてぬる庭の面に萩の枯はの音を残れる
神無月いかなる時の雨なればかきくもるより物かなしかる

みちふかみいとひし庭のよもきふの霜かれゆくも物そ悲しき
つのくみし声へ程なく枯にけりなにはの事もかゝるよそかし
きゝすなく哀はたれも有物をかりはのをにたゝぬはかりそ

秋はつる山田のそはつ心あれや同しうきよの物かたりせん
今朝みれば隣ひとつになりにけりへたつる竹のよはの雪折

白雪のふりつむ野への萩かえに春待鳥はいかゝわひしき

原の池に氷柱ぬにけり打われて渡るあきさの今朝はおわり
山川のさゝれかうへうす氷のきみ行すむすほれにけり

戀

行年のけしきはいつもかはらぬに物悲しさそいやまさりぬる

こひ草のしげみにかける露の命なひくもまたて消ぬへき哉
物思ひを何のやまひととふ人のなれぬ氣色もうちやまれけり

かひなくていけるそつらき信ぬれはあらじにせん名を惜す
身のほともしらぬ心のつきしより思しとそなけきせんとは

人心あなあやにくの世中やにくみいとへはこひしわりなし
こひしてふ事をたれかははしめけんつらき物から哀と思ふ

みせはやなを鳥の聲の枯たにもぬれにそぬれし色はかはらす
いつ方へ人の心のはなちとりわかひとりにかへうさるらん

わすれすなほさりとをたのめをきて空をしみせし曙の空
まちかれて伏見の山田風吹はそよかへらんと契りやはせし

忘れにしいらかゝとは過ぎぬと誰に語てこよひぬらん
風あかりに匂ひ残れるさむしるは獨ぬるよもおさうかりけり

わすれなはいけらん物と思ひしにそれもかなはぬ此世へけり
へたつとていとひしよはのき衣を返してれたる夢にたにこぬ

恨みすよなけの情のこれをたになからへはてゝきかん物かは
忘れしとつれにはいひしよくさのやかてのきはにかれも行哉

あはぬ夜返すといひし衣手を引とめてたに恨かけばや

心にもあかすといひてよかれせし折／＼はかりあふよしも哉
しばしこそぬ夜の塵もはらひしか枕のうへに苦むしにけり

はかなしなたゝ君ひとり世中にある物とのみ思ふはやわれ
夫千はやふるちひろたくなほもゝ結ひうちとけてみき長き心イ
我戀に五位のかうふり給らはなみたにそむるあけの緒きん

雜

春草にまかひてたてるわか松の行末遠き君か御代哉

月を見て思はぬ事はなけれども猶悲しきはやみに迷はん
千つくくと思へば悲しあか月のね覺も夢を見るにそ有ける

うら山しうきはむかしに成はてゝあらぬ世に成かつまたの池
徒に老ぬる松をとまなへと千世にはえこそたらはさりけれ
露の身の何にかゝりて過すらんさすかにもとの雫ともなし

古しへは老もやすると頼みありきさて此比はいかにたゆむそ
廣玉春の花咲てはちりぬ秋の月みちてはかけぬあなう世の中

うき世そと人はいへ共えそしらぬさもあらぬ折の習なければ
月語ありくゝて今はの時やわれか身の世の人数にならんとすらん

さきてちる物思ひなき埋木もくち行はての悲しからすや

花も葉も落ちるとき續古風の有物を思ひもあへぬ人の世のうき

きえぬへき露のうき身のをき所いつれの野への草葉成らん
こりばてぬ色にはしまし山吹の匂ふ清水をくみて思ふに

宇多の郡

淺からす思ふかためのいつぱりにこほりも深くみちにける哉

上陽人

くれかなく明しくらしつ春秋のいかにつもりてさまかはる覽
隠題きんのこと

かり衣カしかまのかちにそめてきんのとの露にかへらさるへきイ

ひとりふせこ

よそにても我を思はゝひとりふせ戀しといふもさらば頼まん

高野大師

たかの山みねの朝日をまつとてそかみなきみちに思ひ入ける

地こく

心よりいつる思ひのわかすゆにかへるゝもにゆる悲しさ

極樂

笛の音も琴のしらへも紫の雲にしみ行あかつきのそら

こゝのしな匂ふ蓮に生れては一ののりのうひとをせん

よとゝもにえのめつらしき色くゝの花はかれせず鳥は歸らす

華嚴經

秋の夜の月のみかほはのとけくて春のなかはにかくれすも哉

最勝王經

いまはとて衣をかけし竹のはのそよいかはかり悲しかりけん
風風

維摩經

むろの内もさとり心し廣ければよろつの床をみてそたてける

法華經

今そしる鶴のはやしは名のみしてわしの高れにすめる月影

涅槃經

つく／＼と思ひとくこそ悲しけれ雪のみ山の鳥のをしへに

賀茂の神主重保ふみたらん歌ともかきあつめてみ
やしるにおさめんと申せば書てなくとておくに

神山の霞吹とくはる風に色こくなりぬあけの玉垣

しめの内に色こくみゆる櫻花天下りけん昔をもほゆ

歸る雁みたらし川にうつろへは水のしらへのことち也けり

年をへて花の都に住かじはう月のいみにもれぬ也けり

ゆふしてや秋の初風吹ぬらしそよくいたく身にもしむ哉

月やとるかも川霧晴ゆけは雪間をいつる心ちこそすれ

神垣のくすの紅葉の色こきはみる／＼露のそむる／＼けり

なく霜やそめかへつらんあさち原うらかれ色の紫の／＼へ

神さひて年はふれともひめ小松若えさしそ陰そ替らぬ

もろ人をわたすちかひのたえせぬはみたらし川のとつみや處

法隆寺舍利の御はこの歌をみて

限ありし鶴の林のかたみをはとゝめおきつるいかるかの里

〔右殷富門院大輔集以圖書寮本及丹鶴叢書加校合畢〕

後堀川院民部卿典侍集

きくたにも雲井の外のかひもなしそむきにし世の猶悲しき
返し

悲しきのみるめのまへを思ひやれそむきにし世のよその哀に
いか計かなしとかしる世のうさにすつるこの身のおやの心は
花の色もうき世にかふる墨染の袖やうきよに猶しつくらん

返し

墨そめを花の衣にたちかへし泪の色はあはれともみき

寂 空

君かいるまことの道の月の影夢と見し世も今やてらさむ

かへし

やみふかきうき世の夢のさめぬとててらさばうれし在明の月

沙彌蓮生

紫のいろにつたへし袖のうへをかはりにけりと聞そ悲しき

返し

あくるまのけふは昨日にかはるよの衣の色はいふかひもなし

いふなか

墨染の袖をかされて悲しきはそむくにつけてそむく世中

かへし

いける世にそむくのみこそ悲しけれあすともまたぬ老の哀は

權律師修榮

形見とはいふもろかにいひしらす心にあまる程をみせはや

あさからぬ契もいまは白雪のかさなるとしのあとに見えなん
鶴契還年

いく千世かあまの羽衣たちなれんともなふ鶴の雲の通ひち

殿歌合月下鹿

^{留干}さむしかの峯のたちともあらはれて妻とふ山をいつる月影

風前擣衣

あしかきに木のは吹しくおひ風の音もまちかくうつ衣かな

寄衣戀

やま姫のそめぬ衣もくれなゐの色に出てや今はこひまし

寄鏡戀

^{留後撰}おもかけはさらぬ鏡のかけにたに涙へたてゝえやは見えける

玉

^{留拾}かひもなしとへとしら玉亂れつゝこたえぬ袖の露のかたみは

絲

しかすかにまたたえやらぬかた糸のあふを限と年はへにけり

おほせもにて五首題初秋

さらにまたかきほの萩もをとつれて里馴そむる秋の初風

ふく風のをとほの山のされかつら秋くるからに露こほれつゝ

秋月

たれもまつ秋はならひの月なれと猶ひかりそふ夕暮の空

歌合名所月

辰田山そめてうつるふ木末より時雨ぬ色にいてぬ月影
清見鴻月の空にはせきもぬすいたつらにたつ秋の白なみ

いくかへりすまの浦人わかため秋とはなしに月を見るらん

行末のけふりとたにもわかさりし心のやみはいつかはるへき

返し

おもひやる心の空の月の色にとまるやみちのはるゝをそ待

世をそむきぬと聞て人のとふらひて侍ける返し

^{留後撰}悲しきはうき世のとかとそむけともたゝ戀しきの慰めそなき

^{留拾}夢の世に別れて後の戀しきをいかにせんとかきみになれけん

くるとあくとなかすなみたの紅に色も別し最染のそて

おなし比たにゝ烟のなと申ける人に

身をこかす烟くらへの別路はをくるへくやは物の悲しき

述懷歌

憂身まてかはれはかはる世中をなになからへてあけ暮しげん

夢にたにわかしかは又もみれに生る色やみとりの風そ悲しき

くすのはのいく秋風をうらみてもかへらぬ物は昔にけり

末の世をてらすと見えし月なれば西の空にや光そふらん

したへとも花の臺の遣ければ空行月にねをのみそなく

見てしかはうき世の衣ぬき捨てさとりひらけん花の衣を

うきなみに霧も霞も立かさねしはたれ衣かはく目そなき

こひわふるかけたに見えぬ夢の世にあはれ何とて在明の空

ゆめよりもはかなき露の秋のよに長き恨やきえのこりけん
たちわかれうき世出へきつまとてや花色衣きつゝなれけん
かたみゆへ又せきとめぬ涙かななれて別はこりはてし世に
みたれ落る我ものからの身にそへて今はあたる袖のしら玉
いかさまに忍ふる袖をしほれとて秋をかたみと露のきえけん
雪ふりたる朝しけもちまいるよし申けるに心ほそ

さおほしめしやらるゝ御とつけのつゐてに

けふまでも何に命のかゝるよにふるも悲しき雪つもるらん

おりを過ぎぬおほせともおなし泪にかきくれて

ふりつもるあとなき雪をみてもまつ同じ泪にかきくらしつゝ

おなし雪のあした大殿より

おもひのみ日数や雪につもるらんあとなき庭も跡きえぬまで
憂身世にきえぬもつらきためしとや袖の雪たに拂はさるらん

御かへし

うき事のふりてつもれる雪の中はいとはぬ庭もあとそ稀なる
きえとまるほとも悲しき墨染の袖には雪のふるかひもなし

いとさひしく見わたさるゝにも

残りなく年も我身もいりはてゝとばれぬ雪のほとは見えける
宿からの都もしらすふる雪に山のいくへをおもひこそやれ

としかへりて日数過て後これよりおとろかされて

つゐてに さか

しほるらん霞の袖の春の色をきりにまよひし秋のかたみと

はかりけひとりなかつてこそりし(中絶)か

春しらぬみ山の雪のふかさまてとはるへとは思はさりしな

わかこゝろのあさゝこそとありければ又京

すみそめの衣いつれとわかぬまに霞や霧にたちかはるらん

もしゝれ候はて

袖のうへのうきしゐ柴にくらふればみ山の雪は春もしるらん

この返事こまかにて さか

くまもなく光をてらす秋の月さこそは西の山に入らめ

これをも九品れんたひに思ひやりまてせさせ給へ

此世にもにこらさりけり秋の月花のうてなに光さすらん

たのもしうこそ候へ

うき世をは霞の色にぬきすてゝ花の袖にそ春をしるらん

秋の霧春の霞と立かさねなみたにしほるあまの袖のみ

こそ数なるも数ならぬも哀盡せぬ恨にては侍らひ

けり

さむるまであらまし夢のよの中を見し長月の在明の空

いかに候事にか身にとりて長月の在明方ふし待の

ほとたへかたくあはれに思ひしみてさふらふに小

倉の山のしかのなくさへ

はかなさの春の夢かとみしよにも末はの秋の露の世中

たちかへしあまの衣の袖のなをうき世に残すつまとこそきけ

我なから捨し此よを打かへし又おしみさふらふか
今さへまたおそろしくもさふらへとも秋より冬ま

て思ひつめ候し事を佛にひかれまいらせてうちい
たしそめ候て中くにとゝめかれたるやうに

となくともしとふ心の契あらは花のうてなの露もへたてし
秋の月影もしられぬ山陰の庵にたにも露ほこほれき

身をなきに思ひなしても悲しきはうき世を捨し秋のよの月
君か代をいはひし春も百千鳥よをうくひすと鳴を聞にも

まつ泪の水はいととけそめ候ぬる心地してこそ
けにも候つれ

これも又惜みながらもそむく世とすむる道のしるへえけり
とまておもひなしまいらせてこそ候へ

谷陰の柴のくち木の烟ともならん夕の空をなめよ
きかせおはしまさは

かきつめてうき水くきの跡なれと忘れす忍ふかたみならずや
と心をやりて又くかくれてはつかしく

かきやれはその事となく水くきに泪のかゝる心ならひに
をしはかりまいらせ候も

あはれいかに此春雨のつれくつとふるにつけても袖ぬらす覧
人の夢に見参らせたりける歌

まよひこし我心からにこりけりすめはすみける池の水哉
此世にてあひみん事はしかすかにはかなき夢を頼む計そ
御らんせられて大殿

すきやすき月日のほを思ふにもかすなき物は涙えけり
いけ水のすめはすむらんとはりはもとの心のきよきえけり

御はての目さかよりとてさしをかれたりける
この秋もかはらぬ野への露の色にこけの袂を思こそやれ

と有をたれともみ分れば殿の御まきれ事にやとて
御くるまに入させつ

けふとたに色もわかれすめくりあふ我身をかこつ袖の涙に
さとにいてゝむけにふけぬるほとに又殿よりとて

かきくらしかさなる秋はめくるともなを墨染の色やひかたき
又御返事いとこゝろへすなから

^玉よのうさに秋のつらさをかされてもひとへにしほる墨染の袖
ほとへて後はしめの歌は六條の三ぬいゑひらさる

ことしたりしと宰相殿に語けるときく

祥室

けふよりの花のたもとのあらましに泪かさなる墨染のそて

返事

墨染の袖もひかたき秋なれととふ人もしやわきて露けき

權大納言典侍集

戀

音なきはこよひよりかと思ふより恨みてをきて又そまたるゝ

はる

さく迄ばまたまたしくと今はゝやそのけしきたて宿の梅かえ
またすともあはれ程あらし花さかり風にみたれん如月のころ

正應元年九月九日御歌合戀

戀しさにたへぬ限のきはにまれなりはてぬやと思ふくれかな

はるのけしき

よのけしきそとなくこそ哀なれそらうすにほひ木末けふりて

うくひす

ゆきちりて寒さのこれる春なれと時をしりける鶯の聲

としのくれ

年くると人はさしもにいそけともつれよりとに世は長閑なる

冬

きのふまで秋となかめしよの色を何のかばれば冬になすらん

戀

むなしくは人のとかにはあらずともまつ一度ば恨みやりてん

秋

たけの葉に秋風さむみふきとなり夕暮さひしひとりなかもて

いけなみたちて

吹風に池なみ立てみきはなるあしひとかたにをしなひくめり

こひ

ぬる中の夢にも人なみるへくは物うきところいそかれなまし

さむきあし

池しろく氷りとちたる朝あけにたてるみきはのあしの寒けき

秋

かれいそく萩の下葉になくれしと色さひわたる庭のおもかな

〔題闕〕

ひとしくれとをれるあとのうき雲にやかてはつるゝ有明の月

草はみなかれかるみつゝ風にのみもろくみたるゝ音そ悲しき

こひ

いかにして人になれしと思ひとるも今より後のとに社あらめ

秋風

きゝをくるなこりもすこしつくゝと梢にわたるゝはの秋風

ゆき

かきたれてふると詠むる程もなく庭こそやかて雪になりぬれ

戀

このきはゝたゝ中々にみすともといひし情のころまれもかな

松下月

ものくらき松の木かけに月もりてふけぬる庭の色そさひしき

たけのつゆしろし

たくひなく見えもするかな月の夜の竹にならへる露のしら玉

〔題闕〕

ときいたり春にをしなるとはりに空もやはらき霞ゆくめり

むめ

色もかも心の中にあらましてまたきしつえの梅をこそみれ

天しやう

このくれそあはれとみつる大そらの霞そめぬるよもの梢を

ちき

ちりてこそなをしも風は厭はるれさなから庭の花を見んとて

はるの動物

にはにさす日かけのとけみ風ぬるく春なるけふに驚なきぬ

春居所

月うすくふるきのきはの梅にほひむかし忍へとなれる夜半哉

花

おしとおもふ心もしはしわすられぬ風に亂るゝ花のけしきに

春雨

色あさき柳のみとりうちなひきあめしつかなる春の日くらし

はる

春はたゝおりくちれる花の色の匂ひになれるいりあひの聲

なつ

雨の中に橋かほる夕くれよ山ほとゝきすいまたにもなけ

冬

吹をくるかねての風ははけしくて静になれる雪の中かな

正應二年十月十三日御歌合落葉

風にちる木の葉もいかに思ふらん枝にわかるゝ今のなこりは

同御歌合雪

雪はたゝ静になれるのちよりもふりにけるよのあけほのゝ庭

同御歌合戀

このうさに猶なからふるつれなきはあすと頼めは又や待れん

うきとはしはしかほと思ひにてたゝ戀しさにつれば成ゆく

秋夜

風のをとにはにしつまる月のかけふけぬるよはの秋を見る哉

うらむる戀

そのたひにむかしはいひしうき事を今は心にさてのみそもつ

暮春

春として匂ひし花の色つきて日かすのはても今にかきりぬ

戀

思はずとさのみいかゝ恨むへきたゝ我いかて人をしたはし

夜

月とをき村雲すみてこの夜はゝ明かたちかく成りにけるかな

春

月もなく風はかりふく春の夜に哀はおほきものにそありける

永仁二年三月十四日

思ふものいかにあるにやつれよりも今宵の雨の音のかなしき
つく／＼の心もおなし思ひにておなしさまなる雨をきくかな
春のなこり花のなこりの月の夜をあらぬ情に雨のなしぬる

永仁元年四月はるの夕といふ題にてうたあはせ

うすかすむよものけしきをほひにて花にとゝまる夕暮の色

同御歌合冬夜

吹ならすあらしの音もとなるは霜か雪かの今宵ふるにや

同時戀夜

戀しきにつく／＼とれぬ夜半の内にせめてやあき雨さへそふる

雜風

枝よばくなくひける竹の夕にそ風をはうけて見るへかりける

永仁二年三月廿九日ほしゆん

思ひいれておしむ所もおしまぬもなへてわかるゝ夜半の春哉
なくさめてふち山吹を残しかきて花をばくして春やさりゆく

同時戀

つれよりも戀しさあまる折はたゝ詠めてたにもあられさり鬼

いかなれや夕くれことに面かけの見るこゝちして今宵戀しき
身にうさの眼をみてしそのゝちは心のそこそ我もかはれる

我もゆき人もまたれしその折の身さへ戀しき今にもあるかな
さま／＼に後は名残の戀しきに人にはしひてなれしと思ふ
さりとともと思ひけるこそばかなけれもとよりさその人の心を
御うたあはせに

ひと本のこゝのお花にやとらんさとかはるけみ行方もなし
かれしろき尾花に夕日さすまゝにたへす聲するきり／＼す哉
くらき松の嵐のをとも雨やみて軒のしつくのふくるをそきく

永仁二年四月廿四日一行寒鷹万山秋

ひとそゝきしくるゝ山の夕くれにたへぬ聲なるかりそ過ゆく

永仁二年四月十三日ふるきしの心を

何となくあはれにみゆるおほそらの雲に心をけふはくらしぬ
すきぬれば現のかひやいつくなるたゝ見し事は夢にのみして
御つき歌中に戀

つれなきを思ひとれ迎かく計またみぬうさをみするにそあらん
たえぬへく恨みなりぬるはてはたゝ哀ひとつに思ひわひつゝ

續群書類從卷第四百五十

和歌部八十五

俊成卿萬葉集時代考稱萬時考

萬葉集時代事。もとよりひと方ニさためかたく候て。ろむしあ
ひたる事ニ候。

清和天皇御時。文室有季ニとばれ候時は。

神な月時雨ふりをけるならのはの名におふ宮のふることそ
これ

と申て候へば。ならのみかとゝはきこえ候。

ならのみかとゝは。うちまかせては。

この京へ宮こうつりしてのち。さらにならにわか身許かへり
ておはしましたるみかと。

桓武の御こ。嵯峨の御あにのみかとを。御名には 平城天皇
と申。

たゝならのみやこにおはしましたる。六七代のみかとを。はな

のノ御名ありて。ならのみかとゝ申さす。

元明。元正。聖武。孝謙。淡路。光仁也。

古今の序ニは。

いにしへよりかくつたはるうちにも。ならの御時よりそひろ
まりにける。かの御世やうたの心をしろしめしたりけむ。かの
御時に。おほきみつのくらゐかきのもとの人まろなん。うたの
ひしりなりける。これはきみも人も身をあはせたりといふ
なるへし。秋のゆふへ龍田河ニなかるゝ紅葉をは。みかとの御
めににしきと見たまひ。春のあした吉野の山のさくらは。人丸
か心には雲かとのみなんおほえける。又山邊赤人といふ人あ
りけり。うたにあやしくたへなりけり。この人ノゝかゝきて。
またすぐれたる人も。くれ竹のよゝにきこえ。かたいとのより
ノゝにたえずそありける。かゝりけるさきのうたをあはせて。

萬葉集となづけられたりける。かの御時よりこのかた。としはもゝとせあまり。世はとつきになんなりにける。

とかきては。

代をかそふれば。平城天皇のはしめ大同元年より。延喜五年ニいたるまで百年。

世つきにはならのみかとの御時。左大臣橘諸兄うけたまはりて。萬葉集をえらふと申て候。

顯昭法師はこの世は十つきになんなりにけると申。古今の序をつよくまもりて。大同のみかとの御撰と申候。

さなき人は。おほくさきのならの御よにえられたりと申は。たゞ世は十つきのとは許こそ大同ニあたりたり。

すへて人丸あか人をめしつかふよりはしめて。なにもとさきのならの御よにあたりて見ゆれば。大同にあらずと申あひて候めり。

このせちにつく人。又おなし序をひきて。もゝとせあまりとかけるに。もゝとせにみつとしなれば。一定さきなりと申。又このせちにつきて。人丸赤人をめしつかふ御世に。萬葉集をえらふと申さは。むけのひか事也。

萬葉集には時代あらはに見えて候。

人丸あか人はふるき人になりて。家の集を見てそのうたを

見る。當時ある人ニあらは。

聖武天皇をは 太上天皇と申。

孝謙天皇をは 天皇と申たり。

中納言家持は前太上天皇は元正御事也。

實德 光仁御時 延喜十一年二月一日參議ニなる。

延暦二年七月十三日中納言ニなりて。おなし四年八月にうせて候へは。

大同の人その歌をかきて。中納言とかき候へし。

萬葉集には。内舍人より越中守左少辨（少輔）と申て。次第ニなりのほりたる上達部よりさきのつかさを。やうくにかきて候。

又さなき人くも。光仁桓武の御よの公卿をは。おほく殿上人よりしものつかさにかきて候へは。

あらはに聖武天皇くらゐをおりさせ給て。孝謙天皇くらゐにおはしますころの集とは見えて候へとも。たれうけたまはりて。一定えりたりとも。いつれのみかとのおほせ事にてありとも。たしかにかきたる物はなにも見え候はず。

諸兄大臣は天平勝寶八年 聖武天皇のうせさせたまふとし致仕。つきの年うせて候へは。人のほと。まことにうけたまはりてえらんも。あたりたる人に候へとも。ゝのなとにうるわしくかきたる事は見なふ候はず。人のつかさ世のありさまにて。あらはに聖武御時のこととは見え候へとも。さま／ろ

んしいさかひ申あひて候。

やすくと人のしりたるにては候はぬ也。むかしのとはなにともかすかにたしかならず。人の心はしなやかに心にく候へは。ものをあなちにあまてきたするとも候はす。かきつくる事も。申さばしとけなきとおほく申ちらして候を。よのすゑには。いかにせんとしらぬ事をもしりかほに。見さためぬとも。事をきるやうに申あひ候へは。きにくとも又おこましくも候なり。これよりすきてたしかなる説は。たれもえ申候はしとおほえ候。

此一巻就後京極殿(于時大將)御尋所被注猷之也。五條入道殿御消息也。正本は在于九條殿云々。是は九條前内府御筆也。

以藤谷殿御本書寫交合訖。奥書は藤黃門御自筆也。御本者卷物也。追期之後者可奉返家門者也。

桑門潤爲

此時代事隨分被秘。仍書寫御免之仁無之歟。愚身書寫。面目云々。

右一策以前黃門爲久卿相承之本書寫之。抑此萬時事頗世

上稀有之物也。以芳志被借與之。深納篋底。尤可秘藏而已。

享保十六歲三月中浣

散木亞槐公澄

此一帖以滋野井家御秘藏本謄寫之。誠珍重之物也。公麗卿

以御懇志借與之給。深納函底可秘。必不可出窓外者也。

安永乙未歲霜月上旬

大和守伴穰興

此一巻不謀得之。雀躍而頓膺寫畢。尤可秘窓中者也。

天明四年初秋

芳宜園主人慈延

〔右俊成卿萬葉集時代考以圖書寮本校合〕

定家長歌短歌之說

萬葉集長歌載短歌字之由事

集卷第一 此卷無并短歌字。

泊瀬朝倉宮御宇天皇代

天皇御製歌

所載長歌也。只御製と書て無長短字。

高市岡本宮御宇天皇代

天皇登香具山望國之時御製歌

長歌。不書長短字。

反歌。

幸讃岐國安益郡之時軍王見山作歌

長歌。

反歌。

明日香川原宮御宇天皇代

額田王歌

卅一字歌也。

已下如此。卅一字皆作歌と書。

近江大津宮御宇天皇代

天皇詔内大臣藤原朝臣薨春日万花之曉秋山千葉之彩時額田

王以歌判之歌

長歌。歌と書て長歌を書也。

額田王下近江國時作歌井戸王即和歌

長歌。

反歌。

此外卅一字皆作歌と書。無長短之分別。

明日香清御原宮

天皇御製歌

長歌。

天皇幸吉野宮御製歌

卅一字。

藤原宮御宇天皇代

天皇御製歌

卅一字。

過近江荒郡時柿本朝臣人麿作歌

長歌。

反歌。有二首。不書短歌字并歌數。

已下皆卅一字。作歌と書事同。

幸于吉野宮之時柿本朝臣人麿作歌

長歌。又不書長短字。

反歌。

載如此二首。

幸于伊勢國時留京柿本朝臣人麿作歌

をみの浦にふなのりすらんあまものたまものすそにしほ

みつらんか

輕皇子宿于安騎野時柿本朝臣人麿作歌

やすみしりしわかおほきみのたかくてる日の皇子神なから
神さひせすとふとしけるみやこをきてかくらくのはつせ
の山はま木たてるあら山みちをいはかねのふせきをしなひ
き板鳥のあさこましてたまきはるゆふさりくれはみゆき
ふるあきのおほのにはたすゝさしのをいなみくさまくらた
(し脱略)

ひやとりせすむかし思ひて

短歌

秋のゝにやとるたひ人うちなひきいれらめやもむかしおもふに

まくさかるあらのはあれとはすきさるきみかいたみのあとよりそこし

此二首歌書短歌字。不書反歌字。是以卅一字爲短歌之證也。

藤原宮之役民作歌

長歌。

藤原宮御井歌

長歌ヲ書訖天。奥ニ書短歌二字。

短歌。

ふちはらのおほみやつかへあれせばやをとめのともはしくめすとも

或本從藤原宮遷于寧樂宮時歌

長歌。

反歌。

あなによしならの宮こはよろつよにわれもかよはむわするとおもふな

無長歌之時。卅一字ヲ皆作歌と書。有長歌時。長歌を作歌或歌と書て。其反歌ヲ并短歌と書也。

無長歌時。無并短歌之字。因茲人迷惑。長歌ヲ短歌と云說出來也。

卷第二 作歌と書事又以同。

明日香皇女木甕殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首并短歌

長歌。

短歌。

あすかいはしからみわたしせかませはなかるゝ水ものときからまし

あすかいはあすたにみむとおもふやもわかおほきみのみなわすれせぬ

端に作歌一首并短歌と書うへに。長歌一首書訖て。更短歌二首と書て。書反歌二首。短歌分明也。

高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首并短歌

長歌一首ヲ書。

短歌二首。

久かたのあめにしほるゝきみゆへに日月もしらすこびわたるかも

はにやすの池のつゝみのかくれぬのゆくゑもしらすとわりまとひぬ

弓削皇子薨時置始東人作歌一首并短歌

長歌一首ヲ書。

反歌一首。

有歌。

又短歌一首。

さいなみのしかさゝらなみしきしくにつれにときみかおほ
したりける

柿本人麿妻死之後泣血哀慟作歌二首并短歌

長歌。

短歌二首。

秋山のもみちをしけみ迷ぬるいもなもとめん山ちしらすも
もみちほのちり行なへにたまほこのつかひをみればあひし
日おもほゆ

又長歌一。

短歌二首。

こそ見てし秋の月よはてらせともあひみしいもはいやとを
さかる

ふすまちをひきての山にいもをゝきて山ちをゆけばいける
けもなし

或本曰。

長歌。

短歌三首。

こそ見てし

ふすまちを 二首は同言也。

家にきてわかやとを見ればたまゆかのほかにをきけるいも
かこまくら

吉備津采女死時柿本朝臣人麿作歌一首并短歌

長歌一。

短歌二首。

さいなみのしかつのこらかまかりちの川せのみちを見れば
かなしも

あまつかすおふしつこしのあひし日をおほに見しかはいま
そくやしき

讃岐狹岑嶋視石中死人柿本朝臣人麿作歌一首并短歌

長歌一。反歌二。

靈龜元年歲次乙卯九月志貴皇子薨時作歌一首并短歌

長歌一。

短歌二首。

たかまとの野への秋はきいたつちにさきかちるらん見る人
なしに

みかさ山のへゆくみちはこきたくもあれにけるかもひさに
あらなくに

書反歌之所ニ更書短歌字事。此後卷々不見。

卷第三

長皇子遊獵路池之時柿本朝臣人麿作歌一首并短歌

長歌。

反歌一。

鴨君足人香具山歌一首并短歌

長歌一。

反歌一。

詠不盡山歌一首并短歌 赤人歌

長歌一。

反歌二。

山部赤人至伊與溫泉作歌一首并短歌

登神岳山部赤人作歌一首并短歌

角鹿津乘船時笠朝臣金村作歌一首并短歌

山部赤人登春日野作歌一首并短歌

大伴坂上郎女祭神歌一首并短歌

登筑波岳丹比真人國人作歌一首并短歌

驕旅歌一首并短歌

已上各一首。不可分別。

石田王卒之時丹生王作歌一首并短歌

長歌一。

反歌。

又有同心。長歌一。反歌一。

過勝鹿真間娘子墓時山部赤人作歌一首

長歌一。

反歌二。

天平元年己巳攝津國班田史生丈部龍麿自縊死之時判官大伴宿

禰三中作歌一首并短歌

長歌一。

反歌二。

七年乙亥大伴坂上郎女悲歎尼理願死去作歌一首并短歌

長歌一。反歌一。

家持作歌一首并短歌

長歌一。

反歌三。

十六年甲申春二月安積皇子薨時內舍人大伴家持作歌六首

長歌一。反歌二。三首。二月三日作。

長歌一。反歌二。三月廿四日作。不書短歌字。

悲傷死妻高橋朝臣作歌一首并短歌

長歌一。

反歌二。

卷第四

岡本天皇御製一首并短歌

神代よりうみつきたれば人おほくくにはみえてあちむら

のさりきはゆけとわかこふる君にしあらすひるは日のくる

いまでよは夜のおくるきけ思つゝねなくにとあかしつらく
もなかきこのよを

反歌

山のはにあちむらさはきいぬなれと我はさふしゑきみにし
あらねば
あふみちのとこの山なるいさや河けふこのころはこひてし
もあらん

丹比真人笠磨下筑紫國時作歌一首并短歌

安貴王歌一首并短歌

神龜元年甲子冬十月幸紀伊國之時爲贈從駕人所詠娘子笠朝臣

金村作歌一首并短歌

長歌一。

反歌二。

二年乙丑春三月幸三香原離宮之時贈娘子作歌一首并短歌

笠朝臣金村

長歌一。

反歌二。

大伴坂上郎女怨恨歌一首并短歌

長歌一。反歌一。不書反歌字。

同郎女從跡見庄贈留宅女子大嬢歌一首并短歌

長歌一。反歌一。

卷第五

筑前守山上臣憶良挽歌一首并短歌

長歌一。

反歌五首。

神龜五年七月廿一日山上憶良令反惑情歌一首并序

長歌一。反歌一。

哀世間難佳歌一首并序 長歌一。反歌一。

敬和爲能凝述其志六首并序憶良

長歌一。反歌五首。不分別長短。

貧窮問答歌一首并短歌 長歌一。反歌一。

好去好來歌一首 反歌二首。

是長歌一。卅一字二首也。

老身重病經年辛苦及思兒等歌

七首。長一首。短六首。長短字載之。

長歌一首。卅一字六首也。

天平五年六月丙申朔三日戊戌作戀男子名古日歌三首 長一首。

短二首。

長一。反歌二首。

卷第六

養老七年癸亥夏五月幸吉野離宮時笠朝臣金村作歌一首并短歌

長歌一。反歌二。

車持朝臣千年作歌一首并短歌 長短共一。

神龜元年甲子冬十月五日幸于紀伊國時山部宿禰赤人作歌一首

并短歌

長歌一。反歌二首也。

神龜二年乙丑夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作歌一首并短

歌

長歌一。反歌二首也。

山部宿禰赤人作歌二首并短歌

長歌一。反歌二。長歌一。反歌一。歌之。仍歌と云は長歌也。

冬十月幸于難波宮時笠朝臣金村作歌一首并短歌

長歌一。反歌二首。

同人作歌一首并短歌

なきすみの

ふなせにみゆる

あはちしま

松帆の浦に

あさなきに

玉もかりつゝ

ゆふなきに

もしほやくつゝ

あまをとめ

ありとはきけと

みにゆかん

としのなからは

ますらおの

心はなしに

たをやめの

思たゆみて

やすらはん

われはきぬかふる

ふなかちをなみ

反歌二首

たまもかるあまをとめらか見にゆかん舟のかちもか浪たか

くとも

ゆきかへりみれとあかかなきすみのふなせのはまにしき

るしらなみ

山部赤人作歌一首并短歌

長歌一。反歌三首。

過辛荷島時山部宿禰赤人作歌一首并短歌

長歌一。反歌三。

五年戊辰幸于難波宮作歌四首

皆卅一字也。料知。無長歌時。卅一字歌作歌何首と書。有長歌

時は歌とは長歌を書て。反歌を短歌と云也。因茲無長歌時。

無短歌字。不委見之。人仍迷惑也。

石上乙鷹卿配土左國之時歌三首并短歌

いその神

ふるのみとは

たをやめの

まとひによりて

むまよりも

繩とりつけて

しゝよりも

弓矢かくみて

おほきみの

みことかしこみ

あまさかる

ひなへにまかり

ふるころも

またうち山に

かへりこぬかも」

おほきみの

みとかしこみ

さしならへ

國にいてますや

わかせこの

おほやけとに

かけまくも

ゆゝしかしこし

住吉の

あら人神の

舟のへに

牛吐たまひ

つけたかひ(三十一)

ぬしまのさきに

よりたまひ

ぬいそのさきに

あらきなみ

風にあはせす

くさつゝみ

病あらせず

すみやかに

歸へらしめたまへ

根本國部にチモトクニヘ

妣刀自にハトシ

ちゝ君に

我は眼そ

妣刀自に

我はしなこそ

まうのほり

やそ氏人の

たむけすと

かいまのさかにレイ

ぬさまつり

我をそをへる

とをき土左地に

長歌三首如此。反歌一首也。

悲寧樂故京郷作歌一首并短歌

はるさりくれは

かすか山

みかさのゝへに

櫻はな

このくれされに

かほとりの

まなくしはなく

つゆしもの

秋さりくれは

伊こま山

とふひかくれに

はきのえを

しからみちらし

さむしかは

つまよひとよめ

反歌二首。

讃久邇新京歌二首并短歌

長歌一。反歌二。長歌一。反歌五首也。

春日悲傷三香原荒墟作歌一首并短歌

長歌一。反歌三首。

難波宮作歌一首并短歌

長歌一。反歌二首。

過敏馬浦時作歌一首并短歌

長歌一。反歌二首。

卷第八

天平五年癸酉春潤三月笠朝臣金村贈入唐使歌一首并短歌

長歌一。反歌二。

山上臣憶良七夕歌十二首并短歌

長歌一首。反歌十一首。

大伴家持攀橘花贈坂上大嬢歌一首并短歌

長歌一首。反歌二首。

櫻華歌一首并短歌 長歌反歌各一。

卷第九

詠上總末珠名娘子一首并短歌

詠水江浦鳥子一首并短歌

見河内大橋獨去娘子歌一首并短歌

已上長歌反歌各一首。

春三月諸卿大夫等下難波時歌二首并短歌

長歌一。反歌一。長歌一。反歌一。

難波經宿明日還來時歌一首并短歌

檢稅使大伴卿登筑波山時歌一首并短歌

詠霍公鳥一首并短歌

登筑波山歌一首并短歌

登筑波嶺爲囀歌會日作歌一首并短歌

詠鳴鹿一首并短歌

七夕歌一首并短歌

鹿島郡刈野橋別大伴卿歌一首并短歌

神龜五年戊辰秋八月歌一首并短歌

已上長歌一。反歌一。

天平元年己巳冬十二月歌一首并短歌

長歌一。反歌三首。

同五年遣唐使船發難波入海之時題^{四(其稿)}母贈子歌一首并短歌

長歌一。反歌一。

思娘子作歌一首并短歌

長歌一。反歌二。

過足柄坂見死人作歌一首 無并短歌字。

長歌一。無反歌。

過葦屋處女墓時作歌一首并短歌

長歌一。反歌二首。

哀弟死去作歌一首并短歌

長歌一首。反歌二首。

詠勝鹿眞間娘子歌一首并短歌

長歌一。反歌一。

見菟原處女墓歌一首并短歌

長歌。反歌二首。

卷第十

夏雜歌之中

詠鳥廿七首。長歌一首。反歌廿六首。

秋雜歌之中

七夕九十八首之中。二首長歌。

都唐五百四十首之中。五百卅四首反歌。二首短歌。四首旋頭

歌。

此短歌如古今集長歌也。

此一卷短歌不似他卷。疑是後代之人所註歟。

卷第十一

卷第十二 無長歌。仍不書短歌字。

卷第十三

愚考。卷第十三。雜歌二十七首。是中長歌十六首。此外問答

十八首。譬諭歌一首。挽歌二十四首。此分ハ無長短之字。相

聞五十七首。是中長十九首。在此分定家卿後代人注付歟。

此卷悉長歌反歌書連之。不書并短歌之字。

備後國神鳥瀨調使首見屍作歌一首并短歌

長歌反歌各一首。無分明所見。

卷第十四

皆諸國歌。無長歌一首。

卷第十五

古挽歌一首并短歌。長歌反歌各一首。

丹比大夫悽愴亡妻作歌（長歌一。反歌一。不註歌數。）

到臺岐島雪連宅滿忽遇鬼病死去之時作歌并短歌二首

長歌一。反歌二首也。

葛井連子老作歌一首并短歌二首

長歌一。反歌二。

六鯖作歌一首并短歌二首

長歌一。反歌二。

卷第十六

竹取翁作歌一首并短歌

長歌一。反歌二。

戀夫君歌一首并短歌

長歌一。反歌二。

卷第十七

設三香原新都歌一首并短歌

長歌一。反歌一。

哀傷長逝之弟歌一首并短歌

長歌一。短歌二。

忽沈狂疾殆臨泉路仍作歌詞以申愁緒一首并短歌

長歌一。反歌二。

更贈歌一首并短歌 家持

長歌一。反歌三首。

家持有序。三月五日臥病作之。

七言一首。四韻詩也。

短歌二首。卅一字歌二首也。

家持卿所存已以顯然歟。

述戀緒歌一首并短歌

長歌一。反歌四首。

守家持遊覽布勢水海賦一首并短歌

長歌一。反歌一。

立山賦一首并短歌 四月廿七日 家持

長歌一。反歌二。

入京漸近悲情難撥述懷（贈掾池主）一首并一絕

長歌一如恒。反歌一。無絕句。

池主和歌一首并二絕 是又反歌二首也。

思放逸鸞夢見感慟作歌并短歌

長歌一。反歌四。依不書歌數不分明。

卷第十八

獨居幃裏遙聞霍公鳥喧作歌一首并短歌

長歌一。反歌三。

賀陸奥國上金詔書歌一首并短歌

長歌一。反歌三。

爲幸行芳野離宮之時歸作歌一首并短歌

長歌一。反歌二。

爲贈京家願眞珠歌一首并短歌

長歌一。反歌四。五月十四日。家持。

教喻史生尾張少昨歌一首并短歌

長歌一。反歌三。

橘歌一首并短歌 潤五月廿二日

長歌一。反歌一。

庭中花作歌一首并短歌

長歌一。反歌二。

天平感寶元年潤五月廿七日還到本任仍長官館設詩酒宴樂飲於

時是主人守家持作歌一首并短歌

長歌一。反歌二。

五月六日以來小旱至于六月朔日見雨雲作歌一首并短歌一絶

長歌反歌各一也。

七夕歌一首并短歌

長歌一。反歌二。

卷第十九

天平勝寶二年三月八日詠白大鷹歌一首并短歌

長歌一。反歌一。

潜鷗歌一首并短歌

長歌一。(なかるさきたの河のせにあゆこさはしるしまつ

とり)

反歌二。

悲世間無常歌一首并短歌 長歌一。反歌一。

幕振勇士之名歌一首并短歌 同上。

詠霍公鳥并時花歌一首并短歌

長歌一。反歌二。

爲家婦贈在京尊母所詠作歌一首并短歌

長歌一。反歌一。

霍公鳥歌不勝感舊之意述懷一首并短歌

長歌一。反歌二。

不飽感霍公鳥之情述懷作歌一首并短歌

長歌一。反歌三。

詠山振歌一首并短歌 長歌一。反歌一。

六日遊覽布勢水海作歌一首并短歌

長歌一。反歌一。

贈六島越前判官大伴池主歌一首并短歌

長歌一。反歌二。

詠霍公鳥井藤花一首并短歌 長歌一。反歌一。

廿二日贈判官久米朝臣廣繩霍公鳥怨恨歌一首并短歌

長歌一。反歌一。

詠霍公鳥歌一首并短歌。長歌一。反歌一。

挽歌一首并短歌。長歌一。反歌二。

從京師來贈歌一首并短歌

天平五年贈入唐使歌一首并短歌

向京路上依興預作侍宴應詔歌一首并短歌

入唐使藤原朝臣清河等作歌一首并短歌

爲應詔儲作歌一首并短歌

已上長歌反歌各一首。

卷第二十

追痛防人悲別之心作歌一首并短歌

長歌一。反歌一。

陳私拙懷一首并短歌 兵部少輔家持

長歌一。反歌二。

爲防人情陳思作歌一首并短歌 家持

長歌一。反歌二。

使(万葉) 下(万葉)

二月廿三日上野國防人部領大目正六位上上毛野君駿河進歌數

十二首(但拙劣歌不敢載)

長歌一。反歌五。無并短歌字。

又雖有長歌。只歌と書。無短歌字。

喻族家歌一首并短歌

長歌一。反歌一

已上無長歌。

寶龜三年五月七日

參議兼刑部省卿從四位上勳四等藤原朝臣濱成謹上

凡歌舁有三。一者求韻。二者查舁。三者雅舁。

求韻二舁。一者長歌。二者短歌。

長歌以第二句尾字爲初韻。以第四句尾字爲二韻。如是展轉相

望。

短歌以第三句尾字爲初韻。以第五句尾字爲終韻。以還頭句爲終

句頭。并之爲六句。當於唱歌用之。還頭着不須還頭。

雅舁有十。

四短歌。以五句爲一絕。三句爲一韻。五句爲二韻。如彥火火出

見天皇贈海龍女歌曰。

ヲキントリ
於岐部等利一句

ワカイ(反歌)子三句

和我鳥禰旨三句

ヨノコトヨトニ
與能已等已等耳五句

カモツクシマニ
可母都久旨麻爾二句
イモハワスレシ
伊母婆和須禮自四句

五者長歌。以二句爲一韻。如是展轉相望。如吊天稚彥喪會者歌

曰。

阿實那留夜一句
宇那不勢留三句
美須麻呂能五句
他爾不他和他留七句
於等他那馬他二句
他麻能美氣麻呂四句
阿那他麻婆夜六句
阿遲須岐能可味八句

二句能字是一韻。四句侶字是二韻。能與侶是一對韻。六句

美字當三韻。八句味字是四韻。美與味是一對。四句侶字ハ
句尾字當韻。今欲韻。故以五句能字連韻於四句侶字。以顯

改韻之節。若歌者欲以改韻者。亦復得其韻。同字韻不須禁
例。雖然不多得用。但絕句者其禁甚之。古長求韻如是。新

長求韻無如此。古二句爲今一句。古四句爲今二句。二句尾
字。即是爲一韻字。如是展轉相求。

失者如柿本若子詠長谷四韻歌曰。

阿麻俱母能可氣佐倍美由留一句
宇羅那美可不禰能與利己努三句
與旨惠夜旨宇羅婆那具等母五句
於岐都那美岐與俱己岐利己七句
阿麻能都利不禰八句
己母利俱能婆勢能可婆努二句
伊蘇那美可阿麻母都利勢努四句
與旨惠夜旨伊蘇婆那俱等母六句

得者可謂阿麻不禰能等母與。六句相韻。亦義不相達。

右長歌以阿麻俱母能爲一句。何氣佐倍美由留爲一韻。以直語而
成句。都無古事。故今以用古事。顯於新意。長谷水先以顯雲喩。

稱於能顯水貌。故以能顯爲實。所顯爲喩。喩爲古事。實爲新意。

故以阿麻俱母能何氣佐倍美由留等十二字爲一句。餘亦準之。努
是四句韻字改韻。故與五句尾字連韻。而避於四句韻字。欲改韻
者餘亦準之。禰是韻字。毛是二句韻字。禰與毛不韻爲失。亦四句
云海部鈞不禰。而是句云榜入來泉郎鈞船。是爲要尾不合。

宇治山僧喜撰式
長歌文句。

五七五々七五七々句。多少任意。

又說。五七五々七五七々也。

長歌蒙病差於女涕詠之無常歌

はしめあれは さためてをばり あるとは
うつぜみの 世のとはりと おもへとも
あまそきの そのきしかけと たのめれは
けぬたつま、 まよふくさばに おとろへて
あかねさす ひま／＼に なりゆけは
ぬばたまの ふいもねかてに ねさめつる
草まくら たひにはあらねと 水とりの
うきなくに 時の日にかも たひらきて
あまくもに たえにし事も かたらはん
とおもひて ほれたる事も ひらけれと
うき舟の なみにたゝよひ 風まつと
夢のこと いともつれなく なりゆけは

そてのうらに

よする涙の

しきぬれば

すへなしと

あまのわふるな

見きゝつゝ

たまほこの

みちゆきすりに

みるわれも

あまくもの

ゆきすきかねて

さまよひぬ

あなうの世

あはれわかみを

かけるふの

ゆめかうつゝか

なそもつれなき

文句雖非常長歌之躰。已非反歌。又有喜撰式號物之中。

(今案。古今序以之爲龜鑄歟。文章殊散々。)

一者二五三七。卅文字餘一文字。是長歌也。

二者五七五七。多少任心也。是短歌也。

文殊菩薩聖德太子奏給し歌長歌

いからかやとみのを河のたえはこそわかおほきみのみなは

わすれめ

柿本人丸高市親王ニよせたまへる歌短歌

かけまくもかしこけれともいはまくもゆゑしけれともあす

か山

彼は水火。疑是後代之人所書歟。

孫姬式

凡長歌式。

五七五七五七々。

五言與七言變往。循環不極。其落句重用七言耳。

柿本人麿早高市親王歌曰。

かけまくも

かしこけれとも

いはまくも

ゆゑしけれとも

あすか山

みかきかばらに

ひさかたの

あまつみかとな

かしこくも

さためたまひて

神さひて

いはかくれます

あまひこは

わかおほ君の

きこしめす

そともの國の

まさのたつ

ふば山こえて

こまけもの

わさみのぼらの

かり宮に

とゝまりまして

あめのした

さかえん時に

我もともく

而桑門製長歌式。用五七五々七五々々爲法。其法已在首是也。

仍重不出之。妄案。自衣通比咩已來。迄于聖代。繁文間起。隨流

弘雅。長歌之製法有恒規。未知桑門所量殊據誰體。桑門不稱其

情方。好而爲意製。是喜之情妄加穿鑿也。凡頓本長歌及諸手筆。

一同五句之式。無人書。然或多省詞。或頗義義。

抑被撰拾遺集之時。於旋頭歌者眞名被書之。至于長歌。以假

名なからたと被書。以之思之。花山法皇有御了見之旨歟。憚

先達之所爲用假名字。但詞又被載短歌之字歟。

萬葉集所載已以顯然。(家持卿所書歟。至天平寶字三年。)

寶龜三年參議源成朝臣式又如此。

寫撰式。孫姬式。(載貞觀以前大寶以後由。)云先賢之所用。云長短之道理。事已分明也。何至于延喜五年初載長歌。是稱短歌哉。不審之中不審。難義之中難義也。但斯時萬葉集未遍披露。僅窺見之。雖委不見歌之員數歟。又不辨事之理非。只就并短歌之字。推爲號長歌之名歟。依獨步之辭案。忘重疊之證據。可謂斯道之遺恨。崇德院被下百首題之時。被載短歌一首之由。(教長卿書之。)件作者皆詠長歌訖。亡父卿撰千載集之時。任古今例書短歌字訖。

清輔朝臣書 奧義抄之時。

一長歌 二五三七。合三十一字也。

やくもたついつもやへかきつまこめにやへかきつくるそのやへかきを

二短歌 五七五七。多少任意。

先書孫姬式。次書喜撰五七五々歌。

但求韻歌別有二種。

一長歌(第二句終字爲一韻。第四句終字爲二韻。)

一短歌(第三句終字爲一韻。第五句終字爲二韻。)

任演成朝臣式記之。

又云。雜談別有十種。

四短歌 以五句爲一絕。

おきつとりかもつくしまにわかれねしいもはわすれす世の
とくくに

しとにと同韻也。

五長歌 二句終爲韻。

あめなるや

をとたなはたの

一韻

うなかせる

たまのみすまろ

二韻

みすまろの

あなたまはやみ

三韻

たにふたわたる

あちすきのかみ

四韻

任演成朝臣式載之歟。端所註長短之體。已以相違。是就各本文載之。不註今所用之相違。雖似可弁。上古與當時相替之由。乍存之成憚。委不分別歟。非無所存哉。雖有所辨存。不破先達之說歟。可謂知道。

範兼卿童蒙抄云。

雜射

長歌

やくもたついつもやへかきつまこめにやへかきつくるその

やへかきを

短歌

ちはやふる

神な月とや

けさよりは

くもりもあへす

はつしくれ

紅葉としもに

躬恒長歌略之。

萬葉集に反歌を短歌とかける事しましりたれとも。髓に長く
よみつゝけたるを短歌といへる事はいますこし髓也。日本紀
にも卅一字の詠を長歌といへり。文選文集の長歌行短歌行の
心を尋て。愚なる心におもひみるに。歌といふはうたふといふ
事なれば。卅一字の作は字すくなく。句のつゝきなめよけれ
は。その詠の聲なかし。長句歌は句は多くつゝけるゆへに。詠

の聲なかくはあるへからず。仍短歌といふ也。かくやすきさま
に心えぬにより。難儀に成にやとて心えたる。
如此勘寄之上。長歌を短歌といへる事。いますこし髓也と書之
條。甚以不審。可謂人心不同歟。又不載兩式。頗以委不見哉。

此外俊賴朝臣無名抄(或號口傳)書此事。件抄基金吾不爲可云
々。

竊所勘出。只爲備愚家也。於今者雖改延喜以後稱來之說。
更尋孫姬以前註置之跡。且不加私今案。只顯先賢之所存許
也。

貞永元年七月日

黃門遺老在判

小野小町文屋康秀參河掾之時贈答之人也。其歌載孫姬式。康秀
元慶后宮之時臣也。其事甚不遠如何。

松殿入道數下

萬葉集三卷本。其一本之抄者也。

帥伊房卿筆古今集之奥書。眞名序之中有註。

爰及人代。此風大興。長歌。(註云。即是也。俗以長歌稱短歌
謬也。)短歌。(卅一字也。又稱反歌。)旋頭。(其體未詳。混本之
類。)旋頭歌之異名也。)

此註又如此。本說者貫之註也云々。
諸說各可稱貫之。不辨彼是合否。

萬葉集時代事。古來賢者猶遺疑。近代好士重相論。頗作勘文。互
爲已理。未慮情見本集。有所斟酌。何是何非。只可隨後學之所存。
云人云我。全不稱自說之有謂。

本集卷第十七 自天平二年至于二十年。

卷第十八 自天平二十年三月廿三日。至天平勝寶二年正月二

日國廳郡司等宴歌。

卷第十九 同年三月一日。

此卷末云。

おほきみは神にしませはあはこまのばらばふ田ぬをみやこ
となしつ

おほきみは神にしませは水鳥のすたくみぬまをみやことな
しつ

右件二首天平勝寶二年十二月三日聞之。即載於茲。此文

分明也。至五年正月廿五日。

卷第二十 自同五年五月。至于天平寶字三年正月一日因幡國

應郡司等宴。

凡和漢書籍之習。多以所註載。爲其時代之書。何拋本集之所見。徒勘他集之序詞哉。似無其謂。

是註所見及許也。與賢者不可論。

古今序

かくつたはるうちにも。ならの御時よりそひろまりにける。かの御世や歌の心をしるしあしたりけん。かの御時に。おにきみつのくらわかきのもとの人まるなむ歌のひしりなりける。これほきみも臣も身をあはせたりといふなるへし。秋の夕たつた川に。

又山のへのおか人といふ人ありけり。歌にあやしくたへなりけり。人まるはあか人かかみにたふんことかたく。赤人は人まろかしもにたふむとかたくなむありける。

これよりさきのうたをあつめてなむ。萬葉集となづけられたりける。

かの御時よりこのかた。年はまゝとせあまり。世はとつきになむなりにける。

如此序者。文武天皇御世。柿本山部列座之由歟。

見萬葉集。柿本人麿所詠歌。昔藤原宮之由註之。山部赤人歌。神龜元年以後。天平年中之由註之。雖其年月不違。相並之由無所見。

自文武大寶元年。至于延喜五年。二百五年。文武以後延喜十八代歟。經奈良御時雖存。聖武天皇御世。其前後二十四年三代（元明。元正。）也。以此序爲平城天皇之證據。（顯昭付之。）

大同年中無可撰和歌之人。不較稱德天皇以後歌。於平城之說者。勿論不足言事歟。

これよりさきの歌をあつむる文。又以不審多。強不勘時代年限。同序
誤文章所書歟。

天平勝寶年中歌をこれよりさきの歌と書。尤無其理歟。道因之所載勘文。不註此等子細。

古今序此等事。頗不似披見萬葉集之人如何。

享保十二未夏奈良屋安左衛門所持致候。定家卿眞筆長歌短歌古今相違之事と申書付。公義江被召上。右代りとして黄金百枚安左衛門江被下置候。然處右書付今度冷泉中納言殿江被下候由。是者定家卿御子孫之由。右に付書簡并中納言殿御詠歌之寫。

（短歌長歌）

今度先祖定家卿眞跡之長歌古今之事一狀。以家筋を爲久江拜領被仰付候御事。上意之段長承候。誠當道之再興。當家之面目。永々傳子孫。恩幸不淺忝存候段。難盡筆紙候。御禮之儀。可然様御披露希存候。爲其以愚札令

呈上也。恐惶謹言。

十月十二日

水野和泉守殿

松平左近將監殿

松平伊賀守殿

冷泉中納言

爲久

今度從 大樹公。先祖定家眞跡一帖。家筋以爲久江拜領被 仰付候事。上意之段長存候。誠當道之再興。當家面目。永々傳子孫。恩幸不淺忝存候段。難盡筆紙候。御禮之儀。亞相公御前可然様御披露希存候。爲其愚札以令呈上候。恐惶謹言。

冷泉中納言

爲久

十月十二日

安藤對馬守殿

冷泉黃門

將軍家の仰とありて。先祖京極黃門の長歌短歌の事を委筆しおかれたる一帖を。家に納へきよしにて下し給りぬる。忝により思ひを述侍る長歌。

千早振

神代のまゝに

うこきなき

大和島根の

その葉を

とをつをやより

うけつきて

年をかさぬる

いへのかせ

ふきのこしつゝ

一すしに

絶せぬ道と

なりにつり

しかはあれとも

すゑついに

おろかなるへき

おしへそと

書なかしけん

いにしへの

名残いつこと

しらなみの

よるへを遠く

たとる身に

今おきかへす

水くきの

跡もさたかに

あきらけき

月の面かけ

手にとりて

まちかくむかふ

ますかゝみ

かけてあらけは

いやたかき

木の下露の

めくみをば

せばき袂に

つゝみても

をき所なき

うれしさも

いかてと葉に

のはへまし

猶さかふへき

日のもとの

國をためしに

いくはるも

わかのうち松

色そへて

君につかふる

ことわさの

つきせぬ種と

代々に傳へん

ら船

貴札致拜見候。今度定家卿眞跡長歌短歌古今之事一帖。以家筋拜領之。上意之趣相達。忝由得其意存候。御紙面之趣致承知候。恐惶謹言。

十月

戸田山城守

冷泉中納言殿

〔右定家卿長歌短歌說以小杉楳邨氏所藏本校合〕

續群書類從卷第四百五十一

和歌部八十六

萬葉集難事上

顯昭陳

道因勝命等所勘撰萬葉集時代條々難事

一平城天子事

勝命難云。古今序曰。平城天子詔侍臣令撰萬葉集者。聖武天皇也。非大同帝也。聖武者始居難波朝。後遷平城宮。故可有平城號。大同帝者本不居平城宮。與嵯峨帝有事。被移平城宮。後弘仁五年始有此號。其以前號太上天皇。又稱先朝。又稱同帝也。此等趣具見日本紀并國史等。所以國史云。大同御時オホシマニオハシマシテ。御ミヤソヒシ給トキニ。四ノ位ヨリ上ツカタ。皆フチハカマヲカサス。其時歌ヨミテイハク。

皆人ノソノカニメツルフチハカマ君ノミタメニダナリタリケフ

天皇御答歌。

テリヒトノコ、ロノマニマフチハカマムヘ色深クニホヒタリケリ

此贈答。大和物語ニハ。奈郎帝ハ泊瀬ニオハシマシケル時。嵯

峨帝ハ坊ニオハシマシケル比。讀テ奉リタマハリケルトアリ。

此之案之。嵯峨帝御時マテハ大同帝ト申ケルト見エタリ。

又橘氏之謬云。兵部卿橘宿禰奈良麿者左大臣諸兄子也。母淡海

公女也。出時於平城帝賞之。仍以奈良爲名云々。

又續日本紀云。從五位下紀朝臣國益男清人。天平十五年治部大

輔等爲平城宮留守。

又萬葉集第十七云。天平十六年四月五日。獨居於平城故郷舊

宅。大伴家持作歌六首云云。

又公卿傳云。大伴宿禰安磨。慶雲二年平城朝任大納言云云。

以之思之。奈良平城是同名也。平城之號不可限大同歟。況於大同帝載平城號之條。僅年代曆許也。仍爲散不審。始自神武至于桓武。五十代皇居所注出也。此平城宮者非帝王之號。是宮室之名也。和銅二年始造營也。

又本朝月令云。元慶八年十二月廿日。定獻荷前幣十陵（分數）墓中。

近江宮御宇天皇（分數）諡山階山陵。在山城國宇治郡。平城宮御宇天皇後田原山陵。在大和國添上郡。桓武天皇柏原山陵。在山城國乙訓郡。崇道天皇八鳥山陵。在大和國添上郡。平城太上天皇楊梅山陵。在同國郡云云。

以是等文考皇代記之處。平城宮御宇天皇者相當孝謙。又平城太上天皇者相當聖武。（々々略）孝謙帝共有平城號。然者聖武御時撰始。孝謙御時終功歟。

顯昭陳云。夫帝皇諡號者。崩御之後。或依德化立之。如文武天皇。博涉經史。尤善射藝云云。或依山陵立之。如村上天皇。康保四年六月四日。葬村上山陵云云。或依所居宮立之。如嵯峨天皇。承和元年八月。遷嵯峨院云云。自餘諡號可准之。爰大同帝者雖爲平安朝廷。遷讓之後。移居平城令崩御畢。仍所居宮有此諡號也。而平城者宮室也。非帝皇號之由被勘之條。甚迂誕也。

又弘仁五年始有平城天皇諡號之條如何。又以大同帝號平城天皇之條。纔年代曆許之由被注之條如何。凡日本後紀。皇代記。年

代記。帝皇諡號之處。皆同注載第四十五代者聖武天皇。第四十六代者孝謙天皇。第五十一代者平城天皇也。一書一文求見。未注於聖武孝謙奉載平城天皇之號。所謂令議解云。平安朝廷平城嵯峨淳和三帝。並桓武天皇子也云云。

又帝皇系圖云。平城天皇又曰奈良天皇。（是平城之謂也。諡永安殿。桓武天皇長子也云云。）

又云。弘仁十四年四月二十三日。停平城太上天皇諸司也云云。

又云。天長元年七月五日。平城太上天皇崩云云。

又云。桓武皇女朝原親王。平城天皇納之無寵云云。

又皇代紀云。日本根子天排國高彥尊天皇號平城天皇。俗曰奈良帝。諱安殿云云。但平城奈良其訓雖同。平城者大同帝之諡號也。不可通餘帝。神武以後帝皇。於諡號有同名。孝德文武共奉號輕。

元明孝謙共奉號阿閉。於諡號者全無同名者也。然者以聖武孝謙名平城天皇之證無所見乎。若弃聖武孝謙之諡號。強可載奈良號。只可書奈良天子若寧樂天子若諸樂天子等也。平城天子者天濫

平城天皇者也。又奈良帝號者世俗詞也。雖通餘帝。不可招混濫之遇。（通誤）彼天智聖武二帝共名兩帝。又神功皇后履中天皇同名磐余稚櫻宮。又持統文武同名藤原宮。然者奈良帝之號者。雖通數帝。何難之有乎。抑本朝月令中。以孝謙名平城宮御宇天皇。以聖武

名平城太上天皇之由被勘之條如何。彼平城宮御宇天皇者光仁也。後田原院之故也。然孝謙者高野陵也。彼平城太上天皇者大

同也。楊梅陵之故也。亦聖武者佐保陵也。況以平城太上天皇存孝謙聖武天皇之由者。何桓武天皇之後舉之乎。則知只守平城宮之字。不辨山陵之前後歟。一事已有訛謬。万緒定述正義歟。人不可信。世不可努力。

延喜式云。

檜隈大內陵。(藤原宮御宇持統天皇。有大和國高市郡。)

檜前安古岡陵。(藤原宮御宇文武天皇。同國同郡。)

奈保山東陵。(平城宮御宇元明天皇。同國同郡。)

奈保山西陵。(平城宮御宇〔淨武〕足姬天皇。同國同郡。)

高野陵。(平城宮御宇天皇。同國同郡。)

田原東陵。(平城宮御宇天宗高紹天皇。同國同郡。)

柏原陵。(平城宮御宇桓武天皇。在山城國紀伊郡。)

楊梅陵。(平安宮御宇日本根子天排國高彥尊天皇。在大和國添

上郡。)

深草陵。(平安宮御宇仁明天皇。在山城國紀伊郡。)

田邑陵。(平安宮御宇文德天皇。在山城國葛野郡。)

又帝皇系圖云。

高野姬天皇。(寶龜元年八月四日崩。年五十三。)

同七日葬大和國高野山陵。

光仁天皇。(延暦元年葬廣山岡陵。同五年改葬大和國田原陵。又

施基皇子。追號田原天皇云云。)

今按。以光仁天皇號後田原天皇。是故歟。

桓武天皇。(延暦廿五年三月七日崩。葬山城國柏原陵。大同元年

十月改葬向山陵。)

平城天皇。(天長元年七月五日崩。年五十一。葬楊梅陵。)

今按。藤原宮。平安宮。平城宮者。皆是帝皇所居宮也。非謚號乎。

其中天稚國高彥尊天皇一人得平城謚號也。又平城天皇之號。縱

可通聖武孝謙者。古今序爲避混濫。專不可載平城之號并十代之

詞也。其故者延喜聖主繼絕興廢。追萬葉之先蹤。今撰古今集之

時。序者豈亂帝皇之謚號乎。是以能因家集序云。王道股肱之臣。

訪於衆心探詞。儒林河漢之才。冠卷首而題序云云。何體不注時

代。招向後之疑乎。假名序縱雖載奈良帝之字。眞名序何不舉聖

武之謚號乎。

又通俊卿後拾遺抄目錄序云。平城天子修萬葉集。花山法皇修拾

遺抄云云。

今案。已對花山法皇。書平城天子。豈亂帝皇之謚號乎。若爲聖武

有左可載其號也。又越州藤刺史仲實朝臣撰類林和歌序云。自平

城御宇以來。撰集之蹤連綿不絕。然萬葉集者部類不相同。編列

難准據云云。然彼朝臣古今集目錄云。平城天皇者大同帝也。諱

改小殿爲安殿云云。爰知彼朝臣存平城天皇撰萬葉之義。

凡平城天皇撰萬葉集之條。往古代々一向傳來。全無異儀云云。

未曾見聞聖武撰義。又貫之新撰集序云。上代之篇。義漸闕而文

猶實。下流之作。文偏巧而義漸疎。故抽出自弘仁至于延長詞人之作華實相兼云云。然彼撰中入萬葉集歌并平城天皇御歌二首。(一首花歌。一首蘭歌。)然而除大同御宇之詞人。取弘仁以下之歌人。是則除萬葉撰之代歟。不然者何可除彼代乎。此序意有由。又聖武天皇者本居平城宮也。天平十五年遷幸近江甲賀宮。同十六年四月都於難波。八月忽依不豫幸奈良宮云云。而始居難波之條。前後違亂。

又居難波朝之詞如何。可書居難波宮也。朝廷居宮未被分別歟。

又和銅元年戊申。始造平城宮也。何云二年乎。

又聖武朝撰始。孝謙時終功之條。度々被勘畢。若被存東大寺大佛之跡歟。平城天子詔侍臣之詞。何宜兩代乎。若聖武若孝謙。可定一代也。若平城

下並可有聖武孝謙二代者。父子之撰集。若居

(登喜運轉)別宮而終其功之時者。可書何帝之勅撰乎。

又花山法皇長德年中令撰拾遺。豈云一條天皇御撰乎。

白河法皇大治年中令撰金葉集。全不云讚岐院御撰。又讚岐院天養年中令撰詞花集。誰號近衛院御撰乎。

又以奈良書平城之條。不限萬葉。自餘書籍皆以如此。然者平城奈良同名之條無疑事也。被勘出此證等之條。甚以無證據。今所論者大同帝外可有平城天皇之號乎。

又聖武孝謙二代奉號平城天皇之證文也。如下委勘。

又見公卿傳。安麻呂慶雲二年雖有任大納言之詞。全無平城朝之詞如何。隨文武御宇者爲藤原朝乎。

又引大和物語奈良帝御泊瀬之詞被注之條如何。考彼物語云。奈良帝ノ神泉ニオハシマシタリケルニ。嵯峨帝ハ坊ニテオハシマシケル時ニ。ヨミテタテマツリ給ヘリケルト云云。隨此事出

日本後紀如委引。縱雖有偽本之說。何不引載乎。甚以遺憾歟。

又國史者日本書紀二十卷。(自神武至持統四十一代。)

續日本紀四十卷。(文武以後至桓武天皇延曆十年。)

日本後紀四十卷。(自延曆十一年正月。靈淳和天皇天長十年。)

續日本後紀二十卷。(仁明天皇一代。)

文德實錄十卷。(文德一代。)

三代實錄五十卷。(清和。陽成。光孝三代。)

而今日本紀并國史之詞如何。

又始自神武。終至桓武五十代。被注皇居并謚號之條。甚以無益也。仍不引載。又其中有不審。第三安寧天皇。大和國高市郡葬山

南云云。今考。延喜式云。片鹽浮穴宮。歟傍山西南御陰井上陵也。然者葬山南非居宮歟如何。

第十一垂仁天皇。(大和國添上郡菅原伏見奉云云。)

今考式云。纏向珠城宮。菅原伏見野中東陵也。然者菅原伏見非居宮歟如何。

第十三成務天皇。(近江國志賀郡穴積宮云云。)

第廿一安應天皇。(大和國山邊郡石上穴積宮云云。)

今考。式前者磯香高穴穗宮也。後又穴穗宮也。積字如何。兩所被書積字。非書寫之失。有所存歟。

第廿九宗化天皇云云。

今考之。宣化也如何。書寫之失也。

第卅三崇峻天皇。(大和國十市郡棕倉橋宮云云。)

今考。式云。倉梯宮也。又化云云。棕橋宮。或云倉橋宮云云。然棕倉兩字重疊如何。

道因難云。謂大同平城天皇御撰者。有條々不審。所以自文武至高野。依被占皇屋於彼地。可奉號平城之由多蹤跡。大同天皇者弘仁元年御出家。其後住彼古宮。遂爲終焉之所。奉校此號也。而謙號不可有同名之由。被出難條如何。

今按之。彼五代天皇崩御之後。隔五十年。何有同名儀哉。加之太上天皇之總名者朱雀院也。然而以承平天皇奉號朱雀院。是准據之例也。可謂謬難。

顯昭陳云。大旨同前歟。但元明天皇和銅三年二月。從藤原宮遷奈良宮。桓武天皇延曆三年遷長岡京。同十三年移平安宮也。然者自元明至桓武八代。居平城宮也。自文武至孝謙五代。奉號平城之條如何。又朱雀院之例者。還爲大同之准據歟。其故者附居所而論之者。平城之號雖可宜八代。於大同帝已立其諡號畢。延喜御時。何於大同以前帝可立平城天皇之號乎。彼古今集之時。

以寬平法皇雖奉號朱雀院。承平天皇得此號之後。於後撰以後之撰集者。如以寬平不奉號朱雀院之故也。又朱雀院者後院也。何云太上天皇之總名乎。費荒流涼之空語。(谷本)顯古今之明文。可謂大訛。又帝號之混濫。不可及同時之義。國無二主之故也。尤可避前後混濫之過也。依之同帝重祚之時猶立別號。皇極天皇後號齋明。又孝謙天皇後號稱德。是以萬葉集中以皇極號明日香川原宮。以齋明號後岡本宮也。各雖隔一代。重祚之時猶除混濫。況各別帝乎。何依隔五十代乎。凡平城天皇者一定大同諡號。其外若以聖武孝謙又可奉號平城天皇者。明文體證大切也。今如兩勘狀者。大同平城之號者無其理。本不屈平城宮之故。又少其文。年代曆一書之外。無其號之故云云。此條沙汰外之事也。世人驚耳目歟。奇異々々。不便々々。

一時更十代事

勝命云。自聖武至延喜。雖歷十六代。付大數略餘數。仍拾六代書十代歟。文筆常習也。十餘ヲ十五六ニテハ號十也。其證據多々也。

妙樂疏記云。若過若減。皆在大數云云。

禮記云。經禮三百云云。

正義云。是同官。々々三百六十。舉大數弃六十歟。

文選序云。時更七代。數逾千祀。注曰。七代謂自周至梁也。言數千年也云云。

愛者。唐代自周至梁十一代歟。弃四代歟。

文集云。人生一百歲。通計三萬日云云。

如算計之處。一百歲者三萬六千日也。弃六千日歟。

又云。死囚四百來歸獄。注曰。囚徒歸。死罪者三百九十八人云云。

是則以三百九十人稱四百也。增十人歟。

又云。新豐老翁八十八。是時翁年二十四。臂折來。成六十年矣云々。

如此文者。自廿四至六十年。八十四歟。增四年歟。

又云。逢秋莫歎須知分。已過潘安三十年云云。(昔賢)需岳二毛母二年

也。幸二年歟。

又云。元和五年(三興)詔寫真。時年五十七云云。

然居易者代宗大曆六年正月生。至穆宗元和五年。已上四十一

歲也。弃四年歟。

又云。會昌二年罷太子少傅。爲白衣居士。又寫真時年七十一云

云。

然自元和六年至武宗會昌二年。已上三十一年也。前後都合七

十二年也。義相叶歟。弃一年歟。

又云。會昌五年十月十一日卒已者。(七十五。)

管三品尚書會序云。少於樂天三年云云。

文時者居易二年弟也。增一年歟。

管時登序云。貞觀刑部八代之孫云云。

實者九代也。弃一代歟。

後江相詩云。崔儼入室書千卷。范曄辭官筆一雙云云。

五千卷也。弃四千卷歟。

古今序云。陛下御宇于今九歲云云。

即位以後八年也。然而八歲書者別樣也。付云吉增一年歟。

顯昭陳云。付大數以弃小數之條。典籍之常習。文筆之定例也。然

四書又可依事也。古今序者體注時代之故。書平城之號。置十

代之詞也。若指聖武者。兩條相違太有過失。其故見于皇代之次

第。

聖武。孝謙。廢帝。稱德。

光仁。桓武。平城。嵯峨。

淳和。仁明。文德。清和。

陽成。光孝。宇多。醍醐。

已上十六代也。若改聖武孝謙之號。枉可立平城名者。尤置十五

十六代之詞。以可避大同之疑也。若續十五十六代之數。枉可載

十代文者。尤舉聖武孝謙之號。以可除平城之謬也。何置平城十

代之詞。可改聖武十六代之義乎。若存其義者。可書時更十六代

數近二百年也。又後拾遺序云。天曆ノ末ヨリ今日イマニイタル

マテ。世ハトツキアマリヒトツキトカケリ。是ハ模古今序也。

古今ハ自平城至延喜。歷十代之故。ヨハトツキトカケリ。後拾

遺ハ自天曆至白川天皇。歷十一代之故。トツキアマリヒトツキ

トハ書ナリ。若古今緒十六代以書十代者。後拾遺又縮十一代以可書十代也。所謂十一代者天曆。冷泉。圓融。花山。一條。三條。後一條。後朱雀。後冷泉。後三條。白川也。

又五葉集序云。式部大輔敦光朝臣作。始自永承。迄于聖代。時更五代。數近百年云云。

是後冷泉。後三條。白川。堀川。鳥羽。已上五代也。是等

序者遠學文選近模古今歟。又被勅出條々例難等中。尤可會釋者文選序也。古今序偏模彼卦之故也。彼序云。自姬漢以來。眇焉悠邇。時更七代。數逾千祀。詞人才子則名溢於縹緲。飛文染翰則卷盈乎細帙云々。注云。七代謂自周至梁云々。今付此文異議不同。

一義云。周秦漢魏晉宋齊七代也。梁昭明太子撰文選。加梁時者及八代歟。更者歷也。然者自周至齊也。齊當代梁歟。一義云。周漢魏晉宋齊梁七代也。弃秦取梁也。此義意者彼序舉詩賦之。而

姬者周也。即詩始也。漢者詩盛（也歟）之代也。故書經漢以來。周代八百六十余年。漢代四百二十余年之。中間雖有秦一代。纔四十九年也。是亂國之上。焚書坑儒。滅之無詩。仍略不舉歟。隨序文云。

遠自周室迄于聖代云云。然者注之云。自周至梁云云。何弃梁乎。但此兩義邪正難知歟。秦梁二代。縱雖加猶是八代。何云十一乎。

若漢分前後。又魏加後魏東魏。又立蜀吳二國。晉代西晉東晉餘

晉。其中又有前涼後涼南涼西涼北涼前趙後趙前秦西秦前燕後燕南燕北燕後蜀僞夏等十六國。又齊立南北并周等。相承如此。

委細分者其數太增。不相叶十一代之義歟。又菅三品文選竟寔序云。昭明太子之撰斯文也。馳七代之人英。搜千歲之鴻藻云云。

又自餘例等中。若過若減者可隨事也。不叶今序隨注時代之義也。又文筆之習者。以十餘稱廿。以廿餘稱卅云云。然者以十六代可書廿代。何書十代乎。

又經禮三百者。三百外略六十。何准於十外略六之義乎。

又通計三百日者。爲對人生一百年。略六千日也。

又孔因四百增十人者。是等則可云文筆之習。亦可存若過大數之意歟。

又折臂翁增四年之條。已是文集之相違。暗以難計。恣致會釋。可有其恐歟。

又已過潘安三十年者。屈易六十二歲之作也。仍過潘安之三十二

已卅年也。全不弃二年歟。何據被得意乎。何據被識乎。

又自屈易御年異說多。國乎（子孫數）濫進士許先鳴傳云。會昌五年歲次

乙丑冬十月十一日卒。時年七十五云云。

又傳云。大中元年（卒歟）。時年七十六。贈尙書右僕射云云。

又唐錄云。小史。大中元年卒云云。此二說同歟。

又會昌五年履道坊尙齒會年。居易七十四之由被載文集。若會昌

五年薨者御年七十四歟。

又或說云。尙齒會年七十二。其年薨云云。

又安和二年尙齒會年。菅三品七十。天承元年尙齒會年。當時登

六十二云云。少於樂天三年之詞。會昌刑部十年之弟等。少々相違。且難知定說。且強不可病歟。凡於居易御年者。如此有異說。不可有相違之難者歟。

又引文集說。被注居易薨日之條如何。無所見歟。

又考管家系圖。自貞觀刑部至時登誠九代也。然而或除貞觀刑部歟。若除時登身歟。仍云八代也。除始除終。隨時不定歟。

又法華疏云。文殊者釋尊九代之祖師云云。妙光并八王子只尊都合十代也。除一代是定例也。非今序之例歟。(五世歟)

又崔儼入室書千卷者。是等即文筆之習也。爲對筆一雙。取書千卷也。五字無益歟。古今序陛下九年者。相加受禪之年計之也。仍

無相違歟。八歲之詞何異樣乎。九歲之字何言吉乎。凡年記不同。物數增減者。或書籍異說。或傳々書寫誤。或爲來對句。以增減文字條。文筆之習也。然而不可例平城十代之文乎。

道因云。大同撰卜云。于時^(曆數)歷十代之詞。此一事雖相叶大同撰。猶多不審。是自然之事歟。或重代歌仙有被斟酌之言。其義被甘心。

仍老比丘所同申也。其間委細不可加載勘文。便宜之時一謁之次。可遂心事也。

顯昭陳云。時歷十代之詞。相叶大同之由被注畢。此條穩便也。曲會私情。甚以左道也。但或重代歌仙有被斟酌之言云云。何樣斟酌乎。何不書載乎。若是如前々風聞者。自聖武至仁明。當十代之

義歟。然者尤以不當也。文選序。姬漢以來時歷七代之文。遠自周

至聖代梁也。亦古今序。万葉以後時歷十代之文。遠自大同迄聖代延喜也。但件義大旨者。古今序意舉遍昭業平等之六輩。爲和歌之人。其輩皆是仁明以後人也。以其在世不可云和歌陵遲。故以仁明以前十代。可屬和歌哀代云云。

今按之。已皆古今序意歟。所謂彼序云。近代在古風者纔二三人。(存疑)

花山僧正者。在原中將者。文屋康秀者。宇治山喜撰者。小野小町者。大伴黑主者云云。此外氏性流聞者不可勝計。皆以豔爲基。不知歌趣者也。昔平城天子詔侍臣令撰万葉集。自爾以來時歷十代。

數過百年。其間和歌不被採。雖風流如野相公。雅情如在納言。而皆依他才聞。不以斯道顯。陛下御宇于今九歲。思繼既絕之風。

欲興久廢之道。爰詔大內記紀友則。御書所預紀貫之。前甲斐少目凡河內躬恒。右衛門府生壬生忠孝等。各獻家集并古來舊歌。

曰續万葉集。重有詔部類。所獻之歌。勒爲二十卷。名曰古今和歌集云云。此序意者万葉以後和歌已衰。好士惟少。其中知和歌人。

纔業平等六人也。又野相公在納言者雖詠和歌。依他才聞。不專斯道也。其故和歌不被採者。且是顯無撰集也。是以拾遺古今序

云。(傳歟)式部大輔永範卿作。百川法皇令撰金葉集。其後好事之者絕無聞。和歌弃不被用。於是太上天皇云云。(傳歟)是則依證岐院之作

左京兆三品被撰詞花集也。此序心殊模古今序也。大治以後至仁平。豈無好事乎。只以無撰集之故。云弃不被用也。大同以後至延喜。豈無好事乎。只以無撰集之故。云弃不被採也。

依之孫姬式云。人丸古屋獨步於南都。山部高沙齊名於北關。紀一文林分飛並逸。義曉讓倍同途競遠。伴五耶。(國長。)伴大夫。(春宗宿禰。)野相公。(右大弁。)野大夫(貞樹朝臣。)之輩。貞觀之前大寶已後。和歌之士煙而波令。非其聲調。高下會茲因矣云云。

附之案之。大寶以後貞觀以前好事惟多歟。何記聖武以後仁明以前和歌陵遲之由乎。只是大同撰萬葉之後。延喜撰古今之前。久無勅撰。故云和歌亦不被採也。非無好事。仁明御時已無撰集。何以其代爲和歌興乎。若以聖武以後屬和歌衰時者。何不舉大同以前人乎。若以仁明以後屬和歌興世者。不可舉在納言乎。其故者遍昭行平業平等。云年齡云任官。大略同時也。然者以舉野相公。可知限弘仁以後之由。以舉在納言。可知至仁明以後之由也。

小野黨

弘仁十一年秋補文章生。天長五年八月任大內記。七年補藏人。(年廿九。)二月任式部少丞。十年三月任春宮學士。承和元年任遣唐副使。三年正月七日叙正五位下。五年停位配流隱岐國。八年叙正五位上。九年式部少輔。十二年藏人頭。十三年權左中將。十四年參議。十五年左大辨。嘉祥二年五月以病辭官。停左大辨。仁壽二年春病。療後任左大辨。十二月叙從三位。同月薨。(年五十一。)

在原行平卿

承和七年正月補藏人。八年十一月三十日叙從五位下。十年侍從。十三年正月右兵衛佐。五月右近少將。貞觀十二年正月參議。十四年左衛門督。藏人頭。元慶元年治部卿。六年中納言。九年按察使。仁和三年四月十三日致仕。(年七十。)

遍昭僧正(俗名良峯宗貞。)

承和六年右兵衛尉。九年左近將監。十一年藏人。十二年左兵衛佐。十三年左近將監少將。嘉祥三年藏人頭。(出家。)貞觀十一年法眼。元慶三年權僧正。仁和元年僧正。(賜七十賀。)寬平二年七月入滅。(年七十六。)

在原業平朝臣

承和十二年左近將監。十四年藏人。嘉祥二年正月叙從五位下。貞觀九年左兵衛佐。六年左近將監。七年右馬頭。元慶元年右近中將。同二年藏人頭。四年五月卒。(年五十六。)

抑雨入道等聖武令撰萬葉之案者。雖存水魚味之思。仁明以前十代之權者。已雲泥万里之論。互何不決理非。偏敵愚僧一人乎。可然事歟。可謂不詳。

萬葉集難事下

一數過百年事

勝命云。自大同至延喜五年。九十七年也。可書及百年也。何書過百年乎。自聖武至延喜五年。百七十九年也。過百年之句有其謂

卿。

顯昭陳云。數過百年者。自大同時可至古今集進覽之時也。延喜五年四月十八日。彼仰貫之等之日也。其旨見序文。又貫之集同有其旨。就中紀友則者延喜五年與貫之等同奉勅。而友則死去之後。貫之等詠入古今集。其詞云。

紀友則カミマカリニケル時ヨメル 貫之

アスシラメ我身トオモヘトクレニケルケフハ人社悲シカリケレ

又七條ノ后ウセ給テ後 伊勢詠歌

チキツナミアレノミマサル宮ノウチニ云云。如常。仍略之。

此后崩日延喜七年七月七日也。

又云。法皇西カハニオハシマシケルニ鶴立洲トイフコトヲ題

ニテヨマセ給ケル 貫之

アシタツノタテル河邊ヲ吹風ニヨセテ歸ラメ波カトソミル

同タヒ猿叫峽トイフコ、ロチ 躬恒

ワヒシラニマシラナナキソ足曳ノ山ノカヒアルケフニヤハア

ラヌ

(和歌)

今按。此行幸加貫之忠峯等假名序者。延喜七年九月十日。法皇主上相共臨幸云云。而如帝皇系圖者。延長四年十月十九日。

今上與法皇行幸大井河云云。又左近陣記同之。此條相違不

審也。若有兩度歟。

拾遺云。亭子院大井ニ御幸アリテ御幸モアリヌヘキ處ナリト

仰セ給ニコトノ由ヲ奏セシトテ 一條オホイマウチキミ

小倉ヤマミネノモミチシコ、ロアラハ今ヒトタヒノミユキマ

タナム

其後延喜ノ帝ノトコロニ行幸アリケル日アマタノ歌ヨマ

セタマヒケルナカニ 貫之

オホキ川カハヘノ松ニコト、ハムカ、ルミユキヤアリシムカ

シモ

今案。如此詠等者。前有法皇御幸。後 主上法皇共臨幸歟。然

而延喜五年以後歌入之條無疑歟。

又亭子院歌合ノトキヨメル 伊勢

見ル人モナキ山サトノサクラ花外ノ散ナム後ソサカマン

貫之

櫻花チリメルカセノナコリニハミツナキ空ニ浪ソタチケル

此歌合延喜十三年也。

又貫之力和泉國ニ侍リケルトキニ大和ヨリコエテマテキ

テヨミテツカハシケル 藤原忠房

君ヲ思ヒナキツノ濱ニナクタツノタツネクレハソアリトタニ

聞

カヘシ

チキツナミタカシノ濱ノ濱マツノナニコソ君チマチワタリケ

貫之

件忠房延喜廿二年任大和守云云。

又古今眞名序。是紀淑望之作也。而或說云。實者其父紀納言借彼名作之云云。又或人云。淑望者延喜九年任大學頭。同十年任東宮學士。同十九年卒云云。紀納言者同十二年二月薨。然者淑望任大學頭東宮學士等官。而紀納言薨之後作之歟。若爲納言存生之時者。何仰子息淑望乎。何又借其名乎。被選儒林之英華之故也云云。若然者非延喜五年之奏覽歟。但件序奥云。于時延喜

五年歲次乙丑四月十八日。臣貫之等謹序云云。是則付奉 勅之日以序述也。内外書籍緣起并序等。與正文別記年月。是常例也。但藤原仲實朝臣古今集目錄云。延喜五年四月十八日。卷軸肇就。以備觀覽云云。付眞名序之結詞如此注歟。仍世人不用之。凡奏覽之日儘不見歟。後撰集者天曆五年十月晦日。仰河內掾清原元

輔。近江少掾紀時文。讃岐大掾大中臣能宣。學生源順。御書所預坂上望城等。撰并和歌。并令讀万葉集。以梨壺爲其所。以藏人左近少將藤原伊尹。勅爲撰和歌所別當云云。仍御筆宣旨奉行文奥云。于時天曆五年歲次辛亥亥亥初換之月。朱草將盡之期也云云。率 勅之日者如此雖分明。奏覽之年者儘不見歟。古今同之歟。然者付奉 勅之日。載御宇九歲之文。依奏覽之年。注數過百年之詞歟。更不可相違。

或人々曰。過百年者經過百年歟。可依讀樣也云云。然而數過百

年者模文選序之數逾千祀之詞也。仍假名序二年ハモ、トセアマリトカケリ。然者猶百年ニ過ト可得意也。

道因云。自大同元年至延喜五年滿百年也。就中大同元年代始也。或御即位。或大嘗會御禊。是恒例也。何拋有限兩條之政務。被撰無益一興之和歌。縱有其義。大同三四年之間歟。然者百年猶有不足乎。

(尚百歌)

顯昭陳云。數百過年之條同前。但無益一興之和歌如何。我朝習俗佛神同詠。大嘗會歌于今不絕。如此詞者。賢王聖主之御代。不可有和歌之撰集歟。此條不似好事之詞。遺恨云云。

一大同年中撰事

勝命難云。諸撰集者在位大積治天下時事也。大同四年之間。每年不開。初年ハ受禪御即位。八月洪水。十月先皇改葬。二年依十一月伊與親王并母夫人等亂停大嘗會事。三年二三月天下病事甚熾。十月大嘗會御禊。十一月大嘗會。四年四月天皇御不豫。禪位於皇太弟。如此連々不開。以何障有撰集沙汰乎。是以古今者延喜帝在位卅三年之內。延喜五年有 勅。數年漸々撰之。後撰者村上帝在位二十一年之內。天曆五年有 勅。漸々撰之。拾遺者花山法皇在位雖二年。御出家之後。二十二年之間漸々撰歟。後拾遺。白河法皇院御在位十四年之間。承保之比有 勅。應德三年奏之。金葉。鳥羽院在位十六年之間。天治元年有 勅。大治二年奏覽之。詞花集。讀岐法皇在位十八年之內有 勅。漸々撰

之。院號之後。天養元年六月二日奏覽之。以之思之。万葉集者聖武天皇御在位廿五年之內漸々有沙汰。左大臣諸兄天平勝寶五年奉勅撰之。四千五百餘首也。定送數年撰之歟。

顯昭陳云。古今後拾遺詞花者誠歷多年歟。其外後撰者天曆五年梨臺五人奉勅之由雖注之。於奏覽之日者儘未見歟。但天德四年三月三十日。內裏女房歌合之歌不可之。又此集作者位罫。如

古今集。除大臣之外不書官也。然富小路右大臣者天德四年八月任右大臣。而此集只書藤原顯忠朝臣。不載大臣官。以此等推之。

天德四年以前終功歟。拾遺者花山院源讓之後御撰也。然而其始終不密也。但道綱卿之位署被載中納言并右大將。而道綱者長德元年宰相中將。同二三兩年之間中納言右大將也。同四年任大納

言畢。然者此二三兩年之間終功歟。金葉者依白川院之仰。讚岐院御宇之初大治二年撰上。何依鳥羽院十六年之御在位乎。詞花

集者讚岐院遷讓之後。天養元年六月二日。依院宣數六條三品左京兆被撰之。而今被勘云。在位十八年之間奏勅。漸々撰之。院號

之後。天養元年六月二日奏覽之條。以外僻事也。彼院宣參議敦長卿之奉也。彼時儘所見也。

又大同四年之間。連々不閑云云。然而日本後紀云。天排國高彥天皇大同二年幸神泉苑。琴歌間奏。四位已上共挿蘭花。皇太弟

頌歌云。

ミナ人ノソノカニメツル云云如前。

上和之曰。

ナリ人ノコ、ロノマニマ云云如前。

又云。同天皇大同三年幸神泉苑。有勅從五位下平群朝臣賀是

磨作和歌

イカニフク風ニアレハカオホシマノ尾花カスエチ吹ムスヒタル

皇帝歡悅。即授從五位上云云。

今按之。大同二三兩年已有歌與。何無撰集乎。又萬葉爲體。不似

近代撰。雖不送年序。其功易成歟。一者部類雜亂不同。近代撰集者四季賀別羈旅哀傷戀雜神祇釋教等是也。而萬葉者雜歌挽歌

相聞歌警喻歌問答歌。不出此五。其中ニ或卷立皇代。或卷記年

號。或卷列有題無名。或卷聚無題有名。或卷一人詠。或卷由緣歌。

或卷諸國防人。或卷奉歌風俗。或卷詩歌序代。或卷書狀傳記。或

卷有一座會歌三十二首。或卷別夫婦贈答六十三首。

二者和歌書樣不同。或卷假名書也。

安思比寄能夜麻毛知可古乎保登等藝須都寄多都麻泥爾奈仁賀

吉奈可奴

或卷眞名書也。

昨日社年者極之賀春霞春日山爾連立爾來

其中又有本義教訓隱易顯難。所謂三伏キ一向メ一伏三起メ馬追喚マ大馬聲マ蜂音ハ八十一衣副衣フ右點現本マ石蒼玉ハ桃花ハ楊マ神樂マ

マメ。牛。鳴。馬。醉。白。風。白。土。北。雪。金。山。御。衣。足。疾。寒。暖。乾。坤。
サカシラサヒ。ハツ。カク。ニ。モ。マシ。コソ。マ。ニ。カ。ケ。サ。ナ。レ。コ。ヒ。
精進。不。樂。端々。云云。鷄。鬼。申。社。隨。欲。己。汝。自。樂。平。
此類千万。略舉三五矣。

三者和歌不撰善惡。和歌總數四千五百餘首中。有作者歌二千一百三十六首。皆是出諸家總別集。總集者類聚歌林并古歌集等也。別集者柿本人麿歌四百餘首。山上憶良歌六十餘首。山邊赤人歌五十餘首。笠金村歌四十餘首。田邊福丸歌五十餘首。安陪蟲丸歌三十餘首。帥伴卿歌四十八首。大伴家持歌四百五十餘首。大伴坂上郎女八十餘首。諸國防人等歌百三十餘首。新羅使等歌百餘首。又無作者歌一千八百餘首之中。稱作者不詳歌百二十餘首。不載作者歌千六百二十餘首。其中五十餘首出古集。又有奉歌二百三十餘首。如此等諸家集歌并諸家會歌。或無名歌等。不撰善惡志入之歟。

四者和歌廣不相尋。所謂漏万葉名歌等粗以注出。

仁德天皇御歌

高キヤニノホリテ見レハ煙タツ民ノカマトハニキハヒニケリ

新羅王仁獻此天皇

難波津ニサクヤコノ花冬コモリ今ハ春ヘトサクヤコノ花

顯宗天皇御歌

イナ庭河ソヒヤナキ水ユケハナヒキオキノシ其子ハタエス

衣通姬歌

ワカセコカクヘキヨヒナリサ、カニノ蛛ノフルマイカネテシ
ルシモ

トコシナハニ君モアヘヤモイサナトリ海ノタマモノヨルトキ
ニ

聖德太子於片岡山給御衣於飢人御歌

シナテルヤカタ岡山ノイヒニウエテフセル旅人アハレ親ナシ

ニ

飢人御返

イカルカヤ富ノシカハノ絶ヘハコソワカオホ君ノミナハ忘レ

ソ

太子御詠者長歌也。末略之。

天智天皇御歌

朝倉ヤキノマロ殿ニワカラレハナノリナシツ、行ハタカコソ

秋ノ田ノカリホノイホトマチアラミ我コロモテハ露ニヌレ

ツ、

アツサ弓ヒキノ、ツラ、スエツヒニワカ思フ人ニコトノシケ

ム

近江采女給ケル御歌也。

近江采女歌御返

ナツヒキノモヒキノ絲チクリ返シコトシケクトモ絶ムトオモ

フナ

柿本人麿歌

梅ノ花ソレトモ見エス久堅ノアマキル雪ノナヘテフレ、ハ
ヲカヤトノ池ノ藤ナミ咲ニケリ山時鳥イツカキナカム
タツタ河紅葉ハナカルカミナミノミムロノ山ニ時雨フルラン
タノメツ、コヌ夜アマタニナリメレハ待ジト思ソ待ニマサレ
ル

梓弓イソヘノコマツタカヨニカ萬代カネナタネチマキケム
アハメ夜ノ降白雪トツモリナハワレサヘトモニケヌヘキモノ
ヲ

風フケハ波ウツ岸ノ松ナレヤネニアラハレテナキヌヘラナリ
ホノノトアカシノ浦ノアサキリニ鳥カクレユク舟ナシソチ
モフ

奈良帝御歌

萩ノ露タマニヌカムト、レハケヌヨシミルハハムタナカラミ
ヨ

立田川モミチ亂レテナカルメリ渡ラハ錦ナカヤタエナム

猿澤ノ池モツラシナワキモコカ玉藻カツカハ水ソヒナマシ

行基并歌

蘆ソヨクシホセノ波ノイツマテカ憂世ノ中ニウカヒワタラム
カラストフオホチソ鳥ノコトチ見テトモニト云テサキタチイ

ヌル

山鳥ノホロノトナク音キケハ父カトソ思フ母カトソオモフ
モ、サクニヤソサクソヘテ給ヒテシチフサノムクヒチフリヲ
拾カヌル

ノリノ月ヒサジクモ哉ト思ヘトモサ夜更ニケリ光カクシツ

法華經チワカエシコトハ薪コリ菜ツミ水クミツカエテソエシ

靈山ノ釋迦ノミマヘニチキリテシ眞如クチセスアイミツルカ
モ

波羅門僧正歌

カヒラエニトモニ契リシカヒアリテ文珠ノ御顔アイミツルカ
モ

光明皇后御歌

ミソシアマリフタツノ姿ソナヘタルムカシノ人ノフメルアト
ソコシ

安倍仲麿歌

天ノ原フリサケミレハ春日ナルミカサノ山ニイテシ月カモ

中臣東人歌

絶スユク明日香ノ川ノヨトミナハ心アルコトヤ人ノオモハム
五者作者位署不定。

或具書官姓名。或書官名不書姓。或書官姓不書名。或書姓名不
書官。或書官不書姓名。或書名不書官姓。或兼書兩官。或書初官

不書後官。或書初官又書後官。或雖劣官書之。或書位不書官。或書居所不書名。只是隨聞而注之。任見而載之。敢無定准。後如委注。

今按。近代撰集者雖少歌員每事有煩。其功難成。或強撰和歌之善惡。或兼定好事之後劣。或雖惡詠於高貴之人者賞之。或雖宜歌於下賤之輩有嫌之。或避古歌。或除舊撰。或痛病墨。或斥瑕瑾。或恐異名。或懼難破。或少入者懷不足之恨。或多入者致勝他之望。條々思惟遲々因緣也。萬葉之機其不然乎。然則雖數千首。四歲之間。何不撰定乎。雖一十軸。一年之中。輒可終功歟。

一人膺在世事

勝命難云。古今序云。イニシヘヨリカクツタハルウチニ。ナラノ御時ヨリソヒロマリニケル。カノ御トキニ。オホキミツノクラキ柿本人丸ナム歌ノヒシリナリケル。コレハ君モ人モコ、ロチアヘセタルト云ナルヘシ。秋ノユフヘ龍田河ニナカル、紅葉ハ、帝ノオホムメニハニシキト見玉ト。春ノ朝吉野ノ山ノ櫻チハ。人丸カコ、ロニハ雲カトナムオホエケル。又山ノヘノ赤人トイフヒトアリケリ。歌ニアヤシクタヘナリケリ。人丸ハ赤人カ上ニタ、ンコト難ク。赤人ハ人丸カシモニタ、ンコトカタクナムアリケル。此人々チ置テ、マタ勝レタル人モ。吳竹ノヨ、ニ聞ヘ。カタイトノヨリ、ニ絶スナンアリケル。コレヨリサキノ歌チアツメテナム萬葉集トナツケラレタリケルト

イヘリ。

依此序心者。歌ノ心ヲ知食奈良帝者是聖武也。人丸亦人當世贈答之故也。加之コレヨリ前ノ歌チ集テ名萬葉集者。大同撰之條。專涉傳言歟。加之人丸文武天皇時。大寶元年之比。度々行幸從駕之由見聞。夫人丸現在自文武至聖武歟。然者赤人々丸非大同現在之輩。人丸若至大同者壽命長遠歟。

顯昭云。此序意者奈良帝御時和歌盛弘。其時有人丸赤人等者。是指大同以前之帝歟。コレヨリサキノ歌チアツメテナム。萬葉集トナツケラレタリケルトカケルハ。即指大同代也。(今勘文ニハコレヨリサキノウタトアリ。證本ニハカ、リケルサキノウタトアリ。)

持統。文武。天明。元正。聖武。孝謙。文御代好事溢朝。詠歌甚多。仍大同帝集彼世々之歌被撰萬葉集也。是故集前歌之由被注序文也。若聖武孝謙之御宇撰之者。不可云集前歌歟。萬葉歌是聖武孝謙二代歌也。已是當代也。何云前歌乎。所謂假名序者雖舉人丸赤人等同時之帝。然不舉撰萬葉之帝城也。然而カノトキヨリコノカタ。年ハモ、トセ餘リ。ヨハトツキニナムナリニケルト書タレハ。指大同帝之條無疑也。眞名序者不舉人丸赤人同時之帝。只至興文。平城天子詔侍臣令撰萬葉集。自爾以來時更十代。數過百年云云。兩序共書時更十代之文。仍平城天子者指平城天皇之條無疑事也。名(有懸)人丸同時奈良帝撰之者。眞名序

舉人丸等同時之帝號畢。此帝即撰萬葉之由儘可書載也。迷此兩序前後之人致疑。或雖有大同撰之義。以人丸等屬大同朝。是不可也。或者人丸等同時之奈良帝。雖有非大同之旨。其帝即執撰萬葉之職。是久不可也。兩序之意。能可斟酌々々々。凡奈良帝二人之條。雖有不審。古今作者之中。已有二人。仍序中亦可有二人也。所謂春部云。

奈良帝御歌

フルサト、ナリニシナラノ宮古ニモ色カハラスソ花ハ咲ケル
是ハ平城天皇也。諸家目錄中安殿云云。

秋部云。

讀人不知

ハキノツユタマニヌカント 如前。

此歌或人云。奈良帝ノ御歌トナム。

タツタカハモミチミダレテ 如前。

此歌或人云。奈良ノミカトノ御歌。

今案。是二首者大同以前之奈良帝御歌歟。古今集序取此龍田河之歌。秋暮立田カハノ紅葉ハ帝ノオホムメニハ錦トミニト被書載。彼御時可有人丸之故也。又大和物語中有二人之奈良帝。但仲實朝臣古今目六中。以此注者奈良帝。稱大同之條。諸人不用歟。然者人丸長壽之雖不可來歟。抑付古今序見之者。奈良帝御時雖有人丸。付万葉集勘之。人丸者藤原宮御代死去歟。

所謂万葉集云。藤原宮御宇天皇代。柿本朝臣人麿在石見國鑑石之時自傷作歟

カモ山ノイハネシマケルソレナカモシラステ妹カ待ツ、アラム

柿本人麿死時妻依羅姫子作歌二首

ケフ／＼トワカマツ君ハイシカハノカヒニマシリテ有トイハ
スヤモ

タ、ニアハ、アヒモカネテムイシカハニ雲立ワタレミツ、忍
ハン

丹比真人(名闕)擬柿本人麿之意報歌一首

アラ波ニヨセタル玉ヲ枕ニチキワレコ、ナリトタレカツケ、
ム

又万葉中於人丸歌無載慶雲以後之年號。又元明元正ヨリ并聖
武天皇御代。雖有赤人詠歌。無人丸之作歌。又與聖武天皇無贈
答歌。又與彼代人無贈答歌。

因茲式部大輔敦光朝臣作人丸讀讚云。仕持統文武之聖朝。過新
田高市之皇子云云。而高山新田皇子者共天武天皇之皇子也。高
市皇子者持統天皇御宇大化二年七月薨云云。

又仲實朝臣古今目錄云。柿本人丸。父母未詳。大寶之比人也。古
今和歌集序。有先師柿本人丸大夫者。金玉集序。有正三位柿本
人丸者。和歌仙也者。而尋勘舊記。無有歷任。詳不檢載云云。

以此等說按之。古今所存人丸不至聖武御宇歟。付萬葉說之故也。然者古今假名序之說尤以不審。是何帝歟。隨又真名序不載此事乎。但前所勘出孫姬式云。人丸古屋獨步南部（於殿後）（平城京也）。山部高沙齊名於北闕云云。此說相似假名序歟。且爲會通注士緒說而已。

道因云。如假名序者。奈良御時有人丸ト書ケリ。又大同御時豈人丸見存乎。又拾遺集云。ナラノミカトタツタカハニ紅葉御覽シニ御幸アリケルトキ。御トモニツカウマツリテ詠云。タツタカハモミチハナカル。如前。此歌書並聖武天皇落葉御歌。タツタ河モミチミタレテ。如前。同入古今。但不明作者人丸。此集之習也。然而拾遺集注人丸歌之上。又在彼家集。供奉行幸無疑。以聖武（孝德）號平城明白事也。又此タツタカハ紅葉ミタレテノ御歌。古今集ニハ。或人云。此歌ハ奈良帝ノ御歌トイヘリ云云。隨則此御歌體在聖武天皇御集。爰知彼天皇奉號平城之條。世以所謾歌也。

顯昭陳云。古今序并作者。又大和物語中二人奈良帝御座之由前委勸畢。此難勢等不出其外歟。凡以奈良帝之號皆不可屬平城天皇。又無左右不可定聖武也。撰萬葉之平城天子者一定大同也。若有人丸同時之奈良帝者。即可指大同以前之帝歟。然而定聖武事又以不審。依萬葉十七。人丸不可至聖武之御代。古今序體不指聖武之故也。

又奈良帝御集甚多不審。不可依憑。其故者古今春部花歌。フルサト、ナリニシナラノ。如前。是平城天皇御詠也。此歌入彼集。又他人詠等多以相交歟。然者聖武御集之條體難定歟。凡人丸亦人家持等集。世間流布之本。其歌相互交雜。不審甚多。又萬葉所引之集多以相違也。凡諸家集之歌互交雜。又其誤惟多。是則大旨後人追書集之故歟。

忠峯歌

ミチノオクニ有トイフナル名取河ナキナトリテハ苦シカリケリ

此歌在人丸集。

貫之歌

五月雨ノ空モト、ロニ時鳥ナニヲウシトカヨタ、ナクラム

友則歌

タカタメノ錦ナレハカ秋キリノサホノ山ヘチタチカクスラム

元方歌

アラ玉ノ年ノヲハリニナルコトニ雪モ我身モフリマサリツ、已上歌等在家持集。

承均歌

イサ、クラ我モチリナムヒトサカリアリナハ人ニウキノミエナム

閑院歌

サキタ、スクヒノ八千度カナシキハナカル、水ノカヘリコメナリ

已上歌等在素性集。

清慎公歌

色フカクソメシ袂ノイカ、シクナミタニサヘモコサマサル哉

此歌在小町集。

躬恒歌

タノメツ、アハテ年フルイツハリニコリヌコ、ロチ人ハシラナム

此歌在伊勢集。業平朝臣歌也。

忠峯歌

藤衣ハツル、イトハツヒ、トノ涙ノタマノヲトソナリケル

惟高親王歌

白雪ノタエスタナヒク岑ニタニスメハ住ヌルヨニコソ有ケレ

已上歌在貫之集。

行平卿歌

オキナサヒ人ナトカメソカリ衣ケフハカリトソタツモナクナル

ワクラハニ問フヒトアラハ須磨ノ浦ニモシホタレツ、詫トコタヘヨ

已上在業平集。

良風歌
春風ハ花ノアタリヲヨキテフケコ、ロツカラヤウツコフト見ム

此歌在興風集。

忠峯歌

ヤカストモ草ハモエナム春日野ハタタ春ノ日ニマカセタラナシ

兼盛歌

ナヨタケノワカコノヨチハシラスシテオホシタチツト思ヒケル哉

已上在重之集。

長家卿歌

高砂ノチノヘノシカチコグ舟ノウラカナシクヤ過カテニキク

此歌在經信卿集。

此一帖爲子孫寫之。

寶徳元年三月日

菅原朝臣爲賢判

右二册以爲賢自筆之書令書寫校合者也。

此書雖當有焉馬矣。爲後勘寫之畢。後見之。可憐予備執

筆之老痴與照机上晷短焉。于時寶曆四癸酉冬上旬書之。

畢。

續群書類從卷第四百五十二

和歌部八十七

古今集註序

和歌の起。古來の風鉢。家々の口傳。その數多といへとも。此集の序をよくく沙汰したらんにはしくへからざるもの也。古の歌仙人丸赤人等のことは左右におよばす。中古と成りて。延喜御門の御時。高の道をおこし。專この歌を翫たまひしに。時の歌仙中に紀貫之拔群の譽ありて。ふかく此道のことをしれり。これによりてつらゆきに仰て此集を撰定せしめ。紀貫之序を書て。具に歌のおこり及さまくの風鉢をあらはせり。然は此序をよくく料簡して歌をはよむべき也。其以後の千萬の口傳は。さらに此序にもれたることなし。但古人の筆は事のこゝろふかくして。今この世の人は輒不得心の事のみあれは。よくく聞口傳可銘心腑也。撰歌の事は上古には聞ゆることなし。萬葉集よりして撰歌といふこと出來なり。但此萬葉集

を被撰の時年紀。撰者こと異說これ多し。或人皇四十五代聖武の御時。左大臣（井手左大臣ともいふなり。）橘諸兄撰ともいひ。或五十一代平城御時の撰とも云り。此事後に具に可註也。此集を撰ぜられて後。又中絶したりしを。六十代延喜御時。此みちを興されて古今集を撰ばる。自是代々相續して撰集おほく出來するなり。

古今集二十卷

延喜五年。大内記紀友則。御書所預同貫之。前甲斐目凡河内躬恒。右衛門府生壬生忠岑等に仰て。古今の歌を令撰給。正しく此集を撰定することば貫之一人なり。

後撰集二十卷

村上天皇（人王六十二代。延喜御子。）御時撰ぜらるゝ也。源

順。紀時文。清原元輔。大中臣能宣。坂上望城等五人に仰て撰也。大内梨壺といふ處にて撰せらる。仍以前の五人をば梨壺五人ともいふなり。

拾遺集二十卷

花山院御自撰也。長徳御出家後撰給ふ。然とも治天の君の勅撰にはあらず。然とも代々被用之。古今後撰拾遺をば三代集と名付て。此道の龜鑑とも本歌に被用者也。萬葉集は撰歌の起なれとも。只さま／＼の歌を取集られたることなきゆへに。後に集も萬葉の歌をば皆撰入らるゝ也。古今以後集は無其義。但錯て後々の集に入たることともあれとも。是適ことなり。

後拾遺集二十卷
白河院御時應徳。中納言藤原通俊卿承仰撰之。

金葉集十卷

同院御時。源俊賴朝臣撰之。

詞花集十卷

崇徳院御時。左京大夫藤原顯輔卿撰之。此集又非治天君之勅撰。

撰。

千載集二十卷

後白河院御時。入道皇太后宮大夫藤原俊成卿撰之。

新古今集二十卷

後鳥羽院御時。元久參議右衛門督源通具卿。大藏卿藤原朝臣有家左近衛中將藤原朝臣定家。前上總介藤原家隆。左近衛權少將藤原雅經。元久三年三月廿六日撰之。土御門院治天八年也。院御前にて被撰之。仍院御自撰の義なり。以上自古今至此集。謂之八代集。

新古今集二十卷

後堀川院御時。中納言定家卿撰之。

續後撰集二十卷

後嵯峨院御時。前大納言爲家卿撰之。

續古今集二十卷

同御代。文永九條内大臣基家公。衣笠内大臣良公。藤原爲家卿。藤原教長等承仰撰之。

續拾遺集二十卷

龜山院御時。前大納言爲氏公撰之。

新後撰集二十卷

後宇多院御時。前大納言爲世卿撰之。

玉葉集二十卷

伏見院御時。大納言爲兼卿撰之。

續千載集二十卷

後宇多院重たる御治天時。前大納言爲世卿重承仰撰之。

續後拾遺集二十卷

先朝（後醍醐）御時。民部卿爲藤卿承仰撰之。而奏覽前早世之間。子息爲定卿相續して撰之。

已上代々撰集次第如此。分部調卷次第。大概は以古今爲本。雖然少々相違事等有之。歌の數は古今序所載千首也。金葉詞花は卷の數も十卷。歌も千首に不足。新古今の時初て二千首を集らる。玉葉の時四千首に増す。續後拾遺の時千首に減せられ畢。凡集を承る人はみな時にとりては宗匠なり。雖然上代には強宗匠の家として相繼の儀は無之。只時の堪能なれば。如此の撰者等をは承也。中古以來道の宗匠といふこと出來。所謂俊賴朝臣は大納言經信卿の子なり。父卿此道の宗匠なり。俊賴是を相繼して金葉集の時撰者たり。六條修理大夫顯季此道の好士なり。その子息顯輔卿相續して依有名譽。詞花集の時撰者たり。仍集し以後一流宗匠なり。九條一流といふは是なり。また俊賴朝臣同時に。前左衛門佐藤原基俊といふ人堪能にて。此道を訪人は此基俊をもつて師範とす。俊成卿專此人の跡をうけて。而も堪能たりしに依て。千載集の時撰者たり。是よりこの流繁昌して。今に至まで代々撰者たり。餘流頗有名無實になり。又俊成卿の千載集を撰せしより。撰者相續已七代。撰集九ヶ度に及へり。如此諸流も多く撰歌の躰も一樣ならねとも。以古今本とし。以貫之道の祖宗とす。しかれば此道を好まん輩は。いかにも此集を能藝古し。序の起をも沙汰し明らめば。おのつから此

（一）
みちにふかき人けるへし。
此集に眞名假名の二序あり。

眞名序は紀淑望と云人は是を書。或説には淑望は御也ければ。先土代を漢字の文章にて草せしめて。是をかなにわけてかきたり。仍眞名序は奏覽の本にはあらずといへり。或説には貫之か書たる假名序をは。その聲淑望に漢字撰作すとも云。何様にてもかの眞名序は奏覽の物とは見へず。隨て家々證本にも不載之。或奥に書載たる本もあり。是は非本義。假名序におほつかなきことの。眞名序にて料簡せらるゝことあるへし。仍才學の爲に書かなと見へたり。而を新古今の時いかやうに治定せられけるにや。毎年本古今を撰せられしに。眞名假名のこの序を集め。初につられて被載たり。頗不審事なり。

於此序段々あるへし。

（二）
やまといふより。心をなくさむるは歌なりとまで一段。此歌あめつちひらけはしまりけるといふより。みそもしあまり一もしはよみけるといふに至るまで又一段。かくてそと

云より。此歌もかくのこことくなるへしと云に至まで又一段。な

にはつの歌はといふより。てならふ人のはしめにもしけるといふまで一段。第五
（三）
歌のさま六なりといふより。六義の終まで又一段。今の世中色につきといふより。ほにいたすへきこ
（四）
にもあらすといふまで又一段。第七
このはしめをおもへばと云

ふより。さかしおろかなりとしろしめしと云に至まで又一段。^{第八}
 しかのみならずと云より。歌にのみ心をなくさむるといふに
 至るまで又一段。^{第九}古よりかくつたはる中にといふより。かた糸
 のより／＼にたへすそありけるといふに至まで又一段。^{第十}これ
 よりさきの歌をといふより。代はとつきにいたるまで又一段。^{第十一}
 いにしへのことをもといふより。そのさたしらぬなるへしと
 いふに至る迄又一段。^{第十二}かゝるに今といふより。よろこひのみそ
 あるへきといふに至まで又一段。^{第十三}まぐらことはといふより。此
 時にあへるをなん悦といふに至まで又一段。^{第十四}人丸なくなり
 たれと云より。序のおほりに至まで又一段。^{第十五}此段々をよく／＼
 わけて。その上に一々の義を尋聞へきなり。

第一段の心は惣て歌の起れる姿。又は此歌の徳をいへる也。
 やまとといふは。日本とも倭とも書て。同やまとと訓する也。
 和とかけるは。倭の字と普通する故に書之。正義には非ず。
 やまとといは山跡又山止の心也。跡も止もともにとよむ也。
 むかし此國あめつちひらけて。潮のうるほひかはりければ。
 あらへる人は山をのみ往來してその跡多し。仍云大倭國。又
 の義には居所をして山とす。昔の山人にのみ山住しけるに
 依てやまとといふ。古より兩説也。日本といふことは。この
 國日の出る所に近し。故に日本國といふ。されと日の本とはい
 はす。日本をやまととよむ也。倭と書ることば。むかし此

國の人漢土に渡ける時。かの國人何の人そと問けるに。此人
 わか國也といふを。やかて漢人倭國と聞て。此字をもて此國
 の名とす。文字を渡しける時。倭と書てこの國の名とせり。此
 國又領納して則やまとの字とすと云り。雖然漢土にも又耶
 麻堆國^{ヘダイ}とも云。是はやまとに歌を開てしるせるなり。やまと
 云は惣て日本一國の名。わかれて畿内大和國なり。畿内大
 和は。人皇のはしめ神武天皇より四十余代の都にて。此國の
 最中なり。仍大和といふ。其後四方の國を開てその名各別な
 りと云とも。中國の名を取て惣して日本一州を倭といふ也。
 大日本大和といふたれとも。必しもおほやまととよまず。只
 やまととよむ也。今畿内の國にて可知之。此國の名あまたあ
 り。神代の昔は豐葦原の千五百秋の瑞穂の國とも云。是は昔
 天神國常立尊葦芽如して生出たまひしより葦原國と云。千
 五百秋瑞穂は久しかるへきゆへなり。又は大八洲國と云。伊
 弉諾伊弉册の二の神。國土を生たまふ時八洲あり。仍大八洲
 國と云。又秋津洲と云名あり。是は中州の大和國を産たまふ
 豐秋津洲といふ神を産たまふ。此御名に依て秋津洲といふ
 號も出來歟。但常の説には秋津とは蜻蛉なり。神武天皇山に
 のほり國の形を望み給ひて。蜻蛉に似たるをなとのたまふ。
 是より秋津洲ともいへり。その外も猶さま／＼の名あれと
 も。ことなかければ不註。うたとは哥とも歌とも調とも書。

何も同字の異作なれはくるしからず。但正は歌の字也。此歌とは只の言語にはあらず。心に思ふことを。言にかさりて詠若ばうたふへき義なり。歌こと別て口傳。やまとうた。九條の流なとにばやまとうたといふ。京極入道中納言の流にはやまとうたと云。和歌の披講などの時も。如此心得て可讀也。

人の心をたねとしてよろつのことの葉とそなれりける。

と云は。凡人の心はもと渾沌未分の所より起て。天地と氣を同じく。善もなく惡もなく。邪もなく正もなく。凡もなく聖もなく。天眞の道のみなり。如此さとするは聖人也。天地人と分て。凡聖の心は別に成てより以來。六識盛におこりて本性をさとらず。六識と云は眼に物を見。耳に音をき。鼻に香をかき。舌に味をなめ。身に寒温を知り。意に諸法を分別するなり。かの眼耳鼻舌身意をば。色聲香味觸法をば六塵とも云。一々に分別する心をは六識とも云也。如此の差別あれとも一心の所變也。聖人は一心の源を知る故に。用に隨而六識を便とも一心に疵なし。譬は鏡の上に萬象を浮るか如し。凡夫は一心の本を不悟か故に。六識に被使て。さまざまの妄念を起す。有無の見に落て。流轉三界の苦を不離。若その源をしり。その妄を離れぬれば。聖人と凡夫と一毫の差別なき。是を得法とも悟道ともいふなり。然は彼歌も聖人の心根。凡

夫の意識。大きに可有差別。能悟てよめらん歌は即聖言也。離生死因縁となるへし。妄念の上にて。いろく舛愛に伴てよめる歌は。狂言綺語の誤あるへし。此故に不可聊爾。能々思入て初心より可被向事也。人のこゝろをたねとして。

是は内の心外の感して。善惡を辨。是非を悟に付て。万のことはとなるも。愁あれは愁の心を種とし。感する所みな愁の詞にあらはれ。悦あれは向所皆悦の端となるなり。ことのばとそなれりける。

ことのばとは詞の端なり。常に言葉にとかくは音を借て書なり。万の言葉といへとも。聲は口舌唇の三を不出。響は宮。(一越調。商。(平調。角。(双調。徵。(黃鐘。羽。(盤涉。變徵。(上无變。宮。(下无。の六聲を出す。あいうえを。この四十七の文字を知りぬれば。万の聲も詞も皆是手おさまり盡也。口をひらはは万の詞となり。口をふさげは一氣のみなり。一心の万念となるかことし。かゝれば此歌も一心よりよろつの言葉となり。一音より出てさまく曲節をなす者なり。

世の中にある人。ことわさしけきものなれば。

世といふに二の義あり。親の後を子の續。子の後を孫の繼をは世といふ。古去今來移變事のやまさるをば代といふ。今の

世様中といへるは此心を可通なり。人といふ。黍尺せば天地人三は本一なり。渾沌にして不別時は。全く天地人といふ者なし。而を清氣はたなひきて天となり。濁れる氣はつゝいて土と成。この二氣をうけてやはらける氣は神となる。是則人道の初なり。然は人の初をしらは是神也。神なることを知は即天地なり。天地なることを知は。即渾沌に至りぬれば。凡もなく聖もなく。樂もなく苦もなく。未分の一氣のみある。これを聖人の道といふ也。

ことわさしけきものなれば。

とは。聖人にも凡夫にも可渡。聖人は我と云こともなく。己と書(云賦)ことなし。只人のまとへるを哀るゆへに。さまゝの法をとりて是を導かゆへに。ことわさしけきものとなれる。於凡夫者六識六根六境にふれて。喜も憂もさまゝなる故に。又ことわさしけきものとなる。されば歌の道にも。聖人の心はせ。凡人の心はせ。大に差別有へし。

心に思ふことを。みるものきくものにつけて。いひ出るなり。

と云は。上のことわさしけいはれを重て尺けり。

花になく鶯。水にすむかはつのごゑをきけば。いきとしいけるもの。いつれか歌をよまさりける。

古今の本註には。鶯の聲をきゝ。蛙のごゑを聞人。何人が歌をよまさりけると尺せり。此尺は誤なりと云へし。はの鶯(鶯)の

花にさへつり。水にすむかはつのおのれとすたけるは。みなをのか心をへて。歌をよむに似たるをいふといへり。此義眞名序には。若夫春鶯之嚙花中。秋蟬之吟樹上。雖无曲節。各發歌謠。物皆有斯。自然之理也。此眞名序と假名序とは。全その心不可相違也。故に花に暗鶯。水にすむ蛙の聲を。人の歌をよむに比量すること顯然なり。然は本註は眞名序に見合すして。一往をしるすにや。

いきとしいけるもの。いつれか歌をよまさりける。

心あるもの(は歌)とかならず音あり。聲あるものは必なかむる詞あり。此を歌といふへしと見へたり。此歌につきてさまゝふかき心あるへし。心ある者の只本性のみある時は。是とも非とも云へき所なし。心に愛も喜もある時に。みるものにつけ。さくものにつきて。哀を催し感を動す時に。うちなかめらるゝ心を歌と云。なかもむるにつきて。宮角徵羽の五音あるへし。此五音を金石糸竹匏土草木の八音にうつすを樂といふ。樂にしたかひて手をあげ足をふむ。此を舞といふ也。(歌)然と歌は必樂なり。樂はかならず舞となる。然此故に歌をよむ人に。五行の相生を辨へて。五音の吉凶をしるへき也。五音の吉凶といふは。宮は土なり。商は金也。角は木なり。徵は火也。羽は水也。宮は一越調。商は平調。角は双調。徵は黄鍾。羽は盤涉調也。是をもて相對相生を辨へし。たとへば土克水

なるかゆえに。盤渉調の音に一越調のいてきたらんは凶なり。水克火なるか故に。黃鐘調の音に盤渉調音來らんまた凶也。火克金のゆへに。平調の音に黃鐘調の來らんは又凶也。木克土の故に。一越調の音に双調の音の來らんは又凶なり。相生の次第は又是をもてなそらへ知へし。又吉凶を知に付て。宮商角徵羽を君臣民事胸に配當す。宮の亂たらんは君の凶也。商の亂たらむは臣の凶。角の亂たらんは民の凶。徵のみたれたらんは事の凶。羽の亂たらんは物の凶としるへし。物の凶といふは。五穀も實ならず。財産も不集たくひを云也。此理をよく心得て。亡國の音もおさめ。世の姿も知へし。或人の説に。音の凶を則うめきなをして正に歸すといふは。その理不當事也。古の知音の人は。音の凶ある時は身の凶ともおそれ。時の凶をも知て。本に歸て徳をもおさめ。心のひかめるをも直するをもて。五音を辨る本意とする也。昔師曠といひし人は無極の知音なり。此人南風といふ樂をうたひし時死の音出來。師曠驚て楚の軍功あらしと知る。是は南風と云は。南方に配當り主とる。楚は南となり南方にあたる。樂に死の聲出來せしに依て。南國の軍不可有利と知なり。此南風は昔の舜と云し聖人のつくられし樂なれば。なしかは亡國の音のあるへき。師曠は又知音の達者なれば。此南風をうたはんに。何によつてか誤あるへきなれとも。時の

凶に感して不思に死の聲出來けるを師曠自恠驚けり。依之しりぬ。音の上の吉凶はよくく習知て。災難をものぞき。正略(符應)にも可歸事也。今の歌をよむ輩。是を樂になし。五音に吉凶を辨るほとんどの事はなくとも。搆てあしき詞を禁し。その事となく憂悲んことは不可好。その由清輔朝臣口傳に此ことを委注せり。實綱中納言といひし人。位山のほればくたるわか身かなとよみて。人に超越せられけるなり。彈正尹清仁親王。鶴龜も千とせの後限あり佛にきみははやもならんとよまれける。是は父花山の法皇を餘に視てよまれける。その後やかて法皇かくれさせ給けり。後三條院の御位をりさせ給て後。住吉に御幸ありけるに。住吉の神も哀と思ふらんむなしき舟をさしてきたれば。とよませ給ひけり。おりぬの御門をは虚舟にたとへたる本説あれば。御歌からもやさしく。事の心も備りたれと。時の人虚舟をさしてきたればと云御製こそいまくしけれと申けるに。はたしていくほとなくてかくれたまふと云々。然は身のため世の爲にもあしかるへく。いまくしかるへきことをは。返々不可詠出者也。又歌はなかわるに付て。詞のつかぬも。やさしからぬも。心におほゆる事なれば。詠吟のよろしからざらんを。返々可酌耐事也。まして五音相對相生を辨んこと。此道の本意なるへき事なり。

ちからをもいれずして。あめつちをうこかし。めにみへぬ鬼神
をもあはれと思はせ。

と云るは。此歌の徳をいへるなり。天地を動すと云は。天神
地祇を感せしめ。雨をふらし。日てりをもとむることきの
徳あるべきなり。且天神地祇を感せしめたる歌なり。此事末
に可見。鬼神を令感といへるは。伊勢物語に。むかし御門住
吉に御幸して。我みても久しくなりぬ住吉のきしのひめ松
いく代へぬらんとよみて牽らせ給ひけるに。御神あらはれ
み給ひて。むつまじときみはしらしなみつかきの久しき代
よりいはひそめてき。と云御返事歌ありける。如此類なり。

おとこをなの中をもやばらけ。

（舊歌）

と云は。此歌の歌に。風吹はおきつしらなみたつた山夜半に
や君かひとりゆくらん。或人大和國成ける女にすみける。此
女おやもなく家もわろくなり行ほとに。此男河内國なる女
にかよひて。本の女にかれ／＼になりける。されと此女つ
らけなる氣色みへて。河内へ行ことに。おとこの心の如く申
つゝいたしやりければ。男もし外心もやあるとあやしく成
て。河内へゆくまれして。前栽の中にかくれてみけるに。折
ふし月面白かりければ。此女夜深まで筆かきならし。此歌を
なかめたりけるに。おとこいとおはれとおもひて。それより
又河内へもゆかすなりぬ。かやうのたくひをいふなり。

たけきものゝふの心をもなくさむるは歌也。

といふは。葛城のおほきみを陸奥國へつかはしけるに。國の
司事おろそかなりとてすまじかりけるを。傍なる女のか
はらけとりて。あさか山影さへみゆる山の井の浅くは人は
わかおもはななく。となかめたりけるに。王の心とけてけり
と云類也。物部といはん事は。義かはりたれとも。人の怒れ
るを。歌をよみてやばらけたる一端を引よせて尺せるなり。
大方物部と云。（右歌）舌兵を名て物部と云。是物部の氏遠祖神代に
兵を取て。天神の天降たまひし時。御前をつかうまつりしよ
り。其神子孫諸の物部を領して。武勇の道をつかさとりしに
よりて。たけきものを。物部といひならはせるなり。

已上第一段畢。

第二段の心は此歌の趣始れる謂を云也。

此歌あめつちひらけはしまりけるよりいいてきにけり。

とは。天地開闢の初より。此歌の道あるへしと尺したるに。
下の注に。天の浮はしの下にて。女神男神となりたまへると
きの歌なりと尺したり。天地開闢と女神男神との時代頗相
違す。開闢とは國常立尊の化生し給しより前の事也。伊弉諾
伊弉丹の天降給しことは。遙なる後の事なれとも。かやうの
文意のならひなれば。大概にてもその心なうへきにや。抑こ
の注の事古來異義あるへし。貫之此集を撰して奏覽しける

本には無此注。老後に望て息女にあたへんか爲に。此集を書寫しける時。注を書加へたりと云。一には貫之か所爲にはあらす。後人の所加也云々。後人と云によりて。四條大納言公任卿所爲なりと云説も有。宗匠の家には。猶貫之か所爲と云事を用て。他人の説といふ事なほ不可用之由をしるされたり。然而今案には。いかにも貫之か所爲にと云さるなり。先其證據は下の六義歌をおして。一々に不叶之由をしるせると。六

義にあてたる歌は。貫之か前よりの事なりと云とも。此序を書たる時。尤事の仔細を載へきに。無相違書つられて。奏覽の後の老後。一々加難て注に書載けん事。惣而さるへしとも覺す。次には雅の歌の注に。山さくらあくまで色をみつるかな花ちるへくも風ふかな(ぬき)まに。云へる歌は平兼盛か歌なり。

兼盛は貫之以後の人なり。然は後の人の所爲といふこと顯然なり。古賢猶是までは委く不及沙汰にや。今の注に。天の浮はしの下にて。女神男神となり給へるといへるは。天の浮橋の下にて。やかて男女のふるまひをなし給へるにはあらず。女神男神天の浮橋の上になすみて。瓊戈をさしおろし滄海原をかきさくりたまふ。戈のしたより凝て島となる。是をのころ島といふ。二の神此島におり居て。八尋の殿を造てともに住給ふ。二の神契をなし。國の御柱をめくりて。女神は右よりめくり。喜思哉可愛少男にあひぬとのたまひ。男

神は左より巡て。喜思哉可愛少女にあひぬとのたまふ。是は歌としもおほえねとも。陰陽相感せし初の詞なれば。歌の始なりとはいふなり。是よりさきの神たちの勅もあれとも。餘事おほきによりて。二神の夫婦となりしよりこのかたのことな根本とす。

しかあれとも。世につたはることは。久かたのあめにしては。したてるひめにはしより。

注云。下(照姫)照姫とは天稚みこの姫なり。せうとの神のかたち。をかたにもうつりてかやくをよめる。えひす歌なるへし。是等は文字の數も定らず。歌のやうにもあらぬことともなりと云々。久堅のあめとは。惣して天を久堅といふ。久く堅き義なり。かやうの詞は。古語の残れるを。今の世に枕詞と名付て。あなかちには尺を不付して。只空を久堅と心うると云り。山をあし引の山としるまでにて。強に委くすへからすと口傳す。然而さまゝの尺つくりたる書とも多し。又やすく心得らるゝ枕言も多し。可依事者也。此久堅も。喜撰か和歌の式といふ物には。月を久堅と云へしと云々。付之て昔天智天皇の後の御膝をいて。きよけにおはしけるを。天皇めて給ひて。月ににたると被仰けるより。月を膝形といふ。また云傳へたりと云々。強不可被信用事なれとも。舊口傳には多かやうに注たり。又古體讀といふものには。空を久堅と

云、仍今の世には万の天象の物には、皆久堅の枕詞を加へて詠來也。大かた古と今との事相違せり。古はやすくと云へきとを、必枕詞をよきて是を云。たとへは其徳を云のへて。後に卦を云也。久かたのあめ。あらかれのつちと云る類なり。あめとは天也。神代の舊言也。大方大和詞につきて、神代の舊言は。なにの故に天を云割けるとは。更に難尺事なり。付て深義とてあるへし。我國の神代の昔は多梵語に通たり。然もあめといふことはも。若梵語にて。あは最初に口を開聲なり。めは摩の字の轉なり。故にあまと云は本にて。あめと云は轉聲なり。万物の初は天也。天をあまと云。阿は開口聲の初。まは閉口聲の終也。深き習ともあることなり。噲は佛かほとげといふか。此國へ佛像のわたりしを。守屋等か奏聞に依て堂塔を破却し。佛像を難波の堀江に投入たりし時。人多くほとなりやみしを。此佛像の所爲なりとて。ほとなりけ名付つく。今は略してほとげといふ。大概是等にて古語俗語の差別を可辨知也。下照姫とはあめわかみの婦なりと。此事くわしくは日本紀か神代の卷に沙汰すへし。大概是昔天照太神御孫の神を此國に下奉りて。主とし給はんとせしに。諸のあらふる神此國を領して。螢火のかゝやくことく。五月蠅のさばくか如くつとひとよみけり。又草木岩木までも。皆是此荒神たちをば。素戔嗚の御子大汝の神(出雲大社。)

領給しを。天照太神先此神達をなこめて後に。御孫を降しとて。天稚彦といふ神に天羽々矢天鹿兒弓を給て下されしに。大汝神女照姫(下脱)といふ神に嫁して。三年に成までも御返事申さず。大神あやしみ給て。無名雉といふ鳥を下してみせられける。此雉天稚彦のあたりける門の前なる。かつらの木に居たりけるを天稚彦射殺つ。其矢なまに天に上て。御神の前にいたりぬ。血にぬれたりければ。大神あやしみ思食て。此矢は即昔天稚彦になひし天のはゝ矢也ければ。れきことをし給ひてなけ下し給ふ。其時に天稚彦にはなひらてれふせりけるに。此矢胸にあたりて即死ぬ。爰に天稚彦の父母の神かなしひ歎て。かのかはれを天上に取あけて。もかりを作て。是を置て泣せゝひけり。こゝに下照姫の兄妹稻尊彦根といふ。天稚彦の父母をとふらはん爲に。天上にのほり給けるに。その形美麗にして。八の岡八の谷にうつりて照かゝやけり。是をかのいもうとの下照姫歌につくりて。つとへる人につけしらしめけり。二首歌あり。あめなるや(み)をとなはたのうなかせる。たまのみすまる。あなたまはやて(み)。たにふたわたらす。あちすきたかひこね。是一首。又あままかる。ひなつめのゑわたらせと。いしかばかたふち。かたふちに。あみはりわたし(め)。よろよしに。よしよりこねは。いしかばかたふち。是上古の神の詞なるに依て更難心得こと共也。此注に

あめわかみこといへる誤歟とみへたり。次にせうとの神といへる。女の兄弟を通してせうと云り。是は神代の俗と見えること也。次にえひす歌とは。日本紀裏曲とかきて。ひなふりとよめり。此を今の注にえひす歌と書ひなとは惣て邊土をいふなり。近比の中岡の聲詞にかはれるに依て。ひなふりと名付る歟。日本紀にひなふりといへるを。此注に夷歌と云ふこと。貫之か所爲とはおほえさる事なり。貫之は極て物云上手の譽ありけり。伊勢物語に「いちのくつれとある。此集の歌の事かきに。かきのくつれ」と書なしたる。貫之か高名なりと云々。まして日本紀に古言をわろく書なして。えひす歌とは云へしとおほえす。次に是等は文字のかす定まらずと云は。以前の二首の歌の句もとゝのほらず。詞もたしかならぬ事をいへり。但此歌短歌旋頭歌等の根源を。の世となりても。かゝる歌の類あまたみえたり。聖德太子大和のかた岡にて。飢人に給ける御歌にも。かゝる跡見えたり。此御歌見拾遺集。

あらかねのつちにしては。すさのをのみことよりそをこりける。

あらかねとは。土といはんとて枕詞なり。是尺せはいまたきたはさる金といふ心なり。すさのをの尊よりおこりけるとは。是も委くは神代の巻にて沙汰すべし。大概是素戔嗚尊と

中は伊弉諾伊弉冉御子天照大神御弟なり。其性さかなくましゝて。やはられて根國(地底)くたらし給ひしに。先天上にのほりて。天照太神にまみへたまふ。其時さまゝの御ちかひありて。正哉吾勝神首としてあまたの神を化生し給て。しはらく天上にとゝまり給し。悪行やまさりしかば。天照太神怒ましゝて。天の盤戸に閉籠給、そのうち諸の神罪を素戔嗚尊におほせてやらひくたされき。先出雲國簸河上に八岐の大蛇をきり。國つ神の女奇稻田姫をめして妃としたまふ。清香といふ所に宮を作てすみ給ひしに。其所に八色の雲たちけるを見給て歌をよみたまふ。姿は下に可尺。ちはやふる神代には。歌のもしもさたまらず。すなをにして。ことのこゝろわきかたかりけらし。

さきに云所の陰陽神のあなうれしえや御詞なるへし。是を下照姫の歌に尺合すれば。參差すといふへきにや。素戔嗚鳥の三十一字をよみ出たまひしは。この國の事なれとも上代なり。下照姫の歌は於天上よみ給へとも。すさのをの尊の孫にこそましゝせは。遙に後の事とみえたり。然は今の一旬をば女神男神の御歌なりと料簡すれば無相違なり。此假名序のおもにては。いさゝかおほつかなきやうなれとも。後の義においては。眞名の序の説に符合する也。追可見合彼序。人の世となりて。すさのおのみことより。みそもしあまりひと

もしよみける。

人の代といへる事。心得かたき事なり。是も神代の昔の事なれば。いまた人の世と云へきにあらざるをや。されとも淺ましく出雲國にくだり給て。夫婦のわさをなし給ふ。是に依て人の代と云歟。すさのをはそさのなとも云。其讀兩様あり。みそとは三十。十をは古語にそとよむ。百をはなとよむ也。此神の歌より五七五七七の句はとゝのをりたり。如此五句をとゝのへられける根源は。ばかりかたき様なれとも。句のやす／＼ととゝのをりて詠しやすき。天然のことばりなるにや。眞名序には今の反歌の作なりと云々。此反歌に付て種々の義あるへし。公任卿の尺には短歌を反歌と云。此短歌は則今の三十七字也云々。此義又不審。そのゝちは古今集に長歌を短歌と云。依之長歌短歌は別而無差別。初の五七五の七五々々といくつもつゝけて。最結句に七々と止なれば。初終はかりをみれば。普通の卅一字歌なり。よみつゝけてみれば又長歌なり。其句五七五七々と。きれ／＼にあるうたは。短歌ともいはるゝ也。夫長歌をよみをはりては。反歌とて普通の卅一字の歌を一首讀加事あり。是は長歌の心をつゝめて。重てよむ故に是は反歌と云々。しかれとも今のそさのをの尊の御歌は。長歌のうへにそへられたる歌にはあらず。是に付て可案之。是に付するにイ可案之。假令歌の一首の中にて。其歌に八雲

たついつもやへかきと云て。末にやへかきつくるそのやへかきと云。上の詞を下にておしかへしたるゆへに。反歌といはるゝ歟。長歌心をつゝめて。別に讀たるを反歌と云。義かはりたれとも其心同なり。能々可料簡。可秘之。眞名序に。爰に人の世に及て此風大興。長歌。短歌。旋頭。混本類。雄舩非一。源流漸繁云々。四條大納言公任卿の注に。則是長歌なり。俗以長歌稱短歌。あやまりなり。短歌は三十一字なり。又稱短歌。旋頭は其餘未詳。可尋之。混本は旋頭歌の異名也云々。(行歌)顯昭註云。演成は式喜撰云。(式歌歌)萬葉集には長句の歌をもて長歌と名つくる也と云々。かかれは古來長歌短歌にとりて異説ありき。一決義なしといへとも。所詮長歌を短歌と云と心得て。其下にて兩義を可成にや。反歌とは三十一字なりと云ことは。さもやと覺たれとも。今案には卿相替へき歟と覺たり。長歌の奥の反歌の語を思に。普通の三十一字をもて。一向に反歌といはん事。いかゝ有へき。能々可思也。注にすさのをの尊天照太神の兄なり。是又誤なり。天照太神の御弟にてますを。御兄と云ことは。日本紀等に更に不見者也。或説には天照太神は女神にまします。女は兄弟をいはず。男子を兄といふかと云説あれとも。此注をそむかさらんために稱たる義。無其詞。

女とすみ給はんとて。

上に所謂稻田姫とすみ給し事なり。出雲國とは。八色の雲の
立たりしに依て。出雲といふ名出来なり。是よりさきに出雲
といふ名あるにあらず。日本紀にも如是事多し。やかて其つ
ゝきには八岐の大蛇の尾をさきて得給へりし劍を草薙劍と
名付とあり。草をなきし事は。遙に世下て倭武尊の御時の事
なり。しかと後の名を取て。やかて最初に書注せり。如此事
は非口傳しては轍不可知事也。
やいろの雲。

八色なり。但必しも八の品とは云かたし。只うつくしき雲の
立たるを云へるを。舊は何事をも七色とも八色とも。千重と
も百重とも書。必しも数のことくに七八千百にあらず。たゞ
ほめたる詞に用古風なり。八色。又の説には八尋と云へり。
この詞は不可用之由。京極入道中納言口傳に見たり。やへか
きことは宮つくりして垣を立たる心なり。古注には八重の
かきと尺す。不可然云々。是もたゞ垣のうつくしきないふな
り。八色雲の義同前。つまこめは女と此宮に住たまふ心なる
へし。

已上第二段畢。

第三段は神代の古風を事の初として。歌のさま／＼多くな
れることばりを云り。

花をめて鳥をうらやみ。かすみをあはれみ。露をかなしむ。

と云は。春の初に花を見鳥をきくより。秋のくれに露をかな
しむまで。おりにふれ時にしたかひ。感をもよなし。詞の端
となるいはれを云り。めてと云は愛する心なり。うらやみ
と云も同心なり。鳥のうたひ飛かけるをも。うらやむへきに
あらず。愛したる心をうらやむと云り。霞をあはれむとは。
憐愍の義には非ず。面白と云心也。然は今この序の詞にてみれ
は。あはれむと云ても不可違。但遊仙窟と云書に。可憐生と
かきておもしろしとよむ。しかればあはれむとも。おもしろ
しとは同心にあるへし。露をかなしむとは。秋の氣は人情か
なしましむる習なれば。暫草葉にをける露によせて。大方秋
のあはれなるよしをいへり。

心ことは多くさま／＼になりにける。

とは。人の世となりて。長歌。短歌。旋頭。混本等のさま／＼
の多傳れる事を云なり。

となき所も。いてたつあしもとよりはしまりて。年月をわた
り。

と云は。白樂天名詞に。千里始足下。高山起微塵と云り。此句
をひきよせてかけるなり。

たかき山もふものちりひちよりなりて。あま雲たなひくま
て。

と云。是も即上の高山微塵よりおこるを引寄たり。ちりひち

につきて。古來又異說等あり。ひちとは則微塵なりと尺す。是は微塵におこると云にすかりて尺せる歟。されとちりと云。重て微塵と云はん事無謂。是は悉く日本紀に沙汰せざる人の義なるへし。日本紀土をひちとよめり。所謂泥土_{ヌツ}と書。うちはうかへる土。すひちばひたる土を云なり。然は只ふもとの塵土よりなりてと心得たるか宜なり。微塵之義不可用之。又ひちとはよむへからず。いちとよむへしと云。是は宗匠の方の説也。可付此義なり。但日本紀に涅土の註に于毗尼とつけ。沙土の註に須毗尼と付たり。然はひちと云を正とすへき歟。是は今の案なり。かやうに歌の麥詞多。さまざまになれることを。喩にとりて言なるへし。

已上第三段畢。

第四段は歌の意ひろまれる中に。難波津。安積山。二の草歌の本となれる事を云り。人の代と成て多の歌相傳たるに。以此二首本とすと云事。聊不容なりと云へとも。古より用來れる事なれば。注にも強に其由緒をはあきらめざるなり。なにはつの歌はみかとのおほむ始なり。

注におほさゝきの御門難波にて御子ときこへける時。春宮をたかひにゆつりて。位につき給はて。三年に成ければ。王仁にといふ人のいふかり思ひて。よみてたてまつりける歌なり。此花は梅花を云なるへしと云々。彼云。なにはつに咲

や此花冬こもり今は春へと咲やこの花といふに。大さゝきの御門とは人皇第十七代仁德天皇御事なり。應神天皇第二の御子大鷦鷯尊と申は。應神天皇四十余人の御子ましましき。皇末の御子兎道稚皇子と申けるか眞愛したまひて。御位をゆつらんとおほして。先第一の御子を召て。事の心を仰たまひければ。うけかひ申さるゝ色なし。天皇悦たまはす。第二の御子大さゝきの尊に仰たまひければ。ともかくも可在徽慮之由そうしたまふ。天皇大に悦て。則皇末の御子太子に立給て。此君を補佐し奉へきよし勅し給ふ。其後天皇崩ぬ。第一の皇子亂を起し。春宮をかたふけ奉らんとす。第二の皇子此ことをなとり。春宮と心を同して。第一皇子を誅したまひぬ。爰彼春宮我は少年也。非器なり。依先帝之鍾愛。雖居儲君之位。君は高年なり賢王なり。早天位かつき給しと申給けれとも。第二皇子更に不承引。先帝の勅命已宣ぬ。吾爭みたりに此位をふむへきやとて。固いなひ給ふ。第二皇子は攝津國難波に座す。春宮は山城兎道にましけり。かやうに相讓て。春宮もつゐに位に即給はす。國々の御調物を春宮に特參すれば。可獻難波とて被返。難波に持參すれば。可獻兎道とて被返けり。かくて三年に成ぬ。其の年の冬例のこくとく御調物をかなたこなたに持參しける程に。極寒の比なりければ凍死する者有。爰東京世にあらは人の愁やむへからすと

て自殺し給。第二御子此事を聞給て大にをとりき。兎道にわたり給。皇子の御戸をいたきて。泣悲給事限なし。其とき皇子聊蘇生して。第二皇子に物かたりに後の事まで申給けり。兩皇子の御心け古にも類なく。異朝にも其例なき事なり。難有かりける御事なり。其後も第二皇子猶位つき給はて程を經にけるに。王仁といふ人。今は爭給ふへき所なし。いたつらに天位をむなしふし給ふ事もよしなしと思て。其時の事をそへて。此歌をよみて第二皇子をすゝめ申ける。大鷦鷯といふ御名は。此皇子の御産屋へ木兎と云鳥入たり。大臣の産屋へは鷦鷯と云ふ鳥入ぬ。天皇聞召て。君臣合鉢の奇瑞なりとて。互に彼鳥の名を取て。皇子をはさゝきと名付。大臣の子をは木兎と名付られたり。皇子位に即給て後。たふとひて大字を加て。大さゝきの尊とは申なり。王仁と云は百濟國のたてまつれる博士也。神功皇后新羅百濟高麗の多國をうちたいけられて御漢在り。使を被吟しより。彼土の文字書記此國につたはりけるを。百濟國に物しれるものなめして。此國の皇子以下諸人に學び習はせ給しより。たへす博士貢追去。王仁即其人なり。兎道稚皇子の御師にて。物をしへ奉ける人也。此歌の心は難波津には皇子御在所たるに依て是を云。この花とはむかしより異説あり。一には梅花と云々。今の注の義是也。此注は貫之か法とも。または公任の注ともい

〔奇歌〕
へり。又の説には大根の花とも云。是は孫姫は式といふ物に見たり。兩様の間定説を難知。然而古來の人梅の花の心に讀來り。此何様にも此花には非ず。木の花なり。此歌を奉りし後皇子位に即。都を難波に立。是を云高津宮。御門ためしなき程の聖主にまし／＼けり。ある年の春。高樓に登て四方を望み給に煙たゝす。仍天下の百姓の課役三年を止給。其後又登て見給ふに。煙たちにはきは／＼しくみへけるを悦たまふ。御歌に云。高きやに登て見れば煙たつたみのかまとはにきはひにけりと詠たまふ。重三年^{可説集}の御調を被止。宮殿はやふれたれともつくるはず。かくて六年^{七説集}を経て。天下の民君の德に感して。各御備を備宮殿をつくり奉けり。この君の徳政大概如此。八十七年天下泰平にして。四海なひき隨申せりとそ。此君の御歌なとそ尤本様にも申傳へりけるにや。然而王仁か詠たる所の歌をもて。末代に至る迄相傳者也。此歌に御門御初なりと云事の詞のたらしめ。御門の御爲に王仁こそ初たれば。詞共たらざるに相似たり。同注に春宮を互に讓てと書る又誤なり。帝位をこそ互にゆつり給けれ。春宮事は先にさたまりし事なり。

あさか山のこととは。うねめのたはふれよりよみて。

注云。葛城の王を陸奥のおくへつかはしけるに。國の司事をろかなりとて。まうげなとしたりければ。すさまじかりけれ

は。采女なりける女のかはらけとりてよめる歌なり。是にも
王の心とけにけりと云々。安積山とは陸奥國安積郡にあり。
山の名なり。葛城王と云人奥州へつかはされたりける時の
事なり。昔は國司各在國して。善政を行へき由の格式を被置
たれ共。猶より（憲法の勅使を遣して。國々を檢知せられ
ける。是を觀察使とも巡察使とも云。問民苦使とも云なり。
弘仁ころほひまてはこの事有。其後絶てなし。葛城王の下向
の時儀。年記不分明。萬葉に此歌をのせて云。あさか山かけ
さへみゆる山の井のあさき心はわかおもはなくにとて傳を
書たり。其心を取て今の注は載たり。此葛城王事。舊注には
左大臣諸兄と云人の本の名なり。此人は敏達天皇五世の孫
也。聖武天皇の御代に仕て。天平八年に叙從三位。同十年正
三位。即任右大臣。十一年正月に從二位。十五年正月從一位。
即任左大臣。感寶元年四月に正一位。是迄は猶王氏也。勝寶
二年正月始橘朝臣の姓を給はり。萬葉集も此人の撰なりと
云一説あり。付之案之。あさか山の歌の起は。此橘大臣の事
とおほえず。いかにも猶上古に同名葛城王と云人ありけ
るにや。其故は此大臣は人丸赤人等よりも後の人也。然は彼
等歌仙の詠歌を聞て。此王の相隨かふ所の采女か詠歌の本
様に成て。父母のこごとく習學へしとは不覺。隨て萬葉集に今
の歌の傳を書にも。昔の事のやうに見たり。此集は彼大臣の

撰ならは。尤可載彼子細歟。是則不當の隨一なり。古人萬葉
集は此大臣の載撰にあらさるかと云潤色にも。今の歌の傳
の事を疑たれとも。葛城王に別の人あるへきとは不疑。尤不
審也。又大和物語に。大納言なりける人の女。田舎人にとら
れて陸奥へ下て。あさかやまにして此歌を詠すと見へたり。
古より異説ある事なれば。葛城王事猶上代の別人といふ儀
可立にや。

うねめなりける女。

とは采女とはかけり。今は官女にこそ采女と云物はあれ。上
古には臣下のもとにも采女の號あるより。且萬葉集にも前
に有采女風流の娘と有。色ある傾城のことを言かとみへた
り。

かわらけとりて。

とは盃をとる心なり。万葉の傳には捧觴とかけり。上古には
かはらけなとを用ことはなし。然而彼代の風儀になすらひ。
此注にはかはらけとりてと云り。中古以來源氏狹衣等の物
語に。さかつきとりてとはかゝす。みなかはらけとりてと云
り。

このふたうたは歌のちゝはゝのやうにてそ。てならふ人の
しめにもしける。

昔は手習初にいろはなにて習ことはなし。仍此一首を習

そめけるにや。源氏物語にも。源氏中將にて童やみましなはんとて。北山におはしけるに。紫の上いまたおさなき程をみて。文をつかはしたりけるも。おほの尼うへかはりて。いまた難波津なとをつゝけ侍らぬと有。されは件の比は難波津なとを習けるといふことばしられたり。今のいろはは四十七字を連てあるへき程の文字をつくしたれば。近代は皆是をならふ。然而無常の歌なりとて。物忌なとする人は。今も天地星空なと云ものを習なり。いろはと云ことも。ちゝはゝと云様に事なり。古語には母をいろはと云。字の母と言心なるへし。

已上第四段畢。

第五段は歌に六義と云事あるへき様を云也。六義は異朝の詩に此心あり。異朝の詩といふ事も。上古には文字の数も不定。めのとゝのほる事もなし。此國の歌のやうなるへし。周の代といふし時に至て。詩の道盛に成にけり。集此詩三千餘篇ありけるを。孔子の時撰定せられて三百篇とす。今の毛詩と云書是也。此毛詩の序を孔子の弟子の子貢と云人書たるに。初て六義と云事をのへたり。其よりして詩に六義と云ことあり。此六義を立殿は彼詩を作る本意。君をも諫若はそしり。下をも教へ若は誠は。詩を作て物にそへなそらへ是を云。其面にはさして謗誠としもはなれとも。底にふかき心

をみせたるか故に。君としても此詩を見て即怒となければ。詩を作れるものにも其とかなし。漸是を見てその源心をさとり知ぬれば。自正に歸道となる。此故に昔の賢王の代には探詩の官を置。國の詩所々の歌にても是を取集て。詩學の博士を置て此道を盛にす。かゝれば此詩を取て物にたとへなそらへたる本意とす。この故に六義と云事は出来なり。我國の歌も又如此。百濟の王仁かさくやこの花とよみて。大鶴鷄の御門をそへ牽りしより事起て。六義の盛に成にけり。万葉集を被撰し時も。諸國に仰て。其國にあるを召集られたりき。仍万葉には春夏秋冬戀雜など部を分事なくて。一國の歌をさなから一所にかきつらねられたり。彼毛詩の跡に相似たり。抑六義の事異朝にも其義不一。極て心を得かたき事也。一義には六義各別にもあるへしと云り。一義には風雅頌の三は體なり。賦比興の三は義也。然は六義とて六に別る事あるへからすと云。此義は其謂あるに似たり。彼毛詩は第一の卷より第十卷の初に至まては風なり。諸國の風詩を集たるなり。十卷の半より十九卷の初に至まては雅なり。其中に大雅小雅の二の心あり。第十九卷の卷より二十卷に至まては頌なり。此風雅頌におゐて各賦比興の義はみえたり。然は兩義の中の後の義は正と云へきにや。今古今の序に貫之の書たる趣は。兩義の中の初の義によるかとみえたり。注

(尺牘)

は貫之か老後の所習なりといふ説あれ共。公任卿の書加たると云説。さもやと覺たり。此注の心は。兩義の中の後の義を見たるかと被推量なり。且公任卿の六義の注と云物別に

有之。其注に風雅頌は異舛。賦比興は異詞。以彼三詞成此三彩云々。この義大概今の注の心に相似たり。但公任卿今の注のことく。さばく^(一)と三の舛三の詞書別さるによつて。若此

序の注他人の所爲にやとおほつかなければとも。多分は公任卿の所爲と云也。此六義事。定家爲家卿までは随分さたせられたるとみゆ。而を近來宗匠の家。定家卿の如此の口傳を書

たる書二合あり。一合には上を鵜を木繪にして。一合には鴈を木繪とす。河うささ^(二)と名付て。爲家卿までは身をはなたさる物あり。爲家卿薨ける時。室家の尼阿佛局(爲相中納言母。謂安嘉門院四條局。)歌の文書を取て關東に下向す。其後嫡

子爲氏卿の訴訟に依て。龜山院御時。被下院宣於關東。彼文書を召渡さるゝ時。舊より目錄もあり。諸人存知の文章等は皆渡之。而をうささの箱の納物まては。爲氏卿も委知せざりけるにや。彼秘傳等^(三)を^(四)は是を留て。あらぬ物共を入て渡に

けり。此故にや爲氏卿來は六義等の事をも沙汰せず成ぬ。爲相卿方にも。密々には此口傳あるよし自稱しけれども。公家武家沙汰有て。文書を渡さるゝ時。此鵜鴈の箱の納物を被留たる事。依難露顯。あらばには不言之。然は道の陵遲不便事

なり。此六義にとて兩義有。其中に後の義は正説成かと思えたれとも。今の序を沙汰せしに取ては。初の義によて大概を心得わくへき也。

抑歌のさまむつなり。からの歌にもかくそ有るへき。

と云り。からのうたとは詩なり。詩をも訓には歌と云也。唐

にも歌の舛は別に有共。惣は詩歌共我國の歌に相似たり。からとは漢共唐とも宋とも。代はかはりうつれとも。此國より

しては彼國をさしてかくて云。其起は異朝の人初て此國へ

風にはなたれて來る事有。おほからの國の人と云。其よりいつくをも異朝をさしてはからと云。二新羅百濟高麗をもからと云。又鐘唐をもからと云此義也。歌とはうたふへき也。

そのむくさのひとつにはそへ歌。大さゝきの御門をそへたてまつるうた。難波津にさくやこの花冬こもり今は春へとさくやこのはな。

爲家卿口傳云。これ本意を面にあらはきて。よその物にいひ

あらはして。其心をうる歌也といへり。なにはつの歌の事は。先立て委く尺し畢。同口傳云。かゝる歌を風の歌と云也。

風と云は諷也。是は風の色は見えねとも。よろつの物にあたりて。風としらるゝ如に。風の歌は思ふことをこと物よりあらはす歌也云々。

ふたつにはかそへ歌。さく花におもひつくみのあちきなく身

にいたつきのいるもしらずてといへるなるへし。

注云。是はたゞことにいひて。物にたとへなともせぬ物也。此歌いかにいへるにかあらん。其心得かたし。五にたゞこと歌といへるなん。是にかなふへきこと云々。此注に先^(は懸)にいへるか如く。貫之か老後の所爲とも云。又公任卿の口傳ともいへり。爲家卿の口傳には。賦の歌とは連歌の賦物などの事也云々。此前後の注につきても。舂を詳^(に賦)す云のへたり共不覺。但公任卿六義の注に。賦と云は直に其ことを陳て不比喩者。法賦詞也。是は文選等にある賦の舂になぞらへてよむへしと云心也。喩は物にたとへなとせて。直に其事をいひてきたらん歌を賦の舂といふへきは。詩にもかゝる姿あまたあるへし。さく花に思ひつくみのあちなき身にいたつきのいるもしらずてといへり。思ひつくとは愛する心なり。いたつきとは勞とも煩とも云。花におもひつき。時をうつし日を送る程に。身にいたつくことをしらするかあちなしと云心なり。爲家卿口傳に。いたつきと云しりいたる矢にいられたるをしらぬ程に。思ひつくと云心也。又つくみと云鳥をいると云説あり。不可用云々。又同口傳にはいたつきは勞なり煩也とも尺せられたり。三の説はいなくあたりたりとも不覺也。今案には。歌の面は先にいへるかことく。はなに思ひつく程に。身にいたつきのある事を云ふなり。こゝにはつ

くみと云鳥を。いたつきにていたる事をよめる歌也。舊より如此の尺なし。尤不審。今如此料簡する謂は。拾遺集の物名部を見るに。此歌は老伴黒主かつくみをかくし頰にてよめる歌也云々。此事可秘之。

三になぞらへ歌。君に今朝あしたの霜のおきていなは戀しきことに消やわたらんと云るなるへし。

注に云。此歌よく叶へりともおほへず。たらちねのおやのかうこのまゆこもりいふせくもあるかにもあはすて。かやうなるやこれとかなふへからんと云々。此二の歌をよくよく^(可懸)一料簡也。爲家相傳云。比の歌とはたくらへ歌なり。物を二いつれも同様なりとたくらふる歌なり。本歌云。君にけさと云々。是はきみに別て命の消ぬへきにたくらふるなり。凡此卿の口傳の心には。古注の心には不停して。本文のことくに義をたつへき本意也。古注の心は。比と云は。物をならへてそれかやうにあると云へし。たとへはいもにあはぬと。いふせさのおやのかうこのまゆこもりの様にあると云へし。本文の歌は朝の霜のおきていなはと云て。詞に引よせたれとも。髓になぞらへたりと不見事を疑歟。爲家卿口傳の心は。我命の消ぬへきことを。霜の消ぬへきになぞらへたる故に。是も比の舂にかなへると云なるへし。

よつにはたとへうた。我戀はよむともつきしありそ海のはま

の眞砂は讀つくすといへるなるへし。

注云。是は萬の草木鳥獸につけて心を見する也。此歌はかくれたる所なんなき。されと初のそへ歌とおなしやうなれば。すこしさまをかへたるなるへし。すまのあまのしはやく煙風をいたみおもほぬかたにたなひきにけり。此歌なとやかなふらんと云々。本文に引載たる歌。誠に比興の間差別なきに似たり。但注にいたせる歌も。更風舂に不相似やうに分別するにや有けん。おほつかなし。爲家卿口傳云。是は物を二ならへて。何れも似たりといへとも。しかも各別の形を見るなり。風比興はあれもたとふる方ありといへとも。風は心と心をたとへ。形と形とたとへ。興はたとへてしかも各別する。このかはり目也。本歌云。我戀はよむともつきしと云々。此口傳の心は。風比興を聊さまをかへて料簡す。誠に本文をもさうかきすして。しかも三の品を各別したる事尤其興あり。假令今の興の歌をたとへてしかも分別すといへるは。ありそうみのほまのまさこの數よりも。我戀のよみつくすましき事をよめる。たとへてしかも各別するに成なり。如此口傳古より以來多まされとも。最實儀はいひおほせられぬなり。風と云は國々所々のふりなるへし。相摸歌。陸奥歌。伊勢歌なといへる舂の事也。雅と云は中國の舂なり。頌と云は君の徳をほめて神明に告歌也。此風雅頌の上にすく／＼と其

心を云て。物にたとへなともせぬは賦の舂なるへし。物に擬して而も我志をのへたるは比の舂なるへし。然はきみにけさの歌も。おやのかうこの歌も。よむともつきしの歌も。比の舂をは出かたし。興と云は。上には心をあらはさすして。草木鳥獸につけていへとも。底には心をふくませたる歌なるへし。難波津の歌。并すまのあまの鹽やく煙の歌。ともに興と云へきにや。毛詩には興爲本。されば二重三重の興の舂あり。深く可尋之。假令三重の喩と云は。毛詩に雌鳩と云鳥の物ねたみせぬ女をたとへて。可様ならん女を求て。わからん女を我夫にあはせはやと云ことは。おほろけにあるまじき事也。夫物ねたむ心なくして。而も我夫に志のふかきに至なるへし。此詩の面には夫婦のあいたを借て。雌鳩の物嫉せぬに喩たれとも。底の心に忠臣のきみを思たる事を云へり。かゝれば重々喩になるなり。

いつ／＼にはたゝことうた。偽のなき世なりせばいかはかり人のことのはうれしからましといへるなるへし。

注云。是は事の心たゞしきないふ也。此歌の心更不叶。越うたとや云へからん。山櫻あくまで色を見つる哉花ちるへくも風ふかぬまにと云々。此注の心極て難得其心。山櫻の歌の舂也と云ことも。何様の料簡そや。又偽のなき世なりせばはの

歌非雅舛。而もとめ歌なるらんこと難得其心。爲家卿の口傳云。雅の歌と云はたゞこゝ歌なり。是は物にもたとへずよせす。すくすくとよめる歌なり。無別子細。本歌云。僞のなき世なりせばと云々。

凡雅の舛には事さらさま／＼あるへきか。されとも大概は時の事さば／＼と云て。其心さしをのふへきか。古賢の説に。晴天見月。寒夜聞鴈舛を雅の心なりともいへり。然とも毛詩には雅にも物にたとへたる詩きはめて多。上にいへるか如。雅は中國の風にて。臣下の君にたてまつりて。其心をのへ。君の下を教て。其法をたれ給ふ事に。あらはに云事もあるへし。物になそらへて云事もあるへしと心得ぬれば無相違。然而六義を各別に可立之由の口傳方にては。爲家卿の口傳のまゝに心得て可讀也。とめ歌とは。同卿の口傳に。物のうすきをとむる様の事也と云々。世の中人の心は朴なるへきに。僞のある事のほひなしといへるか。物をとめたるになると云心なるへし。此櫻の歌は兼盛か詠也。依之此注は非貫之所爲と云也。

むつにはいはひうた。この殿はむへもとみけりさき草のみつ葉よつはにとのつくりせりと云るなるへし。

注云。是は世をほめて神につくるなるへし。此歌いはひ歌とは見へすなんある。かすかのにわかなつみつゝ万代をいは

ふ心は神そしるらん。是等やすこしかなふ〔へからん。〕凡六種にわかれん事は。えあるましきことになんと云々。爲家卿口傳云。頌の歌。是はいはひ歌也。いのる祝は祝と書ほむるいはひをば頌と云也。本歌云。この殿はと云々。先古注に國神と云ことをよみかんきやうに見へたる。必ずしも不可然か。噲神明告とも。其德をほめ祝言をのへて。志ないはん事は頌の舛なるへし。詩の頌の義如此。しかれとも此殿歌をもいはひ歌と不見といへる。更不得其意。又爲家卿口傳に。祝と頌とを各別にする。何様の本説によれるにか。尤不審也。今の序の本文に。六にはいはひ歌とかきて。頌の字をやかていはひ歌とよませたり。公任卿の注には。頌はいはひ歌の舛のみと云り。然ば頌は其外不可差別。而この殿の歌は催馬樂にうたふ所のこのとゝ即歌也。さきくさのみつ葉よつはの事。舊より異説あり。常には幸種とて。幸をはさきとよむ也。くさとは種也。草にあらず。此幸種は檜木を云也。此殿をつくりひろげたると書也。三は四はとは三棟四棟とかく。屋のむねのあまたある心なるへし。又説にはおけらさきくさと云。此草の葉三葉四葉あり。三四月の程に花さく草也。此草の三葉四葉なるやうに殿作すと云りといへる。或説に三枝とかきてさき草とよむ。年中行事四月有之。三枝の登とて。三枝の花を以神を祭る事あり。若此更かと云。然と

も多分は檜木の説によれる也。古注に凡六種にわかれん事はえあるましき事になんといへる。これ風雅頌を舛として。賦比興を詞とするによつて。六のしなを分たん事はかるへきに依て。序の本文に六種にわかつてる事を不甘心して云へる也。公任卿專此義をしるせる。依て今の注をも彼人の所爲かと云。眞實難治定事也。

已上第五段畢。

第六段は世くたり時あらたまりて。人の心花に成行に依て。歌道昔にかはれることを云也。大かた今の人の心。かやうに道のひろまり盛に成たるとおもへるは。還而衰たるとなる也。唐の歌も如此。昔の詩は少句もとゝのほらす。韻聲さる事もなかりしかとも。その心ふかく其義正しかりしによつて。道盛なりし時とはいふなり。漢の時に五言七言の舛もさたまり。梁の世に初て四聲を分て。唐の世となりて格律の體起て。詩の姿詞大にさたまりて。聲をもにかへ格をも忘れれは。詩にあらすとおもへり。此事還而古風にそむき。道を忘れたるなるへし。歌道もやくもたつ出雲の古。難波津安積山の昔は。心詞朴にして。やかて人の心を感じしむる道也。世下てはこの歌の道衰て。昔のやうにあらぬ事をいふ也。色このみの家にむもれ木の人しれぬ事となりて。

といへるは。好色家以此歌爲花鳥之傳。乞食客以此道爲活計

之媒と云かことし。君をも諷。神にも告て。すなほなるへき道を。色にふけるかたに引なして。あたなることのほのみ(荷敷)おもへる事のあやまれるを云なり。むもれ木の人しれぬとは。うつもれてあらはれかたき也。

まめなるところには。花すゝきほにいたすへき。

といへるは。まめやかに正しきなり。まめやかなると云心なり。かゝる所に上に云所の歌をいひ出しかたきことを。花芒ほに出ぬやうにあるとたとへていふなり。

已上六段畢。

第七段は立かへりて歌道のだしかりし昔の事をのへて。今の世のいろ花に成ぬる事を誠なり。

そのはしめをおもへは。かゝるへくなんあらぬ。

と云は。則此こゝろ也。

いにしへのよゝのみかと。

とは。強に時代をさゝす。上古の賢王聖王の世に久しく國を鎮め給し時。此道の正しく。歌の姿も花ならさりし世をいふなり。

春の花のあした。秋の月の夜。

是は花月のおりをすこさず歌を令獻。情をのふるを見給ふ事をいふなり。

さかしおろかなりとしろしめけん。

と云は。此歌をよめる各心はせに。賢愚の性みゆへき事なれは。さかしきをは賞し。愚なるをは退くるによつて。人此道をおそれゆるかせにせず。此故に歌の道正にして不邪。漢朝にも近まで課試及第とて。詩をつくらしめて及第しぬれば。即官を給て昇進の初とす。此にも儒中には其跡あれと。今は有名無實の事なり。昔は歌をめして人をこゝろみしめ給ける。和漢の古風一なりと云事可知也。

已上七段畢。

第八段の心は。上には古の御門の歌の道をもし給しことなのへ。此段には世中にある男も女も高も賤も。又此歌をもて各志をのへ。心をもなくさむる道とす。謂をいへる也、しかあるのみにあらず。

とは。かはともかいとも書。如此あるのみにあらずといふ心なり。不然と云にはあらず。是より下にかたにいへる詞。みな本歌を引よせて書たり。

さゝれ石にたとへ。

我君は千代にやちよにさゝれ石のいばほと成て昔のむす迄君か代はといふ本歌もあり。

つくは山にかけて君をれかひ。

筑波根の此面かのもに蔭はあれと君か御蔭にしく蔭もなしよろこひ身にすぎ。たのしみ心にあまり。

うれしきを何につゝまん唐衣袂ゆたかにたてといはましをふしの煙によそへて人をこひ。

人しれぬ思ひをつねに駿河なるふしの山こそ我身なりけれ松むしのれに友をしのひ。

君しのふ草にやつるゝ古郷は松むしのれそかなしかりける高砂すみのえの松も。あひおひのやうにおほへ。

かくしつゝ世をや盡さん高砂の尾上にたてる松ならなくに

われみても久しく成ぬすみよしの岸の姫松いくゝ経ぬらん

あひをひとは松の生あふなり。昔の友と思ふと云心なり。

おとゝ山の昔をおもひ出て。をみなへしの一時をくねるにも。

歌をよみてそなくさめける。

今こそあれ我もむかしは男山さかゆく時もありこしものを

秋のゝになまめきたてる女郎花あなかしかまし花も一時

女郎花うしと見つゝそ行する男山にしたてると思へは

これらのうたをとりあはせてかける詞也。

春のあしたに花のちるを見。

空蟬のよにもにたるか花櫻咲と見しまにかつちりにけり

秋の夕に木の葉のおつるをきゝ。

秋風にあへすちりぬるもみちばの行衛さためぬ我を悲しき

あるは年ことにかゝみのかけにふれる。雪と浪とをなげき。

むは玉の我くる髪も年ふれば瀧のいとゝそなりぬへらなる

波にたとへたる歌。此集の内には見へず。瀧の糸のうたを引よせてよめるにや。

草の露水のあはを見て。我身をおとろき。

露をなとあたなる物と思ひけん我身も草におかぬはかりそ水の泡の消てうき身といひながら流れて猶もたのまるゝ哉あるは昨日はさかへをこりて。時をうしなひ世にわひ。

世の中は何かつれなる飛鳥川きのふの淵はけふの瀬になるしたしかりしもうとくなり。

此集に此心のうた不見。

あるは松山の浪をかけ。

君をおきてあたし心をわれもたば末の松山なみもこえなん野中のしみつなくみ。

古の野中の清水ぬるけれどもとの心をしる人そくむ

秋萩の下葉をななめ。

秋萩の下葉色つく今よりやひとりある人のいねかてにする曉のしきのばねかきをかそへ。

曉のしきのばねかきもゝばかき君かこぬよは我そかすかくあるはくれ竹のうきふしを人にいひ。

世にふれはことの葉しけき呉竹のうきふしことに營そなくよしの川をひきて。世の中をうらみきつるに。

吉野川よしや人こそつらからめはやくいひてしとは忘れし

流れてはいもせの山の中に落るよしのゝ川のよしや世の中今はふしのやまゝ煙たゝすなり。なからのぼしもつくるなりときく人は。歌にのみそ心をなくさめける。

教長卿注云。世中の昔にかほることをたとへ云なり。富士山は煙のたゝぬ所の。初てたへなんとせんは。よくかはらんするなり。なからの橋はふりて久すてたるを。あたらしくつくらんやうの心なり。如此世中あらたまり行とも。歌をよみて心をなくさむといはんれうなり云々。常には此注の如くに料簡するなり。今の宗匠の家に。富士の煙に付て。不立不斷の二義をたてゝ。不斷の説を用也。此義は富士の山のけふり昔より今にたへぬ物なれば。不立といはん事不可然。仍不斷の義を用也。不斷をたへすと云常の義也。拾遺遍昭歌に。唐錦えたに一むら残れるは秋のかたみなたゝぬ也けるともあり。又堀川院百首に公實公の歌に。年をへて要木こりつむすみかまのけふりをたゝぬ大はらの里云々。かやうにあまた不斷かたゝすとも云事もあれば。富士の山の煙の不斷といはん事にたかふましき事なれとも。此序の詞のつゝきやう。不斷と云ては更に難得其心。いかにも已前教長卿注の義にてや叶へからん。又或説には。富士の山の煙の其比たへにけると。なからの橋の朽はてたるをも其比つくりけると。かやうに世中うつり行事を見聞ても。歌にて心をなくさむる

と云々。此義はさへ／＼と聞ゆるやうなれとも。なからのはしつくりたる事無と云々。その所見には。拾遺集に。天曆御時御屏風に。なからのはしの橋柱はつかに残れるかた有けるを。藤原清忠か歌に。あしまよりみゆるなからの橋柱むかしの跡のしるへなりけり云々。延喜の御時つくられたらん橋を。かやうにはいふへからず。然者ふしの山の煙も其比たゝぬかと云説も難用之。只あらましに云かといへるか宜か。然而宗匠の家に不斷の義を頗に被執之上は不及異義。

已上第八段畢。

第九の段は。此歌の道奈良の御門の御時よりひろまりて。其比をひ人丸赤人なと云歌仙のありし事をいへる也。

いにしへよりかくつたはるうちに。ならの御時よりひろまりける。

此ならの御時よりと云事。此序を沙汰するにとりて。難義の其一なり。其故は人丸は持統文武御代の人なり。ならの御門とは。元明天皇の御代より桓武天皇の初つかたに至て。七代の都也。持統文武は大和國藤原の宮にまし／＼き。如此二代をは藤原の御門と申す。元明天皇和銅三年藤原宮よりならの都へうつりたまひける。

飛鳥のあすかの里をゝきていなは君かあたりはみえずかもあらん。此御歌萬葉集にも有。新古今にも被入たり。然は和

銅三年よりあなたは。藤原宮にまします也。萬葉集の第一の卷に。藤原の宮の御宇の天皇の御代に。柿本朝臣人丸於石見國臨死之時自傷て作れる歌。かも山のいはれしまける我をかもしらすていもか待つゝあるらんと見たり。然らばならの遷都以前卒去する事無疑。同集に持統天皇に奉る歌。又文武天皇に奉る歌も有。即大寶元年紀伊國に御幸しける時。つかうまつりてよめる歌も有。然は大寶元年以後。和銅の遷都以前に卒したる人也。此序にならの御時とかける事。更に不得其意。且はたつた川紅葉流の御歌も。文武の御製なるへし。而を此集の秋の下にならの御歌なりと注す。旁不審。此ゆへにや。定家卿は此序にも。奥のみちの御歌所にも。ならの御門といふ所を押而。文武天皇としるしつけられたり。又或説には人丸はならの御時にも有之。即拾遺集に人丸もろこしにてよめると云歌もあり。又伊勢のみゆきにまかり留て詠ると云歌も有。又ならの御門をおさめ奉るをみてよめる歌も有。此事いかやうにも拾遺集の誤歟。柿本人丸入唐すと云事。すへて此所見。天平勝寶年中に。上つ道の^{無誤}人丸。玉手の人丸と云者遣唐使たりと云事有之。人丸の同名をもて。姓迄も不分別して。やかて柿本人丸歌とかゝれたる歟。古人の所爲なれとも。極て如此事の之有。何様にもならの御時也と云は僻事也。但貫之物書くに。大和國を奈良と書たる

事有。此集の夏の部に。ならの石上寺にて。郭公の啼を聞て

よめるとて。素性歌。いそのかみふるき都の時鳥聲はかりこ

そむかしなりけれ。石上はならにはあらず。山邊郡に有。な

らの都は添の上郡に有。郡の境大に相隔たり。されともなら

の石上と書。假令今の京よりもさき代々の都なりしに依て。

大和の方をならと云るか。但是は強潤色を加料簡也。大略は

誤と云へきにや。

かの御時におほきみつのくらぬかきのもとの人丸。

柿本とは姓氏錄云。敏達天皇の後也。家門の前に柿の木有。

仍而柿本云々。もと本とも下とも二やうに書也。此人正三位

と云事。昔より疑之。公卿補任などにも不見之故也。但是は

あなかちの難敷。上古補任は現任ばかり載せ。散位をば不書

之歟。

うたのひしりなり。

とは歌仙と云ふ心也。

これは君もひともし身をあはせたとといふなるへし。

とは君臣合睦の心也。

秋のゆふへにたつた川になかるゝ紅葉。

とは。立田川紅葉みたれてなかるめりの御歌也。是は文武天

皇の御製也。

春の朝よしのゝ山のさくららは。人丸か心には冬になんおほえ

(雪敷)

ける。

と云は。人丸萬葉集に多見えたれ共。吉野の花を雲にまかへ

たる歌無之。只吉野の櫻を雲にまかへたる長歌は二首まで

見たり。若此歌を本として。雲かとのみおほえけるとは。貫

之書なせる歟。若又別に此歌あるか。古來の不審なれば。不

及委細。

又山邊のあか人といふ人有けり。

姓氏錄云。山邊は垂仁天皇の後也と云々。此赤人はならの御

門に仕たりとみゆ。聖武天皇神龜三年の秋九月に。播磨國印

南野に御幸給時。つかうまつりてよめる歌とて。萬葉集に見

えたり。然ば是は人丸の後までも存生しける人なり。官位等

不分明。

人丸は赤人か上にたふん事かたく。赤人は人丸か下にたふん

事かたくなありける。

とは。勝劣なしと云心なり。其に取ても人丸の上にいふこと

を不書。且人丸をば此道の先師と尊ふか故に。無上の歌仙と

云へきなり。其におとらぬほととの赤人といふなるへし。注に

ならの御門の御歌一首。人丸歌二首。赤人歌二首有之。是は

貫之か所爲歟。後人の所加歟。古來不審なり。

この人々をおきて。くれ竹のよゝにきこえ。かた糸のよりく

にたえずそ有ける。

とは。是は人丸赤人の外にも。歌讀の多かる里をいふなり。

已上第九段畢。

第十段の心は萬葉集を撰せし故をいふ也。是より先に撰集と云事不聞。歌道の盛なる事は上古の風義。定て神妙の道に可叶歟といへとも。かやうに集撰せられたる事は不聞之也。これよりさきの歌をあつめて。萬葉集と名つけられたり。

といへる事。前後の詞相違するに似なり。奈良の御時。此道を盛にし給へる人丸赤人等の歌仙も。此時にむまれあひたるとみゆ。隨而此集もならの御門の御製も。人丸赤人等の歌も入たるに。これよりさきのと云事。何なる故にかおほつかなし。

こゝにいにしへの事をも。歌の心をもしれる人。わつかひとりふたりなり。

と云る。是は又上の人丸赤人等か事を云るかともみへたり。舊注にも此事不慥。若又萬葉集を撰ける比の撰者なとを。名をは不呈して。かやうにかきたる歟。

これかれえたるところえぬ所。たかひになんある。

於人丸赤人等。其得失を云に不足事歟。

かの御時よりこのかた。年はもゝとせあまり。代はとつきになんなりにける。

此事強に歌の道にとりて。ことなる才覺にはなけれども。此

序に取て第一の難儀。昔より沙汰しかれたる事也。まづ萬葉

集につきて被撰ける時代異義多し。一には聖武天皇。二には桓武天皇。三には平城天皇なり。先此序の上に取て三の様なり。古よりかくつたはる内にもと云て。其下に文武天皇の御うた。人丸か歌なとを出し。それより云くたして。萬葉集を撰らるゝ由見えたるは。さて桓武の勅撰などおほしけれども。其代は更に不立。如先段藤原都とならるの都の御代に撰せられたるへし。是に付て又いつれの御代そといふ事おほつかなきを。彼御時より以來〔年號〕はもゝとせあまり。代は十つきになんなりにけると云。かくて彌又不審出來也。今此古今集を被撰事は。人皇六十代醍醐御門の代をしるしめす事九年。延喜五年四月の事也。是よりかみ代は十つき。年はもゝとせなかてふれば。五十一代平城天皇。御在位十七年。次文德。御在位八年。清和天皇。御在位十八年。次陽成天皇。御在位八年。次光孝天皇。御在位四年。次宇多天皇。御在位十年。次醍醐天皇。御即位の後九年。合すれば十代。年は百年にあたる。此序に百年あまりとかき。眞名序には時曆十代。數過百年と云り。百年あまりとも。百年にすくとも云に取ては。若又平城天皇の勅撰といふ事は。すへて不審事。彼御世百年はかりの事はさすか程遠きに。貫之なとさはくと云あかさる事極て不審。但貫之よりかみつかたにも。分明に

しれる人すくなかりけるかとみゆ。清和貞觀の御時。文屋有季と云者をめして。萬葉集はいつばかり作れるそとはせたまひけるに。神無月時雨ふりおけるならのはの名におふ宮の大こと(古歌)とそれと奏し申ける。平城より清和まては五代五十餘年なれば。君もかほとうたかはしめ給へしとも覺えず。又名におふ宮と奏しければ。疑なくならの都の時の勅撰なるよしを奏しけるにや。先の段に書くことく。元明天皇三年に平城の宮に遷給て。桓武天皇延暦三年に山城國長岡の京に移り給しまて。八代の間はならの都と云也。第五十一代の平城天皇は御名は平城天皇とは申せとも。在位時ならの京にはまします。御父桓武天皇先長岡にうつり給て。十年より今の平安城に遷たまふ。其後桓武崩して。平城位に即て。すなはち此新京にまします。四年有て。御弟嵯峨天皇に讓申給て。ならの舊京に迁すみたまふ。其後寵愛し給ひける尙侍藥子。其弟兵衛督仲成等かすいめ申によつて。世をみたらむとし給ふを。坂上田村丸等を追討せらる。奈良坂にて合戦ありき。上皇の戰無程破ぬ。藥子仲成等皆伏討。御子の春宮高岳と申しもすてられ給ふ。上皇をはよしの山におし籠申されて。然而崩して後の御名をは平城天皇と申す。平城の都にて代をしろしめしたる君にはまします。惣而此君の御在位四年の間に萬葉集を撰れ。又誰人の仰を承て撰と

云事。更に無所見。只此序に年はもとせあまり。代は十つきと云に事起て。平城天皇の勅撰かとはいふなり。ならの都の七代の間には。聖武御代殊に盛にして諸の道を興し給き然は疑もなく聖武の御時の撰なりとみえたり。聖武は位をさらせ給て。御女孝謙天皇の御時の撰なりとも云。大方かきおかしめたまひたる物とも出し給ふを云也。此假名出來て(此假名出來て)後。男女貴賤みな此かなかきを好用けるに依て。古様の萬葉かき等の物。更によみたやしにけり。仍勅撰の時代にも。明にしる人なかりける歟。且貫之さしと此道に達したりけれども。萬葉集をはよくも見さりけりとみへたり。且今の古今集。萬葉にいらぬ古歌を被撰たりと。此序には載なから。彼歌多く入たり。又萬葉集の歌を入ては。ある人のいはく。是は柿本人丸かなりなとおほくしけに書たり。爰に知ぬ彼萬葉集を明に見さりけりといふ事は。されはさしも殊勝なる古今集に。更古射の歌不相交之事。不容する人も有き。何様にも殊喜比をひは。此萬葉集は打置て不學の物に成にけり。村上天皇の御時。源順と云人和漢識者也。於文道は家を興す名儒なれば不能左右。歌道に取ても名望異に他(他に異)ければ。後撰の撰者として。梨壺の五人の隨一たり。仍此萬葉集を讀ときて奉る。猶も智分の不及事をは。靈佛靈社に詣て祈申けるとそ。少々相殘て後代の人のよみ出したることもあれとも。皆

順か驢尾につきたる事とも也。是よりして萬葉集をは人の見弄ける物といへとも。依事繁大概計所宜なり。

已上第十段畢。

第十一段者撰萬葉以下。其名ある人々の事を書て。かの歌に得失ある事を云り。此事又序の大事。惣しては歌道の簡要なり。古より歌仙多といへとも。貫之爲道宗匠。而を此人盡心力して。歌人の歌の舛におきて。さま／＼の喩を取て是を判せり。心あらん人よく／＼に等して。其心をうる物ならは。得失をしり。自道の本主に相叶歌をも可讀出也。されはいくたびも此判の詞と彼等か歌を見合て可了簡。其上に此集にある貫之か歌とも書ぬきて。其舛を見意得て歌をよむへし。いにしへのことをも歌をもしれる人おほからず。

とは。歌人雖多其名。まめやかに道をしれる人まれなる事を云り。

つかさくらわたかき人をば。たやすきやうなれはいれす。

高位高官の人歌にも。其得失あるへけれども。御心をなして此判には不載と云なり。

ちかき世に其名きこえたる人。

とは。延喜以往の近代を云なり。

僧正遍昭。

俗名良峯宗貞。其父安世と云しは桓武天皇の御子なり。而を

閑院左大臣冬嗣に給て其子とす。然而更に姓を良峯と賜。大納言大將に至。宗貞其子也。仁明深草の天皇の御時。左右なき近臣にて。五位の少將にて補藏人頭。天皇崩給ければ。即入慈覺大師室。出家して大眞言師となる。有驗の譽世に聞えければ。文德天皇の御時。御惱の事有けるによつて。被召て參内して。加持し奉るに法驗揭焉なり。仍法眼いく程ならず越任して僧正に成なり。是延暦寺に被住僧綱の初也。出家の人なりしかと。前唐院の拾封の宣旨を蒙て。慈覺大師の聖教も此人管領しけりとて。元慶寺と云所に住す。又此所を花山と號す。仍花山僧正とも云也。歌の舛事は不及注尺。留心能々可見之。(以下館閣)にも平城の宮の御宇太上天皇とのみ有。事平城宮と御自稱もありし也。世繼といふ物語に。昔高野女舛の御代に。天平勝寶九年に左大臣橘の卿の家にて。諸卿大夫等集て萬葉集を撰たりとかく。國史等の正文にはあらされとも。此世繼物語も一條院の比書たる物なれば。空事をかくへからず。かくて聖武の御撰に治定すれば。代は十六代。年は百八十余年になる。此序の十つき百とせあまりには又不符合。眞名序の歷十代過百とせとかく。假名序に百年にあまりといふに付て。古人會尺して十六代を十代と歴(を數)とかき。八十余年をもとせを過と書かとも云。文章にかゝる事もあれとも。若は一二代。若は十年の内の事、それあれ。十

六代百八十余年の事を如此かくへしとは不覺。所詮聖武の御勅撰に治定すべきならは。此序の説は誤なるへし。次萬葉撰者の事。左大臣橘諸兄。中納言大伴家持等が勅を承て撰する所歟。諸兄は天平寶字元年に薨したる人也。此集に此人の年々の歌あまた入たるに。寶字四年以後のうた無之。又家持は參議中納言迄は昇たれとも。此集には左大辨までの歌見たり。又此集に帝王の御歌を入事十四代に及たり。先十二代をば諡號載奉る。聖武孝謙二代をば只御製御歌など書り。依之彌聖武の勅にて勝寶の比撰られたりと云こと治定する也。大かた聖武の御撰なりとも。延喜の比までばさまで遠しとすへからず。而を心うつくしくふみうしなひて。更に人のみさるものに成にけり。假名といふ物は嵯峨の御時弘法大師書。

在原業平。

平城天皇の御子阿保親王と申人おはしき。此親王の御子あまたありし。中納言行平并此業平等是也。業平は右近五郎とも云。仍阿保親の五男なりと云説あり。これに付て舊より異説有。五男なりと云とも。必しも太郎次郎と云ことやあるは。(へはるる説)此人に限て五郎中將と云へきに非ず。是は昔おさなくに五節に出仕しけるに。無四度計てふところ櫛をおとしたりけるを。かたへ殿上人共笑て節の君と云ける。櫛をおとしたり

けるを櫛の君とも云ける。櫛の字の篇を略して。五節の節に返して言出したりけるを。其後に又かくし題に。節の字のさうかうをのけて即とよひける。其より五郎中將と云。随分秘説の由口傳すれとも。強これ程に叶へりとも不覺事也。但昔も勸修寺朝忠と云し人。殿上人の中にて五郎と發言したりけるを。父三位右大臣定方の聞て勘當したりける。有故事歟。此中將色を好む心甚て。特にしらるゝ事多かりき。伊勢齋宮に密通す。第一勝事也。又二條后のいまた姑の五條后に同宿の時。又密通しけるほどに。せうとの人憤てもとよりを切てけり。其長髪の程奥州の方に下向すと云云。此人のふるまひさまくゝの事共あれ共。伊勢物語などの才覺なりぬへければ略之。

文屋康秀。

眞名序には文琳とかけける。是は彼康秀か異名なり。眞名序を奏覽の本にあらずと云所見には。遍昭を花山僧正とかき。業平を在原中將とかき。康秀を文琳と書。是等を此説とする也。(此康秀事は委不見歟。)

宇治山の僧喜撰は。よめる歌おはく聞へれば。かれ是をかよはしてよくしらす。

と云々。此喜撰宇治に隱居のよしそみえたれ共。明にいかなる人とは聞へず。但光孝仁和御門の御時。奉勅て和歌の式を

作進と云々。然は歌仙譽有ける段勿論。然而よめる歌多からぬ事太不審也。又名字に付ても異説有。孫姫と云人又歌の式を作るに。讓僖基泉と云人をふたり出して讓僖か歌にそ今の我座はの歌をのせ。基泉。木のまよりみへつる谷の螢か。いさりするあまの海へ行かも。又樹下集と云ものに喜撰か歌とて。けかれたる歌たふさはふれし極樂の西の風ふく秋のはつ花と云々。是等喜撰か詠と云事。古來の説あれとも。又無實説。其よめる歌おほよきこへぬよし。實之書留たる上は。わか庵の歌の外はあるましきや。而を爲兼卿玉葉集を撰する時。喜撰と治定して此歌を書入たり。無故實之至。第一失錯也云々。

なのゝ小町はいにしへのそとほり姫の流也。

なかれとはよます。りうとよむ也。小野小町か事不分明。仁明承和の比の人。出羽郡司か女。國色無双の人也云々。或説に。弘法大師の作らしめたまふ玉造といふ物なり。是玉造の小町と云者。むかしは色形はなやかなりしか。老衰たるさまを詩につくらしめ給たる也。然而小野。玉造。其姓各別の上。他人たりといふ事無疑。いかさまにも老後は沈淪して。奥州の方にて令死去頼。實方朝臣下向の時に。ふるき首の目の穴より。薄の生出たりけるをみて。とりのけたりとも言也。衣通姫とは應神天皇御子二流の皇子と云人の女也。其姉は人

皇十九代允恭天皇の后也。其妹容顏絶妙にして。其色衣にとおりて照かゝやきけり。仍衣通姫と云。天皇きこしめして。使をつかはしてめされければ。皇后に憚申て不參給。七たびまでめされけれど。猶いなみ申されければ。御使中臣鳥賊津と云人。七日迄不食して。庭中に伏して憂歎申けるほとに。不得止してまいり給ひけり。後に和歌の浦に跡をたる。是を玉津島明神と申也。又住吉四所神殿の中に。此明神其一とす。昔の歌の道を好給けるに依て。今も此道をまもる神にましますと云々。又或抄云。玉津島明神奉崇給事。家々に云様有。それも無謂。當流所習は。光孝天皇御惱有し時。御祈禱ある曙に。赤袴着たる女房枕に立て云。立かへり又も此世に跡たれん其名うれしきわかのうらなみと。御門御夢に見へければ。夢中に誰人そと問給ふ。衣通姫と答たまふ。仍仁和三年九月十三日。右大辨源隆行勅使として。和歌浦玉津島の社を造立して。次信遍上人勸請して奉崇本地聖觀音。是妃和歌浦に垂跡事は彼立歸の歌に見たり。續古今後京極攝政歌。いか斗わかの浦風身にしてみて宮はしめげん玉津島姫。新後撰爲家。あとたれしものちかひを忘すはむかしにかへれわかの浦なみ。御門を戀奉せ。我せこかの御返事。小車の錦のひもをとときかけてあまたはれすなたいひとりのみ。又説云。我せこに三義あり。若男。我男。和男。(たはやかなる義也。)

わかせこかくへき宵なりさゝかにの蜘蛛のふるまひかねてし
るしも。是は允恭天皇末皇子にておさなくおはしましし時。

仁賢の姫宮をあはせ奉らんとしけるを。允恭衣通姫に思つ
き給て更不用給。世にわひたる身にておはしけるを。允恭忍
てかよひたまひけるを。允恭の父仁徳天皇制してゆるした
まはす。恐ましまささりければ。奉戀給て。姫の家にぬき置
給ける允恭の御衣を。彼御かたみと思てきまします。允恭戀
給魂蜘蛛と成て。彼着衣の中にはいり居たり。捨とも又は入
ぬ。たましひ成と心得て。定來給はんすらんとて讀給ふなり
云々。小野小町おもひつゝの歌は業平を戀ひてよめり。色み
へての歌は。大江惟章か妻となりし時。心かはりして。藤原
朝行か嫁に成ける時によめる歌也。文集の心をよむ。白居易
龍珍也人好色にして。心一方ならさりしな作て送云。悲不還
空人之心。似山花易教。(散歌)わひぬればの歌。文屋康秀三河掾に
下時。可具之由云時返事也。

大伴黒主。

是は志賀の黒主とも云。園城寺地主也云々。仁和の初つかた
まて存生。彼之時大嘗會の和歌を獻するよし見たり。或説に
は陰陽の人歟。後撰集に志賀の唐崎にて祝して。祿にあつか
るよし見たりと云々。已上人詠歌并得失の次第。先々云
かこつく。道の大事にて。貫之力を入て尺したる事なれば。

能々料簡して。歌の昧をは思分へき事也。
此はかの人々その名聞ゆる。

と云り。そのさましらぬなるへしと云にいたるまでは。近き
代に取ても。多歌よみあれとも。上の人々には及ばし。歌の
道にも深からぬよしを云なるへし。

已上第十一段畢。

第十二段は延喜の御時。此古今集を被撰し事を謂をのへた
り。

すへらき。

天皇とかく也。上古には尊ひてはみことと申。人代と成て
は。天日嗣を受給ぬれば。すへらともすへらきとも申す。兼
てみこととも申す。中古よりはみことと申事はたえにけり。
又すへらとは大八洲國を管てしろしめ御謂なるへし。但萬
葉集にはすめろきともよめり。詞の通するなるへし。

あめのしたしろしめすこと。よつの時こゝのかへりになん成
にける。

とは。此御時天下をしろしめして。九年に成ぬと云心なり。
寛平九年に讓を受たまふ。同十年に改元。昌泰元年とす。同
四年に改元。延喜元年とす。同五年四月に此集を撰調られし
也。うちまかせては。御門の天下を治たまふを。讓を受給ふ
次の年よりかそふる也。然は八年と云へきを。受禪の年を加

へて九年と書也。是も非無其例。此御門御年十四にして譲を受給ふ。聰明叡哲にましくて。萬の道に興しをこなひ。絶たる跡をつきたまふ。仍自萬葉集以來。歌の集なと相つく事なかりしを。かやうに集撰て。後代の龜鑑となしたまふ。されは萬葉集は上古集にて。珍重すへき事なれとも。世もあかり人も朴にして。歌のさま今の世にあはぬ事とも多し。仍歌を學はんと思はん人は。此集を見明て不可如爲本。此中に取ても。寛平已後の人の歌のさまをこひれかふへきよしを。定家卿なとも被口傳たり。こひれかふへき也。

あまれきおほんうつくしみの浪。やしまの外までなかれ。ひろきおほんめくみのかけ。つくは山の麓よりもしけくおはしまして。

と云々。是は眞名序には仁流秋津洲之外。惠茂筑波山之陰。

洲變爲瀨之聲。寂々閉口。砂長爲巖之領。洋々滿耳。此句と同心なり。凡先段にも如載。允眞名序をかゝせて。此を等代に

(上段)

して。假名序を作ると説も有。或又假名序をみて。眞名序を撰しかくとも云。此眞名序は紀納言息大内記淑望か筆也。此

淑望は又貫之か筆也。前後之間は誠雖知之。一家之内にて相

談して書事は無疑。且此兩序を見るに。眞名序を本にして書

かと見たる所も有。或は又假名序の起なうつしたるかとも

ゆる所も有。何様にも此眞名序文殊華麗也。就中に今の仁流

秋津洲之外句妙也。今までも和歌序をかゝんに。此卦をおもはへて可作云々。且句の卦は淑望も雖書得之歟。依之父紀納言子息の名を假て書之歟とも云り。八洲の外迄なかれとは。初段に云所の大八洲國の事也。此大八洲に取て。日本紀に神代あまたの異を載たれとも。其中には大日本豊秋津洲。淡路洲。伊豫。筑紫洲。壹岐。對馬。隱岐。佐渡。此云八洲之說慥なるへし。且舊事本紀と云書に。此八の洲に各神まします也。日本紀には此神の御名まては不載。筑波山麓よりとは。常陸國に有山の名なり。彼山を詠せる歌は。先段にも所載。筑波根のこのもかのもの歌を引たる也。彼歌にも麓と云事はなけれ共。今の序には上におほんめくみのかけと云によりて。下に麓と云。このもかのもとは此面彼面なり。又此方彼方とも云。同心なり。延喜五年四月十八日云々。本朝帝紀と云物には。四月十五日と云説有。又十八日は初て勅を承し日なりとも云。或は又奏覧の日なりとも云。古より兩説有。紀友則。同貫之。凡河内躬恒。壬生忠岑は。時にとりては此道の達者として名望異に他なり。仍淺位凡卑に不拘。其撰に應しける也。此四人に仰て。ふるき歌をも。又時の歌をも。みつからるまでも献つらしめけれとも。まめやかに撰定する事は。貫之一人か所爲なり。此集を被撰ける時。大内の承香殿の東なる所にて撰之。近代和歌所と云事は是よりして起。村上の御

時。後撰集も昭陽舎にて撰之。此舎を梨壺と云。仍其時の撰者をは梨壺の五人なと云。是は皆被_レ和歌所之初也。又今

虫出

七年十三年等の歌入之。依之五年四月は仰を承始に

て。奏覽は後年の事也と云。俊成卿説に。其俊云。四月十八日上覽の日也。後の歌入條は。優美に不堪して入之云々。萬葉集にいらぬ舊歌云々。此事如載前段。萬葉の多入之。不審之事也。

それか中に梅をかさすよりはしめて。

とは春の部の事也。梅の歌よりもさきに立春の心。霞。殘雪などを詠したるをこそ入たれとも。時のけいふつにとりて。梅花はことに色も香も其艶あるに依て。梅をかさすより初てとはいへる歟。

ほといきす。

とは夏の部。

紅葉をみり。

とは秋の部。

雪をみるにいたるまで。

とは冬の部。

つるかめによそへて。君をおもひ。人をもいはひ。

とは賀部。それよりさしこしつて戀部事を云。

秋はき夏艸を見てつまをこひ。

といふ是也。又た^(ち等)い歸て別の部の事を云。あふさか山にいたりてたむけをいのり。

とは是なり。

あるは春夏秋冬にもいらぬくさゝの歌。

とは雜部なり。又旅。哀傷。物名。雜部などの事也。部を立る次第は前後不同なれとも。大綱を取て。かやうに書たるなり。

すへてちうたはたまき。なつて古今和歌集といふ。

千首廿卷といふ也。但現在の歌千九十九首なり。是に付て兩説あり。一には九十九首を略して。大數を取て千首と云^(歌)。

物をかく習如此。貫之勅か承て歌を部類せしは。土佐守に任

て。國に下向したりける間に。延喜御門かくれさせ給。仍不及奏覽して。新撰となつて私の家の集にしたる物あり。そ

の序に貫之自筆たるに。昔延喜の御宇。屬世之無爲。四人之

有慶。令撰萬葉集外古今歌一千篇云々。然は揚大數千首と云

事。前後説同之。又の説には。此集の面に貫之か歌九十九首

有。貫之奏覽の時。自の歌を不入して。古今の歌千首を奏覽

す。御門貫之歌をめし御覽して。九十九首を令撰出給て。此

集に被書入に依て千九十九首有。今は序は初にみつからの

歌をのそきたる時の事也。古來の兩説たれ共。上所謂大數を

とれりと云事は。其謂あるかと見へたり。新撰集の序の心も

符合する故に。今の序にも自の歌をも奉しめ給てと書なから。一向に我歌を除けん事不審也。所詮彼説は貫之歌の九十九首あまりたるによつて。料簡して云出せる事歟。匿名序には。各献家集并古來舊歌。云續万葉集。於是重有詔。部類所奉之歌。勅爲二十卷。名云古今和歌集。此序の如は。先續万葉集と云物を被撰。重て撰定せしめて。古今集と云と見へたり。

然る今の假名序に其由を不記して。直に此集を被撰し由を載たり。又件續万葉集と云物今は世に不見。但舊さまには。今の万葉集を皆古万葉集と云。然は續万葉集のならひてありけりとみゆ。但菅家の新撰万葉集と云ものもあれば。彼に對してもや古万葉集の號ありけん。おほつかなし。此新撰万葉集は菅家御存日の事なれば。古今以前に流布する事無疑。かくのことくえらひあつめられて。山下水のたえず。はまの眞砂の敷おほくつもりぬれば。今は飛鳥河の瀬になるうちみちきこへす。さゝれ石のいはほとなる悦のみそ有へき。

と云々。是は此集のおされて後の世までにつたはり。君の御うつくしみのひろきか故に。人のうらみもなく。悦のみあるへきよしを云て。上段々の心を決する也。あすか川の歌は先段に所載也。世中はなにかつれなるあすか川と云心をと。さゝれ石のいはほとなるは。我君はちよにやちよの歌を引よせて書たり。

已上十二段畢。

第十三段は貫之等か自謙の詞を書也。かやうの物を書には。自謙の句とて。其身の器にあらされとも。此事を承。忝も恐もある謂を書のふる也。

まくら。

臣等と云心なり。教長卿注には。まくらことは常と云詞なり。枕草子なとて。常に手ならず物也と云々。此説は大なる誤なり。顯昭注には丸等也。誤てまくらと書かといふ。是も誤歟。所詮舊さまには臣等をまくらと云ける歟。教長卿説にては枕詞とよみつゝくへしと云々。是は不可用之。まくらとよみきつて。こと葉春の花とよむへきなり。又或本貫之等共書たり。

春の花にほひすくなく。

とは。詞の花の匂ひなきことを恥ち。

秋のよなかきをかくつ。

とは。虛名の世にきこへたることを恐れたる詞なり。是より

この事の時にあへるをなんよろこひぬる。

と云に至まで。皆自謙の句の一つゝきなり。是よりしもつかた。

人丸なくなりたれば。

と云より序の終に至まで。又一段なれとも。大綱自謙の句の

中に攝するもくらしみならねば。眞名序は此詞を自謙の句末に書留たり。人丸(在脱)なくなり(在脱)にたれと云詞。左傳と云書の序に。文王既没而文不(在脱)此也と云句をおもひよそへて。人丸既没ぬと書。是は歌の方より貫之書出へしとは覺す。然ば眞名序土代とすると云義に符合するにや。此ふるき詞を思よせてかきたる。殊勝なれとも。近代は可有憚事也。古人所爲なれば。時によつて斟酌するを。口傳とも古實とも云なり。たとひ時うつり事さ。たのしみかなしみゆゑかふとも。

と云々。此詞公方へむけたることなとに。今の世には更々不可書之。昔はかやうの事大様なり。近代と成ては。如此の事をよく辨へて可書之。是はかやうに序なとて書つらぬるのみにあらず。歌を牽らんにも。詞ことに能々思慮して。後難なき様に可詠也。

このうたのもしあるをや。

とは。文字の事なり。

あをやきのいと。松のはのちりうせすして。

といふより。

いにしへを仰て。今をこひさらめかも。

と云に至まで。第十二段の末にいへることをかきて。此集の世にとまり。道を弄けん輩の歌のさまをしり。事の心を得へきやうを書も。此序を書留たるなり。

右古今之鈔者甘露寺殿伊長卿之筆。而又元長卿少々加筆。有勸考之本。希有落予手。舊本頗有虫損等。如元書寫畢。

一本云

此注則後村上院正平年中。仰中院入道准后(親房公)而被注。仍宗匠(二條定家)據拾於諸家多說所註也。則先師中書大王(宗良親王。宗匠爲世仁外孫)加一見而上奏之。相傳之畢。

燭雲子釋竺源惠梵

本云

應永卅二年臘月廿八日。於燈下終寫功手。斯注本相傳當流。口傳等書加。隨分爲證本之處。依令失却。而重拭老眼馳禿筆訖。此本未校本也。烏焉馬謬雖有之。先寫而畢。重可加校合也。

竺源叟 行年 六十五

私云。竺源惠梵者兵部卿師成親王之法名也。新葉集載其倭歌。可爲南朝之皇胤。(未詳。)按。凡皇子之名。中古以來以某字爲行字。仁明皇子之康字。文德之惟字。清和之貞字。醍醐之明字等之例也。故後醍醐之皇子皆以良爲行字。寬成。熙成。泰成等。是村上之子也。皆以成爲行字。則師成亦爲後村上之子。

一校了

續群書類從第四百五十三

和歌部八十八

古今和歌集隱名作者次第

春上 廿四首

春かすみ

雪のうちに

梅か枝に

こゝろさし

野邊ちかく

春日野は

み山には

かすか野の

あつさ弓

さみかため

もしちとり

基經。國宣公是也。

二條后。

眞房。忠仁公これ也。

同。

二條后。

同。

染殿后。

貞元親王。

同。

仁明御門とも又寛(元歌)奉天皇是也
小松天皇。

冬嗣公。関院と申。

をちこちの

おりつれば

色よりも

やと近く

むめの花

梅か香を

ちりぬとも

やまたかみ

山さくら

石はしろ

あたなりと

ちりぬれば

おりとらは

猿丸太夫。

延喜天皇。

良房。

助内侍。

惟喬親王。

七條中宮。

眞房公。

伊東内親王。養子母。

同。

朱雀院御うた。

紀ありつね女。

猿丸太夫。

文德天皇御うた。

春下 十八首

春かすみ

惟喬親王。

まてといふに

二條后。

残なく

助内侍。

このさとの

家盛。家持男也。子の事を申也。

うつせみの

同。

さくら花

元良親王。醍醐院皇子。もとよししんわうと申。

春の色も

良房公。

はることに

貞仁公。(信成) 忠基事也。

花のこと

元良親王。

吹風に

助内侍。

まつ人も

染殿后。

鶯の

助内侍。

吹風を

仲平娘。(いもうと)

駒なへて

良房公。

ちゝ花を

同。

いまもかも

延喜天皇御うた。

春さめに

良房公。

山吹は

諸兄卿。(諸兄)

夏 十二首

さつきまつ

猿丸太夫。

五月まつ

なりひら。

いつのまに

二條后。

けさきなき

延喜天皇御うた。

夏山に

七條中宮。

ほととぎす

伊勢。

時鳥

猿丸太夫。

おもひいつる

同。

聲はして

同。

あし曳の

七條中宮。

いまさらに

助内侍。

こそ夏

二條后。

秋上 三十七首

わかせこか

藤原内膳。冬前之父也。

昨日こそ

定明親王。

秋かせの

長盛。

久かたの

人丸。

あまの川

右大臣つらゆき。

こひくゝて

良相公。

木のまより

二條后。

おほかたの

猿丸太夫。

わかために

七條中宮。

物ことに

延喜天皇御うた。

ひとりぬる

伊勢。

いつはとて

伊勢。

しら雲に

延喜天皇御うた。

さ夜中と

つらゆき。

あき萩も

同。

秋の夜は

染殿后。

君しのふ

同。

秋の野に

是貞親王。仁和弟也。

あきののに

良房公。

もみち葉の

仁和天皇御歌。

日くらしの

同。

ひくらしの

猿丸太夫。

我門に

重明親王。

いとばやも

能有。

春霞

人丸。

夜なさむみ

同。

奥山に

猿丸太夫。

秋萩に

仲原家光。

あき萩を

仁和天皇御うた。

秋はきの

平城天皇御歌。

なきわたる

同。

萩のつゆ

平城天皇。

おりてみは

家持。大納言旅人男。

萩かはな

同。

みとりなる

延喜天皇御うた。

もし艸の

猿丸太夫。

月草に

山邊
赤人。

秋下 十六首

きりたちて

長良。公嗣公男。

神な月

家持。

ちはやふる

冬嗣公。醍醐院。

あきの露

七條中宮。

ちらねとも

良方。さひ

秋きりは

是貞親王。

色かはる

家持。大納言旅人男。

さほ山の

人丸。

こひしくは

猿丸太夫。

あきかせに

清和天皇御うた。

秋はきぬ

貫之。

ふみわけて

清和天皇御うた。

秋の月

吹かせの

ほにもいてぬ

かれる田に

冬 十首

たつた川

おほそらの

夕されは

今よりは

ふる雪は

この河に

ふるさとは

わかやとは

けぬかうへに

雪ふりて

賀 十一首

わかきみは君か代は共いふ也。

わたつ海の

しほの山

わかよはひ

春日野の

山高み

保忠。八條中納言

猿丸太夫。

三條町。

聖武天皇御うた。

七條中宮。

家持。

助内侍。

仁和天皇御歌。

長經。

平城天皇御歌。

桓武天皇御歌。

天武天皇御歌。

寬平天皇御歌。

橘清友。

左大臣時平。風宣公一男。

良房公。

二條后。

滿子内侍。

躬恒。

めつらしき夏。

住の江の秋。

千とりなく同。

秋くれと同。

しら雪の冬。

離別 九首

すかるなく

かきりなき

たちちねの

から衣

えそしらぬ

あかすして

かきりなく

かきくらし

しゐて行

羈旅 二首

宮こいて、

北へ行

物名 八首

あなうめに

秋はきぬ

友則。

みつれ。

同。

忠岑。

つらゆき。

大伴旅人。これと、よみ候也

なりひら。

有常女。紀

仲平娘。紀

利貞娘。

七條中宮。

敦慶親王。宇多院御子。

伊勢妹。

四條后妹。

聖武天皇御歌。

利貞女。有龜孫。

七條后。

友のり。

かくはかり

人めゆへ

ふりはへて

ありとみて

うつせみの

花ことに

戀一 七十一首

ほととぎす

しるしらす

かたいとを

夕くれは

かりこもの

つれもなき

ちはやふる

わかこひは

するかなる

ゆふつくよ

あし曳の

よし野川

たきつ瀬の

山たかみ

助内侍。

同。

此四首作者不分明由申置候也。

守平親王。延喜第六皇子。

内侍。

文德天皇御子
弘世王。もろよの大きひとよみ候也。

在原滋春。

延喜天皇御歌。

七條中宮。

良門。中宮大夫。

つらゆき。

昭宣公。

平七條中宮。

貞文。

藤原二條后。

敏行。

つらゆき。

おもひいつる

ひとしれす

秋の野の

わかそのゝ

あしひきの

なつなれば

戀せしと

あはれてふ

おもふには

わか戀を

あさちふの

ひとしれぬ

思ふとも

いてわれを

伊勢の海に

いせのうみの

なみた河

種しあれば

あさなく

わすらるゝ

から衣

如覺。九條右大臣師輔子、俗名高光。

貞信公。

惟喬親王。

忠平公。

昭宣公。

國經。中納言。

なりひら。

助内侍。

業平。

宇多天皇御うた。

貞盛女。

伊勢。

みつね。

平中興。なかとよみ候也。

昭宣公。

貞元親王。

陽成天皇御うた。

藤原忠仁公。

藤原忠房。

堀同。

長盛。

よひ／＼に
こひしさに
人の身も
しのふれば
こむ世にも
つれもなき
行水に
人を思ふ
思ひやる
夢のうちに
こひしれと
なみた川
戀すれば
篝火に
かゝりひの
はやき瀬に
おさへにも
あし鴨の
人しれぬ
とふ鳥の
あふ坂の

貞利。
同。
橘忠。はとこずと忠此一字をよみ候なり。
長朝。
昭宣公。
陽成天皇。
こまち。
紀
文幹。
國經。中納言。
忠仁公。
二條后。
陽成天皇御うた。
昭宣公。
橘
長盛。
帥内侍。
惟喬親王。
伊勢。
有常。
忠岑。
藤原
仲平。
宇多天皇御歌。

逢さかの
うき草の
うち詫て
こゝろかへ
よそにして
春たては
あけたては
なつむしの
夕されは
いつとても
秋の田の
あきの田の
人めもる
あはゆきの
おく山の
戀二 十四首

基康親王。
定國娘。
藤原
公俊。
昭宣公。
藤原
惟岳。
延喜天皇御歌。
后宮。
同。
大立
惟章。
橘
廣通。
忠仁公。
つらゆき。
染殿内侍。
藤原
仲平。
小町。又は二條后よりへり。
つらゆき。
同。
同。
同。

河の瀬に

わひぬれは

わりなくも

戀しきに

よととも

夢路にも

秋なれは

年を経て

月かけに

戀三 廿五首

よるへなく

いたつらに伊勢物語に有。

あはぬ夜の

かねてより

こりすまに

こひくて

しのゝめの

ほとゝきす

玉くしけ

君やこし

むは玉の

同。
中原
行基。

聖武天皇御歌。

併良親王。

當純。

宇多天皇御うた。

惟喬親王。

なりひら。

ふかやふ。

眞雅僧正。

なりひら。

人丸。

躬都良。人丸男也。

聖武天皇御うた。

招子内親王。

文德天皇御歌。

法眼定海。山田皇子御子。

同。

招子内親王。文德天皇御子。

人丸。

さよ深て

君か名も

名とり川

よし野川

こひしくば

おもふとち

おもへとも

たきつ瀬の

わかこひは

おほかたは

池にすむ

あふ事は

むら鳥の

君により

戀四 四十首

みちのくの

あひ見すは

いしま行

伊勢の海士の

あすか川

思ふてふ

同。

天智天皇御歌。

紀真成。

二條后。

仁明天皇御歌。

頼雄二女。近江守。

忠房朝臣。

つらゆき。

しける。

平城天皇御歌。

兼輔。

定海法眼。

重明親王。

仁和天皇御歌。

在原基平。行平男。

躬恒。

二條后。

宇多天皇御歌。

玄清女。法印。

寛平天皇御歌。

さむしろに

君やこむ

月よゝし

君こそは

宮木のゝ

あなこひし

津の國の

御よしのゝ

かくこひん

あまのはら

あつき弓

さと人の

おほぬさの

すまのあまの

玉かつら

たかさとに

いて人は

いつはりの

いつはりと

うつせみの

あかてこそ

うち橋姫。

景式王。かけのりの大まみとよみ候也。

常康親王。

染殿后妹。

光明皇后。光后ともかき。

幽仙法師。

助内侍。

天智天皇御歌。

惟喬親王。

紀多。
親正。

天智天皇御歌。

大江干さと。

こまち。

なりひら。

遊子内親王。唐和唐宮。

素性法師。

猿丸太夫。

家長妹。

宇多院御歌。

干さと。

兼明親王。

わすれなんと

わすれなん

たえす行

しら川の

くれなゐの

おもふより

冬の色に

めつらしき

かけろふの

ほりえこく

まてといはゝ

あふまての

かたみこそ

戀五 四十一首

みてもまた

はなかたみ

うきめのみ

あきならて

すまのあまの

山しろの

あひみねは

なりひら。

關雎。

大經皇子從四位下兵部大夫
東人。天平の頃の人なり。あつま人。

雅定朝臣。

染殿后。

眞雅僧正。

敏方。

天武天皇御歌。

昭宣公。

仁德天皇御歌。

玉淵女。

源
有國。小町姫かたへとあり。

平
顯惠女。

良相女。

なりひら。

八條弁。飛脚女。

文
ありすゑ。

延喜御歌。

七條中宮。

あかつきの

たまかつら

わか袖に

山の井の

わすれ艸

こふれとも

夢にたに

こめやとは

いましはし

今はこしと

月よには

うへていにし

こぬ人を

ひさしくも

水無瀬川

世中の

こころより(こを懸)

われのみや

いまばとて

あはれとも

身をうしと

（こを懸）
齋光。

深達父女。

みつね。

宇多院御歌。

平城天皇御歌。

二條后。

衣通姫。

景式王。

貞辰親王。

敏行朝臣。

嵯峨天皇御歌。

仲平大臣。

（高世）
高世。

名虎女。

行平朝臣。

世中の

こころより

言子内親王

二條后。

滋春。

同。

それをたに

あふ事の

わひばつる

夕されは

わたつみの

あらを田を

ありそ海の

あし邊より

しくれつる

秋かせの

あきといへは

わすらるゝ

なかれては

哀傷 五首

あしひきの

なき女の

たれみよと

かすくゝに

聲をたに

雜上 三十二首

わかうへに

伊豆内親王。

染殿居。

名虎女。

齋光女。

宗善女。

季光女。

余平。

眞女親王。

澄運少將。

二條后。

七條中宮。

光孝天皇御歌。

（小松天皇御歌也。）

嵯峨天皇御歌。

七條中宮。

同。

桓武皇女。

春元女。

なりひら。

藤原

兼輔。

經繼。

忠仁公。

中納言朝行。

文仲親王。

藤原

清經。

大田

行房。

紀

良岑。

長成。

惟貞。

同。

忠岑。

平城天皇御歌。

同。

家持。旅人男。

忠仁公。

諸兄。

家持。

勝臣。

定國。

貞元親王。

大伴

黑主。

能有。近院右のまはいうちさ
み也。右大臣の事を申也。

なりひら。

聖武天皇御歌。

人丸。

高藤女。

重明親王。

同。

黑主。

雜下 三十三首

世中は

いく世しも

かりのくる

あはれてふ

あはれてふ

世中の

よの中は

世の中に

山さとは

よの中は

忠仁公。

平城天皇御歌。

仁明天皇御歌。

滋春女。近藤青柳にぞくれて讀るとなん。

伊勢。尼に成てよめる也。

二條后。出家後大原野にてよめるとなん。

新田王子。

高市親王。

忠仁公。

二條后。尼に成ての事となん。

世中を

同。

みよしのゝ

同。

世にふれば

文德天皇御歌。

いかならん

重明親王。延喜御子。

あし良の

天武天皇御歌。

世中の

雄略天皇御歌。

よにふれば

放答親王。

木にもあらず

高津内親王。桓武御女。

わか身から

高世親王。

としを經て

仁明天皇御孫世の、ちよみてたてまつりけるとなんなりひら。

野とならば

二條后。

われをきみ

昭範女。中御言

なにはかた

兼輔。藤原

いまさらに

染殿内侍。

いさこゝに

仙人の歌となん。三輪

わかいほは

明神御歌。

あれにけり

嵯峨天皇御歌。

世の中は

惟貞親王。

あふ坂の

こまろ。

かせのうへに修行之時。

降禪諸親王。延喜第十番御子也。

風ふけば歌に万葉。

有常女。

高御寮へいなり
たかみそき

わすられん

雜體

短歌

旋頭歌 三首

うちわたす

返し

春されば

はつ瀬川

誹諧 三十首

むめの花

秋くれは

あききりの

花とみて

いその神

枕より

こひしきか

ありぬやと

みゝなしの

あしひきの

おもへとも

人丸。大立
惟平。

阿保親王。養父

昭宣公。基經事也。

陰季。

惟喬親王。

つらゆき。

阿保親王。

同。

崇。たかとも又あかむこりよみ候也。

平貞文。

昭宣公。

同。隆原

隆行。

玄賓僧都。かんひんそうつとよみ候。

昭宣公。

ことならは

おもふてふ

思へとも

われをのみ

われを思ふ

いてゝゆかむ

くれなゐに

いとほるゝ

うくひすの

さかしらに

まめなれと

なけきをは

人こふる

よひの間に

うへにとて

世の中の

なにをして

梅のはな

世をいとひ

大歌所御うた 十七首

おほなほひのうた 五首

四條后。

二條后。

經繼。

景式王。

平好風。

有常女。

是清女。

廣定。

其世王母もとよの大おほきみのむすめとよむへし。

通時。

貞文。

つらゆき。

染殿内侍。

二條后。

行平朝臣。

同。

國經朝臣。

あたらしき

しもといふ

あふみより

みつゝきの

しはつ山

とりものゝうた 七首

神かきの

しもやたひ

まさもくの

みやまには

みちのくの

我門の

さゝのくま 返しものゝうた 五首

あをやきを

まかれふく

美作や

みのゝ國

君か代は

東歌 十三首

あふくまに

作者無之。

同。

行平朝臣。

作者無之。

同。

聖武天皇御歌。

同。

美材。

平城天皇御歌。

聖武天皇御歌。

同。

忠仁公。

日神。

親長。

仁明天皇御歌。

當純。

玉淵。

大丘。

大丘。

大丘。東人歌。

みちのくは

融左大臣。

わかせこを

伊勢。

おくらまき

純

みさふらひ

諸兄。

もかみ川

中原

仲時。

君をしきて

源

雄。

さかみうた

藤原

經信。

こよろきの

ひたちうた

つくばねの

源

同。

つくばねの

能有。

かひうた

源

まさすみ。

かひかれを

同。

いせうた

おふのうらに

延喜天皇御歌。

此一帖はしめて撰出者也。

努々他見あるへからさる由申。

永正六年三月日

法印堯智

撰集作者異同考

代々撰集大臣諱名考

古今集

前太政大臣

菅原朝臣

東三條左大臣

河原左大臣

近衛院右大臣

左大臣

後撰集（與前集名號全同者略之。已下倣之。）

菅贈太政大臣

贈太政大臣

太政大臣

閑院左大臣

比巴左大臣

左大臣

北邊左大臣

拾遺集

小一條太政大臣

小野宮左大臣

一條攝政

（藤良房。冬嗣公二男。）

（聖廟。）

（源常。嵯峨第三子。）

（源融。嵯峨第十三子。）

（源能有。文德第二子。）

（藤原時平。昭宣公一男。）

（聖廟。）

（時平公。）

（忠平。諡貞信公。昭宣公四男。）

（藤原（冬兼）嗣。内膳三男。）

（仲平公。昭宣公三男。）

（藤實賴。清慎公。貞信公一男。）

（源信。嵯峨第一。）

（貞信公忠平。）

（清慎公實賴。）

（藤伊尹。謙德公。九條師輔一男。）

三條太政大臣

(藤賴忠。康義公。實賴公一男。)

西宮左大臣

(源高明。延喜第一。)

東三條太政大臣

(法興院兼家。九條師輔三男。)

栗田右大臣

(藤道兼。攝政兼家二男。)

左大臣

(藤道長。兼家公四男。)

後拾遺集

堀川太政大臣

(兼通。忠義公。九條右大臣二男。)

入道攝政

(法興院兼家。)

入道前太政大臣

(御堂關白道長。)

法性寺太政大臣

(爲光。恒光公。^(德盛)九條師輔九男。)

宇治前太政大臣

(賴通。法成寺道長男。)

閑院太政大臣

(公季。仁義公。師輔公九男。)

帥前內大臣

(藤伊周。儀同三司。中關白道隆一男。)

堀川右大臣

(藤賴宗。法成寺關白二男。)

土御門右大臣

(源師房。具平親王男。)

關白前左大臣

(師實。號京極。宇治賴通二男。)

左大臣

(源俊房。師房公一男。)

右大臣

(源顯房。師房公男。)

內大臣

(藤師通。京極關白師實公男。)

金葉集

六條右大臣

(源顯房公。師房公男。)

太政大臣

(源雅實公。顯房公一男。)

攝政左大臣

(藤忠通。法性寺。知足院忠實公男。)

內大臣

(源有仁。花園。輔仁親王一男。)

詞花集

六條前太政大臣

(藤師實公。宇治關白一男。)

贈左大臣

(藤長實公。修理大夫顯季男。)

花園左大臣

(源有仁公。)

太政大臣

(藤實行公。春宮大夫公實男。)

關白前太政大臣

(法性寺忠通公。)

內大臣

(實能公。公實卿二男。)

右大臣

(源雅定公。久我雅實一男。)

千載集

法成寺入道前太政大臣(道長公。)

後二條關白內大臣

(師通公。京極師實男。)

法性寺入道前太政大臣(忠通公。)

大宮右大臣

(俊家。號小野宮。堀川賴宗男。)

堀川左大臣

(俊房公。)

久我太政大臣

(雅實公。顯房公男。)

八條前太政大臣

(實行公。公實卿男。)

中院右大臣

(雅定公。雅實公男。)

德大寺左大臣

(實能公。公實卿二男。)

大宮前太政大臣

(伊通公。堀川宗通公男。)

後三條內大臣

(公教公。實行公男。)

大炊御門右大臣

(公能公。實能公男。)

久我內大臣

(源雅通公。雅實公男。)

入道前關白太政大臣

(基房公。法性寺忠通二男。)

入道前太政大臣

(師長公。宇治顯長男。)

攝政前右大臣

(兼實公。法性寺殿三男。)

左大臣

(經宗公。贈相國經實公男。)

右大臣

(藤實寬公。公能公男。)

內大臣

(藤良通公。九條兼實公一男。)

新古今集

貞信公

(忠平。)

清慎公

(實賴公。)

謙德公

(伊尹公。)

忠義公

(兼通公。)

廉義公

(賴忠公。)

東三條入道攝政

(兼家公。)

法成寺入道攝政太政大臣(道長公。)

京極前關白太政大臣

(師實公。)

宇治前關白太政大臣

(賴通公。)

二條前關白內大臣

(師通公。)

(私云。千載稱後二條。此集無後字。與大二條可混乎。)

知足院入道前關白

(忠實公。後二條師通一男。)

一條右大臣

(藤恒佐。土御門左府良世公七男。)

法性寺入道前關白太政大臣(忠通公。)

(此集各加攝關字。)

一條左大臣

(源雅信公。敦美親王一男。)

九條入道右大臣

(師輔公。)(此集加入道字。)

土御門內大臣

(源雅通公男。)

後德大寺左大臣

(實定公。公能公男。)

攝政太政大臣

(藤良經公。兼實公三男。)

入道前關白太政大臣

(兼實公。)

入道左大臣

(藤實房公。公教公男。)

前太政大臣

(賴實公。經宗公男。)

新勅撰集

富家人道前關白太政大臣(忠實公。)(新古今二知足院。)

後法性寺入道前關白太政大臣(兼實公。)

後京極攝政前太政大臣(良經公。)

井手左大臣

(橘諸兄公。)

西三條右大臣

(源光公。仁明帝子。)

九條右大臣

(師輔公。)

九條太政大臣

(信長公。大二條關白一男。)

大炊御門左大臣

(經宗公。亞相經實四男。)

三條入道左大臣

(實房公、公教公男。)

六條入道前太政大臣

(賴實公、經宗公男。)

大宮入道內大臣

(實宗公、大納言公通孺男。)

鎌倉右大臣

(源實朝公、右大將賴朝男。)

前關白

(藤道家公、後京極殿一男。)

關白左大臣

(藤教實公、九條殿、光明峯寺道家公一男。)

前內大臣

(源通光公、通親公男。)

入道前太政大臣

(藤公經公、西園寺實家公一男。)

前左大臣

(藤良平公、兼實公三男。)

內大臣

(藤實氏公、常盤井公經公一男。)

小野宮右大臣

(實資公、右衛門督齊敏三男。)

續後撰集

洞院攝政前左大臣

(教實公、光明峯寺殿一男。)

三條內大臣

(藤公教公、十載後三條、此集無後字。)

後久我太政大臣

(通光公、通親公男。)

西園寺入道前太政大臣(公經公。)

醍醐入道前太政大臣

(良平公、兼實公三男。)

後土御門內大臣

(源定通公、通親公四男。)

入道前攝政左大臣

(道家公、後京極殿男。)

攝政前太政大臣

(兼經公、號岡屋、猪熊家實三男。)

前關白左大臣

(良實公、道家公二男。)

前攝政左大臣

(實經公、道家公三男。)

前太政大臣

(實氏公、公經公二男。)

前內大臣

(基家公、後京極殿三男。)

前內大臣

(藤家其公、源和忠其公二男。)

右大臣

(藤忠家公、九條教實公一男。)

內大臣

(藤道良公、普光園良實一男。)

續古今集

栗田關白贈太政大臣

(道兼公、拾遺、栗田左大臣卜云。)

光明峰寺入道前攝政左大臣(道家公。)

岡屋入道前攝政太政大臣(兼經公、猪熊殿三男。)

大繼冠

(內大臣中臣鎌子連、天智帝八年十月五日改姓。)

佐保左大臣

(長屋王、天智孫高市王男。)

北卿贈太政大臣

(房前公、淡海公第二男。)

儀同三司

(伊周公、中關白道隆二男。)

中御門右大臣

(藤宗忠公、源相宗俊卿男。)

贈太政大臣

(藤經實公、大炊御門、京極關白師實公三男。)

花山院前右大臣

(藤忠經公、左大臣兼雅男。)

後花山院入道太政大臣

(藤忠經公、左大臣兼雅男。)

入道右大臣

(花山定雅公。忠經公男。)

前內大臣

(鶴殿基家公。)

入道內大臣

(中院通成公。大納言通方卿男。)

攝政

(鷹司兼平公。)

前內大臣

(藤公親公。實親公男。)

內大臣

(近衛家基公。基平公一男。)

左大臣

(二條師忠公。良實公三男。)

右大臣

(九條忠教公。一音院忠家公一男。)

新後撰集

後一條入道前關白左大臣(實經公。)

稱念院入道前關白左大臣(兼平公。)

後光明峯寺攝政左大臣(家經公。)

前關白太政大臣
(基忠公。兼平公男。)

入道前關白左大臣

(二條師忠公。)

中院入道左大臣

(雅定公。)

後九條內大臣

(基家公。)

花山院入道左大臣

(定雅公。)

花山院內大臣

(師繼公。)

土御門入道內大臣

(中院通成公。)

入道前太政大臣

(西園寺實兼公。公相公一男。)

前太政大臣

(山本公守公。實雄公三男。)

太政大臣

(德大寺公孝公。相國實基公男。)

左大臣

(二條師教公。師忠公男。)

右大臣

(鷹司冬平公。基忠公男。)

前內大臣

(藤實重公。公親公男。)

內大臣

(一條內實公。家經公男。)

玉葉集

野宮左大臣

(藤公繼公。西園寺實定公男。)

衣笠前內大臣

(藤家長公。亞相忠良二男。)

九條左大臣

(道良公。普光園殿男。)

前關白左大臣

(二條良實公。)

關白前左大臣

(一條實經公。光明峯寺三男。)

入道太政大臣

(常磐井實氏公。公經公一男。)

前太政大臣

(藤公相公。實氏公二男。)

前左大臣

(山階實雄公。公經公三男。)

左大臣

(藤基平。岡屋兼經公一男。)

入道前右大臣

(花山定雅公。右大臣忠經公男。)

前右大臣

(忠家公。洞院攝政男。)

前內大臣

(鶴殿基家公。後京極殿三男。)

前內大臣

(藤公親公。三條右大臣男。)

內大臣

(大炊御門冬忠公。內大臣家嗣公一男。)

前右大臣

(京極公基公。實氏公一男。)

續拾遺集

普光園入道前關白左大臣(二條良實公。)

九條前攝政右大臣 (二條公。洞院攝政一男。)

前關白左大臣 (一條實經公。)

近衛關白左大臣 (基平公。岡屋殿一男。)

前關白右大臣 (鷹司基忠公。稱念院兼平公男。)

前攝政左大臣 (一條家經公。實經公一男。)

德大寺左大臣 (實能公。左衛門督公實五男。)

醍醐入道前太政大臣 (良平公。九條兼實四男。)

常磐井入道前太政大臣(實氏公。)

冷泉太政大臣 (西園寺公相公。)

山階入道左大臣 (實雄公。)

萬里小路右大臣 (公基公。實氏公一男。)

前內大臣 (堀川師繼公。花山忠經公二男。)

大炊御門內大臣 (家經公。右大臣師經二男。)

二條關白太政大臣 (教通公。)

深心院關白左大臣 (近衛基平公。)

近衛關白前右大臣 (家基公。)

歡喜園前攝政左大臣 (鷹兼忠公。兼平公二男。)

前關白太政大臣 (鷹司基忠公。)

前攝政左大臣 (二條師教公。忠教公一男。)

關白前太政大臣 (鷹司冬平公。)

大宮前太政大臣 (藤伊通公。亞相宗通公。)

中院入道前內大臣 (雅通公。)

大宮入道內大臣 (西園寺實宗公。亞相通男。)

花山院前內大臣 (師經公。)

入道前太政大臣 (實兼公。)

入道前太政大臣 (公守公。)

入道左大臣 (公衡公。兼實公男。)

前內大臣 (三條實重公。公親公男。)

前內大臣 (源通雅公。)

(私二云。源氏無通雅。是乃中院通雄也。)

左大臣 (近衛家平公。家基公男。)

右大臣 (二條道平公。兼基公男。)

一條內大臣 (內實公。)

內大臣 (近衛經平公。家基公二男。)

續千載集

近衛前關白左大臣 (基平公。)

圓光院前關白太政大臣(鷹基忠公。)

後光明峯寺 (家經公。)

後近衛關白前左大臣 (家基公。)

前攝政左大臣 (九條師教公。)

前關白左大臣 (近衛家平公。)

前關白太政大臣 (鷹冬平公。)

關白前左大臣 (二條道平公。)

關白內大臣 (一條內經公。內實公一男。)

非手左大臣 (橘諸兄公。)

後久我內大臣 (通基公。)

三條入道右大臣 (實親公。淨土寺公房公一男。)

山本入道前太政大臣 (公守公。)

後德大寺入道前太政大臣(公孝公。實基二男。)

六條內大臣 (源有房。右少將有通子。)

入道前太政大臣 (實兼公。)

太政大臣 (實重公。)

前內大臣 (源通雄。中院通基公男。)

左大臣 (後山本實泰公。公守公男。)

前右大臣 (公顯公。實兼公次男。)

右大臣 (花山家定公。右大將家教男。)

前內大臣 (中院通重公。亞相通賴男。)

內大臣 (花山師信公。師繼公男。)

續後拾遺集

關白太政大臣 (冬平公。)

芬陀利花院關白內大臣(一條內經公。)

前關白左大臣 (道平公。)

前關白左大臣 (九條房實公。己心院殿男。)

中院入道右大臣 (雅定公。)

德大寺入道前太政大臣(實基公。)

後西園寺入道前太政大臣(實兼公。)

後花山院內大臣 (師信公。)

入道前太政大臣 (實重公。)

前太政大臣 (通雄公。)

前左大臣 (實泰公。)

入道前右大臣 (花山家定公。)

左大臣 (鷹冬教公。冬平公男。)

右大臣 (近衛經忠公。家平公男。)

內大臣 (西園寺實衡公。竹林院公衡公男。)

風雅集

深心院關白前左大臣 (基平公。續拾遺已來近衛前關白。)

淨明寺關白前右大臣 (家基公。玉葉二近衛關白。)

後稱念院前關白太政大臣(冬平公。)

後光明照院前關白左大臣(道平公。)

前關白左大臣 (基嗣公。後淨明寺經平公男。)

前關白右大臣 (鷹師平公。冬教公男。)

入道前關白左大臣 (九條通教公。己心院殿男。)

前關白左大臣 (一條經通公。內經公男。)

關白右大臣 (二條良基公。道平公男。)

中院入道內大臣 (源通基。亞相通忠男。)

三條入道前太政大臣 (實重公。)

竹林院入道前左大臣 (公衡公。)

中院前太政大臣 (通雄公。)

後淨明寺左大臣 (近衛經平公。家基公男。)

今出川前右大臣 (公顯公。實兼公男。)

後花山院前內大臣 (師信公。)

今出川入道前左大臣 (兼季公。實兼公三男。)

後山本前左大臣 (實泰公。)

如法三寶院入道前內大臣 (源通顯公。中院通重公男。)

棲心院內大臣 (內實公。玉葉已來一條內大臣。)

前太政大臣 (久我長通公。中院相國通雄男。)

前左大臣 (洞院公賢公。後山本實泰男。)

前內大臣 (三條實忠公。內大臣公茂公男。)

前內大臣 (大炊御門冬信公。內府冬氏公二男。)

西園寺前內大臣女 (藤實衛公女。)

光福寺前內大臣女 (藤冬氏公女。)

大臣同名考

後光明寺攝政

賴實

六條太政大臣

忠家

一音院關白

良基

後善光園院太政大臣

基房

菩提院入道關白

兼經

阿屋關白

兼房

高野太政大臣

公經

西園寺入道太政大臣

雅通

久我內大臣

忠教

報恩院關白

公基

萬里小路右大臣

師信

後花山院內大臣

實重

三條入道太政大臣

道經

知足院右大臣

有房

六條內大臣

家實

猪隈攝政

公衡

竹林院入道左大臣

定雅

花山院入道右大臣

實基

德大寺太政大臣

經忠

堀川關白右大臣

實家

一條太政大臣

師教

已心院攝政

家基（新古今素覺法師。淨妙寺關白）

定房（大納言。）

吉田內大臣

具親（千載）

入道內大臣（堀川。）

基忠（右衛門督。）

圓光院入道關白

師經（參議。）

醍醐右大臣

良經（千載）

後京極攝政

經平（金葉）

淨妙寺左大臣

經道（中納言懷平子。）

前關白（一條。）

公重（通季子。）

前內大臣（竹林院。）

勅撰作者考

同姓同名諱

藤義孝（後拾遺。四一）

藤義孝（同）

藤爲世（忠相子。）

藤爲世（後拾遺。藤爲世（正二位大納言爲氏子）

源師光（賴國男。）

源師光（千載。源師光（大納言師賴男。）

藤重綱（重基男。）

藤重綱（千載。藤重綱（新勅撰）

藤隆親

藤權中納言隆親

藤行家（行岡男。）

藤行家（同。藤行家（知家男。）

藤爲家（金葉）

藤爲家（新勅撰。藤右衛門督爲家

藤爲忠（金葉）

藤爲忠（千載。藤爲忠（開後成）

藤經平（通俊男。）

藤經平（同花。藤經平（衣笠內府男。）

藤忠兼（續後撰從三位忠兼）

藤忠兼（玉葉。藤忠兼

藤爲實（同）

藤隆資（後拾遺）

藤賴氏（新勅撰）

源親房（遠江守從五上。六條

顯房曾孫。仲房子。）

藤行房（玉）

藤定成（千載）

藤忠定（新古）

藤爲成（續拾遺）

中納言公宗（山階左大臣實

雄男。）

藤實綱（金。藤實綱（日野三位資業次男。）

藤定長（千。藤定長（權右中辨光房四男。）

源仲正（後撰。源仲正（右大臣能有孫。大藏大

輔當平子。）

源仲正（千。源仲正（兵庫頭。號馬場。賴國

異姓同名

源顯仲朝臣（金。源顯仲朝臣（從三位神祇伯右

大臣顯房三男。）

大江爲基（後拾遺。大江爲基（攝津守。參議齊光男。）

源經任（後拾遺。源經任（權大納言藤經任

藤爲實（新後撰）

藤參議隆資（後拾遺）

藤賴氏（玉葉）

源權中納言親房（千載。源權中納言親房（北畠一品亞

相師重男。）

藤行房（千載）

藤定成（玉）

藤忠定（千載）

藤爲成（續千載）

藤大納言公宗（千。藤大納言公宗（號北山西園寺。

內大臣實衡男。）

藤中納言實綱（千。藤中納言實綱（三條內大臣公

教一男。）

藤定長（千。藤定長（法名寂蓮。俊成子。）

源仲正（千。源仲正（賴國

孫。賴綱子。賴政父。）

藤顯仲（金）

後拾
橋爲仲

後拾
藤爲長(種王次男。)

後拾
惟宗爲經

後拾
源親範

後拾
藤親範

後拾
高橋良成

新勅
祝部忠成

同
藤宗經朝臣

同
橋廣房

後拾
源忠季(宮内大輔從三位顯仲

子。)

藤忠房

藤輔仁(玄上男。)

源經房(中納言。大納言俊賢子。)

藤成國

源師賢

源公忠(民部卿。光孝帝孫。國

紀子。)

藤國茂本)

五
藤爲仲

大藏卿菅爲長

太宰權帥藤爲經

參議平親範(贈正一位左大臣。

從四位範家子。)

高階良成

大江忠成朝臣(刑部少輔。大膳

大夫廣元子。)

源權中納言宗經

大江廣房(刑部少輔。海東。因

幡守廣茂子。)

左中將藤忠季

源權中納言忠房

輔仁親王

祝部成國

中宮大夫藤師賢

三統公忠

藤仲文

同化
橋俊成

源爲成

源俊實(正二位大納言。隆國

孫。隆俊子。)

坂上定成

平行氏

橋季通

平基綱(伊勢守。安藝守重義孫。

教成子。)

源俊定(具定男。)

源師光(賴國男。)

藤師光

中原賴成

從三位藤賴氏

大中臣爲定

源定宗(式部少輔。大納言顯雅

孫。顯宗子。)

大江宗秀(掃部頭。永井備前守

千
皇太后宮大夫藤俊成

藤爲成(續拾二藤爲成。)

權中納言藤俊實

藤定成

祝部行氏

藤季通

藤基綱

平行盛

前中納言藤俊定

源師光(右京大夫。左大臣俊房

孫。亞相師賴子。)

中原師光(大外記師賴孫。師季

子。)

藤賴成

源賴氏

藤爲定

藤定宗

藤宗秀

時秀子。

前中納言平經親(參議有親孫。

大江經親(經光孫。經元子。)

大納言時繼子。)

藤長綱

刑部卿菅長綱(參議爲守孫。治

部卿茂長子。)

僧同名

尊圓法師

尊圓法師親王

道性法親王

僧正道性

女房同名

下野(下野守源致隆女。)

下野(伊勢神官女。)

少將內侍

少將內侍(能登守實房女。母輔

伊豫

親女。)

中納言

伊豫(兼覺法師母。)

中納言 光俊女。)

中納言(建春門院女房。)

中宮宣旨

中宮宣旨

爲道朝臣女

爲道朝臣女(第二女。)

大輔(但馬守源衡女。)

大輔

小辨

小辨

同人別名

僧正通昭

長峯宗貞

藤高光

如覺法師

齋宮女御

偏寧女(拾遺目ニ記載之。常本

女御徵子女王

只云道綱母。)

小大君

三條院女藏人左近

藤致雅女

泉式部

前齋院六條

待賢門院堀川

藤顯廣

皇太后宮大夫俊成

延久第三親王

輔仁親王

圓位法師

西行法師

都芳門院安藝

待賢門院安藝

攝政家丹後

宜猷門院丹後

高內侍

儀同三司母

俊成女

侍從具定女

前大僧正慈圓

前大僧正慈鎮

藤原秀能

如願法師

承明門院小宰相

土御門院小宰相

中宮少將

藤原門院少將

中宮但馬

藤原門院但馬

下野

後鳥羽院下野

典侍因子

後堀川院民部卿典侍

內大臣家小大進

花園左大臣家小大進

新古
宮內卿

少納言典侍

安嘉門院右衛門佐

中宮權大納言

大宮院權大納言

院大納言

遊義門院權大納言

贈從三位爲子

藤爲景朝臣

尙侍藤瓊子朝臣

春宮少將

永陽門院左京大夫

昭訓門院大納言

中納言公宗母

中宮大夫公宗母

前中納言俊光女

別當

尙侍家中納言

院冷泉

少將內侍

鷹司院帥

後鳥羽院宮內卿

典侍親子朝臣

安嘉門院四條

今出川院近衛

右近衛督爲教女

從二位爲子

役二條院大納言典侍

藤爲理朝臣

萬秋門院

永福門院少將

昭訓門院春日

權大納言公宗母(私云。是別人

歟。母爲世女。)

後伏見院中納言典侍

新院別當典侍

中納言

院冷泉

新院少將內侍

藤白家民部卿

從三位藤原宣子

少將內侍

章義門院小兵衛督

信濃

藤爲道朝臣女

中宮內侍

滋野內侍

大貳三位

待賢門院兵衛

行胤法師

徵覺法師

具親

平時高

藤思兼朝臣

藤家基

藤行房

藤秀長

荒木田長延

藤國茂

從三位藤宣子

後醍醐院少將內侍

永福門院右衛門督

下野

大納言顯實母

馬內侍

少式命婦(京極息宅拾遺、注

進。)

藤堅子

上西門院兵衛

昭訓門院小督

信綱(連歌)

如寂法師

平齊時

大納言公陸

素覺法師

道全法師

如淨法師

寂延法師

藤仲文

右書應安四年尊賢法師所編集也。余友人家藏一本。乃是貞享中如是菴西順法師自書本也。其書轉寫數經。而魯魚錯簡

頗不少矣。余暇日以他本訂校之。再寫之。題曰撰集管見抄。于時享保十一丙午年秋仲浪花散人戀齋橋本嘉謹

續群書類從卷第四百五十四

和歌部八十九

後撰集正義

卷第一

春上

ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりと驚ろかれぬる

定家卿

藤原敏行朝臣

師説云。ふる雪のみのしろころもとつゝけたる。雪のふれは簑をきるへき代に。しろきうちきをきて。春來にけりとおとろけるとよめる歟。万葉集にはみのしろころもといふ事不見哉。此集にみのしろころもぬはすともきよとよめる。中原宗興此歌の後によめりと見ゆ。また古歌とて。

せなかためみのしろ衣うつ時は空行鷹の音もまかひけりといへる歌のさまもふるく不見。遠人のためにみのしろ衣とよめるにや。蘇我耿恭などをおもへるうたなれば。上古の歌とは見えず。

古説云。簑代衣といへる。清輔卿説同之。宗興歌は身代衣と詠之。かたみと聞えたり。又古歌云。

山里は草葉の露もしけからんみのしろ衣ぬはすともきよ
是みのしろ衣と覺ゆ。

けふよりは萩のやけ原かき分て若菜つみにと誰をさそはん

兼盛王

此歌大和物語云。正月一日はかりに參るに。うたよめとありければ。此うたをよめるといへり。

若菜事見古今注。仍重不能記之。

君のみや野へに小松をひきにゆく我もかたみにつまん若菜を

謠人不知

此かたみは非信之儀也。たかひにといふころ也。籠をかたみといふにそへたるなるへし。

水の面にあやふきみたる春風や池の氷をけふはとくらむ

紀女卿

水の綾は水の波の瑟に似たる貌也。波文也。文をばあやとよ

めはえ。

同
ことにつきて

つみせられたるにはあらず。おほやけの御使に付也。とには公の字。夙夜在公なといへり。

月桂事

見古今注。

しら玉をつゝむ袖のみなかるゝを春は涙もさえぬ^{伊勢}けり

袖のしら玉。古今の注にみえたり。春はなみたま寒こほらず

となり。非擬心也。^{サフル}

きてみへき人もあらしな我宿の梅の初花折つくしてん^{人不知}

師説云。きて見へきとは。來て可見人もあらしと也。

梅花に衣をやとすといふ事

見古今注。

我宿の梅のはつ花ひるは雪よるは月ともみえまかふかな^同

梅花のしろき貌。晝は雪とみえ。夜は月とみえまかふなり。

心もておるかはあやな梅の花香をとめてたにとふ人のなき

心もてとは。心からといふ同。ころなり。以といふ義なり。

あやなとは無益と云之。此おるは居ル心にそへたりと覺ゆ。

梅花笠事

見古今注。

君かため山田の澤にゑくつむとぬれにし袖は今もかばかす^同

ゑくとは岸也。古説云。風土記云。せりをゑくといへり。萬葉に。

足引の山澤ゑくを取てこんひたにもあはんおやはいふとも古説云。ゑくとは惣別若菜の名なり。會供と書之。正月七日

白馬簡會に始て若菜を奏進すれば。會供と云。

梅の花ちるてふなへに春雨のふりてつゝなくうくひすの聲^同

師説云。くれなゐのふりいてつゝと。おほくよめる歌をは。

くれなゐに布を染て。ふりいてといふ布をよむと釋するものあれと。何もものゝゑのしらへあけてきこゆるを。ふり

いてといひならへるとそきこゆる。うちいつる聲は。ずゝ

むしならねと。ふり出るやうにきこゆるなり。なへとはちな

みにといふころ。因字之。古今にいなおほせとりのなく

なへにと云。同心也。

いちか家のほひいりにたてる青柳にけふや鳴らん鶯のこゑ^鶯

師説云。はひいりにたてるとは。門の入口をよめるときこ

ゆ。

くれなゐに色をはかへてむめの花かそとく^同に匂はさりける

紅梅白梅色異に替へたれとも。其香此句更に別々にほは

すといへり。

ふる雪はかつもけなゝん梅の花ちるにまとはす折てかき^{貫之}ん

雪は終に消なんものゆへに。梅花のちらぬもちらす心ちす。

今さらは折てかさゝんと云ふ。まとはすとは迷心へ。たとへは雪と花とのちるとふるとに。おもひわかれす心をまよはす也。

卷第二

春中

竹ちかく夜とこねはせし鶯のなくこゑきけはあさぬせられす藤原伊留

師説云。よとこねはよるふすことあらはにきこえたり。古

き歌にはたゝありによめれば。かやうの事多かり。

山もりはいはゝいはなん高砂の尾上の櫻おりてかさゝん善性師

師説云。高砂は播磨國名所なれと。惣しての山をはたかさこ

と云一説なり。このうた花山にてよめると云。おのへとは尾

上と書ふ。

古説に云。高砂とは只山惣名へ。名所にもあり。此歌にては

惣名の山の高砂とおほゆ。藥積成山と云本文より事おこれ

り。

けふ櫻しづくに我身いさぬれんかこめにさそふ風のこぬまに河原左大臣

かこめにとは。香共にさそふといふこゝろなり。又は香な

らとも云同心也。

朱雀院と申は

有三條朱雀。仍號朱雀院なり。宇多法皇御在所也といふ。後

院とはこれなり。

歎きさへ春をしるこそわひしけれもゆとは人にみえぬ物から前人不知

草木のもえ出るに。おもひのもゆるをそへたり。

春の池のたまもに遊ぶ鳩とりのあしのいとなき戀もする哉宮庭鳥風

師説云。玉藻にあそふにはとりのいとまなきと云心なり。

古説。玉藻は玉はほむる詞也。又小石のにもあひましりたる

貌也。

山風の花のかゝとふふもとは春の霞そほたし成ける藤原興風

花香勾引也。花の香ぬすめなといへる。おなしこゝろ也。カトフ

よふこ鳥の事

見古今注。

卷第三

春下

うちはへて春はさばかりのとけきを花の心のなにいそくらん河原深養父

打はへてとは打埜へてなり。またばうち任てと云こゝろ也。

花のこゝろいそくとは。うつりちらんとするかたちの程な

きよしをいへり。

春の日のかけるふ池のかゝみには柳のまゆそ先はみえける前人不知

柳眉。ふるき詩歌につくれり。楊貴妃か時とさらにいへり。

春日さく藤のうら葉のうらとけて君し思はゝ我も頼まん同

うらとけてとは。内心へたてなく。うちとけてといふこゝろ

なり。此歌藤氏の人をいはへるにや。はるひさくは春日山に

さくといへり。春日山神は藤氏の氏神也。

原信明

あたらよの月と花とおなしくは哀しれらん人にみせばや

あたらしとは。萬葉には新世とかけり。たゞし是非新世

夜也。只風情なくあたなり。かならず春月に限るへしとい

ふ人あり。僻事也。依此歌許しかおもへる人あり。甚不可然

乎。源氏物語に。あかしの入道かをかへより消息していへる

詞に。入道は人しれすこゝろひとつにたちるかゝやくはか

りしつらひて。十二日の月のさやかにさし出るに。たゞあ

たらよのときこえたり。只秋の事なり。古説云。このあたら

よは。たとへばものをいたつらにするを。あたらものをとお

しめいふ心とおなし。

あはれしれらんとは。哀知らんには非ず。是好友をれかへる

こゝろ也。

都人きてもおらなんかはつなくあかたの井との山吹のはな

國公事女

あかたの事古今の注にみえたり。縣の字をあかたとよむ。お

ほきなるさと。井。さらは水くむ井にはあらず。居所なり。

かかるに居る井にそへたる也。又は名所とみえたり。

或書云。井部に入たり。此歌もし先祖の芳躅かもとめて。山

城井手の里にすみけるとさよめる歟。しかれば井との義正

説たるへし。彼井出里は山吹のめてたきよしふるくいひつ

たへたり。

我宿のかけとも頼む藤の花立よりくとも浪におらるな

讀人不

藤なみの事。古今の注にみえたり。波を等閑とよべたるなり

ひみ

折つればたふさにけかるたてなから三世の佛に花たてまつる

たふさとは手房とかけり。只手を云といへり。みよの佛とは

三世の諸佛也。

限なき名にあふ藤の花なればそこゐもしらぬ色のふかさを

三條右大臣

亭主兼輔卿をいはるよめる也。三條右大臣定方とあるしと

はいとこなり。そこゐもしらぬとは。ふかき水底を云也。

實之

あまりさへ有て行へき年たにも春にかならずあふよしも哉

あまりさへとは剩也。又餘年ともおほゆ。この春は有道の春

にあはゝやとねかへり。

藤原雅正

君こそてとしはくれにき立かへり春さへけふに成にける哉

君こてといふへきを。字のたらねは。すの一字を入たる也。

實之

またもこむ時ぞと思へと頼まれぬ我身にしあればおしき春哉

貫之此歌あしくよみて。其としの秋身まかりにけりといへ

り。つらゆきほとの上古の先賢。なを身をうしなふほと之歌

のあつまりをさらす。何況哉末代之好士。よく可思歟。

卷第四

夏

讀人不

時わかすふれる雪かとみる迄にかきねもたはにさける卯花

師説云。塙根もたはにとは。古今集にえたもたはゝにとよめ

る。おなし心なり。枝のたはみなひける貌也。

時わかす月か雪かとみる迄にかきれのまにまきけるうの花

まにまとはまに／＼おなし心也。垣根の貌なり。

あひみしもまたみぬ戀も郭公月になく夜そまたなかりける

明月の皓々たる前にほと／＼きすの敷聲。ありかたき事なり。

そのこゝろをみつらしく見し夜のおもかけによせてよめり。

こかくれて五月まつとも郭公はねならはしに枝うつりせよ

よろづ鳥のすたちて。今はとひぬへきおりになりて。父母か

はく／＼みたて／＼巢のはたにわきて。つはさをのへてとふへ

きやうををしふるなり。これを鳥のはねたはらずと云。

行かへりやそうち人の玉蔭かけてそたのむあふひてふ名を

師説云。やそうち人とは八十氏人とかけり。世にあるおほく

の人といふこゝろなり。ふるくはかくよめるを。これに宇治

川をやそうち川とよむにつきて。近代宇治の里人をやそう

ち人とよめる歌おほくあり。

葵を逢日とそへたり。四月賀茂祭に。くるまにも人の袖にも

付也。もろかつらとも。かつらともよめり。

足引の山下水は行かよひとのれにきへなかるへらなり

琴に灌水流泉の曲といふ事あり。これを山下水といへり。な

かる／＼か泣とそへたり。碓門流琴＝泣るともいへる歟。

夏の夜はあふ名のみして敷妙のちりばらふまに明そしにける
しきたへといふ事。さま／＼の説あり。この歌のしきたへは
夜の床とおほえたり。

萬葉集云。

敷たへの衣手かれて我まつとあらんこ共はおもかけにみゆ
或云。しきたへとはうちまかせては枕をよめり。されとも床
とも礎ともよめれは。たゝめる所の物をはしきたへとよむ
にや。此歌は衣とつゝけたる心えれ。それもぬるものなれは

よめるか。さよ衣をいへるなるへし。また云。

おきていなほいも戀んかも敷妙の黒髪敷て長きこのよな

是も夜の床のうへのすかたとおほゆ。

とゝめえぬ命にあれば敷妙の家より出て妹かくれます

是は家をよめりとみえたり。又古今の法にみえたり。

常夏の花をたにみはとなしにすくる月日もみしか／＼りけり

何事もなす事なくて。いたつらにすくるをとなしにといへ

り。しかるをいたつらなりし時は。永しとおもひし月日も。

とこなつのうつくしき花をみれは。日もみしかくおほゆる

と云也。

つゝめともかくれぬ物は夏虫の身よりあまれる思ひなりけり

大和物語云。時平左大臣女。宇多后かつらのみにこ。散式部

卿のみこすみ侍けるに。そこなるうなひこのおとこ。宮をい

とをしみけるに。此うなひのよめるといへり。

又云。此わらへにほたるをとてといへりければ。かきみの袖に螢をひろひてたてまつるとぞ。よみかける野なるへし。かつらのみこをおもひかけてよめるにやと申。

夏虫の身を焼すて玉しあらは我もまれば人々めしる身そ

此夏虫は螢ときこえたり。たましとは神也。ふかくおもふおもひをよめり。夏むしのいたつらに身を焼すてんよりも。我ふかく忍して物おもひなれとも。身なばたきすてぬにならへといふなるへし。

こよひかく詠る袖の露けきは月の霜をや秋とみつらん

師説云。此歌或人云。月の笠と釋しいへり。はなはた偉事也。

是は月の霜をかきたかへたる。宇のあやまりなり。月照平砂夏夜霜といふこゝろをよめる也。

かも川の水底すみて照月を行てみんとや夏はらへする

みな月のつこりりの夜。月のてるといはん事いか。此歌によめるは。たゞ微月清光河上にうかへる貌をよめるにやあらん。

七夕は天のかばらを七かへり後のみそかをみそきにはせよ

同
潤七月の七夕の歌とおほゆ。後七月七日のみそきか。まどのみそきにはせよといへる也。此みそきはたかひにあひあはんといそく心也。なまかへりとは。なをいくたひもといふ心

也。

又云。みそきは萬のはらへの名なり。七夕まつりの儀式もみそき也。或云。此歌潤六月の年初の晦によめるとおほゆ。なまかへりも。七夕の秋をいそくこゝろなり。

卷第五

秋上

うちつけに竹そかなしき木のはちる秋の始をけふそと思へは
うちつけにとは。甚といふこゝろ也。やかてそのものにはなはたしくなりゆくといふなるへし。

秋萩を色とる風の吹ぬれば人のこゝろもうたかばれけり

同
此歌大和物語には染殿内侍のもとよりといへり。贈答とも

にかの物語に有。

秋の夜の心もしるく七夕のあへるこよひはあけすともあらん

同
秋の夜の心ありといふ事もしるへく。二星たまゝあふ今夜は。あけすしてもあれかしといへるなり。

天河遠きわたりにあらね共君かふなてはとしにこそまで

同
ふなてとは非船直之心也。只船出也。歌の道しらさる人。一向に船直のよしにおもへり。更たえたり。不然。天河には遠

き渡りさらになけれとも。君か舟出を一年久しくまわくら

すてといへるか。此君は七夕なるへし。

けふよりは天の河原はみせなさんそこゝともなくたゞ渡り南

よみ行成本

御友附

師説云。家本にはそこともなくといふ説を用侍り。或本にはそよみともなくたゝわたりなりとあり。それは水ともなくわたらんと云心をいふ。但行成大納言の筆にそよみとかゝれたれば。其説につくへし。そよみとはそよ水戸也。そよは詞のやすめなり。水戸は水のふかきおさなり。あせなゝんとはあれなるといふなり。たとへば天河あれて水もなき渡となりなん。さらば河のふかきおもひもなく。水のさばりといふこともなくて。たゝわたりなりといふ也。

秋風のふけはさすかにわひしはた世のとはりと思ふ物から

はたとし將字也。文章に將又なとかけり。且又くといふこゝろなるへし。又はまさにといふこゝろともいへり。但唯又くといふ心なるへし。

夕されはおきふく風の音まさる今はたいかにね覺せられん
後中書王此兩論なきまたまひて。しはしうち案して。只又のこゝろなるへしとそありける。

秋かせの草葉そよきて吹なへにはのかにしつる日くらし同の聲
そよきてとは草葉そよめく貌也。なへにとは例の因なり。
秋くれば野もせに虫の織みなつめる聲のあやをば誰かきるらん織原元吉

師説云。野もせとは庭もせ水もせ國もせなといへり。もせは面字也。野面庭面なと也。野面にみちてあまねきよしの詞なり。こゑは機織聲の聞ゆれば。其聲の綾をは誰かきるへきと

よめる也。あやとは綾也。あやしといふ心にはあらず。

巻第六

秋中 庭の秋風

おるからに我名はたちぬ女郎花いさ同しくははな／＼にみん
古説云。なみなへしを女によそふれば。花をおらは名はたちぬへし。おなししくはさらば我花人のはなとさためて。各かはな／＼にみんとよめる也。

秋の野の露にをかるゝ女郎花はらふ人なみぬれつゝやふる
をかるゝとは。露におかきるゝと云也。このおかきるゝは。露にとつくといふこゝろときこゆ。

なみなへし花の心のあたなれば秋にのみこそあひにたりけれ
花のこゝろのあたなるほとに。思ひきためたるかたもなく
て。常に人にあきたる事にあふそといへり。秋を飽にそへたり。

宿もせにうへなみつゝを我はみるまねくお花に入やとまると
うへなみつゝとは植並つゝ也。一本にうへなめつゝとあり。
いつれもおなしこゝろなり。宿もせは庭前のこゝろなるへし。

しら露のをくにあまたの聲すゝ花の色／＼ありとしらなん
是は連歌にしたりける也。上句殿上人の中よりして。みすの
うちへいひ入たりければ。下句みすのうちよりつけたるな

り。

秋のゝの草はいとゝもみえなくにくくしら露を玉とぬくらん
秋のゝの草は絲にてもなきに。なく白露を玉のこく貫懸た
るよといへり。

白露に風の吹しく秋のゝはつらぬきとめぬ玉そちりける

文屋朝康

風の吹鋪と云て。玉そちりけると。首尾對標してよめる也。

ちる露は草糸の貫もとゝめぬ玉のちるにやと云也。

おほ空にわか袖ひつとあらなくにかなしく露の分てをくらん

師説云。或本に我袖ひつと書て。そてぬるゝこゝろと思へ

り。未習道人の云事也。是はしからず。我袖暗干と云事もな

きに。かなしく秋の露の我袖にわきてをくとあやしめる也。

一本にはわかそてひとつなとかけり。皆あやまれる也。

秋の夜の月の影こそ木の間よりおちは衣と身に移りけれ

同

落葉衣ニあらす。零羽衣也。むかし天羽衣を空よむおとした

る事あり。ふるき物語にみえたり。

秋のよの月のうへこく舟なればかつらの枝にさほやさはらん

小野帝村

是は秋の夜池に月のうつりけるうへを。舟のこく事あるを

みてよめる也。されば一本には秋の池の月のうへこくとあ

り。

空をとみ秋やよくらん久かたの月のかつらの色もかはらぬ

御賀室

よく空の遣ければにや。秋のいろもおよはすして。月のかつ

らはいつもおなしひかりなるらめといへる也。

消かへり物思ふ秋の心こそなみたの河の紅葉なりけれ

深やふ

切に秋をおしみ思ふこゝろのふかきも。又物おもふなみた
の色も。紅葉の水にうかへるにてありけるといへる也。

女郎花匂ふさかりをみる時そわかおいらくはかなしかりける

賢人不知

此歌すきくしくよあり。たとへは女郎花のはなくしく

咲はしめたるさかりをみれば。わかとしの老ぬる事たにも

思はずは。夫婦のかたちひありなましといへる也。後源順か

恐惡襲編首似霜といへるも。これらの心をいへるにや。

卷第七

秋下

行かへりこゝもかしこも旅なれやくる秋とにかりくくとなく

北窓之春翅。南城之秋聲。去來何方にもとゝまらず。こゝを

もかしこをもかりそめにおもひて。假々と鳴かと秀句によ

めるなり。

駒迎

八月十五日にかならず相坂山にて國々より獻進する駒を請

取。つかひは殿上人位にて。相坂まで行むかふなり。是を駒

むかへと申。造獻國々御牧の中に。相坂山にてむかふる駒

は。

信濃國きりはらのみまき。望月のみまき。黒駒の御牧。

望月

黒駒

歌謡
たちのゝみまき。同四 たちのゝみまき。同四 おほさかのみまき。
甲斐 奥州
をかさはらのみ牧。をふちのみまき。

みるとに秋にもなるか立田姫紅葉そむとや山もきるらん 同
朝夕毎に秋ふかくなりゆくさまをよめり。山もきるらんと
は。龍田姫のあさからすをりそめたる紅葉の錦を。山はきる
らんとなり。たつたひめの錦は山にきせけるそかしといへ
り。

はらから

一腹兄弟といふ事なり。只又をとゝあにといふこゝろとも
いへり。

君と我いもせの山も秋くれば色かはりぬる物にそ有ける 同

いもせ山の事。古今第十五戀歌のおくに注之。夫婦にこそ常
はなすらへよめるを。是は兄弟の中によめり。只色かはると
いふ事をいばん料なるへし。

あたなりと今は見なくに紅葉は色のかはれる秋しなけれは 同
年々歳々毎秋同紅色のいろもかはらず。其木ことにもみち
しけり。これはあたなる紅葉かとほめたる也。

数しらす君かよはひをのほへつゝなたゝる宿の露となら南 伊勢

なたゝるは泪たると云人あり。とのほかの僻事也。爲名宿と
よめるなり。名たるといへは一字不足也。例之和語の習。一
字いひたす也。たとへば千秋万歳をのへたまへる名たるへ

き。花の露なるへきそといふなり。菊露延歸子細事見古今
注。

紅葉ゝを分つゝ行は錦きて家にかへると人やみるらん 唐人不知

着錦歸故郷といふ事。朱買臣か時よりいへる詞也。朱買諱漢
武帝爲師範。至會稽大守。其時帝云。福貴不歸郷。着錦如夜行
云々。くほしく見古今秋歌注。

山風のふきのまにくもみちははこのもかものに散ぬへら 同
師説云。ふきのまにくとは。唯ふくまゝにといふ。おなし

こゝろなり。まにくは隨意と書て。まにくとよむなり。
又任心ともかけり。君かまにくは君の御心にまかすとよ
むなり。このもかのもとは此面彼面なり。よにもちる心也。
筑波山にこそよめといふ事あれと。いつくにもあるへきな
り。

紅葉はのなかるゝ秋は河ことに錦あらふと人やみるらん 同

錦あらふといふ事。本説あるにや。花陽國志といふ文云。成
都西城。故織錦官。錦工織。(錦工織) 湔江中則鮮明。故曰錦星。文選注
云。蜀有江。織錦之所。其流紅浪除といへり。是心をよめりと
きこゆ。

立田河秋は水なくあせなゝんあかぬもみちのなかるればおし 同
此あせなゝんも。天の川の水もなくあせよと讀たりつる。同
心なるへし。

木の葉ちるうらに波たつ秋なれば紅葉に花も咲まかひけり
是は白浪の花をもみちのいるにましへたり。

葉之

日くらしの聲もいとなく聞ゆるは秋夕暮になれは也けり

實之

蘭説云。いとなくは。春部に玉もにあそふ。おなし心なり。

詞人不知

風の音のかきりと秋やせめくらん吹ちるにとこゑのわひしき

一本にはせめつらんとあり。書あやまれるなり。せめくとい

ふ事本説あり。蘭の字をせめくとよめり。毛詩に見えたり。

注云。蘭は恨也といへり。くはしくは古今第十七敏行歌に。

老ぬてなとかわか身をせめきけんといへる所にみえたり。

秋風につらなはなれぬ鴈金は春かはるともかへらさらん

同

つらは行字也。鴈飛連貌也。文選曉賦云。幾行南去之雁とい

へり。春かはるともとは。春になりても不歸と云心也。

花鬘

はなかつらとは舞童とにさす挿頭の花なり。九月九日重陽

節會に菊の花をかさす。

吹風にまかする舟は秋のよの月の上よりけふはこくらん

水に月のやとれるうへに。木の葉の風におちて。舟のこく浮

ゆくをよめるなるへし。

うち山のもみちを見すは長月の過行日をもしらすそあらまし

ちかぬかむすめ

ひなとは鯉とかけり。宇治川ならてはなきなり。むかし宣旨

にて。此川ならてはあるましきよしありければ。今の世迄も
外の川には此魚なき也。

卷第八

冬

神無月ふりみふらずみ定なき時雨そ冬の始之ける

同

時雨四季にわたりて降物なれとも。此歌よりしてひしと冬

に定たる也。

獨ぬる人のきかくに神無月にはかにもふる初時雨説

同

きかくは。只人のきかんにと云心也。

神無月時雨ばかりはふらずして雪かてにさへなとかならん

同

時雨に雪のましばらくふるといへり。いつしか冬の甚といふ

こゝろ也。

神なつき時雨ふるにもくるゝ日を君まつほとはかなしと思

是は貫之むすめ七歳にてよめると申。父貫之内裏よりをそ

くかへりけるを。待わひてよめるといへり。家集にはちゝま

つほとはとあり。さてはあまりおきなければ。君となをして

此集に入たり。母なくなりてのち。貫之ひとりしてはくくみ

やしなひければ。父をとさらなつかしくおもひけるといへ

り。

驚よなとさはなくそ乳やほしきこなへやほしき母や戀しき

とよみけるも。ことしの春にて有けると申。母には二歳にて

わかれたりけると云。神無月の歌は心詞ともによき歌といへり。

寝ふるはやまの里のわひしきはきてたはやすくとふ人もなき（みい）
（を）

師説云。たやすくといふへきを。一字をくはへていへる也。輒也。

白雪のふりはへてこそ問さらめとくる便をすくさいらなん（同）

雪の解にそへて。人のくると云こころをよめり。

涙河身なくばかりの淵はあれと氷とければ行方もなし（同）

泪ふかく湛て。身を擲はかりの淵はあれともと云心也。或人云。此歌よくみるに。心と詞と首尾とものほらすやあらん。

曇々たる数行の涙のあたゝかにて。淵湛たらんには。さえこほるへしや。なきふるしたる涙を湛置たるやうにおほゆ。ちかき世の人の歌に。

身のうさを思ひしとけは冬の夜もとこほらぬは泪之けり切々たる冬泪。かくそこほらさるへき。

梅か枝にふりをける雪を春近みめのうちつけに花かとそみる（同）めのうちつけにとは。眼前にはなはたしく。やかて雪をうたかふこころなく花と見るといへり。

この月のとしのあまりにたらさらは鶯はばや鳴そしたまし（同）此月とはしはすなり。しはすのたとへはつめて三十日にかきらて。十日廿日にてあらは。今すこし春はとく來て。う

くひすもはやく鳴なんものをといへり。

卷第九

戀一

まどろまぬかへにも人をみつる哉まさしからなん春のよの夢（すこ）常人詞に夢にも壁にもなといふ事なり。又本説あり。

或説云。切利天に七寶宮殿あり。其壁には人のむかしのありさま。又將來の形貌。しるくなからうつりて見ゆるなり。是壁に人を見といふ事の因縁也。

或云。此説さもとおほゆ。正法念經云。切利天七寶殿壁。古昔天王形并生惡趣等皆現元。當時帝釋人天各七生之相現元。其後生相不現。得初果故也。

或云。むかし夫婦あり。其夫さきたちて亡。其妻舊夫を戀悲しふ事限なし。或夜來てむかしの貌にて終夜物語して。明曉に及て別ぬ。夢うつゝわきかれておとろきてみれば。たゝかたはらの壁はかりなり。妻云。昔の人とみたれは。壁にて有けりと云けるなり。それよりして壁に人を見ると云り。

秋の田のいれてふとをかけしかは思ひ出るかうれしげもなし稻かはやいねと人といふ詞にそへたり。いねといふ詞は。ゆけと云詞也。かくいとはれし身なれば。思ひ出るといふも。うれしくもなしといふ也。

思ひ川たえずなかるゝ水のあはのうたかた人にあはて消めや（中略）

前説云。うたかたといふこと葉は。眞には寧なとつかへる詞のやうにおもひよる事かは。さはなくては争かといふよしの詞なり。それを此歌ひとつを見て。うきたる人といふよしに。うたかた人と六字につゞけてよめりと云説は。ふかく見分て。しりかはばかりにのへやる説也。ひとつにつゞけてはいはず。只四字の詞也。萬葉集第十五。

はなれそにたてる室の木うたかたも久しき年を過にけるかも鶯のきなく山吹うたかたも君かてふれぬ花ならめやも又源氏物語。

かきたれて長閑き比の春雨に古郷人をいかに忍ふやつれ／＼にそへて。うらめしうおもひいてらるゝ事おほう侍るを。いかてかはきこゆへからんと御返し。

詠ける軒の雲に袖ぬれてうたかた人を忍はさらめやほとふるとは。けにつれ／＼もまさり侍けり。あなかしこと。みや／＼しくかきなし給へりと書けり。みや／＼しくと有詞に。心うきたる人といはんたよりなかるへし。或云。うたかたの詞よく／＼尋みるに。すこしといふこゝろとおほゆ。萬葉十七には宇多我多と書り。注云。すこしもといふ詞也といへり。又同注云。雨泡名也としるせり。是もあしからず。雨泡なともたゞ片時の物なれば。すこしきなる心といはんも。たかはすやあらん。萬葉云。

あまさかるひなにある我をうたかたのひもときかけておもほゆらめや

もイ
さけてイ

これら皆少といふ心とみえたり。

降やめは跡たにみえぬうたかたも消てほかなき世を賴哉是は雨の泡をよめりと見えたり。此集第十三歌也。

ひととはまるとけり下組のとけぬにしろき心と思へは

讀人不知
へは

ひととは人言也。何事もむかしより人のいひならはしたる言は。誠にて有けると云也。たとへは人の下ひものとけぬにもみゆるといひをきし人の言は。まゝにてありけりと。おもひしられたるといへる也。此うたはしたひものとけぬに。いひおとしめられたるけしきのみゆる。うれしさよとよめるにや。

淺してふとをゆゝしみ山の井はほりしにこりに影ばみえぬそ

紀めのと

ゆゝしみとは。あなゆゝしやなと云。ゆへあるよしの詞なり。所由と書てゆへあるとよめり。其心なるへし。山の井の淺き事は。むかしよりゆへありといへとも。あまりあきければほりしそといふなり。

思ふとはいふ物からにとすれば忘るゝ草の花にやはあらぬ

讀人不知

あまたの本に此とくかけり。草をしのふわすれとさま／＼に申。いづれも心たかはねとも。家本にまかせて。わすれくさにてこゝろなうへき也。

いかにかく心一つをふたしへにうくもつらくもなしてみず覺
ふたしへとは二の様と云事也。ふた心あるさまをうらみて
いへる也。

とすれは玉にくらへしまず鏡人のたからとみるそかなしき
年來の鏡を人にはなちけるにやあらん。ますかゝみとは十
寸鏡と書り。まずみの鏡の事也。真寸鏡とも又は眞澄鏡とも
かけり。まろにして如朝日なる鏡也。鏡を玉に取くらへし
事。日本紀にみえたり。

嬉しけに君かたのめし言のはゝかたみにくめる氷にを有ける
うれしく思へと。たのめをきしとののははかなき事。たゝ籠
にくむ氷のとしといへるなり。

行やらぬ夢路にまとふ袂にはあまつ空なき露やをくらんをきけるイ同
師説云。夢中の泪なれば。あまつそらなき露やをくらんとよ
めり。

身はやくならの都と成にしをこひしきとのまたもふりぬる同
はやくとは速字也。すみやかにと云心なり。身はすみやかに
ならの都のとく。むかしかなりになりはてたれとも。こひし
きことはいまたふりすといへり。

思ふ人思はぬ人の思ふ人思はさならん思ひしるへく同
我おもふ人の我をおもはぬか。又人をこふるなる。その戀ち
るゝ人つれなくてあれな。我思ひしらぬを思ひもしるへく

といへり。

わかれをは悲しきと聞しかとうしろ安くもおもほゆるかな
是はをくれけるものとつまのおやのもとより。よみておと
このもとへやりけるなり。別ればたかひに命にかへて人の
おしみ侍るに。わか別こそ後會はんといふ事もあるましけ
れは。中くうしろやすくおほゆれと云也。

雲井にて人をこひしと思ふかな我はあしへのたつならなくに同
此歌たゝ人の詠にあらず。芦邊鶴おほくは雲上にて音をな
けは。かくよみける也。

伊勢の海にはへてもあまるたくなはのななき心は我を勝れる同
漁人の網の引繩をたくなばといふなり。さま／＼に申事あ
れとも。只綱引繩なるへし。あまの焼繩といひ。あまの繩焼
なといへるも。網の繩のふるくなりたるを海士人の焼ける
也。

卷第十

戀二

侘人のそほつてふなる泪川おり立てこそぬれ渡りけれ情致仲
そほつとはすこしぬるゝ心也。おり立てとは。ひたすらにお
もひしつみたるこゝろなるへし。

音にのみ聞こし三輪の山よりも杉の數をは我ぞみえにし百人不知
あはぬものゆへつれなくなり。たつれてゆき／＼せし事の。

あまたたひ／＼なりしとにや。

難波鴻かりつむあしのあしつゝのひとへも君を我やへたつる

兼輔朝臣

芦筒とは蘆の筒の中に。うすやうのとくなるものをいふと
そ。

あし引の山あはすともふみかふふ跡をもみれば苦しかりけり

大江朝綱

山居といひて。病とそへたり。

中將朝臣

けふ過はしまし物を夢にてもいつこなはかと君はとほまし
何期を遙に君はとほてあるらんといふ也。けふあずにかき
りたる身のたのみなきを。いつもはるかにあるへき身とお
ほしてやとひたまはさるらん。はかなしとらみ申たるな
るへし。

不定友

我のみやもえてやみなんよと共に思ひはなれぬふしのねのと
如富士之根煙。我思馴たりといへり。不離とよむ人あり。歌
のこゝろをしらさる人なるへし。

讀人不知

春日野の飛火の野守見しものを無名といはしつみもこそうれ
春日野のとふ火の事。古今若菜の歌の所に注之。歌のこゝろ
は。なき名そとあらそへる返事に。なき名には非ず。まこと
そとかされていへる歌なり。若菜摘得といひて。罪とそへた
るにや。

元良のみこ

あふ事は遠山すりのかり衣きてはかひなき音なのみそ鳴
師説云。きぬなとの摺には。おほく遠山をすれるものなれ

は。かくよめるにこそ。一本に遠山鳥とあり。音なのみそな
くといふにことよれるにや。摺の遠山いはれあるうへに。大
納言本に遠山すりとあり。

あつよのみこ

ふかくのみたのむ心はあしのれの分ても人にあはんとぞ思ふ
師説云。蘆根はみたれたるものなれば。分てもとおもふ心の
あなかちなれば。分たつれてもといふなり。

土佐

我袖は名にたつ松の末なれや空より波のこえぬ日はなし
末の松山波もこえなんといへる事をよめり。末の松山の事
見古今注。仍重不染筆。

卷第十一

戀三

清原師賢

くれはとりあやに戀しく有しかは二村山も越す成にき
くれはとりとは綾の名也。あやに戀しくは。あやにくに戀し
かりしかはといふこゝろ也。綾をば一むら二むらといふを。
三河の國の二村山にそへよめるなり。

清輔卿云。くれはとりとは綾の名なり。文王の時に吳國より
二疋綾獻之。仍必綾をはくれはとりふたむらとつゝくる也。
吳字をくれとよめはなるへし。吳竹と書てもくれたけとよ
めはなり。くれはとり。雖多説々。吳綾名と心得て。ふるくよ
める歌の跡を見るへし。なまはつかしき事。つゝしみていは
さらんは。いはんよりはよかるへし。さる事なしとは又おも

ふへからす。

あさかほの花まへにありけるさうし

壁子にはあらず。大裏に曹子とて。梅壺桐壺などのやうに。

こゝかしこにあるつほれの名なり。

百敷はをのゝえくちし山なれや入にし人の音つれもせぬせんな

もゝしき。さまゝの説あり。只大裏の名と可心得也。或は

百仕義と書。又百司儀とかけり。百官の事なつかさとり給へ

るゆへに。大裏をこ申にや。をのゝえくちし事。古今雜歌注

にみえたり。

誰となくかゝるおほみにふかゝらん色を常磐にいかゝ頼まん頼人不知

師説云。おほみとは新嘗會の祭にウラアヒ卜合人は小忌を着る。卜に

不合人の例の東帶したるを。其夜は大忌の公卿といふ也。實之

月かへて君をはみんといひしかと目たに暮れば戀しきものを

月かへてとは月替也。來る月と云こゝろ也。事書に見合て可

心得也。

いせの海にしほやくあまのふち衣なるとはすれとあはぬ君哉頼人不知

鹽にはなるゝあふといふ事あり。人に馴にそへたり。一所に

ての戀心なるへし。ふち衣とは藤布の儀にはあらず。いやし

き人の衣なるへし。不治衣ともかけり。よき人こそ天子より

始めて官位ある人は。そのしなヤマカッマウトにしかひて。衣の様は

きたまりたれ。いやしき島夫海人なとのあるにまかせたれ

は。木を着草をむすふほとなり。故云不治衣。

あらかりし波の心はつらけれとすこしによせし聲そこひしき藤原寺正

御簾こしを淵越とよめるなり。

厭はるゝ身をうれはしみいつしかと飛鳥川をそ頼むへらなる伊勢

うれはしみとはうるはしきと云事なり。但此歌のうれはし

みは愁の心とおほゆ。あすか川はきはめて淵瀬かはりやす

き河なれは。この川のとく人のこゝろもかはり安ければ。け

ふこそつらくとも。またあすはものととく。おもひなをす心

もありなんといへり。

津國のなにはたゝまく惜みこそすくもたく火の下にこかるれ紀西親王

師説云。すくもたく火。浦にすむあまなとは。もくつをかき

あつめてたけは。心よくもえすして。くゆるはかりのけふり

なり。さて下にこかるゝとよめり。津のくにのなにはとつゝ

けたるは。名にたゝん事のおしければといふ。心ないはんと

て。津のくにとよみたる也。

みるめ荻方そあふみなしときく玉もなさへや鹽はかつかぬ頼人不知

みるめは鹽海の藻也。湖水に有まじきなり。たまもと砂交

のうきもなるへし。

かつらきやくめちの橋にあらはこそ思ふ心の中そらにせめ同

日本紀曰。昔大和國有役優婆塞と云。葛城與吉野之間。巨橋

祈請神。然而在葛城山一言主神。一夜之間始巨石橋。謂行者

曰。吾貌醜。仍夜々ハカリ欲亘橋。行者謂。不可然。行者只欲亘盡。一言神忿怒ヲ携ヘ詐僞ノ言詣常帝。(天武天皇。)行者謀叛之由ヲ頼訴申之間。帝驚捕行者。配流於伊豆國。于時白鳳十七年丁酉二月七日云々。一言神猶行者在世。重奏奸僞之隱謀。欲刎行者首。于時勅使所報之劔有表文。勅使驚奏事之由。則不可誅之由被下宣旨。有赦免。于時大寶元年辛丑五月日夏。後行者大忿云。命請蒼天。身宿王五之習。休恐綸命。夏交配所之塵。全悲恐汝也。護法神練麻縛一言主神。薨深谷畢。爲大石在今也。(已上金峯山緣起。)

逢みてもつゝむ思ひの侘しきは人まにのみそ音はなかけれる

人まとは人の見ぬ時そ音はなくといふ心なり。

小山田のなわしる水はたえぬとも心の池のいひはもらさし

いひとは井樋とて。田つくる農夫の水はからひして。田こしにわたすかけひなとのたくひなるへし。

卷第十二

戀四

戀をしこひはといひたりけるとは

古今第十一戀部に。

種しあれば岩にも松は生にけり戀をし戀はあはさらめやも

此歌下句を云歟。大旨此集にきゝしれることばとみゆる。流

の歌の上下は古今集歌なり。

我宿と頼むよしのに君しいらは同しかさしをさしこそはせめ
師説云。たのむよしのとは。山のまに／＼かくれなんなと云。ふる歌のこゝろをよめり。世のうければ吉野にかくれなんとおもふ所に。君いらはかさしとは。山にいる人柴なをととりてゐたる前にたてゝ。鹿にみえしとかまふる事をおなしかさしをもさしてんとよめるなり。

野中のしみつ

古今第十七雜歌之所注之。

住の江のめにちかゝらばきしにぬて波の數をもよむへき物を

波はたちよる物なれば。男のたちよる數をもかそへてんといへるによせたる也。

そのはゝなけなる物と聞しかと思はぬためは君もしるらん

なげとはなをさりにといふこゝろ也。等閑と書り。文の詞にはなをさりならすこゝろいへると見しに。おもはすなりにけるよといへる也。

おほしまに水をほこひしはや舟のはやくも人にあひみてし哉

はや船。大島とは備前國に有。彼島に更に水のなき間に。陸路より水をとりにて。朝夕島人の世をわたる也。彼船を水はこ

ふばやふれと万葉なとにちよめるなり。

よのつねの人の心をまたみねは何か此たひけぬへき物な

なにかとはわれと云心也。汝字の心なるへし。己とものをのれ

なにかとはわれと云心也。汝字の心なるへし。己とものをのれ

なにかとはわれと云心也。汝字の心なるへし。己とものをのれ

なにかとはわれと云心也。汝字の心なるへし。己とものをのれ

なにかとはわれと云心也。汝字の心なるへし。己とものをのれ

共よめり。

高砂の松をみとりとみしとはしたの紅葉をしらぬ也國人不知けり

松の紅葉。或云。延喜御時ひと國より獻小松あり。この松下葉の紅葉したりけるを御覽して御製云。

下紅葉するをはしらて松のはのうへのみとりを頼ける哉是よりして松の紅葉とによめると申。

かけるふのほのめきつれば夕暮の夢かとのみそ身をたとりける御製

かけるふとは。日のかけるふ。雲のかけるふなとも申たれとも。此かけるふは蜻蛉とおほゆ。此虫は夕におほく飛出て。

夫婦の儀切也。しかも不至朝之虫也。切に迷戀失身といへり。かゝるむしのばかなきをみれば。我身も夢かとのみたと

らるゝと云なり。

かけるふの詞。古歌云。

かけるふの岩垣淵のかくれにはふして死ぬ共なか名はいはし是はものゝ影とみゆ。

つれ／＼のはる日にまかふ蜻蛉の影みしよりも人は戀しきかけるふの夕さりくれば里人のゆつきかたけに霞たなひく

これらは虫とおほゆ。

ひき蘭のかく二籠りせまほしみ桑こきたれてなくをみせは此讀や

師説云。ふたこもりとは。ひとつまゆにかいこのふたつこもりたるをいふ。桑をこくによそへて。こきたれてなとよむ

也。

卷第十三

戀五

蓮葉の上はつれなきうらにこそ物あらかひはつくといふなれ國人不知

師説云。此歌のはらすをはすなはとかきて釋したる人あり。家本には只何事もろかにやすき事をを用い侍れば。はらすはとかけり。蓮葉は池にあれば只付へき物にあらずとて。

はすなばに貝を付るもいはれ有へけれども。貝付るはすなはうらあるものにあらず。うへはつれなきうらにこそと。

二句までよみすへたる歌を。面なきものといはん事。歌の本意なくや。池の蓮の葉にも貝に似たる物あり。うへつれなく

うら物や叶へからん。大納言もはちすはとかゝれたり。源氏物語

いせの海のおまのまてかた暇なみ存命へにける身をそ恨むる源氏物語

師説云。此歌先人命云。往年參崇徳院之次。以女房給草子一帖。被仰云。此抄物或好士稱秘藏物所持也。召座加一見。即可

返上。物外可然哉。所存如何。依仰於御簾前披見之際。不能委細。即返上申云。古來書出如此物之時。雖先賢皆少々事誤難

遁候歟。此抄物又事大概優美候。但此中あまのまてかたと書て未勘と付て候。此歌あまのまてかたと存候。海邊に蛤と申

物砂中に候。其かたの候なるを見て。海人等急これをさしとり候なるを。いとまなしとは詠候由基俊申きと。件物其時不

知誰人所近。(後撰)手跡又不知之。若清輔朝臣歟。其手跡未知見。即

返上訖。後經多年。奥義集(卷二)條院之時。まゝかきの釋所書

加也。彼時中旨。和談者相語候者之間。結意趣書此事云々。如

此抄物之時。惣字誤多見。後撰集書傳事也。此事父京兆祖匠

作ナト存知被傳受去。彼時不可注未勘之由上。以往年未勘後

日注出。非傳授之說之由分明也者。

庭訓如此。大納言本又まて分明也。彼まゝかた。月の笠。同事

之字誤也。

或云。左大將家歌合顯昭歌。

左 寄海人戀

藻蘆草あまのまゝかたなられ共戀のそめ木もいとなかり是

右方申云。あまのまゝかたはまてかたといふ説あり。是はい

かやうに被定にか。

陳云。まゝかたと存て詠也。後撰歌てとくとかよへとも。い

とまなみと云は。しほかく事になへり。萬葉伊勢物語等に

も。しほかくをいとまなしとよめり。一齊宮女御歌に。まゝ

かたにあまのかきつるもしほくきとあるも。まてには不叶。

又難云。和泉式部歌に。

いせの海の蜃のあまたのまてかたに折や取らん波の花なみ

此歌にまてとかけり。又室山入道か龜鏡集にもまてかたの

部に入たり。又しほはまといへ。鴻にしほやく事やは

ある。

陳云。式部歌はまゝと書たる本もあり。あまのあまたのいへ

る。猶しほやく心歟。撫籥は濱也。まゝ事は鴻に時也。是土民

もしか申也。又馬給すなこの中に有。これをとらんにいとま

なかるへきに非ず。

右又云。それはまてにもかきるへからず。海人のしわさはさ

まゝいとなまれば。いとまなみと詠歟。

判者尺。左方あまのまゝかたとよめるうへ。戀のそめ木もい

となかりけりといへり。下句も優にしもきこえさるへし。此

事かくし執申へきにおよはさる事なり。但後撰の英明朝

臣の歌はあまのまてかたとよめるなり。此事往昔崇徳院御

前に侍し時。如上まゝと物とにかけらば。未決魯魚の疑人の

事也。心は何もおなしけれとも。まゝかた不可用。彼英明朝

臣詩歌上手也。事にきて僻事なとすへきにあらす。

あふ事のかたのへとてそ我は行身をおなし名に思ひなしつゝ

逢事の難きとそへて。方の邊といひて。おなし名とよめり。

さゝら波まなくたつめる浦をこそよにあさしとはみつゝ忘め

さゝら波とばかりさき波の名なり。樂々夏浪とかけり。或

云。波名あまたあり。

敦經入道云。

ななみ。さなみ。さゝらなみ。はゝのてかへし。はま

ならし。以上五の波。みなこなみの名也。

其いはれをは何ともいはず。是は其國其所にいひ付たる詞にやあらん。

人をのみうらむるよりは心からこれいまさりしつみと思はん
いまさりしつみとは。むかし人に戀られし時。さま／＼によ
かれともいはず。のろふとき／＼しな。いまさりしつみのむく
ひにや。こゝろくるしく。又わか人を恨るといふなり。のろ
ふとは呪咀する心也。伊勢物語云。むかしおとこありけり。
宮のうちにてあるこたちつねのまへをわたるに。あたみ
おもふ心やありけん。よしや草葉のならんさかみんといへ
りけるといふも。男を女の呪咀したるとは也。さて男のよみ
ける。

つみもなき人をうけへは忘草をのかうへにそおふと云なる
うけふとは咀字をよむ。又はのろふとよめり。

しゐて行駒のあしをるはしをたになと我かたに渡さしりけん
まてといはゝねてもゆかなんしゐて行駒の足をれ前の欄橋
古今第十四にみゆ。萬葉歌に。

とゝむるにしゐてつれなく出て行駒の足おれまへのたな橋
おとこいましはしとてとゝまりにけりといへり。此歌の心
なるへし。

あさりする時そ佐しき人しれぬなにはの浦にすまふ我身は

同

あざりとは漁人のわざ也。

或云。あざりいざり同事也。但朝にするをあざりと云。暮に
するをいざりと云也。

是古老の海人かたしかの説なるへし。

めらみえず涙の雨のしくるれば身のぬれきぬはひる由もなし
ぬれきぬと云事本説あり。むかしよきむすめもちたりける
人。是をかしつきて后にもなとおもひけるに。いく程もなく
て。うみおきて母なん身まかりにけり。後の母是をめさまし
き事に思ひて。さま／＼にあしき事をのみ父にかたりけれ
は。父不用。なをやすからずと思ひて。そこしも海のちか
りければ。海人をかたらひて。しほたれ衣をとりて。かのむ
すめかねたるかたはらにかくしをきて。ち／＼をいさなひて。
日比申せし事そら事ならず。あれはいかにとて。かのしほた
れぬれたる衣をみせたり。父まともおもひて。むすめをうし
なひにけりといふ。是よりしてなき名おふをは。ぬれ衣きる
といふと申。周の伯奇か罪をうけしたくひならん。
夕やみは道もみえねは古郷はもとこし駒にまかせてそくる
みちしる駒の事。韓子といふふみにいはく。晉仲事齊桓公爲
上卿。桓公北征孤竹大雪。目迷失路。仲云。者馬之智可用也。
於是放老馬隨之。遂得歸本國。これよりしてもとこしこまみ
ちしるといへり。

卷第十四

戀六

あふとをよとにありてふみつのもりつらしと君をみつる比哉
みつのもりとは水守也 淀にあり。田つくる人のうつみ穂を
わたして。淀河の水をうくる也。まさる時はとめ。さなら
ぬ時はかへるやうにあやつる。是を進退するものを水の守
といふなり。

しつはたにへつるほと也 白いとの絶ぬるそとは思はさらん
師説云。しつはたはみたれたるよしなふ也。おもひみたれ
たるほと也。只はたといへば。字のたらねば。賤のしわさに
よせて。しつはたといへり。

月にたに待ほとおほく過ぬればあめもよにこしと思ほゆる哉
あめもよにこしとは。雨夜はよもこしといふへきに。聞にく
さうへ。字のたらねはかくよめる也。又ば雨に備來しといふ
こゝろとも申。

人しれす待にねられぬ有朝の月にさへこそあさむかれけれ
是はまつ夜むなしく明行空の月に。わか人しれすまちつる
さまも。わらはれぬへしといふこゝろ也。

卷十五

雜一

さかの山御幸絶にしせり川の千代の古みち跡は有けり

むかし嵯峨天皇の芹河の行幸のありけるをとおほしめし出
て。光孝天皇又芹河行幸有けるに。在納言御として所詠歌
なり。

或云。仁和三年正月廿二日。光孝天皇芹河行幸ありけるに。
中納言行平鷹飼にてありけると申。

おきなさひ人なとかめそかり衣けふばかりとそたつも鳴なる
おきなさひ。さま／＼の義家々に申なり。

師説云。おきなさひとは。老て猶されすけるよし也。

或云。おきなさひとは。事うるはしくとゝのほりて。拔群貌
也。

元永二年十月内大臣家歌合に基俊。今朝みればさなから霜
をいたゞけり おきなさひゆくしらさきの花。人ノ／＼おきな
さひの事不審申てとばれけれども。金吾さる事侍りとはか
りいひて。打うなつきて更に何とも申されす。秘藏せられけ
るにや。

或云。おきなさひとは。老て又わかやく心といへり。在納言
の心尤此義にかなへり。基俊歌も此心とみえたり。在納言の
其日の跡をいふに。もてのほるに。はなめきゝわかやきかへ
りて出たりけるとみえたり。いろ／＼のいにてすり。狩衣
のたもとに大きなる鶴の形をぬひて。件の歌をやかてぬひ
あらはしたりけるといへり。

翌朝に獻致仕表事。尤叶此儀なるへし。又古歌云。

夕霧に立かくれつゝをみなへしなつさひてこそ霧さひなん
是も女郎花のしほれたるを。我にたはふれてわかやけとい
ふにや。神さひまさるとば。榮あらたにて嚴重なる舩とおほ
ゆ。抑或人云。在納言此歌の事によりて。攝津國須磨へ配流
と申。はなはた僻事也。むかし田邑帝御時つみせられけると
はみえたり。くはしくは古今雜下に彼朝臣の歌の所にみえ
たり。

照月をまさ木のつなによりかけてあかす別るゝ人をつなかん

河原左大臣

師説云。まさ木のつなとは。正木のかつらつなになひて楠木
を引事にそへたり。老後乗船之次。聞梶取男之言語。あのま
さきのつなくりこせといふ。あやしくて問之。答云。山の崎
に舟をつななく綱を申也。雖非此歌之事。依聞及注之。

限なき思ひのつなはなくこそ正木のかつらよりもなやまめ

行平

師説云。おもひのつなとは。思緒。愁緒。別緒。心緒なといふ
事の心なり。なやまめとは。わつらはめと云心也。頗字也。
蓮葉のはひにそ人は思ふらんよにはこひちの中に生つゝ

詩人不知

師説云。荷の莚ヘノヘイと云物也。

こひ人をよはふといふ事にそへたり。忍戀の心なるへし。
いせのうみの釣のうけなるさまなれと深き心は底にしつめり
笙カケを優げなるとそへたり。心ふかくものおもひしつめる心

也。

相坂關并蟬丸事

見古今雜部歌注。

ひたゝれこひにつかはしたりければ

ひたゝれとは非俗直垂。老夜着綿衣也。

五節事

見古今雜部注。

人のおやの心はやみにあらね共子を思ふ道にまよひぬる哉
彼納言のむすめの十六になりけるを。かたちおかしけなり
とて。延喜帝にめされにけり。その事のうれしさにたへすし
てよみけると申。

由緒

あけてたに何にかはせんみつへのの浦島の子を思ひやりつゝ

山陰

浦島の子傳記云。當雄略天皇二十二年。丹後國水江浦島子。

獨乘船釣鰓龜。島子應浮浪上。頻眠船中。其之間雲龜爲仙

女。玉鑽映海上。花鏡耀船中。迴雪之袖上。還雲之鬢間。容貌

美麗而失魂。芳顏黃鵠克詞。不異楊妃西施。眉如初月出娥眉

山。雲似落星流天漢水。島子問神女曰。以何因緣散來吾扁舟

中哉。又汝捷何所。神女答曰。妾是蓬山女金闕主也。不死之金

庭。長生之玉殿。妾居所也。父母兄弟在彼仙房。妾在昔世結夫

婦之儀。而我成天仙樂蓬萊宮中。子作地仙遊澄江浪上。今感
宿昔之因。隨俗境之緣。子宜向蓬萊宮。將遂曩時之志願。令爲

羽容之上仙。鳥子時言。口傳女語。須臾向蓬山。於是神女鳥子携到蓬萊山宮。而今鳥子至門外。神女先入金闕。告於父母。而後共入仙宮。神女並居如數星連天。衣香飄々似春風之送百花香。鳳聲鐸々如秋鶴之韻萬嶺。鳥子已爲漁父。亦爲釣翁。然而志成高尚。沒世幽心。誓在強弱。得仙白健。其宮爲舫。金精玉英散丹墀之內。瑤瑤瑤瑤瑤瑤之表。清池之波心。芙蓉開唇而茂。玄泉之漚漚。調荷含咲不凋。鳥子與神女共入玉房。薰風吹寶衣。而露濕添香。紅雲卷翡翠。容離鳴玉。金窓斜素月射曉。珠簾動松風朝暉。刺犀金升石髓。葵飲玉酒瓊漿。千葉芝蘭駐老之才。百節萼萼延齡之術之。發漸見鳥子之容顏。翠絲枯槁。逐日骨立。定知外難成仙宮之遊宴。而內催故鄉之戀慕。宜還舊里。尋訪本境。鳥子答云。折足侍仙洞之霞延。常嘗驚藥之氣。非是我幸乎。久遊蓬臺之蘭臺。恣甘羽容之玉盃。非是我樂哉。抑神女施施。曉曉夫密近退在左右。豈遂旨乎。雖然夢常不結。眠久欲覺。魂浮故鄉。浪浸新房。願吾暫假舊里。即又欲來仙室。神女宜然哉。與送玉匣。裹以五綵。緘以萬端之金玉。誠鳥子曰。若欲見再逢之期。莫開玉匣之緘。言了約成。分手辭去矣。鳥子乘船。如眠自飯去。忽至故鄉澄江浦。尋不值七世之孫。求只成萬歲之松。鳥子歸于時二八歲許也。至不堪披玉匣見底。紫煙昇天無其賜。鳥子忽然頂天山之雪。垂合浦之霜矣。

淳和天皇御宇天長二年乙酉。浦島子飯舊里。其間經三百七十七年星霜云々。或云。雄略天皇當二十年。浦島子到蓬萊云々。(其間年序能可勘之。)

或云。丹後國餘佐郡朝河明神者彼浦島子也云々。祭有之。五月三日四日五日六日。於右近馬場有騎射事。左右番有子細事也。委曲之次。見古今第十一卷部之始。右近馬場のひおりの歌之所注之。

思ひきや君か衣をぬきかへてこき紫の色をきんとは
右大臣

廊説云。こきむらさきとは三位の袍を云也。袍は一位より三位まで同色。四位紫也。五位緋。六位綠。叙五位之時に着五位藏人袍。五位叙四位之時着貫首袍。四位叙三位之時着大臣袍也。庶明則參議正四位下左大將。天曆五年二月任權中納言。叙從三位。于時九條右近大將の袍をつかはしける歌也。今世には四位袍偏に公卿に因て着也。資房卿説などにも。叙三位着改袍の由みえたり。(餘條々推量不足言事也。)

返し

古しへも契りてけりな打ばふきとひたちぬへき天の羽衣
庶明朝臣
師説云。とひたちぬへしと云は。任中納言。悦喜自愛之由。させる子細もなき事を不心得して。其事となき除名人なと類たるいたつら事也。河社といふ事にそら事おひたる舫也。

まめなれとあなは立ぬたはれ島よる白波をぬれきぬにして

まめなれとゝは。眞寔なれとゝいふこゝろ也。古今序にきめ

なるところにはといふ同心なり。たはれ島とは肥後國に有。

たはるゝといふ心にそへよめる也。たはるゝとは狂たる貌。

餘麗のこゝろ也。古歌云。

たはれをと我はきつるか宿かさす我を返せりおそのたはれを

萬葉云。此歌は六伴黒主を思ひかけて。そのとなりなりける

女の。いやしき女のさまにつくりて。夜ゆきて火給はらんと

いひけるに。かゝるすきくしき女ともしらて。火をとらせ

てかへしやりつ。女おもはずに覺て。あしたに此歌をよみて

やりけると申。たはれをとば遊士狂男とかけり。色好と云是也。

おそとは空言なり。

小夜更て君かとまやを今そゆくたちまちの月出もあはなん

月の異名あまたある中に。たちまちの月は十日以後廿日以

前の月といへり。ねまち。ふし待。廿日比よりの月也。

小野好古朝臣にしの國のうちてのつかひにまかりくたりて二

とせといふに四位にはかならずまかりなるへくおもひけるを

ならさりければ

好古は太宰大貳兼筑前守葛絃子。道風舍弟也。天慶元年正月

有近少將。二年正五位下。四年五月一日從四位下。(五十八。)

今案之。此歌今年所詠歟。

西國討手使とは伊豫海賊藤原純友追討事也。(子時橘遠保爲副將軍伐純友也。)

卷第十六

雜二

賀茂臨時祭

宇多天皇御即位之時。はしめてかもの社へ臨時祭を獻したまひしなり。十一月中酉日也。

寬平元歲己酉十一月廿一日己酉。始行賀茂臨時祭也。古今說彼社所に。

みこし同じくそのよに年をへてけふの御幸を待てみつらん

師説云。北野に御輿岳といふなかり。延喜十七年潤十月十

七日。行幸北野。其時枇杷左大臣中納言大夫左兵衛督にて侍ける時よみ給へるなり。

一本にみこしをかきてと書たるは。みこしかかにてといふ

を。愚疑の不審をなす。その事となき事也。此ころおさなき

人神社行幸に聞ならひて。北野大原の行幸を神社のゆへと

思ふは僻事也。むかしは鷹狩得らんせんため。嵯峨宇多などの

これらの野へ行幸ありけるに。御輿を昇居たりけるを御

輿と云。今北野御社者。一條院御宇天曆三年之比。依御託

宣始奉崇賀御社なり。延喜十七年之比は北野神社之義おは

しますへからず。此比は菅家於鎮西御薨去なりけるなる

へし。

うつろはぬ心のふかく有ければこゝらちる花春にあへる（後）

師説云。此御歌誰も心得わきたる人なきにや。こゝらちる

花。世人の物云なとみたれたりとにや。またうつろはてのと

かに春にあへりとかや心得ず。長閑に春にあへり。

京極中納言かやうにしるしをかれて後。又此孫として誰も

争加一言申管哉。

一ふしにうらみなはてそ笛竹のこゑのうちにと思ふ心あり

是は平調曲にある想夫戀といふ樂のこゝろをよめるにや。

彼樂起六條入道語云。大唐國有一女人。號無比女。本夫合量

膳雜興。去舊妻射新婦。本妻不堪其怨。以琴彈此曲。本夫於

蕭門之邊聞之。有感情。去新妻迎舊婦。仍號想夫戀也。

結置きし形見の子たになかりせばなに忍ふの草なつまし（思ふ心の）

信の子を筐の籠にそへよめ也。

なつきをつたへさせ侍りけるに

是は名次歟。名符二字すると云事のある事やあらん。

卷第十七

雜三

としふれはわかくろかみも白河のみつわくむまで成にける哉（ひかきの）

作者檜垣女は筑前國のものなり。すき／＼しく色このみけ

る女なるへし。水者汲まてと云て。三輪組まてとそへたり。

年の老たる貌をみつわくむと申也。或老人云。みつわくむといふ事。老人のかゝまり量貌也。左右の膝立てやとしたる形也。まさにもみつ輪ありとみゆ。

或云。みつわくむまてと云。みつわさすまてと申て。皆老躰

心と思へり。三輪組。三輪指。たゝおなし心也。但此儀いさゝ

か不審也。老かゝまりたればとて三の輪あるへしや。この詞

ちしく心得て。今案によめるにや。

澤應すといふ詞あり。これも老人の事より出来たるなり。幸

子傳云。昔何國哉一人の老翁に三人の男子あり。兄弟はたち

にたらず。父九十餘。老たる事をかなしひて二人の子に云。

汝等れかはくは吾年の老たる事を天に祈て。今一度わかく

なすへしと懇切に申。二人無貳。以至孝之志祈天。經數日。夢

に一人の童子來示云。汝か家の面に大河あり。彼河の南に万

仞の淵あり。彼淵をはやく埋て。其上に樛壇。燒香懺花可祈

請。然者汝等父立。可還壯年者云々。二人の子一夜一同に此

夢を見て。大に悦びて行向彼淵見其跡。更非可及力。雖然漸

々埋之。不經幾年月。不日といふばかりに此淵を埋つ。祈請

之趣如夢之所見。然而三七日終て其朝に父を見るに。白髮忽

に黒く容貌二十ばかりとみゆ。一父心二子悦いふにたらず。

于時父悦云。汝等之運土埋淵。滿愿してのゆへに。今みつわ

さするほどになれりと云なりとを傳をしへはへりし。

抑槍垣女歌事。清輔卿説云。肥後國遊君槍垣姫。老後ニ落魄者也。家集にいはいく。住所もなくなりて水波程になりて。楳引さけて出しなり。國守神詣に出給ふ道に指令たれば。目さとなるもの見付て。いかにかくはと見とかむれば。守なにそと問けるに。名たかき槍垣なりと。人のいふを聞てよひ出れば。はつかしけれとかくれ所もなきに。楳さしをきて居ぬ。いかてかかくはあるそ。おもひ煩ひ詠ける歌といへり。白河とは件所にある河の名也。

宮の瀧むへも名におひて聞えけり落るしら沫の玉と響けは
注 皇御覽
菅家御記に。

昌泰元年十月廿日。太上天皇鷹狩せさせ給ふ。其夜あめの宮におはします。つふさなる事は式部大輔長谷雄朝臣注せり。盃たひくたりて後。夜中にならんとするほとに。上皇右大將菅原朝臣に仰られて云。博士の家はいましたかならずしもうつら雉のゑものにたのしはず。あけんあしたに片野におはしますとおはしめず。御ともにまいらん事如何。菅原朝臣御ともに候すへきとを奏す。廿一日つとめて出たしせたまふ。御供に候人く。常陸大守貞數親王。權大納言右大將菅原朝臣。參議勘解由長官昇朝臣。四位右兵衛督藤原清綱朝臣。右近衛中將在原ともゆき朝臣。左兵衛佐源善朝臣。五位備前介藤原朝臣春仁。これらをはしめて都て五人。饗飼に

坂上宿禰六位已下のつかさとるもの八九人。とに御ともにつかまつる事をゆるされたり。大略片野御遊は延宴したまふ。放鷹捕雉下馬折花等事々々之。廿二日宮瀧をさして出させたまふ。その夜は山城のつゝきの何某のふるき院にとまらせたまふ。館舎つくるはす。星月あらはにみゆ。略之。廿三日大和國高市のこほり右大將のさうにやとらせ給ふ。廿四日ひさう寺におはしまして佛おかみたまふ。聖珠法師山のくたもの煎茶をさうけてすゝめまいらす。瀧のもとにいたらしめ給て。四五里ばかり吉野のこほりの院にやとらしめたまふ。廿五日宮瀧につきてあそふ。たちやすらふに目のくるゝ事をもしらす。其瀧のありさまはめぐり三四町ばかり。たかくさかしからねとをとはいとたかく。はやくなかれたるいは。つもれる雪のくつれかゝるかとし。水の中の所々に大きな石あり。あひさる事遠きは一丈あまり。ちかきは七八尺。此わたりの人々木をきりととりて。石のあいだにわたして。橋としてすゝみわたりにて瀧をみけり。あやうき事ははまれり。さらにいふへくもあらず。水のかたはらにひとつの草の庵あり。いほりの中にひとり女あり。九十はかりなり。馬なとのあるをみて。おとろき出ておやしみ見る。さふらひの人々女にとふて云。こゝにすむ事いくとせ。水のそこいくらはかりなる。女答云。こゝにすめてより以來一七

十年よりさきには。水のそこみそひろはかりなり。今はわつかにとひろあまり五ひろ六ひろばかりなりと申き。末世の好士。此瀧たゝなとにのみ聞て。ふかくこゝろえしらさらん事を思ひて。彼御記をうかゝひて。をろくしるして。みちなとふ心さしあさからす。よゝ野の瀧これなり。

通鑑

たちちめはかゝれとてしもむは玉の我黒髪をなてすや有けん宗貞出家の日の歌なり。宗貞藏人頭にて。仁明天皇によりなれつかうまつりし寵臣なり。然而仁明天皇壽祥三年三月四日崩す。深草山に收たてまつりけるに。今はかきりの御ゆきのありさま。たきゝつきぬる煙のすゑ。沙羅林の春の夕まで。はるかにまなこにうかひて。猶世にましろへきこゝちもせずなりにければ。くらまの山のおくにまといひ行て。谷川の邊にうちやすみつゝ。もとゝり切てけり。母のならにありけるかもとへ髪をつかはしける。つゝみ紙にかきつけゝる歌と申。かの谷川のほとりにてやすみける石はいまだありとかや。

長明記云。俊恵が師とある時歌ものかたり。終日師弟契約之後事歟。長明以俊恵爲師習歌道云。此歌事語り出で。たかひに日出度よし申。俊恵云。中にいつれの詞かとにすぐれたる。おほさんまゝにのたまへといふ。こたへていはく。かゝれとてしもといひて。むはたまのとやすめたるほとこそは。

とにめてたゞ侍れと申。むやくく。はやく歌は境に入給にけり。歌よみはかやうの事にあるそとて。さまゝの事申けるとて。くばしく見彼記。

うへし時契やしけんたけくまの松にふたゝひあひみつる哉

藤原元俊

清輔卿云。たけくまの松は奥州たちのまへにおひたり。いつの代よりといふ事をしらす。元善歌にうへし時とよみたるおほつかなしといへり。或云。此松むかしよりあるにはあらず。宮内卿藤原元善といひける人。任にばしめてたちのまへにうへたる也。たけくまとはみちの國のたちにある所の名なり。此人ふたゝひ彼國守になりて下向。彼歌は後の度詠するところの歌なり。又たけくまのはなはのまつともよめり。源重之歌。

武隈のはなはにたてる松たにもわかと獨ありとやはきくはなはとは山のかげなとのさし出たる所をいふとそ。ちかく下向したる人はかたりける。抑此松野火にやけにければ。源満仲任の時に又植にけり。そのゝち又うせたりけるに。橘道真當州任之時又尋に。萬歳の跡新松事。其のち孝善下向之時。剪々橋につくりて。のちなかくうせにたり。なさけなき心はせ。松名ともにくちせず。

しら雲のきやとる峯の小松原敷しけれや日の光みぬ

元鳥藤秀

白雲の來宿也。

卷第十八

雜四

玉江こくあしかりを船さし分てたれを誰とか我はさためんよみ人不知

玉江とはつくりたるやうにうつくしき入江也。玉はほむるとはなり。小舟とは片舟也。ちいさき船なるへし。

いせわたるかはし袖より流るればとふにとはれぬ身はうきに鬼伊勢

伊勢國なとへわたる河にはあらず。是は多河といふこゝろ

也。いせとは五十瀬とかけり。五十重イソヘイシマ五十嶋。五十日イソノヒ(兒産

在之)なといふとはのこゝろなるへし。かはしとは。しばや

すめ字也。たとへばあまたの河をわたる袖よりも流るゝ泪

と云也。

今こんといひし計を命にてまつにけぬへし女の母さめのとし

師説云。さくさめの刀白。諸人一同説。しうとめの名のよし

金吾も申されければ。さてこそはあらめ。但讃岐入道顯朝

臣か説とて傳たり。さくさめのとしと云は。早蕨早苗なと申

早字のこゝろなり。わか草はつ草の草。未通女。たをやめ。は

つせめ。かうちめ。わかくさめの年にて侍に聞ぬへしとよめ

るか。しうとめ平懷の事ならは。とはにあとうかたりの字を(女)

とりてかくへしとおほえず。すこしつねになき事なればや。

あとうかたりとはいふへき。あとうかたりとはなそくか

たりといふ事歟。拾遺にはなそくかたりと書たり。清輔卿

云。行成卿刀白とかゝれたり。匡房卿語しは。さめはしうとめの異名なり。としは年にあらす刀白なり。此しうとめ刀白にてありけるなるへし。或云。さくさめのとし。しうとめ也。日本紀にみえたり。能因。顯昭等もとしとはしうとめ也としるせり。

花にたつなき名きよめむもしきのひとの心を枕ともかな伊勢

花にたつとは。あたに世にしらるゝといふこゝろなり。一本

に塵にたつと書たるもあしからず。人の心をまくらともか

な。とかく我名をたつる大裏うちの人のかゝるを皆枕にし

てればや。一夜もわかあたる名たつといふ事。けにもとは

おもはしものと云也。

身のうさをしればはしたに成ぬへみ思へは胸のこかれのみする同

はしたにとは。半にといふこゝろ也。たとへば昇進もせず沈

もはてす。こゝろくるしくおもひすてかたきこゝろなるへ

し。へみとはへしといふ詞也。

御ときおろしをたまはせければ

御衣のふるきを賜也。或本に御ときおほしと書たり。あやま

りなるへし。

卷第十九

離別 歸旅

おりくゝにうちてたく火の煙あらは心さすかを忍へとぞ思ふ實之

心さすかとは。我家をわするなといふこゝろ也。
たひのてうと

てうとゝは調度こかけり。旅の具なるへし。

讀人不知

そむかれぬ松の千歳の程よりもとゞとたに慕はれせん
師説云。ともくは共にといふこゝろ歟。歌にもあり。そむ
かれぬといふ心もおほつかなし。このうたなかゝに難儀
ともいはれねと。師説もなく了簡も不及。集作者おほつ
ね。清輔卿朝臣の本におほつ少將とあり。家本には只おほつ
ふね。敦忠中納言の嫡。中納言おさなくてよひつけられたり
ける名を。やかて書たるといふも。まことに無下にうちとけ
事なり。名なくは棟梁かむすめともかくへけれと。勅撰作者
にかくてのせられたれば。よく定にける名ときこゆ。大納言
本にもおほつふねとあり。宮少將これを家本には藤原敦敏
と書て。少將敦敏と申されき。それを宮少將とかきて。佐國
目錄にもかく書たり。僻事といひしを。大納言の本に宮少將
とあれば。これにこそはつかめ。すへて此集詞も作者もおほ
やけ事ともみえず。最初の草案かと思ゆる。いかなりけると
にか。

亭子のみかとおりゐたまふ

寛平九年七月廿五日。御位を東宮にゆつり給ふ。春宮于時十
三歳。醍醐天皇これ也。さて寛平法皇雖行苦行しまゝ

て。承平元年七月十九日崩。(御年六十九。法名金剛覺。)

讀人不知

船なくてあまの河までもとめてん漕つゝしほの中に消すは
天河を求と云事本説あり。漢書云。漢武帝之時。張騫といふ
ものをつかばして。黄河の源をもとめしめたまふ。鶯河畔に
いたるに。有女濯衣。鶯問云。是をは何所と云乎。女云。是天
河也。汝如何道に可迷と云て。一石を興て以之可爲驗。又云。
日をふさきて行へしとて。乗船送之也。忽本土。武帝以件
石見東方朔。見之云。是織女の機の石也。支機石と云是也。武
帝封之爲博望侯。張泊望と申是也。

卷第二十

慶賀 哀傷

とのれも竹も千とせのこゑすれば人の思ひにかなふ也けり
琴笛の事をよめり。萬秋樂千秋樂等のめてたき聲々を。千年
のこゑなとよめるなり。

年星をこなふ

非年星。有口傳事也。在寛一見也。其年のほしにあたる人
行之。云年星行也。(又有秘説。)

傳正仁致

けうそくをおさへてまさへ萬代に花のさかりを御覽しつゝら
まさへとはましますといふこゝろなり。或云。鴈足は仙人な
との翫具なれば。たてまつりけるにや。玉案といへるは玉鴈
足也。是仙人餐なり。

年の數つまんとする重荷にはいとこつけをこりもそへ南こつけとは小黃楊也。子を小にそへあそはしたり。いよ／＼御子をまたんとあそはしたり。黃楊はよろつのいはひに入木也。

にひいろ

是鈍色衣也。涼間に着也。帷鈍と申衣なとはなり。しろき衣也。素服は涼衣なるへし。

ねさうをこなふ

とは年三行也。長齋經云。

若有善男女等。修年三之齋戒。忽脫諸難等。護殊勝福利。其年齋者於年有三箇月。所謂天帝尺爲其主。領廻四天下。檢計衆生所作善惡。其正月三十日向南閼浮提。二月赴西瞿耶尼。三月行北鬱檀。四月有東弗婆提也。天帝以正五九月巡向南州。注記衆生作業云々。謂年三とは正五九月也。一年三度此愼南州ニアル故ニ云年三也。余三州モ年二也。源氏玉鬘君子時廿歳。の事をいふに。ものをおほししるまに。身をいとうき物におほして。ねさうなとをこなはれたまふとかきたるも。此經文の心なるへし。抑或人云。此集爲跡。古賢のかたり侍しは。歌姿をはしらす。たいこゝろをさきにせり。其故はよろしきうたは古今集にとりつくされて。そのうちいくほともへすしてえらひける

程に。歌えかたかりけるといへり。おほむね古今集みかきたてける鈍屑なるへし。されとも歌詞には此集の歌詞と伊勢物語の歌詞をまねふへきにやといへり。

拾遺集の比より其跡とのほかにものちかくなりて。とはりくまなくあらはし。姿すなほによろしとぞ。

後拾遺の時。今すこしやはらきて。むかしの風をわすれたり。やゝその時のふるき人はこれをうけきりけるにや。後拾遺すかたと名つけて。くちおしき事にしけりとぞ。或先達かたり侍し。

金葉集は又わざともおかしからんとして。やう／＼なる歌おほかり。詞花千載は大略後拾遺の風なるへし。歌のむかしよりつたはりきたるやうかくのとし。

或云。此集者天曆五年十月。於梨壺和万葉集歌之次。以藏人少將伊尹朝臣爲和歌所之別當。謂能宣。元輔。順。時文。望城等撰之。和歌所之根元是也。又云。於此集稻家之證本。皆以有謬說。先賢云。中書之時。度々雖及内覽。猶以不叶欲慮歟。仍其間不治定之本。流布于世間歟。

又云。此集證本者花園左大臣家本也。青表紙白イ自引開端令書之由いへり。證本之旨表紙令書之云々。

又云。

此集歌部都合千四百二十首。

〔拾遺歌ニハ六十九首マサレル也。拾遺千三百五十一首。又短歌有之。〕

本云往年治承之比。古今後撰雨集。受庭訓之口傳之後。嘉祿三

年八月之比。記別紙給之由見彼與書。

本云嘉元二年九月下旬受庭訓畢。去乾元元年之比。自正月十八日及三月晦。古今後撰之雨集受庭訓畢。雖然猶受說。

桑門昇蓮在判

元應元年十月三日重清書訖。

以右本校合書入落字畢。

以右本令書寫校合訖。

永祿三年八月日

侍從藤判

〔右後撰集正義以南奏文應本校合〕

源圓

續群書類從卷第四百五十五

和歌部九十

難後拾遺抄

後拾遺とてこの比世にかきさはく集あり。人のもたるをいとまのひまに人によませて聞つれば。いとおかしうおほゆる歌もあり。またいかゝあらんとおほゆるもあれば。これをかきいたして。それはさそといふ人あらば。げにともおもはんとてなり。このなかにやんことなき歌よみのよめると。かきつけられたる歌の心えかたきもあれば。それをもおそろしなからかきつけたるなり。是は心のおよはぬにもあらむ。よみ人をも歌のことはをも。かきたかへたるもやあらん。おほかたきしてはらたちそしる人もありなん。ゆめく。

後拾遺第一

・天曆三年太政大臣の七十賀し侍けるに よしのふ

たつのすむ澤への蘆のしたねとけ汀もえいつる春は來にけり
これ上手の歌とかきつけられたれはいとおそろし。あふひ
て信すへけれとも。さばへと云ことはとみきはといふ言葉。
おなしことなるうへに。みきはにもえいつるとこそいふへ
けれ。みきはもえいつるとあれば。にもしいるへうこそおほ
ゆれ。げにくはしからねと。そのわたりのことなれば。もや
うにもよみたるうたもあらん。ふるき歌に。もかりふねいま
そなきさにきよきなるみきはのたつのこゑさはくなりとい
へるも。おなしことそかし。それもよき歌のなんにこそさふ
らふなれ。歌もかれはかりはなければ。いかゝはあるへから
ん。

民部卿奉憲卿近江守にて歌合しけるに 讀人しらす

春たちてふる白雪をうくひすは花ちりぬとやいそきいつらん

鶯は春花のをりなくものなれとも。しはすによりて。谷よりいつるといふことのあらはこそかくはよまめ。されはものとこのころにはあらずきこゆるはいかゝ。

正月二日あふさかの關にて鶯のなくをきよてよみ侍る 讀人しらす

ふる里へゆく人あらはことつてんけふ鶯のはつねきゝつとあふさかの關にて。鶯の初音をきいていとおかしければよめるか。さらばあふさかといふことあるへし。さらすばさせることなし。かねもりかけふ白川のせきはこえぬとよめるは。みちのくにはいとほるかなる所のしら川のせきまでゆきて。みやこへつけやらんとよまれたればこそおかしけれ。これはかれをまねひたるか。おとりたれば見くるし。なほつけまほしうは。ともの人ひとりしてつけにおこせん。いとやすきことにはあらずや。

選子内親王のいつきとまうしける時人ノ、まいりて梅か枝とまうす歌をうたひけるに

ふりつらん雪きえかたき山里に春をしらするうくひすのこゑ此歌はもしかきたかへたるにやあらん。ふりつらんはもしふり積るか。

正月七日の日子日にあたれりけるに雪のふり侍りけるに 伊勢大輔

人はみなねの日の松をひきにゆくけふのわかなは雪やつむ覽この歌はわかなはゆきやつむらんといへるも。おかしきやうなれとも。ひきにゆくことあるこそすへらかにおほえね。おほよそおきなけなるなり。

正月七日卯の日にあたりて侍りけるにけふは卯杖つきてやといひにおこせて侍りければ 通宗朝臣

卯杖つきつまゝほしきはたまさかに君かとふひの若菜にけりとふひわかなといへるは。あしうもあらねとも。つゑつきつまゝほしきとはよみたれと。おほよそかなひたることを社さもよまめ。うつゑつきてゆかまほしきとあらはこそあらめ。わかなつむにはかならずつえをやはつくへきとおほゆるはいかゝ。

正月七日周防内侍かもとにつかはしける

藤原三位

數しらすかさなる年をうくひすの聲するかたの若菜ともかな 貫之歌

つみたむることのかたきはうくひすのこゑするかたのわかななりけり

とよめるは。わかなつみに野へにいてたるに。うくひすの聲するかたをきくほとに。わかなゝむつみためぬとあるこそいうにもあれ。すくにかれをとりて。こゑするかたとよみた

(二歌)
るか。ささるへしともおほえぬなり。かの歌を本歌にてよみ
たるは、ささるイ
たりける歌あらんや。

長樂寺にて

能因法師

よそにてそ霞たなひく古里のみやこの春はみるへかりける
みやこのふるさとつゝきたらましかばとおほゆるかな。
またよそにてなん見るへかりけるとあれと。そのことゝも
なければ。けにいうなりけんとおほえぬなり。たゞひとむ
らのかすみなりけりとよめるこそ。さそあるとはおほゆれ。
春なにはといふところにて網ひくを見てよみ侍ける

藤原節信

はるく^{（音歌）}とやへのしほちになく網をたなひく物は霞なりけり
このうたはおかしうよみたるを。あるものゝいひしは。つら
ゆきか歌にはつふとかはらぬを。いかてえらひいれられた
るにかとて。そのとはききたまへさりしか。もしまかせたれ
は春のつなてはをのつからかすみたなひくものにやはあら
ぬと。集にいれたるにやあらん。それにはこのうたはかすみ
のたなひくといふことを本にてあるをとれたれば。さのみ
こそはあれ。もとやすの親王の歌に。うくひすのねのひのま
つのうれしきはきみにひかれてやちよと思ふとよまれた
るを。よし宣か。

ちとせまてかきれる松もけふよりはきみにひかれてよろつ

よやへむ
とよめるは。よしのふかきうたにこそいひつたへたれ。つ
らゆきか。

わかやとのものならなくにさくら花ちりをはえこそとめ
さりけれ

とあるを。花山院の御歌に。

わかやとのさくらなれともちる時はこゝろにえこそまかせ
さりけれ

とよまれたるは。なかにも天徳の歌合に。かれもりかこひの
うたに。

ものやおもふと人のとふまてとよめるは。その折よりいま
にいうの歌といひつたへられたるを。そのさきのうたに。こ
ひしきをさらぬかほにてしのふれはものやおもふと見る人
そとふとあるを。そのおりもさいふ人もなかりけるにやあ
らん。またかゝることのあるにやあらん。よくしりたる人に
とふへきなり。詩などにはかゝることとおほかり。また
くたつれしるへし。

屏風の繪に鳥おほくむれぬたる所を人く眺望した
るところを

長 能

かりにこはゆきてもみましかたをかのあしたの原に雉鳴なり
もしゆきところにやありけん。たゞこの歌のたいは。とり

おほくむれぬたりとかきたれば。みつとりなともやありけん。さらはきゝすとよまれたるはいかゝあらむ。鳥なればいづれもおなしことか。花鳥の詩題にあるは。鶯とはなとおもひならはしたるな。丞相の御詩に。とりのうたにつるをつくられたることあり。またかりにてもゆきてそ見ましとあるは。みむにては。いかなるとりにても。とりかと思見るましきにやはあらん。たかゝりをそへたれと。つゝきのさるへしともおほえぬなり。よみしりよまれたりとも。このうたかひともあるを。いひきかせん人ちかなとおもふたまふる也。またたくひのことをよみて。とりのことたじをよまぬにもやあらん。おほづかなし。

たいしらす

嘉言

梅かゝをよはの嵐の吹ためてまきのいた戸のあくるまちけりいとおかしきうたなり。たゝしこれよみたるひとの。この歌かたりしは。梅のかをよものあらしのふきためてとこそ。もしかもしにかきたかへたるにやあらん。此定なりしこそいますこしまさりたれ。

題しらす

公任卿

梅かえにふりつむゆきは年ことにふたゝひ咲る花とこそ思へはてのおもへは。もしみれにやあらむ。いますこしいひにくきうへに。もしあまりたるなり。

かへる鷹

道信中將

ゆきかへる旅に年ふる鷹かれはいくその春をよそにみるらん春は花のあるをなとよまれたらばこそ。けにともおほえめ。たゝ春をなむよそに見るとあらんは。なにことのいみしかるへきか。また旅にとしふとは。みちのほとにとしをへはこそ。かくはよまめとおもほゆるは。ひかことをおもひたまふるにや。

花見にまかりけるにさかのなやくをみて

なりすけ

こ萩さく秋まであらば思出でんさかのなやゆきし春はその日とこれはおもひいてゝ。なにことのいみしかるへきともみえずこそ。

ける

雅通中將

おれはおしおらてはいかゝ山櫻けふをすくさす君に見すへきかへし

盛少將

おらてたゝかたりにかたれ山さくら風にちるたにおしき匂を本歌のこゝろば。この花をおりてきみに見せんとおもふに。花をおらむはおし。いかゝせんとなり。さらはそのこゝろさしのほとをこそいはめ。たゝはなをのみおしみたるはいかゝあるへからん。またかたりにかたれといへるか。たゝ人の

ものいふやうにこそおほゆれ。

後冷泉院御時うへのをのこともはな見にまかりて

高倉の一宮にまいりたりけるに 一宮駿河

おもひやるころはかりは櫻花たつぬる人にをくれやはする
うたの心はいはれたれとも。人にをくるといふことは。い
まいましきところおもひならはしたれば。いとはれにいた
さんうたには。いかゝあるへからん。

よるさくらの花をおもふ

能因法師

さくら花春はよるたになかりせば夢にもものは思はさらまし
ゆめにもちるとみるこそわひしきといふ歌こそあるやうに
おほゆれ。それをよみたるか。これはなにことも見えねは
いとおほつかなし。

つゝしむへきとしなればありくましきよしひはへ
りけるに三月ばかりに白河にまかりたりけるをき
てさかみかもとよりかくもありけるはといひをこそ
てばへりければ 定頼卿

さくら花さかりになれば古郷のむくらの門もさゝれさりけり
ふるさととはたふふるくなれるいゑをいふか。さらばい
れたり。もしすまぬいゑをいばいゝかゝあらん。これはなら
のみやこのことをよむよりおこりたることゝそきゝたまへ
し。

第二春下

ふちの花

齋宮女御

むらさきにやしほそめたる藤の花池にはひさす物にそ有ける
いけにさきかゝるともなくて。いけにはひさすあれば。い
かゝあらん。

第三夏

つくし大山寺といふ所にて歌合し侍りけるによめる

元慶法師

わかやとのかきねなすきそ郭公いつれのさとおなじうの花
此歌はつくしにはへりしほと。良暹といふそ。うの。わかよみ
たるとなんいふときいて。これはふる歌とそきくといひ侍
しは。七十のほうしのわかゝみによめりしかば。そらことゝ
はおほえすとまうしゝな。元慶法師とかきつけられて侍し
を。この集えらはれたる人にとひはへりしかば。實源律師か
つくしにありけふほと。元慶といふものゝまさしうよみた
りしを見しなりとまうせは。そのよしをかきたるなりとあ
るを。實源かつくしにありけることは。資道大貳のつかひな
り。耳遅かわか歌とまうしことは。そのさきのことなり。
良暹かふる歌をわかといひけるにやあらん。元慶か歌とい
ふことはそらことなり。もし元慶法師か良暹か歌をかきて
いたしたりけるにやありけん。いつれにてもありぬへきこ

となれと。空ことなりとおもふたまふればかきつくる也。

いにしへをこふることはへりけるころあなにて時

鳥を聞てよめる

増基法師

このころはれてのみそまつ郭公しはし都のものかたりせよ
ねてのみそまつといへるは。またなかなとこそおほゆれ。ま
ちつるにきこゆるとあらはこそさもいはめ。またみやこに
は。

永承五年六月五日祐子内親王家歌合に 伊勢大輔

きこつともきかすともなく郭公心まとはすきよの一こゑ
よしとき歌に。たゝ一こゑのこゝろまとひにとよめるを。
まれひよみたれとも。たゝおなしことのおとりたれば。いか
ゝあるへからむ。

兼房朝臣

夏の夜はさてもやれぬとにときす二聲きかむ人にとほゝや
一こゑといふことは。よるほのかになきわたるものなれば。
むかし人のよみつたへたるなり。ふたこゑきかは。あかれぬ
へければや。二こゑをきくひとにとほゝやなとはありもや
せん。これはいといはれもなき歌かな。

宇治前太政大臣の家の卅誨の歌合に 赤染衛門

なかぬよもなく夜も更に郭公まつとてやすくいやはれらるゝ
この歌合は右方にてはへりしかは。そのほとのことばくは

しうきいたまへしなり。故宮内卿經長は藏人の弁に相方人
にて。その歌ともを四條大納言の長谷にこもりゐられたる
所にもてまうてゝ。とひあはせられけるに。まうされける
は。歌はあしうもあらず。さらにといふことはこそ。よしと
もなういたつらことなれと。まうされけるときゝたまへし
こそ。さもあることゝおほえしか。

おなしたい

赤染衛門

よもすからまちつるものを時鳥またゝになかてすきぬなる哉
これはほとゝきすのつねのことにて。めつらしうもおほえ
ぬうへに。またたになかてといふことはゝ。あやしの人のつ
ねのことはにも。よくもおほえぬはいかゝ。

大貳三位

またぬよもまつよもきこつ時鳥はな立花のにほふあたりは
花たちはなのにほふあたりはなとは。いひなれたるやうに
見ゆるを。またぬよもとあるは。いかなるおりすさまじう
で。またてはあるにかあらん。たゝまたてもきくとあらは。
さてもありなん。まつよもとくらへたれば。さはきかまほし
うもあらぬにこそとおほゆるなり。

五月五日はしめたるところにまかりて 惠慶法師

香をとめてとふ人あるを菖蒲草あやしく駒のすさめさりける
この歌のこゝろ。もしわれはかをとめてきたるに。入はすさ

めつとにやあらん。それにてもあるをの言葉こそいかゝあるらんとおほゆれ。あやめをはむますさめすとはよむらんや。

大貳高遠

むかしなほはな橋のなかりせばなにゝつけてか思ひてまじこれは花たちはなのといふことを本文にてよみたるにやあらん。そのことゝもなうしてうた^{かうはい}かいよむらん。證歌たつぬへし。

題しらす

曾根好忠

來てみよといもかいふちにつけやらんわれ獨ぬるとこ夏の花ことのこゝろ。ほかにあるいちにつけにとにやあらん。さらはたいにさやかへからん。いもはわかいへにのみあるものなるを。ことつてせんとはいひてんや。もしたひによめるかおほつかなし。

泉入夜寒心かよみ侍ける

源師賢朝臣

さよなかにいはゐの水の音きけはむすはぬ袖も涼しかりけり水は手にこそむすへ。そしてやはいかゝあらん。さてむすはぬとはよむそかしとはいふへけれと。あるへきことをこそさもいばめとおほゆるはいかゝ。

第四秋上

七夕於長能家

能因法師

秋のよをななきものとは星合のかけ見ぬ人のいふにそ有けるされはなかうもみちかうもおほゆるとこそあらめ。いとおほつかなし。

居易初到香山こゝろを

藤原家經朝臣

いそきつゝわれこそきつれ山里にいつよりする秋の月そも此題は居易の老住香山初到夜。秋逢白月正圓時といふ詩なり。されはおもひやるにえもいはぬことなり。としおひて。いまはとてこもりゐに。やまてちにむかふ夜。八月十五夜にあへりけんはかりのことはいかてかあらん。それをいそきつゝとよみて。としおひてこもりゐにといふこともなきは。いとみくるしき歌かな。なかにもとしおひてやまにのほろはしられさりけん。

客依月來といふこゝろを

公任卿

わずれにし人もとひける秋のよは月てはとこそ待へかりけれ此歌のこゝろに。をのく月によりて來るといへは。月のあかきに。諸ともにみんとて人のきたるなり。ししうといひし女房の。月かけは山のはたくなりけりいはといひし人につけはやとよめりし歌は。いてはといふことを。心はへあることにてはあるな。ことはもこゝろもかばらさらんば。いかゝはあるへからん。またかのうたばよみよし。これはいてはとこそといふところいとよみにくし。文字あまりたる

ふる歌もあれと。すへらかによまれてこそあるやうにおほゆれ。またたいにちきるともなくて。月に人のきたらむこそいうにもあらめ。月いてんおりちきりたらんは。たゞ月におもひいてゝきたらんには。なとりもやすらん。

花山院の東宮とまうしける洞院におはしましてあきの月をもてあそばせたまひけるに 大貳高遠

秋の夜の月見にいてゝよはふけぬ我も有明の入らてあかさんはしめのくにいてゝとよみたるは。はしにいてゐてともなければ。家をいてゝ月みにありくとおほゆるに。つきのくにいらてといへるは。はしにいてゐるとおほゆ。されははしかいへかのほといとおほつかなし。

題しらす

赤 染

今宵こそよにある人はゆかしけれいつこもかくや月をみる覽この歌はよみたるいはれなきにしはあらねと。よにある人のすることはなとやうにあらましかは。いはれぬへきな。おほつかなきうへに。させることなうこそおほゆれ。

鈴虫を聞て

公任卿

としへぬる秋にもあかす鈴虫のふりゆくまゝに聲のまされはるイ四條大納言は歌よみのなかにも。心得ぬ歌なとよむへき人にもあらぬを。いかにあらんとおもふたまふることのあるは。わかひかことにこそあらめとおもひたまへなからも。か

きつけて社は。かやうのことしりたらむ人にもとはめとてなり。としへたる秋とは。いかなることにかあるへからん。人もし草木なとこそさもよまめ。秋はとしにそひてあるものを。とりはなちていひてんや。もし虫をよまれたるか。さらばむしはとしふるものにやあらん。詩なととしへたる秋なとつくられ。歌にもかくよまれたらば。けにともおもふたまへんするなり。

後冷泉院御時后宮歌合

伊勢大輔

さよふけて旅のそらにて鳴鷹はのか羽風やよさむなるらんよさむなるらんなどいふほとは。おかしきやうなれとも。はかせにあたりなといはゝこそあらめ。たゞはかせやよさむなるらんとあれば。ことはたらぬやうにおほゆるは。ひかおほえにやあらん。

土御門右大臣家歌合

源爲善朝臣

秋萩をしからみふせる鹿のねをねたき物からまつそきまつるねたきものから。いとをさなけなり。

第五秋下

第六冬

山の雪を見て

能因法師

紅葉ゆへ心のうちにしめゆひし山のたかねはゆきふりにけりしめゆふとはなにことにかあらん。もみちをみて。こゝろに

かけしところのゆきふりにけりとは。させることなくこそ
おほゆれ。

第七賀

第八別

ちゝのもとにゑちこにまかりけるにあふさかの關を

こえて爲善かもとへつかはしける 藤原惟規

あふさかのせきうちこゆる程もなくけさは都の人そこひしき
まつはとこそきゝたまへしか。さてはまさるらんものを。こ
れはためよしかなかたりしは。のふのりかこのうたをよみて。
おこせて侍しかへりことを。ゑちこにつかはしたりしに。の
ふのりはうせて。ちゝためときか返事をいとおはれにかき
つけてして侍し。いまにうしなはてはへりしとこそ中めり
しか。

第九羈旅

第十哀傷

三條院御時皇太后宮のきさきにたちたまひける時藏
人つかうまつりける人のうせさせたまひておほむさ
うそうのよしたしきことつかうまつりけるをきゝて

山田中務

そなはりし玉の櫛をさしなからあはれかなしき秋に逢ぬる
そなはりしとは。なにことをよみたるにか。たまのおくしと

は。やんことなきみやつかへには。たまのをくしといふこと
やあらむ。齋宮のいせへおはするおりに。うちのさいたてま
つりたまふくしをこそ。きやうに人のいふに。これに似すら
やあらん。

道信中将もろともにもみちみんなといひてちきりて
はへりけるにかの人みまかりてのちの秋よみ侍ける

藤原實方朝臣

見んといひし人ははかなくきえにしを獨露けき秋のはなかな
みむと云しこそ。おもふたるところもなけれ。またたいには
もみちとかゝれて。歌にはばなとあれば。もしかきたかへら
れたるにやあらん。

としころすみけるをんなにわくれてまたのとしはて
のわきなとしけるに ときひさ

年をへてなれたる人を別れにしこそは今年のけふにそ有ける
いはれぬにはあらねと。いとこそめつらしうもおほえね。

よしたかの少將みまかりてのちあくる歳のあきいも

うとの夢に見えける

逢事をみなくれことにいてたてと夢路ならてはかひなかり鬼
いとあはれなりけることかな。たゝしあふことをくれこと
にいてたてとも。ゆめならてはえあるましとにやあらむ。さ
らひみなはなにことに。またくれことにとあるは。ゆめに

見えはこそさもよまめ。ゆめの歌なれば。たしかにもなきにやあらん。

第十一戀一

おんなのいゑちかきところにわたりて七月七日

公任卿

雲井にてちきりしなかは棚機をうらやむばかりなりける哉
この歌ははるかなるくもゐにて契りしに。ちかうなりにたりとにやあらん。さらはたなはたは雲井にてこそちきらめ。もしあふことのちかつくをよまれたらは。そのよしや見ゆへからむ。をよはぬか。あなおそろし。

第十二戀二

大貳高遠かものいひ侍けるおんなのいゑのかたにら
にまたしのひてもいひ侍けるなんの侍けるか門
のまへよりしのひてわたりけるをいかてかきゝつけ
ゝむきゝつけて女のもとよりつかはしける

よみ人しらす

すきてゆく月をも何かうらむへきまつ我身こそ哀なりけれ

この歌はすくるつまを(き歌)もなにかうらみん。みをそうらむる

とあらは。いはれたるへきな。あはれなりけれとあれば。こゝろはさなめりと見ゆれとも。つきみてはあはれになん覺ゆるとよみけるを。たゝわかみをのみあはれなりと。月をば

すてたるやうにきこゆるはいかゝ。

男のこんといひけるをまちわつらひてゆふけとはせけるによもこしといひければこゝろほそくおもほえて
よみ人しらす

來ぬまでもまたれしものを中々にたのむかたなきこの夕かな
もとはさちきこえたり。すゑのゆふへかなとあるこそ。むけにひたことにて。おもひもいらぬやうにおほゆるなり。またおなしとなれと。ゆふけといふことはもあらまほし。

入道攝政九月ばかりの事にやよかれて侍けるつとめてふみをこせて侍ける返事につかはしける

大納言遺綱母

きえかへり露もまたひぬ袖の上に今朝は時雨の空もわりなし
わりなくといふことの。さらなることにて。上手の歌とおほえぬなり。

伊勢の齋宮わたりまかりのほりて侍ける人に忍ひて
かよひけるなをほやけにもきこしめしてまもりめ
なとつけさせ給てしのひにもかよはずなりにければ

左京大夫遺雅

柳葉やゆふしてかけしそのかみにをしかへしてもにたる比哉
もしゆふしてかけしにやあらん。もとのさい宮のおりのやうににたりとよめるなめり。さるにてはさせることもなき

歌かな。

心さし侍ける女のことさまになりてのち石山にこも

りあひて侍ければよみ侍けるに

前大納言經輔

こひしさも忘れやはする中／＼に心さはかす志賀のうらなみ
うたはなたらかなるやうなれと。すゑにしかのうらなみと
あるに。もとにそれにかゝりたるとやよまるへからん。いし
やまにてよまれければ。ちかきほとにて。しかとよまれける
とはおほゆれと。歌にも見えぬはいかゝはあらん。

たいしらす

たか袖に君かきぬらんから衣よな／＼われにかたしかせつゝ
この歌。かたしかせつゝ。いひさしたるやうにて。いとほや
く。

たいしらす

西宮前左大臣

忘れなんそれも恨みす思ふらむこふらんとたに思ひをこせよ
こふらんとよまれたる。かみに思ふらんとあることはこそ
あまりにたれ。こふらんこそおもふらんにあらめ。もしな
ほもかされていふにてば。すゑのおもひといふ。おなしこと
にはあらすや。

第十三戀三

第十四戀四

としころあはぬ人にあひて後つかはしける

道命法師

あひみしをうれしきと思ひしはかへりてのちの歡なりけり
あひみて後またこひしきは。なか／＼くやしといふか。さに
やあらんとはをしはかられたれと。そのよしこそあらはに
見えぬ。

題しらす

藤原元真

み山木のこりやしぬらんと思ふまにいと、思のもたまさる哉
これは人のこるへきか。なにことも見えぬは。もしかへし
にやあらん。

平兼盛

思ふてふ事をいはても思ひけりつらきも今はつらしと思はし
おもふてふをいはても思ひけりといはし。つらきをもい
はしとあらはこそよからめとおほゆるは。もしひかおほえ
にや。

たいしらす

類なくうき身なりけり思ひしる人たにあらはとひこそはせめ
これはこひかなに事を。もし人たにあらはといふは。おほか
たのこゝろさしか。いとおほつかなし。

君こふる心ばち／＼にくたくれと一つもうせぬ物にそ有ける
この歌はち／＼といふに。ひとつといへるをことにてあるに
や。いと見えろしきうたかな。ひとつもうせずとあるは。

なにことのあればといふもしもみえぬは。

藤原長能

我心かはらんものかかはらやの下なくけふりわきかへりつゝ
かはらんものかとよみたるは。人をおもふことのかはるま
しきか。おほつかなし。げふりをわくとはいふらんや。わき
あかるやうなりといふもおもひたるか。又清少納言か歌こ
そすゑはいたく似たれ。

わすれすにまたわすれすにかはらやのしたゝくけふりした
むせひつゝ

かれゝに成侍りけるおとこによめる 藤原範永朝臣女
打はへてくゆるも苦しいかてなを世にすみかまの煙たゆらん
些歌いとおかしうよみたる歌なり。よとよもにとこそきゝ
しか。(マ)くむすめのおぼりとて。承香殿女御の御方にありし
か。歌とこそいふめりしか。このしうにてたれともかゝれぬ
はいかゝ。

露はかり逢そめたる男の許につかはしける

和泉式部

白露も夢もこの世もまほろしにたとへていへば久しかりけり
これくのはてことにもとよめるは。ひとつはもしな
らはこそは。それにたとふるともおほえめ。さらすはこれ
にたとへたるにこそとも覺め。さらすはこれにたとへたり

ともおほえず。もしおとこをいふか。本歌あるへし

第十五雜一

月夜中納言定頼か許につかはしける

彈正尹清仁親王

板まあらみあれたるやとの寂しきは心にもあらぬ月を見る哉
月をこそみれとありけるにや。是にてはひさしきにてやあ
るへからん。

その夜かへしはなくて二三日はかりありてあめふり
ける日みこの本へつかはしける 中納言定頼

雨ふれは圍の板まもふきつらんもりくる月はうれしかりしな
こゝろはいはれたり。たゞしうれしかりしをやわかとのや
うならむ。またもりくる月うれしきにては。やをふかせても
ありなんば(音歌)もとの歌はこゝろにもあらずとよまれたるを。
をしてうれしかりきとあるも。いかゝはあるへからん。

齊信民部卿のむすめにすみわたり侍けるにかの女身
まかりにければ法住寺といふ所にこもりゐて侍ける

に月を見て

民部卿長家

もろともになかめし人も我もなき宿にはひとり月やすむらん
たいはいとあはれなり。またいはれぬにはあらず。たゞし
われもなきや。やすらかにもなからん。

思ふ事ありけるころ山寺に月を見てよみ侍ける

源爲善朝臣

山の端に入ぬる月のわれならはうき世中に又はいてしな

この歌心はあはれなれと。はてのいてしなといへるこそ。たはふれことのやうにてあさはかなれ。おほよそ月のまたいてさらんは。いと不便のことなり。かゝることはよますこそきいたまふれ。

月のおほるなりける夜入道攝政まうて來てものかたりしけるにたのもしげなき事といひ侍ければよめる

大納言道綱母

曇る夜の月とわか身の行末とおほつかなきはいつれまされるもしおほつかなきにやあらん。またさすかにその事とこそみえれ。

村上の御時うへにのほりて侍けるにうへ御とのこも

齋宮女御

かくれぬにおふる菖蒲のうきねして果はつれなく成こゝろ哉これほうへのそられをせさせたまひたるを。つれなきとはよまれたるか。さらは見ゆとやあるへからん。わかみか。ひとのおほんことか。みえわかぬ也。

源頼光朝臣女におゝれて侍ける比霜のをきたるあし

小大君

たにつかはしける

このころの夜半のね覺は思ひやるいかなるをしか霜はらふ聲しもはらふらんとは。たれをいかによみたるぞ。こゝろえぬ

らん人にとふへし。

大貳國章妻なく成て秋風の夜寒なるよしなよりにつけていひおこせて侍ける返事につかはしける

清原元輔

おもひきや秋の夜風の寒けきにいななき床にひとりねんといみしうたゝありにて。おもひたるところもなうおほゆるかな。またさむけきといへるは。この歌にてはありつかぬやうにおほゆるはひかことにや。

能宣身まかりて後四十九日のうちにかうふりたまはりて侍けるに大江匡衡かもとよりそのよしいひをこそてはへりける返事にいひつかはしける

祭主輔親

すみそめにあげの衣をかさねきて涙のいろのふたへなるかなこれはよろこひのなみた。なけきのなみたは。ふた色にそあるとよみたるか。しからはなみたはなけきもよろこひも。こゝろにしみておほゆることにていてくるものなり。けにあかきなみたは。うれへのふかきよりおこりたるにはあれとも。ならへてひとつはあかしとよまんとは。よろこひのなみたはあかうはなしといふ。本文なと見えすはいかゝあらん。よくしりたるひとにとふへし。このちのなみたの本文は。むかしからに卞和といふ人。荆山と云山にて。あら玉をえて。

ときのみかとにたてまつれるを。空たまてまつりたりとて。左のあしをきられぬ。またつきのみかとにたてまつるに。おなしやうにそらたまなりとて。右のあしをきられぬ。またつきのみかとのとき。このたまをいたして。三日三夜なきけるに。なみたつきて。つくにちのなみたをもてすとあるなり。さてそのみかとのとはするに。あしのきれたることはなにともおほえす。このたまのもちゐられぬを。かなしふなりといひければ。たまつくりに見せられけるに。いみしきたまなりとて。もちゐられたりとなることなり。いはゆる和氏璧とて。くるま十二兩をてらすなといひつたへたる也。

第十六雜二

小式部内侍のもとに二條前太政大臣はしめてまかり

ぬときゝてつかはしける

堀川右大臣

人しれすねたさもねたし紫のねすりの衣うはきにもせん

このうたのこゝろ。わかひとしれすありしことは。うすきう

はきなりとあらば。さもやあらん。たしかにもこそ見えれ。

うはきといふこと。歌などによむへくも見えす。

左大將朝光かよひはへりける女にあたること人に

いはるなりといひ侍りければ女のよめる

よみ人しらす

ねぬなはのねぬ名のいたく立ぬれば猶大澤のいけらしや世に

ねぬとよめるは。ねぬにぬるなのたちにけるとよめるか。かくてはねぬなたちになちたるといひなされぬか。

高階成棟小一條院の御ともに難波にまいるとていかにこひしからんすらんといひをこせて侍ければ

中宮内侍

しほし。そ思ひも出め津の國のなからへゆかは今わすれなん此歌よまれたる歌なるを。なからへゆかはいまわすれなんといふことは。ふるき歌なりと人のいふらんはいかゝ。たつぬへし。ふるきにあるふしなれと。のちの人よくよみなしたるやうもあり。ふままくをしきと云歌は。のれなきてやなといふことはをとりながら。めつらしうなしつゝあれば。おかしうはあるそかし。

第十七雜三

はらからなる人のしつみたるよいひにこそ侍

りける返事につかはしける

藤原元眞

君をたにうかへてしかな泪川しつむなかにもふちせありやと

ありやといふことは。かたくありと云はありなんや。またし

つむといふことは。ふちにしつみ。せにば沈ましきか。

世中をうらみけるころ惠慶法師かもとにつかはしける

る

平兼盛

世中を今はかきりとおもふには君こひしくやならんとすらん

此歌いとおかし。たゞおもふにはとよみては。きみこひしく

もならんとすらんとあらは社はしめにはかなはめ。とすら

んとあるは。すこしたかひておほゆるは。わかこゝろあしう

えたるか。

小一條院高松女御にすみうつり給てたえ／＼に成給

てのころ松風心すこく吹けるをきゝて 堀河女御

松風は色やみとりにふきつらんもの思ふ人の身にそしみける

みにしめはわかみやみとりになりぬらんとこそよまるへけ

れ。まつかせやみとりにならんとあればひかこことか。

世中さはかしく侍けるころ夕くれに中納言定頼かも

とにつかはしける

堀川右大臣

つねよりもはかなき比の夕暮はなくなる人そかそへられける

いはれぬにあらず。ゆふくれにのみかそへらるへきことや

あらん。心ほそきほとよまれたるか。またなくなる人そと

あるにこそ。ことはにはあれと。むけにたゞことにこそおほ

ゆれ。なきはおほくそとよまれ。いつまでよそになとあれば

こそいうにはあれ。

返し

中納言定頼

草の葉になかぬ計の露の身はいつその数にいらんとすらん

つゆのことのすふにあらましかばとおほゆるは。ひかここと

か。

王昭君をよめる

僧都懷壽

思ひきや古き都をたはなれこの國人にならんものとは

いとありのまゝなる歌かな。この國人もいかゝあらん。

第十八雜四

かつらなる所に人／＼まかりて歌よみて又來んとい

ひてのちにかのかつらにはまからて月の輪といふ所

に人／＼まかりあひてかつらをあらためて來るよし

讀侍りけるにかはらけとりて

祭主輔親

さきの日にかつらの宿をみし故はけふ月のわにくへき乙けり

此歌はおなしことなれと。すけちかかかたりしは。よしのふ

かかつらのいへに會してまたの日。もとすけか月のわとい

ふところ。おなし人／＼まかりて。すけちかかばらけとれ

とひとゝものいひ侍しを。なをなと元輔まうし侍しかば。な

ましゐにかはらけとりてよみはへりし。元輔もよしのふも

いかゝあらんとおもふたまへつるに。けしうはあらすつか

うまつりたりとこそまうししか。そのほと人衆にてなんと

侍しは。たつねたまひたらん。

實方朝臣女のもとにまうてきてかうしをならし侍り

けるに女の心しらぬ人してあらくましけにとはせて

侍ればかへり侍にけるつとめて女のつかはしける

よみ人しらす

明ぬよの心ちなからにやみにしを朝倉といひし聲はきゝきや

此歌はあさくらやといふ歌を本文にてよみたるにやあらん。あけぬよのといふことや。歌にはありともおほえぬはたつぬへし。やみにしを社たゝことなれ。

第十九雜五

中納言實成宰相にて五節たてまつりけるにいもうとの弘徽殿女御の御もとに侍ける人かしつきに出たりけるを中宮の御かたの人ゝほのかにきゝてみならしけむもゝしきをかしつきにてみるらんほともあはれと思ふらんといひてはこの蓋にしるかねのあふきにほうらいの山をつくりなとしてさしくしに目かけのかつらをむすひつけてたきものをたてふみにこめてかの女御の御かたに侍ける人のもとよりとおほしくて左京のきみのもとにといはせて果の日さしをかせける

よみ人しらす

おほかりしとよの宮人さし分てしるき日影をあはれとそみし

かくて臨時祭になりて二條前太政大臣中將にてまつりのつかひし侍りけるにありしはこのふたにちんのくししろかれのかうかいかねのはこにかゝみななといれてつかひは中宮のばらかなればにや日かけとおほしくてかゝみのうへにあしてにてかきて侍ける

藤原長能

ひかけ草かゝやく影やまよひけんますみの鏡くもらぬものを上手のよみたるとはおほゆるな。ひかけにますみのかゝみとつゝけたるは。いかなることにかあらん。たつぬへし。

ある所に庚申しけるに御麿のうちの琴のあかぬ心をよみ侍りける

大中臣能宣朝臣

絶にけるはつかなるねを繰返しかつらのを社きかまほしけれたえにけるとよへては。つゝきもいかゝはきこえんすらん。いうなりとゝおほえぬかな。

第廿雜六

此歌ともはかきおとしてもあらん。ひか心をえてもあらん。まつたゝかきおきて。またゝみてそいかゝともおもふへき。こゝろえさらん人に。ゆめゝちらすまし。このなかにいはれぬにはあられと。かはかりの歌はいとおほくとおほゆるもあれと。それはひとのこゝろなれば。あしうもおほえす。

天保二季^イ夏若泉源左衛門異本持來比較畢

〔右難後拾遺抄以東京帝國大學圖書館本校合〕

續群書類從卷第四百五十六

和歌部九十一

古今打聞上 又秘藏抄

躬恒撰之

ほの／＼とあかしの浦の朝霧にしまかくれゆく舟をしそ思ふ
春たつといふばかりにや三吉野の山も霞みて今朝はみゆらん
風ふけは興津しらなみたつた山よはにや君かひとりゆくらん
櫻ちる木のした風はさむからてそらにしらぬ雪そふりける
子目する野邊に小松のなかりせば千代の例になにをひかまし
是等は歌の本とすへしとおほゆるなり。すゑの世の人／＼
これをそ本とすへき。

一まそを糸

三みたれさえかき

五ふんしまかき

七さゝめ雪

二あしろたまゝ

四むめつさを花

六やま入

八あさはた

九こやた

十一さまもらぬ

十三たまきつこ

十五わたむさき

十七しまほし

十九つやはつのはし

廿一きなけつ

廿三あまのさよはし

廿五せつた

廿七しさゝまで

廿九みつのひろ前

卅一そきた

卅三しば舟

十すかぬ

十二しら玉ひめ

十四うきつこつむ

十六わくなみ

十八もゝかゝり

廿やなつ

廿二ゆたけつ

廿四こもり

廿六をしへやし

廿八みつ人

卅しる柴の袖

卅二いしふね

卅四あらみさき姫

卅五とたま

卅七かほとり

卅九そはきく

四十一いはさきの神

朗詠草

一あかき雪

三鳥のせなか

五をし梨

十二月異名

短歌 旋頭歌

一まそなのいとふ事

俳諧歌

卅六としのは

卅八夢の鹿

四十わかねけは

二すしき玉

四ふゆの草青し

六ふゆ

賞之

秋の野にはたむる虫のこゑすこゑをのいこを風にくらせて
鳥類 おほつかなまそなの糸をたれそめ秋の野原にほかくる

是等は尾花なまそなのいとふなり 小花の出たる時に

ますばうなる也。されはまうばうといふ心也。のきにまをな

る色といふ人も有。

花咲いあしろたまの隙そなきはやしもうちてきう忘れは

あしろたまとは車を云也。はやしとは轡を云也。きう

とはいそく心なり。

人丸

三 我やとのみたれさえかきみたれつゝ思ふ心を君にしらせばや

みたれさえかきとは。萱にて組たる埦也。

となめきのさきさかまきの白妙のむめつさを花ま盛にみゆ

となめきとは隣。さきさかまきとは檜垣をいふ。むめつさ

を花とは李の花也。まさかりとはよくさかりたる也。

五 住すてゝ年へし宿をきてみればゑんしまかきもかた崩れつゝ

ゑんしまかきもとは築地也。かたくつれとは所々くつれ

たる也。

六 山人のたちぬひもせぬ袖なへてくれなゐふかき雪をみるらん

山人とは仙人也。せんにんのきたる衣はたちぬふ事なし。仙

人にふる雪はくれなゐ也。

七 さゝめ雪ふりしく宿の庭のおもにみるに心もあへすきりけり

さゝめ雪ふりしくとは廣ふる雪也。又こまかにふるをも云

儀もあり。あえずはたへすといふこゝろ也。

あさはたやあつらふ雪をかきわけて君か千年の子日をそする

あさはたとは野邊をいふ也。あつらふ雪とは厚くふる雪也。

正月子日の小まつを引とて。きみか干とせのためと云也。

朝忠

九 人とはぬかた山かけのこやたには螢ばかりそ火はともしける

あれたる古き堂をこやたといふなり。

僧正遍昭

^十をたや守ねぬらしひたの音もせすかりさし稻葉をかゝはめ共
をたや守とは田のいほもる人也。ひたと云物をたてゝしゝ
のはむをおふなり。みある田には猪のしゝはむといふ也。

赤人

^{十一}ふる雪に小野のすみかま埋れてたえすなり行きまもらぬすゐ
さまもらぬすゐとは煙をいふなり。

同

^{十二}春山にしら玉ひめのたつときはみまほしけに花をこころめ
白玉姫とは霞をいふ也。

伊勢

^{十三}賤男かこさかの道も雪にたえてたまきつこをもかりはてに鬼
こさかの道とは水こさ道也。たまきつことは薪をいふなり。
^{十四}錦津見のしらさゝめゝえ蟹人のうきつこつむにのり釣にゆく
わたつみとは海底也。さゝめとはなみをいふ也。うきつこつ
むとは舟をいふ也。

閑院

^{十五}たえゝにふかむにわたすわたむきさ駒渡しねて旅人やなん
ふかむにわたすとは川のふかき也。わたむきさとはわたし。
ねとは渡しかねてと云也。なんとはいはうといふ也。

酒井人眞

^{十六}しらせばやわれわく波のつかなくにつれなきよなきあらめやも
わくなみとはこふる心なり。つかなくとはふかく思ふと云
也。よなきとは女もといふ也。

元方

玉の緒は絶なほたえねあさばつね我わくなみか人にしらせし
玉の緒とは合也。あさはつねとはつかしくといふなり。こ
れもわくなみとは戀をいふ也。

朝教

^{十七}さ夜ふくす緑のそらに風ふけばいとゝさえますしまほしの影
しまほしとは月をいふ也。さえますとは光のくまなきなり。

朝教

^{十八}秋の田のほなみかゝやくもゝ簀つかのまもたゝ君めかれせし
もゝかゝりとはいはなつみ也。つかのまとは時のほとなり。

小野篁

^{十九}つやなつの空のむら雲とひわけてしてのたかきの初音鳴渡る
つやなつの空とは夏の朝なり。してのたをさとは郭公をい
ふ也。

惟則

^廿かすみたつあさまつの空なかむれは越路のかたへかへる鴈金
あさまつの空とは春の朝の空なり。

上野峯雄

廿一
きなけつとなかむるすゑは八重霞龍田の山はいろもめなくに
（つ脱駁）
きなけとは秋のそらなり。めなくとは見えずといふなり。

貫之

廿二
ゆたけつにおきてみたれば白雪の庭もはたらにふりにける哉
ゆたけつとは冬の朝を云也。うたゝね也。

人丸

廿三
雲はるゝあまのさよはしたえはこそ渡りもすらめ七夕つめは
あまのさよはしとは天河に七夕のわたし給し橋也。夜るわ
たれはさよ橋と云也。

家持

廿四
片山のしつかこもりにおひに見すきなましりのつくくし設
こもりとは畠をいふ也。杉などは黄葉すすなてふ草のあるなり。土
筆春の初生也。

讀人不知

廿五
なかき夜にひとりかもねんせつたにこそ遠玉ほにせな名ねぬ
せつたとは下なとこ也。せなとは夫也。遠玉ほことはとなき
道なり。

廿六

をしへやし戀と思へとあき風のさむくふく夜は君をこそ思へ
をしへやしとは男をいふ也。

廿七

しさゝまてねたくそ夜の明にけるあけすはおしくやあしも歸らし
しさゝまてとはなかしらてと云事也。をしあしとは同男也。

廿八
我とおなしかくなはたゝんともつ人荒増かばるよを出まほし
かくなはとは同心也。ともつとはともたちをいふ也。いてま

えい

ほしとは世をそむかんとおもふ也。

廿九

天か下はつらん神の身そならはゆたけにそたつみつの廣まへ
みそとは御衣也。ゆたけのころもといふなり。七尺にたつ
也。おほかたの神のみそきぬを云也。

因香朝臣

廿十
はかなくてたまきはりにしたらちをの故にそきたる椎柴の袖
たまきはるとはいのちきはまると云也。たらちを父を云也。
しゐしはのそてとは色衣をいふなり。

深養父

たらちおのきえにし目よりきつる哉このもしからぬ椎柴の袖
そきたもて葺たる宿のあはさらはいかにせんとか我ね初けん
そきたもてとはひきそきたる板のうるはしくもなき也。是
にてふきたらん宿はひまあらにこそ。

（は脱駁）

人丸

廿十一
松風にふかせてねとをいつるなりあかしの浦のあまのいし船
石船は海人の釣に出るとて。ふねの輕きを。いしを入て。お
きに出てつりする也。石をとり入たるは石舟と云也。

朝教

廿十二
淀河にわたりをくるゝしは舟の秋きりふかみともまとはせつ

しは舟とはさかりたる舟といへとも。是はよと川によめは。柴つみたる舟也。

柴船もさきたつふねもなかりけりあらしま風の吹すくるまはこれはさかりたる船もといふこゝろなり。あら鳥風とは俄に吹海のかせなり。

伊勢

^{世四}ます鏡手向にしつるいのりなんあらみさき姫いろぬもそするあらみさきひめとは男女の中をさまたくる神也。我もちたる鏡をたてまつれば。神の喜といふ也。

貫之

^{世五}身につもり暮行年もおしからすことたま春のはなをこそまてことたまはるとは明年の春といふ。除夜の歌也。

遍昭

^{世六}年のにはきふりわたる聲なれと猶めつらしく鳴くきらかな年のとは年毎にといふ事也。くきらとはほととぎすをいふなり。

^{世七}かほとりのまなくしはなく春のみそ夢のねしけき戀もする哉かほとりとばきしの雄とりを云也。それかやくにとなり。しはなくとはしはく鳴也。

^{世八}あらちなのかるやのさきに立鹿もちかへむすれは誓ふとそきくをのか身に霜をく夢やみえつらん心ほそけにしかそなくなる

あらちなは狩する男なり。黒主のつけ野といふ所を行けるに。あまりににけり。やうく夜の明行に。かしらなもちあけてみれば。かたはらのやふに鹿ありけり。その中におしかのありけるかいふやう。今夜われこそ夢を見たりつれ。そのゆめにせなかに霜ふると見えたりつるといひければ。女鹿のいふやう。よくくしむへし。狩などのあらんするやらん。かりにかまへてあはし。はやあふほとならは。皮はかれて。しほのまかれぬかみゆるやらんといひて。鹿おきて行けり。其夢をふしきの事とおもひて。黒主みければ。朝立する狩人見つけて。このしか射ころして。皮はき鹽うちなんとしけり。このころにてつけ野を夢野鹿といふ也。委しくは日本紀にみえたり。

讀人不知

^{世九}かのみゆる岸へにたてるそか菊のしかみさ枝の色のてくらさそか菊とは黄なるきく也。そのゆへはむかし承和御門黄なる菊をあひし給ふけるより承和菊と云。承和の菊といふころ也。しかみさ枝とは下枝。てくらさとはめてたきと也。

讀人不知

^{世十}身のうさをあまつやしろにわかねけは聞しれかほに驚てなくねけとは神に祈る事。禱宜に付而申いふ也。

酒井人眞

四十一
いはさきの神いかばかり詠むらんあまのかはらにすめる月影
天川のほとりにいはさきと云所あり。そのもとにおはする
女神をいふ也。

朗詠部

一 淺紅鮮妍。仙方之雪愧色。

たちぬはぬ衣にかゝるゆきの色もはつなるものを梅の匂ひに
紅に匂ふ梅の色をも香をも。しらん人にみせまほしき物そ
かし。仙人の薬にする雪は色あかしと云也。その雪も此梅に
は色をはつらんといふこゝろ也。仙人のさる衣はたちぬひ
たるかたなし。唯なりなせるなり。

二 燕昭王招涼之珠。當沙月與自得。

空はれていさこをてらす月の色をすゝしき玉の影かとそ見る
燕昭王の玉は。あつき時にむかへは。すゝしくなりけるな
り。其玉ものをてらすに月にたとへたり。

三 鷓鴣背上。數片之紅纔殘。

雪をいとふとりのうは毛の紅はちりし紅葉の殘るなりけり
鷓鴣といふ鳥の木葉を背におひたるか。霜をき嵐もほけし
くなれば。よにわふる也。よの木葉うちりはてたれとも。此
鳥の背ばかりはわつかに殘れると云也。

四 暖泉流處冬草青。

冬くれとなを霜かれぬさいたつま氷らぬ水のぬるきあたりは

あたゝかなる泉のあたりに。冬の草青しと云也。さいたつま
とは草を云也。

五 昔爲鶯與鶯。今作參寥商。時イ

思ひきやをしの契をたちかへりほとは雲井のやとりせんとは
なし鳥はいもせの中ひとりのうせぬれば。としふれとも。つか
ひもなくてやむ鳥也。參と商といふ星は。二いてあふ事な
し。一出れは一は出ぬ也。したしかりしかうとくなるを。是
にたとへたる也。

六 未及暮景。（暮曉）隨之世無常。

いかにとよ常なるへしと思ふかは夕影またぬかけろふの世を
蟬蟬といふ虫は朝むまれて夕はしぬる虫也。それに世のは
かなき事をたとへたる也。

七十二月異名

正月むつき

紀友則

むつきたつしるしとてやはいつしかと四方の山邊の霞立ち

二月きさらき

きぬさらきとも云也。

三月やよひ

敏行朝臣

くれて行やよひの空をなかむれば八重のかすみをかへる鴈金

四月卯月

源 宗 子

卯月とてさくらの花にこつたひていつしかきなく山郭公

五月さ月

元 方

ほととぎす五月の雨にうつもれて花たちはなに枝うつりなく

六月みな月

小野春風

みな月の河へのはらへさよふけてたもとに秋の風かよふなり

七月ふみつき

貞 文

七夕のこゝろもいかにさばくらん穠にあふへきふつき立らん

八月はつき

深養父

初鴈の聲きこゆなりはつきたつあしたの原のうすきりのまに

九月なかつき

貞 文

我やとのまかきのうちの白菊もなか月にこそさかりなりけれ

十月神な月

素 性

神な月しくれてのちのこすゑこそからくれなゐの錦なりけれ

十一月霜月

みるまゝに雪けの空となりにけりさらぬにさゆるしも月の空

十二月しはす

業 平

何となくしはすの空になりにけりあはれかさなる年の數かな

又秘藏名あり。

正月さみとり月

貫 之

年くれてさみとり月に成ぬれば所さへなしこまつひくまの

二月むめつき月

友 則

鶯のかよはぬ里のやとはあらし花さかりなるむめつさつきに

三月さはなさ月

同

故郷へ鴈もなきつゝかへるめりさばなさつきに春やなりぬる

四月このはとり月

家 持

たつねてはなにかもすへき時鳥このはとり月きなほなかなん

九月さくも月

小野 篁

池へなるまこましりの舊蒲かりて宿にかさしつさくも月連

六月いすゝくれ月聖誕月

本近院太子

ほとゝきす故郷こひて歸るなりいすゝくれ月に成める空とて

七月めてあひ月

酒井人眞

七夕のめてゝあひ月まぢくつゝいかに心のうれしかるらん

八月さゝはなさ月

兼壽法師

きりくすさゝはなさ月打わひてあさちか原に聲よはるなり

九月いろとり月

菅原忠音

常葉山いろとり月になりぬればにしきをさらす心ちこそすれ

十月かみなかり月

同

よも山ばかり紅ぬになりにけり時雨ひまなき神なかり月

十一月露こもりのは月

人丸

露こもりのはつきの空をなかむれば宿雪けにそ成わたりける

十二月年よつむ月

貫之

身のうへにとしよつむ月いくかさね重ても又猶まはりきぬ

是等はあなかに人にみすへからす。十二月の異名はこの
實名をもちて。さきの異名を作也。此異名をもちさしかため
に。先のかをいたせり。末の世の人と是可秘也。ひすへし
ゝ。

八短歌のすかた

あふとの

我身は常に

ふしのねの

逢事かたし

わたつみの

思へはいまは

ゆく水の

思ひみたれて

おもへとも

思へは今ほ

木かくれて

あいかたらはん

すみそめの

朝なくゝと

庭に出て

ころもの袖に

まれなるいろに

あまくもの

もえつゝとほに

なにしかも

おきつふかめて

いたつらに

たゆる時なく

ふる雪の

えふのみなれば

あしひきの

たけき心を

色に出ては

夕になれば

なけきあまり

たちやすらへば

をく露の

おもひそめ

はるゝ時なく

おもへとも

人をうらみん

おもひてし

なりぬへら也

かくなはに

けなほけぬへく

なをやます

山下水の

たれにかも

人しりぬへし

ひとりぬて

せんすへなみに

しろたへの

けなほけぬへく

おもへとも

なをなけれぬ

春かすみ

よそにも人に

あはんと思へは

貫之

九旋頭歌

君かさすみかさの山のもみち葉の

いる神な月時雨の雨のそむる也けり

十誹諧歌のすかた

いくはくの田をつくれはかほとゝきす

してのたかさをあさなくよふ

古今打聞中

一蔣纏

三筆登蟲

五字都妙

七羽馴鷹

九燒帛

十一黃丹

十三津瀟

十五潤出

十七角柱

十九色贖

廿一假初

二富草

四東路子

六鳴棹

八香帛

十假童

十二更居風

十四鄙婦

十六綢泉

十八佐波比古女

二十遠近

廿二里白

廿三浮見

廿五玉江草

廿七色々衣

廿九水無鳥

卅一過難

卅三問手櫛

卅五小家鷄

卅七急々羅汶船

卅九玉問

四十一潰萩

四十三幾須

四十五玉柏

四十七庭都鳥

四十九美小々目

五十一蟬居

五十三御波須

五十五縱懸船

一蔣纏

廿四白芥

廿六野舟人

廿八針目衣

三十火燒鳥

卅二小蘭

卅四鶯袖

卅六垂時星

卅八留鳥

四十寢谷

四十二千々呂虫

四十四枕神

四十六魚原

四十八佐波ウ

五十小々江小鳥

五十二極津菖

五十四長淺

貫之

けふよりは汀の草はあらしかし菖蒲は軒にこもはこもまき

二富草

あすよりは外面の小田に袖ぬれてとみ草のさ苗うゑつへらこ

三筆登虫

ふてつむし秋も今はと澄草生にかたおろしなる聲よはるなり

筆つむしは蚕を云也。古筆のなる也。

四東呂子

興 風

いさやけふ小田のころみばかりにゆかん野分の風にしかれもする

とろみとは是は稻を云也。これはあつまとはなり。さればあ

つま歌といたせる也。

五宇都妙

うつたへのすゝりの水とおもふなよ涙もかくそみつくきの跡

うつたへとはまどのすゝりの水と思ふなと云なり。水くき

とは筆を云也。

六鳴棹

めかれして栗穂さらすなあなかしこ鳴棹もちてしらをへうなひ

なるさほとは。棹のさきになるこをつけて。それをならし

て。かた山里にあはといふものをつくりて。さるをおふ也。

うなひとはわらはを云也。

七羽馴鷹

たかねより麓のさとおりにたりつゝ心みるはならしのたか

八

鷹おとこせんとては。鷹鷹と飛くらへをするなり。それを妻

心みるといふなり。羽くらへとは羽ならしと云説もあり。

我宿にかましめたつるしにやわか小山田に鹿のかよはぬ

かましめとは。家中にかまといふ物をたてたれば。又それに

鉄といふものをたてて。菅笠をきせて立たれば。鹿の田をは

まぬなり。それを鎌帛と云也。

九

あすよりはやきしめたてん小山田の我わせ稻を鹿もこそはめ

やきしめとは。馬などの尾かみをきりてはさみて。そのあま

りを焼て田にたつるなり。そのかみをかきて。鹿のはまぬな

り。それを焼帛と云なり。

十

夕暮にかつらき山のたかねよりかりわらはくるほう音すなり

かりわらはとは山臥をいふなり。そみかくたとも云也。

十一

住吉の岸におひたる松かねのあらはるゝまてはにふしてけり

住吉のきしくつれてみえければ詠なり。はにふとはきしの

くつれを云なり。

素 性

はにふして廣くそなれる住し里の前の小河をきつゝみければ

十二

人 丸

ふるよりもさらゐの風をすさまじき吉野の山のすそのゝ里は
さらい風とは。ふりつもりたる雪を。かせの吹ちらすをいふ
なり。

同集安賞王歌云。

見渡せば時もさらはぬさらい哉ふしのたかれに風通ぬらし

十三

浦島か子をとふらひて島津入たゝまかへるしし湊しらむめり
昔丹後國水江浦嶋と云所に。浦嶋太郎と云者。魚をつりける
に。龜を釣あけて船に入てみければ。女房にてそ有ける。そ
のかたちたえずめてたかりければあひにけり。女の云。我在

所へいさといひければ。船に乘て行はとに。東は春。南は夏。
西は秋。北は冬。みるも面白くて。みれ有と思ひて。古郷戀し

(三年際)

くおもふと女にいひければ。ちいさき箱をとり出てとらせ
て。是へ猶かへらんと思はし。このばこをあけてみる事な
かれととらせけり。そのふるさとのありさま。見しにも非
す。ちいさくみえし木ともは古木になりぬ。大方のあればて
ゝありけるに。其浦にいと老たる女ありけり。それに此浦に
浦嶋太郎といひける人の妻子は。いつちへ行けるそととひ
ければ。この廻いふやう。我か先祖にてありける人こそうら

しま太郎とはいひけれ。はや千年ばかりの事なり。思ひかけ
すといひければ。うちなけきつゝ。かた／＼によりて。この

箱をおほつかなさにあけてみければ。老となり。白毛身に取
付て老朽て死にけり。其女の腹に女子一人ありけるか。蓬萊
よりとふらひに。曉方に其浦へきて。跡をとふらひける也。
そのむすめの波をふみ分てくるに。なみのしろくてみえけ
れは。みなとしらむと云けり。あかつきうみのしらむをみな
としらむと云は此ゆへなり。此浦嶋は雄略天皇廿二年のと
し行て。皇代卅二代めに淳和天皇御時。三百四十九年に本朝
に歸來と云々。

十四

兼 盛

をちこちの旅人今はたちぬらんひかしの山のひなとしらめは
此ひなとしらむとは。朝日の出るとて。廻あかくみゆるをい
ふなり。

十五

人 丸

われのみそいはたないつる鶯のまた人きかぬはつれをはきく
いはたなとは澗の戸を云なり。

十六

沖つ磯にあさりするまに鹽みちて船ほしけなる海士のしう哉

あまのしうとはあまの人数といふ事なり。海士衆也。

十七

よとよもにきくそかなしきかく柱たゆまずふれる雪おれの聲
かくはしらとは竹を云なり。たゆまずとはをやますと也。

十八

さはひこめなく我宿のませの内にかはら逢はうたゝかれたり
さはひこめとは霜を云也。かはらよもきとは菊をいふ也。う
たゝかれたるとはうたてゝかれたると云也。

十九

色きえす庭もはたれに降にけり柴のあみ戸をあけてみたれば
いろきえすとは雪を云也。はたれとは斑なり。

二十

猿丸太夫

をちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくも喚子鳥かな
をちこちとはあなたこなた也。たつきもしらぬとはたより
もしらずといふなり。をちとは外。こちとはこゝ也。

廿一

いさゝめに思ひしものを多古の浦にさける藤波一夜へにけり
いさゝめとはかりそめといふなり。

廿二

兼盛

奥山のゆつり葉いかにおちつ覽あやめしらす雪のふれるに
あやめもしらすとは。こゝろなく。よしあしもしらすといふ
なり。

廿三

水の上にかすかくとさわか命いもにあほんとうけひつるかな
水にかすかくとをば無墓事にいたせり。うけひとは契を云
也。

廿四

山のはを横きりわたるしらさくも月にもまかふ早くけれかし
しらさくもとは白小雲なり。けれとはきえねなり。

廿五

難波江に玉えさくさのつのかめば駒もいはへて嬉しかるらし
玉江さくとはあしの若はへ也。つのかむをいふなり。

廿六

打むれてすかるかるなるとこ人ゆつるしみに打鳴しつゝ
すかるとは鹿を云也。のとこ人とは獵師を云也。ゆつるとは
弓の弦をいふなり。

廿七

高光

しつのおか爪木こりにと朝をきていろく衣そてまくりゆく
色々衣とはつゝりを云也。

廿八

行 平

山かつのみしかきはりめ衣きて寒き夕はいかてかはぬらむ
是もおなしくつゝり也。はりもてしけくぬひたれば。はりめ
衣と云也。

廿九

人 丸

深山路の木かけこくらき夕暮にやゝすきましくなくみなせ鳥
みなせ鳥とは梟をいふなり。

三十

同

日くれぬとこまをばやむるみ山ちの木下すこくなくひもす鳥
ひもすととりとは鵲ハシを云也。

卅一

赤 人

女郎花さくのへちかき玉ほこを香をなつかしみ過かてにする
玉ほことは路をいふ也。過かてとはすきやらすと云也。

卅二

伊 勢

つくるへき主やならん小山田には草ましりのそろぬ生たり
は草とはこまかなる草のあれたる所に生る也。そろぬとは

蘭のいまたちいさきか云なり。

卅三

人 丸

汐ひればあまのまてくしひまもなしわか思ふ事を知人もなし
まてくしとは。あま人の海のしほひかたのすなこの中に。ま
てといふものゝあるを。すたれの竹の程なものを。ま
てのあなにさし入て引出せば。まてと云ものゝつきて出る
なり。それをまてくしと云也。

卅四

さ衣のうくひす袖しくちぬへし（こは服）婿をうらみておつるなみたに
さ衣とは小衣也。うくひすそてを脇縫したる衣の袖をいふ
也。いもとは女をいふ也。

小大 君

賤の女か山田にえくの若なつむうくひす袖をぬらしつるかな
えくのわかなは荷なり。

卅五

夜もあけはきつにはめなてくたかけのたきに鳴てせなをやりつる
きつとは狐を云也。はめなてとはくらはせなと云也。くたか
けとはちいさき鶏なり。またきとはまたしき也。せなとは夫
をやりつると也。

卅六

小 町

曉のたれときほしもやまのはにまていてなくに歸るせなかな
たれときほしとは明星を云也。

卅七

あはち鳥きうこく舟のかちをとを汀の鶯やととときくらん
急々とはいそくと也。舟をこくには梶の鳴なり。その音を鶯
や友と聞らんとそへたる也。しかも鶯の聲に似る也。

卅八

公 忠

みゝめ鳥きつゝなくなりわか宿の八重紅梅のはなふみちらし
みゝめ鳥とほうくひすをいふ也。

卅九

たまひまにをきつゝみれは庭の面にみな白妙に雪ふりにけり
たまひまとは朝をいふ也。

四十

業 平

ぬるたまに戀しき人をたはふれてなれぬる床のれ覺めつらし
ぬる玉とは夢をいふ也。

四十一

人 丸

はま萩のおれはしとるにふみ分て夕霧かくれたつそなくなる

・はま萩とは芦をいふなり。たつとはつる也。

四十二

ちゝろ虫よる吹風やさむからしふくれはいとゝよはる聲かな
ちゝろむしとはきりくすを云也。寒からしとは寒からん
と云也。

四十三

よさの浦しほひのかたに波つれてきすかく蜚の袖のけしきよ
よさのうらとは丹後にあり。鹽干のかたば。海士のつれてす
なをかけば。きすといふ貝をかき出してとる也。蜚子の様
にて。蜚はあれとも。はたのあしき也。それをみてよめり。

四十四

いかばかりまぐらの神のはこふらん契りしとのまとならねは
枕には神のおほします也。

四十五

赤 人

わたつみに沈みてみえぬ玉かしはいつあらばれて君を思はん
玉かしとは石をいふ也。

四十六

うなはらや沖ゆく船をかへれとやひれゝらしけん松浦さよ姫
うなはらとはうみの面也。ひれとは袖ふる也。松浦佐世姫の
事なかけはいはず。

四十七

庭つとり鳥のたれをのみたれ尾のなかき心はおもはさるかも
庭津鳥とはにはとりを云也。

四十八

波のをとの浦ちならぬに聞ゆるはさばつばに吹松のゆふたつ
さはつばとは峰を云也。ゆふたつとは風を云也。

四十九

人 丸

みさゝめは櫻かえたに木つたひて花ふみちらしもゝ千鳥なく
みさゝめとは見蕨とかけり。みれとゝ云也。百千鳥とはうく
ひすなひふ也。

貫 之

淀川をのほりくたるにみさゝめは霧よりさきに舟わたるみゆ
是もみろといふ事也。

五十

赤 人

かきれつたふさゝえ小鳥よはや行て驚さそへ春のまうけに
さゝえ小鳥は驚のおや也。驚も老ぬれば。さゝえといふとり
になるなり。さゝえ小とりとつゝくへし。

五十一

まとゐするゆふすみ人のころ／＼と神も心なうちとけ給へ

まとゐはまはり居たる也。ゆふすみ人とは神樂うたふとも
かくなり。かれかゝるに神も打とけ給へとよめるなり。日
本紀云。

くらやみの天の岩戸もあけぬへしき夜すみ人を歌ふ神樂に
秘説云。よひのまは夕すみ人といふ。夜ふけぬればさよす
み人と云也。

五十二

貫 之

ちはやふる神の鳥井に立そひて幾代そへぬるゆつかつら木そ
あし原の中津國に。天稚彦と申す神の家のまへに植たりし
木也。日本紀委有。

五十三

興 風

千早ふるみわすれ時のみわにあひてれきか聲／＼心ならずも
みわすとは神の祭也。みわとは酒なり。みきといへとも。神
に奉る時はみわと云也。

五十四

人 丸

おさもあさや神のとつかの太刀もかな我妻招て人こゝろ見ん
おさもあさとははらたちやと云也。とつかの太刀とは伊弉
諾伊弉冉尊の鬬給へる太刀也。とつかとは十拳の櫓の在太

刀也。日本紀に有。事なかければ不言。

五十五

業 平

わたつみの波のまに／＼たゆむ也いさ／＼かけ舟き／＼こけ共
いさ／＼かけふれとは帆かけたる舟をいふ也。たゆむとはゆ
らるゝ義也。

古今打聞下

鳥部

一

深養父

しなぬ鳥おちくる磯のなく／＼りにかゝる思ひにゆく方もなし
しなぬ鳥とは鷗を云也。なく／＼りとは蹄を云也。かゝるばそ
へたる也。

二

かつなきのかや／＼こ鳥に物とはんわか思ふ人にいつか逢へき
かうなきのかや／＼こ鳥とは豆鷗を云也。たゝかやことりと
も讀也。貫之がの頭をよめるうた。

三

興 風

春の野／＼ひめひなとりそあかるなる霞のうちに聲きこえつゝ
鶺鴒ひな鳥とは鶺鴒を云也。春の野にあかる也。

四

家 持

鶯の梅の花かきぬおれはてつたひしたりさ／＼らをと鳥
鶯の梅の花かさをうるはしくぬふにはあらず。うた架也。さ
／＼りをとは百舌鳥と云鳥也。

五

赤 入

興津鳥としての磯にまともしてみつむしならはみなこさも鳥
おきつ鳥は奥にある鳥也。さしての磯と云も。たゝさし出た
るいし也。まともしてとはまはりいたる也。みつむしならす
とはうな／＼ならすといふなり。又水むしともいふへき也。み
なこさも鳥とはみさこと云鳥也。

六

赤 人

わかぬ浦に汐みちくればかたをなみ芦へをさしてたつ鳴渡る
たつとは鶴也。あしへとは葦の生たるほとりなり。

七

黒 主

五月雨の雲間になきてすぐるなり思はず顔のみつきすことり
此鳥はほと／＼きすとなし鳥也。さま／＼の異名あり。うなひ
こ鳥。しつことり。してのたをさ。くきらとも云也。此異名の
中に時鳥といふは。いたいけしたれはいひならはせるなり。
みつすこ鳥。なをまさりければ。秘する名なり。
みつすことりとは。四月五月六月はかりあれば。三月す
こ鳥と云也。

八

業 平

ますらをのえんひな鳥をうらふれて涙をあかくおとすよな鳥
ますらをとは下衆男を云也。よな鳥とはうとうと云鳥をい
ふなり。えむひな鳥とはその鳥の子を云也。此うとうといふ
鳥は。海の浪の洲なにとに。穴をほりて子をうむ也。其子を
人の取に行は。わひうらふれてなくなみた紅也。うらふれて
はうらむる也。されは世に子と思ふ鳥也。

九

人 丸

山深みつはさたま鳥木居をしてみるにもおつる空をふとリ
つはさたま鳥とは鶯也。こゑとは木にゐたるを云也。わしの
木に居て空をとふ鳥をにらむれば。其鳥おちて落る也。

十

貫 之

あはれにも子と思ふとてすかれ鳥野へなゆく火の灰と成ぬる
すかれ鳥とは雉なり。さしは子をおしみて。野の焼るにも
たゝ焼死するなり。

獸部

十一

山の霧に「左かやまとはせる物あはれけにすゝかなく也
すゝかとは雌鹿をいふなり。すかるとは雌鹿をいふ也。

十二

家 持

のと二人すたらんしゝをとらん逆岩やの内にくさ火けふたつ

のと二人は獵師也。くさひけふたつとは草火煙也。すたらん
しゝとはむしなといふものなり。此貉と云ものは。岩屋のう
ちに取とて。穴の口に草を焼て。けふりを入て。齧出すなり。
さでうちころしてとる也。

十三

深 養 父

さよふけてあさくままぬに遶ぬるかみえひきくまのうらふれて鳴
あさくままぬとは猫を云也。みえひきくまとは鼠をいふな
り。うらふれてどばうらみてと云也。

十四

小 野 篁

宮城野へ小萩か下をとことして親をもしらぬ露むすひみゝ
露むすひみゝとは兎の子のちいさき也。兎はうみて後子を
みる事なし。子もおやに逢事なし。露をくらひてそたつ也。

十五

黒 主

さ夜ふけて柴の戸たゝく嵐かなましらの聲ををのか音にて

草部

十六

伊 勢

我宿のかきねにおふるみき草の華もさかりになりけるかな
みき草とは薔薇と云草也。

十七

閑 院

あまつ人今やくたりてなかわらんよしろいろ草花さかりなり
あまつ人とは天人をいふなり。よしろいろくさとは牡丹な

り。此花を天人の下て見給也。

十八

元方

詠めわびぬをのかいろく 咲匂ふ籬のうちのさいさかもはな

さいさかもはなとは萬黨花を云也。

十九

人眞

こやの池のきしふく風の夕まくれ波にかたよるみすも草かな

みすも草とは菱を云也。池沼なるとに。水の上に浮草の様に

て在也。

廿

人カイ

つくまへの沼のみしはをふみ分てなく鶴のこゑばあはぬ君哉

みしはとは笠ぬふ菅をいふなり。つくま江とはあふみの國

にあり。

木部

廿一

賞之

きみかへんやを萬代のためしかな千世木の枝につるすくふ也

千世木とは松をいふ也。松は千年ふるといふに付て。千代木

と云也。

廿二

閑近きはみつきの葉に風ふけはむすひそはてぬぬる玉の夢

はみつき葉とはかしはの葉也。ぬる玉とは夢を云也。

廿三

兼藝法師

大井川いそきの簀くたすなりしつのをのこのはいや聲して

いそきとは梶を云也。しつのをのことは下衆男也。

雜部

廿四

赤人

夏といへば盛になりぬ橋のものとあなた此方のゆきゝさほ花

ゆきゝさほはなとは蕭薇(音藻)を云也。

廿五

黒主

さみたれに池のみつ草くちにけりこよひはしけく螢とひかふ

みつくさとは蒲を云也。かま朽て螢となるといふ事なり。

廿六

閑院

冬くれは四方の梢は葉おつれと霜にあらそふときはいろもき

ときはいろもきとは萱(音也)草といふ木也。ふゆも枯すして常葉

なり。かるかゆへに霜にあらそふと云也。

廿七

小野篁

花さかば吉野の山のひとつもりあなたくにあらしふるなへ

ひとつもりとは雲をいふなり。そとつもりとも。あなたく

とはあなかしこくといふ心也。ふるなへ。吹うらなへと云

也。

廿八

讀人不知

在曙の月入かたにほとゝきすにしのおもすみ鳴すきけり

おもすみとは山のけを云也。

深養父歌云。

おもすみにまた出やらぬ月影をなをたちかくすよひの村雲

富士十名他本

藤嶽。 鳴澤高根。 常磐山。 塵山。

二十山。 三重山。 新山。 見出山。

三上山。 神路山。

永享十年五月廿二日書之。知本。

寛保元辛酉年三月下六日書寫畢。

速水房常

〔右古今打開以古語深秘抄校合〕

新撰髓腦

歌のさま三十一字惣して五句あり。上の三句をば本と云。すイ下の

二句をば末といふ。一字二字のあまりたれとも。うちよむに例にたかはればくせとせず。凡歌は心ふかく委きよけにて。心におかしき所あるを。すくれたりといふへし。事多く添くさりてやと見ゆるかいとわるきなり。一筋にすくよかになんよむへ

き。心すかたあひくする事かたくは。まつ心をとるへし。つゐに心深からずは。委をいたはるへし。そのかたちといふは。うちきよきよけにゆへありて。歌ときこえ。もしはめつらしく添なとしたる也。ともにえすなりなは。いにしへの人おほく本に歌まくらを置て。末に思ふ心をあらはすさまをなん。中頃よりはさしもあられと。はしめにおもふ事をいひあらはしたる。なをかるきイつらき事になんする。今の人のこのむ。これかさまなるへし。

こゝにいふ九首の風鉢也。

風ふけは興津しら波立田山夜半にや君か獨りこゆらん

これを歌の本にすへし。

なにはなるなからの橋も作る也今は我身を何にたとへん

これは伊勢の子か中務君にかくよむへしといひける歌なり。

戀せしとみたらし川にせしみそき神はうけすも成にける哉

これは深養父か元輔にをしへける歌也。

世中を何にたとへん朝ほらけこき行舟の跡の白波

天原ふりさけ見ればかすかなるみかさの山に出し月かも

和田の原八十鳥かけてこき出ぬと人には告よ海士の釣ふれ

これはむかしのよきうたなり。

思ひかれいもかり行は冬の夜の川風寒み千鳥鳴也

わか宿の花見かてらにくる人は散なむ後を戀しかるへき

かそふればわか身に積る年月を送りむかふと何いそくらん

これらなんよき歌のさまなるへき。(右九首の心詞をよくおもふへし。)

歌の病を考いふ中せしむ

とをあまりあくる中に。むねと去へき事は。二所におなし事

のある也。たゝしとはおなしけれとも。心ことなるは去へか

らす。

みやまみやおなし心こと也難にらす

深山には松の雪たに消なくに都は野邊の若な摘けり

とはことなれとも。心おなしきを猶去へし。

みさふらひみかさと申せ宮城のゝ木の下露は雨に益れり

すぐれたる事のある時は。惣して去へからず。

山二あり赤邊の世なれば猶よならず

み山には散ふるらし外山なる正木のかつら色付にけり

わさと同じ事を述てよく所なによむ一體の事也

ことさらにとりかへしてよみ。所くくに多くよめるは。皆さ

るさま也。其歌とも更にかゝす。

又ふた句に末に同字あるは。世の人みな去物也。句の末にあ

られ共。とはの末にあるは。みゝにとゝまりてなんきこゆ。

散ぬればのちはおくたになる花と思ひしらすもまよふてふ哉

句をへたゝらても。さらさらんよりは。おとりてきこゆる物

也。(此義は初句と第二の句の末の同じ字はさのみの病なら

す。句をへたてゝ。第一の句の末。第三の句の末の同字を禁

することは也。第三の句の末の字本韻也。)

旋頭歌に。

第一の句のたのす第三の句の末の申すのす也

打渡す遠方人に物申す我そのこに白く咲るは何の花そも

句の末とはの末とにあれ共。くせときこえぬなり。(のゝ字

なと上手の歌はみゝにたゝす也。又初句の末の字と本韻の

字かはり句へたゝり。さるをきはす。されと耳にたつ字。

ぬ。た。そ。れ。な。との字有へからず。)

久堅のあまの河原の渡し守君わたりなはかちかくしてよ

凡こはくいやく。あまりおひらかなるとはなとを。よくは

からひしりて。すぐれたる事有にあらずはよむへからず。文

字などのふるきとはなとはつねに讀まし。ふるく人のよめ

るとはをふしにしたるわろし。一ふしにてもめつらしきと

はを。よみてんと思ふへし。

其歌をとりて此ことはをよみたりとさこめる事也

古歌を本文にしてよめる事あり。それはいふへからず。すへ

てわれはおほえたりとおもひたりとも。人も心得かたき事

はかひなくなんある。むかしの様をこのみて。今の人にこと

にこのみよみ。われひとりよしとおもふらめと。なへてさし

もおほえぬは。あちきなくなん有へき。

これはみな人のしりたる事なれ共。またばかりしくな

らはぬ人のために粗書くなるへし。
旋頭歌廿八字あるへし。(此後旋頭歌とはよのつねの三十一
字の歌に七文字入たるをいふ也。すへ廿八字也。)

ます鏡そこ成影にむかひゐて見る時にこそしらぬ翁にあふ心
ちすれ

ひとつの櫛。(此儀卅六七字なとにむ歌は一の櫛にて。旋
頭歌にはあらず。旋頭歌は卅八九字有也。此歌はよのつね五
句卅一字の中に五文字加たる也。只一の櫛也。)

かの岡に草かるおのこしかなかりそありつしも君かきまさん
みまくさにせん

又歌まくらに。古詞。日本紀。くにくの歌に。よみつへき所

なとを見るへし。

御本奥書
以祖父入道大納言齊家卿。自筆本令書寫畢。尤可爲證不矣。

參議藤原朝臣爲秀

右二部以雄崎雅喜本書寫于時文化三丙寅年夏六月

〔右新撰髓腦以圖書寮本校合〕

續群書類從卷第四百五十七

和歌部九十二

和歌深秘抄

愚問賢註奥書爾頓公云。枳里紀玉の十夢の中に。眞珠を翹にかふといへる夢は。釋迦道法弟子佛教を聞て。俗奥を學する事を示すと云事を見及侍しより。深慚愧の心を生て。和歌の廣學をとゝむと書侍り。此段尤不審に付て。堯憲法印へ條々批判を所仰也。其外歌道の奥書を尋申候處に。先此段返答云。是はわか身を歌の道に卑下してかきける也。既慈鎮和尚之御詞曰。一行禪師の大日經の疏にも。一切の詞みな陀羅尼といへり。佛若我國に出給はし。和國のことばをもて多羅尼とし給ふへし。高野大師も阿字をはなれたる詞なし。阿字則顯密の根本なり。多羅尼は是天竺のことば也。日本の和歌通用す。されは大日經の三十一品も。なのつから三十一字にかたとれり。世間出世の道理を三十一字の中につゝめて。衣裏

の珠と心得ぬれは。神明佛陀の感應ことにあらはれて。往生の素懷をとけすと云事なし。

思ふ事なととふ人のなかるらん仰けは空に月そさやけき如此注給ふ處に。彌不審侍る也。この詠歌は法華經の文をもてあそはしける由。別紙に有之。

一玉津島明神は衣通姫也。是は允恭天皇の后也。彼神詠に。

とこしへに君やはさますいさなり興の玉ものよる時々は紀州玉津島に祝ひ申なり。和歌吹上一所なり。然にあらいそにて社頭たちかたし。社頭祝と云題にて。堯孝法印歌に。

七本の松を姿の神かきに君か八千世を猶そいのらむ

此歌玉津島のよし承畢。玉津島はあら磯にて。更に社頭たち得ず。此七本の松を社頭に用て。參詣の輩は短尺なと彼松の枝にかけ侍りける。さる歌人まいらせたりしに。短尺を風吹

て海中へ。とりみれば。海中に鳥ゐなとも見え侍りけりと申傳けり。當社神秘也。本地十一面觀音也。彼とこしへの御神詠。毎朝に吟詠申也。等持院殿御時御靈夢有之。五條俊成卿の屋地に玉津島を勸請。則經賢法印を彼別當職にふせられ。予今致懇祈者也。あらあらおそろしの御尋事候哉。此時例の沓礫を令申候。恐耻々々。

まよはしと頼むちかひを玉津島島もる神も哀とはしれ御詠殊勝打をきかたく候。贈^本これをはり候て可申候。今迄たれにても候へ。かやうにしるし付進たる事なく候。

一年中行事の歌合の注に云。南祭。石清水臨時祭也。三月中旬日。(有二時下午。殿上人勤之。)舞人十人。小忌衣摺袴を着振華。左櫻。右款冬。便藤。北祭。加茂臨時祭也。十一月下西日。五節已後之酉日也。色目同石清水。南祭北祭は此兩社にかきる也。年に兩度祭禮諸社に多之。かやうにて候。ことなる事なし。

一當座に懷紙を認候事。先度委細承候といへとも。懇にうけ給たく候。

飛鳥井家には一首を三行五字に被認候。是は當座の懷紙にて候哉。二樂院(宋世。)なとは三行三字にもあそはし候。子細を尋申候へは。いつれもくるしからず。三行五字は唯の人書へからず。慈照院殿若盛の御時。三行五字にあそはし

けるか。あそはしにくきとて。已後は三行三字にあそはしけるよし。宋世御物語有り。雅經卿俊成卿の門弟にて。なにて彼家にかきり。三行五字に被認候哉。是第一の不審なり。三行三字の時は。月と云もしをさへ。定家卿かな。したゝめられ候時は如何。また後鳥羽院御宇。熊野御參詣道中の懷紙は定家。家隆。雅經。寂蓮。其外二行七字にかきをへり。もし更に定まらず。又爲重卿の一首の懷紙の三字の所を。一字まなを入られける程に四字になる。其懷紙自筆を寫之とめ畢。

秋日同詠兼待十五夜和歌

參議藤原爲重

すむ月のはやゆみ
はりもすくる夜になか
はのあきをいそく
比かな

元日陪

和歌所詠

松影浮水和歌

正二位雅親

こけのむすいはれの
みつのわきてまた
松もふかむる千代

のかけかな

委細披見申候處に心得す候。承候ことく。月をさへかなに定家卿被認候。かやうの儀不審にて候。今も冷泉家などには。爲重卿のことく認候人も候。二條家にはかつて不存候。又雅親卿の三行五字此方にも仕候。是は當座の御會の懷紙にて候。拙老も此御會の時人數にて候。和歌所開閣二十三歳の時被仰付候。一度天下屬無爲。各へ奉公いたさはやの朝夕念願計にて候。

一懷紙の寸尺の事。懇にしるし可被下候。四品などのかたは。長かれ一尺一寸はかりにて候。高櫃紙たるへく候。たゞ尋常の仁は一尺七八分はかり。それも貴人なと參會の時は。長を三二分つゝめらるへく候也。又人により候て。一尺四分又は六分にも申付候。已前以而令申候間。不能一二候。一短冊の事。廣さ一寸八分かれ定各存仕候歟。同長を知度候。たゞさく箱なとも子細候哉。

短冊の長の事。爲世卿頼阿中合候哉。長さ一尺にて候。唯今入見參候。此題岸柳爲世卿自筆にて候。裏書は頼阿。重而子細は堯孝筆跡にて候。御覽候上は不及注候へ共。承候間如此候。短尺箱も是に相應たるへく候。かけこあるましく候。同心葉無之。仍短尺箱に短尺を入候時は。つゝむ事なく候由。可得御意候。(短尺箱長サ一尺一寸五分。横二寸。)

一女の懷紙已前拜見候。雖然懇にしるし可給候哉。女の懷紙事。別紙に認可進候。女の懷紙をは披講以後まきて置候。とち候間數候。同とうほうの懷紙も取かされ候までにて候。惣の懷紙にばとち候ましく候。かやうの故實已下いかほとも候。御尋に付ては可申候。心うへく候。いまゝてはたれゝにても御尋なく候間。申たる事もなく候。

一當座の題數とり候事。上手貴人又は達者の盟は數首仕候由承候。さやうにあるへく候歟。又題を被出給候時は。筆臺の盟に左の手をかけ。右の手にて題をとり退出勿論也。題なとえらはず。たゞ上に子細を尋申。歌を可仕候よし承候。かやうにもあるへく候哉。又題を給に罷出候時は。あふきをぬきてなき候。題をは取て退出の時は。懷中候へき由申候。故實可蒙仰候。此段申候處なく候。尤珍重候。但題數を取候事は。先達者相はからひてよませ申事に候。なをも以面會具可申候。

一滿願寺殿(堯孝之事也。)古今集相傳の人數承度候。先師に古今傳受の事御尋候注進候。

細川讃岐守成之。(慈雲院道雲事也。)

左大臣。(實量公。轉法輪三條也。)

内大臣。(公保。三條西。)

畠山播磨守圓雅。(實能。)

本

圓可然と。片岡近江守。是は秋の上部まで一度の相傳也。此外になし。堯孝自筆にて書置候間。可入見參候也。

一摩多體文五音相通。

アカサタナ ハマヤラワ

イキシチニ ヒミキリイ

ウクスツメ フムユルウ

エケセテネ ヘメエレエ

オコソトノ ホモヨロチ

尤可然候。肝要也。あら／＼めつらしの御尋候哉。

一いなおほせ鳥の事。秋田といふ題にて。

宋 世

秋の田にはらみてなひくこれやこの稻負鳥の契しるらん

此鳥の事(成勝野)承候。委備案抄に見えたり。又已前も申こしく。巻

頭につきては。秋の巻頭又賞訖なり。かやうの事各に人のし

らざる事也。御心安さのまゝ申候。いづれも他見有ましく候

哉。

一古今集は延喜聖主の撰集を。何とて定家加奥書。結句貞應の

本嘉祿の本なと相違候哉。此段不審無極候。具承度候。此

段ふるき事にて候。二條家冷泉家の相違歟。但貞應之本奥書

に。傳于嫡孫。可爲將來證本之由あるうへは。自余に准すへ

らす。

一伊勢物語の事。飛鳥井家に相傳申事。さやうにも候哉。伊

勢物語彼家に相傳の事さも候らん。如此の事は支證明鏡た

るへき家肝要候。いかさま可入見參候。秘歌本の所さしなとに

付ても。新續古今集被撰候時。雅世卿先師に誓文をもて相

傳候。已前御披露の事候間。不及是非候。

一古今六流の事。いづれの家にて候哉。頼風なども一流のよし

蒙仰候つる。さやうにも候哉。校六流の事申つたへ候分。頼

風。俊頼。定家。家隆。雅經。知家などの事候哉。但俊頼は經信

卿の傳也。夢想なと申事に付て血脉なし。俊成卿定家朝臣

は基俊の説をうけられたり。家隆雅經等は定家の跡たるへ

し。知家同。此外顯昭なども色々申旨あり。よく／＼猶引堪勘據

可申候。

一混本歌。旋頭歌の事いか。委細存知仕度候。これらはまつ

りことにてよむ子細有。以面會可申候。

一物の名の事。をか玉の木。百和合。川なくさ。さかりこけ。く

たに。のちまき。此等の事ふるくうけ給る説に云。をか玉の

木は大晦日に門松をたてけるに。そのそはにわり木をたて

てへたるに。來年の月の墨をひいてたてける。それを／＼か玉

の木といふ也。文字には醒歳木。かやうに書侍りける。百和

合。ぜんほうの時。花ひらを入てもち候籠の装束の名といへ

り。又合香といふ人あり。いづれを是とすへきにや。是又不

詳。河なくさの事。たゝ河藻といへる人有。又おもたかと云草のよしいへり。是又具にしるし給ふへし。さかりこけの事。たゝみ山などの木にかつらのさかりたるをいふと説あり。又日影のかつらといふ物のよし有之。くたにといふは。糸なとまぐくたのより已前蒙仰候。のちまき。米のよし申説あり。めとにけつり花さす。蘇民將來のよしきたあり。すみよしの岸の忘草の事。卯花のよし注たる物あり。何れも此段は秘説たるへし。相承在之。

此條々更にすてられす候。をか玉の木にも子細有。又忘草の事。慈照院殿すみよしの神主津守に御尋の時。まけたる桶に入て。はりて封して進上あり。神祕のよし申上。公方様御目ひとつにて御覽有。もとのことく上封して。返しつかはされけるあひた。楚忽に相傳の義あるへからさる事とも也。御入魂ともの段。毎事すてかたく候てしるし付候。相かまへてくゝ外見をゆるさるへからす。猶面以委可申候也。

一人丸赤人の事。二名一體のよし相承有。これは白樂天白居易二名一體の儀をもてかうにあり。配所よりめしかへされて赤人と云。白樂天も后宮を無實をかうふり。遠流に侍りけるを。めし返して已後白居易といふ。漢家本朝の例證なり。此義いかゝ。さる説も候哉。なを期非煩候。

一古今集序に。立田川のもみちは。御門の御日にはしきと見

給と書て此歌あり。よし野山の櫻は。人丸か心には雲かとなんかきてその歌なし。或人云。崇徳院俊賴朝臣に古今集を召ける時をし紙有。その時に此歌なんありける。さては一大事とおほしめして。かたく俊賴に御契のすち有て。をし紙をとりて備上覽。已後此歌を秘せられて。本をすり侍るよししたしかにしめさる。仍

ちるは雪ちらぬは雲と見ゆる哉芳野の山の花のよそめは此歌になん侍るしあり。事實候哉。承候條々たれ人の説にて候哉。怨に申わけかたく候。いづれにも他言ゆめくゝ有まましき説也。さては已前人丸御影の資にあそはし候を給候も委細に見えて候。

よしの山今は櫻のおもかけに見しよのこすや跡のしら雲此御歌にてなを先段治定仕候と存候。誠以無冥加。かたしけなく今存候事。無窮期候也。

一喜撰事。飛鳥井宗雅自筆の古今集の眞名序に撰喜と有。堯孝法印實量公に彼進候自筆にも宋雅におなし。此段不審。冷泉家は例の書あやまりの撰喜といへり。御不審尤に候。今も撰喜と仕候事勿論候。子細條々ある事に候。かきあやまりの義不存候。堯孝は古今集三部ならては書寫不仕候。御心得の爲に申候。

一喜撰は清和天皇御出家の御法號にて候由承候。誠に彼御詠

に。

我庵は都のたつみしかそすむ世を宇治山と人はいふなり
此うたは發心修行の間住給へり。たつみは東と南との間也。
菩提ねはむには不至とあそはしける由有。かくのこく申説
もあり。更にすてらるへからず。

一五ケの髓腦と申候は。新撰髓腦。是は公任卿作也。能因法師
歌枕。仲實卿綺語抄。清輔卿儀抄。俊賴朝臣無名抄。此等を申
也。いづれも名物たるへき哉。又俊賴の無名抄あるに。長明
無名抄といふ外題不審の事也。もしかばり候哉。此兩冊同名
御不審無余儀候。愚老も同心也。

一打聞と申事は撰歌の時の事にて候や。常徳院御時。於江州五
十首宛詠進仕候子細存知度候。打聞と申は。於大樹撰歌の
ときの事にて候。この時は五十首あて先詠進仕候。我等も進
上候。物して撰歌の時は。たひく名のかはる事候。宋世の
歌に。浪の打きて人しれすとつづけられ候も斷にて候。其こ
る二階堂河内民部なと申人とりさた候哉。つゝに全部は
て候はて。大樹むなしく成給候事。無念至極候。

一土佐日記の事。於歌道最上の子細候哉。慈照院に貫之自筆の
本有。此日記の事。彼自筆本此方に候つるを。慈照院殿堯孝
に御尋の時進上仕候。土佐の國へ配流の時。道すからの事を
自筆に書候。歌なとあまた候。世あかりたる手跡にて。さら

によみ分たかく候つる。歌道の奥書には非ず。唯自筆の處世
にたくひなく。賞翫の物にや侍らん。風土記と申候て貫之作
候物。是こそ奥儀至極に侍れ。此本世に希になり侍とそ申
畢。

一水の柏の事。或御繩柏と書。又三角柏と書。いづれを是とす
へきにや。但ふるきうたに。

おもふこと水の柏にとふむしのしつむにうかふ我涙哉
水の柏といふ。太神宮へ神供を備るに。伊勢島よりたてまつ
る草也。彼兩宮に在いて。軍神秘のよしあり。此柏を水へな
かしけるに。しつむには神供を備へず。うかふに神供を備へ
よしあり。此歌のこゝろたしかにしつむにうくはとよめる。
心相應侍にや。御覺悟の段尤候。我等も同心此事に候。

一古今集序。

この殿はむへもとみけりさき草の三葉四葉に殿作りせり
むへは道理とかけり。さき草は檜木といへり。三葉四はに申
旨あり。しゐて御尋候間注付候。七代の事也。七代とは末代
の事也。いかにも秘せらるへき事也。

一都鳥よふこ鳥の事。已前得尊意候條。不及注付。

一思ひ草の事。八雲御抄には月草といへり。但爲重卿千首の題
に。寄月草戀。寄思草戀とある時は。さらに別とみり。先年褒
貶の時も種々さたあり。思ひ草は茅草也。尾花かもとの思ひ

草とよめるも此事也。花咲へからず。釋尊獅子の座に書教殿も此草也。何事も諸願成就の草といへり。後成恩寺殿歌林良材といふ物に。干草とあそはしたり。もし相違歟。いかにもくひせらるへき事第一の相傳也。

思ひ草葉末に結ふ白露のたま／＼きては手にもたまらず俊頼の歌なり。これも此茅草と心得へし。

一むらかしはの事。堯惠云。

家 隆

あらし吹遠山もとのむら柏たか軒はより雪はらふらん
此村柏は雪はらふこしきといふ物也。かしはの霜枯て。むら／＼残りたるに嵐の吹舂を。こしきに似たるによりて讀るといへり。

さる説こそ候へ。更にすてられ候ましく候。なをも申旨あり。かしはに七種の口傳あり。期面會候。

一山たち花の事。八雲御抄のとく牡丹の事にて候哉。然者古今集のやまたち花の歌も同前歟。尤此説にて候。さしたるならひ有とも不存候。

一きくをおきな草といふ人あり。八雲御抄に。をきな草と白頭草といつれも別と見えたり。

八雲御抄のことくたるへし。但彼御抄にも相違ともありて。相傳の子細有之。

一古今集部の名の事かやうに相傳あり。

一。ふるとしの卷。

二。はつ花の卷。

三。花なみの卷。

四。はつ秋風の卷。

五。山風の卷。

六。初時雨の卷。

七。或書曰さ、れいしの卷さしくしの卷。

八。ナイうき雲の卷。

九。もろこしの卷。

十。うくひすの卷。

十一。あやめの卷。

十二。あた夢の卷。

十三。思ひのまき。

十四。花かつみの卷。

十五。おほろ月夜の卷。

十六。わたり川の卷。

十七。うきふれの卷。

十八。十九。無。(或本二十八。あすか川の卷。十九。たかおの

卷。)

二十。はつ春の卷。

又云。同部異名事。

一。はつきくらの巻。

二。うらつたひの巻。

三。山風の巻。

四。うくひすの巻。

五。月の前の巻。

六。(ゆい)わさふみの巻。

七。行春の巻。

八。にはたつみの巻。

九。くれのおもの巻。

十。しなかとりの巻。

十一。うす紅葉の巻。

十二。玉つはきの巻。

十三。思ひ寐の巻。

十四。かるかやの巻。

十五。あさ衣の巻。

十六。した嶋の巻。

十七。夕時雨の巻。

十八。久かたの巻。

十九。木の下風の巻。

二十。ゆふつゝみの巻。

万葉集にもかくのどく侍るやらむ。さうもんの巻と有は戀の部なり。此時なをノ一大事の相傳と思ひ侍り。かやうにしるし候説有之。すてられましく候。一日閑談可申候。此抄物等之事。箱の底を出さるへからす存知旨候。

一重而旋頭歌の事申入候。旋頭歌といへるは。かみに歸るとよむは。むかしにかへるとよむなり。神代は句もきたまらす。出雲の八雲の詠歌より三十一字に成て後。五句の躰を詠するに。心あまる時には。六句の詞を用て。昔の躰に似たる也。むかしの躰に似たれば。かみにかへるといふ也。されは古今の序に旋頭といへり。是も上に歸るといふ義なり。濱成の式には此歌を變本と名つく。双本も本にならへといふは。彼も是もみなむかしに歸るなり。胸にも腰にも終にも。七字五字をもそふる也。胸の七字をそへてよみける歌。

萩の花お花くす花なてしこの花女郎花又藤袴槿の花
混本歌といへるは。もとにひたゝくとよむなり。本にひたゝくといへるも。むかしにかへるこゝろなり。五句の一句をのそきて。四句に心をつくす也。さためぬむかしに似たると云詞也。終の句を除てよめる歌。

あさかほの夕かけまたす散やすき花のなそかし
委細披覽申候。尤珍重々々。古今集にはすてに六流と申候上は。相傳の家たゝ肝要候哉。

一友則。仁明天皇の御時。嘉祥二年十二月二十六日に生して。延喜五年九月一日五十七歳にして死す。

躬恒。文德天皇の御時。齊衡元年九月三日に生して。延喜六年三月三日死す。延喜の御時七十歳也。

忠岑。陽成院の御時。元慶七年正月十八日に生して。天慶二年九月三日五十七歳にて死す。朱雀院の御時四十二歳也。

四十の歳御門へめさる。其先は定國大將隨身也。具にしろし給候。此説さも候哉らん。ふるき事いかにもく可仰之。尙以きとくなる事ともをしるし給候ものかな。たゞ妙に存候。

一技講の時の時宜承度候。

讀師は短冊なと返し候人にて。是は賞翫の方の役にて候。講師と申候は懷紙短尺よむ人にて候。是は若き輩のやくにて候。先したよみをよくく可仕事にて候。先年慈照院殿年始の御會に。懷紙を萬葉書にあそばし候。冷泉爲富卿講師えすして。俄に虫を煩とて退出。則堯孝仕候間。いかにもくけいこ有たき事に候。かやうの義いかほとも候へとも先略之。又懷紙を取かさね候は式師にて候。技講の事也。讀師にも御座候。けんたいと申て。堪能の事候哉。講師のならひはよむにあらず。講するにあらずと申つたへ候。御しけく參會の上は不及申候へとも。かたのことく申付候畢。

一竹園抄と申て。會席の時宜色くしるしたる抄物有。竹園は

もとより親王の御から名也。いつれの親王やらん。もし宗尊にて御座候哉。彼一冊讀御意候に。相違之段在之。

いつれの親王にて御座候哉らん。不能一二候。もとそと彼一帖拜見申候。相違之段までにて候間。家に不用候。其御心得をなされ候へく候。

仙洞の御歌合に人にかはりて堯孝法印。

いまよりは緑の洞もよそならぬ竹の園生の陰をあふかん後成恩寺殿判云。みとりのほらもよそならぬいへる。よそならぬいかゝ侍らんと有。みとりの洞はもとより仙洞の御事なり。然るによそならぬにとかめ給ふ事いかゝとて。後日に堯孝法印一條殿へ御不審あるよしあり。いかゝ。此緑洞竹園の御事はまきれなし。歌合褒貶なと後日に不審ある事。古來これおほし。越過て弓をはるたとへなれとも。たしなみけいこゝろさしの行所これなり。

一定家卿俊成卿に歌道ささり侍るとてよめる。

たちちれの及ぼす遠く跡ふりぬ道をきわむるわかぬ浦人此うたあまねく人あやまりて。かやうにさた有。是は左大臣家の百首の歌也。後京極殿をいかにも稱美申されける歌也。公方様の御抄物虫はらひの時非見候。定家卿歌なと下句なとをみななをし被遣たる。後京極殿御自筆有。

一家隆卿は猶間中納言光隆息にて侍りけるよしあり。家隆卿

は定長の弔とみえたり。彼家は光隆。家隆。祐隆。季隆。々々
まてにて斷絶と云々。

承候とくにては。家隆は道よりも歌よむ事を木と申して侍
るよし。後成卿被申けりとあり。甘露寺なども此一流。愚老
開園もちゝはしめて。甘露寺親長。冷泉爲富。和歌所の寄人
にてはへる。

一御家の集とも銘具にしるし可被下候。頼阿をは泰尋ともあ
り。又感空とも有。いかゝ。

泰尋已後高野山にて感空と申候。其後頼阿と申候。仍家集の
事承候。閑吟愚草。(頼阿)松葉愚草。(經賢法印)又我等かを
は御尋候。はゝかり多候へとも。松塵愚草とやらん可申候に
や。草庵集。續草庵集。いづれも頼阿歌にて候。

一出題の事。とても御免の上げなを可蒙仰候。

題の事。七首。十首。十五首。二十首。二十五首。三十首。三十五
首。三十六首。五十首。七十首。(七夕にあらず)百首。百五十
首。三百首。三百五十首。三百六十首。七百首。千首。なをもあ
るへく候へとも先進之候。飛鳥井家三十六首出さるよし承
候。不審にこそ候へ。さのみ此方と彼家ちかひ有ましく候。

題の事はいかにもやはらけてよまれ候はゝよく候へく候。
一他家彌藤河百首を難題と申。さやうにも可有之事哉。彼藤川
百首のうちに難題も候。さしあたりて難題の百首なとゝ外

題に書候事。心得かたく候哉。かな題の事は先年注進入候。
出題の事は。いかにもやすゝとよめ候はんずる題を。けい
こには可然候。いくたひもたゝ堀川院の百首題肝要たるへ
きなり。細々愚問賢注御覽し候へく候。聊爾講尺の儀不可然
候。委細以書狀申候き。

一鹿苑院殿。常徳院殿御詠。已前注被下て候へとも。なを此一
冊にのこしをきたく令存候。

鹿苑院入道太政大臣家にて。題をさくりて歌よみ侍し時。述
懷の心を權大僧都堯尋。

われまては三代につかへて玉津島かひ有神の光をそみる
この金玉おもしろくうちをさかたこそ候へ。誠に三代に
なり候事。わか身もおなし事にて候。ためしすくなくこそ。

我も三代人も三代まで馴きつゝともにそみかく玉津島殿
御覽候ことく御自筆にて。殊更御判在之。等持院殿。寶篋
院殿。鹿苑院殿。頼阿。經賢。堯尋。公此三代にて
候。此時御自筆御書御覽し候て。常徳院殿如此堯感律師被下
候。面目至極候哉。御尋に付て此一冊にかされて令書寫畢。
常徳院殿御判在之。

なにはのよしあしもしらす。きゝしまゝの事ともを。承候に
付てしるし畢。其御家の事も歌道中絶の處。此方爲門弟御心
さしまことにゝありかたなく覺候て。ひすへき事をかへ

りみす。筆にまかせ申候。銘心は和歌深秘抄とつけ候て可然候哉。以前の贈答申候憚入候。く。

まよはしと心をつけは玉津島神の誓もなかなかからん

明應二年卯月日

堯 憲

追加

撰歌三ヶ之大事

一人の抄物善惡借用あるへからさる事。

一涯分可然歌抄等尋出可致忠節候事。

一撰歌中の事他言有へからさる事。

已上此三ヶ條を文言にのせ。寄人まで起請文を書候事在之。猶子細期面會候也。

〔右和歌深秘抄以東京帝國大學圖書館本校合〕

桂明抄

三日月

夕月夜

上絃月

望月

不知夜月

立待月

居待月

臥待月

廿日月

下絃月

有明月

三日月は三日の夕ほのかに出初たる。余儀なく候。

夕月夜は月のはしめの月。朔日比よりの夕月夜になど。源氏物語にもかきて候へは。月の大小によりて。一日二日の夕よりも

出現ある事分明候歟。十日あまりのころまでも。暮天に出るほと

の月を。夕月夜とよみならはし候哉。

上絃月は。七日八日九日此兩三夜のうち。月によりて半月にみ

え候をよむ事にて候。

望月は十五日にて候。これも月によりて。十四五六日の間に。

みちたる月の事を詠候。望に蝕のあふ事。曆道の難儀にてきた

める事候歟。

不知夜月は十六日にて候。望にひかれて。こひならぬ月をも

申候はんつれとも。打まかせて十六日の月をいさよひと申候。

雲間木の間なとやすらふをも。いさよふと申候なり。

立待月。十七日にて候。これも望によりて。一夜にかきらぬ事

に候へきなり。

居待月。十八日にて候。子細は同前候。

臥待月。十九日をよみならはして候。源氏物語に。女樂試の日

を正月廿日はかりの事と書候て。臥待の月はつかのさし出た

る心もとなしやと候。後遊宴廿日斗の事とて。臥待の月さし出

たると候へは。十九日の夜のことおほめき。餘情有てかきな

し候にや。紫式部筆のにはひありかたくおもしろく候。

廿日月といふ題にて。爲重卿永徳の比の歌に。

かそふれば昨日の月の臥まちも猶宵のまは過て出にき

近代の歌も證歌に引用候事其例おほく候。八雲御抄に。臥待は廿日月とあそはして候も。望月によりて廿日夜にもよみ候はんする事。不審なく候へとも。月の百首なとに題に出し候次第。十九日の月にあきらかに見え候。廿日月是又無餘儀候歟。下絃月。廿一日二日三日の月。半月にみえ候ほとこの事にて候。たゞ弓張月と候題には。上絃をよむへきよし口傳候也。

有曙月は曉かけてより出る末の月にて候。又廿日よりうちの

月をも。殘月にをよひては有明と申へきよし先賢申傳候也。

此小冊依室町殿仰所令註進候也。詠善菩薩戒尼鏡秀令書云々。

文安五年七月日

和歌所舊老法印在判

承應元辰仲冬十一日。於仙仗倫閑寫之。前々段々祖父入道之御自筆也。此小冊借用或方へ聞。奥禮紙書之事。

金吾校尉益經

續群書類從卷第四百五十八

和歌部九十三

古來風體抄上

やまと歌のおこり。其きたれるとをいかな。千はやふる神代よりはしまりて。敷島のくにとわさとなりけるよりこのかた。そのこゝろおのつから六義にわたり。そのと葉萬代にくちす。かの古今集の序にいへることく。人の心をたれとして。よろつのとの葉となりければ。春のはなをたつね。秋の紅葉をみて。歌といふものなからましかは。色をも香をもしる人もなく。なにをかはもとのこゝろともすへき。この故に代々のみかともこれをすて給はず。氏々のもろ人もあらそひもてあそはずといふ事なし。よりて昔も今も歌の式といひ。すいなう。歌枕なといひて。あるひは所の名をしるし。あるひは疑かはしき事をあかしなしたるものは。家く我もくと書置たれは。同じことのやうなから。あまた世にみゆる物なり。た

ゝこの歌のすかたとはにおきて。よしのかはよしとはいかなるをいひ。難波江のあしのはいづれをわくへきそといふとの。なかいみしくときのかたく。しれる人もすくなかるへきなり。しかるにかの天台止観と申文のはしめのとはに。止観の明靜なると前代もいまたきかすと。羣安大師と申人のかきたまへるか。先打きくよりとのふかさもかきりなく。おくの義もおしはかられて。たうとくいみしくきこゆるやうに。この歌のよきあしき。ふかきこゝろをしらんことも。詞をもてのへかたきを。これによそへてそ同じくおもひやるへき事なりける。さてかの止観にも。先佛の法をつたへたまへる次第をあかして。法のみちのつたはれることを。人にしらしめたまへるものなり。大覺世尊のりを大迦葉につけ給へり。迦葉阿難につく。かくのことく次第につたへて。師子にいたるまで廿三人

なり。この法を傳る次第をきくに。たうとさもおこるやうに。うたもむかしよりつたはりて。撰集といふ物もいてきて。萬葉集よりはしまりて。古今後撰拾遺などの歌のありさまにて。ふかくこゝろをうへきなり。たゞしかれは法文金口のふかき義也。これは浮言綺語のたはふれには似たれとも。どのふかき旨もあらはれ。これをえんとして佛のみちにもかゝはさむため。かつは煩惱すなはち菩提となるかゆふに。法花經には若説。俗間經書(略之)食生業等。皆須正法といひ。普賢觀には。なにものかこれつみ。なにものか是福。罪福無主。我心自空なりと。きたまへり。よりていま歌のふかきみちも。空假中の三諦に似たるによりて。かゝはしてしるし申なり。歌のよきことをいはんとては。四條大納言公任卿は。かねの玉の集と名つけ。通俊卿の後拾遺の序には。ことはぬいものゝことくに。こゝろ海よりもふかしなと申給れと。かならずしも錦ぬいものゝことくならねとも。歌はたゞよみあけもし詠しもしたるに。なにとなく艶にもあはれにもきこゆる事のあるなるへし。もとより詠歌といひて。こゝろにつきて。よくもあしくもきこゆるものなり。このこゝろは年比もいかへ申のへんとはおもふたまふるを。こゝろにはうこきながら。詞にはいたしかたく。むねには覚えながら。口にはのへかたくてまかりすきぬへかりつるを。いもあるたかきみやまに。このやまと詞のみちのかけをも。ふ

かくしろしめせるあまりに。歌のすかたをもよろしいひ。詞をもいみじともいふとは。いかなるをいふへき事そと。すへて歌をよむへきおもむき。あまのたくなは事なかくとも。もしほ草かきのへてたてまつるへきよし仰せいたされたる事あり。これはまことにこのみちをつくは山のしけり。わたつうみのそこまでも。ふかくしろしめしたるあまりに。たつれおほむらるゝとなり。よにある人は。たゞ歌はやすくよむ事とのみこゝろをえて。かくほとふかくたとらんとまてはおもひふらぬものなり。しかるをこのみちのふかき心。なをとはのはやしをわけ。ふむてのうみをくむとも。かきのふへきとはかたかるへげれは。たゞかみ萬葉よりはしめて。中古々々。後撰。拾遺。しも後拾遺よりこなたさまの歌の。とさよのうつりゆくにしたかひて。すかたもこと葉もあらたまりゆくありさまを。代々の撰集にみえたるを。はし／＼しるし申へきなり。それにとりて歌の姿こゝろ申のへかたしとて。とに佛道にかよはし法文によせて申なす也。なをわたくしのためのとなとこそあらめ。きみもみそなはさんとは。むねとはまつと竹とのとしをいひ。鶴とかめとのよはひなとをこそひくへかりけれと。そしりいふ人もありぬへきを。身にとりて淺茅かすゑの露。もとのしつくとならんと。あすを待へきにあらぬを。和歌のうらのなみのをとのみおもひをかけ。住の江のまつの色にこゝろをそめ

て。鹽やのけふり一方になひき。いりえのもくつまゝに
きつめむとの。このみちの爲もかへりてをろかにやとて。もし
ふてのあとのしはしもとまり。松の葉の散うせさんほと
は。をのつからあはれをもかけ。又そしらんともからも。この
みちに心をいれん人は。よろつよのはる千年の秋の後は。みな
このやまと歌のふかき義によりて。法文の無義なるをさと
り。往生極樂の縁をむすひ。普賢の願海に入て。この詠歌のこと葉
をかへして。佛をほめたてまつり。法をきゝてあまねく十方の
佛土に往詣し。先は娑婆の衆生を引導せんとなり。建久ときこ
ゆる年のやとせ。ふん月のなかの十日比。くさの庵夕風すゝ
しく。こけの袖もあさつゆしけきにつけて。する墨もかつあら
はれ。老の筆のあともしとゝみたれなから。しるし終りぬるに
なむ。この集をはいにしへよりこのかたのうたのすかたの抄
と名つくといふ事しかなり

三十一字のうたのはしめは。更に申もことふりにたれと。そさ
のをのみことの出雲のくにゝいたりて。みやつくりしたまふ
時。やいろのくもの立けるにゝみたまへる歌。

八雲たついつも八重垣つまこめに八重垣作るそのやへ垣を
あまつかむのみむまゝ。わたつみひめに住かよひたまひける
を。うのはふきあへすのみことをうみをきたてまつりて。わた
つうみの宮にうつりたまひける時に。ゝみたまへる御歌。

おきつ鳥かもつく鳥にわかれし妹は忘れしよのとくにか
かくゝみたまひたりければ。とよたま姫の御返し。

あか玉の光はありと人はいへと君かよそひし貴くありけり
となんありける。これらは神代のことなるへし。人の世と成て
は。おほさゝきのみかとゝ申ける。みこにおはしましける時。
おなしき御おとうと宇治わかこと申けると。くらゐをたかひ
にゆつりたまふとて。なにはにおはしましけるを。位につきた
まふへきとちかく成ける時。王仁といふ人のいふかりおもひ
て。ゝみてたてまつりける歌。

難波津にさくやこの花冬こもり今を春へとさくやこのはな
この事は應神天皇と申人の代となりて。神武天皇より十六代
にやおはしますらん。この應神天皇と申は宇佐の宮八幡大菩
薩におはします。その御皇子このかみをおほさゝきのみこと
申。その御をとうとを宇治わかこと申けり。みかとうちわかこ
をやとに御愛子におはしましけん。東宮にたてまつらせたま
ひにけり。そのゝちみかとかくれおはしましければ。東宮位
につきたまふへきを。いかてかわれこのかみをおきたてつり
ては位につかん。おほさゝきのみこはやくらゐにつきたまへ
と申たまひけるを。又われはこのかみなりとも。宇治わかこを
まつ位にとおほしければこそ。太子にはたてゝまつらせ給
ひけめ。いかてか父の御こゝろさしたかへたてまつらん。宇

治わかこはやくくらひにつきたまへとて。われはなにほにおはしましにけり。又宇治わかこもうちにこもりたまひにけり。そのほとにくにのあまとも。みつきものを持てうちにてもてまいれば。我は天皇にあらす。難波へもてまいれと仰せられければ。なにはにもてまいれば。又うちへもてまいれと仰せられければ。うちかちもてまいるほとに。なにもくちそんしければ。あまともをのか物から袖をなんぬらしけるといふことも。この御をりのとなり。かくて三とせなへけるほとに。宇治わかこのたまはく。我このかみの王の心さしをむくふへからす。久しくいきて天下をわつらはさむとて。わさとなるやうにてかくれたまひにければ。おほさきのみ聞たまひて。なにはよりいそおはしまして。いかて我かすて。さきにはたちたまふへきそ。いそきいさかへりたまへと。仰にむかひてかなしみたまひければ。宇治わかこいさかへりたまひて。おきゐたまひて申たまはく。これは天命なり。かきりあることなり。いかてかとまらんと申たまひて。又仰にふしてうせたまひにければ。おほさきのみ素服したまひてかなしみたまひて。うち山のうへにみさきなしたまひてけり。そのうちなんおほさきのみかとおぬにくらぬにつたまひにけり。これを仁徳天皇と也。そのうちたかとのほりて。民の家

まはく。民の家にけふりたます。ちかつくにたにかり。ましてをづくにいかたらん。いま三年はくにのみつき物なためつりそ。御膳御服御殿の事。たかくてありなんと。三年すきて。又たかとのほりて御覽するに。民の家々みなけふりたらけり。御らんして。民とめり。われすてにとみぬと。きさきわらひて申たまはく。とめりとはのたまへと。御膳御服御殿しかあり。なに事かとみたまへると。みかとのたまはく。いまたきかす。民とて君まつしといふことを。さてよみたまへる御製也。

たかきやにのほりてみれば煙たつ民のかまとは賑ひにけり。扱民ともまいりて。いまは三年すてに過てけり。みつき物そなへたてまつらんと。みかと仰られていはく。なを今四年はみつきのなためつりそ。七年をすくしてたてまつれと。七年すきにければ。くにのたみ老たるわかきをいはす。材木をかたにかけてきおひまいりて。みやつくりほとなくしけりとなん。この御門は位におはしますこと八十七年なり。すへて御年は百貳十七年なんおはしまして。御門の第一の御いのりはたみのうれへたとめさせたまふへきなりとぞ。かのには申一侍なる。

かつらきのおほきみをみちのおくへつかはしたりけるに。くにつかさうげなとはしたりけるを。すさとしかりけるにや。

うねめなりけるものゝよみける歌。

あさか山影さへみゆる山の井のあさくは人を思ふものかは
かくよみたりけるにそ。おほきみのこゝろもゆきにけるとそ。
聖徳太子片岡山をすきたまふ時。みちのつらにうへ人あり。太
子御馬よりおりたまひて。むらさきの御そをぬきて。うへ人に
たまふとてよみ給へる歌。

しなてるや片岡山のいぬにうへてふせる旅人あはれ親なし、
おやなしになれなりけめやさすたけのきみは親なしいぬに
うへてふせるたひ人あはれく

これは旋頭歌なるへし。

うへ人返しをたてまつる。

いかるかやとみの小川のたえはこそ我大君の御名は忘れめ
太子宮にかへり給ひて後。つかひをつかはしてみせ給ひけれ
は。うへ人すてに死去しにけり。太子かなしひ給ひて。あつく
はうふらしめたまひ。つかなとたかくつかれるを。大臣馬子
宿禰七のまうち君なとそしりたてまつりていはく。君はたう
とき事かきりなし。みちのほとりのうへ人はいやしきものな
り。しかるを御馬よりおりてかたらひたまひ。又うたをたま
ふ。そのしぬるに及びて。あつくはうふると申ければ。その人
くをめして。かたをかにゆきて。つかをあけて見るへしとお
ほせられければ。ゆきてあけて見るにそのかはねなし。棺のう

ちはなはたかうはし。たまはりける御物ともは。たゝみて棺の
うへにおけり。たゝ太子のたてまつれりしむらさきの御その
みそなかりける。まうちきみたちおほきにあやしみなけて。
そのよし申ければ。太子ふかく戀慕し給ひて。つれにそのうた
を誦したまひけり。

聖武天皇東大寺をつくり給ひて。供養あらんとての日。行基井
難波の岸にいて。南天竺の婆羅門僧正をむかへられけると
き。僧正菩提のきしにつきて。たかひに手をと。ゑみをふく
みて物かたりし給て。行基菩薩のよみ給ひける歌。

靈山の釋迦のみまへに契りてし眞如くちせずあひ見つる哉
婆羅門僧正のかへし。

かひらゑに共に契りしかひありて文珠のみかほ逢みつる哉
又行基菩薩またわかくおはしける時。智光法師に論議にあひ
たまへりけるを。智光すこしけうまむの心にやありけん。わか
きかたきにあひたりとおもへるけしきなりければ。歌をよみ
かけられける。

まふくたか修行に出しかた椿我こそぬひしか其かたはかま
かくいはれて二生の人にこそおはしけれと歸伏しにけり。こ
の事は行基菩薩のさきの身に。やまとの國なりける長者など
いひけるは。國の大領なとやうのものにやありけむ。その家の
むすめのいみしうかしつきける。かたちなといとおかしかり

けるを。門もりする翁のありけるか子に。まふくたといふ童ありけり。十七八はかりなりけるか。その家のむすめをほのかにみて。人しれすやまひになりて。しぬへくなりける時。はの女のそのよしをひきゝて。我子いけてたまひてんやと。もらしいひいたりければ。むすめ大かたはやすかるへきやうなる事なれと。むけにその童のまゝにてはさすかなりぬへし。さるへからん寺にゆきて法師になりて。學問よくしてさえある僧になりてきたらん時。あはんといはせたりければ。かくときゝていそぎいてたちける。わらはのきるへかりけるはかまはもてこ。われぬいてとらせんといひければ。母の女よろこひながら。忍ひてまいらせたりけるを。かたはかまをなんぬいてとらせたりける。さて寺にゆきて。師につきて學問をよるひるしければ。二三年はかりにほとなくことのほかの學者になりにけり。さてのちきたりければ。こよひといひてあひたりけるほとに。このむすめにはかに消入やうにてなくなりにけり。法師あさましくかなしくおほえて。やかて寺に歸て。道心ふかく起して。いよくたうとくなりけり。それなん智光法師なりける。されとわか童名まふくたといふこと。僧の中にはさしもしらせさりけるを。年へて行基といふわかき智者のいてきたりけるに。論義にあひたるほとに。そのむかしの名をかくいひて。我こそぬひしかそのかたはかまといひけるにおもひつゝ

くれは。我もと道心起しはしめし女は。すなはちこの行基にこそおはしけれと。我身をたうとき僧となさむとて。しはしかりにかの女とうまれてみえたりけるところをうるに。いよくたうとくめてたくも。はちもおほえさりける。善智識はまことに大の因縁なるものなり。この智者は智光頼光といひて。一双のたうときものなり。頼光はさきに極樂にまいりけり。智光はその生所をみむとねかひて。後に夢に極樂にまいりて。極樂のありさま萬たらにかきて。智光がまんたらとて。よにつたへたる人なり。

又行基井管原寺の東南院にしておはりとりたまひける時。もろくの弟子ともををしへいましめていはく。口の虎は身をやふる。舌の釵は命をたつ。くちとしてはなのとくにすれは。のちあやまつとなし。虎はしにてかはをのこす。人は死にて名をとゝむと。さてよみたまひける歌。

かりそめのやさしかる世を今更にもな思ひそ佛とをなれ
又いはく。

法の月久しくもかなと思へともさふけぬらし光かくしつ
かくよみて身心安穩にしてそおはり給ひける。

傳教大師ひえの山を建立すとてよみ給へる歌。

阿耨陀羅三藐三菩提の傳たちわかつ袖に冥加あらせ給へ
かゝれはこのくにむまれもしうたりもする人は。標榜も正

者もみな歌をよむことゝなれるなるへし。但上古の歌はわざとすかたをかさり。詞をみかゝんとせされとも。代もあかり人の心もすなほにして。たゞ詞にまかせていひいたせれとも。心もふかく姿もたかくきこゆるなるへし。又そのかみはとに撰集などいふともなかりけるにや。たゞ山上憶良といひける人なむ類聚歌林といふ物をあつめたりけれと。勅事などにしもあらざりければにや。殊にかきとゝむる人もすくなくやありけん。代にもなへてつたはらず。みたる人もすくなかるへし。たゞ萬葉集のことはに。山上憶良か類聚歌林に曰なとかきたるばかりにそ。さる事ありけりとみえたる。寧治の平等院の寶藏にそあなるときくとそ。少納言入道憲と申ものしりたりしもの。むかし鳥羽院にてものかたりのつゝてにかたり侍し。此憶良と申は柿本朝臣人丸など同ときものなり。すこし人丸よりは後世にはありけんとそ見へて侍る。憶良は遣唐使に唐にわたりなとしたるものなり。其後南良のみやこ聖武天皇の御時になむ。橘諸兄の大臣と申人勅をうけたまはりて。萬葉集をは撰せられける。そのころまでは歌のよきあしきなど。しゐてえらふとはいともなかりけるにや。公宴の歌もわたくしの家々の歌も。そのむしろによめるほとうたは。かすのまゝに入れたるやうにそあるへき。それよりさきに柿本朝臣人丸なむとに歌のひしりにはありける。これはいとつねの人に

はあらざりけるにや。かの歌ともはその時のうたのすかたことろにかなへるのみにあらず。ときよはさまゝあらたまり。人の心もうたのすかたも。折につけてうつりかはるものなれと。かの人の歌ともは上古中古いまのすゑの代までをかみけるにや。むかしの世にもすゑのよにも。みなかなひてなむみゆる。そのうち延喜のひしりのみかとの御時。紀友則。紀貫之。凡河内躬恒。壬生忠岑などいふものとも。このみちにふかゝりけるをきこしめして。勅撰あるへしとて。古今集はゑらひたてまつらしめ給ひけるなり。この集の比をひよりそ。歌のよきあしきもとにゑらひきためられたれは。歌の本體にはたゞ古今集を仰き信すへき事なり。萬葉集より後。古今集のゑらはるゝとは。代々おほくへたゝり。年々かすつもりて。歌のすかた詞つかひもとの外にかはれるへし。其後村上の御時。又みちくををこさせ給けるに。歌のとをもとにあかめおほしめしけるにあはせて。かみに左右の大臣にて。小野宮のおとゝ清慎公。九條のおとゝ師輔。をのゝ此道にふかくいたれる人々なるうへに。しもに又大中臣のよしのふ。清原元輔。源の順。坂上の是則などいふものともさへきこへけるをめして。梨壺にさふらはせ給ひて。撰和歌所となつて。一條攝政伊尹はその時藏人の少將にものしけるを。その所の別當とさためおほせられて。かつは萬葉集をも和し譯せられ。さらぬふる歌とも

をも記したてまつらしめ給ける。さてなん勅ありて。後撰集は撰したてまつらしめ給ひける。撰者にはなを小野宮のおとゝなんうけたまはりける。萬葉集はもとひとへに眞名かなといふものにかきたるものにて。才智あるものはよみ。もししらぬ人。まして女なとはえよまぬ物にてそありけるを。この御時なしつほの五人かつはさためあはせて。源順むれと才智ある物にて。和してなんつれのかなをはつけはしめたりける。それよりのちなむいまは女なともみるとにはなれるなるへし。古今集のゝち後撰集のえらはるゝとは。延喜五年よりのち。朱雀院の御時をこそはへたてたれは。わつかに四十四年などや程へて侍けん。されは時の大臣より初て。大中納言より下さま。大納言にて西宮のおとゝ高明公。師氏の大納言。朝忠の中納言。敦忠中納言など。ことに歌よみおほかりけるうへに。古今集に入る人ゝのそのゝもよめる歌もおほく。女も伊勢。中務。承香殿の大輔などいひても。すへて歌よみおほかりけるゆへに。君も詩歌のみちふかくましゝて。勅撰もかさねてありけるなるへし。そのゝちの集にのこれるうたをひろへるよしにて。拾遺集となつてたるなり。よりて古今後撰拾遺これに三代集と申なり。然を大納言公任卿この拾遺集を抄して拾遺抄となつてありける。世の人は是を今すこしもてあそふほとに。拾遺集はいなくなすこしおされにけるなるへし。この拾遺集

も又後撰集ののちいくはく久しからされとも。猶古今後撰にもれたる歌もおほく。當時の歌よみの歌も。よき歌おほかりけるうへに。萬葉集の歌。人丸亦人か歌をもちおほく入られたれは。よき歌もまとおほく。又すこしみたれたる事もましれる故に。抄はとによき歌のみおほく。又時よもやうゝくたりにければ。今の世の人のこゝろにもことになふにや。ちかき代の人の歌よむ風體。おほくはたゝ拾遺抄の歌をこひねかふなるへし。そのゝち久しく撰集はなくて。歌よみはおほくつもりにけるほとに。白河院の御時勅撰ありて。道後卿うけたまはりて。後拾遺は又のちのこれるをひろへる集となつてられたるなり。此集ともの歌を見るに。歌のみちのすこしつゝかはりゆけるありさまは見ゆるものなり。古今の後の後撰は。いかなるにか歌もふるきすかたをむれとし。詞も殊にふるきさまにかゝれたるか。いみじきことなるとそ申つたふめる。歌の中にも贈答などのおほくつゝきたる所の。すこしみたれたる所もあるなるへし。後拾遺の歌は。かみ村上の御時のなしつほの五人か歌をむねとして。それよりこのかた拾遺の後久しく撰集なくして。世に歌よみはおほくつもりにければ。公任卿をはしめとして。長能。道なり。道のふ。實方等の朝臣。女は小大君。いづみ式部。むらさき式部。清少納言。赤染衛門。伊勢大輔。小式部。小辨など。おほくの歌よみともの歌つもれる比ほひ撰けれ

は。いかによき歌おほく侍けむ。されはけにまことに面白く。き
 ちかく物にこゝろえたるさまの歌ともにて。おかしくはみ
 ゆるな。撰者のこのむすちにや。ひとへにおかしき風體なりけ
 む。ことによき歌ともはさる事にて。はさまの地の歌のすこし
 さき／＼の撰集に見あはするに。たけのたぢくたれるなるへ
 し。又その御時。大納言經信卿（かき）います。こし先嬌なるをよきて。
 中納言通俊卿參議の時勅撰うけ給はるといへること。すこしは
 おほづかなきことなり。されはにや難後拾遺といふ物ありと
 かや。かの大納言の歌の風體は。又ことに歌のたけをこのみ。
 ふるきすかたをのみこのめる人と見えなれは。後拾遺の風體
 をいかに相違して見侍けむかし。このうち同き君位おりさせ
 給ひて。堀川の院の御時。又このみちこのませ給ひ。百首の歌
 人／＼にめす事なとありて。歌又つもありにける後。鳥羽院なを
 位おりさせ給ひ。しらかはのはなみの御幸なといふ事ありけ
 る後。わか御時の勅撰後拾遺はかりはあかすや覺しめされけ
 む。かされて撰集あるへしとてなん。源俊賴朝臣勅をうけ給は
 りて。金葉集はふらばれたるなり。其後又崇徳院位おりさせ給
 ひて後。左京のかみ顯輔卿うけたまはりてゑらへる。これを詞
 花集と申なり。大かた撰集は萬葉集より初て後拾遺までも。卷
 軸廿卷。したのかす大都千うたあきり常のとなり。拾遺抄こそ
 抄なれば十卷に抄せるを。金葉詞華は拾遺抄を存けるにや。二

の集は十卷に撰したるなり。又後拾遺よりさきの勅撰にはあ
 らて。わたくしにえらへる集ともあまたあるへし。能因法師
 は玄々集と云。良遍法師は打聞と云。又撰者誰共かくて麗花集
 と云。樹下集などいひてあまたあるを。後拾遺えらふとき。能
 因法師の玄々集をは。なにかありけんのそけるを。詞花集に
 は勅撰にあらねはとて。玄々集の歌をおほく入たればにや。後
 拾遺の歌よりもたけある歌とも入て。集のたけもよくみゆる
 を。又今の世の人の歌のさまでならぬにや。ことのほかの歌共
 のあるとそ人申へき。又地の歌はおほくはみな誹諧歌の體に
 みなされ。をかくそみえたるへき。歌のありさまのかはりゆ
 くほども。撰者のこゝろ／＼も撰集にみなみゆる事なるへし。
 かくて其後又故後白川院のおほせ事にて。老法師撰集のやう
 なるものつかうまつりてたてまつり侍し。千載集と申。むかし
 のかしこき人々に及へからぬ身にて。撰集のつゝきにしろし
 申は。きはめてかたはらいいたき事なれと。すてに勅によりてえ
 らひたてまつりて。君又御納受ありて。蓮華王院の寶藏におさ
 められ侍りにしかば。撰集のつゝきには／＼かりなから申つら
 ぬるものなり。大かたはこのちかきよとなりて。わたくしの打
 聞撰集せぬものはすくなかるへし。そのおもむきは當時の歌
 おほく。又をの／＼かひき／＼にしたかひて。歌のかずもよき
 ほとにはからひつゝそしたるへき。それをこの千載集は。たゝ

わかおろかなる心一によろしと見ゆるをは。その人はいくらといふ事もなく記し付て侍しほとに。いみしく會釋すくなきやうにて。人すけなかるへき集にて侍るなり。しかあれともいまはそのことちからをよばぬことになんありける。

大かた歌のみちのよしあしきたむる事は。さきにも申たるやうに。ことはをもて申のへかたし。漢家の詩なと申物は。その體かきりありて。五言七言といひ。韻を置聲をさるところく、かきりあるうへに。上下の句を對し。あるひは絶句。或は四韻。六韻。八々。十々とも皆さたまれるゆへに。よしあしもあらはにみへ。又人の學問したる程も顯るゝものなれは。さすかにをして人もえあなつらぬものなり。しかるにこのやまと歌は。たゝかなの四十七字のうちよりいてゝ。五七五七々の句三十一字としりぬれば。さすかにやすきやうなるによりて。くちおしく人にあなつらるゝ方の侍なり。中くふかくさかひに入ぬるにこそ。むなしき空のかきりもなく。わたのほら波のほてもきはめもしらず。おほゆへきことには侍へかめれ。さて今は歌のすかたこと葉も。折につけつゝやうく替りまかる事。撰集ともにみへたるを。まつ萬葉集よりはしく申侍へし。しかるをこの集ははしめには四季をたて。春の歌よりなともせず。たゝ大都は時代をたてゝ。ふるき事をはしめとしたるなるへし。初のまきのはしめには。泊瀬朝倉の宮の御宇天皇

代。大泊瀬稚武天皇の御製をそはしめのうたとはしるしおきて侍める。是は雄略天皇と申。神武より廿二代にあたらせ給へるにや。されとも三十一字の歌をはしりし侍へきなり。これも四季をたてなともなにかはとて。たゝはしめのまきよりしるし付侍なり。しかるをまつ長歌短歌といふ事。もとよりあらそひ有事なり。しかれとも是には萬葉集に付て長歌を略すと申侍なり。此事は古今集よりうたかひの侍え。その故は。體のまきに短歌部とかきて。まさしきその歌のとはの所に。貫之かふる歌たてまつるときそへてたてまつれるなかうたと書。又みつね。たゝみねか歌の所にも。おなしくそへてたてまつりける長歌とかきて侍え。それを崇徳院に百首の歌人へにめしゝ時。をのゝか述懐の歌は。みな短歌によりてたてまつれと。教長卿の奉書にて仰られて侍しかば。各短歌とかきてなかうたをよみてたてまつり侍にき。また俊賴朝臣の口傳にもたしかには申きらさるへし。それを清輔朝臣と申しものゝ典義とかいひて。髓腦とてかきて侍るなるものは。ひとへになかきを短歌とさためかきて侍とかや。大形はかやうの事は萬葉集をそ證據とはすへき所に。萬葉にはすへて卅一字の歌を短歌反歌なとかきて。いかにも長歌とはかゝす侍なり。たとへは柿本朝臣人九か作歌一首并短歌二首とも三首とも申たるけ。みな短歌といへるかすには卅一字のう

(一)

たにて。なかきをはたゝむねとの事にて長ともかゝす。まして短歌とかゝす。たゞ作歌一首とも二首ともいへるは。みな長歌にて侍なり。さればなかきをも長歌とはかゝされとも。卅一字

又東三條の入道おとゝの國融院の御時たてまつられたる長歌なとみな侍めり。よりて爲是にはなかきをは長歌。みしかきをは短歌反歌としるし侍なり。

をみな短歌反歌とかきつれば。なかきはうたかひなく長歌とみへぬ。卅一字の歌を長歌とかける所はひと所もなきなり。それをはいかゝおして卅一字を長歌とは申へき。たゞし長き短歌と云所は。こと葉のとくうつりわたるなりといへるも。さま

藤原宮御宇天皇代天皇御製(持統女帝)

ととくうつらぬ所くも。ふるき歌ともには侍めり。是はたゞ詠するになかくば詠せられず。みしかくいひきりく詠するなり。又卅一字の歌は詠するになかく詠せらるゝなり。よりて

春過而夏來良之白妙能衣乾有天之香久山

詠のこゑにつきて。短歌といひ。なかうたとも申成へし。いかにも歌は詠のこゑによるへきものなるかゆへなり。然とも萬葉集にはまさしくみしかければ卅一字を短歌といへり。しか

はるすきて夏きにけらししる妙の衣ほすてふあまのかくやま

れば又長をは長歌といふへしと見へたるなり。されば古今集に短歌部とはたてなから。こと葉にはそへてたてまつる長歌とかきたれば。ふたつの説にして事をきるましとおもへるに

樂浪之思賀乃辛崎雖幸有大宮人之船殿知兼津

や。よろつのことに兩説あるつれの事なり。しかれとも萬葉集らんすいなうは。萬葉集をくはしくみさるに似たり。又拾遺集にはとかくことゝはす。長歌部とたてゝ。人丸かよしの宮に

過近江荒都柿本朝臣人誓反歌三首

たてまつれる長歌とかけり。源順よしのふとか贈答せる歌も。

さゝなみのしかのから崎さちばあれと大宮人の舟ましかれつ

たてまつれる長歌とかけり。源順よしのふとか贈答せる歌も。

左散雖美乃志我能大和太興杼六友昔人二忽相目八毛

たてまつれる長歌とかけり。源順よしのふとか贈答せる歌も。

さゝ浪の志賀の大わたよとむとも昔の人にまたもあはめやも

たてまつれる長歌とかけり。源順よしのふとか贈答せる歌も。

幸于紀伊國時河嶋皇子作歌

たてまつれる長歌とかけり。源順よしのふとか贈答せる歌も。

或云。山上憶良作云々。

たてまつれる長歌とかけり。源順よしのふとか贈答せる歌も。

白浪乃濱松之枝乃手向草幾代左右二賀年之經去良武

たてまつれる長歌とかけり。源順よしのふとか贈答せる歌も。

しら浪の濱松かえのたむけくさいく代まてにか年のへぬらん

たてまつれる長歌とかけり。源順よしのふとか贈答せる歌も。

幸于伊勢國時留京柿本人麿反歌

たてまつれる長歌とかけり。源順よしのふとか贈答せる歌も。

潮左爲二十五等兒乃嶋邊榜船荷妹乘良六鹿荒嶋廻乎

たてまつれる長歌とかけり。源順よしのふとか贈答せる歌も。

しほさゐにいとこの嶋へこく舟に妹のるらんかあらき嶋わを

たてまつれる長歌とかけり。源順よしのふとか贈答せる歌も。

山上臣憶良在大唐時憶本郷作歌

たてまつれる長歌とかけり。源順よしのふとか贈答せる歌も。

去來子等早日本邊大伴乃御津乃濱松待戀奴良武

たてまつれる長歌とかけり。源順よしのふとか贈答せる歌も。

いさこともはや日の本へ大とものみつの濱松まちこひぬらん

慶雲三年丙午幸于難波宮時志貴皇子作歌

葦邊行鴨之羽我比爾霜零而寒暮夕倭之所念

芦へゆく鴨のはかひに霜ふりてさむき夕へにやまとし思ふ

太上天皇幸于難波宮時歌

大とものたかしの濱の松かれをまくらにぬれといへと思はゆ(し舞)

大行天皇幸吉野宮時

三芳野の山の下風さむけくにはたやこよひも我ひとりねん

和銅元年戊申天皇御製

大夫之朝乃晉爲奈利物部乃大臣橘立良思母

ますらをのともねすゑものゝふのおほまうち君楯立らしも

この御歌なとこそ女帝の御歌にまことにめてたくありか

たく覺え侍れ。

和銅三年庚戌春二月從藤原宮遷于寧樂宮時御輿停

長屋原廻望古郷作歌

一書云。太上天皇御製也。

飛鳥明日香能里乎置而伊奈婆君之當者不可見香聞安良武

飛鳥のあすかの里を置いていたは君かあたりのみえすかもあらん

已上第一卷。

難波高津宮御宇天皇代 仁德天皇

磐姫皇后思天皇御作歌 四首之内

君之行氣長成奴山多都禰迎加將行待爾可將待

君かゆきけななくなりぬ山たつれむかへか行むまちにか待ん

右歌山上臣憶良類聚歌林載也。

秋田之穂上爾霧相朝霞何時邊乃方二我戀將息

秋のたのほのうへにきりあひ朝霞いつへの方に我戀やまん

かすみはかく秋のうたにもよみて侍なり。誠に夏もふ

ゆも風ふかすしつかなる朝けには。山きはかすみわたり

て侍るものなり。

大津皇子贈石川郎女御歌

足日本乃山之四付爾妹待跡吾立所沾山之四付二

あしひきの山のしづくに妹まつと我たちぬれぬ山の雲に

おなしことふたゝひかへしてよむ事は。ふるくはかやう

にのみみて侍え。

石川郎女奉和歌

吾乎待跡君之沾斗武足日本能山之四付二成益物乎

われをまつと君かぬれけむあしひきの山の雲にならまし物を

從吉野折取蘿生松柯遣時額田王奉入歌

三吉野乃玉松之枝波思吉管聞君之御言乎持而加欲波久

みよしのゝたま松のえははしきかも君かみとを持てかよはく

舍人皇子御歌

大夫哉片雪雪敷廣友鬼乃氣雄御無爾家里

ますらをや片戀せんし雲はゝとをにのつますらを猶戀にけり

柿本朝臣人麿從石見國別妻上來時歌 長歌等之内

反歌

石見乃也高角山之木際從我振袖乎妹見都良武香
石見のやたかつの山のこのまより我ふる袖をいもみつらんか

後岡本宮御宇天皇代 有間皇子自傷結松枝歌

磐白乃濱松之枝乎引結眞幸有者亦還見武

いはしろのはま松のえを引結ま^{むささちあらはとも}さしくあらはまたかへりみん

家有者當盛飯乎草枕旅爾之有者櫛之葉爾盛

家にあればけにもるいひを草枕旅にしあればしるのはにもる

飯なといふ事は。此ころの人はうちくにはしりたれと。

歌などにはよむへくもあらねと。むかしの人はこゝろの
けはれなくて。かくよみける成へし。このうた歌さまいみ
しくをかしき歌なり。

太寶元年辛丑幸于紀伊國時見結松歌 柿本朝臣人麿

後將見跡君之結有磐代乃子松之字禮乎又將見香聞

のちみんと君か結へる石しろの小松かうれをまたもみんかも

已上第二卷。

柿本朝臣人麿從近江國上來時至宇治河邊作歌

物部能八十氏河乃阿白水爾不知代經浪乃去邊白不母

ものゝふのやそうち河の綱代水にいさよふ浪の行衛しらすも

同人歌

淡海乃海夕浪千鳥汝鳴者情毛思努爾古所思

あふみのうみ夕なみ千鳥なかなけは心もしのにむかし思ほゆ

しのにといふことは。むかしの歌には常にかくよみて

侍り。

長屋王駐馬寧樂山作歌

佐保過而寧樂乃手祭爾置幣者妹乎目不離相見染跡衣

さほ過てならの手向にをく幣は妹をめかれすあひみしめとそ

磐金之凝敷山乎こえかれてなきはなくともいろに出んやも

太宰帥大伴劍譚酒歌 十三首之内

酒の名をひしりと思ひし古しへのおほきひしりのとの宜しき

中々に人とあらずはさかつほになり見てしかも酒にしみなむ

たゝにゐて語らひするは酒のみて酔なきするに猶しかすけり

さけなとも。この比の人も。うちくにはことのほかにゑ

ひにのそむなれとも。大饗などのはれにはまねはかりな

るを。はやくははれにもおかしきとになんしける。されは

この人もかくほめてよみけるなるへし。

沙彌滿誓歌

世間乎何物爾將誓旦開榜去師船之跡无如

已上第三卷。

相聞

岡本天皇御製 長歌等之内

山羽爾味村摩去奈鷗鷗吾者左夫思惠君二思不在者

山端にあちむらこまはすくれ共我はさむし系君にしあらねは

淡海路乃鳥籠之山有不知哉河氣乃己呂其侶波戀乍蒙將有

近江路のこの山なるいさや河けのころくは戀つゝもあらん

柿本朝臣人麿歌 三首之内

未通女等之袖振山乃水垣之久時從憶寸吾者

夏野去小牡鹿之角乃束間毛妹之心乎忘而念哉

なつのゆく小鹿の角のつかのまもいもかこゝろを忘れて思へや

大納言兼大將軍大伴卿歌

神樹爾毛手者觸云乎打細丹人妻跡云者不觸物可波

櫛にもてはふるといふをうつたへに人妻といへはふれぬ物かは

藤原宇合大夫遷任上京時常陸娘子贈歌

庭立麻手苅干布慕京女乎忘賜名

にはにたつあさてかりほしし忍ふあつまんなを忘給ふな

大伴郎女歌之内

狹穗河乃小石踐渡夜干玉之黑馬之來輕省年爾母有頼

さほ河のさゝれ踏渡りむは玉の駒のくるよはとしにもあるか

右郎女者佐保大納言卿之女也。初嫁一品穗積皇子。被寵無

儔。而皇子薨之後。藤原曆大夫聘之。

太宰大監大伴宿禰言代戀歌之内

孤悲死半時者何爲卒生日之爲社妹乎欲見爲禮

戀しなん後は何せんいける日の爲社妹をみまくほしみすれ

笠女郎賜大伴宿禰家持歌 廿四首之内

やちかゆく濱の眞砂もわかこひにあにまさらめや興津島守

みな人をねよとの鐘は打なれと君をし思へはいねかてにかも

あひ思はぬ人をおもふは大寺の餓鬼のしりへにぬかつくかと

これは垣のしりへにと申なり。されと又餓鬼をも寺には

かきてもつくりてもあれは。かよはしてかけるなり。

湯原王賜娘子歌

波之家也思不遠里乎雲居爾也戀管將居月毛不經國

はしきやしまちかき里を雲るにや戀つゝをらん月もへなくに

廣河女王歌(穗積皇子孫女。上道王女也。)

戀草乎力車爾七車積而戀良苦吾心柄

こひくさをちからくるまになく車つみてこふらく我心から

大伴宿禰家持贈坂上家大嬢歌 離絶數年復會。相聞往來云々。

萱草吾下總爾管有跡鬼乃志許草事二思安利家理

わすれ草我下ひもに付たれとおにのしこ草ことにしありけり

家持和坂上大嬢歌

月夜爾渡門爾出立夕占問足下乎曾爲之行乎欲焉

月夜には門に出たち夕けとひあし下をせしゆかまくんほり

同大嬢贈家持歌

云々人者雖云若狹道乃後瀬山之後毛將〔管歌〕念君

とにかくに人はいふとも若狹路の後せの山のうちもあはむ君

更大伴宿禰家持贈坂上大嬢歌之内

吾戀者千引石乎七許頭二將繫母神之諸伏

吾戀はちひきの石をなゝはかりくひにかけても神のもろふし

坂上大嬢者右大辨大伴宿禰奈鷹卿女也。卿居田村里。號曰

田村大嬢。但妹坂上大嬢者。母居坂上里。仍曰坂上大嬢也。

已上第四卷。

大伴淡等謹狀

梧桐日本琴一面〔對馬結石山孫枝。〕

此琴夢化娘子曰。余託根遙島之崇巒。曙轉九陽之休

光。長帶烟霞。逍遙山川之阿。遠望風波。出入雁木之

間。唯恐百年之後空朽溝壑。偶遭良匠。散爲小琴。不

顧實寵音小。恒希君子左琴。即歌曰。

伊可爾安其武日能等伎爾可母許惠之良武比等能比射乃倍和我

麻久良可武

いかにあらん日のときにかも聲しらん人のひさの上我枕せん

僕報詞詠曰。

許等々波奴樹爾波安里等母字流波之吉伎美我手奈禮能許等爾

之安流倍思

とゝはぬきにはあり共うるはしき君か手なれの琴にし有へし

琴娘子答曰。

敬奉德音。幸甚々々。片時覺。即感於夢言。概然不得止〔言〕

默。故附公使。聊以進御耳。謹狀。

天平元年十月七日

附使進上

得保都必等麻通良佐用比米都麻胡非爾比例布利之用利於返流

夜麻乃奈

遠つ人まつらさゝ姫つまこひにひれふりしよりおへる山の名

このまつらさゝよひめは大伴佐提比古か妻なり。さてまろ

人唐にわたりけるとき。しゐてわかれをおしみて。やまの

みねにのほりてひれをふりて。こきはなれゆくふねにみ

せるなり。それよりかのやまをまつらやまと申なり。松

浦やまは在肥前國也。

政布私懷歌 三首之内

阿麻社迦留比奈爾伊都等世周麻比都々美夜故能提夫利和周良

延爾家利

あまさかるひなに五年すまひつゝ都のてふりわすられにけり

このみやこのてふりは。みやこのふるまひといふ事なり

とぞ申。

已上第五卷。

神龜元年甲子冬十月五日幸于紀伊國時山部宿禰赤

人作歌

反歌

若浦爾廬滿來者滿乎無美華邊乎指天多頭鳴渡
わかの浦にしほみちくれは鴻をなみ芦へをさしてたつ鳴渡る
右年月不記。但爾從駕玉津島也。因今檢注行幸年月以載之
焉。

神龜二年乙丑夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作

歌

反歌

萬代見友將飽八三芳野乃多藝都河内之大宮所
萬代にみるともあかむや三吉野のたきつかうちの大宮ところ

三年丙寅秋九月十五日幸於播磨國印南郡時笠朝臣

金村作歌之内

反歌

玉藻菊海未通女等見爾將去船梶毛欲得浪高友
たまもかる蛭少女らなみにゆかんふなかもかな浪高くとも

山邊宿禰赤人作歌之内

反歌

不欲見野乃淺茅抑靡左宿夜之氣長在者家之小篠生
いなみのゝ淺茅をしなみさぬるよのけ長くあれは家の忍ふる

天平五年癸酉山上憶良沉寢之時歌

士也母空應有萬代爾語可名者不立之而

人なればむなしかるへし萬代に語りつくへき名はたてずして

右一首。山上憶良臣沉寢之時。藤原朝臣八束使河邊朝臣東
人。令問所疾之狀。於是憶良臣語已了。有須拭涕。悲嘆吟
此歌云々。

天平八年丙子夏六月幸于芳野離宮時山部宿禰赤人

應詔作歌之内反歌

神代よりよしの宮にありかよひたかくしれるは山河をよみ

諸兄去時參議左辨也。天平九年任大納言。同十年任右大

臣。天平十六年任左大臣也。

冬十一月左大臣葛城王等賜姓橘氏時御製歌

橘者實左倍花左倍其葉左倍枝爾霜雖降益常葉之樹

たちはなはみさへ花さへそのはさへ枝に霜置とましときは木

已上第六卷。

雜歌

詠天

あまの河雲のなみたち月の舟ほしのはやしにこさかくされぬ

右一首梯本朝臣人丸歌集出云々。

詠月

山末爾不知夜經月乎何時母吾待(將萬葉)座夜者深去年

山端にいさよふ月をいつともわか待をらんよはふけにつへ

詠雲

あなしかは河浪たちぬまきもくの槻かたかれに雲わたつらし
詠山

いにしへのとはしらぬをわれ見ても久しくたりぬ天のかく山

詠河

初瀬河なかるゝ水尾の瀬をはやみ井提こす波の音のさやけさ
佐槍のくま槍隈河のせを早み君してとらはよらんいひかも

羈旅歌

旅人のまきなかすてふにふの河ことはかよへと舟そかよはぬ
君か爲うきぬの池にひしとるとわかそめ袖のぬれにけるかも

右一首人麿集出云々。

寄草

月草に衣はすらんあさ露にぬれての後はうつろひぬとも

寄稻

石上ふるのわさ田はひてすともつなたにはへよもりてせく寛
つゝらんイ

寄藻

鑑みては入ぬる磯の草なれやみらくすくなくこふらくの多き

已上第十卷。

春雑歌

志貴皇子御歌

石をくたるひの上のさはひのもえ出る春に成にけるかも

山邊宿禰赤人歌

かすよりは若菜つまんとしめしのに昨日も今日も雪は降つゝ
我せこにみせんと思ひし梅花それともみえず雪のふれゝは

厚見王歌

かはつなく神南河にかけみえていまかさくらん山ふきの花

夏雑歌

山部宿禰赤人歌

こひしくはかた見にせんと我やとに植し藤波今咲にけり

大伴宿禰家持唐棣花歌

なつかけて咲たるはねす久方のあめうちふらは移ろひなんか

夏相聞

大伴坂上郎女

夏の野のしけみに咲るひめゆりのしらね戀はくるしき物を

秋雑歌

岡本天皇御製歌

夕されはをくらの山に鳴鹿のこよひはなかしうれにけらしも

湯原王きり／＼すの歌

暮月夜心も思努爾白露のをくこの庭にきり／＼すなく

冬雑歌

太上天皇御製

波木剣峰寸尾花道春黒木房造有室者迄萬代

はたすゝき尾花さかふさくろきもて作れるやとは萬代までに

この第八巻始終四季をたてたり。

已上第八巻。

大寶元年辛丑冬十月太上天皇大行天皇幸紀伊國時

歌十三首之内

妹かためわれ玉もとむおきへなる白玉よせこ興津白波

ふちしろのみさかをこゆと白妙のわか衣手はぬれにけるかも

きの國の昔弓雄のひよくやも鹿とりなひかし坂の上にそある

獻弓削皇子歌之内

さよなかとよはふけぬらし鷹金のきこゆる空に月わたるみゆ

已上第九巻。

春雜歌

久堅のあまのかこ山このくれに霞たなひくはるたちぬとか

昨日こそ年はくれしか春霞かすかの山にはや立にけり

春相聞

寄鳥

春されはもすのくさくきみえす共我は見やらん君かあたりは

寄花

河の上のいつもの花のいつもくきませ我せこ時わかめやも

夏雜歌

詠蟬

もたもあらん時もなかなん日くらしの物思時に啼つゝもとな

詠鳥

きつやと君かとはせるほととぎす小竹にぬれてこゝに鳴成(野鴨歌)

夏相聞

寄花

よそにのみ見つゝやこひん紅の末摘花の色にいてすとも

秋雜歌

わかまちし白茅子さきぬ今たにも匂ひにゆかな遠方人に

昔人はまきを秋といふいなわれは尾花かすへを秋と思はんはい

詠蟬

み吉野の岩もとさらす鳴かはつむへもなきけり河のせきよみ

詠鳥

秋の野の尾花か末になくもすの聲聞らんかかたきくわきもこ

詠水田

足引のやま由つくるこ秀すとも縄谷延よもるとしるかね

寄露

秋穂乎之努爾押塵置露消鴨死益戀乍不有者

秋のほをしのに押なみ置露のけかもしなまし戀つゝあらすは

この歌につきて申へき事の。かつはすきぬる比侍しなり。

其事は河社と申事は萬葉集には見えぬことなれと。つら

ゆきか集に。朱雀院の御時。内親王御屏風の歌に夏かくら

といふことをよめるうたの二首侍なり。その一首は。

河やしるしのおりはへほす衣いかにほせはか七日ひさらん
今一首は。

行水のうへにいはへるかはやしる岩波たかくあそふなるかな
これを俊賴朝臣の歌の口傳に。この河記の事いとしれる
人なし。たゞおしはかりにや。水のうへにやしるをいはひ
て。夏神樂をするなりと。されはゆく水のうたは夏かくら
とみえたり。初め歌は神樂のよしもいはず。おもひかけ
ぬ衣をほして。久しくひぬよしをいへり。神樂にはかなは
すやと。々らおほれにやいへるなり。それを内大臣家に百
首歌を歌合につかはれて侍しに。顯昭法師と申ものゝ。か
はやしるといふ事をよみて。方人にとはれて申ていはく。
これは夏神樂といふ事也。その神樂にはきよき河にさか
きをたて。三のをよりて棚にかきて神供をそなふ。夏神樂
の譜に見へたりと申たるを。夏神樂は久しくたえたりと
きこゆ。それをしかかきたる譜あらは。はやくその譜をい
たすへしとなんして侍し也。此歌を申やうは。この貫之か
しのおりはへの歌は。夏神樂とさしてことにはいた
さゝれとも。かの御屏風の繪に。河やしるにて神樂したる
ありさまかきたりけむを。河やしるのありさまはかりを
よみて侍りけるなるへし。しのおりはへといへるは。万
葉集の歌の詞に。つねにうちばへなといへることはにつ

ねによめるなり。おりはへといへる。又同じこゝろなり。
ほすころもとよめるは。まことの衣にはあらず。かのぬの
ひきの濡なといふやうに。たきの水のつれにおちたるを。
いかにほせはか七日ひさらんといへるなり。つねにとい
はんとて。ひさしきよしを七日とも八日ともいふ。又歌の
習ひなり。されはかの四季の御屏風に。夏瀧落たる所にて
神樂したるを。そのありさまをかくよめるなるへし。より
て二首の歌ともに。かはやしるの夏かくらに同じ心なる
ものなり。それを俊賴朝臣のころもほしたる歌は。神樂と
も覺えずとかきたるを。神樂のいへものゝ。われ神樂を
しれり。このつらゆきか歌を夏かくらのうたにてあらん
とて。萬葉集のしのことばをはえ心えずして。しのをお
りてたなにかくなりと。譜をもつくりたるにや。それを萬
葉委曲見たらんものはうたかひおもふへきを。ひとへに
しのをおりはへの詞につきて。篠を折てたなにつくるな
りと。清輔もかきて侍とかや。顯昭法師もそのまゝに申け
るなるへし。貫之は萬葉集のとほにつきてよみて侍を。か
やうに心え申なすを。つらゆきみはへらば。いかにおかし
くも奇怪にもおもひ侍らまし。

寄蝦

朝霞鹿火屋之下爾鳴蝦聲谷聞者吾將戀八方

あき霞かひやか下になくかはつ聲たにきかはわかこひんやは
このかひやかしたの歌。又もとよりやうく、に人申事な
り。これはやまさとおなかなとに山田つくるなるものは。
夏田うへつるのちより。秋になるまでは。庵をつくりて。
あやしものゝこともなとをすゑをきつゝ守らせ侍るな
り。またさなへなと申て。わかかなる時より。鹿猪のしゝ
なと申物もまうてきて。ふみそんしくひなとするをゝは
んれうにまもらするなり。それによるは又蚊なと申物も。
人けにつきてつとふ事なれば。蚊遣火のためにも。その火
に香ある物ともをとり入てふすほらせて。けふりをたや
さねは。鹿猪なとも人けをかきてまうてこさなれば。その
火をつねにけたさらんために。ぬたる庵のしたに又こし
をかされて。その煙を雨なともけたしかために。いほり
の下に蚊火をたておきて侍なるに。又田のあたりなれば。
かはつのあつまりきて。ぬのしゝなどにおちて。人けにつ
きてつねになくこそ侍なれ。あさかすみとは。さきにも
みえたるやうに。秋も夏もましてたやさぬけふりなとも。
山きにはかすみわたれる成へし。この歌は上は同じ事に
て。しもはずこしかわりて。このしふに二所入て侍なり。
今一首かすゑの句は。しのひつゝありとつげんこもかも
といへり。これもかれも戀によせたるなり。かくやまのな

かにさとをはなれて。いほにすゑたるものを。おのゝや
とをこふらんの山によそへたるなり。これを又河のよと
みなとに。ふしつけなといふ事のやうにして。魚をあつめ
てとらんとて。やをつくりおほゐていゝかへは。かひや
といふそと申なるへし。それに又かはつもつとふにや。さ
らはかはつをかふにそあるへき。又ちかく内大臣家の百
首のとき。顯昭法師かひの靈室にかへるのあつまりくる
なりとさへ申たりき。むげにみくるしかるへし。又この集
にはかひやとはさゝされ共。山田もるのをく蚊火のと
もいひ。又こゝろあへはあひぬるものを。をやまたの鹿猪
田もることなともよめる。これらもみな山田もる庵とも
の同じ心なり。されはかひやかしたは無難山田の庵なる
へきなり。

寄花

小男庵のいるのゝすゝきはつ尾花いつしかいもか手枕にせん
さきぬ共しらすしあらはもたもあるを此秋萩をみせつゝも哉

冬雜歌

相聞

降雪のそらにけぬへくこふれとも逢よしなくて月そへぬらし
あは雪のちさと降しきこひしくばけなく我や見つゝ忍はん
右歌柿本朝臣人麿歌集出云々。

已上第十卷。

古今相聞

正述心緒歌 一百卅九首之内

何爲命繼吾妹不戀前死物

なにせんに命つきけんわきもこに戀せぬさきにしまし物を

思依見依物有一日間忘念

思ふよりみるよりもは有物を一日へたつる忘るとおもふな

寄物陳思

石上振神杉神成戀我更爲鴨

いそのかみふるのかみ杉かみなれや戀をも更に我はするかも

山科のこわたの山に馬はあれとかちよりそくる君を思ひかね

道のへのいちしの花のいちしるく人みなしりぬ我戀つまと

たらちねの親のこふこの蘭こもりこまれる妹をみる由もかな

劔刀諸刃利足踏死々公依

劔たち諸はの利にのほりたちしにしもしなん君によりては

こと玉のやその衝に夕げとふうらまきにせよ妹にあはんよし

玉梓の道ゆきうらにととへは妹にあばんと我に云つる

右歌等皆柿本朝臣人丸歌集云々。

正述心緒

獨ぬと床くちめやもあや筵緒になるまでに君をしまたん
若草のにゐた辻をまきそめてよをやへたてんにくからなくに

寄物陳思

結縁解日遠敷細吾木枕蘿生來

むすふひもとかむ日とをし敷妙の我こまくらにこげ生にけり

をはたゝのいたゝの橋のこほれなは桁ようゆかんとふなわきもテ

宮材引いつみのそまにたつ民のやむ時もなくこひわたるかも

足引の山田もる翁のをく蚊火の下こかれのみ吾戀をらく

右歌さきにかひやの事に申つるうたなり。こゝには蚊火

とかけるなり。

千はやふる神のいかきも越ぬへし今は我身のおしげくもなし

たまもかるゐてのしからみうすきかも戀のよとめる我心かも

湊いりの芦分小舟さわりおほみわか思ふ君にあはぬ比かも

浪間よりみゆる小島の濱ひき木久しくなりぬ君にあはずして

うな原のおきつなばのり打なひき心もしぬにおもほゆるかも

譬喻歌

紅のこそめのころも下にきば人の見らくに匂ひ出んかも

かくしてや猶やゝみなん大荒木の浮田の森のしめならなくに

已上第十一卷。

寄物陳思

山代のいはたの森に心をそく手向したれはいもにあひかたき
心あへはあひぬる物を小山田の鹿猪田もるともりしもらすも
如神きこゆるたきのしらなみのおもしろく君かみえぬこの比

たきをはかくこの集にも神の如なとよみたれは。かはやし
ろもたきある河上にてするなるへし。

石はしるたるひの水のはしきやし君にこふらく我こゝろから
君かあたりみつゝをゝらん伊駒山雲なかくしそ雨はふるとも
忘艸わか下ひもにつけたれと鬼のしこ草猶こひにけり
中く人にあらすは桑子ともならましものを玉のをはかり
さひのくまひのくま河にこまとめて馬に水かへ我よそにみむ
羈旅發思

玉勝間あへしまやまのゆふ露に旅ねしかねつななきこのよを
住吉のきしにむかへるあわち島あはれと君をいはぬ日はなし
已上第十二卷。

雑歌

いくしたてみわすゑまつる神主のうすの玉蔭みれはともしも
月も日もかわりゆけとも久にふる三室の山のとつみやところ
已上第十三卷。

雜歌

相聞 駿河國歌

さぬらくは玉の緒はかりこふらくはふしの高根の鳴澤のこと

武藏國

戀しけは袖もふらんを武藏のうけらか花の色にいつなゆめ

下總國

鳩のかつしかわせをかへすともその悲しきをとにたてめやも
あのをとせすゆかん駒もか葛節のまゝの繼橋やます通はん

常陸國

筑波ねのそかひにみゆる足尾山あしかるとかもさねみえなくに
そかひとはおひすかひなといふやうに見ゆるなり。され
はかのきくの歌に。

かの見ゆる岸へにたてるそか菊のしけみさ枝の色のでこらさ
といへる歌も。むかひのきしにそかひに見ゆるときよめ
るにや。

承和のみかとのきなるいろをこのみたまひければ。き菊
をそかきくといふなりと申事は。いつよりいふ事にかお
ほつかなし。

上野國

かみつけのくろほのねろのくすはかた悲しけこらにいやかりくも

陸奥國

あひつねの國をさ違めあはなはく斯勢比にせんと紐結はされ

譬喩歌

遠江國

とはつあふみいなさほそ江の濤標我をたのめてあさまし物を

雜歌

山鳥のおろの初尾に鏡かけとなふへみこそなきよそりけめ

あさか潟しほひのゆたに思へらはうけしか花の色に出めやも
春へ咲藤のうらはのうらやすにさぬるよそなき比を思へは
にひむろのときにいたれはうた薄ほに出し君かみえぬ此比
みそらゆく君にもかもなけふゆきて妹にとゝひあす歸りこん
鳥てふおほをそ鳥のまさてにもきまさぬ君をこゝろくとそなく

譬喩歌

み社のそかへにたてるかほか花なさきいてそねこめて忍はむ
この歌もそかへにたてるといへるなり。

挽歌

かなし妹をいつちゆかめと山菅のそかひにねして今し悔しも

以前歌詞等國土山川名也云々。

已上第十四卷。

天平八年丙子夏六月遣使新羅國時使人等各悲別贈

答及海路上勸旅陳思作歌之内

大舟に妹のるものにあらまぜははくゝみもちてゆかまし物を
大伴のみつにふなのりこきいてゝはいつれの鳥に庵せんわれ
天さかる鄙の長路をこきくれば明石のとより家のあたりみゆ
（万葉）

右歌柿本人丸歌云々。

已上第十五卷。

有由縁離歌

安積香山影副所見山井之淺心乎吾念莫國

あさか山影さへ見ゆるやまの井のあさき心をわか思はなくに
有歌。傳云。葛城王遣于陸奥國之時。國司祇承緩意異甚。于
時王意不悅。怒色顯面。雖設飲饌。不肯宴樂。於是有前采女
風流娘（名）子。左手捧觴。右手持水。擊之王膝。而詠此歌爾。乃
王意解悅。樂飲終日。

朝霞香火屋之下乃鳴川津之努比管有常將告兒毛欲得

朝霞かひやか下になくかはつ忍ひつゝありとつけんこかも
右歌又さきに申つるかひやかしたの歌也。集右狀云。河村

王宴居之時彈琴。而即先誦此歌。以爲常行也云々。

詠玉掃鎌天木香來歌（後略）

玉掃薊來鎌磨室乃樹輿囊本可吉將掃爲

玉掃かりこかまゝろむろの木となつめのもとゝかきばかん爲

境田王詠數種物歌之内 穗積親王之子也。

虎爾乘古屋乎越而青淵爾鯨龍取將來劍刀乎我

虎にのりふるやをこえて青淵にたつとりてこん劔たちもか

猷新田親王歌（前略）

勝岡田之池者我知蓮無然言君之鬢無如之

かつまたの池は我しるはちすなししかいふ君か鬢なきかゝ

謗倭人歌

奈良山乃兒手柏之兩面爾左毛右手倭人之友

なら山のこのてかしはの二面ともかくにもねしけ人かも

池田朝臣噉大神朝臣奥守歌

寺々之女餓鬼申久大神乃男餓鬼被給而其子將播
寺々のめかき申さくおほみはのをかきたはりて其子ばらまん

大神朝臣奥守報噉歌

佛造眞朱不足者水停池田乃阿曾我鼻上乎穿禮
佛つくるちかにたらすは水とゝめ池田のあそか鼻の上をほれ

平郡朝臣噉歌

小兒等草者勿菊八穗簪乎穗積乃阿曾我腋草乎可禮
童へも草はなかりそやほ蓼をほつみのあそうかわき草をかれ

穗積朝臣和歌

何所曾眞朱穿岳疊平郡乃阿曾我鼻上乎穿禮
いつこにそあかにほる岡こも疊へくりのあそか鼻の上をほれ

豊前國白水郎歌一首

とよ國のきくの池なるひしのうれを摘とや妹かみ袖ぬるらん
已上第十六卷。

天平十八年正月。白雪多零。積地數寸也。於時左大

臣橋刺率大納言藤原豐成朝臣及諸王諸臣等。參入
太上天皇御在所。中宮御所。於是降詔。大臣參議并諸

王者令侍于大殿上。諸卿大夫者令侍于南細殿。而則
賜酒肆宴。勅曰。汝諸王卿等卿賦此雪。各奏其歌。

左大臣橋宿禰應 詔歌一首

布流山吉の白髪まで到大君につかへまつればたふとくも有か

紀朝臣清人應 詔歌一首

天下須泥爾おほひてふる雪の光をみればたふとくもあるか

葛井連諸會應 詔歌一首

新年のはしめに豊の登之しるすとならし雪のふれゝは

大伴宿禰家持述戀緒歌之内反歌

安良多麻乃登之可散流麻沔安比見禰婆許己呂毛之努爾於母保

由流香聞

新玉のとしかへるまであひみねは心もしのにおもほゆるかも

東風（越俗語東風謂之安由乃可是也。）伊多久布久良之奈吳乃

安麻能都利須流乎夫禰許藝可久流見由

あゆの風いたくふくらしなこの艇の釣する小舟漕かくるみゆ

こしの海の信濃の濱をゆきくらしなかき春日も忘れて思へや

右歌等天平廿年春正月廿九日大伴宿禰家持歌。

見潜鵜人作歌

竇比河波能波夜伎瀬其等爾可我里佐之夜蘇登毛能乎波宇加波

多知家里

めひ河のはやき瀬等に簪さしやそとものをはうかはたちけり

右歌。巡行諸郡當時所屬自作之。大伴宿禰家持。

已上第十七卷。

太上天皇御在於難波宮之時歌七首之内

左大臣橘宿禰歌一首

保里江爾波多麻之可麻之乎大皇之美敷爾許我卒登可年豆之里勢婆

堀江には玉しかましを大君のみふれこかむとかねてしりせば

御製歌一首和

多萬之賀受伎美我久伊豆伊布保里江爾波多麻之伎美豆々都藝豆可欲波牟

玉しかすきみかくいていふ堀江には玉敷みてゝつきて通はん

已上第十八卷。

天平勝寶二年三月一日暮眺關春苑桃李花作

春のそのくれなる匂ふ桃の花下てるみちにいてたてるいも

わかそのゝすもゝの花か庭にちるはたれのいまた残たるかも

攀折堅香子草花歌一首

物部乃八十嬌嬌等之挹亂寺井之於乃堅香子之花

ものゝへの八十のいもらか汲まよふ寺井の上のかたかしの花

夜裏聞千鳥喧歌二首之内

夜具多知爾寐寢而居者河瀬尋情毛之努爾鳴知等理賀毛

よくたちになれさめてをれは河せとめ心もしのになく千鳥かも

過灘谿崎(見舊夢)巖上樹歌一首(樹名都萬麻)

磯上之都萬麻乎見者根乎延而年深有之神左備爾家里

四月十二日遊覽布勢水海船泊於多枯瀨望見藤花各述

懷四首之内

藤浪のかけなるうみの底清みしつくいそなも玉とそわかみる
守大伴宿禰家持也。

たこのうらの底さへにほふ藤波をかさしてゆかむみぬ人の爲
次官内藏忌寸繩磨歌也。

天平勝寶三年

新年之初者彌年爾雪踏平之常如此爾毛我
あたらしき年の初はいやしにゆきふみならし常かくにもか

右一首歌。正月二日守館集宴。于時雪殊多。積有四尺焉。

即主人大伴宿禰家持作此歌。

以七月十七日遷任少納言。仍仰悲別之歌。贈貽朝集

使掾久米朝臣廣繩之館二首

荒玉乃年緒長久相見氏之彼心引忘也毛

あら玉の年のをなくあひ見てしかの心ひき忘れめやも

伊波世野爾秋芽子之努藝焉並始鷹揚太爾不爲哉將別

いはせのに秋萩しのき駒なへてこ鷹狩たにせてやわかれん

便附大帳使。取八月五日。應入京師。因此以四日設

國廳之饌。於介内藏伊美吉繩鷹館饌之。于時大伴宿

禰家持作歌一首

之奈謝可流越爾五箇年住々而立別麻久惜初夜可毛

しなさかる越に五とせすみくして立別ましくおしきよひかも

五日平旦上道。仍國司次官已下諸僚。皆共視送。於時射水郡大領安努君廣島。門前之林中。(預賦)領設饌饌之宴。于此大帳使大伴宿禰家持和內藏伊美吉經磨捧盞之歌一首

玉梓の道にいてたちゆくわれは君かことゝを思ひてしゆかん(お殿)

已上第十九卷。

天平勝寶六年正月四日氏族人等賀集于少納言大伴

宿禰家持之宅宴飲歌三首之内

霜のうへに霞たはしりいやましにあればましこむ年のを長く

霞立春の初をけふのことみつとおもへはたのしとおおもふ

右一首左京少進大伴宿禰池主歌也。

惜龍岡山櫻花歌

立田山みつゝこえこし櫻花ちりかすきなんわかゝへるときに

(靈賦) (目賦)
獨見江水浮漂番怨恨見玉不依作歌

堀江より朝鹽みちによるこつみ貝にありせはつとにせましを

右二首兵部少輔大伴宿禰家持作歌。

反歌

家つとにかひそひろへる濱波はいやとししくにイに高くよすれと

我せなを筑紫へやりてうつくしみ帯とはかなくあやにかみねん

右一首妻服部皆女。

萬葉集卷第二十抄之畢。

さてこの萬葉をは後拾遺の序に申たるは。この集の心はやすきことをはかくし。かたき事をあらはせり。よりてまとへるものおほしとそかきたるを。いとさにはあらぬにやとおほえ侍なり。此集のころまては。歌のことはに人のつねによめる事ともを。ときふのうつりかはるまゝには。よますなりにたることはとものあまたあるなるへし。もろこしにも文體三たひあらたまると申たるやうに。此歌のすかた詞も。時代のへたゝるにしたかひてかはりまかるなり。むかしの人のかたき事をあらはし。やすきことをかたくなして。人をまとはさむとおもへるにはあらざるへし。たゞかきやうのもしつかひにとりてぞ。うちまかせての事につかふもしをかもす。とかくかきなしたる事をおほかるへき。たとへは春の花とも秋の月ともいへるうたな。やすくさはかゝて。まなかなにひともしつゝかきて。波流乃波奈。阿伎之都伎なとやうにかき。又おなしく一字にかくにとりても。こゝかしこもしをかへつゝもかき。又卅一字の物をたゞ十餘もし廿よもしなともかきなしたるころゝの侍なり。まことにすこしはまとはさむとにやとも申つへかめれと。それもことはをかよはして。かくもいふそなとみせんとなるへし。されと近來もさやうのもしつかひにはかゝれて。まとふものもある成へし。又歌ともはまことに心もおかし。ことはつかひもこのもしくみゆる歌ともはおほかる

へし。又萬葉集にもあれはとて。よまむとはいかゝと見ゆる事とも侍なり。第三の巻にや。太宰帥大伴類さけちほめたる歌とも十三首までいれり。又十六巻にや。いけたの朝臣。おほみはの朝臣なとやうのものとのもの。かたみにたはふれのりかはしたる歌など。まなふへしともみえさるへし。かつはこれらはこの集にとりての誹諧歌と申うたにこそ侍めれ。又まことに證歌にもなりぬへく。もしつかひも證になりぬへき歌ともおほく。おもしろくも侍れは。かたはしとはおもふ給へなから。おほくなるにて侍なり。又ふるき詞のいまは人よますなりにたるも。かくこそはありけれと。人にみせむため記し入て侍り。又拾遺集などにも入。さらてもおのつから人の口にある歌とも。もらさむもくちおしく。かき記し侍るほとに。なにとなくかすおほく侍めり。萬葉集の歌はよく心をえてとりてもよむへき事とそ。ふるさ人申をきたるへき。又ふるき歌は。上句にいへることをすゑにかへして。ふたゝひいふ事はつねの事なるを。いつよりいひそめけることにか。やまねとなつてよますなりにけり。これらはかの古今集の紀淑望かまなの序にいへる。大津皇子のはしめて詩賦をこのみしより。かの源家の文をうつして。わか日城の俗とす。民葉一たひあらたまりて。和歌漸くおとろへにたりと云り。もしかのころほひよりこのかた。詩のやまひとて。さる事ともにならずらへていひそめける

ことにや。歌の式といふものは。光仁天皇と申御時。參議藤原濱成つくりたると申そ式のはしめなるへき。そのうちこなたさき。ひこ姫喜撰なとか式とて。さまゝのやまひとをたておきて侍なり。その中同じ事かへしてふた度よむ事と。又おなし心ふた所よむ事とは。むねとさるへきことに今はなりはてにて侍り。そのほかの病ともほさりあふへき事とも見え侍らす。それらをさらんとせば。歌かへりてみくるしくなり侍なん。されと式ともに申たる名ばかりは。さる事とはかりは入しるへくやとてかきつけ侍なり。

濱成卿式に七病と云は。

一には頭尾。二には胸尾。

四には厭黒子。五には遊風。

七には遍身といへり。

やまひのありさまとは式にみえたり。事なかくうるさくて略之畢。御覽すへからん人は。式ともを御覽すへし。

喜撰か式あるひは四病をたてたり。

一には岸樹。二には風燭。

四には落花。

あるひは八病をたてり。

一には同心。

二には亂思。

三には欄蝶。

四には渚鴈。

五には花橋。

六には老楓。

七には中飽。

八には後悔。

これらも式にみえたり。此中にはしめの同心の病そむねとさるへき事とみえたり。残りばさりあふへきにあらさるとなり。それをさらは。ふるきよき歌とも。みなことやふれ侍ぬへし。

又四條大納言公任卿の新撰髓腦といふものあり。俊賴朝臣の口傳と申か髓腦と申か。又能因法師のかきたる物なと。ふるくもちかくもさま／＼かき置て侍めり。これらはおもはくみな同じことともに侍めれば。しるし申に及はず。御らんすへからん人は。それらをたつねて御らんすへし。これはたゞさる事ありとはかりに。その名はかりをしるし申侍なり。そのなかにむかしの歌に。同じことふたたびかへしてよめることを。公任卿としよりの朝臣なとさへ。いかにおもひ申たる事にか。なにはつの歌をさへ。この花は梅のはななり。今は春へとさくやこの花といふは。よろつのはななれば病にあらずといひ。あさかやまの歌も。はしめのやまの名はにこりていふへし。あさくはといへるは。やまの井のあさきこゝろなり。又みやまにはまつの雪に消なくにといへる歌も。はしめはおくやまをいふ。みやまのはなといふは宮なり。されはこれらはやまひならぬよしに申たるこそ。いかにさは侍るにか。たゞむかしの歌はわざと二たひいへるなり。病といひなる事は。時代のあらたまりへた

ゝりて。物しりたてける人とも。式をつくりなとしけるほとに。やまひとかをたてゝ。いひなやましてけるそとてこそあらまほしけれ。ふるき歌ともをさへあらぬさまにいひなせる事。あやしくみえ侍る事なり。先達の事を申はよしなけれとも。又今少あかりての人のよみけむ心にたかひていひなす事は。いますこしはゝかりあるへき事なれば申侍なり。又このちかきころもうけ給はれば。長歌にも短歌反歌にも。韻の字のなと申なる。いとみくるしき事なり。詩の病なと申事になすらへて。式をつくり病をたてなとするほとに。韻の字のなと申事は。たゞ歌にとりては。かみの五七五のおはりの句。しもの七々の句の終りのもしなとを。韻の字に同じもしを置るは。はゝかるへしなといふばかりなり。まことに歌にはなにしにか韻はまことにはあるへき。詩には切韻といふもの有て。その韻に入ぬれば。その韻のもしとをつくれはこそ。まことに韻といふことは申ことなれ。歌にはたゞかみの句の終りの字。下の句の終りの字のなとなんあるなとこそ申を。詩の韻になすらへて。はてのもしの事はいはんとて。韻の字のなとうち申はかりにこそあるを。誠に程なき三十一字の歌のうちなとに。むねの句には五七の七の句のおはり。なかの五字の終。七々の句ことの終りなとを。韻の字のなと申らん事とも。いと／＼みくるしく侍る也。漢家の學問なとせぬものなとの。物しりかほせんとして。

かたのことく文のほし／＼と老の後にならひて。毛詩にいへるは。史記にいへるはなと申らん事。いと見くるしく侍り。歌はたゞかまへてこゝろすかたよくよまむとこそすへき事に侍れ。

萬葉集より後古今集の撰せらるゝ事は。としは百四十年。代は十四五代にやなりて侍らん。その程たにふるきことはののこれるは。つも。かも。けらし。へら也なとやうのことはかりやあらん。さらて萬葉集につねによめる。はしきやし。よしみやし。もとななとやうのことは。むけに絶にけることはとみえたり。されば萬葉集の比の後より。歌のありさまのかはりにけるほとは。これにぞをしはからるゝことなり。又萬葉集にいへる歌とものの中に。

初春のはつねのけふの玉簪手にとるからにゆらく玉のをこの歌は萬葉集に入れる本もあり。又なき本もありと申。これをとしよりの朝臣の口傳に申たるは。玉はゞきといふは。春のはつねの目。こまつをひきくして。はゞきにつくりて。ゐなかの人の家にこかふやを。ねむまのとしむまれたる女の。こかひするに物よきをかひめとつけて。それしてはきそめさせて。いはひのことはにいふ歌なりとそいひつたへたると申を。能因法師の帥大納言經信卿にかたりけるとて申たるは。むかし京極のみやす所と申は本院の大臣(時平のおとゝ)のむすめな

り。延喜帝の女御にたてまつらんとせられけるを。目こころよく／＼いとなみて。すてにそのよになりて。いたしくるまなとよせて。女房かつ／＼のるほとになりて。にはかに寛平の法皇御幸ありて。御車よせければ。このおとゝおもひかけぬけしきにてさはかれければ。われいたしたてんとて。帳のうちにいらせ給ひければ。たゞあふきておはしける程に。内より藏人御つかひにて参りて。夜いたくふけぬ。いかなることとたつね申させ給ひければ。おとゝよるこひなから。このよしをおつ／＼申されければ。しはし御返事もなくて。とはかりありて。しきりにしはふき申されければ。いとあへなく。これはおいほうしたまはりぬとおほせられければ。いとあさましきことにて。いたしくるまにのりける女房みなおりにけり。世の人いかゝいひさたしげんとこそおしはからるれ。藏人かへりまいりて。このよしをそうし申ければ。物もおほせられさりけり。そのみやす所の。むかし三井寺のかたはらに志賀寺とて。ことのほかにけんし給ふ所有とてまいり給ひけるに。かの寺ちかくなりて。所のさま面白おほえ給ひければ。御車の物みをひろらかにあげて。みつうみのかたなとみつかはしける程に。いとちかく岸のうへに。あさましげなる草の庵のありける。まとのうちより。ことのほかにをいとおとろへたる老ほうしの。まゆのしものしたよりめをみあはせたまひたりければ。いとむつかしきもの

にもみえぬかなとおほして引入せ給ひにけり。さてかへら
せたまひて後、老法師のこしふたへなるか。枕にすかりてま
りて。けむさんし侍し老法師こそまいりたれと申させ給へ
申ければ。しはしはきゝゝいるゝ人もなかりけれと。ひねもすに
たちて。あまりにいひければ。かゝる事なん申物侍と申けれ

は。しかる事あらんと仰られて。みなみおもてのひかくしのま
にめしよせて。いかなる事そととはせ給ければ。しはしはかり
ためらひて。志賀にこの七十余年はかり侍て。ひとへに後世ほ
たいのとをいとなみ侍りつるに。はからさる見參をつかうま
つりて。いかにもくことおもひなく。今一度見參せん心の
み侍て。ねさふらふもねられず。起てもやすくゐられす侍れ
は。年比のおこなひのいたつらになりなむ事のかなしきに。も
したすけもやせさせおはしますとて。枕にすかりてなくく
まいり侍也と申ければ。いとやすき事なりとのたまひて。みす
をすこしあけて見えさせ給ひければ。おもてのしわかすもし
らす。まゆはしろき雪なともまさりて。みなおいかはりて人
ともおほえす。誠にこそろしけなるさましてまほり入て。とは
かりありて。その御てをたまはらんと申ければ。申にしたかひ
て御手をさしたしまへりけるを。わかひたいにあてゝ。ふ
ろつも覺えすなき入て。かのてにとるからにといふ歌をよみ
かけ申て。この世に生れ侍て後九十年に及び侍ぬる。かはかり

のよろこひ侍らす。このえんをもて。おもひのことくに彌陀の
淨土に生れ侍りなは。かならず道ひきたてまつらん。又淨土に
生れさせ給はゝ。みちひかせ給ふへしと申てなきければ。御返
し。

よしさらば誠の道にしるへして我をいさなへゆらく玉の緒
とそ侍られける。これをきゝてよろこひなからかへりにけり
といへるを。この歌は萬葉集の廿の卷にあれば。此物かたりと
の外のそらと感へきを。萬葉集のよき本といふは。廿の卷の歌
の今四五十首はかりなき也。その本にはこの歌みへす。いかな
る事にかおほつかなしとかけり。この事をおもひ給ふるは。こ
の歌はたとひ萬葉集にあるにてもなきにても。いかにもむか
しの歌にこそ侍めれ。それをふるき歌をも。いまある事のその
ことにかなひたる時は。詠しいつることはある事にや。かの志
賀のひしりいまよめるならは。手にとるからにといはんこと
はしかありとも。そのまいりたりけむ日。もし春のはしめのは
つねの目にしもあらすは。玉はゝきにことによそふへしとも
おほえすやあらん。なかゝさやうのひしりなとのこのふる
き歌をしりて。てにとるからにといはんれうにおもひいてゝ。
かくいひいてたらんは。たまはゝきも今すこしおかしくもや
あるへからん。大方はこれのみにあらす。伊勢物かたりにも。
やまとのくにゝ女とすむ男。としころふる程に。かうちの國高

安の郡に又いきかよふ所いてきにけり。かくてかよふほとに。もとの女おきつ白波たつたやまとよめるをきゝて後。かうちへもおとこいかなりにければ。かのたかやすの女よめるとて。

君かあたりみつゝをらん生駒山雲なかくしそ雨はふる共とよみてなんみいたすに。からうしてやまと人こむといへりなとかきて侍を。これまた萬葉集の第十二卷のうたなり。伊勢物語はまことにあるとをまかけり。又わなかな人などのありさまは。さしもなきことをもおかしきさまにかきなし。ものをもしはせ。歌をもよませたる事もあれば。ふるき歌にあひたることのあるときは。そのうたをいはせても侍らん。又まことにふるき歌をはしらねとも。わなかな人などのよみあはせたることも侍らん。又おなしき物かたりに。男みちのくにまですゝろにいけり。そこなる女京の人はめつらかにやおもひけん。せちにおもへる心なんありける。さてかの女のよみけるとて。

中ノ／＼に人とあらずはかひこにもならましものを玉の緒計これ又萬葉集の同じき第十二の巻の歌也。されはこれもみちのおくの女のことをおかしういはんとて。萬葉集の歌のさもありぬへきをいはせたるにもやあらんともおもひたまふるな。又やまと物かたりに。むかし大納言なりける人のみかかたにたてまつらんとて。かしつきたまひけるむすめを。うとねり

なりける物の見て。よろつのこと覚えきりければ。ゆくりなくとりてみちのくにゝいにけり。あさかの郡あさかやまにいはりをして住けるほとに。たちいてゝやまの井にかけをみるに。ありしにもあらずなりにけるかたちを見るもはつかしくて。よみてきにかきつけてなくなりけるとてかける歌。

あさかやま陰さへみゆる山の井のあさくは人を思ふ物かばとよめりけりとかけり。

此歌なとはまして萬葉集にとりてもむれとある歌。古今集にも歌の父母とて序にもいたせる歌を。やまと物かたりにかくいへり。これもふる歌をかのやまのなかにぬいていひてゝ書付けるにや。又この物かたりのよゝのふることにて。かつらきの王の采女かふるき事をいひて。大きみのこゝろをやはらけるにやとも。すこしはあやしき事ともになん。いかにもふるき歌を。折節につけて。かなへる事によみいづるもある事なるへし。されはかのつねのけふの玉はゝきの歌のみにもあらず。かゝる事ともはある事なりとしるし侍なり。

さてこのてにとるからにゆらく玉のをのうたは。まことにある本なき本あるとに侍めり。そのかみよりみたまへし萬葉集には入て侍りき。又木工のすけあつたかと申しものゝ部類して。四季たてたる萬葉集。あまた人のもとにもちたる本也。それにも春のはしめの歌のなかに書入て侍りき。それを當時

ある人の證本と申し本をかきうつして侍には。此歌いらす侍也。されは此抄にもかき入す侍なり。されとも萬葉集の心の歌にては一定侍へし。〔以下奥書并校本光〕又大かたは萬葉集の事は猶申へき事も侍なり。なにとなきことなから。人もおほん心うへくやともおほえ侍也。この集をは 聖武天皇の御時撰せらるゝ事は無疑侍うへに。誠にさそありけんと思へて侍なり。聖武天皇位に廿五年おはしましけるほと。ならひに御位おりさせ給て。太上天皇としてしつかにおはしまして。天平勝寶八年五月に太上天皇かくれおはしましにけり。又橘左大臣諸兄のおとゝは。そのとしの正月に致仕して。前左大臣として侍りけるか。そのとしの八月に改元ありて。天平寶字元年と申ける。又の正月にたちはなのさきの左大臣はとし七十四にて薨し侍にけり。されはそのさき萬葉集はさためて撰進し侍にけん。それに大伴宿禰家持と申歌人は。この御時はしめは宮内少輔。又越中守より少納言になりて侍めり。景雲元年に左京大夫になり。寶龜十一年に參議になり。延暦までありて。中納言になりて侍めり。この集の家持卿のかの越中の國にありて。少納言になりてのほりける時のうた。國の人の歌なとまでおほく入て侍なる。又この家持卿の父大伴大納言旅人の歌なともいり侍めり。されはこの人の歌の集なとをこそは撰者におくりて侍りけめ。さてかの卿の歌もおほく入にけるこそはとそみて侍れと。すこしは猶

撰者もおほつかなくは侍事なるへし。なを入も御心えむために。みゆる事ともをしるし申侍りぬるなり。

本云
右一帖贈祖父雅縁卿筆跡。

權中納言在判

以右奥書榮雅自筆之本令書寫了。

甲申六月七日一校了。

集陰

以飛鳥井(雅章公。)之御本令書寫之畢。

佐々木氏
無適子庸敬

古來風躰抄下

とし月のあらたまりかはる。はなもみちの色につけても。うたのすかた詞は思ひよそへられ。そのほとしなくもみるやうにおほゆへきものなり。春のはしめ。雪のうちよりさきいてたる。のきちかき紅梅。しつのかきれのむめも。いろはことくから。にほひはおなしくたおる袖にもうつりかほり。身にしむこゝちするを。はなのさかりになりぬれば。よしのゝやまのさくらばのこれる雪にまかひ。まして雲のはなのさかりは。しら雲のかさなれるかと心もをよひかたきを。春ふかくなるまゝには。ゐての山ふきにかはつのなき。きしのふちなみ

に。ゆふへのうくひす春のなこりおしみかほなるなとも。さま／＼身にしむこゝちするを。いはかきぬまのかきつはた。やましたてらすいはつゝしなとまで。ほとにつけてはこゝろうつらぬにあらず。卯月にもなれは。かきねの卯花にほとゝきすのたちしのひ。まかきのなてしこのあさ露にひらけたるほととなとは。又たくひわすれぬへきを。さまでならぬ道のへのあふちのはなのかせにうちかほり。庭のあちさぬのよひ々にをける露に。夕つくよのほのかにやとれるなとは。いみしくすてかたくみゆるを。さ月の五日こゝのへのうちをおもひいつれば。たちちはなのうちかはれるのきうかく。あやめの御こしかきたてたるに。みはしのまへよりみなみさまに。なにとなきときの花を左右にたてわしたる程。あやめのかにかほりあひたるほととなと。たとへんかたなきものなり。夏ふかくなりぬる夕くれに。いけのぼちすのいろ／＼ひらけたるは。みつさへかほるこゝちするなとは。この世のほかまで思やらるゝものなり。秋の風たちぬれは。まかきのをみなへしにむしのこゑ／＼つゆけく。野への秋はきにしかのつまとへるなとは。さらにいふへきにもあらず。しなにふちはかまなとはさまでならぬも。むかしをわすれす。ゆめのまくらにかよひけんも。あはれあさからす。秋ふかくやう／＼しくれゆくまいには。よもの山のこすゑいるふかくなりゆき。まかきのきくしもにうつろひゆくなと

は。いふへきにもあらぬを。とやまのしくれもことにぬらしけるにや。ぬるてもみちのわきて色ふかきをおりてみれば。枝さしなとはなつかしからすなから。いろのふかさもあはれに。はしのたち枝。まゆみのもみちなとは。あたちのはらまて思やられて。かえてのもみちは葉のさま枝くきまで。近くてみるさへあはれになつかしくそみえたる。冬になりゆくまいには。あしのかればに霜をきまふひ。みきはのこほりにとちられ。まして雪ふりぬれは。いはほにもさくはなとうたかはれ。つゐのみにとりのまつうへの雪なとは。としさへのこりなくなるとつけて。そてのこほりも。身にしみさる心ちしてこそはおほゆるやうに。歌のすかた心もたうかやうによそへてこゝろうれは。まことにすかたかく。きよけにもえんにも優にも。またさまでならねと。ひとふしおかしきさまも。ほと／＼につけつゝよそへられぬへきことなり。さていまは古今集の歌はしめよりと／＼申侍るへし。

古今和歌集

春歌

ふるとしに春立ける日よめる

在原元方 徳源朝
多原孫也

年の内に春はきにけり一年をこそとやいばん今年とやいばん
この歌まことに理つよく。又おかしくもきこえて。ありが

たくよめる歌なり。

春立ける日よめる

紀貫之

袖ひちてむすひし水のこほれるを春たつけふの風やとくらん
この歌古今にとりて心もことはもめてたくきこゆる歌
也。ひちてと云ことはや。いまのよとなりては。すこしふ
りにて侍らん。つも。かも。へらなりなとはさることにて。
それよりつきくすこしかやうなることはともの侍なる
へし。

題しらす

よみひとしらす

春霞たてるやいつこみよしのよしの山に雪はふりつゝ
この歌はたてるやとかきたる本も侍れと。よき本にはみ
なたゝるとかけるなり。歌のたけすかたなといみしく侍
るを。いまのよにはたゝるのことはふりにたるへし。たて
るにては又あまりにつよく。しなのをくるゝなるへし。

二條の后のはるのはしめの御うた

雪の中に春はきにけりうくひすのこほれる涙今やとくらん
たいしらす
よみ人しらす

梅かえにきめる鶯春かけてなけともいまた雪は降つゝ

これらはいまの世にもいみしくおかし。

雪の木にふりかゝれるを

素性法師

春たては花とやみらんしら雪のかゝれる枝にうくひすのなく

これ又いみしくおかしきな。みらんのことは。いまのよに
はすこしもちゐかたきなり。わさとよめると見ゆるは。お
かしくもみゆるに。源のよりまさと申しゝものゝよみて
侍き。

題しらす

よみ人しらす

心さしふかく染てしおりければ消あへぬ雪の花とみゆるか
これはさきのおほきおほいまうちきみの歌なりとかけ
り。

此集の歌にはこゝろことはいみしくおかし。これより
のちはやうく略して申へし。

春のはしめによめる

藤原言直

春やとき花やをそきと聞わかん鶯たにもなかずもあるかな

寛平御時后宮の歌合のうた

源まさすみ

山風にとくる氷のひまことにうちいつる波や春のはつ花

題しらす

讀人しらす

みやまには松の雪たに消なくにみやこは野への若菜つみけり

歌たてまつれとおほせられし時よみてたてまつれ

る

紀貫之

かすかのゝわかなつみにや白妙の袖ふりはへて人の行らん

寛平御時后宮歌合のうた

源宗平朝臣

ときはなるまつのみとりも春くれは今一しほの色まさりけり

鷹のこゑをきいてこしへまかりける人をおもひて

よめる

凡河内躬恒

春くれば鷹かへるなりしら雲の道ゆきふりにことやつてまし

題不知

讀人しらす

おりつれば袖こそにはへ梅花ありとやこゝにうくひすのなく

已上此歌ともいつれもすかた心いみしくおかしく侍り。

そのうちこのうた。梅をおりける袖のふかくにほひけるを。こゝにはばなはなれとも。うくひすのかをたつねきてなくらんこゝろ。めてたく侍る也。

水邊に梅のはなさけるをよめる

い

せ

春ことになかるゝ川をはなとみておられぬ水に袖やぬれなん

なききの院にてさくらのはなをみてよめる

在原業平朝臣

世中にたえて櫻のなかりせは春の心はのとけからまし

題しらす

よみ人しらす

石はしる瀧なくもかな櫻はなたおりてもこんみぬ人のため

石走とをき。たきなくもかなといへる。もしつかひのめてたく侍なり。

はなさかりにみやこをみやりてよめる

そせい法師

みわたせば柳さくらをこきませて都を春のにしきなりける

歌たてまつれとおほせられしときよみてたてまつ

りける

つらゆき

さくら花さきにけらしも足引のやまのかひよりみゆる白雲

けらしもといへるも。この歌にはかきりなくめてたくき

こゆ。

やよひの潤月ありけるとしよめる

い

せ

さくらはな春くはゝれる年たにも人の心にあかれやはせぬ

としたにもといひ。あかれやはせぬといひ。はげさせる心

すかたかきりなく侍なり。

春下

僧正遍昭につかはしける

惟喬みこ

櫻はなちらはちらなんちらすとてふる郷人のきてもみなくに

このおほんうたすかた。このみこいかてかくはよみたま

ひけるにか。

雲林院にてさくらの花のちりけるをみてよめる

承均法師

櫻ちるはなのところは春なから雪そふりつゝきえかてにする

太同帝也
奈良のみかとの御うた

ふるさとゝなりにし奈良の宮古にも色はかはらず花ぞ咲ける

題しらす

よみ人しらす

かばつなくぬての山吹ちりにけり花のさかりにあはまし物を

たちはなの清友からたなり。

やよひのつこもり雨のふりけるに藤のはなをおり

て人につかはしける

なりひらの朝臣

濡つゝそしぬて折つる年の内に春はいくかもあらしと思へは
しぬてと云ことばに。すかたもこゝろもいみしくなり侍
なり。歌はたゞ一ことばに。いみしくもふかくもなるもの
に侍るなり。

夏歌

奈良のいそのかみてらに郭公をきゝてよめる

そせい法師

いそのかみふるきみやこの郭公こゑはかりこそ昔なりけれ

月のおもしろかりける夜あかつきかたによめる

清原深養父

夏のよばまたよひなから明にけり雲のいつこに月やとるらん

みなつきのつこもりの日よめる

みつね

なつと秋と行かふ空のかよひちはかたへすゝしき風や吹らん

秋歌

秋立日うへのをのこともかものかはらに河迢遙し

けるとともにまかりてよめる

つらゆき

河かせのすゝしくもあるか打よする波とゝもにや秋は立らん

是貞親王家歌合歌

大江千里

月みれは千々にもの社悲しけれ我身ひとつの秋にはあらねと

読入しらす

奥山にもみちふみわけ鳴鹿のこゑさく時そ秋はかなしき

朱雀院のをみなへしあはせに 左のおほいまうち君

女郎花秋のゝ風に打なひき心ひとつをたれによすらん

秋歌合しけるとさよめる

紀淑望

もみちせぬときはの山は吹風の音にや秋をきゝわたるらん

神のやしろのあたりをまかりけるときいかきのう

ちのもみちをみてよめる

つらゆき

ちはやふる神のいかきにはふ葛も秋にはあへす移ろひにけり

仙宮にきくわけて人のいたれるかたをよめる

そせい法師

ぬれてほす山ちのきくの露のまにいつか千年を我はへにけん

この歌。ぬれてほすとをける五ものしのことにてめてたく侍

るに。又山路の菊の露のまにといへるも。ありかたくつゝ

けて侍によりて。すゑの句もなにとなくひかれて。いみし

くきこゆる也。

しらきくのけなをよめる

みつね

心あてにおらはやおらん初霜のをきまとはせるしら菊の花

みやつかへひさしくつかうまつらてやまさにとこ

もりける時よめる

藤原關雄

おくやまのいばかき紅葉ちりぬへしてる日の光みる時なくて
せきをかすみける山さといまの禪林寺也。

題しらす

よみ人しらす

たつ田川もみちみたれてなかるめりわたらは錦中やたえなん
龍田川もみちはなかる神なひの三室の山にしくれふるらし
この二首のうた。さきのは奈良の帝聖武天皇の御歌。つき
のは柿本人丸か歌也。

秋はきぬもみちは宿にふりしきぬ道ふみわけて問人はなし

二條后東宮御息所と申ける時御屏風にたつ田かは
にもみちなかれたるかたかきたる所をよめる

業平朝臣

ちはやふる神代もきかす立田川から紅に水くゝるとは

神代もきかす龍田河といへるわたりのめてたき也。

なかつくもりにおほゐにてよめる

つらゆき

夕つくよをくらの山になく鹿のこゑのうちにや秋はくるらん

冬歌

たいしらす

よみ人しらす

おほ空の月のひかりしさむければ影みし水をまつ氷りける
梅の花それともみえず久かたのあまざる雪のなへてふれゝは

この歌人丸か歌と申。

雪ふりて年のくれぬる時にこそつるにもみちぬ松もみえけれ

賀歌

右大將藤原朝臣四十賀のうしろの屏風のうた

そせい法師

かすかのに若菜つみつゝ萬世をいはふ心は神そしるらん

秋

みつね

住吉のまつを秋かせ吹からにこそうちそふるおきつしら波

別歌

題しらす

中納言行平朝臣

立別いなはの山の嶺におふるまつとしきかはいまかへりこん

この歌あまりにそくさりゆきたれと。すかたおかしきなり。
よみ人しらす

かきりなき雲のよそにわかるとも人を心にをくらさらめや

しかの山こえにていしぬのもとにてもいひける

人に別ける時よめる

つらゆき

むすふ手のしづくにゝこる山のぬのあかても人に別れぬる哉

この歌。むすふてのをけるより。しづくににこる山のぬのといひて。あかてもなといへる。大かたすへてことはこ

とのつゝき。すかた。心。かきりなく侍なるへし。歌の本た
いはたゝこの歌なるへし。

羈旅歌

もろこしにて月をみてよみける

安倍仲曆

天の原ふりさけ見ればかすかなるみかさの山にいてし月かも

おきのくにゝなかされけるときふねにのりて出た

つとてよめる

小野篁

わたの原やそしまかけてこき出ぬと人にはつけよ海士の釣舟

人にはつけよといへる。すかたこゝろたくひなく侍なり。

題しらす

よみ人しらす

ほの／＼とあかしのうらの朝霧に鳥かくれゆく舟をしそ思ふ

柿本朝臣人麿歌なり。

此歌上古中古末代まで相叶へる歌也。

朱雀院奈良におはしましけるときたむけ山にて

すかはらのをとゝ

このたひはぬさもとりあへず手向山もみちの錦神のまに／＼

戀歌

たいしらす

つらゆき

よしの川岩なみたかく行水のはやくそ人を思そめてし

よみ人しらす

我こひはむなしき空にみちぬらし思やれとも行かたもなし

こひせしとみたらし河にせしみそき神はうけすも成にける哉

このうたはいせものかたりの歌なり。なりひらの朝臣の

うたにやおほつかなし。いかにもめてたき歌なり也。

戀すれば我身はかけとなりけりさりとて人にそはぬ物ゆへ

このうたなどは。たゞこのころの人のうたのめてたきに

て侍也。

小野小町

思つゝぬればや人の見えつらん夢としりせはさめさらましを

みつね

我戀は行衛らしらすはてもなし逢をかきりとおちふ斗そ

大納言國經

明ぬとていまはの心つくからにといひしらぬ思そふらん

よみ人しらす

さむしろに衣かたしき今夜もや我をまつらんうちのはしひめ

そせい法師

今こんといひしはかりになか月の有明の月をまちいてつる哉

河原院左大臣

みちのくのしのふもしすり誰ゆへに亂初めにし我ならなくに

五條の后宮のにしのたいにすみける人を行衛しら

すなりて又のとし梅のはなさかりに月のかたふく

まであはらなるいたしきにふしてこそを戀てよみ

ける
なりひらの朝臣

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはらとの身にして

月やあらぬといひ。春やむかしのなとつゝけるほとのか
きりなくめてたきなり。

哀傷歌

さきのおほいまうちきみをしらかばにかり付け
る夜よめる つゝ そせい法し

ちの泪おちてそたきるしら川は君かよまでの名にこそ有けれ

姑のみまかりにけるときよめる 壬生忠岑

せをせけは潮と成てもよとみけり別なとむるしからみそなき

藤原利基朝臣左近中将にてすみける曹司のみまか

りてのち庭のすゝきしけりけるをみてよめる

御春有助

君かうへし一村すゝき虫の音のしげきのへとも成にける哉

甲斐國にまかりて身まかりける時よみける

在原叢春 琴平朝臣男ふ
在原三の君といふ

かりそめの行かよひちとそ思こし今はかきりのかとて成ける

雑歌

二條后春宮御息所と申ける時大原野にまうて給へ

りけるに御車より御うちきむたまはりてよみける

なりひらの朝臣

大原やをしほの山もけふこそは神世のことと思ひつらめ

五節の舞姫をみてよめる 良岑宗貞

たいしらす

よみ人しらす

天つ風雲のかよひちふきとちよ乙女のすかたしはしとゝめん
我心なくきめかねつきらしなやをはずて山にてる月をみて
ちはやふるうちの橋守なれをしそ哀とはおもふ年のへぬれば

藤原興風

たれをかもしる人にせん高砂のまつもむかしの友ならなくに

をのゝたかむら

しかり迎そむかれなくにことしあれば先嘆かれぬあなう世中

おきのくにゝなかせれ侍てよめる

思きやひなの別におとろへてあまのなはたきいさりせんとは

たいしらす

よみ人しらす

いさこゝに我世はへなん菅原やふしみの里のあれまくもおし
わかやとはみわの山もと戀しくはとふらひきませ杉たてる門

これは三輪の明神の御歌と申。

ふる歌にくはへてたてまつりける長うたのおくの

反歌

たゝみね

君か世にあふさか山のいはし水こかくれたりと思ひける哉

誹諧歌

たいしらす

左のおほいまうち君

もろこしの吉野の山にこもる共をくれんと思ふ我ならなくに
この歌は。漢朝に商山と申山は。吾朝のよしのゝやまのや

うに南に侍なり。よりてかくよめるか。俳諧のこゝろにて侍なり。

い　　せ

難波なるなからの橋もつくる也いまは我身を何にたとへんこのうたは。なからの橋くちにしのち。またつくらされとも。橋はつくりつへきものなるゆへに。つくるなりとよめるか。又俳諧の心にて侍也。

読　人　し　ら　す

世をいとひ木本ことに立よればうつふしそのあさの衣なり已上古今集。

萬葉集はときよひさしくへたゝりうつりて。歌のすかた詞うちまかせてまなひかたかるへし。古今こそは本たいと信仰すへきものなれば。いづれもおろかならねと。そのなかにもことなるともなところくしるし侍なり。つきに又後撰集歌はしすこし又ところく申侍へき也。

後撰和歌集

春歌

正月一日二條后宮にておほうちきをたまはりてよ

める

藤原敏行朝臣

ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりとおとろかれぬる

題しらす

閑院左大臣

なをさりにおりつるものを梅花こきかに我や衣そめけん

山邊赤人

我せこにみせんと思し梅花それともみえず雪のふれゝは

春中

やまとのふるの山にてよめる

僧正遍昭

いそのかみふるの山へのさくら花うへけん時をしる人そなきかへるかりなきしてよめる

読　人　し　ら　す

かへるかり雲ちにまとふこそす也霞吹とけ春のやまかせ

春下

題しらす

ふかやふ

うちばへて春はさばかりのとけきを花の心やなにいそくらん

月のおもしろかりける夜はなをみて

源　信　明

あたらしい夜の月と花とを同じくはあはれしれらん人にみせはや

あかたの井との家より藤原のはるかたにつかはし

ける

きんひらかむすめ

都人きてもおらなにかはつなくあかたの井との山ふきの花

題しらす

よみ人しらす

山櫻咲ぬる時はつれよりも峯のしら雲たちまさりけり

まことやいづれのころよりたれかいひそめける事にか。

後撰にはたいしらすよみ人もとかき。拾遺には題よみ人

しらすとかくなり。とかき世の故人も申とききて。その

かみはさやうにもかき侍しを。なをふるき本ともあまたつれみ侍しかは。さま／＼にかきたるさま。たゞ女なとかきうつすほとに。さやうなることを人の申いてたるにこそとみえ侍しかは。後白川院の三代集かきてたてまつれとおほせられしとき。後撰をも拾遺抄をも。みな古今のおなしことにかきてたてまつり侍にしなり。よりてこれにもその定にかき侍にしなり。

やよひばかりにはなのさかりに道なまかるとてよみ侍ける

僧正遍昭

折つれはたふさにけかるたてなから三世の佛に花たてまつる

やよひに潤月あるとしつかさめしのころ申文にそ

へて小野宮のおほいまうち君の家につかはしける

つらゆき

あまりさへありて行へき年たにも春にかならず逢よしもかな

かへし

左大臣

つねよりものとけかるへき春なれは光に人のあはさらめやは

夏歌

夏のよふかやふか琴ひくをきゝてよみ侍ける

藤原兼輔朝臣

短夜の深行まゝに高砂のみねのまつかせふくかとそきく

かつらのみこのほたるをとりとて侍ければかりき

ぬのそてにつゝみて うなぬ（蓋別也）

つゝめともかくれぬものは夏虫の身よりあまれる思ひ成けり又一説には。かつらのみこに式部卿のみこすみたまひけるを。かの宮の童女のおとこみこを思ひかけ申て。男みこのほたるをとりてと侍けるに。かさみのそてにつゝみてたてまつるとてよめるともいへり。それをかつらのみこをおとこみこかとこゝろえて。このころものにかくものなどの侍なるこそいとみくるしく。

秋歌

たいしらす あめのみかとの御うた

秋の田のかりほの庵のときをあらみわか衣手は露にぬれつゝ

秋の歌とてよめる ふかやふ

いく世へてのちか忘れんちりぬへき野への秋萩みつるよの月

冬歌

たいしらす よみ人しらす

神無月ふりみふらすみきためなきしくれそ冬の初成ける

ひとりぬる人のきかくに神無月にはかにもふるはつ時雨哉

山に入とてよめる 増基法師

神無月しくれ許を身にそへてしらぬ山ちに入そかなしき

題しらす よみ人しらす

雪ふりて年のくれぬる時にこそつねに緑の松もみえけれ

この歌は古今にあり。かれはついにのみちぬとあり。そのことはすこしはいかにそきこゆるを。この集にはつねにみとりのとあるは。よきには似たれとも。又のみちぬよりは心のおとるなり。いつれもいかにそおほえなから。年寒してしかうしてのちに。松柏ののちにしほむことをしる」と云心のいみしくて。いつれをもえもらし侍らぬなり。

戀歌

いひかはしける女のなをさりに云にこそあめれと
いへりければつかはしける 　　つらゆき

いろならはうつる許もそめてましおもふ心をえやけみせける

おほつふねにものゝたうひつかはしけるをさらに

きゝいれさりければ

閑院三のみこ

大かたはなそやかなのおしからん昔のつまと人にかたらん

かへし

おほつふね

人はいさ我はなき名の惜ければ昔もいまもしらすとをいはん

大納言國經卿の家に侍ける女をしのひてゆくすゑ

まてちきることはへりけるをにはかに贈太政大臣

の家にわたり侍にければせうそこをたにかよはさ

すなりにければこの女の子のとしいつゝ許なるか

本院のにしのたいにあそひけるかひなにかきては

ゝにみせたてまつれとてかきつけ侍ける

平貞文

昔せし我かれことのかなしきはいかに契し名残なるらん

返し

よみ人不知

うつしにて誰ちきりけんきためなき夢ちにまとふ我は我かは

女のもとにきぬをぬきをきてとりにつかはすとて

よみ侍ける

伊尹朝臣

すゝか山いせをのあまのすて衣しほなれたりと人やみるらん

こといてきて後京こくのみやすんところにつかは

しける

元良のみこ

侘ぬれは今はたおなし難波なる身を盡してもあはんとそ思ふ

たいしらす

よみ人しらす

思つゝへにける年をしるへにてなれぬるものは心なりけり

菅原大臣家に侍けるをんなにかよひけるおとこな

かたえて又とひ侍ければ

すか原やふしみの里のあれしよりかよひし人の路もたえにき

雜歌

仁和帝さかの御時の例にてせりかはの行幸したま

ひけるひ

中納言行平朝臣

さかの山みゆきたえにしせり川の千世のふる道あとは有けり

よの中をおもひうらみて侍けるころ 　　なりひらの朝臣

住わひぬいまはかきりと山里につまきこるへき宿もとめてん

相坂の關に庵室してゐたりけるときに行かふ人を

みてよみ侍ける

せみまる

これや此行もとまるも別てはしるもしらぬもあふ坂のせき

かしらおろし侍ける日

僧正通昭

たらちねはかゝれとてしもむは玉の我黒髪をなてすや有けん

左大臣家にて題をさくりて歌よみ侍けるに露の字

をとりてよみ侍ける

藤原國たゝ

我ならぬ草葉もものは思けりそてより外にをする白露

祝歌

左大臣家に子とものかうふりし侍けるによめる

つらゆき

大原やをしほの山のこ松原はやこたかゝれ千世のかけみん

今上のみこにおましゝける時太政大臣の家にわ

たりおはしましてかへらせたまふ御をくりものに

御本たてまつるとてよみ侍ける

太政大臣貞昌

君かためいはふ心のふかければ聖の御代のあとならへとそ

おほんかへし

今上御製

教をくことたかはすは行末の道とをくとも躑ばまとはし

以上後撰集。

拾遺和歌集

春歌

平貞文家歌合に

壬生忠岑

春たつと云許にやみよしのゝ山もかすみてけきはみゆらん

承平四年中宮賀の屏風の歌

紀文韓

春霞たてるをみればあらたまのとしは山よりこゆる成けり

霞をよめる

山邊赤人

昨日こそ年はくれしかばるかすみかすかの山にはや立にけり

若菜をよませたまひける

圓融院御製

春日野におほくの年はつみつれと老せぬものはわかな成けり

入道式部卿宮子目によみ侍ける

大中臣能宣

千とせまで契しまつもけふよりは君にひかれて萬世やへん

權中納言義懷さくらのはなおしむ歌よみ侍けるに

よめる

藤原長たふ

身にかへてあやなく花をおしむ哉いけらは後の春もこそあれ

亭子院歌合によめる

紀貫之

櫻ちるこのしたかせはさむからて空にしられぬ雪ぞ降ける

この歌は。古今に承均法師。はなのところは春なからとい

へるうたの。ふるきさまなるをやはらけてよみなしたれ

は。すゑのよの人の心になへるなり。

夏歌

屏風に

源順

わかやとのかきれや春をへたつらん夏きにけりとみゆる卯花

夏のはしめに讀ける

源しけゆき

夏にこそ咲かゝりけれ藤の花まつにとのみも思ける哉

天徳歌合に

平兼盛

み山いてゝよはにやきつる郭公あかつきかけて聲のきこゆる

東宮にさふらひけるゑにくらはし山に郭公鳴たる

所をよめる

藤原實方朝臣

五月やみくらはし山のほとゝきすおぼつかなくも鳴わたる哉

この歌まことにありかたくよめる歌なり。よりていまの

世の人歌の本躰とするなり。されとあまりに秀句にまつ

はれり。これはいみしけれと。ひとへにまなばんことはい

かか。

九條右大臣家の屏風によめる

平兼盛

あやしくも鹿のたちとのみえぬ哉をくらの山に我やきぬらん

これほと秀句はこひねかふへし。

河原院のいつみのもとにすゝみてよめる

惠慶法師

松陰のいはぬの水をむすひあけて夏なき年と思ける哉

秋歌

延喜御時御屏風に

紀貫之

萩のはのそよく音こそ秋かせの人にしらるゝはしめ也けれ

七夕

人丸

天河とをきわたりにあられとも君かふなてはとしにこそまで

少將に侍けるときこまむかへにまかりてよめる

太宰大貳高遠

相坂の關のいはかとふみならし山立いつるきりばらの駒

延喜御時月次御屏風歌

紀貫之

あふさかの關のしみつにかけみえていまや引らんもち月の駒

此ふたつの歌はとり／＼にまことにめてたき歌也。

屏風に八月十五夜池ある家に遊したる所を

源したかふ

水の面にてる月なみをかそふればこよひそ秋の軍中成ける

この歌又くらはし山の郭公の歌の風躰也。

三條太政大臣の家にてよめる

藤原爲賴

おほつかないつくなるらん虫のねを尋は草の露やみたれん

これはひとへに優の躰也。

題しらす

よしのふ

もみちせぬときはの山にすむ鹿はをのれ鳴てや秋をしるらん

くれの秋重之かせうそこしたる返事によめる

平兼盛

くれて行秋のかたみになくものは我もとゆひの霜にそ有ける

これこそあはれによめる歌に侍める。

冬歌

ならのみかとたつたかはに紅葉御らんしける行幸
によめる 柿本人まろ

たつ田川もみち葉なかる神なひのみむろの山に時雨ふるらし

これ古今の歌也。まことにめてたくも侍かな。

たいしらす づらゆき

思かれいもかりゆけは冬のよの河かせさむみちとりなく也

屏風に 平かねもり

ふしつけし淀のわたりをけさみれはとけんこもなく氷しに鬼

これ一のすかたなり。期なとはうちまかせぬ歌の詞なれ
と。このうたにとりていとをかしかるへし。

清原もとすけ

高砂のまつにすむつる冬くれはおのへの霜や置まざるらん

月をみてよめる 惠慶法師

天の原空さへさえやわたるらんこほりとみゆる冬のよの月

別離歌

配所にして故郷につかはしける 菅贈太政大臣

君かすむ宿の梢をゆく／＼とかくるゝまでもかへりみしはや

物名歌

あらふねのみやしる すけみ

莖もほもみな緑なるふかせりはあらふねのみや白くみゆらん

雑歌

冷泉院東宮の御時月をまつこゝろうへのをのこと
もよみ侍けるに 仲 文宣宮藏人

有明の月のひかりをまつ程にわかよのいたくふけにける哉

ありかたくよめる歌也。

水上秋月といへることをよめる 菅原文時

水の面に月のしつむをみさりせば我ひとりと思はてまし

とをきところになかるとて女につかはしける

大江爲基

わするなよ程は雲井に成ぬとも空行月のめくりあふまで

圓融院御時齋宮くたり侍けるに母の前齋宮もると

もに越侍て

齋宮女御

世にふれは又もこえけり鈴鹿山むかしの今に成にやあるらん

この歌も秀句あまりなるにや。

戀歌

天徳御時歌合に

壬生忠見

戀すてふ我名はまたきたちにけり人しれすこそ思ひをめしか

平兼盛

忍れといろにいてにけりわか戀はものや思ふと人のとふまで

題しらす

人まろ

奥山のいはかきぬまのみこもりに戀やわたらん逢よしをなみ

頼めつゝこぬよあまたに成ぬればまたしと思そ待にまされる

この二首の歌などは。たゞこのころの人の歌にてもいみしくこそ侍れ。

入道攝政まかりけるに門をおそくあくといひ侍れはよみていたしける

右大將道綱母

なけきつゝ獨ぬるよの明るまはいかに久しきものとかはしる

雜春歌

ことありてのち

菅贈太政大臣

こちふかはにほひをこせよ梅花あるしなしとて春をわするな

北白川にて花みに人々まうてきたりければよめ

る 公任卿

春きてそ人も問ける山さとははなこそやとのあるしなりけれ

延喜御時南殿のさくらのちりしきて侍ければよめ

る 源公忠朝臣

とのもりのとものみやつこ心あらば此春はかり朝きよめすな

左大臣女御入内の屏風に 公任卿

紫の雲とそみゆる藤のはないかなるやとのしるし成らん

しはすのつこもりによめる きのつらゆき

むは玉のわかくろかみに年くれてかゝみの影にふれる白雪

雜戀

いなりになうてゝげさうしはしめて侍ける女のこ

と人にあひて侍ければつかはしける 長たふ

我といへはいなりの神もつらき哉人のためとは祈らざりしなこのうたいみしくおかしきすかたなり。たゞそのふしとなけれと。歌はかくよむへきなるへし。

哀傷歌

あさかほのはなを人につかはすとて 藤原道信朝臣

あさかほをなにはかなしと思けん人も花ばさこそみるらめ

恒徳公の服ぬき侍とて

かきりあればけふぬきすてつふち衣はてなき物は涙なりけり

たいしらす よみ人しらす

山寺のいりあひの鐘の聲ことに今日もくれぬと聞そかなしき

少納言藤原むねまさかしかにて出家し侍るとき

てつかはしける 公任卿

さゝ波やしかのうら風いかばかり心のうちのすゝしかるらむ

性空上人のもとにつかはしける いつみしきふ

くらきよりくらき道にそ入にけるはるかにてらせ山のはの月

南天竺より婆羅門僧正東大寺供養にあひにほたひ

のなきさにつきたりけるとときよみ侍ける

行基菩薩

靈山の釋迦のみまへに契てし眞如くちせずあひみつる哉

返し

婆羅門僧正

かひらゑにともに契しかひありて文殊のみかほあひみつる哉

聖德太子かたなかの山邊道家におはしましける
に飢人路頭にふせり太子馬よりおりてあゆみより
給てむらさきの御そをぬきてうへ人にたまふとて
よみたまひける歌

しなてるやかたおか山にいひにうへてふせるたひ人あはれお
やなしおやなしになれ／＼けめやさすたけのきみはやなきい
ぬにうゑてこやるそのたひ人あはれ／＼と云。
(せしめ)

飢人かしらをもたけておほんかへしなてまつる
いかるかやとみのをかほのたえはこそ我大君のみなは忘れめ
已上五首上の巻にしるせりといへとも。この集にいれる
をもらさんこそいかゝとて。かされてかきしるすなり。

已上拾遺集。

後拾遺集

春

正月一日よみ侍りける

小大君

いかにれておくるあしたに云事そ昨日をこそと今日をとしと

みちのくに侍ける時

光朝法師母

出てみよいまは霞も立ぬらんはるはこれよりあくところきけ

春從東來といふこゝろをよめる

源師賢朝臣

東路はなこそ其の關もあるものをいかてか春のこえてきつらん

春立日よめる

橘俊綱朝臣

相坂の關をや春もこえつらんとはの山のけさはかすめる
一條院御ときうへのなのことも春のうたとてこひ
侍ければよめる
むらさきしきふ

みよしのは春のけしきと霞めともむすほゝれたる雪のした草
たいしらす
いつみしきふ

春霞たつやをそきと山川の岩まをくゝるなときこゆなり

たかつかさとのゝ七十賀の屏風に臨時客の所をよ
める
赤染衛門

紫の袖をつらねてきたるかなはるたつことはこれそうれしき
入道前太政大臣大饗の屏風に臨時客の所を讀侍け
る
入道前太政大臣

君ませとやりつる使きにけらしのへのきゝすはとりやしつ覽
正月はかりつのくに侍ける時人のもとにつかは
しける
能因法師

心あらん人にみせはやつの國のなにはあたりの春のけしきを
後冷泉院の御とき后宮歌合に残雪をよめる

花ならておらまほしきは難波江のあしのわかにはふれる白雪
題しらす
藤原範永朝臣
大江よしとき

梅かゝをよはのあらしの吹ためてまきのいたとの明る侍けり
よみ人しらす

山里はかきねの梅のうつり香にひとりねもせぬ心ちこそすれ
かへるかりをよめる

津守國基

うすゝみにかくたまつさとみゆる哉かすめる空にかへる鴈金
白川院にてはなをみてよみ侍ける

大納言長家

あつまちの人にとほゝやしら川の關にもかくや花はにほふと
たいしらす

紫式部

世中をなになけかまし山櫻花みるほとこのこゝろなりせば

宇治前太政大臣花みになんときゝてつかはしける

大納言齊信

いにしへの花みし人は尋しをおいは春にもしられさりけり

栗田右大臣家にて残はなをよみ侍ける

藤原爲時

かくれても開へきはなばさきにけり身をかきりとも思ける哉

夏歌

正子内親王繪合し侍けるにかねのさうしにかきて

さかみ

みわたせば波のしからみかけてけり卯花さける玉川の里

郭公をよめる

能因法師

時鳥さなかなぬよいのしるゝらばぬるよも一夜あらましものを

はなたちはなをよめる

さかみ

五月やみ空なつかしくにほふ哉はなたちはなに風やふくらん

宇治の前太政大臣三十講の後歌合し侍るに讀侍ける
大納言長家

夏のよもすゝしかりけり月影は庭しろたへにしもとみえつゝ

秋歌

八月十五夜に讀る

惟宗爲經

古しへの月かゝりせばかつらきの神はよるとも契らさらまし

たいしらす

曾ねよし忠

なげやなけ蓬か柚のきり／＼す過行秋はけにそかなしき

叢の露をよめる

範 永

けさきつる野原の露にわれぬれぬうつりやしぬる萩か花すり

永承四年内裏歌合に

堀川右大臣

いかなれは同し時雨に紅葉するはゝその杜のうすくこからん

冬歌

承保三年十月今上御かりのつゐてに大井河にみゆ

きせさせ給ける日よませたまひける 御 製

大井川ふるきなかれを尋きてあらしの山のもみちをそみる

かつらのやまさとにてしくれのいたくふり侍ける

によめる

藤原兼房朝臣

あはれにも絶す音するしくれ哉とふへき人もとほぬ栖に

落葉如雨と云ことをよめる

源頼綱

木葉ちる宿はきゝわくともなししくれする夜も時雨せぬよも

藤原家經

もみちるをとほしくれの心ちして梢の空はくもらさりけり

十月はかり山さにとよるとまりてよめる

能因法師

神無月ねさめにきけばやま里のあらしのこゑはこの葉成けり

永承四年内裏歌合にちとりをよみ侍ける

堀川右大臣

さほ川の霧のあなたに鳴千鳥こゑはへたてぬものにそ有ける

たいしらす

和泉式部

さひしさに煙をたにもたゝしとて柴おりくふる冬の山さと

増基法師

冬のよにいくたひ許れさめしてものおもふ宿のひましらむ覽

障子繪に雪のあしたたかかりしたる所をよみ侍ける

大納言長家

とやかへるしらふの鷹のこゑをなみ雪けの空にあはせつる哉

たいしらす

好忠

岩間には氷のくさひ打てけり玉ぬし水も今はもりこす

賀歌

後一條院うまれさせ給て七夜に人々まいりあひて

女房さかつきいたせと侍けるに 紫式部

めつらしき光さしそふ杯はもちなからこそ千世もめくらめ

三條院みこの宮と申ける時帶刀陣の歌合によめる

大江よしとき

君か世はちよに一たひゐるちりのしら雲かゝる山となるまで

承暦二年内裏歌合に

民部卿經信

君か世はつきしとそ思神風やみもすそ川のすまむかきりは

同四年内裏歌合によめる

式部大輔資業

君か世はしらたまつはきやちよとも何かいのらん限なければ

羈旅歌

くまのゝ道にておほん心ち例ならずおほされける

にあまのしほやくを御らんして

花山院御製

旅の空よはの煙とのほりなほあまのもしほ火たくかとやみん

みちのくにまかりくたりにしにしら川の關にて

よめる

能因法師

都をは霞とゝもにたちしかと秋かせそ吹しらかはのせき

哀傷歌

一條院の御とき皇后宮(定子)かくれたまひてのち

帳のかたひらのひもに結つけられて侍ける

よもすから契しことゝ忘すはこひん涙の色そゆかしき

圓融院法皇うせさせ給てむらさきのに御そうそう

侍けるにひとゝせこの所にて子目せさせたまひし

ことなと思ひてゝよみ侍ける

大納言行成

おくれしとつねの御幸はいそきを煙にそはぬ旅のかなしさ
小式部なくなりてのちむまことも侍けるをみて

よめる

いつみしきふ

とゝめ置て誰を哀と思ふらんこはまさるらんこはまさりけり

圓融院法皇うせさせたまひて又のとし御乳母藤三

位のつほれにくるみ色のかみにかきておい法師の

まねにてさしをかせたまひける

一條院御製

これをたにかたみと思ふ都にははかへやしつるしぬしはの袖

よしたかの少將うせてのち人のゆめにみえける歌

しくれとはちくさの花そちりまかふなに故郷に袖ぬらすらん

きてなれしころもの袖もかはらぬに別し秋に成にける哉

戀歌

東宮と申ける時故内侍のかみのもとに初てつかは

しける

後朱雀院御製

ほのかにもしらせてし哉春霞かすみのうちにおもふ心を

女につかはしける

實方朝臣

かくとたにえやはいふきのさしも草さしもしらしなむ思を

公頼にあひくして侍けるに申納言さたより忍てを

とつれけるをひまなきさまをやみけんたえまかち

にをとなひ侍ければつかはしける

さかみ

逢事のなきよりかれてつられければさそあらしにぬるゝ袖哉

宇治前太政大臣家三十講の後歌合に戀の心をよみ
ける

堀川右大臣

逢きてとせめて命のをしければ戀こそ人のいのち成けれ

題しらす

小 弁

思る人もこそあれあちきなくつれなき戀に身をやかへてん

中關白少將に侍けるときはらからなる人にもいの

ひわたりけりたのめてまうてこさりけるつとめて

女にかはりてつかはしける

恋後衛門イ
馬内侍

やすらはてれなまし物をさ夜更てかたふくまでの月をみし哉

たいしらす

いつみしきふ

津國のこやとも人をいふへきにひまこそなけれ蘆のやへふき

清少納言人にしられてたえぬなかにて侍けるにひ

さしくおとつれさりければよそゝにてもものなと

いひけるにさしよりて忘にけりなといひ侍りけれ

はよめる

さねかたの朝臣

忘すよまた忘すよかはらやのしたふくけふりした結ひつゝ

夜ことにこんといひてよかれしけるおとこのもと

につかはしける

いつみしきふ

今夜さへあらばかくこそ思ほえめ今日くれぬ間の命ともかな

陽明門院皇后宮と申ける時ひさしく内にまいらせ

たまはさりける時五月五日たてまつらせ給ける

後朱雀院御製

あやめ草かけしたもとのれをたえてさらに戀ちにまふ比哉

高階なりのふいしやまにこもりてひさしくをとし

侍らさりければ いづたいふ

みるめこそあふみの海にかたからめ吹たにかよへしかの浦風

題しらす 左京大夫道雅

涙やは又もあふへきつまならなくより外のなくきめそなき

心かはりたる人に遣ける 周防内侍

契りしにあらぬつらさもあふとのなきにはえこそ恨さりけれ

こゝろかはりたりける女につかはしける

清原元輔

ちきりきなかたみに袖をしほりつゝ末の松山波こそしとは

たいしらす よしたゝ

あちきなし我身にまさる物やあると戀せし人なもときし物を

承暦二年内裏歌合に 辨のめのと

戀すとも泪の色のなかりせはしはしは人にしられさらまし

永承六年内裏歌合に さかみ

恨わひほさぬ袖たにあるものを戀にくちなむ名こそおしけれ

題しらす いづみしきふ

さま／＼に思こゝろはあるものををしひたすらにぬるゝ袖哉

長たふ

我心かはらんものかかはらやのしたゝく烟わきかへりつゝ

永承四年内裏歌合に 堀川右大臣

うしとてもさらに思そかへされぬ戀はうらなき物にそ有ける

題しらす 源重之

まつ鳥やをしまか磯にかつきせし蟹の袖こそかくはぬれしか

雑歌

例ならすおはしまして位さらんとおほしめしける

ころ月あかゝりけるを御らんして 三條院御製

心にもあらてうき世になからへは戀しかるへき夜半の月かな

後朱雀院の御時月のあかゝりける夜うへにのほら

せ給ていかなることか申させたまひけん

陽明門院

今はたゝ雲井の月をなかめつゝめくりあふへき程もしられす

こんといひつゝこさりける人のもとに月のあかゝ

りけるよつかはしける 小 辨

なをさりの空たのめせて哀にも待にかならずいつる月哉

返し 小式部

たのめすはまたてぬるよもありなまし誰ゆへかみる有明の月

月のいりなむとするをみて讀侍ける 僧正深覺

なかむれば月かたふきぬ哀わかこの世の程もかはかりそかし

五月五日六條の前齋院にものかたりあはせ侍ける

に小辨おそくいたずとて方人こめてつきのものか
たりをいたし侍けるを宇治前太政大臣小辨か物語
は見所あらんとてまたれけるに岩かき沼といふ物
かたりをいたすとて讀侍ける

小 辨

引すつるいはかきぬまのあやめ草思しらすもけふにあふ哉

大納言行成ものかたりなとして内の御ものいみに
こもれはとていそきかへりてつとめて鳥のこゑに
もよほされてといひ侍ければよふかゝりけん鳥の
こゑは函谷關のことにやといひつかはしたりける
をたちかへりこれはあふさかのせきになんといへ
りければよみてつかはしける

清少納言

よをこめて鳥のそられははかる共世にあふさかの關は許さし

中關白のいみに法興院にこもりてあかつき千とり

のなくをきゝてよめる

圓松法師

明ぬなりかも川瀬に鳴千鳥けふもはかなくれんとすらん

修行に出たつ日よみ侍ける

増基法師

ともすればよもの山へにあくかれて心に身をもまかせつる哉

良邊法師大原にこもりぬときゝてつかはしける

素意法師

みくさゐしおほろの清水そこすみて心に月の影はうかふや

返し

良邊法師

程へてや月もうかはん大原やおほろの清水すむ名斗そ

延久五年後三條院住吉にまいらせたまへりけるに

よみ侍ける

大納言經信

おきつかせ吹にけらしな住吉のまつのしつくをあらふ白波

釋教

普門品

前大納言公任

世を救ふうちには誰かいらさらんあまれき門は人しきゝねは

已上後拾遺集。

おほかたみなちかき世の人の心になひて。もらすへき

もなく侍れと。殊なるともを注つけ侍れは。みないみしく

おかしくこそ侍めれ。

金葉和歌集

春歌

ほりかはの院の御とき百首歌めしけるに立春の心

をつかうまつりける

修理大夫顯季

うちなひき春はきにけり山川のいはまの氷今やとくらん

東宮大夫公實

春立て梢にきえぬしら雪はまたきにさけるはなかとそみる

藤原顯仲朝臣

いつしかと明行空のかすめるはあまの戸よりや春は立ちらん

これよりのちはところくをしるしつけ侍へし。

花隨風と云ことを

攝政左大臣

よしの山嶺のさくらや咲ぬらんふもとの里ににほふ春風

宇治前太政大臣家歌合に

源俊賴朝臣

山櫻咲そめしより久かたの雲井にみゆる瀧の白糸

後冷泉院御時皇后宮歌合に

堀川右大臣

春雨にぬれてたつねん山櫻雲のかへしのあらしもそ吹

ほりかはの院御とき中宮の御方にて風靜花芳と云

こゝろを

としよりの朝臣

梢にはふくともみえすさくらばなほるそ風のしるし成ける

夏歌

卯花をよみ侍りける

攝政左大臣

うの花のさかぬかきればなけれども名になれたる玉川の里

郭公をよめる

藤原顯輔朝臣

ほとゝきすあかてすきぬる聲により跡なき空をなかめつる哉

さみたれをよめる

參議師賴

五月雨はぬまのいはかき水こえてまこも刈へき方もしられす

水風晚涼といふこゝろを

としよりの朝臣

風ふけは蓮のうきはに玉こえてすしく成ぬひくらしのこゑ

家の歌合にはなたちはなをよみ侍ける

權中納言俊忠

さ月やみばな橘のありかをは風のつてにそ空にしりける

二條關白家にて雨後野草と云ことをよめる

としよりの朝臣

此里も夕立しけりあさちふに露のすからぬ草のはもなし

公實卿家にて對水待月と云ことをよめる

藤原基俊

夏の夜の月まつ程のですさひに岩もろし水いくむすひしつ

秋歌

田家秋晩と云こゝろを讀侍ける

大納言經信

夕されは門田のいなばをとつれてあしのまろやに秋風そふく

奈良花林院歌合によめる

權僧正永縁

いかなれば秋は光のまさるらんおなしみかさの山のぼの月

きりくすをよめる

前齋院六條

露しけきのへにならひてきりくす我手枕のしたに鳴也

夜聞鹿聲と云ことをよめる

内大臣家越後

よはになくこゑに心をあくかるゝ我身は鹿のつまならねとも

家の歌合に草はなをよめる

權中納言俊忠

夕露の玉かつらしてをみなへしのはらの風におれやふすらん

堀川院御とき題をさくりて歌つかうまつりけるに

すゝきをとりてよめる

としよりの朝臣

鶉鳴まのゝ入江のはま風におはななみよる秋の夕くれ

攝政左大臣家にもみちをよめる

藤原仲實

冬歌

深山のあられと云こゝろをよみ侍ける

大藏卿匡房

はし鷹のしらふに色やまかふらんとかへる山にあられふる也

たかゝりをよめる

内大臣家越後

とはりやかたのゝをのに鳴雉子さこそはかりの人はつられ

前太政大臣家歌合に雪歌

皇后宮攝津

ふる雪に杉のあをはもうつもれてしるしもみえす三輪の山本

百首歌の中に雪をよめる

隆源法師

みやこたに雪ふりぬればはしからきのま木の袖山跡たえぬらん

攝政左大臣家にて歳暮のこゝろをよめる

藤原永實

かそふるにのこりすくなき身につめばせめても惜き年の暮哉

歳のくれをよみ侍ける

中納言國信

何ことをよつともなしに明くれてことしもけふに成にける哉

賀歌

宇治前太政大臣家歌合に祝のこゝろをよみ侍ける

中納言通俊

君か世はあまのこやれの尊よりいはひそそめし久しかれとは

大藏卿匡房

戀歌

たのめてあはぬ戀と云ことをよめる 源顯國

あひみんと頼むれはこそくれば鳥あやしやいかゝ立歸るへき

實行卿家歌合によめる 藤原道經

戀わひてなさふる袖やなかれいつる涙の川のぬせきなるらん

國信卿家歌合に 俊賴朝臣

よとゝもに玉ちるとこのすか枕みせはや人によはのけしきを

俊忠卿家に戀の十首歌よませ侍ける時ちかふこひ

と云心をよめる 皇后宮しきふ

逢みての後つらからは世々を経てこれより増る戀にまとはん

戀の歌とて讀侍ける 藤原成通

後の世と契し人もなきものをしなはやとのみいふそはかなき

雜歌

おほみれの笙のいはやにてよみ侍ける

僧正行尊

草の庵をなに露けしと思けんもらぬいはやも袖はぬれけり

百首歌のなかに述懐長歌よみてたてまつりける反

歌 俊賴朝臣

世中はうき身にそへるかけなれと思すつれとはなれさけりけり

小式部内侍うせてのち上東門院よりとしころたま

きぬイ

ひけることをなき跡にもたまはりけるに小式部内侍とかきつけられたりけるをみてよめる

いつみしきふ

もろともに若の下にはくちすして埋もれぬ名をみるそ悲しき

月あかゝりける夜瞻西上人につかはしける

僧正行尊

いさきよき空のけしきわたのむ哉我まとはすな秋の夜の月

已上金葉集。

詞華和歌集

春歌

堀川院御とき百首歌めしける時立春の心をよみ侍ける

大藏卿匡房

氷あししかのからさき打とけてさゝ波よする春かせそふく

寛和二年内裏歌合に 藤原惟成

きのふかも霞ふりしはしからきのとやまの霞春めきにけり

天徳四年内裏歌合に 平兼盛

故郷は春めきにけりみよしのゝみかきか原をかすみこめたり

初聞鶯と云ことをよめる 道命法師

たまさかに我まちえたる鶯のはつねをあやな人やきくらん

たいしらす 曾禰好忠

雪きえは多くのわかなもつむへきに春さへばれぬみ山への里

冷泉院東宮と申ける時百首歌たてまつりけるによ

める 源重之

かすかのにあさなく雉のはね音は雪の消まにわかなつめとや

この歌ともみなまことにめつらしけにおもしろく侍なるへし。

白河にはなみにまかりてよめる としよりの朝臣

しらかはの春のこすゑをみわたせば松こそ花のたえまへけれ

三月盡によませたまひける 新院御製

おしむとてこよひ書わくものはやあやなく春のかたみ成へき

夏歌

たいしらす 能因法師

山ひこのこたふる山のとゝきす一こゑなけは二聲そきく

大納言公教

まつ程はぬるよもなきを郭公なくねはゆめの心ちこそすれ

世をそむかせ給てのちはな橘を御らんして

花山院御製

宿ちかくはなたちはなはうへてみし昔をしのふつまと成けり

たいしらす よしたゝ

袖川のいかたの床のうきまくら夏はすゝしきふしと成けり

秋歌

つのくにゝすみける比大江爲基任はてゝのほりけ

るに遣ける

僧都清因

君まさばとはましものをつの國のいくたのもりの秋の初風

承暦三年内裏歌合に

顯綱朝臣

たなはたに心はかすとおもはねとくれ行空はうれしかりけり

題しらす

右大臣

いかなればおなし空なる月影の秋しもことにてりまさるらん

いつみしきふ

秋ふくはいかなる色の風なれば身にしむはかり哀なるらん

九月十三夜月照菊花といふことをよませ給へる

新院御製

秋ふかみ花にはきくのせきなればしたはに月もありあかし鬼

冬歌

題しらす

大江嘉言

山ふかみちりてつもれる紅葉はのかはけるうへに時雨降なり

旅宿時雨と云ことをよみ侍ける

膽西上人

いほりさすならの木陰にもる月のくもるとみれば時雨ふる也

たかゝりをよめる

なかつふ

震ふるかたのゝみのゝすり衣ぬれぬやかす人しなれば

戀歌

たいしらす

實方朝臣

いかてかは思ありともしらすへきむろのやしまの煙ならては

堀川院御時百首

修理大夫顯季

わか戀はよしのゝ山のおくなれや思われともあふ人もなし

たいしらす

平祐舉

むねはふし袖はきよみか關なれや煙も波もたゝぬ日そなき

新院御製

瀬をばやみ岩にせかるゝ瀧河のわれても末にあはんとそ思ふ

藤原道經

我戀はあひそめてこそ増りけれしかまのかちのゐるなられ共

大江公頼にわすられてよめる

さかみ

夕くれはまたれしものをいまはたゝ行らん方を思ひこそやれ

雜歌

御修行のほとさくらのはなのしたにてよませたまひけ

る

花山院御製

木の本をすみかとすれはをのつから花みる人になりぬへき哉

新院くらゐの御とき后宮の御かたにて藤はな年久

と云ことをよませ給けるによみ侍ける

大納言師頼

かすか山北の藤なみさきしよりさかゆへしとはかれて知にき

左衛門督家成布引瀧みにまかりたりけるによめる

藤原隆季

雲よりつらぬきかくる白玉をたれ布引の瀧といひけむ

家歌合によめる

左京大夫顯輔

夜もすからふしのたかねに雲きえて清見かせきにすめる月影

新院百首歌たてまつりける時述懷の歌とて

藤原季通朝臣

いとひても猶しのはるゝ我身哉ふたゝひくへき此世ならねは

神祇伯顯仲廣田社にて歌合し侍けるに寄月述懷の

こゝろをよみ侍ける

左京大夫顯輔

難波江のあしまにやとる月みれば我身ひとつもしつまさり鬼

この歌いみしくをかしき歌也。これは拾遺集の菅原文時歌に。

水のおもに月のしつむをみさりせばわれひとりと思はてまし。といへる歌を。いますこし優にひきなしてみえ侍

なり。この歌はむかしの歌にもはちさる歌なり。

大江舉周おもくわつらひてかきりにみえければよ

める

赤染衛門

かはらんと思念はおしからてさてもわかれんことそかなしき

この歌はいみしくありかたく。おはれによめるうた也。

新院位におはしましけるととき海上遠望と云ことを

よみ侍ける

關白前太政大臣

わたの原こきいてゝみれば久堅の雲井にまかふおきつしら波

已上詞華集。

千載和歌集

春歌

立春日よみ侍りける

源俊賴朝臣

春のくるあしたの原をみわたせば霞もけふそたちばしめける

堀川院御時百首歌たてまつりける時よみ侍ける

中納言國信

みむろ山谷にや春の立ぬらん雪の下水いはたゝくなり

百首の歌たてまつりける時初春の心をよめる

待賢門院堀川

雪ふかきいはのかけ道あとたゆるよしのゝ里も春はきにけり

堀川院御とき百首歌たてまつりける時殘雪をよみ

侍ける

前中納言匡房

道たゆといとひしものを山里にきゆるはおしきこそ雪哉

承暦二年内裏後番歌合に鶯をよめる 藤原顯綱朝臣

春たては雪のした水打とけて谷のうくひすいまそ鳴なる

後冷泉院御時皇后宮歌合によめる 大納言隆國

山里のかきれに春やしるからん霞まぬさきにうくひすのなく

法住寺入道前太政大臣内大臣に侍ける時十首歌よ

ませ侍りけるに霞の歌とてよめる 源俊賴朝臣

煙かとむろのやしまをみし程にやかても空のかすみぬる哉

右大臣に侍ける時家に歌合し侍けるに霞の歌とて

よみ侍ける

攝政前右大臣

霞しく春のしほちをみわたせはみとりをわくる沖つ白波

ほりかはの院御時百首のうちわかなの歌とてよめ

る

としよりの朝臣

かすかのゝ雪を若菜につみそへてけふさへ袖のしほれぬる哉

梅花夜芳と云こゝろをよめる

梅か香は已か垣れをあくかれてまやのあまりにひまもとむ也

百首歌めしける時春歌とてよませたまうける

崇徳院御製

あさゆふにはなまつ比は思れの夢のうちにそさきはしめける

待賢門院堀川

いつかたに花咲ぬらんと思よりよもの山へにちる心かな

故郷のはたと云心をよめる

讀人しらす

さゝなみやしかのみやこはあれにしをむかしなからの山櫻哉

百首歌たてまつりけるととき花のうたとてよめる

藤原季通朝臣

よしの山花はなかに散にけりたえくのこるみねのしら雲

堀川院の御とき百首のうちくれの春の心をよめる

河内

けふくれぬ花の散しもかくそありし二たひ春はものを思ふよ

夏歌

卯花の歌とて

をイのイ

仁和寺後入道法親王

玉川とをに聞しは卯花の露をかさせるなにかそ有けれ

堀河院御時百首歌たてまつりけるとときあふひの歌

とてよめる

藤原基俊

あふひ草てゐる日は神の心かはかけさすかたにまつなひくらん

かものいつきおりたまひてのちまつりのみあれの

日人のあふひをたてまつりて侍けるにかきつけら

れ侍ける

式子内親王

神山のふもとなれしあふひ草ひきわかれても年そへにける

暮天郭公といへる心を

仁和寺法親王

ほとゝきす猶はつこゑをしのふ山ゆふぬる雲のそこになく也

後朱雀院御時一品親王歌合にはなたちはなをよめる

枇杷殿皇太后宮五節

たゝならぬ花橘のにほひ哉そふる袖は誰となけれと

百首歌めしける時はなたちはなの歌とてよませた

まひける

崇徳院御製

五月雨に花たちはなのかほるよは月すむ秋もさもあらはあれ

堀川院の御時百首うたてまつりける時ともしの

こゝろを

前中納言匡房

照射するみやきか原の下露にしのふもちすりかはくまそなき

題しらす

としよりの朝臣

あはれにもみさほにもゆるほたる哉聲たてつへき此世と思に

秋歌

秋立日よめる

侍従乳母

秋たつときうつるからにわか宿の萩のは風の吹かはるらむ

秋のはしめの心をよめる

寂然法師

秋はきぬ年もなかはに過ぬとやおきふく風のおとろかすらん

たいしらす

いつみしきふ

人もかなみせもきかせも萩か花さくゆふかけの日くらしの聲

百首歌たてまつりけるととき秋の歌とてよめる

藤原季通朝臣

野分する野へのけしきをみるときは心なき人あらしと思ふ

としなり

ゆふされはのへの秋風身にしてみてうつらなく也ふか草のさと

たいしらす

としよりの朝臣

なにとなくものそかなしき菅原やふしみのさとの秋の夕くれ

俊忠卿かつらの家にて水上月といへるこゝろをよ

める

あすもこんのちの玉川はきこえていろなる波に月やとりけり

百首の歌のうちしかをよめる

待賢門院堀川

さらぬたに夕へさひしき山里のきりのまかきにをしか鳴なり

たいしらす

讀人不知

おとろかず音こそよるの小山田は人なきよりも淋しかりけれ

源兼昌

我門のおくてのひたにおとろきてむろのかり田に鳴そ立なる

冬歌

たいしらす

いつみしきふ

外山ふくあらしの風の音きけはまたきに冬のおくそしらるゝ

馬内侍

ねさめして誰かきくらんこの比の木葉にかゝるよはの時雨を

驕旅歌

題しらす

藤原範永朝臣

有明の月もしみつにやとりけりこよひはこえしあふ坂の關

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍けるととき關路月

と云こゝろをよみ侍ける 中納言師俊

はりまちや須磨の關屋の板ひさし月もれとてやまはら成らん

崇徳院に百首歌めしける時たひの歌とてよめる

待賢門院安藝

篠のはをゆふ露ながら折しけはたまちる旅の草枕かな

戀歌

堀川院御時百首歌にはしめのこひのこゝろをよめ

る 源俊賴朝臣

難波江のにもうつもるゝ玉柏あらはれてたに人をこひはや

俊忠卿家歌合に戀のこゝろをよめる

後二條關白家の筑前

思よりいつしかぬるゝたもと哉なみたや戀のしるへなるらん

たいしらす

いつみしきふ

兎も角もいはゝなへてに成ぬへしれになきて社みすへかりけれ
うらむへき心はかりはあるものをなきになしてもとはぬ君哉

雑歌

上東門院より六十賀をこなひたまひける時よみ侍

ける

法成寺入道前太政大臣

かそへしる人なかりせはおく山の谷の松とや年をつまゝし

題不知

赤染衛門

物おもはぬ人もやこよひ詠むらんねられぬまゝに月をみる哉

相 抄

なかめつゝ昔も月はみしものをかくやは袖にひまなかるへき

已上千載集。

撰集のかすとて。はし／＼ばかりかきいて侍を。おもはず
に歌のおほくよろしく侍ければ。いづれもすてかたく侍
れと。たゝすこしをかきつけ侍なり。歌のすかたはこの集
ともにみえ侍なり。

金葉集は撰者のさほどの歌人に侍れは。歌ともゝみなよ
ろしくは侍を。すこし時のはなをおる心のすゝみけるに

や。當時の人のみはしめよりつゝきたちたるやうにて。い

かにそみえ侍なるへし。詞華集はことにさまはよくみえ

侍を。あまりにおかしきさまのふりにて。されうたさまの

おほく侍なり。あしまにやとる月みればといへる歌は。い

とありかたく侍ものを。とよりさまに歌のふりのいかに
成にけるにか。その風舂の歌をゑらはすして。されう

たにのみなりにければ。かつはさかしらするものとも侍

りけるにこそ。千載集は又おろかなる心ひとつにえらひ
ける程に。歌をのみ思て人をわすれにけるに侍めり。され

とも後拾遺の比までの歌のかすおほくのこりて侍けるな

ん。集の冥加にはみえける。

この草紙の本舂は。かのみやよりおほきなるさうしを
たまひて。かやうのことかきてたてまつれと侍しかば。

たゝその御さうしにかきみてんとはかりにて。なにと

なきよしなしことをおほくしるしつけ侍しなり。その

うへに生年已八十四のとし。人にもみせたにあはせ侍
らす。たゝあさきみつくきのあとにまかせてしるしつ
け侍にしかば。いかばかりひかこともおほく侍らんと
おほえ侍を。又御らんせんと侍れは。いまさらになをす

へきにあらで。又おなしことをしるしつけ侍る心のば
かなさ。申かきりなくこそかたはらいたく侍れ。これか

きしるしいて侍しことも。又五年にまかり成にけり。

建仁元年五月日

依式子内親王仰被進之。

本云 天福二年五月日書之
古來風體抄(上下)一帖。愚本依有紛失之事。申出新院御本

寫之畢。件御本即家本也。

正中二年林鐘四日。雨中扶病身終微功而已。

藤爲基 在判

〔右古來風體抄以圖書寮本及刊本校合舊本下卷闕今補之〕

續群書類從卷第四百五十九

和歌部九十四

今來風體抄

うた連歌のことは。たゞ四五十年。明匠達の申侍しことを。
みゝのそこにとゞめたるはかりなり。さらに天性を得たる
こともなし。稽古もたらす侍るなり。連歌のことは多年の數
寄によりて。世の人もゆるし侍るにや。詠歌の事はすへて立
いらさるみちに侍れとも。ふしきの冥加にてや。四代の勅
撰にも歌數おもふまゝにいりて侍うへ。この度の集無爲に
申さして。和序をたてまつれる事。元久の跡かはらず。和
漢にたづさへ侍ししるし。みの眉目とも存なり。貞和の比は
毎月三度の月なみ百首の會。爲定大納言の點又判などにて
侍しなり。その時の會衆はみな名譽の人々にてありしなり。
家の人には爲忠。爲秀卿定衆にて侍し。爲明卿はとき／＼ま
しり侍しなり。頼阿。慶運。兼好定衆にて所存を申しなり。

^{四四}道英などは又勿論なり。門眞。霜臺入道。顯阿などもよませ
侍し。其比は頼慶兼三人。いつれも／＼上手といはれしな
り。頼阿はかゝり幽玄に。すかたなたらかに。こと／＼しく
なくて。しかもうたことに一かためつらしく。當座の惑もあ
りしにや。慶運はたけをこのみ。ものさひて。ちと古躰にか
ゝりて。姿心はたらきて。みゝに立さまに侍しなり。爲定大
納言はこのほかに慶運をほめられき。兼好は此なかにち
とをとりたるやうに。人々も存せしやらん。されとも人の口
にある歌とおほく侍るなり。みやこにかへはるのかり
かれ。此歌は頼も慶もほめ申き。ちと誹謗の躰をそよみし。
それはいたくのこともなかりしなり。道英うたも爲定卿ほ
め申されき。すく／＼とよく仕しにや。門眞。藥師寺なとう
たよみの名取侍し。顯阿も四條道場にありし比名譽し侍し

にや。此ほか祖月圓照などいふものとの事は。終に不參會侍るなり。家の人々の事はとかく申へきにあらず。されとも世の人口はふささかたき事にや。其比人の申侍しは。爲定大納言はきはめてけたかく。ゆる／＼とたけありて。しかも又もみ／＼とあるかたもいてきけるにや。さりとともなを社たのめいつはりのうらみやいつの夕なるらん。此歌は頓慶も難及よしほめ申き。凡天下偏執もなかりし上手なり。爲明卿は生得におもしろきさまにはなかりしかとも。まことのみちの人とおもふやうなる歌をよみ侍しなり。たゞしくいさゝか古躰に長あるさまに侍き。おもひきや我しきしまのみちならてうきよのことをとはるへしとはと。元弘の亂のときよみて。人の口にありしより名譽せられ侍りき。爲忠卿は天性の堪能とはおほえ侍らざりしかとも。はれのうたなどとはよくよまれしなり。古歌をとる事をこのみき。古今なとはそらにみなおほえられき。まことに道の人とそおほえ侍し。爲秀卿。これは各別のふてい一流の詠歌。又あらぬさまに侍しなり。俊成卿以往のうたこそ本意にてあれ。近比のふていは下品なりと申されしにや。古躰にもさひ。きらひことばなどいふ事もなく。おもふさまによまれしなり。されとも天性骨の人にて。やさしくおたかなるうたおほく侍なり。わすられてのち社さらにおもひしれはかなからぬは

いのちなりけりなどいふ歌は。殊さら當世の躰おもしろく侍りき。爲重卿は近來の堪能なり。わかきより風骨天性おもしろき歌よみにて侍しなり。頓阿慶運はちと異風なるやうに申侍しかとも。よきうたをは又ほめ申き。玉津島歌合に。またはつくさのわかのうらなみ。偏執の爲忠爲秀もよくよみたと申き。わかきより爲定卿にそひて右筆せられしかは。さためて口傳故實侍らん。生得の骨のあるうたにて。詞心はたらきて。當座おもしろかりしなり。近比は大略宗匠にて侍うへは不及是非。愚意に叶侍し間。公家武家にも譽申侍き。抑此人々の申されしむかしものかたり。おもひいつるに隨てかき付侍なり。ひろく人々にも尋られて。治定せらるへしとなり。

一歌の風躰の事。此人々申されしは。心つよく正しくすくにて。いまた人の詠せぬふせいを。やす／＼とつゝけ侍へしとぞ承侍し。

一頓阿常に申侍しは。あたらしき心を。やすらかにこと／＼しくなくて。うつ／＼くつ／＼へしと申き。こと／＼しくはねたる歌を是不甘心由申き。

一初より本歌ばかりにかゝりたるはわろし。よく我心中にてよみて。のちに古歌をみるべきなり。

一百首の地歌。文の歌の事。よのつねはさゝめきてはたらかし

たるを文と心得。すぐに古跡なるを地と申なり。但古風に正しくすくなるを文と申へし。さゝめきたる歌のさしたる事なきを。地と申侍しと頓阿申き。

一たけたかくやまひなく。かゝりよきを。はれのうたと申へし。

一勅撰は續後撰。民部卿爲家入道獨してゑらはれたれば。ふていこの集よしと申き。

一寶治民部卿入道の御百首。歌の本にて侍へき由申き。

一新古今ほと面白き集はなし。初心の人にはわろし。心いたらん人は。此集をみん事。いかてかあしかるへき。

一爲藤卿文保百首。爲定卿文保百首など。よく／＼みるへきなりと。申き。

一なにとしても。昔の上手のうたは。いまの堪能にもまさり侍へしと。頓阿なと申き。

一爲重卿申されしは。歌は同類あれば正跡なし。假令里雪の題當座に詠せは。ふしみ。ふかくきなど。人のよみぬへきふせいをすてゝよむなりと申き。但これはいか侍らんと。心中には存せしなり。頓阿なとはいつもふしみにて。あたらしき心あるへしと申侍し。

一爲重卿は心はたらきたる歌をは。よしとはし存せられけるやらん。愚身貞和最初の御百首は。爲重卿兼伊異風をよみ侍しな

り。今度の集に多貞和のうたいられ侍しほとに。ちといふうにて侍しいかゝと申たりしかは。第一の御百首のうち。初度かよく候と申されき。無覺束事也。其後の御百首社。爲定大納言合點にて。よく／＼さたしたりしか。わきまへかたき事なり。

一後光嚴院爲定卿のさまをよませたまひし事は。愚身青蓮院宮に申さたによりて。如此詠せしめたまふなり。御流の伏見院殿やうはすてられき。いかさまにも異風は不苦事なり。一左相府より誰をか歌の師にすへきとたつね奉しほとに。爲遠卿は家の嫡勿論なれとも。爲重卿は爲定大納言の右筆をして。おほく故實とも承侍らんと舉申き。仍近來は一向爲重卿におほせ談せられ侍しにや。

一本歌をとる事昔は稀なり。後鳥羽院の比おひより。殊人ことに本歌をとり侍にや。そのとり様さま／＼なり。本歌の詞をとりて。ふせいをあらぬものにしなして。本歌のことはなは。上下の句にをさかへたる。常の事なり。これをよしとす。本歌のことは。あかて社おもはん中ははなれなめといふ歌をとりて。ちるはなのわすれかたみのみねの雲とよめる。又本歌の心をととりて。あらぬさまにとりなすうたもあり。遠さかりゆくしかのうら波といふうたをととりて。しかのうらやとをさかりゆく波よりとよめり。又本歌に贈答したる跡

あり。心ある人にみせはやといふうたをとりて。心あれなと
みをおもふかなとよめり。又本歌の心になりかへりて。しか
も本歌をへつらはてよむ跡あり。てりもせすくもりもはて
ぬといふ歌をとりて。おほそらは梅の匂ひに霞つゝとよめ
り。又ことははかりをとりたるうたも常の事なり。此事は先
年頼阿問答の愚問賢註にこまかにしるし侍しやらん。

一源氏狹衣などのうたを。歌合などによむへからずといへ
り。それも作例は侍らん。

一本歌には堀河院百首の作者までをとるなり。同は名人の歌
をとるへし。勅撰は後拾遺までをとるへしと申き。但いまは
金葉詞花千載新古今などをとりたらんは。なにかくるしか
るへき。此分左相府へも申侍し事なり。連歌には新古今まで
もとるなり。謔歌には近代の歌よみの歌をも用なり。

一彼輩申云。歌よみに二の様あり。みちをふかく執する人は。
三昧にいかるかこしく心をしつめて。幽玄のさかひにいりて。
人のふるさぬ所を案すへし。又ことかゝぬほと歌よみは。
當座のはちをかくぬまでにて。それまではあるへからず。さ
のみ歌數のはやきもわるし。なそきもしかるへからず。當座
のうたは。まつわるくともよみをきて。かさねてともかくも
なほすなり。貫之はたちなからしづくに濁とよみ。和泉式部
ははるかにてらせと云歌を。骨をおらすして秀逸をえた

り。道のほとりにて金をえたるかことし。

一姿ことはたによくは。ふせいのすきたるもくるしからず。ば
なにかせをこひ。月にあめをねかひなとする事は。上手のし
わきなり。さのみこのむへからず。

一うたはことばすくなきをよしと。俊成定家も申されき。連歌
はことばくたけてはかなはぬ事なり。

一やすき二文字題などを。やうあるやうによみなすへし。野
邊虫を野へのむしとよみ。山鹿をやまのしかとよまん事無
念なり。

一結び題をはまはしてよむへし。又は本歌本説をとりてよむ
へし。

一歌の題にはうつ文字うたぬ文字あるへし。野外の外字。江
上の上の字などは。うたぬもくるしからぬ事なり。

一題の文字をあらはさてよむ事は。上手達者のしわきなり。初
心の人はしかるへからず。ちかく爲明卿もよみなをして侍
き。

一歌の傍題と申事は。題のものにてはなくて。ことものをよみ
そふるを申事なり。又歌數よむに同事のあるをも傍題と申
なり。三首五首のうたにはことに嫌へし。百首などの時は。
雲霞やうのものはいくたひもくるしからず。

一三十一字より多あます事は。秀逸のときはしさいなし。さな

くては無用の事なり。

一寄月。々前。同事といへとも。月前の題にて。雨夜の月入後の月なとはわろし。

一海邊と浦と差別あるへし。社頭神祇又差別あるへし。

一早春の題に立春をよむ事は常の事なれとも。なを差別あるへきよし。爲定卿申され侍き。

一雑の題にて季をよむ事は。當季はくるしからず。他の季はわろし。作例はおほし。但かやうの事作例あればとて。細々に用事はしかるへからず。

一景物は常によみつけたらん名所よかるへし。月雪などはいづくにもあれとも。めつらしき名所なとをはよまぬ事なり。それも秀逸になれは。くるしからざる事なり。

一歌のやまひは同心の病と第三第四の終の字とを嫁へし。そのほかは細々のうたにはくるしからざるよし頼阿申き。但歌合には猶先達嫌たるやまひと侍るにや。

一歌合には月の題に有明。花に落花はよむへからず。

一ぬしあることは詠歌の一舩にしるせり。なか／＼よむへからず。

春

かすみかれたる　うつるもくもる　はなのやとかせ
あらしそかすむ　月にあまきる　かすみにおつる

むなしき枝に　花のつゆそふ　はなのゆきちる

みたれてなひく　ゆきのした水　そらさへかすみ

そらさへにほふ　波にはなるゝ

夏　あやめそかほる　すゝしく曇る　あめのゆふくれ

秋　きのふはうすき　ぬるともおらん

かれなて鹿の　おはな波よる　ぬれてやひとり

つきやをしまの　色なる波そ　つゆのそこなる

わたれはにころ　色なる波そ　きりたちのほる

冬　わたらぬ水も　こほりていつる　あらしにくもる

やよしくれ　ゆきのゆふくれ

戀　雲あるみれの　われてもすゑに　みをこからしの

そてさへ波の　ぬるとも袖の　我のみしりて

むすはぬ水に　たゝあらましの　わかみにけたぬ

きのふの雲の

雑　すゑのしら雲　月もたひれの　なみにあらずな

以上詠歌の一舩にあり。所詮當世なりとも。人の初てよみい

たしたらんことは。なかくよむへからす。
一制詞事

近代おほく禁制のことはありといへとも。いまたその出所
不分明。或は定家卿爲家卿の一向止へきのよし申されたる
もあるへし。或はそのうたにとりて。わるしと申されたるも
あるへし。或は又あまりによきことはにてある間。人毎にこ
れを用る故に。やめられたるもあるにや。いま所見に隨て。
少々これを註しいたす。用捨かつ人の所存にあるへし。將來
の龜鏡には備みるへからす。みいたさるゝに隨て。かきくは
へらるへきなり。頓阿慶連なども。此事はさらに分明に申む
ねなかりき。

一向不可用詞

けしき 波しろし ふくあらしかな みやまへのさと

以上。文應中務卿宮の百首に。民部卿入道爲家亡父不可詠
のよししたしかに申候きと云々。

玉のおやなき

みもすそ河の歌合のことはに。俊成の判して云。末の句の
をの字や。すこしいかさまによみて侍とよ。順徳院御百首
に定家卿申云。たまのお柳の子細先度披露し畢。

なか／＼五文字

承久二年八月十五夜定家卿判云。末句に不懸合とてこれ

かきらはれ。文永五年九月十三夜爲家卿判にも。中／＼い
ひおほせてもみえ侍らすと難せられ。みなそのうたに付
るやうなれとも。近比嫌うへは可被止之歟。
けしき

中務卿親王家三百首の歌合に。爲家卿判云。けしきといふ
ことは。不可詠之由亡父申き。又同歌合に可止之由度々申
之。

あめのゆふくれ みゆるあけほの ありければ

おもひせは 心ちこそすれ ものにそありける

みこそつられれ みをいかにせん はなさかりかも

みれこし たにこし うきみ

以上可止之由。爲家卿子慶融法眼抄にみえたり。

ゆかしき

嘉應二年十月すみよしのうた合に。俊成卿判云。ゆかしき
とおける。まことにうたのことはにあらさるへし。撰集に

はとき／＼あれとも。ゆかしきといふことはなり。誠の

とはならぬことははいはさるなるへし。治承二年右大臣
家歌合に同判に。ゆかしきといふことは。兒女の略せるこ
とはにて不庶幾。

かなしき うれしき

六百番歌合に俊成卿判云。あまりにや侍らん。又云。かな

しきといふことは。あまりなるものゝ。又うるはしくや。うれしかりけり。かなしかりけりといふ文字を。未練のうたよみはつねにこのみよむなり。けにうれしき事ならては。常によむましき事に社と申されし。以上四條局阿佛房抄にみゆ。此ことはうるはしくかなしき事にばくるしかるましきにや。うれしき同前。

つゝく

廣田社歌合承安二年十二月八日。俊成卿判云。つゝく汐路といへる。きゝよくもあらぬにや。經房卿家歌合建久六年正月。同卿判云。つゝくの詞も。いかにそやときこゆ。六百番同判云。つゝきのことは猶庶幾せずや侍らん。千五百番歌合の判云。こすゑにつゝくといへる。此つゝくなといへることはこひねかふへからず。おほく侍る事にて。ききゝも侍を。此歌にとりては。ことさらにつゝくと社申へかりけれ。此判のときは。秀逸のときはこれをゆるすへきか。

雪のあけほの

經房卿歌合。俊成卿判云。此ゆきのあけほのといふ事を。いまのよの人常にこのむ。俊惠法師かよみいたせる詞なり。老僧其時もゆるさす申侍き。近く爲定卿文保百首に。おかのやかたのゆきのあけほのといふ歌あり。ことなる

秀逸のときはゆるすへき歟。

春のゆふくれ あきのあけほの

六百番の判に云。はるの曙こそゑんなる事にいひ侍るを。秋のあけほの。はるの夕暮。あたらしくや。

すさむ

千五百番の判云。すさむのことはや。あたらしきやうにきこゆらん。又同定家卿判云。すさむといふことは。ふるく聞ならはすや侍らん。建保二年八月定家卿判に。すさむといふうたを難せずしてかたせられたり。うちたにすさめあさのさころもといふ歌をは。定家卿はめられたり。

まに

六百番歌合の判云。まにのことは庶幾せられさるなり。

うき人

建仁二年九月水無瀬殿歌合に俊成卿判云。うき人のといへるや。近比も人よみては侍しかと。いかにそやよばきやうにやときこえ侍る。但うき人とよめる歌。難せられさるもおほし。

なさけ

六百番歌合判云。なさけありといひて侍る事は。詩などには優の詞なれと。うたにはさまて侍らぬにや。又いふ。なさけのことは。よせなくてはこひねかふへからさるにや。

又文永二年八月仙洞御歌合に。なさけの詞ありといへとも。爲家卿難せられす。

うすきり

六百番歌合判云。うすきり。尤よろしからず。又建仁の新宮のうたあはせに。うすきり。頗みゝにたてとも。うたのさまよしとてかたせられたり。

色はへて

六百番歌合判云。いろはへてのことは不可庶幾。

ひちて

古來風躰に。ひちてといふことは。いまの世にはふりてや侍らん。つも。かも。へらなりなとは。さる事にて。かやうなることはのなを侍るなり。僻案抄いまのよにはよむへからさるよしをのせらる。

みらん

これもふるきことは。しかるへからさるよし。古來風躰にみえたり。但頼政かよみたるをはほめられたり。又僻案抄にはなとかこの比もよまさらんとみえたり。

月花をゝのかとよむ事

すみよしのうたあはせの判云。月花をゝのかとよむ事。いとおしくやと難せられたり。

なにかほ

六百番判云。いろかほといへる。尤不庶幾。又云。うちけたることはなり。又文永仙洞歌合に。爲家卿ありかほといふた難せられす。

かはす

順徳院御百首。定家卿ことはに。かはすのことは。愚意にきてそんするむねあり。

あたらよ

千五百番判云。あたらよ。庶幾せざる所存なり。但御室歌合に。あたらよ難せられすしてかたせられたり。

きたへゆくなどのへの字

御蒙渥河歌合に。いつくへといふへ文字は。人のよむことにて侍れとも。こひねかふへからず。

よもすかと

新熊野歌合に俊成卿判云。よもすからのことは。頗不可庶幾。

おもはぬ おもはぬまつをなといふことはなり。

貞應元年九月うたあはせに。定家卿判云。おもはぬ中などにはあらて。かやうのことはをよみ侍る。いつよりよみ侍る事にか侍らん。

ちかふ

永萬二年重家朝臣家歌合に。このたひのうたに。おほくち

かふといふ事のみえ侍は。若このころいてきたる。おかし
きことはにて侍やらん。

つきやあらぬ

定家卿云。かやうの名歌の五文字しかるへからず。

雁のおほひ羽

定家卿云。いとおそろし。まさしからずやあらん。

ふるやあられ

建保五年十一月歌合に。定家卿判云。ふるやあられ。やす
らかならずやきゝて侍らん。これはや文字を嫌なり。

こなた

貞應元年七月關白家歌合に。定家卿判云。こなた。近年お
ほし。不甘心。

人こゝろ

貞永歌合。定家卿判云。人こゝろといふ五文字。いまはこ
のみよむましきよしきたあり。

うとき

うたあはせに定家卿判云。うとき。このころは此ことはい
はまほしけになりて侍る。子規にはことかなはすや侍ら
ん。

もみちしにけり

度々の判に。とめところにしかるへからさるのよしきた

あり。

あをき

定家卿云。このころのうたは。あをき。しろきに侍と難
し申侍き。

おほかた

文永二年九月爲家卿判云。おほかたのかせの。荒涼にそ侍
る。又云。おほかたは月をもめてしといふ五文字あれと
も。おほろけならては。此五文字相應しかたしと爲家卿申
さる。

つくくゝと さくらちる など名歌の五文字可斟酌。

草のはら

六百番には俊成卿無字細山被申歟。但近年はいさゝかさ
たあるか。

名もしろし

是も名歌の五文字なり、

此一卷。みちの數奇たにことなる人あり。老筆をかへりみ
す。かきてをくりしを。又きゝつたへて。見參ありたきと承
しほとに。かきつけ侍りぬ。外見はゆるしたまふへし。

正月廿四日

辨内侍殿

爲家卿判云
後覺先總政権三行御判歌
判アリ

〔右今來風體抄以圖書寮本校合〕

愚問賢注

やまと歌の道。人皆しれるに似てしらす。世こそりて詠するに似て詠せず。もてあそふ者はしけしといへとも。また桂林の一枝をもよちず。まなふやからはおほしといへとも。かつて崑山の片玉をもひろはす。羚羊角をかけ飛鳥過目。古賢の趣向趣に跡なく。風雅の遺言もとむるに所なし。爰に顧公すてに七十有餘の遐算をたもちて。能三十一字の奥玄をわきまへたり。久しく柿本の言葉をしたひて。深く山邊の歌道なたつぬ。靜に柴の戸の花の陰に優遊して。春色の減するをおしみ。ひとり松山の月の下に吟嘯して。秋光のたけなはなるを悲しむ。造次にも倦す。顧沛にも忘れず。道にふける輩。これに寄せすといふ事なく。學に志さす人。これに參せずといふ事なし。僕多年の知己なり。一道の先達なり。清庭に宴をひらく時は。金石の交をかたくし。蒼海にいかたを浮ふる日は。鷗鷺の盟をわすれず。冠をかけ印ハシかときし後は。曉の鶏いたつらに老の賦を相おとろかし。春の燕猶むかしの事をかたるに似たり。一日閑暇のあまり數々篇目を注す。玄々の道意を會せんかため。條々の批判をあふくものなり。是し

かしなから達人の用にあらず。稚兒の蒙をうたんと也。

一或云。歌は人物いまた定まらざるさきより。其旨タテマ存せりといへとも。二儀相わかれて六義又起れり。情中にうこき。詞外にあらはる。されば花になく雲。水にすむかはつの聲までも。歌謠にあらずといふ事なし。物にふれて情性を吟詠する外に。別の事有へからず。萬葉三代集以下。皆古人の糟粕なり。只風雲草木に對して。眼前の風景をありのまゝに詠すれば。をのつから發明の烟あるへし。いたつらに古語をかり。舊典を學ぶ事なかれ。萬葉猶軌範とするにたらず。況や三代集以下。其實落て其花のみ残れり。眞實胸中より新敷風情をめぐらして。ありのまゝに可詠なり。

難曰。和歌の道周詩より起れり。されば詩は志のゆく所といへり。嗟歎するにたらされば詠歌し。詠歌するにたらされは。手の舞足の踏所を不知といへり。先こゝろさしのゆく所に子細あるへきか。只中に動く情をいひ出せるにはあらず。風情のゆく所有へしと見えたり。況や詠歌し嗟嘆するは。皆其上の文をなし興を催す故也。天地をうこかし鬼神を感じしむるも。文花をかさり。風情をもとむへしとおほえたり。しかあれは萬葉の古語も三代集の艶言も。ひろくまなひて。俗言俗態をさるへきなり。凡又歌に治世の音あり亂世の音あり。尤聖代の風情をうしなはすして吟賞すへきにや。三代

集は明時の正雅也。尤軌範とすへし。凡毛詩三百篇は本朝の童謡に似たり。其國の善惡を私して政を正せり。日本紀に童謠落書なうらふの歌も。皆世の治亂備なうらふれるにや。しかるに三十一字の詠は素戔嗚尊出雲八重垣の詞より起て普く人世に傳れり。

その詞つゝまやかにして其旨廣し。六義の中にをのつから事を風せる舂ありといへとも。今の歌おほくは飾物に感して詠し出せる也。徒に麗言をのみ盡して。政をたゝす事はなし。しかあれといにしへの望の御門の人の賢愚をかゝみ。世の興廢をたゝすといへり。尤正雅の趣を得て。變風の舂を嫌ふへき也。詞をも切嗟し心をも琢磨して。幽玄を先として。一唱三嘆にたへさるやうに詠すへきなや。しからは以前の義勢甚た甘心せずと。此兩篇いつれを是とすへきをや。

歌は思ふ事を見るもの聞ものにつけていひ出せる外は異なる事なし。春鶯囀花中。秋蟬吟樹上。ことゝく歌なれば。善惡邪正を辨へからず。大道廢て仁義起る。和歌の舂品を定るも。猶道の陵夷也と申さんも。其理りなきにあらず。但大略は椎輪の質にあらず。和歌盛に起り。六義十舂定まりて後。猶淳朴の舂計を學ふへしといへる。却て邊見なるへきにや。勅撰は萬葉より始り。歌合は寛平より盛にして。道の好惡を定め。歌の勝劣を辨ふ。しかのみならず。演成式は光仁の詔勅に應し。孫姬式は聖廟制作をのこさる。共に病をのそき舂

を分てり。誰人か是にしたかはさらん。しかれば難の心尤正義に叶へるにや。

一和歌の風舂は時うつり事變て。代にしたかひ。俗にひかれてあらたまるへきか。詩も漢魏盛唐一舂別なりといへり。歌も萬葉三代集以後度々撰集。あるひは時の褒貶により。或は人の好嫌によりて。一代吟賞の姿あるをや。今の歌いつれの舂を正路としてか模寫すへきぞや。

漢朝は敵をほろぼして國をとる。故に風をうつし俗をかふ。よて詩人才子文舂も代々にかはれり。我國は天神地神の御末。國の皇統として先皇の道を守ゆへに。歌の舂も大に變ずる事なきにや。但人その時の上才の好所にしたかふはへに。世々にいさゝかをもむくところかはれり。そのむれ委古來風舂抄に見えたり。今時いつれの舂を正路として可模哉の御尋にいたりては。寛平延喜の比は此道の中興と見えたり。然るに古今集猶貫之心には十成せざるにや。新撰三百六十首を撰て。古今歌二百八十首を載て。今撰所玄之又玄也といへり。まして其後の集一代をきながら本様と用ひかたし。いつれの集もよき歌を本として學ふへきか。紀氏新撰。公任金玉。三十六人歌合。九品歌。前後十五番。それよりくたりては。俊賴朝臣のする所秀歌。京極入道中納言鎌倉右相府に注進近來秀歌。井梶井宮へ被進古歌。被進後堀河院秀歌大舂な

と。常に可被御覽歟。心を古風にそめ。詞を先達にならば。誰人か不詠と侍る。尤爲肝要者也。

一初心の人心を先として詞を後にすへきか。しかあれとも詞を忘ぬれば姿とものほらす。姿とものほらされは異風異躰に似たり。又詞をかきり躰を先とすれば。胸中の風情いひつゝけられす。此段いかゞ工夫すへきをや。

歌は心をさきとすへきか。詞を先とすへきか。古來先達さま／＼に申て侍めり。八雲御抄歌をよむに思ふへき事六ありとて。一心をさきとすへき事と侍るは。詞は後かとおぼゆるほとに。一詞を先とすへき事と侍るは。又心は次かと覺ゆ。所詮前後あるへからざる事也。陸子衡か文賦序に。恒患。意不稱物。文不達意。盡非知之難。能之難也といへり。歌又同じかるへし。心に風情を得る事もかたく。風情を得て詞をなす事もかたき也。所詮人のいまた不詠風情を。やすらかに艶なる詞にてつゝくへきなり。しかあれは心詞ともにえかたし。得かなく事盡たるうへをしめて案すれは。さすかに又出來る事也。かく案して一首もよまんと稽古とは申へき也。古述と申聖教に。初入宮讎。由難退何時成いへり。何事にも金言者歟。

一歌は心をむれとすといひて。初心の人類にむかひて沈思すといへとも。詞をえされは。なのつから案しよせたる風情も

つゝけられす。たま／＼いひ出せるも。みな俗に近くて幽玄の趣なし。又始より三代集ときを學して。詞よりつきて詠吟すれば。只足曳の山。玉鐙の道なとつゝけて。大やうのものに見ゆ。此段いかやうに可學をや。未練の人は先性情をよく吟詠して。さのみ古集なとを稽古する事は有まじきやらん。又風躰を學び艶言を先とせんか爲には。最初より廣學をむねとすへきをや。

歌は風雲草木の興に打向ひて案すへきにや。古歌の材木にて。初より歌をよまんとせんには。好歌出來へからず。但先達の歌にむかへる心ち。又よめる姿詞見習はん爲には。古歌をも尋見侍るへし。一向に見て用なしと申も。又物を見たる才覺にて詠へしと申も。共にたかひ侍るへき歟。天台に闇證禪師文字法師を共にきらへるかことし。

一日本紀の童謡躰。萬葉集の姿などとはおほく長歌を先とせり。三十一字の詠はすくなし。古今は歌の中興也正風也。此躰をまなひて可詠か。但さま／＼の姿ありと見えたり。此集の中いつれのもやうなもちてか今の世の軌範とすへき。九品十躰なと様々に分たりといへとも。先常の地歌の意地を申侍るなり。

上古に多く長歌を詠す。これ人の物を感ずる事深く。その心切なるによりて。三十一字に事つくされす。されは長歌を詠

す。中古にも東三條殿の拾遺長歌。俊賴朝臣千載長歌。限なきこゝろ誠に常の歌におさまりかたし。今世に長歌の稀なる事は。人の數奇をろかなる故なり。古今の歌の中にも。こゝろは本様に難用旨先段に申畢。

常の地歌の意地の事。凡歌の地と文と。きはめてさためかたく侍る事也。常の人は一かと有歌をは文と心得。さして目に立所もなく。やすらか成をは地歌と心得て侍るか。すなほにうるはしく明らか成を好歌と申さは。是こそやかて文とも申され。一かと一ふしあらんを地歌と申さるへきにや。むかしは百首などは地歌をましへてよむ事に申て侍る。今の世にはそれまでの沙汰なし。案しとゝのへたるは文となり。取落したるは地歌と申へくや。

一定家卿かゝれたるものに。晴の歌といふ事を別に出色たり。此跡いかやうなる物そや。假令たけたかく心たくみに清けなるを申へきか。常の地歌にはかばるへきをや。一首の題などは。百首などの歌の姿にはよみかゆへきか。但數首の中にも。をのつから晴の歌の跡は有へけれども。短冊などによまむと晴の懷帯と。もし差別あるへきをや。

彼晴の歌としるされたる。則秀歌太跡とて侍れば。別の姿にあらずよき歌也。百首一首よみやう各別なるへき事うけたまはりをかす。數おほくなりぬれば。をのつからさまゝの

跡も相ましはるはかりにそ侍らん。短冊と懷紙と別に案しかふへきにあらず。兼日は日數あれば。殊に深思して心詞を能とゝのふへし。當座は時分程なき故に。さほとみかゝぬ歌をもかくにてそ侍らん。跡各別成へきにあらず。されば白河殿七百首などに。入道民部卿。冷泉大納言などの歌は。姿詞同じやうに見え侍るにや。

一本歌を取事。さのみ不可好といへとも。古賢多用ひ來るをや。詩にも奪胎換骨の姿あり。あるひは心をかへて詞をと。或は言葉をかへて心をとる。萬葉に佐野のわたりに家もあらなくといふを。定家卿とりて。袖うちはらふ陰もなしとよめる。これ本歌をとる本なといへる。しかるへきにや。又上下に本歌の詞を置てとる常に見ゆ。又戀雜をは季になし。季をは戀雜にとるなと申。いかやうたるへきをや。又萬葉歌などさなから上の句をとりたるもあり。ふるき都に月ひとりずむと法性寺關白のよめるも。上は同じものなれと。秀逸に成ぬればくるしみなきにや。又萬葉の詞よりよめる歌も有へし。眞野のかや原面影にしてといへる歌をとりて。爲家卿花の盛をおもかけにしてとよめり。是は詞より案せる歌と聞ゆ。されは詞よりとり付て。秀歌の出来る事も有へきにや。しかあるに心よりよますして詞よりよむは。下品の事なりと中人あり。此段又賢慮おほつかなし。所詮本歌を

とるやう。いかやうなるをよしとすへきや。作例少々し
申さるへし。

本歌をとる事。萬葉の歌を古今にも取て侍れとも。むかしは
^注稀にみゆ。正治建仁の比より盛になれり。其取様さまゝなり。
常にとるやうは。本歌の詞をあらぬものにとりなして上
下をなけり。醍醐太政大臣。

ちる花のわすれかたみの嶺の雲そなたにのこせ春の山風
本歌。

あかてこそ思はん中ははなれなめそなたに後の忘かたみに
本歌の心をとりて。風情をかへたる歌。

さよふくるまゝにみきはや氷るらん遠さかり行しかの浦波
といへるを本歌にて家隆卿。

しかの浦や遠さかりゆく浪まより氷ていつる冬のよの月
本歌に贈答したる跡。

心あらん人にみせはや津國の難波わたりの春のけしきを
これをとりにて爲家卿。

かすみゆく難波の春の曙に心あれなと身を思ふかな
本歌の心になりかへりて。しかも本歌をへつらはすして。あ

たらしきこゝろをよめる跡。定家卿。

本歌は。

照もせず曇りもはてぬ春のよの朧月夜にしく物そなき
佐野のわたりの雪の夕暮も此類なり。

只ことはひとつなとりたる歌。先の忘かたみの本歌にて俊
成卿。

うき身をは我たにいとふいとへたゝそなたに同心。思はん
花の盛を面影にしても此類なり。この歌の詞より案したる
歌にあらず。花のちるほとまてはみし。盛のおもかけを残し
て身にそへんと思へる。めつらしくおもしろき風情を案し
て。此心の詠し難を面影にしてと云本歌にて續られたる也。

一ぬしある詞を嫌ふ事。古來沙汰あるにや。假令めつらしく始
めて詠し出たらん詞は皆嫌ふへきか。是又爲家卿なときら

ふへき詞をいたせり。萬葉集三代集にもなき詞の珍らしく
耳にたつ詞をは。ぬし有詞といふへきにや。此段又不審。

^注ぬしあるとはとその人はしめて詠し出せりと見ゆる事に
や。順徳院御製に。甲斐かねは山の姿も埋れて雪の半にかゝ

る白雲といふ歌を。京極禪門山の姿建保の比秀歌とて聞え
候きと注せらる。これは家隆卿。櫻花咲ぬる時は葛城の山の

すかたにかゝるしら雲の歌也。基定朝臣。涼しさに秋風ちか
くなりにつけり又立かへる衣手のもり。入道民部卿。秋風ちか

く。近世の歌か云々。新勅撰。白露の玉江の芦のよひゝに
秋風ちかくゆくほたるかな。此歌の事なるへし。これらをは以

ておもふに。うつるもくもる。花にくらせる。嵐そかすむ。露は袖に。やよしくれ。此るいみなぬしある詞か。

一歌に向のそくへき詞。近代多く聞ゆ。假令俊成。定家。爲家等の諸方の歌を判するに。此詞は俗言成とも。又一向嫌ふへしともかゝれて。永く用ゆへからざる支證あらは勿論。只當座の判にて。此歌にては此詞聞にくしといはれたらんは。一首の中にわろく置たらん詞などにてこそあらんすれ。又よくきたらんには。能なる事もあるへし。凡詞のよしあしは作者の骨法にこゑよるへきに。一度聞よからざるなど申されたらん詞をは。永格になしてきらはん事。いかやうにあるへきをや。ぬしある詞。又なかろ捨へき詞。いか様に治定すへきをや。

^注兩三代宗匠不可詠之由申されたる詞とも侍る歟。言葉のわるきにて嫌はれたるも侍れとも。多は優美なる詞にて。後學末生このみよむほとに。めつらしけなしとて止られたるにや。佛法戒にも通屈を明し。法曹律にも輕重をたつ。尤本意を尋知て可斟酌にや。中務卿親王文應三百首に。入道民部卿詞を付られたるには。けしきしろし。なかめ吹。あらし哉。太山への里なとを。亡父不可詠之由申侍りしとかゝれたるにや。今もその外いまるゝ事おほく侍れとも。今の世の人盛に申さゝらん事。申出ても無其要候歟。

一本説をとる事。詩の心をもよめり。又漢家の本文勿論歟。源氏狹衣の詞又無子細をや。六百番判の詞に。俊成卿の源氏見さらん歌よみは口惜き事と申されき。しからは源氏の詞なと幽玄ならんをも。本歌にはとるへきをや。續古今に光俊朝臣中河の心をよめる歌入たり。今も本歌にはとるにや。

^注本説本文。詩の心物語の心。さのみ不可詠之由申て侍れとも。常に見え侍にや。よもきふのものと心。狹衣の草の原。めなれて侍り。源氏は歌より詞をとるなど申て侍るか。須磨に曉かけて月いつる比なればといへるをとりて。春はたゞ霞計の山のはにあかつきかけて月いつるころ。宇治に御馬にめすほと。ひきかへす心ちして。あさましといへるを。面かけのひかふるかたにかへりみる都の山は月ほそくしてと侍る。艶におもしろく侍るにや。共に京極入道中納言の歌なり。

一本歌をとるには。堀河院百首の作者までをとる。其以後はとるへからざるよし申。此分子細なきをや。證歌には達者のよめる歌をは。近代成とも可取にや。

^注本歌は後拾遺なとまでの歌也。堀河院百首作者も。俊賴朝臣歌など近來とる事ありとは。八雲御抄にも見え侍る。かの御百首作者も。人の口にある名歌などの。それとおほゆるをとるへきにや。證歌には近世先達歌も引用ひ侍る歟。

一未練の人歌をはいかほとも案してよむへき歟。風情もなきを兎角案すれば。中くあしく成事も有へし。先口をかるくよみなすへきか。初心より歌を沈思すへきにや。歌かすをよむへきか。又すくなくとも案してよみならふへきをや。凡貫之は一首を廿日によむなといへるも。人の性によるへきなと八雲御抄にあり。此條何様なるへきをや。

歌よみに二のやう候へし。いかにもして道の佳境にいたり。絶妙の秀歌をもよまと思ひたらん人は。三昧に入こくと。心を面影のかすかなる所にとめて。人のふるさぬ所を案すへし。なやすく歌出来かたければ不可不沈思。三十六人作者集も百首に及たるはすくなし。花山僧正。齋宮女御。本院中納言。公忠辨などの集歌わつかに侍るをや。殷富門院大輔は。歌數多よみたりとて。千首大輔と申けり。今の代に離か千首よみぬ人侍らん。歌のほと拍子はやく成て。能歌よみもいてこぬ事に侍るか。又題とりて事かぬほとたにのみたらばと申人あるへし。そのほと稽古はともかくもこそ侍らめとなしはかられ侍。但たやすく出来たる秀歌も侍へし。和泉式部かはるかに照世山のほの月は。經文の外に力のいりたる所も侍らす。金を道のほとりにてもとめ得たるかことしと故人申侍歟。

一歌の風跡は人のこのみくなるにや。或はたけをこのむ人

あり。或はこまやかに幽玄なるを執する人もあり。言葉のあいそうはもし天性なるへきか。賢慮はいかやうなる跡をかにことにとりおもはれ候はん。

別て愚意にそむる體なく候。古人秀歌と申候は。いつれも心跡に銘し候。

一歌の風情をもとむるといへばとて。花には黃玉。葉には青玉などいふやうなる事は。かへりてあさけりをまねくかうへに。さほと珍しからざるやうなれとも。てにはなとにてちかへて。常の事のめつらしく成風情も有へきにや。さのみめつらか成事をこのみで。花には風を吹せ。月には雲をかけたかりなとするやうに。引ちかへてよめるも一跡なりといへとも。左様の意趣を先とせば。すなほなる方なくて。あらぬ道にや横入し侍るへき。只常のことのしかも人の案の及はぬやうなる事を。一かとよむへきにや。

注 委詞の相叶候は。風情過たる事も候ましく候。かたはれ月のかたは。落ても水に有けるものといふ歌は。風情のいりほかとして出されて候歟。貫之歌に。ふたつなき物とおもひしをみなそこにやまのばなちて出る月かけと侍る。心相似候歟。花に風をもふかせ。月に雲をかけたかり候はん事。態と好候はんは誠に詮なく候。丹後か歌に。霞つゝ花ちる嶺の朝ほらけ後にや風のうさもしられんと候は。無術おもし

るき面影にて候。又一かとは秀歌にも地歌にもありぬへく候へとも。わざとづかと心ざし候はん事。猶非本意候歟。

一歌は題の心を得てよむへしといへり。文字すくなき題をは少様あるやうによみ。結題をはまはしてよむといへり。たとへは野虫をやかて野へになく虫とよみ。山鹿をやまになく鹿なとよまんば。無下の事なるへきにや。又結題に池水半氷といふに。こほれるほとの水らさるらんと。後京極攝政のよみ。臨期變約戀に。榻のはしかきかきつめてと。俊成卿いへる風情。是はまはしたるといふへきにや。又等思兩人戀に。いく田の河に鳥も居はと。寂蓮かよめる。これらは本説に付て。心をとりによめるにや。結題のよみやういかやう成へきにか。作例少々記し申さるへし。

結題作例事。

終日對菊

行宗卿

いつしかと朝戸を明て菊の花月のひかりのさすまでそみる

野花留客

俊賴朝臣

秋くれは宿にとまるを旅ぬにて野へこそ常のすみかへけれ

殘菊留秋

顯季卿

冬に今は成ぬときけとたのまれす時そとみゆる白菊の花

花下送日

定家卿

木のもとに待し櫻をおしむ迄思へばとなき古郷のそら

霞隔殘花

肥後

立かくす霞をつらき山さくら風たに残す花のかたみを

紫藤藏松

長運法師

松風の音せさりせは藤なみを何にかゝれる花と見てまし

池水半氷

定家卿後京極院
保元之時

池の面は氷やはてんとちそふる衣比の数を又しかされは

一題の文字を顯はさてよむ事。落葉にいか計吹嶺の嵐をなといひ。郭公に明日のあやめのれを残すらんたとよめるは。題の文字なきにや。これはさる一跡にてこそあれ。左右なく初心の人なと用へからさるにや。又假令寄繪なといふ題にて。繪の詞はなくとも。古今などの繪につきたる詞にてもよむへきにや。寄車なとあらんに。右近馬場のひをりの事なとよみたらんは。車の字なくとも子細有へからさるか。加様の作例こまかに記さるへし。

題をあらはさてよむ事。詩の破題のことし。作例。

殿詩歌合 花添山氣色

定家卿

玉すたれ同しみにとりに婦人のそむるころもにかほる春風

目吉歌合 紅葉添雨

定家卿

ふりまさる涙も雨もそほちつゝ袖の色なる秋の山かな

右大臣家六首 故郷紅葉

定家卿

うつろひしむかしの花の都とて残る錦の色そしくるゝ

正治左大臣家 山家夜霜 定家卿

夢路まで人めはかれぬ草枕をさあかす霜にむすほゝれつゝ
熊野道中御會 河邊落葉 定家卿

そめし秋をくれぬと誰か岩田河また浪こゆる山姫のそて

一月の百首花の百首なとに。あらぬ季のまじりたらんをは。只月の題にては。假令秋の雪をもよみ。秋の霞をもよみなとすへきにや。月百首に月前雪月前霞なと有んに。冬の事をよみ。春の事をよまんなはあしかるへきにや。作例おほつかなし。

此百首入道民部卿我家八月十五夜續歌題候歟。月前霞。月前雪。其季にて候はし。猶春の題も冬の題も有ぬへく候に。この二題ばかり相交候は。秋にて霞雪をよませんためにてや候らん。彼の一座を未見及候。一向推量を以申上候。

一傍題をはいかやうに嫌ふへきぞや。これは五首三首の題につきたる事か。三十首五十首に成ぬれはきはさる歟。作例同じく記さるへし。

傍題と申事。ふるくは題の外に異物を詠加へたと申事候か。經盛卿我家の歌合に鹿題にて。嶺に鳴鹿の音ちかく聞ゆ之紅葉吹おろす夜半の嵐にと侍るを。清輔卿に。右紅葉吹おろすなと歌めきたり。抑傍題をはよまぬ事也と申人もあれと。天徳花山歌合にも侍めれは。ひか事にあらしとて。持に

定め侍ると云々。又歌數ある中に。端にも奥にもある題の事をよみたるをも傍題と申侍るか。三十首五十首に成ぬれは。さのみ申さぬ事にや。春の歌に霞の題のあらんに。とたいにかずみをよみ。秋に露題の外に又露をよまん事。是をよまては歌難出來候歟。又三首五首は殊に可憫候。それも引見候はし。作例はありぬへく候へ共。不庶幾候事にて候へは。邂逅の例も無其詮候歟。但七夕七首なとに七夕河に銀河と讀て。又こと題に天河を讀ん事。くるしかるへからず候歟。

一結題には實の字虚字有へし。假令野徑月なとあらんに。徑の字なとは虚にてあれはすつへきにや。抑寄月と月の前との差別いかなるへきをや。浦月と海邊月なといはん差別おほつかなし。社頭と寄神なと又心有へき歟。

結題には誠に虚實の字候へし。野外の外の字。江上の上の字等なり。野徑の徑の字はよむへきにや。峯殿御歌合野徑霞はみな徑の字の心をきたりと見えて候。寄月と月前。大跡は同じ事也。しゐて差別を申さは。寄月には入後月雨夜月なとによせてよまんも。落題にてはあるへからず。月前をばさやうにはよみかたし。海邊と浦ともおなしやうに候へとも。浦の字には心をきてよめる人おほく侍る。社頭と神とおなし事なれとも。ふみとゝろかし鳴神。一夜めくりの神なとも。寄神戀なとにはよみ侍るへし。社頭にはよみかたく候。

一雜題をとりて季をよみいるゝ事。或説に當季をは嫌はず。他の季をはよむへからすといふ人あり。この事いかやうなるへきそや。

雜題に季をよむ事常の事にて候。その時の當季はかりをよむと申説候へとも。いつれの季をもよみて候。作例。

承元二年五月松尾歌合 社頭雜 定 家

神かきや我身のかたはつれなくて秋にそあへぬ葛のうら風
建保五年五月歌合 松經年 定 家

手向草露も幾代か契置し漬まつかえのいろもかはらす

一贈答の舁はいかなるを本とすへきそや。あふむかへしとかやいひて。心をとりをす一舁あるにや。子細八雲御抄などに見えたりといへとも。贈答舁少々記し申さるへし。

贈答歌本様。八雲御抄にのせられたる。清行。小町。敏行。業平。後冷泉院御製。大貳三位等歌。これに事盡て侍るか。あふむかへしの事も。春日行幸歌出されて侍は不可過之歟。

一艶書歌などはいかほともこまやかにやさしかるへし。哀傷歌などは。いかほとも物かなしきやうによむへきにや。大かた戀の歌のよみやうは。四季雜の歌などにはかはりたるものによ。

艶書歌事無才覺候。堀河院御時艶書合歌などは。常の戀の歌にかはる所なく見え候。哀傷歌はいかほとも物かなしから

んとくはたて候はずとも。よき歌はさこそ候はんすらめと覺候。戀の歌四季雜などにかはりて。別の意地有へしともうけ給はらす候。後鳥羽院御時三舁歌とて。春夏はふとおほきに。秋冬はほそくからび。戀雜旅は艶にやさしくつかうまつれと仰せられけるとかや。是も一時一會の御沙汰也。いつれの舁を定られたるにあらず。

一法華經の品などの歌よみやうは。たゞこゝろをとるへき歟。

又詞にてよめるも作例あるにや。

心をとりにてたゞとによまんも。詞にかゝりてそへよまんも。共にくるしからず。六義いつれをすつへきにも候はず。法華經には七喻と申て七の譬候。其外も品々にたとへ多く候。そのたとへをおほくはよみて候。法門にとりてはそへ歌なすらへ歌などにて候へとも。經のまゝにて候へは。たゞこと歌とも申ぬへく候。代々集釋部に見え候作例を。勘申にをよはすといへとも。

序品 廣度諸衆生其數無有量 俊成卿

わたすへき數もかきらぬ橋柱いかに立たるちかひなるらん

隨喜功德品 最後第五十聞一偈隨喜

谷河のなかれの末をくむ人も菊はいかゝはしるし有ける

これは詞にかゝりて侍るにや。

安樂行品 深入禪定見十方佛

警諭品 其中衆生悉是吾子

しつかなる菴をしめて入ぬれば一方ならぬ光をそみる
 みなしこと何思ひけん世中にかゝる御法の有けるものを
 是は心をとりにてよまれたるにや。

一歌合の歌は題の心たゞしく。作例つよく。病をのそきてよむ
 へきにや。其外もし口傳の有へきにや。

さしてうけ給をく旨なく候。題の心正しく。舂うるはしく長
 有て清けなる。歌の勝事にて候やらんと見及候。後鳥羽院御
 抄に。歌合の歌をいたく思ふまゝにはよますとぞ。釋阿寂蓮
 などは申侍し。別のやうにてはなし。題の心をよく思はへて
 病なく。又源氏等物語の歌の心をばとらず。詞をとるはくる
 しからすとあそはされて候。凡歌合の故實は八雲御抄に委
 細に見え候歟。

一歌の病をさる事は。歌合にはいつれの病を近來はさるにや。
 四病八病をさのみ去へきにはあらず。當時きらふ病の分し
 るし申さるへし。當座の歌も近日いつれのやまひをさるそ
 や。くはしく申さるへし。

近來はさのみ病沙汰なく候。同心病斗を去候。同事二候也。
 (喜撰式爲第一病。)我宿は道もなきまであれにけりつれな
 き人を待とせしに。無字二候。此類候歟。又第三句終字。第
 四句終字同じく候。新撰髓腦に嫌ひて候。清輔朝臣。しほか

まの浦吹風にさり晴て八十島かけてのての字。此類候か。こ
 れは聞にくき文字にて候。俊成判には。平頭病も(上下句初
 字同。)なからんよりはよろしからぬよしかられて候。此分
 は歌合のさらぬ歌も同事候歟。

一歌の字三十一字にあまる事。作例おほしといへとも。殊更よ
 したき時はあますへからさるか。忠仁公の花をしみれば物
 思ひもなしなといへるは。聞よくおもしろければ左右に及
 はず。よしなき時たけをたかく見せんかため。好みて文字を
 あます人あり。いかやうなるへき事ぞや。

注用なくて字を餘す事宜しからず候。中飽病とたてゝ候。但信
 明朝臣。在明の月の月影に紅葉ふきおろす山おろしの風。
 (三十四字。)家隆卿。かきりあれば明なんとする鐘のなとに
 猶ななき夜の月そのこれる(三十三字。)などは。一字も用な
 きにあらず。殊勝に候。敦忠中納言。けふそへに暮さらめや
 はと思へともたへぬは人のこゝろ也けり。是はくれさらめ
 やとにても心は聞え候らん。俊成卿。去年もさて暮にきと思
 へは春立といふよりやかて物そかなしきと候。是も暮ぬと
 おもへはと申ぬへきやうに候へとも。氣味ふかく候か。不到
 佳境者難是非候哉。

一名所の景物は。雪月なといふものは。いつくにも有へけれ
 は。作例なくとも。よまん事くるしみあるへからさるをや。

されと月は更科なとよみ。雪は伏見深草なとをよめるは。たよりありて聞よきにや。花郭公なとは作例なき名所にはよむましきやらん。その所にのみては子細なしといへとも。左右なくよむましき物。いつくにもわたりてよむへき物おほつかなし。雲霞なといへるは。所定むへからずといへとも。猶證歌のより所あるなよむへきか。又いつくをよみたらんも。子細あるへからざるか。こまかにしるし申さるへし。月雪雲霞なとはいづくにもあるものなれとも。よみ付たる所を詠すへきよし先達申さるゝ歟。およそかく心得ぬるうへに。たよりあるやうにとりなし候ぬれば。くるしからず候歟。里に掃衣とよみ。河に螢なとをよみ候事。作例をもとむるにをよむす候歟。草木なとの名をさしたるは。はしめてはよみかたく候。但衣笠中納言。白露の手枕の野のをみなへしたれとかはせるけきの名殘そといふ歌は。證歌を尋ぬるになよはす。殊勝なるよし。時の歌仙の沙汰し候けるとうけ給はりなき候。

一 曉の題をとりて在明寢覺なと詠し。首夏といふ題に。新樹更衣なとをよみたらんは。その難有ましきにや。
無子細候歟。

一 其社境の披講歌に他社を詠する事有ましきをや。
その社法樂に他社を詠したる歌。判者のとかめたる事見を

よふこゝちし候。たとひ先蹤はありとも不可庶幾事候歟。

抑隱遁の始修學の時。枳里紀王の十夢の中に。眞珠を麤にかふといへる夢は。釋迦遺法弟子佛教をさしをきて。俗典を學する事をしめすといふ事を見及侍りしより。ふかく慚愧の心を生して。和歌の廣學なとむ。よて此道英宗にあふといへとも。古集訓説をすけす。只すきの心のやまさるをもて。江湖斗藪之日。嘯羈中之風光。山林閑居之時。甌塵外之景色。不覺而泉石入膏肓。積來而烟霞爲痼疾。雖似得江山之助。曾以無螢雪之勤候。仍條々御問端一々迷是非。然而維摩無言說に同じからんと。依有其恐。偏以推量之儀注付辭案之趣候。是併管を以て天津空なうかゝひ。蠶をもてわたつ海をばからんかことし。一度上覽の後。被入火中候懷。可得御意候哉。

頓阿上。

貞治第二之曆。沽洗強半之春。爲消永日之懶睡。不顧後時之傍觀。錄一通遺頓公。京極黃門禪門探得顯昭古今自釋。密勘加斯道之奧旨。號曰顯注密勘。今舉短慮之愚問。忽擊教局之群蒙。非啻達天聽。剩又征夷大將軍殊被賞翫之下。俚之間。博聞之咎。以狗續貂。故銘愚問賢註而已。

五湖釣翁判

彼一卷加一見候。誠珍重候。寫置度存候。不可苦候哉。爲使可被申入候。恐々謹言。

三月十日

義一私云寶篋院義詮公也

三位殿

此一冊以正本令書寫校合畢。可爲證本歟。 文安第二暮秋

上句、鴈飛雲端。虫吟露底之期也。

和歌所老拙法印在判

〔右愚問賢注舊本闕今以一本謄寫以秘閣古寫本及圖書寮本校合〕

續群書類從卷第四百六十

和歌部九十五

清輔袋草紙

目錄

- 和歌會事
- 題目讀樣事
- 題目書樣
- 位署書樣
- 和歌書樣
- 探題和歌
- 御賀歌作法
- 置白紙作法
- 和歌書注事
- 取和歌事
- 和歌若連歌云出事

連歌骨法

大嘗會歌次第

和歌序故實

撰集故實

故撰集子細

人丸（萬葉）難及大同朝事

萬葉式講大同朝從桓武時事

諸集人名不齊

希代和歌

雜談

以上

袋草紙卷一

一和歌會事（公私同之。）

先懷愚詠參其所。隨便着座。

次臨被講期召文臺。先是置講師圓座。當御所中央置之。（抄

私所置亭主前。）

次召人人歌。各隨次置歌於文臺。（自下薦置之。）

其儀。文臺下近臨之時。膝行置之。以歌下向御所。或說向上

之。

長元六年白川日時義忠爲序者勤仕護師
次召仰講師。
野行幸時左大臣實朝々侍講師

五位中召堪能者。私所用位階下薦。但儀式之時多用四位。

花見賀幸時親人同若大衆雅樂雜部實朝師
次歌人應召近參候。
野行幸時上左門右大臣第二人勤仕之

次讀師進寄文臺下。取重置之。（若位階次第不審。召藏人令重
保安二年大入入道勤仕之

之。）一二座人等散勤仕之。（異本。後一條院御時。宇治殿爲

關白勤仕讀師。御幸一座ニテ御之故也。小野宮右府記見

之。）

其儀。取一通開之。置文臺。（兩題時開端歌許。）向下於御前。

（私所向亭主置之。無亭主時。向爲席上之珍人。同等會遊之

時。召向講師。）

以下薦爲先。於僧侶并女房歌。不論貴賤。終講之。或人云。

侍以下歌不置文臺。於下講之云々。但近代不然歟。

次講師讀上之。

其儀。延右足。頗及臨讀之。（寧不居圓座。唯懸片膝許。）其

音不微。一句々々讀切之。（但至位署髻髯讀之。）讀畢任余人不詠之。序讀樣同和歌。有兩題之時。同題一巡講了講次歌。雖數十准之。件時更又讀名字。於位署者不可讀歟。

次可然人々同音詠之。

但初音不助音。次音可加詠歟。又爲後進人不可進詠之。有

序之時。堪能人々詠吟秀句。其後詠歌也。

次詠三反之。又置次歌。（作法同前。於題者不可讀。每題初度

許詠之。）

次臣下歌講了。自箴中枝出御製。

其儀。取拂臣下歌。更居佗文臺。（非強儀式之時。用本文

臺。）講師又改之。（四位勤之。）更讀題目講之。度數可倍臣

下歌。於御製者以文下向吾方云々。（嘉保度叶之。講師通俊

卿也。）

御製出時。講師可急退。凡歌畢可急起也。又女房歌。諸人歌

講畢時出之。有兩題之時。一題時出之。

嘉保三年三月。內裏御會初度御製。文臺用御視宮蓋。野行幸

時用楊宮云々。又御製文臺下有高坏儲之由。通俊卿所申也

云々。

長元六年三月十六日。於白川院子日時。是日宇治殿文臺。用螺蛸

蒔給硯蓋之由。（見彼記。）

一題目讀樣

假令秋夜同詠叢夜虫應製和歌一首。如假名讀之云々。
御製詠給へルト可讀。

一說、云事ヲト可讀付之云々。但可依題燬。假令春心在花。是等類尤可讀付。凡題日可訓讀也。雖然又如三月盡九月盡不可然。如此事臨時可斟酌燬。又和字明讀之。歌字微讀之。

一位署讀樣

於公家仙院。(女院同之燬。)

六位官姓名。五位官名。

四位官名朝臣。三位以上姓朝臣。(但四位宰相准非參議。)

親王。(無官可稱位燬。三品親王若一品親王也。)

於親王大臣家。

六位同前。五位官名朝臣。

四位官姓朝臣。三位以上官許。

次所非參議皆讀名字者也。

一願日書樣

其日其皇幸其所同

詠觀^王物應^豐字製和歌 公家仙院 是臨幸佗所之儀也。

或說。同詠兩字不書。久和歌一首書。如此事唯任意。

保安五年花見御幸。殿下此定也。

太政入道同詠兩字不書。

其夜詩。其所同詠其物。

應令和歌一首 (女院。皇后宮。諸內親王。)

是本所之儀也。或和歌兩字不書。又其日其所。非臨儀式不書之。

嘉保三年內裏。江帥書樣。

春日侍 中殿同詠^其應^讀字製和歌一首并序。是源右府

天喜年中會書樣云々。

人々或注侍宴云々。

但同字序者之外不書之由。見江記。

詠二首應教和歌 (親王公卿家。)

題、、、、位署

歌、、、、

題、、、、

歌、、、、

是有兩題之時儀也。但省略儀也。詩常儀如例書之。凡於公

家仙院書製字。於女院后宮并內親王家書令字。大臣并卿

相家書教字。女御并御息所家。(可尋。)

女房歌不書題日并

字。御製又題日許燬。

不踐辭太上皇准^后院后宮燬。小一條院和歌序。匡衡書令字。

又春宮和歌序。匡衡卿書教字。或人云。至一人子息。雖非公卿書教字。但非家人者不可然云々。又於一所花族公卿教

字不書。御堂作文齊信朝不書教字云々。

一位署書樣

於公家。仙院。女院同之。

位官 兼官 臣姓 朝臣名上。但製字不書時。不書臣上。

頁上不書時。又一官計也。

江師同詠注云。(江進士有重注師言云。堀川院御時和歌。京

極大殿位署。令書散位從一位藤原朝臣云々。人以爲希代位

署云々。)

碧玉裝簪斜立柱。(天神御作此注云々。故渾右府(簡房。)

被命曰。伴度正文見之。於署二行被書。依官多歟云々。

於諸家。

一官姓名

爲諸官司人。於當官若上屬之傍官家。不可書官名。唯亮若

大進可書之。凡諸司長官可准之。或說云。於同姓人家不書

姓云々。但故人多以書之。如此、藤氏於一所不書之也。

一和歌書樣

三行三字書之。

但近代不必然。故老書墨黑。顯然可書之。不可執手跡云々。

一探題和歌

探題各別題各分取詠也。若以札子賦取之時。以探得短冊押

紙書和歌。殊不書題目云々。又披講以後追加歌不書題目。

只題如前書云々。

天喜四年新成櫻花宴。殿上記云。

今日有御遊事。其儀係廂第三間以南敷宮圓座。爲諸卿座。

申二起諸卿依召參上。次賜綺紵於能考。令 奏雅樂音。漸

臨夜景。供灯如常。爰內藏寮辨備酒饌。(侍從五位六位盃

之。此間左馬頭經信。刑部大輔師賢。筑前權守政長廳召候

簀子敷。是皆携絲竹之輩也。多驚衆人之耳目而已。今群臣

各令獻和歌。權大納言源朝臣奉勅題目。先經假覽之後。次

第下之。(題翫新成櫻花宴。)

權大納言源朝臣即獻序代。召經信朝臣講和歌。訖之後天明

宴罷。賜御衣於諸卿云々。嘉保三年三月內裡御會。(江記。)

以頭辨召公卿。々々參入着座。次召堆歌之者。某々等參入

候簀子云々。藏人依召入。自年中行事障子北。到御厨子。取

御遊具。即自公卿座前持來。

次御遊。次始自下臈獻和歌。殿上人皆自年中行事障子北參

入。(今度代始會云々。)

束帶人皆置笏於左。予獨置右。當座下方置之故也。或曰。如

挿而置之也。可置左歟云々。可尋案。

追考。近代人持笏參御前。膝行置歌之由申。此儀ニテハ座

ノ上下不可有之歟。

康保三年花宴記云。陣座。今日有華宴事云々。仍上達部令付

此座。此間行事具見陣記。其行事所。上達部御前。以陣高盃先奉居菓子干物。爰參議達進着納言座。殿上四位着參議座。(左中弁文範。右兵衛督忠平。)其前立小臺盤。居菓子干物。五位少將着陣室。其中前立机。外記史折辨備於掖陣。御酒二三度之後。居生物御飯。御酒數度之後。先誦舊句。次有呂律之伎笛。將監尾張(安居。)罷出於軒廊中間。奉仕呂律之舞。不幾罷入。次誦右和歌云々。有花心。此度獻盃。右少辨平朝臣行以右和歌爲。次參議伊尹執轡。始新歌隨巡行。各有其歌云々。于時少內記大江昌言候陣座。聊記小序。其間召右少史坂合部以方。令取進陣間以下見參。以方見參進左大弁賴忠。見畢返給史。既イ又進左中弁文範。見畢參催。令覽權大納言師尹卿。即自官家可給祿之由奉。宣旨。返給見參於史。其後子一尅退出之間。參議朝成朝臣單衣給將監閤人季任。次前尹大納言將監安居代官不給之云々。

長元六年白河院子日記云。(宇治殿義忠記之。)

當日鷄鳴以前。殿下移御。依可有子日之興宴也。設宴遊之座。池水西岸深淺。東頭東南側立五間班幔之帳。爲上達部座。長筵之上敷圓座。帳外東西當中納言後。設殿上人召人等座。紫端疊。未尅主客起座。徘徊中庭。召堪能之兩三輩。有蹴鞠之興。次幄座。和歌召人越中守橘則長義忠二人也。而則長卿有故障不候此座。義忠一人候東座末。次散位範永。平行親等

獻紙筆。中尅議定歌題。依承平舊貫。以子日即事爲今日題。中宮權大夫召義忠。

唯起座候。其後即被仰可奉仕歌序之由。(勅)承印退本座。次有管絃。次有盃酒。先是淡路守實範。藏人所司當源賴家等取檜破子。各居水邊。々々之東西廣庇御前立灯臺二脚。爲講師之處。置蠅蛭時繪御硯管盃。爲衆歌之臺。人々獻歌。其後召義忠令講之。殿下召義忠。賜綠色御衣。大納言人々必有牽出物。(龍蹄也云々。)

予按之。承平子日時。(貞信公歟。)實之獻序。此例歟。實資記云。寛仁二年十一月廿二日。行幸上東門院之時作文也。參議廣業獻題。殿上料令書可被下歟。又聞其題各書之。上達部博士獻臺之時。更不令書。依候座也。又上達部博士獻臺之時。更不令書題。召地下博士。臨事有異。

康保二年。朱雀院不立別文臺。

文臺置御前文臺。

一御賀歌作法

書和歌不獻。唯一座之人取盃。口ツカラ詠之。次人指。次人受盃。又詠歌。次人差。次第如此展轉云々。凡昔歌宴如此歟。

萬葉集云。天平十八年正月。於太上皇御在所賦雪和歌。左大臣橘卿應詔歌一首。(各書應詔。)

右件王卿等應詔作歌。依次奏之時。不記其歌。漏失云々。是又

此儀也。

又陣座華宴儀同之。

故物ニカハラケトリテヨミ侍ケルトイフ。大略此儀也。

勸盃先詠始也。

經信卿雖後拾遺云。

輔親カ語シハ。能宣カ桂家會シテ又ノ日。元輔カ月輪トイフ

所ニ同人トマカリタリシニ。カハラケ輔親カトレト云侍シ

ヲ。能宣ハエツカフマツレト云侍シナ。ナチナト元輔申侍シ

カハ。然ニ土器取讀侍。

さきの日に桂の里をみしとはけふ月の輪にくへきえけり

能宣モイカ、アラント思給へツルニ。ケシウハアラス。ツカ

ノマツリタリトコソ申シカ。其程所衆ニテ故ヤトソ申ケル。

此間係テ

又能宣集云。春日客人アマタシルシラスマワテ來リテ酒飲

侍ニ。紅梅ヲ翫トテ。丹後掾會禰好忠カハラケトリテサシ侍

ルトテ。

我せこか袖白妙の花の色をこれなん梅とけふそしりぬる

返

淺きこき色は嫌はすこゝにイは梅うめば梅なる匂ひとそみる

紅梅ヲ白ク讀ル。イハレスト人アマタ申ケルニヨリテナル

ヘシ。是等ヲ盃取トハ云ナリ。

同集云。小一條太政大臣(貞信公)。白川殿ヲ公忠親王ノ所分

タマハリマシマスニニ依屬侍テ。九條大臣ノシリ玉テ。上達部殿上人ナトアツ

マリテ。公忠親王ノ家ナリトテ。古事ヲ戀ル歌ツカフマツレ

ト仰侍シニモ。カハラケトリテ。

白河の水のこゝろもいにしへの秋をはけふや思出つらむ

人々感歎云々。是不審侍。大臣公卿勸盃起事如何。但爲饗應

歟。又唯吾盃ヲ持ナモ可云ニヤ。

此歌後拾遺問答。ソノカミノ秋何事ノ有ケルソ。無其事テハ

不便。答云。今見侍レハ尤然云々。

一置白紙作法

題日并位者計ヲ書テ。諸人歌置之後。置之逐電。不居講席之

座云々。雖達者臨時古今有如此事。寛平法皇宮瀧遊覽時。源

昇朝臣。在原友于朝臣(行平中納言息。)置白紙云々。

記云。即 善朝臣 獻其題歌云。

やた鳥頭におきてしのゝかみ句の末におき題の歌よめ

侍臣等題ヲ聞テヨリ口食并管絃ヲ忘。昇友于起居沈吟。遂不

能成。大歎曰。臣等歌興非不及於如道等歟。然阿臣等頗知和

歌道善之惡之。今夜謀窮力屈。遂悲其惡。如道等不知其道。自

以爲善。悲哉不知道者之風。或兩人所宜甚大理也。以道言之。

其有無各可耻歌者耳云々。有興云々。

故人語云。先年殿上人々詠和歌之間。泰憲民部卿參入。有興

之由人々被示舞。而稱急々由テ欲退出。人々留之。戶部云。進置

和歌可退出云々。人々承諾。仍和歌ヲ書テ封之退出云々。披講之期開之處。位署并題計ヲ書テ。奥ニ書テ云。於和歌者可追進云々。人々感歎之。且者不安之由云々。凡得名人中々事云出ヨリハ遁避一事也。有歌合之比。長元殿。小式部内侍入歌人之時。母泉式部爲保昌妻。在丹後國。定賴卿小式部内侍局前立寄テ戲テ云。イカニ丹後へ人ハ被遣候哉。未飯參歟ト云テ起時。式部取直衣袖云。

大江山いくのゝ道の遠ければまたふみもみす天のはし立定賴卿ヒキヤリ逃ト云々。

六月中入秋節之日。關白殿下遣俊賴朝臣許歌云。

みな月のてる日の影はさしなから野邊もや秋の錦成らん
凡秀歌ニハ劣返事ハ不云。是故實云々。如此之輩不爲耻辱歟。

小野宮右府記。立后。(寛仁二年十月十六日戊子。御堂第三女。)

大閤執盃。進居上頭。攝政避座。向右大臣。三四巡之後。大閤戲云。右大臣可勸盃我子。余執盃勸攝政。々々度左府。々々獻大閤。々々度右府。次第流巡。大閤呼下官云。欲讀和歌。必可和者。答。何不奉和平。又云。誇タル歌ニナムアル。

此世をば我よと思ふ望月のかけたることもなしと思へば
余申曰。御歌優美也。無方酬答。滿座只誦此御歌。元稹菊詩。

居易不和。深賞歎。終日吟咏。諸卿響應余言。數度吟詠。大閤和解。殊不責和。夜深月明。醉各退出。

今案。秀歌劣返事不云之由云々。

一和歌書註事

是前蹤也。日本紀竟宴歌多事。

先新院歌宴。故左京有註被書。世以傾之。不知也。但如此事得人之所爲歟。

又兩題有詠一首事。或所海士橋立。紅葉。戀。三首題講。範永朝臣遲參シテ臨講之時。以三首題詠一首和歌。

戀わたる人にみせはや松の葉もした紅葉するあまの橋立
又有兩題之時。唯詠一首多先蹤。高倉一宮歌合後宴。以二首題上達部之中同詠之。而宇治殿下令詠一首。

有明の月たにあれやほとゝきすたゝ一聲のゆく方もみむ
又故左京三月盡歌戀歌兩首被講之時。證觀法印詠三月盡計。春のくるゝ道にきむかへ郭公かたらふ聲にたちやとまると

凡如此事不可勝計。但是詠秀歌之時。若有人望之人所爲也。
件歌二首皆以秀逸也。又歌有詠苦事。今殿下俊賴朝臣詠卯花歌云。

卯花のみなしらかともみゆる哉賤か垣ねにとしよりに鬼
位署不書シテ獻之。人々奇思之處。其名載歌中云々。是獨步之時事也。又直ニ吾名ヲ讀事モ有。万葉集ニ憶真歌ニ云。

一取和歌事

おくらは今はまけ南こなくらんそのこの母も我を待覽
御製若ハ當座主君詠秀歌之時。其道之長若ハ爲席上之珍人。
懷之可退出云々。不堪惜感之由也。

高倉一宮歌合之後宴和歌。宇治殿御歌云。

有明の月たにあれやほとゝきすたゝ一聲のなく方もみん
大二條殿内大臣之時。懷之退出云々。是雖非其道之長。以入
望歟。於事得人ノ所爲也。況如御製哉。先年於新院有和歌。而
有宜御製。故左京後日雖懷之。猶有恐空退出云々。

一和歌若連歌云出事

不審之處。故左京殿曰。女房自殿中和歌ヲ云出事。一度所聞
也。其旁非詠非讀。言語難學云々。

俊賴朝臣ハ極大事也トソ申ケル。但至連歌ハ更不可有詠
儀歟。

一條院御時。源兼澄陪從侍ニ。大入道殿御前ニ候給テ仰云。
歌一首可仕。仍一句申出。ヨヒノマニ。暫停滯。被責次云。キ
ミナシイノリヲキツレハ。又停滯。又被責仰之。次云。マタヨ
フカクモ〔又停滯。又責。次云。イ〕オモホユルカナ。一句々々
隨思得申出之。希有之由万人褒譽。入道殿下賜御單衣云々。
是ハ何様ニカ申出ケン。尤不審。

一連歌骨法

連歌ハ本末只任意詠之。雖然至鎮連歌。發句ハ事不可詠。末
句又如然之時。任口早速ニ不可發。當座ノ主君若ハ女房事ヲ
暫ク可相待也。有遲々時詠出之。尤宜歟。我等之時ハ非沙汰
之限。近代和歌式云。連歌ノ不云切ハワロキ事也云々。案之。
不可必然歟。万葉集云ク。サホ川ノ水ヲセキアケテウエシタ
ナ。

又後撰云。白露ノチクニアマタノ聲スレハ。

又伊勢物語云。カチ人ノワタレトメレヌニシアレハ。チク
ヤマニ船コクナトノキコユルハ。是等皆吉連歌也。又延喜
御集云。菊宴之時。中務宮ニハニナリテ。カサシノ花ヲ、リ
テ奉リタマフニ。タ、ニハトチホセラレケレハ。

野邊ニユキテオリツルコトハトテ。末ハナクテ奉リ給ヘリ
ケレハ。霜ノ中ニウツラメ花チアハレトヤミルトナン云々。
又齋宮女御ノ集云。サツキヤミオホツカナサノイト、マサ
ラント。如此之句不可云事歟。又故實歟。唯臨時ナニトナク
云出給事歟。但於今者以之可爲證據歟。若又集ノ體事歟。廣
可見之。拾遺集連歌云。中將ニ侍ケル時。右大辨源致方朝臣
許ヘ八重紅梅ヲ折テツカハストテ。右大臣藤原實資。流俗ノ
色ニハアラス梅ノ花。致方ツク。珍重スヘキモノトコソミ
レ。

又奈良華林院歌合判詞云。大津ノ濱無下ニ俗流也。近俗云

心歟

うれしきは大津の濱に立浪のかすもしられぬ君か御代哉
詩云。菊開似遇仙

露蘭塵隔到眞境。

説イ風簫叢誓流俗名。

源時綱

流俗人問テ謂云々。然者人問ノ色ニハ非ト連歌ニハシタルカ。或人云。連歌元意趣ヲ末ニ答也。

帥大納言云。女房歌讀懸時ハ。不聞之由チ一兩度可不審。女房又云。如此云之問廻風情。猶不成又問。女房ハユカミテイハス。其間猶不成ハ別事ニ候ケリトテ可過。是究竟説也云々。

或説ニハ返歌ヲ髣髴ニ無其事云チ。女房不聞之由チ云チ。又シカノト云。猶不聞之由チ云時。別事ニ候ケリトテ可過云々。又同女房ノソヘ事云ニハ。不知事ナラハサシモサフヲハシト可答。イカニモ無相違答云々。

先年或女房計ニ小貝卅一ニ歌チ一文字宛カキテ或人送之。女房予ニ可讀解之由チ示。凡不及力。仍折萩枝。其葉ニ無其事字チ卅一。每葉書テ遣之。件所ニ又不得讀。經兩三日之間。萩葉カレテ字不見。爲遺恨之云々。一説也。

俊重君於或宮原談女房。于時持藤花。女云。ソレカウヲハト云々。俊重不知其故。默而止了。後日其由ヲ語嚴閑。

俊賴云。後撰ニ藤ノウヲハノウヲトケテト云歌不知歟如何。

答云。知給候。藤ヲ持タルヲ見テ。ソレカウヲハト云ハ。非件歌之意哉。如此事不能教事云々。

一大嘗會歌次第

先從國々註進所々名於行事辨。下作者許。作者撰便宜所々（各可避禁忌。諷詠之。進行事辨所。以風俗歌下樂所。（以之入々作樂。）以屏風歌下給所。（以之書圖之。）若和歌有廻々之時。所々名ニ書詞先進之。和歌ハ追進之。（件詞作者計之。）又風俗歌許進常事也。書和歌之時。家々之説不同也。輔親兼澄等假名。又風俗并屏風歌等書一紙。義忠假名。別紙。資業之流眞名。別紙。家經之流歌假名。詞眞名。一紙。（又以神樂歌爲初。自餘人以稻舂歌爲初。）匡房眞名。別紙。（但天仁度假名也。）以下人々皆眞名。別紙。但故左京詞眞名。歌假名。一紙也。長和以上人書様不憚也。進覽之時可有禮紙也。

宮内少輔伊行云。件歌先被下清書所。而又書三通。送辨許。一通（一紙。）書稻舂歌神樂兩首（一枚繼書。）風俗歌八首。一通（二枚書。）屏風歌十八首并稻舂歌ヲハ下々。風俗ハ下樂所。屏風歌下給所。又云。行成并伊房書置秘書有。號右筆抄。書寫之間口傳也。件書悠紀ノ歌ハ假名書之。主基歌ハ眞名也。作者皆如此存。清書人又可然云々。但近代不必然歟。

大嘗會。天武天皇御宇。白鳳二年癸酉十一月始之。但歌不見。而自承和御宇出來。但歌少々歟。勤悠紀主基國名。其初丹

波。播磨也。其後因幡。美濃。尾張。遠江。但馬。近江。備前。美作。越前。三河。伊勢。備中。隨令下用其郡。但書嘉名郡一兩下之歟。近來以後偏悠紀國近江。主基國丹波備中替々勤也。但冷泉院時主基國播磨也。

和歌作者。

光孝天皇御時大伴黑主也。(古今集以此歌稱當今執具歌。不審。件歌詠伊勢長濱。而仁和時非伊勢國。)

輔親。兼澄。三條院。

輔親。爲政。後一條院。儒者始從此時。

輔親。義忠。後朱雀院。

資業。家經。後冷泉院。

實政。經衡。後三條院。

實政。匡房。白川院。

匡房。行家。堀川院。

匡房。正家。鳥羽院。

顯季卿出家後替之。

敦光。行盛。新院。

顯輔。敦光。近衛院。

永範。茂明。一院。

俊冠。範兼。二條院。

顯廣。永範。新院。

永範。清輔。高倉院。

兼光。季經。當今。崇德院。

兼光。季經。今上。

大嘗會和歌宣下狀

左京大夫藤原朝臣顯輔

右中辨源朝臣雅綱傳宣。權大納言藤原朝臣宗輔宣。奉勅。宜

令件人勤仕大嘗會悠紀所和歌者。

康治元年八月十九日 修理東大寺別當兼左大臣等博士

攝津守小槻宿禰(政重也。)

宣旨請文書樣 大博士師光草。

某位某官姓朝臣名解 申請 宣旨事

一紙(被載可勤仕大嘗會悠紀和歌狀。)

右去某日宣旨。同某日到來爾。某辨傳宣。某人宣。奉勅。宜令件

人勤仕大嘗會悠紀所和歌者。謹所請如件。仍注事狀。謹辭。

是地下人請書也
年號月日 官位

謹請 大嘗會某方和歌事

右任 宣下旨可勤仕之狀。所請如件。

年月日 (是八殿上人請文也。大橋政宣下之時者仰旨ト

可書云々。)

行事所獻和歌之消息書樣

獻上

主基方和歌二通

右滿八句之季算。致數度之忠勤。於今度者可預優恤也。以此旨可令可 奏聞給歟。敦光謹言。

十月八日

式部大輔敦光

〔謹上右中辨殿イ〕

一和歌序故實

維順朝臣語曰。故帥(匡房。)曰。和歌序ハ有書様。學テ可書事也。其說ト云ハ無式法無様。唯以所記書之。如此之知ヲ爲學也云々。況於假名序乎。只任意任口可述事歟。但雖然書テ序和歌題等ハ聊可分別書。序ハイタクワレス。ウルハシク可書。於和歌序題ハ優麗ニ可派書也。兼盛紫野子日序ハ慎テ所書也。又日記ハ其體異之。其句具ノ寄來所可諷書也。且ハ故序等テ多可見之。不能委。序ナ書ニハ諸官ノヤマトヨミ尤可知之。

序代庭訓

序代者古賢猶以爲難云々。難故何者偏依風俗用倭語其體弱。又風情漢事其體強。不弱不强。不少不多。首尾相兼。華實共備。故以爲難而已。又序題雖宜。和歌至于拙者。遺恨第一。詠吟如何。所謂珍美也。又序題當其選。辭退無習之事也。縱非黃絹之零。宜免白紙之耻耳。

カウツカサ
神祇官。

オホイマウチキミ
大臣。

マシヘハカル
參議。スハ臣ツカサ

オホイオホトモヒ
左右大辨。

チモトヒト
侍從。

チロシモノ
監物。

キサイノミヤ
皇后宮。

フムツカサ
圖書寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

フムツカサ
大學寮。

マツリコトノ人
佐。

オホイモノマウスツカサ
大納言。

スナナクモノマウスツカサ
少納言。

オホイモノマウスツカサ
史。

ウチトリ
内舍人。

オホキオホキサキノミヤノ
大皇太后宮職。

オホトシリノツカサ
中宮。

ウチンクランツカサ
內藏寮。

オサマツカサ
治部省。

ミヤノツカサ
諸寮寮。

チカラツカサ
主稅寮。

ウタマツカサ
刑部省。

ナリヘツカサ
織部司。

コカシノツカサ
木工寮。

クサリノツカサ
典藥寮。

ウチヘツカサ
內膳司。

タノツカサ
彈正臺。

ミコシノツカサ
春宮職。

ツクリテサムルツカサ
修理職。

ニケキツカサ
左右近衛府。

ツハモリノツカサ
左右兵衛府。

ツハモリノツカサ
左右兵衛府。

ツハモリノツカサ
左右兵衛府。

ツハモリノツカサ
左右兵衛府。

ツハモリノツカサ
左右兵衛府。

ツハモリノツカサ
左右兵衛府。

ツハモリノツカサ
左右兵衛府。

ツハモリノツカサ
左右兵衛府。

ツハモリノツカサ
左右兵衛府。

ツハモリノツカサ
左右兵衛府。

ツハモリノツカサ
左右兵衛府。

オホイオホイマウチキミ
太政大臣。

オホコトノオホヘツカサ
中納言。

ナカノモノマウスツカサ
外記。

ナカノモノマウスツカサ
中務。

ウチンシルスツカサ
內記。

オホキオホキサキノミヤノツカサ
皇太后宮。

オホトシリノツカサ
大舍人寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

オホトシリノツカサ
縫殿寮。

ムマノツカサ
左右馬寮。
オホミコトモチノツカサ
大宰府。

ツハモノ、グラノツカサ
兵庫寮。 鎮守府。

一 撰集故實

時大臣又一人歌。雖非秀逸必可入之。英雄ノ公達又々隨宜可優事也。雖歌宜非指テ重代。又非人ヲ。無其聞者不可入之。於無双歌ハ無左右。又歌仙之歌ハ有秀歌一首ハ次歌ハ一兩ハ可入之。故實也。現在者ヲハ撰定。故者ヲハ隨宜歟。以前撰集漏歌ヲハ好テ不可入之。此集決定ノ劣彼集之越顯然之故也。但至秀逸歌ハ無左右。同題歌并似返歌々等可相並也。時節玄隔ハ非沙汰限。秀歌ハ一所ニ不可並。所々ニ可相交云々。歌次第漸隨便可書云々。以前撰集ニ一事ハ必可違也。故萬葉集。古今。後撰。拾遺マテ各別也。或人ノ云。古今ニハ題不知。讀人不知。後撰ニハ題不知。讀人モ。拾遺ニハ題讀人不知。如此歟云々。然而末代本不必分別。是輒々書寫之失歟。讀人不知ト書事可有儀。一ハ眞實不知作者歌。一ハ雖書名字。世以難知其人。下賤卑陋之輩。一ハ詞ニ有憚歌等也。又歌後著作者ハ撰入善惡ニ有憚致。故人憊說ヲ不聞歌也。仍古今ニハ萬葉以往歌ヲ或實讀人不知。或ハ歌後ニ著之。所謂奈良帝。人丸等也。如此事尤可斟酌事也。又連歌ヲ歌一首ニ取成テ入撰集常事也。後撰云。

白露のおくにあまたの聲すれば花の色々ありとしらすや
又々々集云。

諸共に山廻りする時雨哉ふるにかひなき身とはしらすや
是ハ稱道連歌。今一人ハ甚損歟。但以末句爲主歟。

一 故撰集子細

萬葉集和歌四千三百十三首。此中長歌二百五十九首。但本々不同。難用定數。

此集世以謂大同之撰。是付奈良之號存歟。極僻事歟。凡以聖武并桓武大同之朝號平城帝。(見國史。)但至大同付山陵號之。如今序ハ時歷十代。數過百年云々。然者相當桓武御時。但多疑。一彼集ハ寶字三年以後年號不載。一家持天平勝寶以後官不見。所載之官唯內舍人。越中守。兵部少輔。少納言。左中辨等也。就中公卿之時歌不載之。

一古今集云。貞觀御時。萬葉集ハ何比ニ被撰タルソト被問之時。文屋有季詠云。ナラノミヤコソフルコトソコレト云々。又野宮歌合時。源順稱云。ムカシナラノミヤコソフル歌ヨミシ時云々。而桓武ハ此京ニ遷都之帝也。於平安宮撰集ニハ。專不可稱奈良ノ都ノ古事ト。又桓武ハ延暦三年甲子十一月十一日戊申移幸長岡宮之由見國史。其以前代始纔一兩年ノ間。撰和歌事ヲ不爲先歟。就中彼帝作歌之由無所見。方々有疑殆。予按之。此集聖武撰歟。其故彼帝御時和歌始興之由在

古今序。隨能令作和歌云々。(是一。)同序。人丸同時ノ奈良之帝時撰萬葉集之由云々。而桓武時ハ人丸不可逢。計其年齡。殆及百六十歲。隨人丸死去之間歌載彼集。(是二。)又皇代記云。天平元年正月十四日奏諸歌云々。(是三。)但如彼集天平勝寶二三年歌等載之。若孝謙之時ニ太上皇後撰之歟。(如金葉并詞華集。)又寶字元三年歌在之。展轉之誤歟。如此者雖當聖武之撰。古今ノ序十代文難避者也。但文筆之習若過若減。皆存大數之儀。余數ヲ察テ取十代歟。同序云。于茲フルキ事ナモシリ。歌チモシレル人譏二三人云々。而所上ハ六人也。又雖稱千歌廿卷。實ハ千九十九首也。如此ハ付文花不必稱定數歟。若十代字之誤歟。撰者或稱橘大臣。或稱家持。件大臣寶字元年薨卒云々。彼集桓武之撰ナラハ相違。家持延暦四年謀反薨去云々。其以前遷都造營之間。撰歌之條有疑。彌可謂聖武之撰。抑或人云。如世繼物語ハ萬葉集ハ高野御時諸兄大臣奉之撰云々。高野ハ孝謙也。然者叶愚義。孝謙時太上天皇所撰註歟。但引見彼書之後可左右。此集末代之人稱古萬葉集。源順集ニモ古萬葉集ニト云事アリ。是有新撰萬葉集若ハ菅家萬葉集等之故歟。新撰萬葉集ハ延喜御時抄出之云々。五卷也。萬葉集者ハ所在稀云々。而俊綱朝臣法成寺寶藏本ナ申出書寫之。其後顯綱朝臣又書寫。自此以來多流布ノ。至于今在諸家云々。山上憶良類聚歌林一本書也。在同寶藏云々。

人丸勘文

勅申或人誤稱人丸大同臣萬葉集等同時撰疑貽子細狀

一人丸難及大同朝事

天智天皇(大津宮)

天武天皇

見萬葉集

又云。幸難波時赤人作歌。

但至赤人歌ハ若聖武時歟。不詳。

持統天皇(藤原宮)

上天皇(或本如此)

有人丸(見萬葉集并讚。元年丁亥萬葉集人丸歌始於藤原御宇。)

文武天皇(藤原宮。諱輕。)十年。

萬葉云。輕皇子宿秋野時人丸作歌。輕ハ此帝名也。持統代。

元明天皇(諱阿閉。)

萬葉云。和銅三年二月從藤原宮遷幸榮宮。

元正天皇(諱氷高。)

有赤人(見萬葉。)

聖武天皇(諱聖德太子。)

有赤人家持等。家持起神龜元年甲子。至天平寶字三年正月

爲因幡守。於國有詠歌。(萬葉第二卷見之。)

皇代記云。天平元年己巳正月十四日。奏諸歌。同八年丙子。建

立東大寺。同九年丁丑。每國造釋迦像。立國分尼寺。今年疫

疔。公卿以下百姓沒死不可勝計。同十九年乙亥。(丁丑)初五月菖蒲

冠。昔止今興也。天平十六年甲申四月。都於難波。八月。天皇

急發病惱。幸奈真宮。勝寶元年己丑七月二日甲午禪位於女

皇。孝謙天皇也。

袋草紙卷二

高野尊孝謙天皇。(諱阿閉。平城宮。)在位十年。(勝寶八。寶字二。)

此帝御製在萬葉集。三原號阿閉皇女。

同集載勝寶及寶字元年歌。

月日。太上天皇。光明皇后。主上相共幸行山見之。

又世間有萬葉集抄序物。(不知作者。)件序云。柿本朝臣人丸

歌集云。天平勝寶五年春二月。於左大臣橘卿之東家。宴饗諸

卿大夫等。于時主人大臣問々如此。件大臣橘諸兄公也。年

號又孝謙時也。人丸至于此時際。從天武至天平勝寶五年。八

十二年也。以前年相加百歲計歟。

平城宮廢帝天皇。(諱大炊。)六年。寶字八。(自二年戊戌。至八

高野尊年甲辰。高野尊但二年孝謙治天敬除之。

稱德天皇。

五年。(天平神護二。景雲四。又除

景雲四歟。)

光仁天皇。二十六年。(寶龜十一。天應一。)

平城宮寶龜三年。演成朝臣奉詔作和歌式。

日本種子桓武天皇。(諱山部。)在位廿五年。(延曆三十一。月十一

日戊申。遷幸長岡京。同十三年甲戌十月廿一日辛酉。車駕遷

于新京平安京。平安宮

平城宮長岡平安宮御宇。生年卅即位。遜位後十五年。延曆廿

五年丙戌三月十七日崩。七十。葬山城柏原陵。延曆廿三年十

月。幸和泉紀伊國等。(經日遷都。)

日本種子平城天皇。(諱安殿。)在位四年。大同四。

大同四年四月十一日丙子。天皇自春寢食不安。讓位皇太子。

(嵯峨也。)十一月停大嘗會。造平城宮。依大上皇命也。十二月

幸平城水路。依此有事。隨大上皇之臣可配流之由宣下。此間

出家云々。弘仁十四年癸卯四月。(廿三日。)停平城先太上天

皇諸司。天長元年甲辰七月七日崩。(五十一。)葬大和楊梅陵。

帝見召文。

天武以後至大同百卅八年。人丸天武御時屢從由見萬葉集。然

者以前年曆相加減。定及百五六十歲死。尤有疑。

赤人又起於元正。共長命之條。勞難信受。

如萬葉集。人丸始自天武至文武。如家集全素謙。赤人始自元正

至聖武。於以後者指證據不見歟。(是一。)

古今云。

奈良帝御歌

古郷となりにしならの郡にも色はかはらず花はさきける

又云。

讀人不知

萩の露玉にぬかんととは消ぬよしむ人は枝_エから見よ
又云。

龍田川紅葉みたれてなかるめり渡らば錦なかやたへなん

此歌。或人云。奈良帝御歌也。

如古今。於萬葉集以往人者。直不書其名。後注之。以之思之。

古里歌後奈良。次歌二首以往奈良。人丸同時帝也。(是二。)

難者云。

一者世間奈良帝御時集ト云物有。件集有此歌三首。二者古今
目錄。(仲實撰。以三首歌注一帝。非奈良帝兩人儀如何。

答云。

古里歌載件御集之條。愚昧之後輩誤書入歟。從往古載三首。

古今豈位署書様不同哉。至仲實目錄者失之歟。(或諸家集。或
在生撰云々。或後人集云々。彼集若以後人書出歟。)

難者云。

同人歌位署書様不同之條。古今之習也。有故事歟。於載書籍
無不審歌者。直書其名。至傳聞若其說不慥歌者。後注其名也。

非仲實之失歟。

答云。

然也。但先賢難辨。分明不注事。以後輩之愚慮詳之如何。若存
此儀。彼御集彌難爲證據。

大和物語云。

昔奈良ノ帝ニツカウマツリケル采女ヲ帝召テ。又モ不召ケ
レハ。心ウカリテ夜ヒソカニ出テ。サルサハノ池ニ身ヲナケ
テケリ。帝キコシメシテ歌ヨミタマヒケル。

人丸

わきもこかねくたれ髪を猿澤の池の玉藻とみるそ悲しき
帝。

猿澤の池もつらしなわきもこか玉藻かつかは水そひなまし
同帝龍田川ニ紅葉面白チ御覽シケルニ。

人丸

龍田川もみち葉流るかみなみの御室の山に時雨ふるらし
帝。

龍田川紅葉みたれて流るめりわたらは錦なかや絶なん

同帝イハテト云鷹サウシナヒテ。

イハテチモフソイフニマサレル

奈良ノ帝長谷ニオハシケルトギ。嵯峨帝坊ニチハスルニダ

テマツリタマフ。

み

みな人のそのかしめつる藤袴君かためにとけふそ折つる
返事。

折人のこゝろのまゝに藤袴うへ色深くにほひたりけり

次第如此。今案ニ。三反ハ同帝ト書之。其後更奈良帝ト書也。各別帝ト見。ハテノ蘭ノ歌ハ無疑大同帝歌也。嵯峨帝坊ノ時之故也。初三首者以往ノ奈良帝也。人丸相伴之故也。然則兩帝之儀相叶古今之意趣。(是三)又采女ノ身ナクル事。大同帝ノ時ナラハ此京也。而夜偷出テ大和ノ猿澤池マテ不可行。此京豈無大河哉。以之思之。伴帝非大同朝也。(是四)已上理四。然則號奈良帝。非一人之趣明白也。仍所存愚慮之。以往奈良帝ハ聖武天皇也。多其理歟。如日本紀。彼御時繼體興廢。又歌人有其數。萬葉ニ多ハ載此時歌。就中天平元年二月十四日奏諸歌之由見同記。(是一)或書云。猿澤池ニ身ナケタル采女。アメノ帝ノ御時也云々。一名號天顰國押開豐櫻彦天皇。此故ニアメノミカトト云。又平城宮ニ御故。一名テ稱奈良帝歟。(是二)

難者云。如古今日錄。號天帝天智天皇也如何。答云。伴帝一名號天命開別天皇之故也。雖然於伴帝一切不御平城宮。近江大津朝也。以同號用兩帝事。以之可知歟。奈良帝御集。御堂行幸後朝之御製。此又東大寺歟。大同帝御願不聞。(是三)已上理三。難者云。如皇代記。於平城天皇注ニ奈良之號有。至聖武無其註如何。答云。如此號或註書籍。或傳世俗。天智天皇俗ニ雖號近江帝。不注皇代記。圓融院時人雖稱仁和帝。又不

注同記。伴號見實方集。

萬葉集第二卷云。

柿本朝臣人麿在石見國臨死時自傷作歌一首

から山の岩ねしにける我をかもしらすて妹か待つゝあらん
柿本人麿死時妻依羅娘于作歌二首

けふくゝと我待君はいわ代に交りてありといはさめやは
只にあはゝあひもかねてん石川に雲立渡るみつゝ忍はむ
丹比真人 撰柿本人麿之意報歌一首

あら波に寄くるたまを枕にてわれこゝなりと誰かつけ南
今案。此卷大略時代年號之次第ヲ立歟。而此歌等藤原宮御宇
天皇代之次。寧樂宮和銅四年并靈龜元年秋九月歌等之前ニ
アリ。若人丸和銅以前ニ死歟。但聖武御時見在之由疑也。不
可信受。隨此卷時代前後有相違。難爲證據。唯爲疑所註出也。
同集第十五卷云。

天平八年丙子夏六月。遣使新羅國へ。使人等各悲別贈答。
及海路之上勸旅陳思作歌。并當所誦詠古歌一百廿五首云々。
此中多有入丸歌。但不註其名。所謂

七夕仰觀天漢各陳所思作歌

年にありて一夜妹にあふ七夕の我にまさりて思ふらんやも
此歌大使歌之次ニ有。

夕されば秋風寒み我せこかときあらひ衣ゆきて早きん

是又如拾遺集人丸歌也。詞書モロコシニ使ニマカリケル時ヨメル云々。已上到筑紫歌也。以之思之。人丸和銅以前死去之儀難指南耳。

追考。遣唐使大伴宿禰作手麿記云。日本大使山城史生上道人丸。副使陸奥介從五位下至平人丸云々。件使等天平勝寶元年四月四年進發。同二年九月廿四日歸着紀伊國云々。又人丸集ニ有入唐之由歌也。若此人丸歟。但異姓歟。又各詠歌之處。無人丸歌。若同名入歟。

一撰萬葉集或稱大同朝疑桓武時事古今序云々。

カ、リケルサキノ歌ヲ合セテナン萬葉集トナツケラレケル。カノトキヨリコノカタ。トシハモ、トセアマリ。ヨハトツキニナンナリニケル。所謂。

桓武廿四。平城四。嵯峨十四。淳和十。

仁明十七。文德八。清和十八。陽成八。

光孝三。字多十。醍醐八。(昌泰三年。延喜五年。今年也。)

案之。計之法多ハ取始テ棄今。而既有十代之字。相當桓武歟。(是一。)大同朝即位之間纔四年。宛如電光。仙院之後又有事。不安穩。豈有撰集之興哉。(是二。)

貞觀御時。萬葉集ハイツホトニエラハレタルソト、ハレケ

レハヨメル

文屋有季

神無月時雨降おけるならのはのならの都のふるとそこれ案之。大同帝ハ平安宮御宇也。於此京撰ル集ヲ奈良ノミヤコノフルコト、イハム。コレ如何。(是三。)

已上理三。

難者云。如古今眞名序ハ。平城天子詔侍臣撰萬葉ト書如何。答云。此平城天子ハ桓武若ハ聖武等也。更非大同之朝。如今序ハ時歷十代。數過百年云々。然者當桓武。而多其疑。

一彼集ニ寶字三年以後之年號不載。一家持延暦二年任中納言者也。而公卿之時歌不載。就中桓武作歌之由無所見。予案之。聖武之撰歟。多其理。一如古今序。人丸同時奈良御時被撰之由見。一天平元年正月十四日奏諸歌之由。見皇代記。一能令作歌云々。至十代文ハ以若過若減皆存大數之儀。棄餘取十代歟。

考物云。猶聖武撰也。古今序十代百年。文選序模書之歟。件序云。時更七代。數逾千祀云々。然而實七代不過云々。又千歌廿卷書千九十九首也。人丸既没。和歌不在斯。是文選文王雖没。得在此乎摸也。

右管見之所及。粗勘錄之。抑如書鐫者人麿者聖武之臣。萬葉者同帝之撰歟。於大同之儀者。指證據不見者也。但纔守一隅之士。難決萬代之疑。恐以勘文勿爲指南矣。以勘。

仁平三年月日

前和歌得業生山邊宿禰上

家持所歷官位

天平、年任內舍人。十七年正月從五位下。十八年丙戌三月少輔。六月越中守。廿一年四月從五位上。天平勝寶六年甲午四月兵部少輔。十一月爲山陰道使。天平寶字二年戊戌六月因轉守。六年正月兵部大輔。八年正月薩摩守。神護景雲元年八月太宰大貳。四年六月民部大輔。九月左中辨中務大輔。寶龜元年十月正五位下。三年二月式部權大輔。五年三月相摸守。九月有京大夫。六年十一月左衛門督。七年三月伊勢守。八年正月從四位上。九年正月正四位下。十一年二月參議。九月有太辨。天應元年四月春宮大夫。六月左大辨。(大夫如元。)十一月十三日從三位。延暦元年閏正月。坐水上川繼反事。先移京外。四月有詔有罪。復參議春宮大夫。同六月以本官出爲陸奥出羽按察使鎮守府將軍。在任不幾。七月十九日任中納言。(大夫如元。)三年二月任持節征東將軍。四年八月薨。後廿余日其屍未葬。大伴繼人直良等殺中納言藤原川繼。事發覺下獄。按驗之事連家持。由是迴除名。

古今集 和歌千九十九首 此中長歌五首。

延喜五年四月十八日。令友則貫之朝恒忠峯等撰之云々。撰和歌所內御書所也。此集宣下并奏覽之年月不審。如假名序。延喜五年四月十八日仰其々等。不入萬葉集歌令奉古新云々。此日之宣下歟。如真名序。延喜五年四月十五日。臣貫之等謹序

云々。如此々日奏覽歟云々。

真名序。或說ニハ。假名序ヲ感歎シテ。淑望竊模之真名云々。或說ニハ。爲書假名序。先令淑望書土代之草也云々。予案之。件序實ハ紀家錄云々。淑望竊模之儀相違也。非大事。何可假職聞之筆談。土代之儀ナラハ。件序模假名筆之許也。就中歌仙之得失ヲ註之條。似貫之所爲。重案之。貫之カ先以假名書土代。令書真名序歟。而假名序流布之條有疑。基俊本ニソ初ニ書真名序。奥ニ假名序ヲ書テ侍シ。若有所存歟。又陽明門院御本(延喜御本云々)。無序。若可有序否之儀ニテ。兩樣雖書序。遂ニ上奏本ニ不載序歟。而後日各書加之歟。但仲實之撰如目錄。後日令上奏也。而延喜七年大井行幸歌二首。同十三年亭子院歌合歌二首在此集。件歌等諸本ニ無相違。猶以不審。

抑貫之集云。延喜御時ヤマトウタシレル人々チメシテ。昔今歌ヲ令テ奉。承香殿ノ東ナル所ニテ令撰給。初日ノ夜暮マテトカクイフ間ニ。御前ノ梅木ニ郭公ノ鳴チ。四月六日ナレハメツラシカリタマヒテ。召出テ歌令讀給フニ奉歟。

こと夏はいかゞ鳴けん郭公この暮ばかりあやしきはなし是雖無年號。叶四月十八日之儀。但六日ハ書寫之失歟。十八日ト六日之字ト相似可誤。魯魚章草之誤是也。一證也。方々難決斷云々。予談會顯廣。或人之次以問此事。答。先年相尋

基俊君之處。答云。延喜五年四月十八日上奏日也。序ハ貫之以假名書土代。令淑望草者也。而共依有與不棄。假名序又上奏以後歌入之條。貫之不堪優美追入之也。仍奏覽本ニハ無件歌等云々。予重問云。會釋尤可然。但不審有二。一者上奏本之流自世間。不見。何可然。次ニ不堪優美追入秀歌ハ。同亭子院歌合。貫之カ櫻散歌可入之。答云。件歌ハ古今集ニ承均法師。櫻散花ノ所ハ春ナカラト云歌ニ同意也。仍不可入之歟。今予重云。此儀ナラハ新撰集ニ入件兩歌之條如何。答云。於件條不及力云々。新撰集貫之一人シテ撰玄中之玄也。而不入古今歌ヲ多以入之。貫之カ意ニ存秀逸之由歟。然者件歌等追可入之。此儀猶以難指南歟。

追按。此事猶基俊義宜歟。能因家集序云。如彼天曆以往三代之明主。降勅恢茲道。四人歌仙奉詔獻家集。是以王道敷肱之臣。訪於衆心揀詞。儒林河漢之才。以刊卷首而類序云々。如此用眞名序歟。然者又上奏日四月十八日之由顯然也。又撰後歌出入事非無例。後中書王月歌。(ヨニフレハ)雖入金玉集。宮薨去後納言出之云々。撰集之習歟。但宣旨ノ集私進止如何。櫻散之歌ヲ不迫入。自歌之故歟。

古今證本陽明門院御本。(貫之自筆。)是延喜御本相傳也。後顯綱朝臣申賜。其後轉々シテ於故公信朝臣許燒失之。此本無序也。小野皇太后宮御本(貫之自筆假名序也。)於宮燒失之。

以件本之流通宗朝臣自筆本是也。其由被書表紙。

花蘭左府御本。(貫之妹自筆假名序。)是閑院贈太政大臣本轉々來云云。所令進新院也。其後不書。是等本皆無相違。異普通本歟。此集萬葉集歌少々載。又家持。猿丸太夫集歌多以入之。稱讀人不知。又大江佐國。藤原仲實等各取目錄。而仲實目錄有訛謬歟。彼集號奈良帝聖武御製也。年三首注大同朝御製。於一首(古里ト成ニシ奈良ノ都ニモ。)大同トモ可疑。至龍田川歌。人丸已進和。定聖武御製也。人丸死去歌載萬葉。隨年紀玄隔。不可遇大同朝。古今ニモ二首ハ歌後ニ註其名。(古里歌ハ)先註其名似分別。

後撰集和歌 千三百九十六首

天曆五年十月日。詔坂上望城。源順。紀時文。大中臣能宣。清原元輔等。於昭陽令令讀解萬葉集之次令撰之。(號梨臺五人也。)一條攝政爲藏人少將之時。爲此所之別當。(有奉行文。)于時有平兼盛。而不入此中。不審云々。此集未定ニテ止之云々。仍本無四度計。但證本ハ朱雀院榮籙本。又青表紙云々。(是ハ範永本也。)佐國取目錄。不審有少々。就中以兼盛歌稱兼寬王歌。

即。

けふよりは萩の燒原かきわけて若菜つみにと誰を誘はん又云。

雨やまぬ軒のした水敷しらすこひしきことの増るころ哉
前歌ハ大和物語ニ兼盛歌トテアリ。後歌ハ在彼家集。而此集
ニ或本ニハ兼盛。或本ニハ兼覽大君トハ書。是和議之人直
歟。凡書ノ僻事ハ荒涼ニ不可直云々。兼盛ハ本ハ以源氏爲大
君。而天曆曰之歸本姓云々。爵叙云々。凡兼盛家集歌多入此
集。而或有讀人不知。尤不審。

所謂

きみまつのはにかゝるなりけり

山ふかみ消せぬ雪のかなしきは

又云。

わするとは恨さるなんはしたかの

又云。

難波渦みきはのあしのおひしより

又云。

遠近の人めまれなる山さとに

家ゐせんとは思ひきや君

是等類也。

凡如此事撰集癖歟。

拾遺抄ニハ中務歌(うくひすの聲なかりせは雪消ぬ)

輔親歌アシヒキノヤマホト、キスサトナレテ

於有讀人不知。皆是無疑作歌也。越度歟。近代集ニモ多有之。

又此集有不審。總部第三業平歌云々。

よひのまにはや愿めよいその上ふりにし事も打拂ふへく
返事。

わたつみとあれにしとは今更にはらはむ袖や泡に消なむ
此歌ノ詞如伊勢集。カクテミヤストコロナヤマセタマヒケ
レハ。アツマリテ候ニ。紀伊藏人トイフテ。コノハシメノチ
トコ。アカラサマニシモノオリコ。物イハントイハセタレ
ハ。カヘリコトニ。コ、ロチシハシナクサメトイフ。古事
ノハシチナムイヒタリケルト云々。予按之。此始男トイフハ
如集ハ仲平也。御息所ハ七條后也。若仲平チ書誤歟。但終撰
之時仲平大臣也。雖不可書名。和議之人所爲。又業平元慶四
年卒云々。七條后仁和四年十月六日入内。如此時代相違。凡
業平會合伊勢事有疑。

伊勢集伊勢物語有一首。

大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる浪哉

又業平集歌有三首。皆後撰歌也。所謂。

いせの海にうかふあまともなりにしか

たのめつゝあはてとしふるいつばりに

よひのまにはやなくさめよ

是等也。但此歌等無伊勢物語。業平集并後撰之失歟。又タノ

メツ、ノ歌ハ在古今集。躬恒歌云々。

又有増基法師云物。而註菴主々ハ玄々集ニ入者也。永延以後

人數。付中伴歌(カミナツキシクレハカリナミニソヘテ)無

菴主日記。尤不審。彼後撰ノ作者ノ増基ハ。若大和物語ニ侍

増基君歟。件人ハ殿上法師云々。

拾遺集和歌 千三百五十一首

同抄和歌 五百八十六首或四

花山院勅撰云々。

此集中ニ源順和萬葉集歌ト云物アリ。或萬葉ノ古語ヲ翻和ニナセルナリ云々。或萬葉歌ヲ爲本歌詠返歌也。予案之。返歌之儀歟。一ハ藤經衡和後撰歌ト云物アリ。後撰ノ中ニ優歌ヲ百首計書出。其返歌ヲ詠也。以之思之。彼順カ所爲ヲ模倣。一ハ萬葉集ニ是ヲ和タルトミユル歌ナシ。是ヲ返タルト見歌聞々アリ。

所謂 順和萬葉云。

思ふとも心の内をしらぬ身はしぬ計にもあらしと思ふ
萬葉云。

朝霧のほのに逢みし人ゆへにいのちしぬへく戀わたる哉
戀しなん後は何せんいけるみの爲社人は見まくほしけれ
順歌云。

獨ぬる宿には月のみへさらは戀しきとのかすはまさらし
萬葉云。

玉たれのこすのまとおり獨ゐてみるしるしなき夕月夜哉
増鏡あきよき月のうつろへは思はやまでこひこそまさされ
順歌云。

涙川そこのみくつと成はてゝ戀しきせゝに流れこそすれ
萬葉云。

わきもこか我をゝくると白妙の袖ひつ迄になきし思ほゆ
思出てねをばなく共いちしるく人のしるへく嘆さすな夢
是等ノ類也。追勸順和尋出所見也。

本歌 君こふる涙の床にみちぬればみをつくしとそ我は成ぬる
和 涙川底のみくつと成はてゝ戀しきせゝに流れこそすれ
本歌 ひとりぬる宿の隅よりいつる月泪のゆかにかけそつく
獨ぬるやとには月の見えさらは戀しきとの數はまさらし

件歌等經衡力和後選歌ト書マセタリ。又本歌等非萬葉歌。少
以有不審。但於和歌者無相違。爲之如何。

此集不避新選集歌。又有目錄。佐國還有失錯。以輔尹註佐忠。
(ワレヒトリコシノヤマチチコシカトモ) 御堂御屏風歌也。
作者稱輔尹。隨在家集。又佐忠ハ天曆御時人也。佐國雖廣才
者。暗和歌道故歟。

後拾遺抄和歌

通俊卿一人遇之。如序承保之比奉之。應德三年九月十六日奏
之。其間及十有年奏覽之。件本欲令伊房割清書之處。件人歌
唯入一首之故。腹立不書之。仍令若狭周家澄源書寫之云々。
證本號黑本。燒表紙之故云々。扶持者澄源并佐國等也。予時

有經々信區房者。此道之美才先達也。不奉之如何。但或人云。

私選之後ニ取御氣色云々。于時有難後拾遺ト云物。世以稱經信之所爲。通俊見之云々。先以件集内々令見合彼卿之處。神妙之由侍。而後日有此難。更不誤云々。此集流布之後。更被直之由。見目錄序。又如序古今後選之作者歌ヲ不入之。無盛歌入之。是後撰作者也。但非失錯歟。彼人拾遺集以後猶存生者也。仍秀歌多作之。故竊入之歟。

此集拾遺集并玄々集歌等少々載之。失錯歟。有目錄。即禮部之撰也。

金葉集和歌 六百五十四首（此外連歌十六首。但流布不定也。）

白川院御讓位之末。俊賴朝臣一人奉 院宣撰之。天治元年月日奉之。大治元二年之間上奏之。此集本不定也。奏覽之處兩度返却。第三度之度。以中書草案先覽之。而件本無左右納畢。仍撰者許ニ無此本云々。件本在故待賢門院。而今前大相國中出書寫之。無餘所云々。件本兼盛能宣歌并玄々集拾遺集歌等入之。拾遺ハ柄ニ成テ稱弄置之由入之也。最前歌貫之カ吉野山峯ノ白雪何消テノ歌也。世間ニ流布本ハ第二度本也。近代人歌等也。最前故將作打藤歌也。奏覽本造紙云々。自筆書之云々。時有甚俊者。兼和漢尤仍撰者。雖然不奉之。若爲御不請之者故歟。

詞花集之和歌 四百九首

新院御讓位之後。故左京一人撰之。天養元年六月二日奉之。奏覽之。御覽之後以給。御製少々。并藤範綱。賴俊。同盛經等歌被除。予爲御使持參彼亭。奏覽本ハ布目色紙草紙自筆也。金葉集付流布本。第三度本歌不除之。件本無知人之故也。

宣下狀云。

被 院宣云。白中古以來。不入勅撰集之外和歌等。宜被撰集者。仍執達如件。教長謹言。

六月二日

參議教長奉

謹上左京大夫殿

抑超祖父并嚴閣被奉撰集。希有事也。此集爲體。及末代無歌仙。隨金葉撰以後年序不幾。爲之如何。予于時不快。而令奉

此集之後有恩免。是爲扶持歟。而諸問事所存披陳。其後有不請之氣。一切不令見合給奏覽之。卿有仰下事。爲御使持參彼集之間。何見之處。古歌有其數。乍恐申其由。其時被除之。不見合給之條。世以爲不敵耳。

伊勢物語

和歌二百五十首（但本々不當。）

業平朝臣所爲也。偏非彼人作歌耳。古今之間歌有與之書歌歟。又不論自佗。隨便同人歌樣書列之。若是密事ナ令混之故歟。万葉集多入之。又其名目有二義。有密事之故。爲構僻事之由。號伊勢物語。諺ニ伊勢ハ僻ト云故也。一ニハ齋宮事ヲ爲

詮。故號伊勢。是正義歟。泉式部本以齋官事最先書。

大和物語 和歌二百七十首（此中連歌三首。但本々不同。）

作者不審。先崇睿院御時天曆始事歟。先帝延喜御宇也。大キオホイモウチキミト號ハ貞信公也。有兼盛并檜垣廻等歌也。又其名日和語由歟。有古今集歌等少々。

六帖 和歌四千六百九十六首（此中長歌九首。旋頭歌十七首。但本本不定也。）

貫之女子所爲之。故號紀家六帖。兼盛重之等歌載之。

撰集之後。又集出來事流例也。古今集之後。貫之一人奉之。撰新撰集。是玄々中玄三百六十首云々。古今集之外歌多入之。于茲知。古今偏非貫之一人之進止歟。件集未撰終間。延喜八年正月任土佐守。即赴任。承平五年上洛之時。延喜崩御云々。件序云。貫之俟罷飯口。將以上獻。橋山晚松。愁雲之影已結。湘濱秋竹。悲風之聲忽幽。傳勅之納言亦已薨逝云々。此納言如補任若兼輔卿歟。

後撰未定云々。

拾遺集之後有抄。集中妙詞歟。是又勅撰也。

後拾遺有續。新撰編集中歌也。一人撰集尤有其理。

金葉集之後。真玉集出來。顯仲入道撰之。同除彼集。

（此脫歟）

詞花集之後。拾遺古今出來。教長入道撰之。同除彼集歌。予按之。撰集無私事。難且譏者不實事也。何次必如此撰玄之玄歟。

傍人之所爲別事也。

撰集秀歌漏常事也。惡歌入又不可勝計歟。貫之櫻散歌不入古今并後撰。而四條大納言爲貫之第一秀歌。但梨壺五人誤哉如何。

後拾遺究竟歌三首漏。所謂堀川右府歌。

春雨にぬれてたつねん山櫻雲のかへしのあらしもそふく
隆經朝臣歌。

引駒の數よりほかにみえつるは關の清水の影にそ有ける
兼方朝臣。

去年みしに色もかはらず咲にけり花社物は思はさりけれ
是也。又金葉集三首漏。所謂江帥歌。

こほりゐししかの辛崎打とけてさゝ浪よする春風そ吹く
故將作歌。

我戀はよし野の山のおくなれや思われともあふ人もなし
師俊卿歌。

播磨ちやすまの關屋の板ひさし月もれとてやまはら成覽
此歌ハ播磨チノニクシ。ハリマカタト改テ入ヨト被申ケル
ナ。作者然者不可入云々。仍不入之。予按之。カタハ尤神妙。
タ、シチニテモ不可除之。相互コハキ事也。

拾遺撰之時。公任卿チルモミチハナキヌ人ソナキト云歌チ
ハ。花山院モミチノニシキ、ヌ人ソナキト直テ可入之由有

御定。不可然之由被申ケレハ。如本ニテコソ被入タルニ。近代之人諸事如此。又凡歌善惡昔ヨリ難辨事也。シカレハ四條大納言様々書ヲ撰ルニ。以或歌ハ入之。以或歌入彼。就中自作ハ善惡尤難辨事也。上手モ然歟。俊賴朝臣吾詠歌中稱秀歌和歌卅首計ヲ書出。其中不甘心歌多人之。秀歌又多不入之。文時三位ハ菊是草中仙ト云題之時。存不作得之由。蒙衣伏所。保胤來云。今度御作如何。答。力不及。不得度也云々。而草案ヲ見。蓬萊洞月照霜中。有此句。保胤云。已秀句。作不得之由如何。仍用此句。世以稱秀逸云。

一 諸集人名不審

萬葉集

萬一 明日香河原御宇。(皇極也。)

萬一

泊瀬朝倉御宇。(雄略天皇。)

同 高市岡本御宇。(舒明天皇。)

同

近江大津御宇。(號天智天皇。)

又號中大兄王。萬一中大兄近江宮御宇天皇。)

同 明日香清御原御宇。(天武天皇。)

同

後岡本御宇。(齋命天皇。)

々 極重祚也。)

同 藤原御宇。(持統天皇。)

萬一

先太上天皇。(日本根子高瑞男清足

天皇也。)

萬一

大元元

太上天皇。(持統天皇。大化三年讓位於輕皇太子。)

人。(明日香清御原御宇天皇之夫人。字曰大原大刀自。即新山

部皇子母。)

輕皇子。(文武天皇也。)

萬一

同 間皇女。(元明天皇

也。)

萬五

同 門部王。(後賜姓。大原真人氏也。)

大原真人氏也。)

春日王。(志貴皇子之子。母曰多親皇女也。)

境部王。(穗積親王子。)

廣井王。(志貴親王子。)

海上女王。(志貴皇子之女。)

酒人女王。(穗積皇子之孫女也。)

繼女王。(六人部王之女。母曰中戒皇女。)

高田女王。(高安之

女。)

賀茂女王。(長屋王女。母曰阿部朝臣也。)

廣河女。(穗

積皇子孫女。上道王之女也。)

左大臣諸兄。余明軍。(大納言卿之資人。或人云。萬葉二自

明ト云ハマロアキトヨムト云々。而件名不見。若是人歟。)

藤原朝臣ハ東。(或書云。ハ東改名。後眞栢ト云々。房前第三

子也。)

石河朝臣廣成。(後賜姓。高向朝臣氏也。)

大伴宿禰奈磨。(佐保大納言第二子也。)

丹比真人乙磨。(戶主真人第二子。)

野氏宿奈磨。(萬五梅花歌卅二首作者中。大令史野氏宿奈磨。天平二年正月事也。)

田氏肥人。(同五梅花卅二首歌作者中。少令史田氏肥人。)

磯氏乘磨。(同所陰陽師磯氏法磨。乘法通歟。)

志氏大道。(同所軍師志氏大道。)

榎氏鉢磨。(同大隅目榎氏鉢磨。)

村氏彼方。(同壹岐目村氏彼方。)

小野氏淡理。沙彌滿露。(造筑紫觀音寺別當。俗姓笠朝臣麻呂也。)

辨基。(春日藏

首。老法師名也。）

大伴佐保大宅也
石河女郎。(字曰大名兒。) 筑紫娘女。

(字曰兒鳥。)

大伴郎女。(今城王之母也。伴王後賜姓大原真人。)(萬廿。

上總國大豫正六位上大原真人今城云々。萬四。大伴郎女和歌

四首。右郎女者佐保大納言卿之女也。初嫁一品穗積皇子。被

寵無儔。而皇子薨之後。時藤原曆大夫聘之郎女焉。郎女家於

坂上。仍族氏號曰坂上郎女也。)

紀女郎。(名小廉也。鹿人大夫之女。大貴王妻。)

田村大嬢。(右大辨大伴奈磨卿女也。號里名。)

(右田村大嬢并是右大辨大伴宿奈磨卿之女也。卿居田村里。

號曰田村大嬢。但妹坂上大嬢者母居坂上里。仍曰坂上大嬢。

予姉妹諮問。以歌贈答。)

坂上大嬢。(右大辨大伴奈磨卿之女也。號里名。)(ハネス
唐棣(第七

卷云。草歌中以唐棣號月草。)

已上傳師說事詳注之。

古今集

源宗子。ホトコス 源忠。ホトコス 源實。ナカキ 平中興。

宮道潔興。キヨキ 藤勝臣。難波萬男。

菅野忠臣。下野雄宗。(式部大輔範永ハ古物ニ女子名也。メ

ツラシト云如何。)(ウツク
寵。(或說テリ。女房名也。)

小野小町。(如壯衰形傳者。其姓玉造氏也。小野ハ若住所名

歟。且或人云。伴傳弘法大師所作云。小野ハ貞觀之比人也。ハ
壯衰俗人歟。)

移撰集

敦實親王。ミチノリ 源廣明。トノフ 源等。スグル 源俊。スグル

源宗城。ミナモト 藤時雨。トキメ 源善。タカ 藤雅正。タカ

藤清正。フジキヨ 源濟。ミナモト 源浮。ミナモト 藤守正。

源賴。ミナモト 宇多女五宮。(號聖宮。)(小野遠興(女イ

拾遺抄

藤長能。フジナガ 平公城。ヘイキ 藤信巨。フジノリ 藤惟成。フジタカ

源巨城。ミナモト 藤國茂。(仲文本名歟。見家集。)(藤輔尹。

後拾遺

藤義忠。フジタカ 大江公實。オホエ 坂上望城。サカノ 藤純理。フジタカ

藤惟規。フジタカ 菅原爲言。ミナモト 藤義孝。(伊勢。)(橋資成。ハシ

坂上定成。サカノ 藤隆資。フジタカ 藤尙忠。フジタカ 藤孝善。

涼。フジタカ 橘爲義。

涼ハ女房名也。通俊卿自歎曰。古今集ノ女寵。向後人定訓ニ

迷テ唯稱涼歟云々。

一雜談

後拾遺ハ末代規模集也。雖然彼時ハ有種々誹謗云々。先序別

樣云々。次賴綱歌無指事多入之云云。予按之。不當也。件人歌

四首也。皆以深肝膽。是尊耳卑目之誤歟。又號小鰻集。

兼方參彼卿亭。花コソノ歌ヲ入撰真中詩。禮部云。コソト云字不快也云々。兼方起座。於侍中云。此殿ハヤムコトナキ人ト思奉ニ。物不覺給人ニコソ。四條大納言ノ第一ノ秀歌ニ。花コソヤトノアルシナリケレトイフ歌ハ不知給ヤトテ退出云々。仍付此名。住吉神主國基歌多入之由故云々。

又難後拾遺ト云物アリ。世以稱經信卿之所爲。而近年俊賴朝臣ノ息子尙俊惠相語云。吾妹女房逝去之後。彼遺物ヲ開見之處。故頭遺草少々。其中有件難後拾遺之章案。故頭之手跡也。若彼所爲歟云々。予按之。若以帥口狀執筆之間草歟。金葉集之時有種々異名。其中臂突アルシ第一名云々。是李部五品盛經之所付也。撰集ノ私昔ヨリ有事歟。四條大納言中書王御歌(ヨニフレハモノオモフトシモ)存日入於金玉集。大王沒後除之。可怪之。詞花集之時。如此名不開歟。但詞花ノ詞字音渡死音。有禁忌之由或人中。餘ノ難歟。金葉名予心中ニ傾思。其故ハ白伺見之處。佛欲入涅槃之時。先世間ニ金葉花雨云々。以之思之。金葉ノ世間ニ流布不吉歟。而此集之後。無程白河院崩御。撰者又逝去。

鳥守遠高云。古今後撰拾遺等ヲ號三代集。拾遺ハ花山院御撰也。而花山院以往之大嘗會ノ御調度ニ有三代集ノ御手寫如何。予云。不知。此事尤有興。件事如何。鳥守答云。祕事也。以往ハ相加萬葉集號三代集。而拾遺出來之後。棄萬葉用拾遺云

々。

歌合事

或物云。宇治殿下被仰云。齋宮女御歌合。左右歌忠見一人讀之云々。予見彼家集實也。左料右料共ニ讀之。又同女御天曆十年歌合。(號廣景殿女御歌合。)左歌ハ饒盛。右歌中務各一人讀之云々。

卅講歌合時。相摸所詠云。

五月雨はみつのみ牧のま菰草刈ほすひまもあらしと思此歌謠出之時。殿中鼓動及郭外云々。

江記云。俊兼曰。先年土御門右府大納言時歌合。棟仲爲講師。而有露被譽之由歌。敵方難之。棟仲當坐都古萬葉集讀宜證歌一首云々。右府後日被感曰。當坐讀宜歌之旨。雖似據對。至虛言者無便事也云々。

都芳門院根合時。江記云。右中辨師賴曰。尾張守許孝善來向所。國基(住吉神主。歌未見之前破却。可入孝善歌之由申請所入云々。)彼時左右相挑之間爲歌々。匡房卿云。右大辨通俊歌。至予者不可被挑。先年書狀今猶有之。其書云。和歌之道雖能宜忠孝不可忍之。於貴殿者深所恐中也者。件書狀爲明鏡。何可忘彼書哉。俊兼聞之大咲云々。件歌合左方人以中納言中將(今入道殿下。)爲言曰无心云々。隨殿下頗令制止給。少年之人不知和歌案內。何爲殿上人々言口哉。就中累葉風无此例

云々。(已上見江記。)

和歌者人ノ心々也。定賴卿問四條大納言云。式部亦染何勝歌讀候哉。答云。非一口之論。式部ハコヤトモ人ノイフヘキニトイフ歌ヨム者也云々。定賴云。式部歌ニハ。ハルカニテラセ山ノハノ月ヲコソ世以稱秀歌之如何。答不知案内也。クラキヨリクラキミチハ經文也。イカテオモヒヨリケントモ不可思。末ノハルカニテラセハ。彼ニ被引テ出來レル詞也。コヤトモ人ヲトイヒチキテ。末ニヒマコソナケルトヨムハ。凡夫ノ可思寄事ニ非スト云々。而江記云。良暹云。式部亦染共以歌仙也。但赤染驪司殿御屏風歌十二首中十首ハ秀歌。又賀陽院歌合時多秀歌。如屏風ハ式部不可及彼人云々。予案之。仰可信大納言之說。何付良暹之儀哉。但說ニモ如歌合ハ亦染髓歌讀也。又式部歌不入度々歌合。所謂花山院并長元等也。但長元歌合時。有中宮亮爲善。權亮兼房。大進義通。藏人橘季通。源賴家。平經章。此輩歌不入云々。同六年白河院子日ニ義忠則長等爲召人。範永賴家ハ爲役人。但賴家ハ六位時也。範永不入之如何。古ハ能被執事歟。近代豈然乎。承曆歌合時。俊賴。殿上人。基俊。國基。輔弘。周防内侍。伯母等歌不入之。又通宗ハ依爲歌仙。此度廳昇殿不入之。後番繰一首入之云々。根合時亦復如此。經信顯綱等歌不入之。經信卿云。凡不讀今度歌云々。

古今集之時。有公忠并祭主賴基等不入之。雖然末代被知名事倍於入輩。賴基ハ後撰ニ又不入之。譏拾遺抄ニ一首也。少不堪歟。(ヒトフシニチヨヲコメタルツエナレハツクトモツキシキミカヨハヒハ)異本書入之。

後拾遺時有俊賴某俊不入之。金葉集之時。大判事明兼不入シテ墮立。俊賴朝臣許に來云。不入今度集。不可歟遺恨。貴殿遇後拾遺之時。而不入之給カトモ。今日ハ奉撰集給。明兼モ後集ニ能入事モ候ナント云々。其後詞花集時一首入云々。落宿執了。伴人姓中原也。而撰集之度返本姓。坂上是則苗裔之故尊其姓也。有興之。予金葉詞花兩度之撰。逢千歲一遇空過之。遺恨第一也。初ハ幼少。後ハ撰集者之子息之歌無入之例云々。大愁也。曾祖父隆經朝臣後拾遺作者。將作又入之。故左京金葉集作者。四代之筆表。至予之時闕之。遺恨云々。

素意ハ紀伊守重經也。號紀伊入道。此一宮紀伊ノ夫也。騎馬ニテ楠葉ノ御牧ノ政所前ハ過ニ。下人出來告之云。無止事御牧ヲ不下馬テ過ハ何物ソ。入道云。紀伊入道素意。後拾遺ノ作者ニハアラスヤト云々。下人無答シテ令過之云々。

右衛門尉孝善ハ號青衛門。色青之故也。少有嗚呼氣之人。平絲之時ハチノレハ撰集ノ作者也。如此不可申云々。古今優稱事歟。

從昔執道ハ有興事也。是能於花山院詠三月盡歌云。

心うき年にも有哉はつか餘こゝのかといふに春の暮ぬる此歌講時。四條大納言春ハ卅日ヤハアルト云々。長能此後痛此事テ伏病。聞万死一生之由テ。彼大納言以使訪之。返事云。畏承了。此病^非別言。先日春ハ卅日ヤハ有ト仰候シ。ハ、ウク思給テ歎之間。不食ニ成テ已今明爲罷云々。其後遂以死去。大納言大被歎云々。執人事荒涼ニ不可難歟。

以言詩云。文峯按轡自駒景。詞海騰船紅葉聲。是以言與齊名被試之日所作也。本ハ駒過景葉落聲ト作云々。而先覽後中書王之處。被仰白字^テ要由。仍改作云々。齊名以爲怨稱曰。泉手懸片手。何計云々。齊名臨終被訪。御報云。恩問旨恐悚千廻。但白字事不忘却云々。是見江記。

帥大納言取後に喚俊賴竊云。在古今。松秋風^ナクカラニトイフ歌。任大臣テ大饗セム日。吾所詠ノヲキツ風ノ歌。中門内ニ入テ史生^{大臣也}之饗ニ着哉如何云々。俊賴答云。此仰如何。彼御歌ハ全不可劣者也。雖然依爲古今歌。有限先任大臣候ハンニ。御作ハ一大納言ニテ。爲尊者テ南階ヨリ練昇テ。對座ニ居ナントコソ存候ヘト云々。帥答云。サハサモアリナンヤ。如何カアルヘカラントテ有感氣云々。

源賴實ハ無術執此道テ。參詣住吉テ。秀歌一首令詠テ。可召命之由祈禱云々。其後於西宮テ。

木葉ちる宿は聞わく事そなき時雨するよも時雨せぬよも

ト云歌ハ讀也。當座不驚之。其後又參詣住吉。同祈禱。夢示云。秀歌ハ讀メリ。非彼落葉歌哉云々。其後秀逸之由謳歌。又其身六位之時夭亡云々。

天德歌合之時。兼盛正衣冠參陣テ終日伺候。

シノフレト色ニ出ニケリ我戀ハトイフ歌。勝畢^マトキ、テ。拜舞テ退出。自餘ノ勝負ナハ不執云々。

長元歌合ノ日。能因キヌカフリシテ竊入テ聞之。戀歌ニ。

黒髪の色もかはらぬ戀すとてつれなき人に我そおひぬるトイフ歌ヲ讀タリト思テ。勝負ヲ聞ニ參入也。而敵方ヨリ。

あふまてとせめて命のおしければ戀こそ人の命なりけれトイフ歌ヲ講出ヲ聞テ竊退出云々。非敵之由ヲ存歟。

道雅三位ハ帥大臣殿息也。八條ノ山莊ノ障子ノ繪ニ。歌合ニ令讀テ撰テ令書。作者兼房。家經。範永。經衡。賴家等也。經衡爲後生ニ難入之由ヲ存不入。甚以遺恨。人上謁也。何事之有哉。家主ニ欲獻名籍テ。撰和歌之日。懷名籍シテ參同。於寢殿テ家經ト撰之。經衡竊ニ寄テ聞之ニ。家主云。秀歌何ナ可入哉。家經云。無左右ヲレヨリサキニ人コサリケリト云々。是經衡歌也。聞之不取出名籍シテ竊飯了云々。執道有與事也。

範永朝臣若之時於通照寺詠月云。

住人もなき山里の秋のよは秋のひかりもさひしかりけり
于時四條大納言出家シテ住北山長谷。定頼卿以此和歌等送
此大納言。此歌ヲ深感謝シテ。此歌表ニ書云。範永誰人哉。和
歌得其體。範永聞此事不堪感。向定頼卿テ乞取彼愚草テ。納
錦袋爲重寶云々。此歌範永爲蔽人之時。月夜ニ定頼參内。蔽
人一兩同車シテ向通照寺。終夜遊覽之時所詠也。

鳥羽殿前裁合判者ハ堀川左府也。件日記云。匡房愚詠ノ荻歌
可有御芳心之由云々。而其座ニ忘却シテ定劣云々。但判者無
偏頗。伴歌云。(アキカセニソヨクサトノミダエスシテイッ
ラハハルノチキノヤケハラ。)右行宗歌勝。(モノコトニアキ
ノケシキハシルケレトマツミニシムハチキノウハカセ。)勝
劣玄隔歟。執之條如何。匡房歌入ハ只此許也。古ハ皆如此。
今人ハ稱嗚呼歟。行宗歌二首入。今一首ハ合公實卿論ニ又勝
云々。三宮被仰云。匡房ニ合テ勝之條。是如打藥家之顔也云
々。

於或所シテ人々歌讀ニ。右衛門尉孝善詠云。ウクヒスノハツ
チヤナニノイロナランキケハミニシムハルノアケホノ。住
吉神主國基在此座。已秀歌被讀之由チ存。不安カリテ其後不
食ニ成マ。無佗事案和歌。サテウス、ミニカクタマツサトミ
ユルカナトイフ歌ハヨムナリ。其後人々ヲ招テ出歸廓題チ

取出此歌。人々褒譽ス。仍散遣恨云々。

前大相國語曰。故東宮大夫公實爲近衛司之時。於範永山莊テ
人々と和歌ヨムニ被行向。先差酒テ出題。其間大夫殿無佗事。
額ヲ、サヘテ沈思ニ入給。範永見之云。如然之入心ナム秀歌
不可有讀。有興云々。

右ハ如此世英雄之公達諸大夫ノ山莊ニ行向哉。

元慶ハ大山別當也。筑紫ニテ詠郭公。

我々とかきねなすきて郭公いつれの里もおなしうの花
而上洛之時。於山崎邊シテ下女ノ白歌ニ唱之。元慶聞之拭淚
云々。而難後拾遺云。此歌ハ筑紫侍時。良邁吾歌トナンイフ
トキ、テ。是ハ古歌トコソ聞シカト云侍シカハ。七十法師ノ
若上ニ讀タリシカハ。古歌ト申虛言ナラスト申テ。元慶力歌
トアレハ。撰者ニ問侍シカハ。實源律師筑紫ニアリシ時。元
慶カマサシクヨメリシチミタルナリト申ハ。其由チ存也云
々。實源資通大貳ノ任ニ下向。良邁力稱吾歌事ハ其前也。良
邁歌チカキテイタセリケルニヤ。元慶ハ僻事也云々。

南院ハ海橋立也。輔親卿家也。爲見月寢殿ノ南庇チ不差云
々。懷圓カ池水ハアマノ河ニヤカヨフラント讀ハ於所テ詠
也。月明夜步行ニテ行向ヘルニ。夜フケテ人モ子タラント思
ニ。寢殿ノ南面ニ輔親一人月チミテ居テ。于時相互ニ乘興詠
此歌。曉更ニ歸ト云々。

加久夜長刀帶節信ハ數奇者也。始テ逢能因テ相互ニ有感。能因云。今日見參ノ引出物ニ可見物侍トテ。自懷中錦小袋チ取出。其中ニ鎗屑一筋アリ。示云。是ハ吾重寶也。長柄橋造之時鎗クツナリト云々。于時節信喜悅甚テ。又自懷中紙ニ裏物チ取出。開之見ニ。カレタルカヘルナリ。コレハ井堤ノカハツニ侍云々。共感歎シテ各懷之退散云々。今世人可稱嗚呼歎。源經兼下野守ニテ在國之時。或者便書ヲ持テ向國府。不叶之間。無衛之由ナントイヒテ。ハカ／＼シキ事モセス。冷然トシテ出テ一二町計行チ。更ヨヒカヘシケレハ。不便ナリトテ。可然物ナト可賜カト思テ。ナマシヒニ歸來ニ。經兼云。アレミタマヘ。ムロノヤシマハ是ナリ。ミヤコニテ人ニカタリタマヘト云々。彌腹立氣有テ出云々。

河内重如ハ號山次郎判官代下殿者也。而從吾高キ女思カケテ。腕書チカキテ自持來奉之。其狀云。

人傳はちりもやすると思ふまにわれか使に我かきたるそ女感歎シテ任身云々。

月夜ニハ河内國ヨリ毎夜ニスミノエニユキテ夜チアカスト云々。古ノ歌仙ハ皆スケルナリ。然者能因ハ人ニスキタマヘ。スキヌレハ秀歌ハヨムトソ申ケル。

能因ハ古曾部ヨリ毎年花盛ニ上洛シテ。宿大江公資カ五條東源院家云々。伴家ノ南庭ニ有櫻樹。爲翫其花云々。勸童丸

ト云童一人相從之云々。公資カ孫公仲ニハ常云。數奇給ヘ。スキヌレハ歌ハ讀トソ諷諫シケル。是公仲カ子有經所語也。能因ハ凡小食云々。兼房朝臣許ニ迎罷之間。如榮不勸。纔ニ飯ハカリチ食テ過云々。

兼房君アヤシミテ食物之時何見之處。勸童丸チ召寄テ。彼懷ヨリ紙ニツ、ミタル物ヲ取出テ加飯食之云々。如粉物云々。何等物乎云々。不審云々。

人々大原ナル所ニ遊行ニ各騎馬。而後賴朝臣カ俄ニ下馬。人々驚問之。答云。此所ハ良運カ舊房也。イカテカ不下馬哉。人々感歎シテ皆以下馬云々。是能因之先蹤歟。能因兼房車後ニ乘テ行之間。二條東洞院ニテ俄下テ數町步行。兼房驚問之。答云。伊勢御家跡也。彼御前裁結松于今侍。イカテカ乍乘可過哉云々。松木ノ末ノミユルマテ不乘車云々。

伴良運房于今在云。或僧語云。障子良運カ所書付之歌未消。

山里のかひもあるかな郭公ことしもまたて初音きゝつる此歌在後拾遺定賴卿歌ニ末同カ。何レカ先ニ詠哉。舊宅ノ下馬ハ尤可然。竹田大夫國行ト云者陸奥ニ下向之時。白川關ハクル日ハ。殊裝束ヒキツクロヒムカフト云々。人間云。何等故哉。答云。古曾部入道ノ秋風ソフク白河ノ關ト讀レタル所ヲハ。イカテカケナリニテハ過云々。殊勝事歟。

能因實ニハ不下向奥州。爲詠此歌。竊ニ籠居シテ下向奥州之

由ヲ風聞云々。二度下向之由アリ。於一度者實驥。書八十鳥記。

長元歌合之時。經信卿ハ生年十八也。爲參河權守。令兄經長卿爲藏人辨。件ノ歌合等ヲ爲評定。以經長四條大納言長谷ニ遣之。經信所望シテ乘經長車後ニ參上也。納言云。彼人何料光臨乎。經長云。爲承御評定之趣。所望テ參上之由。納言有與之由ヲ示。仍件判定詞等ヲ具以聞之云々。

經信卿歌云。

大心川岩浪たかししかたし岸の紅葉にあからめなせそ
後拾遺ニ入之。而經信故禮部ニ乞請テ出之。無下ノ弃歌也。
爲後見有耻。枉テ可止云々。仍除之。而後年俊賴朝臣入金葉集如何。

江記云。往年有六人黨。範永。棟仲。賴實。兼長。經衡。賴家等也。至賴家者彼黨頗思低之。範永曰。兼長常有到佳境之疑。
(此經衡所怒也。)

又云。俊兼曰。賴家又稱此由。爲仲後年自奥州送歌於賴家。件歌心所遺之人君與我也云々。賴家怒曰。爲仲當初不入於此六人。令稱君與我生遺之由不安事也云々。

賴綱朝臣ハ遇能因云。當初能因住東山之北。人々相伴テ行向清談。能因云。我違歌ハ所好給也云々。又云。郭公秀歌ハ五首也。而相加能因歌ハ六首云々。件歌ハ。

郭公きなかぬ宵のしるからはゆるよも一夜あらまし物か
予按之。彼五首歌何哉。若貫之カナク一聲ニアクルシノ、
メ。公忠カ山路クラシツ。兼盛カ曉カケテイマソナクナル。
實方カクラハシヤマノ郭公。道綱母ノミヤコ人子テマツラ
メヤ郭公。是等歟。尤不審。

故人語云。兼盛ハ和歌ヲ毎度ニ沈思云々。而元輔難之。如此案ハ不可堪。予ハ任口詠之讀ト思時歌深沉思云々。

經信卿歌云。

沖津風ふきにけらしな住吉のまつのしつえをあらふ白波
常自歎云。古今ニ。

すみよしの松を秋風吹からにこえうちみふる沖津白波
(八歌)

此歌ノ七間四面ノ寢殿ノ南面ニ御籬ノ所々破中ニ。何宮ナト申テ御座サムニ參シテ。中門廊ヨリ入テ。寢殿ノ階間ニ參テ給言談事ハ此歌也云々。

長房卿常云。秀歌一首持ハ歌讀。二首持ハ上手。三首ハ難有事也。而吾ハ三首持云々。所謂。

朝またき八重さく菊の九重に見ゆるは霜のおける之けり
月影は山のはいつるよひよりも更行空そてりまさりける
或人云。是ハ後冷泉院御時。難顯出ト有仰ニ。出月題所詠也云々。年來齋院長官ニテ。少將ニ任テ近衛使テ渡時。送院女房許歌云。

年を経てかけし葵はかはらねとけふのかさしは珍しき哉
公實卿歌云。

ふもとをばうちの川霧たちこめて雲ぬにみゆる朝日山哉
自歎云。是ハカハキリノフモトヲコメテタヌレハトイフ
歌ヲ盜也。歌ハ如此可盜也云々。誠以有興云々。

朝詠集江註云。春霞カスミテイニシ鴈金ハ。註云。或人云。躬
恆于時八月也。瀧口戸參。祇候竹臺下時。秋鷹適鳴。有勅命獻
和歌。三反唱春霞字。人々嘲哂。爰躬恆於瀧口戸稱云。到佳境
云々。次讀了人々感。今案。古集爲佗歌可召云々。不讀解。

俊賴歌云。

みつの海とおつる泪は成にけり戀しき人もなみと聞しに
故公實卿云。ミツノウミノノ、字ハ。ナソロシクナケルモノ
カナ。後生ハ難直字ヲト云々。

故將作許ニテ左京被詠歌云。

あふと見て現のかひはなけれ共はかなき夢そ命なりける
俊賴當座感歎云。人ハウツ、ニトソヨمام。ノ、字油壁ノ上
ニハナアフラヒク所也トテ深感之云々。詩歌ハ只一字也。

後拾遺ニ兼盛歌云。

あさちふの秋の夕暮なく虫はわかとしたにものや悲しき
我等ハアサチフニトソヨمام。ノ、字甚深ノ字歟。

公實卿云。長能歌。

霰ふるかたのゝみのゝかり衣ぬれぬ宿かす人しなれば
道濟歌云。

ぬれゝも猶かりゆかん答鷹のうはけの雪を打拂ひつゝ
是ハ武忠信貞也。長能歌ハ武忠力誠ニツキゝシククチワ
キノコヒテ。體ヲセメテナトリテ出來ニ。道濟歌ハ信貞カマ
コトニヨクテ。ウチステタルヤウニテ。ノサヒマテサシアユ
ミテ出來様也。無勝劣云々。但此歌ハ相挑テ四條大納言ニ申
ケレハ。道濟力歌チナム被感歎之由申侍如何。歌仙モ晴時歌
チ人ニ乞常事也。花山院歌合時。高遠卿令讀好忠。永承ノ時
相摸申請堀川左大臣歌。清正任紀伊守之後。申還^{セル}昇歌。フケ
キノウラニキルタツノ。忠見ニ所令讀也。見彼集。隨件歌無
清正集。爲時ハ當初道濟ニ詩ヲ乞讀。而後年ニハ爲時道濟一
雙ノ文士被番云々。

眞如院僧都公圓ハ定賴卿孫也。ソカ、リケル時。錦織ノ僧正
行親許ニ侍錦織八郎ト云童ヲ得意ニテ侍ケリ。彼童歌ハ不
讀ケレト。此僧都ノ境節ニハ相扶ケレハ。歌讀チホヘアリケ
リ。僧都三井寺ニ御座之間。人々相サソヒテ日吉三位許行ヌ
トキ、テ。定有和歌ト。イカ、スラムトイトナシクオホエケ
レハ。日入ホトニ三井寺ヨリ步行ニテ日野ニユキテ相問ニ。
コノ童縁ニイテ、タ、スミケルニ相合テ相尋之處ニ。山家
秋月チ可詠之山侍ニ。凡思ヤルカタナカリケルニ。今ナム心

ヤスキトテ。悦テサリケナクテイリス。于時此歌ヲ詠テ竊ニ令取テ歸云々。

いか斗さひしからまし山里の月さへすまぬこのよこせば
當座有褒。彌舉歌仙名云々。

故證觀法印語云。三井寺ニ有増珍ト云物。忠命法橋之親弟也。少和歌ニ不堪也。而思重代テ常ニ以受歌心ニククツクル。于時同朋ノ中ニ有凶人者。此事ヲ令露顯支度テ。兼日ニ出願催之。如先々構受歌テ參衆會所。臨時結構僧云。先日願惡之故。今夜可改題云々。各承諾。時術盡テ大不請シテ云。畧々ニワスルキミカナトテ起座逐電。萬人解願云々。

僧珍ハ無止事學生。被請野干者也。人來云。其日可修佛事。導師可令渡給云々。増珍承諾。期日ニ敎所ニ行向テ。車中ヨリナリテ入堂中テ着座。堂莊嚴如法。但人僧膳ヲ出從簾中。少怪思テ不食之。先登高座修次第事之間。鬼神分之時御明之光黃ニ變ス。簾中ニ有物忿氣。彌成怪テ不委シテ下ツ。布施又簾中ヨリ出。綾羅錦繡之類也。珍飯房見之。皆牛馬骨也。于茲知。野干所爲。後日令見彼所ニ無人家。空地ノ草深處也。佛經并佛具等又如馬牛骨尿也。増珍爲耻辱秘之云々。但神分時燈光變。簾中物忿之條尊事也。
俊賴歌云。

信濃なるきそちの櫻咲にけり風のはふりにすきまあらすな

是ハ信濃國ハ極風早キ所也。仍スハノ明神ノ社風祝ト云物ヲ置テ。是ヲ春ノ始ニ深物ニ籠居テ祝シテ。百日之間尊重スルナリ。然者其年凡風閑ニテ爲農業吉也。自ラスキマモアリ。日光モ令見ツレハ風不納云々。其意也。是ハ能登大夫資基ト云人俊賴ニ語云。如此事承之歌ニ讀ト思也云々。俊賴答云。無下ノ世俗事也。如此事更々不可詠。不便云々。仍存其由之處後日詠之。尤胸黑事歟。五品後悔云々。

或人語云。先年々々詠和歌。而其俊公片方ニ寄テ沉思。染感氣テ高聲ニ詠云。メサマシキマテチルモミチカナト云々。顯仲入道聞之。傍ニアル馬助某和歌難成之由ヲ歎ニ敎云。早取此句。元句ヲ可構云々。馬助如敎調元ヲ構テ獻之。披讀之處。馬助依下臈先講此歌。于時金吾有大興違之氣。入道微笑。其後講金吾歌。聞之入道云。馬助コソ麥寄ラレニケレト云々。金吾彌有不請之氣云々。可用意事歟。

人ノイト不知古歌ナトハ可讀事歟。無見知テ入撰集ナトハ吾物ニ成。後拾遺ニ永胤カ。イツカタヘユクトモ月ノミエヌカナタナヒク、モノソラニナケレハトヨメル歌ハ貫之歌也。

天の原たなひく雪のみえぬよは行月影そのとけかりける
又同集ニ良退力春ノミヤ人ウチムレトヨメルモ。一條院御時。殿上人共月見中ニ或人送歌云。

うらやまし雲の上人うちむれておのか物とや月をみる覽
金葉集ニ顯仲卿ノ鳥ト、モニソネハナカレケルト云句モ一
條攝政集歌也。又今右府入道ノ心チサヘモツクシツルカナ
ト云歌モ。中比ノ人歌也。入或打開。又同集云。永緣僧正ノキ
クタヒニメツラシケレハ郭公ト云歌ハ。隆資入道カ四要講
ニ高判官代政業カ所詠也。而永緣同詠也。政業數月之前ニ獻
之。故爲彼人歌。而永緣訴云。彼人歌ハ有其數。予カ歌ハ昂計
也。加之烈講師之中。何無會釋哉云々。結衆僉議シテ隨宜永
緣歌。永公拭感涙云々。就中秀歌也。政業カ不祥賊。詞花集ニ
安藝カヨメル。コノタヒハカリカナシキハナシト云歌又予
歌也。一字不違也。被用安藝歌。繼政業之跡。甚以難堪歟。
某所御屏風詩ヲ匡衡以言奉之。而匡衡定有秀句事ヲ以言深
不審ス。稱生侍テ會テ匡衡家女房ニ竊語云。近日殿ノ所爲何
事哉。女房云。常ニ物ヲ案被書付之外無佗事云々。以言云。件
草若被破弁ルアラハ取テ可給。後日女房草案ノ破棄ヲ與之。
以言讀之見ニ纔有一句。晚寺鐘聲渡水來。以言作上句云々。
寒谿樹色經霜變。以之入彼屏風詩中。又匡衡上句云。孤舟掉
影穿煙去云々。同爲件屏風詩。世以存作合之由。以言上句作
勝由云々。

朗詠集江註云。三壺雲浮。七萬里之程分浪。註云。都良香神
仙策也。良香私酒彼家女。善繩作云々。竊取件破却紙。開

讀所作設云々。予案之。以言事此物語ノ轉々歟。將逐此跡構
事歟。江相公王昭君詩注云。爲澄景作。藏置枕篋中。而殿上
人之作文時。澄景稱王昭君可作之由。人々得意。各開篋得之
云々。

菅輔昭爲宇多院藏人之時爲試。俄賦隔花遙勸酒詩。以輔昭爲
序者。而疑嚴閣之助成。閉院不令往反人。件序落句云。泝於李
門之浪二年。朝恩未及。踏蓬壺之雲十日。夜飲已酣云々。世以
稱秀逸。而文時卿云。踏蓬壺之雲一日ト可書。折指テ計ケル
者哉。文時卿尙齒會序云。少於樂天三年。猶已衰齡也。實雖不
及三年。付文花書之云々。如此事和歌ニモ可用意也。
後拾遺嘉言歌云。

梅のかをよはの嵐の吹ためて横の板戸をあくる待けり
經信卿難云。ヨメリシ人ノイヒシハ。ノキニアラシノフキタ
メテトコソキ、シカ。ヨハノアラシノフキタメテ荒涼ナリ。
又アクルハヨノアクルニソヘムトニヤ。ワルクナリニタリ
ト云々。尤有謂事歟。凡此集ニハ歌ヲ多直云々。隆經朝臣立
春歌モ。本ハハルコトニソラノケシキノカハラヌハトアル
ナ。野ヘト被直タリ。如此事多倅。ヨクナリタルコトモアリ。
コレハイカ、可侍カラン。

其時御屏風歌擣衣所ニ兼盛詠。

コロモウツヘキトキヤキヌラム

紀時文件色紙形ヲ書之時抑筆ヲ云。見在ニ搦衣ナミテ。衣可打時ヤキヌラムト詠之條如何。仍被問兼盛之處。申云。貫之延喜御時御屏風駒迎所ニ。イマヤヒクラムモチ月ノコマト詠。有此難歟如何。于時時文閑口云々。

住吉神主國基良退力歌ヲ難云。マクリテト云詞ヤハアルト云々。良退云。ヤシホノコロモマクリテニシテ如何。僻事也。國基云。紅ニハマフリテト云事有。ソレヲ書誤也云々。良退暫案テ又云。

かさこしの嶺よりおるゝ賤男のきその麻衣まくりてヒート侍ルハ。是モマフリテテ誤歟云。國基閑口。

仁和寺一品宮(怨子)參詣天王寺之時。御共人令參住吉詠和歌。俊賴君歌云。

幾かへり花さきぬらん住吉の松も神代のもとこそきけ故將作當座ニ難云。マツハ神代ノト可侍ト云々。俊賴無左右答。予案之。共以有理有興。

萬葉集云。(新)田部親王勝間田池ニ遊テ御意ニ有感。還不忍。於(時)語婦人曰。今日遊行見勝間田池。水影濤々。蓮華灼々。何怜斷腸。不可得言。乃婦人作此戲歌云。

かつまたの池は我しる蓮なししかいふ君かひけなきかと如此ハ彼親王無髭之由ナ人以存也。而故證觀法師云。如歌ハ彼親王以外大髭也。是ハ汝ヲ無髭人ト如云也。勝間田ニハ無

蓮。已虛言也ト讀也云々。甚深義之由。人々所惑歟。和歌者有興事也。無止事人及帝王ニモ違事ヲ其道也。所望申文若ハ名籍ニモ制之先蹤也。源重之小一條大將(濟時)奉名籍トテ制歌。

みちのくにあたちのま弓引かとして君に我身を任せつる哉梨下座主明快若侍時。蓮仲法師イカテ志ノヨシヲ欲達之間。不思議所ニテ契申テ。悅之餘ニ進名籍トテ制歌。

嬉しさに命絶ぬる物ならはなからんよにもこのな忘るな座主返事。

誰さきとしらぬ命に頼めてはそらと人になりもこそすれ予追先蹤叙位之時。故鳥羽院申文ニ制歌。

やへ／＼の人たにのほる位山老ぬるみにはくるしかり鬼是有慕申事。四位二度々漏、且弟等ハ至四品。無聽事ヲ思テ所詠之。賢有御感。其後叙四品。仰云。重代者カタホナル事タニアリ。尤有興之歌體雖別様。御哀憐之至歟。此所望之始ニ仰云。是ハ歌讀男歟。爲此道宗者也。尤可然云々。其後空漏云々。又取御氣色之所ニ。和歌凡事忘却申云々。如此每度和歌出來之故。乍恐所進覽也。末代勝事也。世以珍重之由謳歌云云。又新院御給ナ申二度々漏シカハ。十二月廿日比事次ニ奏聞歌。

位山谷のうくひす人しれす音のみなかれて春をまつ哉

明年御給所給也。競望人有其數。而仰云。依優和歌給清輔云々。何面目如之哉。雖不堪事。依此道度々有面目。是多年稽古之所致歟。愚詠百首歌。

梅の花同しれよりはおひなからいかなる枝の咲おくる覽
ト云歌ナ故北政所令哀給テ。朝覲行幸御給ニテ叙從五位上。
次新院ニ奏歌。叙正五下。次依申文歌叙四位。三箇度加級皆
以勸賞也。二世難忘之故。聊記付之。此度加級之慶。殿下之參
河君ノ云送タル返事云。

梅の花かぬれぬ枝と思ひしをあまねくめくむ春も有けり
平兼盛申文奥ニ書歌。

澤水におひゆく影をみる鶴のなくね雲ゐに聞へさらめや
藤原國行除目申文制歌。

徒に成ぬる人のまたもあらは云合さてそれをはなかまし
堀川院御時。息男俊重式部丞所望申文ニ制歌。俊賴朝臣。

日の光あまねき空のけしきにも我身ひとつは雲かくれ簡
返事奉 宣旨周防内侍。

何か思ふ春の嵐に雲はれてさやけき影は君のみそみむ
此度拜任云々。

又中原範政申文ニ制歌。

さきにつむなけきは下に埋れてけすの思ひは苦しかり鬼
平兼盛駿河守之時。彼國女夫ノ伊豆國ニ妻ナマツケテ不來

ノ由ヲ訴ヘケル申文ニ書付。

横はしる清見か關に關するゑいつるふとは永くとゝめよ
于時重之陸奥ヨリト洛之間。此所ニ宿。女カハリテ和之。

關するぬ空に心の通ひなほみをとゝめてもかひやなか覽
肥後國ノ遊君檜垣老後ニ落魄者也。家集云。住所モナクナ

リテ。水クムホトニナリテ。桶ヒキサケテイツルニシモ。國
守神拜ニイテタマフミチニサシアヒタレハ。目サトナルモ

ノミツケテ。イカテカクトミトカムレハ。守ナニソト、ヒケ
レハ。名タカキ檜垣也ト人ノイヒケルニ。マヘニヨヒツレ

ハ。ハツカシケレト。カクレトコロモナキニ。桶サシナキテ
居シカハ。イカテカクハナリシソトアルニ。オモヒワヒテ。

老はてゝかしらの髪も白川のみつわくむまで成にける哉
シラカワ、件ノ所ニ有河也。如後撰ハ大貳興範ニアヒテ詠

之云々。
壬生忠見幼童之時。内裏ヨリ有召。無乗物テ難參之由ナ申

ニ。而竹馬ニ乗テ可參之由有御定。仍進此歌。
竹馬はふしかちにしていと弱し今ゆふかけにのりて參覽

忠見ハ貧儉ニテ住田舍者也。而天德歌合之時。有勅被召上テ
朱雀門ノ曲殿ニ宿ス。田舍ノ裝束ノマ、ニテ。柿ノ小袴衣ナ

于今持テ懸肩云々。此時事ヲ申家集云。攝津國ニ年來身ヲシ
ツメテ籠居タルナ。其時帝聞召上サセ給テケリ。ユフサリ藏

人所ニ候デマカリイテニケルアシタニ。俊頼朝臣シテ仰給ケル。

みしかとも何共しらす難波瀉浪のよるにて返りに集みしかは御返事進。

住吉のまつゝ仄に聞しかはみし下馬しちを上陸集や夜かへりけん又云。先帝御時凡河内躬恒候ケン例ニテ。御厨子所ニ候ヨト仰事アルチ。其後宣旨ノチソケレハ奏セヨトヲホシクテ藏人許ニ。

櫻花たかき梢のなひかれはかへりやしなん待わひぬとて御返。

待わひてかへらんものかきしかけの山の櫻は雲ゐなり共サテ宣旨給テ御厨子所ニ候テ進ル。

年をへてひゞきの灘に沈む舟波のよするを待にそ有ける播磨ニモカヨヒケルヨシミエタリ。伊豆國神宮ニ下向之時。ヨシアルウカラメノイヒタル。

音にきゝてめにはまたみぬ播磨なる響の灘ときくは誠か返事。

年ふればくちこそまされ橋柱昔なからのなたはかばらて童名ハ名多也。

橋爲仲朝臣赴任國奥州之時。右大臣殿ヨリ装束給ニソヘタマヘル。

玉さかに思も出る時もあらはこれそきなれん物とみよとを驚ナカラ急參テ。式部丞廣綱シテ奉御返事。

みなれたる心ならひにたまさかも思忘るゝひまや有へきは見家集。御返事可持參事歟。

貫之集云。世中ノ心細覺テ。常ノコ、チセサリケレハ。源公忠朝臣許ニ此歌ヲナムヨミテ送ケル間ニ。殊ニ病ニナリテナモクナリニケリ。

手にむすふ水に宿れる月影の有かなきかのよに社有けれカヘシセムトオモヘトモ。イソキシモセメホトニウセニケレハ。キヽヲトロキテアハレカリテ。彼送歌ニ返讀加ヘテ。オタキニ誦經セサセテ。河原ニテヤカセケルトソ。

濱コソト云童ノ四十九日ニ。誦經文ニ書テ送歌。慈心上人。
(清豪。)

押てるやよさの濱社戀しけれ泪をよするかたのみなけれは横川覺超僧都導師ニテ和之。

世中に有てかひなき我かみをかく惜まるゝ人にかへはや或女房ノ佛供養ノ導師ニ寶源律師請タルニ。事ノ不叶ケニテ。人ナムトモミエサリケレハ。如形申上テイテムトスルニ。簾中ヨリ硯宮ヲシイテタルヲ取テ。飯見ケレハ有歌一首。

玉簪かけこに塵もすえさりしふたおやならなきひとをしれ

後朝送和。

けさこそは明てもみつれ玉篋ふたよりみより泪流れて
同律師攝州ナル下臈ノ堂供養ノ導師ニ請タルニ。說法ノ間
難人共サマ／＼ノ聲ニマシリアヒテ。説經モ聞ユヘクモア
ラサリケレハ。説經ヲト、メテ高座上ヨリ詠ケル歟。

津國のあしかり聲の高ければあなかと社云へかりけれ
此後嗽々聲一切ニ不聞。猶難波津ノ家風ニテ聞知也。

雲居寺上人瞻西或所ニテ説經之間。雨モリテ袂ニカ、リケ
レハ。高座ヨリナルトテ。袂ノヌレ打ハラヒテ詠云。

古しへも今も傳へて語るにももりやは法のかたき之けれ
恵心僧都ハ和歌ハ狂言綺語也トテ不讀給ケルヲ。恵心院ニ
テアケホノニ水ウミヲ眺望シタマウニ。チキヨリ船ノユク
チミテ。或人コキユタ舟ノアトノシラナミト云歌ヲ詠シケ
ルチキ、テ。メテババイテ。和歌ハ觀念ノ助縁トナリスヘカ
リケリトテ。其ヨリ讀給ト云々。サテ廿八品并十樂歌ナトモ
其後讀給云々。

俊賴君云。折節ニカナヒタル歌ヲ詠ハ。ヨムニハマサレル
也。先年前齋宮伊勢ヨリ歸京之時御供ニ候。ヨトノソタリニ
御船付テ。人々不寢アカスアヒタ。ムカヒノ市ニ郭公一聲ナ
キ行。萬人斷腸。自御船ハ女房聲ニ竊ニ。ヨトノワタリノマ
タヨフカキニト詠タリシ。臨時メテタカリシ者也。人々感歎

シテ今ニ難忘云々。

範永朝臣歌ニハ谷鶯一聲ソスル。染肝膽歌。以之彼人爲第
一秀歌之由。年來心中所存也。而余人必シモ不然之氣也。
而或人語云。古老傳語云。範永云。我身ノ今生秀歌ハ此歌
也ト稱云々。愚意忝頗彼意。深所自愛也。

時棟語云。忠文民部卿爲大將軍下向之時。宿駿河國清見關。
軍監清原滋藤夜詠曰。

漁舟火影寒燒浪。驛路鈴聲夜過山。

將軍拭淚云々。見江記。

橘太君榮職ハ内記大夫取任子。古曾部入道之孫也。管絃和歌
仙經讀歌唱末代之好士也。十月計下向武藏之路ニ宿ヲ尋テ。
或家ニ菊花開敷シテ尤多情。雖家狹付花艶テ宿此所翫花。入
夜法華經一卷有誦之間。チクノカタヨリ人來テ終夜聞之。及
曉八卷讀了程ニ。此人中還戸ヲ叩。橘アヤシムテ問之。聲ニ
付テ詠云。

古へのその姿にはあらねとも聲はかはらぬ物にそ有ける
トイヒテチクノカタヘ歸入。橘太周章テ無左右云暫物可申。
于時女立歸ヲトス。橘太オモワク。先返歌之後可有左右。而
無計畧。仍無何事詠云。

古へのその姿にはあらねとも聲はかはらぬ物としらすや
其後言談聞子細ニ。壯年ノ當初所相語之半物也。爲或國聽官

妻城下之由雖聞。不能子細者也。而相互爲白頭。不慮ニ今此處談舊事。拂曉去云々。尤有興事也。此返歌之體一說歟。於非好士難存事也。橘公舊好士ニテ相稱。尤有興之。後生爲付心。聊記置之。

内匠頭清則於或所言談之次ニ。故可參拜之由存知之處ニ。乍思自然罷過者也。予云。何等之故乎。内匠云。清則ハ石見守國房之外孫也。彼朝臣和歌之間。此訓經ヲハ藤字平聊故實ヲ所書置。先可見合也。

内々不見ハ自加難事出來テ。雖秀逸歌成瑕瑾者也云々。必參上テ可承仰也云々。予云。御平給如何。内匠遙巡シテ吟笑矣。

或人語云。美濃守知房所詠之歌。伊家(辨)聊感歎云。優讀給ヘリ云々。知房腹立云。予ハ非詩事ハ非歟。而和歌頗劣彼。如此被仰云。尤奇怪也。自今以後不可讀和歌云々。優詞可用意事歟。

中院右府入道許ニ參。清談之次曰。故將作常被申云。於物肝心ヲ可見也。後撰ニハ。ナキナソト人ニハイヒテアリヌヘシ心ノトハ、イカ、答ン。又。エニカケルトリトモ人ヲミテシカナチナシトコロヲツネニトフヘク。是等彼集肝心也云々。又云。歌讀ハ萬葉ヨク取マテ也。是ヲ心得テヨク盜チ歌讀トスト云々。

京極大殿ノ御時。宇治ニ有白河院御幸。依餘興不盡。今一日可逗留之由ヲ被申。而明日有還御ハ花洛當大白方。宇治從京

當南。故爲之如何。殿下懷遺恨。而行家朝臣申云。宇治ハ不當花洛南。喜撰歌云。

わか庵は都のたつみしかそすむよをうち山と人はいふゑ然者何憚候哉。殿下以此由奏聞。院仍還御延引。殿下甚有感氣。人又爲美談云々。或人云。喜撰カ佳處ハ宇治ニトリテ東終云々。尤可當異方歟。

新院位御時。於中宮(皇嘉門院)御方。殿上人等有小弓事。以物不書造紙ヲ被出懸物。其表紙書云。

アトナキコトノアト、コンミレ 元忘却。

コレヲミテ思ヒモ出ヨハマチトリ

是殿下御作云。人々有不審之氣。而資仲卿云。是拾遺抄侍事歟。小野宮有大臣幼童之時。馬内侍許ニ渡テ小弓ヲ射給ニ。物不書造紙ヲ出懸物。而翌日清慎公送歌云。

いつしかとあけてみたれは濱チ鳥跡あるとに跡のなき哉

若此意歟ト云々。曩祖事覺悟之條有興之由。人々感歎云々。如此事臨時難覺悟事也。

期詠江註云。四條大納言六條宮ニ被談曰。眞之歌仙也。宮曰。不可及人丸。納言曰。不可然。爰書秀歌十首。後日被合。八首人丸勝。一首貫之勝。此奇特云々。(ナツノヨハフスカトスレハホト、キス)自此事起卅六人撰出來歟。件撰有不審。所謂深養父。元方。千里。定文等不入之。此人々豈劣賴基仲文元眞

等類乎。件撰中ニ兼盛歌云。

朝日さすみれの白雪むらきえて春の霞はたなひきにけり
此歌腰句人々相分論之。或云。未消之心也。又云。頗消之意也。好思等論云々。是見江注。予案之。未消之儀不甘心乎。

和歌ハ好テ有無益事。大江公資大外記所望者也。僉議之時。諸卿皆是拜任宜之由。而小野宮右大臣云。懷抱相摸シテ秀歌案之間。公事闕如歟云々。諸卿解頤。依此空不拜任云々。以相摸爲妻之比也。公資依爲相摸守號相摸。本名ハ乙侍從云々。

昔ハ獄前ニ栽菊云々。藤六輔相(中納言長良孫也。)過獄前。于時獄囚一人走出テ。抱之入獄門内云。朝ノ歌仙之由承之。爲題此菊可令詠一首云々。輔相即詠云。

人ヤ植シ己ヤおひし菊の花しもとにうつる色のいたさ
獄囚感歎シテ免之云々。甚以無益歟。

和歌ハ昔ヨリ無師。而能因始長能ヲ爲師。當初肥後進士トイヒケル時。モノヘユクアヒタ於長能宅前テ車輪損了。仍車取遣之間。入彼家テ始面會。雖有參仕之志。自然過之間。幸有如此事。其由ヲ談相互契約。能因云。和歌者何様可讀哉。長能云。山ヲカミオチテツモレルモミチハノカハケルウヘニシタレフルナリ。如此可詠云々。自此爲師。仍玄々集ニ多入長能歌也。予案之。件歌ハ嘉言歌也。仍以後進歌爲證哉。若口傳僻事歟。

賀陽院一宮歌合ニ能因歌云。

春霞しかの山こへせし人にあふこちするはなさくら哉
時人不得意之由ヲ稱云々。或人間能因云。此御歌世以爲不審。其趣如何。能因無答。仍興違シテ起座退去也。時能因竊云。故守ハ歌ナハカヤウニヨメトコソアリシカトツフヤクト云々。稱故守長能也。

文時卿云。

ひもろきは神の心にうけつらん比良の高根にゆふ髪せり
順問云。ユヘ如何。文時順主不知ケリナトテ無餘答云々。

白河院於鳥羽殿九月十三夜池上月和歌ニ。序者經信卿歌云。

照月の岩間の水に宿らすはたまゐる數をいかてしらまし
無池字之由世以傾之。俊賴語云。此由經信シカイフナリニヤトテ無餘答云々。

同和歌御製云。

池水にこよひの月をやとしもて心のまゝに我ものとみる
是ハ女房堀川殿(大宮右府女。)歌也。而内々ニ今日和歌イカト御尋之處申此歌。已秀逸歌也。仍仰云。汝歌ニ不似合。可爲我歌トテ御收公云々。

此度歌ニハ有不思議事共。高松宰相公定ハ無月歌ヲ詠ス。世人稱無月宰相。

又故治部卿能俊卿歌云。

又故治部卿能俊卿歌云。

池水に影をうつして秋の夜の月のなかなる月をこそ見れ
是ヲハ號天變少將云々。于時少將也。

故兵衛佐入道顯仲白河殿御會ニ柳隨池水云題ヲ詠云。

かつまたの池も緑にみゆるかな岸の柳のいろにうつりて
時人號勝間田兵衛佐云々。件池水ナクテ。舊ク範永等池ニハ

イキノアトタニモナシトヨミキタルチ如此詠故也。

先達モ誤事アリ。良違ハ郭公ナカナクト云コトナ長鳴トイ
フ心ト存也。於俊綱朝臣許五月五日詠郭公歌云。

宿近くしはしなかなけ郭公けふのあやめのねにも較ヒヘ

懷圓嘲哢云。ホト、鳴ハシメテ。キストナカマルニヤト云

々。

又良違於或所語云。一日江州ヨリ上洛之間。於會坂時雨ニ

逢。石門ニ立入テカシコクヌレスト云々。

是優艶儀歟。而懷圓問云。關石門ニハ何様ニ被立入哉。門侍

歟云々。懷圓咲テ。其ハ石ノ塵カトアテ侍。不知給歟。不便々々云

々。良違閉口。懷圓度々蒙難者也。但爲仲歌ニ。(アツマチニ

コトツテヤセシホト、キスセキノイハカトイマソスクナ

ル)如此者石門歟。又彼失。

近藏人君意馬ト云モノアリテ好士也。鷄冠木チハ紅葉ト存

テ。於或所モミチノモミチトヨミテ被咲云々。

又能登大夫資基ハヒコホシツメトイフコトヨミテ被鼓動。

如此事能々可尋知也。
俊賴朝臣抄物云。

うくひすのかひこのなかにほとゝきすひとりむまれてし
やか父にゝてなかつしやかはゝゝてなかつうのはなの
、、、、

此歌句違亂。若是長歌ノ旋頭歌歟云々。予見數本ニ全其句不

違亂如何。件歌在彼集第九卷。家持歌也。

驚ウケヒス之生ナカニ卵カヒコ乃中ホト霍公獨キマヒトリ所生而ムマレタシヤカチ已ニ父爾ニ似者ニ不ナカ

鳴スシヤカヘ已ニ母ニ似ニ而ナ者ナ不ナ鳴ナ宇ウ能ナ花ハ開ケル有ヘ野ヨ邊リ從ヒカ飛ヘリ鷺キ

來キナキト鳴キト令ヨシマダチ響ヘナ橘ヘナ之花ハナ乎ナ屋ウ令イナシラシ散ヒ終モス日ニ雖ナ喧ナ聞キ吉ヨシ弊ヒ

者ヘ將セム爲ト遲ホク莫ナ去キ吾ナ屋ウ之ナ花ハナ橘キ爾ニ住ス度ワタリ鳥トリ如リ

此讀ハ全不違亂。彼人ニ和漢之才非同日之論。定有存歟。非

顯短。唯爲不審書置之。後人可評定歟。

高倉一宮歌合。歌人。左大貳三位。江侍從。伊勢大輔。出羽辨

小辨。相摸也。右資業。兼房。家經。範永。能因五人也。今一人

ノ所ヲ兼ナ長ナ經ナ衛ナ競ナ望ナ之ナ。而兩人入者女房一人不足。又一人ヲ

抽入者。於同者有志イ望望イ。又共ニ不入者女房一人可除。設イ宇治殿

思食煩。于茲堀川右府以加賀左衛門任任殿吹舉。無許容。是未

至之故歟。仍以兼長經衛等有試。當座ニ賜題云。水邊歎冬。兼

長歌云。

いかなれば岸にやへさく歎冬のひとへに池の底にみゆ覽

輕衡歌云。

池水に咲かゝりたる款冬をそこにしつめる枝とみるかな
右府判云。持也。是入兩人テ。女房不足之所ニ入左衛門之志
云々。滿座兼長勝ト思ヘリ。然間兼長服暇ニ成テ遂入輕衡。
昔事能有清撰歟。

曾禰好忠三百六十首歌云。

なけやなけ逢か柚のきりくす過行秋はけにそ悲しき
長能云。狂惑ノヤツ也。蓬カ柚ト云事ヤハアルト云々。

曾丹ハ丹後掾也。而始ハ號曾丹後掾。其後ハ號曾丹後。末ニ
事舊テ號曾丹也。此時好忠歎云。イツソタトイハレンスラム
云々。

花山院御時。中納言義懷ハ外戚。惟成辨ハ近習之臣ニテ。各
執天下之權。而院竊出内裏幸花山テ出家。兩人聞出テ追參
上。院已爲比丘。惟成本鳥チ切。又義懷ニ語云。在外戚テ執
權御座ツルニ。更爲外人テ世間交衆。ミクルシカルヘシ。早
出家。義懷存之由チ稱テ同出家。依人教訓テシタレハイカ、
ト世人思ケルニ。始終尊テ過云々。飯室ニ住テ詠歌也。

みし人も忘れのみする古里にこゝろなかくもきたる春哉
惟成ハ後ニハ賀茂祭日ツサツノモチテ一條大路ヲ渡云々。

入道中納言顯基ハ後一條院ノ近習之臣也。而長元元年四月
十七日院崩御。同廿二日奉遷上東門。此日於大原出家。生半

卅七。時人落涙云々。其後横川籠居之比。上東門院ヨリトハ
セタマヘリケレハ奉歌。

よをすてゝ宿を出ぬる身なれとも猶こひしきは昔えけり
院御返。

ときのまま戀しきとの慰まほよは二度もそむかざまし
此人ハ本自道心者云々。文集詩云。古墓何世人。不知姓與名。
化爲道傍土。年々春草生。尋常詠之云々。又常云。配所ニテ月
ナミハヤト云々。

御堂大井河遊覽之時。詩歌之船ヲ分テ。各被乗堪能之人。而
御堂被仰云。四條大納言何船ニ可被乗哉。大納言云。可乘和
歌之船云々。此度チルモミチハチキヌ人ソナキトハヨムナ
リ。後日大納言云。イツレニ可乘ソト被仰シニコソ。ミナカ
ラモ驕心セシカト云々。又有後悔。乘詩船テ是許ノ詩作タラ
マシカハ。名ハアケテマジト云々。凡オホエアル人也。

一條院御時。寛弘二年上表請辭納言。藏人右中辨經通奉。勅
就第返表。將仰殊加一階之由。納言月來有愁不出仕。今上表。
仍殊優也云々。此度表事。納言招匡衡云。欲上辭表。而依時爲
英才。相語齊名以言等排之處。猶不叶意趣。貴殿計リ被書
關云々。匡衡慈ニ承諾。歸家テ有愁歎之氣色。于時亦染相尋
云。何等事哉。答云。如此之後輩才學優長也。而勝彼書關事。
極難有無衡事也云々。赤染暫打案云。彼人ハユ、シク有飭慢

之人也。吾身ノ先祖無止事者ニテ沉淪之由ナ若不書歟如何。尤可有其旨云々。匡衡云。彼輩草ヲ見ニ無此趣。尤可然云々。仍打立ニ云。五代之太政大臣之嫡男。亡祖忠仁公ト云ヨリ次第ニ數上テ。而我身ノ沉淪之由ヲ書テ持參之處。深感歎シテ面門開之氣色也。仍用之云々。是以和歌之思高巧出者有興云々。

經信卿四條大納言ニ不劣人也。御堂御時如此分詩歌管絃之船。而何船可乘ソト不進心之間。仰云。乘管絃之船可賦詩歌云々。珍重々々。

以意空事ノ不叶意ハ和歌也。ヨクモヨクヨマムト思時。別樣ニ被讀。打ヤリノコトモ古時アリ。又數日案モ俄事モ。唯可然テ出來者也。又可劣トモ不覺人ニ被讀ハ歌也。

九條殿大納言之時。元三可用魚袋。不候之由令申給ニ。貞信公吾若ヨリ用魚袋。アヘ物ニスヘシトテ令奉借給ヘルヲ。後日ニ返上之時。付松枝令副給。歌ハ貫之ニ所召也。所謂。

春風に氷とけたる池の魚はちよまつ陸にすまむとそ思ふ
世繼物語ニハ彼家ニ行向テ被仰タリトソ侍。貫之集ニハ御消息アリトソ侍。イカニモヨマムトオモヒケムニ。サマデモナキニヤ。何集ニモ不入。

又明尊僧正ノ九十賀ハ寧治殿ノセサセタマフナリ。杖歌ハ召伊勢大輔。

萬代をたけの杖にそ契りつる久しくつかむ君かためにと
頼基ハ承平中宮御賀杖歌ヲヨム。能宜ハ大入道殿御賀ニヨム。二代勤此役。依重代召之。定テ勳マシ侍ケメトモ。是又不入物歌也。此賀歌ハ宇治殿。大二條殿。堀川大臣。土御門右大臣等讀給ヘリ。序者土御門殿也。其一句云。勳八十之廻。如來猶不示九々之歲。若師亦所難量也。時人珍重之由謳歌云々。杖返歌ハ。前律師慶進歌也。彼僧正弟子也。

君を祈る年の久しく成ぬれば老のさかゆく杖そうれし
此律師ハ歌仙也。又無極聖人也。偏欲無上道不思名利。而爲凡僧事傍輩卿下之。百日間籠居シテ某所祈之。退出之路ニ有公請參内。乍高座上宣下律師。其後歷十箇日辭退云々。又觀念ノ上人也。金色ノ阿字ヲ前懸テ。墨字ノ阿字ヲ後ニ懸觀也。墨字變金色云々。

伊勢大輔上東門院中宮ト申時初參。輔親娘也。歌讀覽ト心ニク、思食之間ニ。八重櫻ヲ或人進之。御堂御前御座之時。件花枝ヲ大輔許ハサシツカハシテ。御現上ニ檀紙ヲ置キ。同サシツカハシタルニ。人々屬目イカ、申ト見アヘルニ。トハカリアリテ。現ヒキヨセテ。墨サトリテシツカニシスリヤ。歌チカキテ進之。御堂トリテ御覽スルニ。誠キヨケニカキダリ。

いにしへのならの宮古の八重櫻けふ九重ににはひける哉

殿ナハシメタテマツリテ萬人感歎。宮中鼓動云々。又彼人第一歌也。卒爾ニモ不寄事也。

又大二條殿小式部内侍ヲオホスコロ。日來者御所勞ニテ久アリテ。平愈シテ參上東門院給ニ。小式部内侍大盤所ニ親候。令出給トテ。死トセシハナト不問ソト被仰テ。スキタマフヲ引留テ申ケル。

しぬ計歎きに社は歎きしか生で、とふへき身にしあらねは不堪感情。カキイタキテツホネニオハシテ懷抱云々。凡如此事境々多聞。數日ノ事別様又不可勝計歎。

堀川院中宮御方ニ令渡給テ。以藏人永實御所ニアル薰物ノ火桶申テ參ト有仰ニ。參テ申出ニ。厠防内侍繪書タル小火桶ヲサシイツトテ。

カスミコメタルキリヒタケカナ

永實無程取之。

ハナヤサキモミチヤスラムオホツカナ

範永之孫清家子ニテ新藏人ナルヲ心ニク、思テ。フル物ニテ試之ニ。尤有興事也。後ニ主上聞食テ被仰云。不永實ハ我耻ナラマシト云々。伊勢大輔カコハエモイハヌ花ノ色哉トイヒシニ不劣覺事也。

予先年如此事ニ逢。關白殿近衛御所女房ノ車寄ノ前二人五六人女房ト言談。而有事次テ薰物ヲ一囊被出。人々競取之。

越中守顯成取見之。已非薰物。人々咲之分散。翌日ニ又同所二人々親候。此日ハ予モ候。然間自女房中送書狀。開見之ニ有歌。薰物ニコ、ロチソサノ程ハミエニキト云々。元句不覺也。人々興遣各讓于予。心中ニ案様。昨日此所ニ御座ケム人々ノ御沙汰也トテ。欲逃而可見讓無人。默止ハ予耻之田存之間。庶薰物ト云事有カシト覺悟。仍須史廻思之處。如形成篇詠云。

玉たれのみすの内よりいてしかば空薰物と誰もしりにき北政所聞食テ御感無極テ。實薰物一囊ヲ下給。于今納宮中。和歌爲體雖異。臨時有面目。世以爲美談。仍暫所書置也。後日可改弃。抑此度空薰物之句多出來。仍此歌彌惡歌ニ成乎。難堪。

予應保二年三月三日昇殿。來十三日中宮御方可有具合事。仍俄所仰下也。同七日賜和歌題二首云々。同日可被講。廻風情早可初參云々。仍不擇吉凶。件夜付籍了。(御所高倉殿。)翌日御會。(東向御所。)月卿兩三。雲客數十。講了不立座。又出題二首。(範兼出之。)躑躅交路。一戀。是爲試予歎。即時各終篇一隱名テ歌合也。予殊應召籠咫尺也。雖然猶成恐。不邁位階。居範兼雅重等下。御簾ヲ被上。次第講歌。彼是相互難陳。範兼殊爲張本テ定勝負間。雖有僻不能口入。而半講ノ後勅定云。清輔今夜不致和歌沙汰ト思歎云々。小突鼻氣也。心ニ恐

々シテ相待糺繆之處。躑躑歌ニ此モ彼モト詠歌出來。範兼難云。此モ彼モハ筑波山之外ハ不可詠。彼山ハ八方ニ有面。々方々ニ有景之故也。何平地ノ路ニ可然哉。顯廣云。然也。近歌合ニモ如此難歟。予云。基俊判歟。顯廣此時承伏テ然也ト云。範兼傍若無人ニ成テ。然者爲眞之由稱。于時予云。雖然事外ノ僻事也。于茲重家云。基俊力書置事ヲ末生難稱僻事歟。予云。基俊力説ヲ末生以今案難ハ尤可然。基俊ヨリ先達若有申事ハ如何。人々尤有興。有謠歌者可出ト被責。暫留滯ス。續有其責。予申云。躬恒力假名序ニハ。瀨河ニ烏鵲ノ與利羽ノ橋ヲ渡テ。此モ彼モニ行加布ト書タル標ニ覺悟ス如何。于時主上ヨリ奉始テ。滿座鼓動及簾中。範兼少キ有興達之氣。仍定勝。範兼顯廣力同心時如虎。聞證文復如鼠也。此事非今夜。後日モ世間ニ鼓動テ感歎無極之。但萬葉集ニハ是面彼面ト書。顯然者普通事也。知タルハ不高名。不知力不覺也。後聞。中院右府入道云。依和歌聽昇殿。翌日參御會テハ覺哉ト深感歎云々。後日參九條大相國許。此事ヲ被云出云。以嗜道テ昇進。可自愛事哉ト深有感。予云。承曆歌合之時。道宗朝臣昇殿云々。被申云。未承及先蹤。彌日出事也云々。兩丞相感歎。彌增回目者也。

袋草紙卷四

俊綱朝臣家ニ詠水上月歌講之。而田舎兵士中門邊ニ宿テ聞此事。青侍ニ語云。今夜ノ題ナコソツカカワツリテ候ヘト云々。侍云。有興事也如何。兵士詠云。

水や空々や水ともみえわかすかよひてすめる秋のよの月
侍來テ申此由。萬人驚歎テ詠吟メ。且感且耻テ各退出云々。

俊綱朝臣下向播磨之間。於高砂各詠和歌。而大宮先生藤原義定詠云。

われのみと思ひこしかと高砂の尾上の松もまたたてり鬼
人々感歎。良暹云。女牛ニ腹ツカレタルヒカコト云々。自有如此事也。

能宣父頼基ニ語云。先日入道式部卿御子日ニ宜歌仕テ候。頼基問之如何。能宣云。

千年まで限れる松もけふよりは君にひかれて萬代やへむ
世以稱宜云々。頼基暫詠吟シテ。カタハラナル枕ナトリテ打能宣云。慮外昇殿。有帝王御子日之時。以何歌可詠哉。レサワヒノ不覺人哉云々。能宣須臾ニ起テ逐電云々。

大樣意ニ染ナル事ニハ宜歌出來者也。然者道雅三位ハイト歌仙トモ不聞ニ。齋宮祓通間。歌ハ多秀逸也。所謂。

あふ坂は東路とこそきゝしかと心つくしのなにそ有ける
今はさは思絶なむとばかりを人傳ならていふよしもかな
オタヘノハシヤコレナラム。ユフシテカケシソノカミニ。ナ

クヨリホカノナクサメソナキ等也。

此外ハ不聞者也。思マ、ノ事ヲ陳ハ。自然ニ旁歌ニシテアル也。是志在中。詞顯外之謂歟。此齋宮ハ三條院第一皇女也。密通之由風聞シテ。自上マモリメ被付テ難通之間戀慕歌也。或人露顯之後宮出家。又身ニ大瘡共多イテ、薨去云々。

能宜朝臣齋院宰相ト嫁後。五月五日所送歌。

三島江におりたちしより菖蒲草又とさまのねをもみぬ哉
無返事歷數日。聞病惱之由到其家。人曰。亡後歷八日云々。有遺書。披見之時。

おりたちし三島の道やあせに劍おひし菖蒲のれも枯に鬼
イノリケンコトハユメニテカキリテヨトモ此間事也。

小一條院女許ニテ曉ノカネナキ、テヨミタマヘル。

曉のかれの聲、こ聞ゆなれこれを入あひと思はましかは
或人云。是ハ連歌也。院曉飯トテクチスサヒタマヒケルニ。
末ハ女ノ申ケルト云々。但又舊説ニハ依此歌罪業甚重之由云々。然者皆院御作歟。

能宜逝去之後。四十九日中ニ叙爵シテ侍之由。輔親許ヘイヒツカハストテ。

いろ／＼に思ひやる哉墨染のたともあけになれる泪を
返事云。

墨染（に後拾）のあけの衣をかされきてなみたの色のふたつたる哉

輔親ハ長元七年十一月五日叙三位。十月卅日殊勅以神寶奉伊勢使ニテ。歸參シテ獻碧球一顆。於神宮奉仕御祈之間。自然在寶殿前樹云々。此實也。且同九年後一條院崩御云々。輔親ハ長曆二年正月六イ爲月次使下伊勢之時。於途中卒去云々。

義忠ハ爲大和守之時。遊浮吉野河之間。入水死去云々。
中關白爲少將之時。語赤染之兄弟女。而忘給之後。彼女奉戀關白。日暮卷上南面簾テナカメ居。然間直衣人寄香炭入來。彼殿也。女有悅心會合。其後夜々來。但曉夕無車馬音。以長緒着針着直衣袖。朝此緒留南庭樹上。其後無來。是戀之所爲歟。又件女懷妊臨期產一胞衣。開之見之。多有血無伦物云々。見江記。赤染歌。

やすらはてねなまし物をさよふけて傾く迄の月をみし哉
江記云。赤染ハ赤染時用女也。依歷右衛門志尉等號赤染衛門。實ハ兼盛女也。離別彼母之後。稱有女子。欲尋取之處。母措而稱不然之由。相論之間。爲適檢非違使時用沙汰之間。而彼母密通相住之間。彌稱非兼盛子之由。深稱時用子云々。兼盛可令對面之由申云々。

素性ハ住石上良因院。仍寬平法皇宮瀧遊覽間。號之良因朝臣。而付此名稱入道之人尤僻事也。入道ハ素性舍兄也。爲左近將監。詣父遍照許。而遍照云。法師子ハ法師ナルソ吉トテ。推令剃頭云々。

素性ハ住石上良因院。仍寬平法皇宮瀧遊覽間。號之良因朝臣。而付此名稱入道之人尤僻事也。入道ハ素性舍兄也。爲左近將監。詣父遍照許。而遍照云。法師子ハ法師ナルソ吉トテ。推令剃頭云々。

天平勝寶元年遣唐使中。有副使陸奥介從五位上至手人丸。山城史生上道人丸者。而柿本人丸集中ニ有入唐之時歌。若此輩歟。但大使正五位上勳四等大伴宿禰佐手丸妻字奈刀自。於途中爲海神ニ被取。端正美麗之故也。悲歎之間。彼是各詠歌。而無人丸。兩人之歌非梯下之趣顯然也。今度爲守護奉振神達。大和國カムノ大明神。山城アハノ神。出雲土河。越中ノソクハ子ノ神。越前氣比ノ神。信濃スハノ大明神。合八所云々。今二所不註如何。

元年四月二日進發。同年十月廿九日到唐風門泊返歌。六月十七日參帝御在所。同年四月三日出唐。同年九月廿四日到紀伊國云々。見佐手丸記。

故物語ノ歌ノ入撰集ハナシト申カヤ。後拾遺雜一二藤爲時歌。

我ひとりなにかむと思ひし山里に思ふとなき月もすみけり
是ハ源氏物語歌也。彼物語ニハイリメトオモヒシト侍カヤ。
件物語ハ紫式部カ所作也。爲時女也。仍詠歎。紫式部ト云名
有二說。一此物語中ニ紫卷ヲ作甚深之故得此名。一一條院御
乳母之子也。而上東門院ニ令奉トテ。舌ユカリノ物ナリ。ア
ハレト思食ト令申給之故有此名。武藏野ノ義也。

猿丸太夫家集最先歌ニハ、

白菅のまのゝ萩原ゆくさこさきみこそあらめまのゝ萩原

此歌如萬葉集高市里人妻歌也。若猿丸太夫ハ件人歟。然者女房也。而如家集者送女許之歌コレ男也。集失歟。又マノ、榛原在萩由之處。萬葉集ニ寄木歌ニ詠之。有不審。但摺衣之由多詠。是大萩歟。仍取木部歟。

重之歌云。

やかすとも草はもえなむ春日野は唯春の日に任せたら南コレ在忠見集。御屏風歌也。隨無重之集。而如十五番用重之歌如何。

八幡臨時祭ハ先朱雀院御時被始行也。件歌ハ貫之奉之。其歌云。

松もおひまたもこけむす石清水行末遠くつかへまつらん又云。

石清水まつかけ遠く影みえてたふへくもあらぬ萬代之影而能宣集。冷泉院御時始テ石清水臨時祭行給ニ。可唱之歌奉之侍シニ。

君かよにみな底すめる石清水流れてちよに仕へまつらん此時更又被改歌歟。尤不審。

カソクトクツキニサキヌル梅花トイフ歌ハ貞信公歌云々。

而公忠辨集云。枇杷大臣左大臣ニ成給ヘル年ノ春。御慶ニオホキサト、オハシマシタレハ。御アルシコヨナクツカフマツリテ。御カワラケアマタ、ヒニナリケルホトニ。權中納言

敦忠君ノ御前ノ梅花チカサシテ。

遅くとくつゝぬに咲ぬる梅の花たか植をきし種にか有らん
オホキヲト、。

折て見るかひもある哉梅の花ふたゝひ春にあふ心ちして
集可考之
ツカフマツル。

色もかもことしの春は梅の花二たひ句ふこゝちこそすれ
如此ハ敦忠卿歌歟。

第四靜慮歌は或人惠亮和尚歌云々。而如堀川右大臣集ハ。山
ナル僧。

櫻花第四靜慮にさかせはや風災なくてちらしと思へは
返事大臣。

櫻花第四靜慮にさけりとも眼識なくていかゝ縁せむ
又僧。

さくら花第四靜慮にもしさかは下地の眼識かりて縁せん
返事。

下地の識かりて縁せは櫻花よしとほみえし無記にのみして
如此ハ非惠亮歌歟。惠亮ハ惟高親王ノ御持僧也。彼大臣ニ不
可逢。年紀玄隔也。尤不霑。但往年事聞キテ今答之歟。最後返
歌同大臣答也。此歌等ノ心色界ニハ凡有十八天也。其中上九
天ヲ第四靜慮トハ云。彼所壞劫之時風災ノ不到也。風不寄所
之故如此詠。眼識ナクハトヨムハ。彼所ニハ無五識也。五識

トハ眼識。耳識。鼻識。舌識。身識也。物ヲ見聞ト思時ハ。初靜
慮ノ識ヲ借ル也。初靜慮ハ下地也。然者次歌ニハ下地眼識借
テ縁セムトハヨム也。縁ハモノチキ、モシミモスル意也。終
歌ニハ無記トヨムハ。借記ノ識ハ無記也。無記トハ物ノ善惡
ナ不見。究竟之名無色云々。
六也イ

式部最後歌云。

有眼は下の眼識そなふともうへのはなをはいかゝ縁せん
(但此ハ識不叶云々。)

後拾遺三條院御製云。

心にもあらて此世をなからへは戀しかるへき夜半の月哉
此歌山科抄ニハ三條院御コ、チヨロシカリケルヒマニ。月
ヲ御覽シテ心ホソキコト、モキコエサセ給ケレハ。皇后宮
ノヨマセタマヘル御歌云々。何説チ可用哉。但皇后宮ノ御歌
ニ義叶歟。

金葉集八幡別當光清歌云。

なにことに秋はてなから棹鹿の思ひかへして妻をこふ覽
此歌ハ藏人君意尊。此集撰之比。十月許參詣八幡テ聞鹿鳴テ
詠也。而後日向俊頼亭。有忌之事不對面。仍紙端ニ書此歌テ。
以小兒一日比於八幡所詠歌也。而光清歌ト存テ入之云々。
意尊歌ハ又戀部有一首。

あはす共なからんよには思ひ出よ我ゆへ命たえし人そと

是ハ於左京御許テ詠歌也。コレヨミ人シラストテ入之。一首ハ稱人歌。一首ハ讀人不知云々。殊阿黨難堪之由。所々詠行之者也。尤有謂。

希代歌

神明御歌

大神宮御歌

長月にさやけき影のみえぬるは塵の恐れはあらすとそ思〔九歌〕是ハ長元四年六月七日祭主輔親參齋宮之間。俄ニ雨下風吹テ。齋宮自詫宣テ。帝御事ナムト被仰テ。御ミキタヒ／＼メシテ盃給トテ詠給歌也。輔親奉御和云。

おほち父むまこ輔親かみよまてにいたゝきまつる皇御神草のはななひくらまたす露のみをき所なく歎くころ哉是大中臣輔弘無闕之時。祭主事ヲ祈念シテヲタル夢ニ云ヘミユルイル歌也。

宇佐御歌

ありきつゝきつゝみれ共いさきよき君か心を我忘れめや
是孝謙天皇弓削法皇ニ讓位。和氣清麿爲使令申宇佐宮給之時。歸來テ奏不許之由。仍法皇怒テ清麿ノ足ヲ切テ。ウツホ船ニ乗テ流云々。時宇佐宮ニ流寄。彼神清麿カ清康ヲアワレミテ。誦此歌テ清麿膝ヲ撫給シ時ニ足満足云々。今和氣氏祖也。

我たのむ人徒になしはてはまた雲わけてのほるばかりそ
ゆふ響かくる袂はわつらはしとけは豊にならむとをしれ
此次歌ハ寛弘元年十二月七日高遠卿夢ニ所見也。年四十許
ナル女人捧青色紙書テ。賀茂ノ上御社ヨリノ使ト稱テ來云。
此文ヲ取之開見。此歌一首。此後拜任大貳云々。見家集。

平野御歌

白壁のみかとおやのおほち社ひらのゝ神の心なりけれ
今案。白壁ハ光仁天皇也。其曾祖父ハ舒明天皇。其曾祖父ハ
欽明天皇也。是平野明神云々。

稻荷御歌

長きよの苦しきと思へかし何歎くらんかりのやとりを
是ハ近年事也。或僧聊有相論事。稻荷ニ百日參詣。祈念スル
夢ニ見也云々。

春日御歌

ふたらくのみなみの岸に家わして今そさかへむ北の藤波
或人云。是ハ南圓堂ノ境突之時。翁出來突此境トテ誦此歌。
春日明神ノ變化云々。

大原野御歌

時の至る折をしらぬも哀也つとめてもみよくる、日やなき
是コモリタル修行者詠之。

食とするこのはゝ風に散はてぬ露の命をなにゝかけまし

此歌御返答。又或云。此歌ミノ、國山形郡三輪社神御歌云々。

三輪明神御歌

戀しくはとふらひきませ我宿は三輪の山もと杉たてる門古今歌歟。但上下セリ。又彼集ニハ不注此由。

住吉御歌

夜や寒き衣や薄きかたそきの行あひのまより霜や置らん
是社破壊之由奏帝王トテ見夢歌也。

住吉の岸もせさらむ物故にれたくや人にまつといはれん

詫言御歌云々。

むつましと君はしらすや瑞垣の久しき代より祝初めてき
昔奈良帝幸住吉給テ詠云々。ワレミテモヒサシクナリヌス
ミヨシノキシノヒメマツイグヨヘヌラン。于時明神現形シ
テ答給歌云々。或物ニハ此本歌慈覺大師歌云々。

北野御歌

作るともまたもやけなん菅原やむれの板まのあはむ限は
是圓融院御時。内裏焼亡ノ造營之間。被造裏板ニ蟲ノ囀歌云々。

貴布禰御歌

奥山にたきりておつる瀧つせに玉ちるはかり物な思ひそ
是和泉式部詣貴布禰詠云。モノオモヘハサハノホタルモヲ

カミヨリアクカレイツル王カトソミル。于時男聲ニテ式部
カ耳ニ聞歌云々。

熊野御歌

道遠し年もやう／＼おひにけり思ひおこせふ我も忘れし
是陸奥國ヨリ毎年ニ參詣シケル。女ノ年老之後夢ニ見歌也。

天宮御歌

キヌカサタテマツラムト。立願テスクシケル人ニ示給ケル。
音にきく衣笠山をまたみれは濡つゝそふるあめの宮には

蟻通明神御歌

七わたに曲れる玉のおゝぬきて蟻通しともしらすや有覽

是昔彼明神ノ社邊ニ旅客ノ宿夢ニ示給歌云々。

新羅明神御歌

唐船にのりまもりにとこしかひは有ける物をこゝの泊に
是智證大師歸朝之時。爲守護從新羅來神也。今在三井寺云々。

佛御歌

中比或僧夢ニ。キヨケナル僧三人寄合テヨミケル歌。一人
ハアハレナリ。次僧ヒハクレカタニナリヌレト。又次僧
ニシヘユクヘキ人ノナキカナ。是無疑佛菩薩歟。見定賴集。
朝とにはらふ塵たにある物を今いくよこてたゆむ成らん
是ハ行ナツトメテクルシカリケレハ。曉方ニマトロメル夢

ニ。小僧枕上ニアリティヒケル歌。

かくはかりこちてふ風の吹をみてちりの疑殘さすもかな
是少將聖人ト云人。後生ノ事ヲ思テチタル夢ニ見歌也。

音たてゝものはいはれと夕暮のはる拂ひつる聲は聞えず
シノヒテチコナヒシケルニ。カノクヒケレハ。アフキシヲウ
チハラヒツ、ネフリケル夢ニ。僧ノ讀カケ、ル。歌ハ蠅也。
詞ハ蚊也如何。

清水寺觀音御歌

猶たのめしめしか原のさせも草われ世の中にあらん限は
物思ケル女ノハカシシカルマシクハ。シナムト申ケルニ
示ケル。

なにか思ふ何かなけくよ世中はたゞ朝顔の花のうへの露
梅の木のかたる枝に鳥のゐて花さけくくと鳴そわりなき
此ハテノ歌ハ。マツシキ女清水寺ニ百日參。ナクく祈念ス
ル夢ニ。御帳ノ中ヨリ小僧出來テ云ケル歌。

六角堂觀音御歌

とへかしなあしひたくやのま近きに九重照す月は物かは
あやしくも左のみみの聞えぬる風のするあとかき心みむ
此次歌ハ故白河院三條殿ニ御テ。六角堂百度マイリ。人々無
往反之路テ退轉之時。人夢ニミエケル歌也。此後三條殿焼亡
云々。

山深く年ふる我もあるものをいつちの月のいてゝ行らん
是智縁上人伯耆大山ニ參テ罷出ケル。曉ノ夢ニミエケル。
辨才天詩

三千世界眼前盡。十二因縁心裏空。

上句ハ於竹生島都良香案也。下句不能思得。而其後夢ニ辨才
天所被示云々。

天人歌

乙女子かおとめさひすもから玉を乙女さひすも其唐玉を
清御原天皇彈琴給之時。神女降テ舞歌云々。

仙人歌 松浦仙答歌

玉嶋のこの河かみに家はちれと君をやさしみ顯さすあり

權化人歌

聖德太子 救世觀音化身

しなてるやかた岡山にいひにうへてふせる旅人哀親なし

達磨和尚 文殊化身

いかるかやとみのお河のたえは社我大君のみなば忘れめ

是達磨餓人躰ヲ作テ伏チミテ。太子讀給返歌也。

行基菩薩 文殊化身

法華經を我えし事は薪こりなつみ水くみつかへてそゑし

靈山の釋迦のみまへに契りてし眞如くちせす逢みつる哉

波羅門僧正ノ答歌

伽毘らゑに共に契りしかひありて文殊のみ顔逢みつる哉
是ハ東大寺供養ノ導師ニ被請テ來臨之時。於難波津船ヨリ
下給時。行基波羅門ノ手ヲトリテ詠給歌也。波羅門ノナハ
菩提。南天竺伽毘羅衛國人也。天平勝寶ノ比也。

傳教大師

阿釋多羅三藐三菩提の佛たち我立袖に冥加あらせ給へ
是中堂建立之材木取ニ入袖給之時歌也。

弘法大師

かく計達磨をしれる君なればたゞきやた迄も至る^{へき説イ}之けり
いふならくならくの底に入ぬればせちりもすたも別れさり鬼

慈覺大師

大方にすくる月日を詠むれは我身に年のつもりなりけり
日没偈之意也。

雲のきて降春雨はわかねともあまのかきほはおのか物々
藥草喻品之意也。

慈惠僧正

そのかみの雲ゐのにはに餘れりし草の薙もけふやしく覽
右樹下集天台大師忌日ニ詠之。千僧賸一之意也。

空也聖人歌

一度もなもあみたふといふ人の蓮の上のほらぬはなし
書市門歌也。

聖寶僧正

花のゆめにあくやとて分ゆけは心そ共にちりぬへらなる
是ハハチハシメニテ。ルチハテニテヨメル歌也。

玄賓僧都

みわ河の清き流にすゝきてしわかなを更にまたば汚さし
惠心僧都 源信

みつは皆滅ひはてぬる旅なれば道なる屍とたにいはれよ
是ハ道路ナル屍ヲ見テ詠也。

檀那僧都 覺運

何のその誇らん人の僧からん清きをすむといふにや有覽
是馬内侍ニ名立テ送歌也。

齋然法橋

旅衣たち行道のとをければいさしら雲のほともしられす
是入唐之時。イツハカリ可飯來ト人ノ尋ケレハ詠歌也。

千觀内供

極樂ははるけき程ときゝしかとつとめていたる處之けり
空也上人

増賀上人

みつはさす八十餘の老の波くらげのほねにあひにける哉
書寫上人性空

千年ふる松たにくゆる世中にけふとしらてたてる我哉
是ハ松樹ノ切クヒニ火ノモユルナミテ詠歌也。

佛神感應歌 貫之

かき曇りあやめもしらぬ大空に蟻通しなは思ふへしやは
是ハ貫之紀伊國ヨリ上洛之道ニテ。俄ニ乗レル馬ノ不行之
處。道行人云。此ハ此處ニイマス神ノ所爲ナラム。年來社モ
ナクテシレル人モ不侍ト。イトウタテ御座神也。先々如此事
侍ト申ケレハ。御幣モナケレハ。只手チアラヒテヒサマツキ
テ。神イマシケモナキ山ニ向テ。抑ナニ神トカ申ト問ハ。ア
リトホシノ神トナン申ト云ニ讀申歌也。其後忽ニ起テ。ツチ
ヨリモ駿也云々。

赤染衛門

かはらむと思ふ命は惜からてさてもわかれん事ぞ悲しき
頼みては久しくなりぬ住吉のまつこの度のしるしみせ南
千年よとまた縁兒にありしよりたゝ住吉の松を祈りき
是ハ江舉周和泉去任之後重病惱。而有住吉之御崇之由。仍奉
幣彼社之時。三本幣ニ各所書歌也。其時人夢ニ。白髮老翁社
中ヨリ出來テ取此幣テ入。其後病平愈云々。

能因

天のかは苗代水にせきくたせあまくなります神ならば神

是貴國朝臣爲伊豫守下向之時。數月不雨降。民歎思之時。守
相語能因云。詠歌可祈請三鳥明神云々。于時所詠歌。仍大雨
下テ三日三夜不止云々。

經信卿

君かよはつきしと思ふ神風やみそそ川のすまむ限は
是承暦二年殿上歌合也。其後或人夢ニ。唐裝束ノ女共立居テ
詠吟此歌。各感歎云。依此歌帝王御寶算可増長云々。遂七十
七ニテ崩御云々。

おとなしの川の流はあさけれと罪の深さにゑこそ渡られ
是參詣熊野之女。チトナシカハノ邊ヨリ被返テ。ナクく詠
之。此後無事參詣。

津守國基

年ふれと老もせずしてわかか浦に幾代になりぬ玉津嶋姫
是ハ堂建立時。壇石取ニ紀伊國ニ渡ニ。若浦ノ玉津島ニ神社
アリ。尋聞ハ衣通姫ノ此所チ、モシロカリ給テ。神ト現テ垂
跡給也ト。彼渡人申タリケレハ。ヨミテ奉也。其夜夢ニ唐裝
上テ。裳唐衣キタル女十人計出來テ。ワレシキニ慶ニイフナ
リトテ。可取石ヤウレ教之。夢サメテ如教求之ニ。如夢告有
石。令打破之。一度二十二顆ニ破テ。壇ノ飾石ニ尅云々。

修理進(某妹。)

思出つやなき名なたつばうかりきと荒人神もありし昔を

是故待賢門中宮之時。女裝束一具失了。宮中鼓動。此女或屬女房被嫌疑。仍泣々參籠北野所詠歌也。其後實犯出來。一本ニ無之半物敷島也。

故顯輔卿

身をつみて照しおさめよ増鏡たか偽りしくもりあらずな
是白河院御在生之時。依人譏言無實出來。御氣色不快之時。
大唐鏡ヲ進北野トテ。鏡臺ノ裏所書歌也。其後無實露顯云々。雖末代無陵遲事也。

江都督

堯母廟荒。春竹染一掬之淚。徐君墓古。秋松懸三尺之霜。是於安樂寺行曲水宴。自所書之序文也。披講之時御廟鳴云々。肥後大進思兼語云。下向肥後之時。有故老之府官語云。件曲水宴之時文人云々。仍問廟鳴實不。答云。實也。始ハ御後山方響鳴。其聲近々也。而漸近聞。後ニ御廟中ニハ聞云々。

亡者歌

小野小町

秋風のうち吹とにあなめくおのとはいはし薄おひけり
ふくたひことにイ
人夢ニ野途ニ目ヨリ薄タイタル人アリ。稱小野。此歌詠。夢サメテ尋見ニ有一體體。目ヨリ薄生出タリ。取其體體テ閑所ニ置云々。此知小野屍云々。

義孝少將

しか計契りし物をわたり河かへる程には忘るへしやは

是ハ死去ストモ。シハラクトカクナセソトイヒケルチ忘ニケレハ。妹女ノ夢ニ見ケル歌。

しくれとは千草の花そちりまかふ何ふる里に袖ぬらす覽昔契蓬萊宮裏月。今遊極樂界中風。

是賀綠閑梨ノ夢ニ見也。

きてなれし衣の袖もかばかぬにわかれし秋に成にける哉又年妹夢ニ見之。

高遠卿

古里へ行人もかなつけやらむしらぬ山ちに獨まよふと

薨去之後。忌ニ籠ケル僧ノ夢ニ見之。

奥山の行ふもしらぬ山中にあはれ幾代をすきんとすらん蛇道ニ落之由ヲ示テ。息子ノ夢ニ見之。

公信中將逝去之後。

朝はらけくらしとなとて思ひけん獨もしての山は越けり逢事をみなくれとに出たてと夢ちならては逢よしもなし

長濟律師

たらちめの歎をつみて我かゝく思ひの下になるそ悲し

是卒去之後。母ノ歎テチタル夢ニミエケル。

橘爲仲朝臣

思ひきや常世の國のとたちにもひとり都を忍ふへしとは是保安二年十一月十一日夜。須孫保昌カ夢ニ。爲仲公家ニ奏

トテ。申文ヲ書テ見合侍。書ノハシニカケルトソ見家集。
堀川院御製

秋風のいなはの音に誘はれていつゝの宿をいてにける哉
是ハ崩御之後。或人ノ夢ニ見之。

右大將通房カクレ給テ後。宇治殿御夢ニ彼御歌トテ見ケル。
燈火の光はあまたみえしかとくらきやみにもまとふ比哉
右少辨定通

古里をわかれし秋をかそふればやとせになりぬ有明の月
逝去之後經年序。或人夢ニ月明夜殿上ニ候也トテ詠歌也。新
院因幡内侍ハ彼辨物申ケル人也。此事ヲ聞テアハレカリチ
子タル夢ニミエケル歌。

思出てゝ忍ふものはきく時はいとゝなみたの玉そ數そふ
此人ハ命ヲ奉テ。一日爲辨官由神明ニ祈請テ。拜任之後即逝
去ノ人也。

思ひいてゝ後に哀といふよりも限の折そとはゝとはまし
是或女物云ヲトコ逝去シ。彼時不問テヤミシ事ヲ後悔シテ。
伏タル夢ニ見之。

故將作 顯季

おきのすむ山端我に教へなんみしにもあらぬ宿は住うし
是薨去之後。人夢ニ見歌也。

別路は涙の雨のしけゝればみのしろの衣はすひまもなし

是前大相國侍中。某云者夭亡之後。弟僧ノ夢ニ異躰ノスカタ
ニモミエケレハ。ナトカハルモノハキタルソト問。返事ニ詠
之云々。彼侍モ件僧モ凡和歌ノ行方不知者云々。希有事也云
々。

臨終歌 參河入道入滅時

雲の上に遙に樂のおとすなり人にとはゝやそら耳かもし
蓮仲

草のはにかとてはしたり郭公しての山路もかくや露けき
是ハ人ノモトニテ俄ニ絶入タルチ。カキイタシタリケルト
キ。イキイテ、草ノ露ノアシニサハリケルニ。郭公ノナクチ
キキテヨメルナリ。

河口重如號山二郎判官代

たゆみなく頼みをかくるみた佛人やりならぬ誓たかふな
是モシナムトシケル時讀也。

幼兒歌

神無月時雨ふるにもくるゝ日を君待程はなかしと思ふ
是ハ人ノコノヤツナリケルカ。母ノモノヘユキタルチマチ
カネテ。シクレノシケル日ヨメル。

鶯よなとさは鳴そちやほしきこなへやはしき母や戀しき
コレハマヽハヽノモトニアリケルニ。チキサキツチナヘノ
アリケルチ。ワカハラノコニハトラセテ。マヽコニハトラセ

サリケレハ。ウクヒスノナクチキ、テヨメル歌也。

賤夫歌

時雨する稻荷の山のもみち葉は青かりしより思初めてきは泉式部稻荷へマイリケルニ。シクレノシケレハ。ミチニアヘリケル牛飼童ノアチ、ヌキテ。キセタリケルチカツキテ。ウレシキコトナリト云テヤミニケル。後ニコノ童式部カモトニキタリケレハ。ナニコトニナトタツネケルニヨメル歌也。無便心ノアリケルトナム。但闇巷物語難信仰事也。

こばた山すその、嵐寒ければ伏見の里もいこそねられねは俊綱朝臣ノ伏見ニ侍リケルニ。ヨルタ、スミアリキケルニ。アヤシノ宿直童ノツチニフセリテナカメケル歌也。聞之小袖ヲヌキテタマヒケリトソ。下藹ノキルツ、リトイフモノチハ。コハタトイフト云々。

乞者歌

ととほあるしなからもゑてしかなねばしらね共引心みむ是ハ人ノ家ニ入テ乞食シケル法師ニ。女ノ琴ヲヒキテ。コレナケフノ布施ニテカヘリ子トイヒケレハヨメル也。或人云。此乞食ハ三形沙彌也云々。

行ひのつとめて物のほしければ西をは頼むくるゝ方とて是ハ乞者ノツネニクルカ。東方ニキタル人ハモノヲトラセス。西方ニキタル人ハツネニトラセケレハ。ソコニテ讀メル

也。

已上佛神及權化聖人故。以此緣令綱羅之。衆生併可爲出離生死之因耳。

一誦文歌

吉備大臣夢違誦文歌

無乳男あらちをのかるやのさきにたつしかもちかへむすれはちかふとそきく

問夕食歌

ふなとさへゆふけのかみにものとはゝみちゆく人ようらまさによ

沐浴間槌鐘誦文歌

よひのかねつかさるさきにゆあふとみゝつまなくにいひてしものを

夜行途中歌

かたしはやつかせゝくりにくめるさけてゝゑひあしひわれゑひにけり

逢死人時歌

たまやかたゝみちわれゆくおほちたるちたらまたらにこかれちりく

見人魂歌

たまばみつぬしはたれとしられとら結ひとゝめつした

かひのつま

三返誦之。男左女右ノツマヲ結ヒテ。三日ヲ經テ解之云々。

鷓鴣時歌

よみつとりわかきもとになきつとり人みなきよつゆく
たまもあらし

志々虫鳴時歌

しむしはこゝにはなみきそしむらはかしまつかやに拾芥抄しつか
とにゆきてなきおれ

蛇食時歌

東や高間のやまにふねつくるおろたいてかたのきまへお
かし

霍亂誦文歌

しらたみはいくせわたりてつゝるてといくせわたりてこ
ゝのせそかし

〔東ヤ日向ノウミニサヲタテ、ソレチミル、アヘレシ
ラナミイ〕

胸病誦文歌

むねのうへへのうへきをすればかれにけりこひのあめふれ
うへきはやさん

造酒歌 家持如萬葉集。

なかとみのふとのりことゝいひはらへあかふいのちもた

かためにする

已上各三返誦之云々。

知坎H歌

かん日はたつにはしめてとをにとをひとつたらぬはさつ
きなかつき

夜書歌

やちまたや まもりやちまたやゆめかちまたやそのこ
しなすな

馬腹病歌

しらなみをとりのしきよてみとかとにつなくわかむまた
れかゝとばむ

又云。

しほやまにしほつかつくるしほつなにわかむまつなくむ
まのはらやむ

庚申セテヌル誦文

しやむしはいねやさりねやわかとこをれたれとねぬそね
ゝとれたるそ

丞相御所參拜之次尋申云。此本次第如何。仰云。此本ハ清
輔手自所令書進二條院之草子也。崩御之後。故皇后宮令傳
給。其後自伴皇后宮所給領也。又尋申云。囊草子名。令釋

云。而此本不候如何。仰云。然也。件釋ハ頗戲言歟。仍奏覽之本ニハ。依有其憚不書之歟。我ニ書テ給タリシ本ニハ。件ノ本ハシニ書タリキ。其本六角東洞院炎上之時燒之。此名者智袋也。又才學袋也。入袋常隨身。仍有此名。又令書進事等皆虛事歟。然者又虛言袋也ト釋タリシ奥記ハ。令賜後令書注御歟。實此本頗以賞重深秘歟。不可披露。穴賢々々。建久二年二月一日以或證本交合了。

或本奥書云。

此書日有風聞。尋召 從内裏慾望之。觀覽之後。相具御造幣可書進之由有 宣旨。仍書寫。平治元年十月三日進覽之。奇怪雜記。在生之間及天覽之條不便。兼又不可及外見之由有其誠。可秘云々。

永仁四年九月廿五日書寫之。

執筆中臣在判

觀應三年壬辰於茅屋終書功了。雖爲學業之妨。可備證佛之因云々。

執筆長坂

文字散々之間。頗難備證本。僻字多々有之。必可校佗本者也。

自中書相渡了。

爲旨

雖爲佗家之本。尙可秘之。

于時慶安元年戊子初秋上旬於武祿江府書寫之訖。

清尋

貞享二年乙丑仲春吉辰。

〔右袋草紙以萩野由之氏所藏本校合〕

續群書類從卷第四百六十一

和歌部九十六

袋草紙遺編

囊字四義籠

一者 其形囊也。

一者 智囊也。

一者 動納囊隨身也。

一者 多僻事。故虛言袋之義也。

縱法花之妙字中。如無量之義籠。

和歌舊儒藤原在判

一和歌合次第(内裏儀)

兼日定和歌題并左右頭念人等。天德時。以更衣藤原脩子同有序等。爲左右頭。承曆時。藏人頭實政爲左頭。右方依無藏人頭。以位階上臈用俊綱。(殿上歌合。尋常時以藏人頭

用之。) 亭子院時。以女六女七宮等爲左右頭。 郁芳門院

根合時。左右頭女房也。 天德四年時。藏人頭伊尹朝臣於

御前書分也。 永承四年時。五位藏人俊長執筆。書分左右

云云。

次左右各定雜事。(有定文。)

定文書樣。

定

歌合右方雜事

一牽幣。

一糝事。(其所行事々。)

一文臺。

一簪刺。

一燈臺。

一饗。

一女房檜破子。

一裝束。

年月日

各有行事。(郁芳門院根合時。江記說也。)

次祈禱奉幣。

承曆時。(八幡賀茂祈願可競馬云。)

郁芳門院根合。(石清水。賀茂。稻荷。住吉。北野云云。是右方也。)

次方人男女石敷事。(當日有反閑。)

次御裝束。(當日早旦。)

天德儀。(清涼殿西面。

永承兩度不分明。但古記云。西

對云。)

承曆。(清涼殿東面。)

天德御裝束儀。西宮記云。

早朝藏人雜色以下參上。供奉御裝束。其儀西廂皆懸新御簾。

(納仁壽殿也。第五間(渡殿間也。立御倚子。大盤所倚子

也。南方立御几帳。立置物御机。(在御座南。南四間垂簾。爲

左方女房座矣。北二間爲右方座。御前渡殿南北。各敷緣端三

枚。爲樂所召人座。)(此等鋪設依仰諸司令重云。)

如御記。暫撤清涼後涼兩度中渡殿北部云。

永承四年土御門右府記云。

御裝束。御殿(西對。南廂四間。卷廂四間御簾。下母屋二間東

西庇御簾。東第三間立殿上御倚子敷毯。南廣廂除御座間東

西。鋪緣疊各三枚。爲左右公卿座。當上達部座末簀子敷疊一

枚。爲左右方殿上人座。御前周廣廂。去長押南三四尺許。敷圓

座二枚。講師座。簀子敷圓座。爲籌刺座。同母屋東間并東廂。

爲中宮御所。母屋西間簾中。殿下令候給云。同六年根合

儀同也。(見同記。)

承曆殿上記云。

撤畫御座。敷二色綾毯代。立侍御倚子。當御座間孫廂左右。敷

南面疊各一枚。爲大臣座。同間各敷緣端疊。爲自余公卿座云

云。

郁芳門根合(御所六條院。江記云。)

寢殿南廂也。垂母屋六間并左右庇御簾。爲御所并女房所候。

中央間二間。東者郁芳門院御所。西者一院御所也。其中立御

屏風。關白候簾中給。其左右各三間。女房所候也。南庇左右妻

各三間。敷高麗端帖三枚。中央間二間左右。各敷圓座一枚。爲

講師座。南簀子敷左右各第二三間。敷紫端帖二枚。爲右方殿

上人座云。次左右方人參入集會所。承曆時。(左方弘徽殿。右

方下侍。郁芳門院根合。(左東殿寢殿。右同御湯殿。自餘

不分明。

次起限宸儀出御。天德時。(申尅。)(永承四年。)(戊尅。)(同六年根合。)(御殿油後云。)(承曆。)(戊尅。)(亭子院。)(巳尅。)(郁芳門院根合。)(及申尅始之云々。)(根合。)(江記云。關白候簾中給。剋限出自御所御簾西妻。候於簾下給。上皇又上御簾給。)(高三尺余許云。)(又天德歌合時。上御簾之由。見御記。)

次右召。公卿相分着御前座。(或兼日分之。)(永承根合。土記云。爰有仰云。上達部相分可着者。以前有議云。子姓有殿上之人々。各可候其方云々。暫持疑待重仰云。依位次可相分者。)

次左奏。有或時無時公奏之。天德并永承兩度奏不見。承曆。左奏左大將藤原朝臣。(後二條殿。)(無右奏。亭子院時。左

中務親王。右上野親王奏之。亭子院時。左奏付櫻枝。右奏付柳枝云。承曆時。經信卿記云。次數度蒙催之後。頭辨實政朝臣經東簀子進參。申於殿下云。奏候。隨殿下令候氣色。依有天許被仰其由。頭辨退去之後。殿下令目大將云。奏可持參者。大將

起座。經簀子。於東障子後。(左近少將隆宗取之立砌。件奏付松枝。)(指笏候取之。入自座末經孫庇。當御前間膝行。懸膝於長押。捧候松枝。主上令取奏。又大將持枝膝行。左廻起去。至初所返給松枝復座。主上披覽。令置倚子左方。奏書樣。和歌十

五首。其題々。年號々。唐紙(下繪)有懸紙。左少辨季仲書之云云。

次右奏。

次立左文臺。天德時。童女四人昇之。永承兩度六位昇之。承曆。五位六位等。亭子院時。五位右童結髮。郁芳門院根合。左五位六位。右童女二人。長元三十講歌合。左右共六位藏人上薦持打敷。

次置員刺具。昇人如文臺。或時無此事。內裏歌合員刺多小舍人也。郁芳門根合時。依上皇仰無員刺云。

次立右文臺并員刺具等。但天曆并承曆。右方先立之。自余左爲先。

天德歌合。西記云。右方令持洲濱二机(一歌一籌。)(參上。自御湯殿西邊獻。童子一人(着青色。)(執地敷立御前。)(高欄下。)(一人敷地敷之後昇之立其上。次小舍人實正執銀花柳枝下居砌。

次小舍人二人昇員指洲濱。置實正前。次左方自殿上侍方參上。童女一人執地敷。御前如右。次童女四人昇洲濱立地敷上。小舍人二人於砌下取傳。置員指前云。

永承四年殿上記云。左方參入。昇文臺持參小板敷上。右方昇文臺置殿上侍。戊尅出御。左方昇文臺持參御前。(六位昇也。)(立孫院東第二間。亦昇員刺具。置簀子敷東方。(六位同昇之。)(右方亦立同西

第二間。置同簀子敷西方。(六位昇之。)(敷所圓座各一枚。爲員刺座。(左右以大舍人一人爲員刺。)(關白左相府直衣候御簾中。講歌未始之間。相府先覽左右文臺員刺具等。同六年根

合。同記云。左洲濱居御前。員刺小洲濱六人。一人捧置初洲濱

東邊。右方亦如左云。承曆歌合。殿上記云。右方直自侍方昇

文臺立御前。次員刺具。次左方云。郁芳門根合。江記云。左方

立文臺。登自東二棟廊前階。經寢殿東并南簀子。自南面御座

間立之於燈臺北。(先敷打敷)右方五節儀也。其童宿裝束也。

第一童持敷物。自西并南簀子參入。登於御前間。敷圓座北。第

二童持枕几帳一本。是爲文臺。乃置於錦帖之上云。

次隨召供燈臺。六位役之。隨便一兩所立之。講師前短燈各

一本。根合時。最先供兩方燈臺云。是依入夜始敷。又天德時

以脂燭照之由見御記。左近少將伊涉。右近少將助信等役之云

云。四條宮春秋歌合時。亦以如此。左少將忠俊。右少納言伊

房。居兩講師中央云。

次置講師并判者圓座。六位役之。

次奏參人音聲。或時無此事。亭子院時。左黃鐘調。歌伊勢

海。右雙調。歌竹河。以方殿上人等用之由見彼時記。承曆時

左雙調。次歌席田云。根合時。(郁芳門)左方乘船。歌席田參上

云。經信記云。承曆時。藏人少納言基綱來上達部座後申云。

欲仕季音聲。殿下令候御氣。天許了。方人招出三位侍之從令

吹笙。侍從下立御障子後吹之。方人下立砌云。

次召讀師等。先召講師。次召讀師。(各用圓座)亭子院歌

合時。左講師爲女房卷御簾五寸許讀之云。野宮歌合。橘正

通一人讀兩方歌云。

永承四年歌合。土御門右府記云。次召講師。左經信。右資仲。

進自簀子敷。昇自御座間着圓座。(先是短燈臺各一本立。講者

圓座北長押。御所西對南座之。)次左頭中將。右頭辨。各自廣

廂進。居簀刺並講者後。取歌授講者云。

承曆二年歌合。經信卿記云。次召講師。左師資朝臣入自上達

部座末。候菅圓座。右通俊朝臣同參候。次左右簀刺者簀子座。

左實政。々々經上達部前。候文臺傍講師後。右俊經。々々同進

候。次被仰左右講師可進參之由。次左右簀刺童着座。(左若狹

守子有賢。右丹波守子家隆。)次召藏人。被仰可敷判者座之

由。藏人取菅圓座一枚。置御前間右程下。是新儀敷。依御氣

色。皇后宮大夫起座。經簀子者圓座。次頭弁取子日歌令授講

師。々々讀之云。予今案。以讀師稱後居敷。簀刺幼稚之故有

後居。有後居之時無讀師敷不審也。又天德歌合。或人記云。以

講師。

次仰判者。卅講歌合時。講師以前召判者之由見記。判者多

爲公卿別座。而中三位不座列之故先召之敷。判圓座臨期仰

之。藏人役之。

次臨技講期。撰堪能者一兩。可進參之由仰之。根合時。左通俊

卿。右匡房卿。應召候判者後長押上。殿上人候長押下云。

次講和歌。先左讀師取歌開之。授講師。々々讀之。次方舉聲

詠之。次右作法同前。一番若持者。二番猶出左歌。後云者負方

出之。若有持時付先番負也。亦有物合之時。先合其物。讀師取出之。講師受取之。置長押上。判者定勝劣。其後歌合云云。左右

講師陳是非事無憚。(見永承歌合。)承曆歌合之時。經信卿記云。頭辨取子日歌授講師。々々讀之。方人依御氣色雨三度詠吟。次讀右歌。左大丞三度詠吟。關白被仰左右云云。有所申者

各可申者。右講師并後居起難次第。判者被申云。左猶勝候者。籌判之籌云云。永承六年根合。土記云。左方經家進。居洲濱

下取出根。良基進取藥玉。置御前長押上。以根曳展一丈一尺許。右資綱進取出根。基家受取置御前如左方。根長一丈三尺

許也。(寬治根合作法又如此。)亦云。四番祝持。五番不因前番勝負。左方先可進者。是相撲最手。競馬十番等例也云云。同四

年歌合時。最後番不依先次左先讀云云。見同人記。次判定。天德時。小野宮殿聊稱申不堪之由。請天裁云。自余

不然歟。次講畢。左右講師籌判等退座。次勝眞舞。雖眞員多。最後番勝者可奏勝方舞歟。根合。江

記云。右方人議云。第十番歌若勝者。可奏勝方舞。是相撲時雖多眞。最後番若勝者。奏納蘇利之故也。右中辨(師賴)童時習

此舞。適在此方。可用意云云。天德時雖右方眞。遞奏歌曲云云。次勝方拜。承曆時左方有拜。自余無所見之。經信卿承曆

出之。若有持時付先番負也。亦有物合之時。先合其物。讀師取出之。講師受取之。置長押上。判者定勝劣。其後歌合云云。左右

歌合記云。殿下宣。左方。上達部云。若可有拜歟。人々被申云。拜尤可候者。公卿并方殿上人列立庭中。(三行。六位又有五位後。)再拜復座。

次盃盤事。天德歌合時。御厨子所供菓子干物。(重信陪膳。)次供御酒。左大臣起座獻盃云云。見西記。亦歌講以前。賜酒饌於方公卿云云。永承并承曆時。此事不見。自余歌合皆有此

事。女房中或檜破子云云。祐子內親王歌合時。盃酌數巡後講和歌云云。次御遊事。召堪能公卿并殿上人等。令藏人置御遊具。天德

時地下召人相交由見御記。承曆時用之。永承兩度共無召人。根合時依一院御忌月無御遊事云云。永承根合時。主上

令吹御笛。此由見土記。次大臣以下賜祿。大臣夏裝束一襲。大納言白合御衣一重。參議白單重御衣。白

余足絹。三十講歌合時。判者中三位賜祿。(蘇芳生掛袴云云。春宮大夫。(賴宗。)中宮權大夫。權大納言等被曳馬云云。祐

子內親王歌合時。右大臣(大二條殿。)內大臣(堀川殿。判者也。)各被曳馬云云。前駝者取之。上東門院菊合時。人々賜御

衣由。見假名記。自余歌合皆有祿。但式法不分明。三十講歌合時。中三位賜祿。東簀子敷起拜之間。超卿相座。是情感之

余。不知手之舞足之蹈歟云云。卷第四百六十一 袋草紙遺編

八百二十三

次有宿願事。後日果之。三十講時。左勝方人八幡十烈。亦參詣住吉社講和歌云。

承曆時。八幡賀茂競馬。根合時。左賀茂競馬。右八幡競馬云。自余歌合無所見也。承曆歌合。五

六月依御忌月。三十日遂賀茂競馬。遠所事雖叶之故也。仍先八幡奉幣。(有告文云云。)

一歌合日裝束。亭子院并天德歌合束帶。永承四年。(關白殿直衣云云。見殿上記。)

承曆時無所見。定束帶歟。(直衣布袴云云。直衣下襲。或本用俊帶云云。)

三十講并寬治時。直衣或衣冠。判者輔親卿直衣布袴。(直衣下襲川後事云云。)

知足院入道殿仰云。經信卿語云。件日賀陽院東門より上達部の前聲あり。見之輔親也。かひ練重を着。日出かりし事也云云。かひ練重は紅行に裏は張也。四條宮春秋歌合。公卿或束帶或直衣。

殿上人皆束帶云云。祐子内親王歌合。大臣以下大納言以上烏帽子直衣。殿上人不得進從云云。獻歌者依召候南簀子云云。

主上御服不分明。若御直衣歟。但亭子院歌合時。檜皮色御衣。僧面也御袴之由。見假名記。

一歌合判者講讀師并頭者或撰者清書人等(但密儀并次所不載之。)

天德四年歌合(去年殿上侍臣鬪詩。爾時命婦等相語曰。男已聞文章。女宜合和歌云云。)

判者。左大臣殿。(小野宮殿。)

講師。左。左衛門督延光朝臣。

右。右近衛中將博雅朝臣。

讀師。不見。

撰者。左。朝忠卿。右。平兼盛。

題者。勅題歟。

左歌。銀鶴含歎冬一枝。以黃金作八重葩。以青銀作數行葉。各書一首。右歌。以色紙書小字。詠花樹歌。各結付其枝。題好

鳥付。又令持其鳥嘴。至于春霞暮春首夏戀之詞。或在人手。或載漁舟云云。

寬和二年歌合(左勝。二十番。)

判者。中納言義懷。

左。權中將公任朝臣。右。左近將監長範。

講師。左。權中將公任朝臣。

永承四年歌合(十一月九日。左右持。)

判者。正二位權大納言源師房。

講師。左。從四位上左馬頭源朝臣經信。

右。從四位上右中辨藤原朝臣實仲。

後居。左。藏人頭正四位下右近衛中將兼春宮亮右京大夫源朝臣資綱。

右。藏人頭正四位下左中辨藤原朝臣經家。

式部大輔國成朝臣。

題。

撰者。

清書。左歌。兵衛佐師基。

右。侍從中納言乳母。故行賴女。

左。造松枝置匣中。以洛右索枝。其葉書和歌。

右。銀硯宮納草子十帖。繪以題趣。書以和歌。

同六年根合（右記云。去三月晦。開召堪能上達部一兩殿上人等。有弓事。畢有木雞獻。依其勝負有可令闢根之仰云。）

判者。內大臣堀川殿。

講師。左。齋院長官長房朝臣。

如土記。講師左良

右。右近中將隆俊朝臣。基。右基家云。

題者。

撰者。

清書。左。散位公經。右。兼行。

土記云。公經近日依處分事。付檢非違使廳使者。頗不落居事

歟云。

左方。洲濱立松鶴。右立八足机一脚。其上置和歌一卷。五首書

此一卷。右立大鼓一面。其前立胡蝶舞童六人。其翼書和歌云

云。十五卷左隣

承曆二年歌合

判者。大納言顯房。（有難判。不知作者。）

講師。左。左中辨源師資朝臣。

右。右中辨藤原通俊朝臣。

後居。左。頭辨藤原實政朝臣。

右。但馬守橘俊綱朝臣。

題者。實政朝臣。

撰者。左。經信卿。右。

顯昭傳聞。右方匡房令撰之云。

清書。左。左大辨伊房。（以金泥書之。）

右。藏人辨伊家。

左歌以方磬爲文臺。以鏡十六枚爲磬。其面以金泥書和歌云。

右歌卷物三卷。各隨題目圖其趣。書和歌納銀透宮云。

延喜十三年亭子院歌合（寬平法皇也。）

勅判。臨期爲判者。令尋藤原忠房給之處。不參云。仍勅判

也。

講師。左。女房云。御簾卷五寸許云。

讀師。題者。撰者無所見也。

者自然流布云。

霞歌付梅花時。鳥歌付橘。自余歌造鷄舟入。箒令持左右。無

分別。尤不密。

故春宮大夫（師賴）。歌合。俊賴判之。而基俊加難判。賀陽院歌合。經信卿判。櫻題歌。伯母與匡房合之。判者定持。而伯母大舉緣して後日訴申殿下。經信聞之。以消息且陳送。伯母亦陳之。但區々末生之意。件番勝負無私見之如何。奈良花林院

歌合。其俊判。後日作者宗延法師出陳帖。皇后宮春秋歌合。堀川右府判。大輔雁歌依病負畢。而有病歌古歌合に多由を稱て。於以有執氣。高倉一宮歌合。同大臣判。資業卿櫻歌定負。後日宇治殿下閑居眺。(之殿)資業參入候氣色。殿下令問云。誰人哉。答云。資業。被仰云。何等事哉。申云。可訴申之事候。亦仰云。如何。資業竊に彼櫻歌を讀上云。是以何所惡て負候哉。除

愁思給候云。殿下暫案仰云。所申尤然云。資業逡巡て申云。是を爲承候。百除薛思給也。有悅氣退出云。凡和歌評定。叶傍輩之意事極大事也。況面々作者意哉。先賢皆如此。能々可用意事也。長元歌合時。經信卿生年十八也。爲參河權守。舍兄經長卿爲藏人辨。件歌等を爲評定。以經長四條大納言長谷に遣之。經信所望經長車後。參納言公。被何料光臨哉。經長云。爲承御評定趣所望て參上也。納言有興之由を示。仍件判定詞等を具以聞之云。

長元歌合の日。能因衣蒙して竊入て聞之。戀歌に。(之殿)黑髪の色もかはりぬ戀すとしてつれなき人に我そ老ぬるといふ歌を讀りと思ひて。勝負聞に參入也。而敵方より。逢ふまてとせめて命の惜ければ戀こそ人のいのち成けれと云歌を講すと聞て竊退出云。非敵之由存歟。

高倉一宮合。歌人。左大貳三位。江侍從。伊勢大輔。出羽辨。小辨。相摸也。右資業。兼房。家經。範永。能因等也。今一人を兼

長經衡競望之。而兩人入女房一人不足。亦一人を抽入は等同者有懇望。又共に不入は女房一人可餘。宇治殿思食煩。于茲堀河右府以加賀左衛門枉て吹舉。無許容。是未至之故歟。仍兼長經衡等爲試當坐賜題云。水邊歎冬。兼長歌云。

いかなれば岸に八重咲山吹のひとへに池の底にすむらん經衡歌云。

池水に咲かゝりたる山吹を底にしつめる枝とみるかな右府判云。持也。是人兩人て女房不足の所に入左衛門を志也云。滿座は兼長勝と思へり。然間兼長服假に成て。遂被入經衡云。昔事能有清撰歟。

此事有上登。衡云。宇治殿下被仰云。齋宮女御歌合は左右歌忠見一人讀之物云。予見彼家集實也。左料右料共に讀之。

又同女御天曆十年歌合。(號麗景殿女御歌合。)左歌は兼盛。右歌は中務各一人して讀之云。

同。三十講歌合時。相摸所詠の五月雨はみつの御牧のまこと草苅ほす障もあらしと思此歌講出時。滿座殿中鼓動及郭外云々。

江記云。俊兼曰。先年故土御門右府大納言時歌合。棟仲爲講師。而有露被轟由歌。敵方難之。棟仲當坐稱古萬葉集。讀出證歌一首云。右府後日被惑。予曰。當座讀宜歌之旨。雖似擬對。

歌一首云。右府後日被惑。予曰。當座讀宜歌之旨。雖似擬對。

歌一首云。右府後日被惑。予曰。當座讀宜歌之旨。雖似擬對。

〔奇歌〕
至虚言者於無使事也云々。

同 郁芳門院根合時。江記云。右中辨師頼曰。尾張守許孝善來向所。國基(佳吉神主。)歌未見之前破却。可入孝善歌之由申請入之云々。彼時左右相挑之間可爲噉々。匡房卿云。右大辨通俊歌。至予者不被挑。前年書狀于今猶有之。其書云。和歌之道。雖能宣忠崇不可恐之。於貴殿者深所恐申也者。件書狀爲明鏡。何可忘彼書哉。俊兼聞之大咲云々。件歌合に左方人以中納言中將(今入道殿下。)爲言口无^{止賊}心云々。隨殿下頓令制止給。少年之人不知和歌案内。何爲殿上人之言口乎。就中累葉之祖風无此例云。(已上見江記。)

一古今歌合難(尋古跡可難。)

延喜十三年亭子院歌合(勅判。)

二番櫻

左

躬 恒

さかさらん物ならなくに櫻花おも影にのみまたき見ゆらん

右

貫 之

山さくら咲ぬる時はつねよりも峯の白雲立まさりけり

左。らんと云事ふたつあり。右は山峯といふ事またありと

て。持になりぬ。

賀陽院歌合に。以此例山與峯に准據て。晝與日疑病。又俊頼基俊同引此例。以山峯稱病。但此評定少有不審。彼判詞能可

了見歟。就中以山峰爲病は。河を讀て淵瀬とは不可詠歟如何。

三番

右

是 則

みちよへてなるてふ桃の今年より花咲春にあひそしにける
としと云へきとをよとよめりとてまぐ。

四番櫻

左

伊 勢

磯上ふるのやしろのさくら花、こみし花の色やのこれる
^{山イ}
^{イ无}

こそをこひて。ことしの心なしとてまぐ。

七番

左

躬 恒

わか心春の山へにあくかれてなか／＼し日をけふも暮しつ

右勝

貫 之

さくらちる木の下風は寒からて空にしられぬ雪を降ける

左。なか／＼しと云事にくし。ちすくめてかたすへたる

やうにて。つふやけりとてまげぬ。

二十一番

左勝

〔源元方(明恒とも) 子院歌合〕

けふよりは夏の衣に成ぬれときる人さへはかはらさりけり
きる人さへはあちなしとてまぐ。

〔前巻〕

私考。寛平御時后宮歌合歌。古今。

ちられ共かねてそおしき紅葉は、今は限の色とみつれは
又考。同歌合。

七番左 詩

小式命婦

足引の山かくれなるさくら花散のこれりと風にしらすな

右

中 務

年ことに來つゝ我みる櫻花かたみも今はたちなかくしそ

左歌。いとおかしくてさそありなん。右歌。いつこそ

頗荒涼也。今はといふとよしなきとなり。仍以左爲勝。

天徳四年内裏歌合(判者小野宮殿。)

三番 驚

左 勝

朝 忠

我宿の梅か枝に鳴うくひすは風のたよりに香をやとめし

右

兼 盛

白妙の雪ふりやらぬ梅かえに今そ驚春と鳴なり

右歌。春となくとそらとなりとて貢乎。今案に春となくと

は春になりたるけしきになくなり。

八番 歎冬

左 勝

源 順

春ふかみ井手の川なみ立かへり見てこそゆかめ山吹の花

右

平 兼 盛

ひとへつゝ八重山吹はひらけなん程へて匂ふ花とたのまん

左歌いとおかし。あゝ事なりときこゆ。右歌は八重山吹の

一重つゝひらけは。ひとへなるやまふきにてこそあらめ。

心はあるにゝたれとも。やへさかすはかひなくやあらん。

又下句のはて。上の句のはてに同じしもあり。仍以左爲

勝。

九番 藤

左 朝 忠

〔前注〕藤云。是奇歌合例歌

紫に見ゆる藤なみうちばへて松にそ千代の色もかゝれる

右 勝

兼 盛

我ゆきて色見る計住吉の岸に藤なみおりなつくしそ

水なくて藤なみといふこと古歌におりゝあり。されと

尋人なければ。さてとゝまれる成へし。歌合にはいかゝあ

らん。とによせぬはいはれなし。猶水岸なとにそよすへか

りける。歌はきよけなり。右。おなし波あるに。岸によせた

ればたよりあり。かくそふるきしにある藤なみと。をしな

へていふ事にはあらず。御氣色もさやうにそみゆる。小臣

問源大納言。尤難也。暫持疑之間。右方人申云。左歌。藤浪

水によらすいかゝと愁申事。理無可然。仍以右爲勝。

是爲例。國信卿歌合に隆源歌に。無水て波讀を爲難。作者

陳云。貫之歌に。

待つて諸共にこそかへるなれ波より先に人のたつ覽
といふに。重難に。天徳歌合にも。古もなきにはあらねと
も。歌合には猶可避之由有と云々。予今案に。古今集。

我宿にさける藤波立かへり過かてにのみ人のみるらん
云々。又有萬葉集如何。又云。

藤なみの花は盛に咲にけりならの都をおもほゆやきみ
十一番 初夏

左持

能 宣

なく聲はまたきかれとも蟬のはの薄き衣をたちそきてける

右

中 務

夏衣たち出るけふは花櫻かたみの色もぬきやかふらん

左歌は夏のはしめとおほゆれと。右はたちいつるとあれ
は。左よりはよしとそおほゆる。されと歌から同とて爲
持。

十二番 卯花

左

忠 見

道とをみ人もかよはぬ奥山に咲るうの花たれとおまし

右勝

兼 盛

嵐のみさむきみ山の卯の花はきえぬ雪かとあやまたれつゝ

左右山の卯花をしもおもひよりけんそいかゝ。右。同やま
なれとさまさされり。仍爲勝。

十四番 時鳥

左持

忠 見

さよふけてねさめさりせば時鳥人傳にこそきくへかりけれ

右

元 眞

人ならはまてといふへきを時鳥ふた聲とたになかて過ぬる

左はきかむともおもはてねさめけんそあやしき。歌から
おかし。右。人なりとも今一聲きかんとて。まてといかゝ
いはん。しはしまてなといふ心か。ことたらぬ心ちをす
る。いつれもおなしほと。歌なれは持にす。

十六番 戀

左勝

朝 忠

人傳にしらせてしかな隠れぬのみこりにのみ戀や渡らん

右

中 務

むは玉の夜の夢たにまさしくはわか思ふ事を人にみせはや

左。いとおかし。つよき事なけれとさてありなん。右。よる

といふとはぬはたまとそいふよし。むはたまとかけり。か
きあやまれるにやと其由奏すれば。誤あらはいかゝと仰
事あれは。左勝。

十八番 戀

左持

本院侍従

人しれす逢をまつまに戀しなは何にかへたる命とかいばん

右

中 務

ことならは雲井の月と成なゝん戀しきかけや空にみゆると
左右さても有なん。右。ヒ下句首字同にくさげにきこゆ。
左人まうせと。さざる難にはあらぬにそ。仍爲持。

應和二年内裏歌合(五月四日。判者不注。若勅判歌。)

六番 待郭公

左 勝

侍從佐理

五月雨にふりてゝ鳴と思へともあすの爲とや音を残すらん

右

靱負藏人

菖蒲草ねを深くこそほりてみめ千年も君もひかんと思へは
ほとゝきすといふ事なけれと。歌のすかたきよらかなり
とて。左勝。

八番

左 持

掃部助文則

夜もすから待あかしつる時鳥いつかは聲をさくへかるらん

右

美作藏人

菖蒲草またねもみえぬに時鳥いつかとまたて聲をさかはや
歌のすかたまさりたれと。またねも見えぬにと。わたくし
心あるににたりとて。持になりぬ。

九番

左

文章生共政

五月雨のけふまで忍ふ時鳥いつかあくまで聲をふりてん
右 勝

倉命婦

夜もすから待明しつる時鳥いつかあやめの音をほきくへき
戀のこゝろににたりとて左負。

野宮歌合(天祿三年八月十八日。判者順。)

二番 女郎花

左 勝

帥 君

玉のをゝみなへし人のたゝさらはぬくへきものを秋の白露

右

有忠朝臣

くらふ山ふもとの野への女郎花露の下よりうつしつるかな
有忠。嵯峨野なうちすさて。くらふ山までもとめありきけ
んあいなし。左。やまととにいにひにくきとをこそそへては
よめとて。

承暦歌合に以此例吉備中山霞を爲難。近代歌合に又少々此
難出來。但前大相國歌合に立田山霞難之。而判者故將作。古
今集の龍田山の鶯聲の歌をひいて不爲難之。

四番 蘭

左 勝

辨 君

わかれゆく秋ををしちに鳴虫は涙をさへやとゝめかぬらん

右

守 文

あたしのゝ草むらにのみましりつる句は今や人にしられん

守文。あたしのゝ花。なたかゝらされはにやあらん。あり
所しる人すくなし。辨君歌。かみには花もなくてしもに匂
ふとある。おほつかなし。ことなる事はなけれど。いまひ
ともしなくして。しらにとあるとすこしまされり。

五番 草香

左

左衛門

とこ夏の露うちばらふよひことに草のかうつる我袂哉

右勝

爲憲

野へとに花をしつめはくさ／＼のか移る袖を露けかりける
左衛門君すこしやはらかなれとも。かみの草の詞も上の
くさにて。下ばかりをかくしたれは心もえず。人にかくれ
ん人の。身をのみかくして。かほ見られんはいはれなしと
て負。

九番 菊萱

左勝

小榮人

ゆく秋の風にみたるゝかる萱はしめゆふ露もとまらさり鬼

右

菅野忠延

移しうへはつかのまもなく菊萱のみちよの敷をかそふ計そ
忠延かみちよのかすといへる。秋のゝかるかやにはあら
て。春の山へにさきたる桃のはなとなんおほゆるとて負。
十番 虫聲

左勝

但馬君

浅茅生の露ふきむすふ木からしにみたれても鳴虫の聲哉

右

橘正道

秋風に露をなみたと鳴むしの思ふ心をしる人そなき

此の虫の音は露ふきむすふといへる。いひなれたりなと
定ほとに。正通か申すやう。木からしとは冬の風をこそい
へ。この比の風をいはい。雨をも時雨とやいふへからん
と申をきゝて。みすのうちよりそかゝる事はふるきこと
をこそはためしにはせめ。

木枯の秋の初風吹ぬるをなとか雲ゐの鴈の音せぬ

又

我宿のわたもいまたからなくにまたき吹ぬる風の風
なといへるは。冬のあらしを秋のはつ風といへるにや。そ
のわたりをさため申たまへとあるにつけてかちぬ。

三十講歌合(長元八年。列者中三位。)

三番 池水

左

資業卿

千世をへてすむへき水をせき入て池の心にまかせてそみる

右勝

四條大納言或本中
納言

年をへてすむへき君か宿なれば池の水さへにこらさり鬼
上眞實秀歌之故歟。尤可然。以之思之。當家主人君は時貴

人准據之可用意事也。又雖有少々咎。歎歌劣は隨運て判定常事也。

承曆後番歌合の祝歌に匡房卿詠云。

君か代は行衛もしらすわたつみの苗代木に成かへる迄是勅判云。長元歌合にも。山の海と成あちなしと被定たり。是心似たり。左歌は心行ても不覺とて定持御。

又賀陽院歌合時。通俊卿歌雖犯病。歎歌依不勝被定持。是先例也云々。又郁芳門院根合之時。判者右方人竊示云。一二書歌右勝也。然而依無益所持列也云々。如此之用意先蹤也。又判者里亭有判定事。判者一人求瑕瑾。極大事也。故老云。判者勿強難之。勿強好之。唯難遁所許を可咎云々。而如前金吾之判大略放言也。不甘心。又於當座難判定。其後於里亭閑加取捨之詞常事也。野宮歌合も可然。

又判者爲撰者常事歟。皇后宮春秋歌合。左歌は判者大臣撰之云々。

又判者爲作者之時。至我歌者所加判故實歟。但人々心々也。其俊云。或所歌合相兼判者之時。判詞之爲判者之人不詠歌者例也。假雖詠歌。於自作之番不加判。是故實也。仍不加判云々。雖然殿下歌合時。又有勝負。若是御定歟。

大治三十八月實出歌合若俊判之而合卿仲卿定持者也。顯仲卿爲判者之時。以我歌皆爲負。(中御門中納言歌合。)

俊賴朝臣爲判者之時。以我歌定負。(殿下歌合。)

將作殿爲判者之時。有勝負。(右武衛歌合。)

六條右府爲判者之時。有勝負。(根合。)

經信卿爲判者之時。有勝負。(扇合。)

堀河右大臣爲判者之時。有勝負。(永承根合并四條春秋歌合。)

輔親卿爲判者之時。以吾歌爲持。但一首也。三十講歌合。但六條右府以下は人に代て詠也。

故人云。和歌判者は非荒涼者之所爲。一者家重代者若は達道者。次者高貴有威權人云々。予今案。雖如此之輩。皆難遁誹謗歟。弘徽殿女御歌合義忠判之。家經并相摸等加難判。

承曆二年歌合。六條右府判之。又有難判。不知作。上東門院菊合(十番。長元五年十月。)

判者。

講師。左。中宮權亮藤原兼房朝臣。右。左少辨源經長朝臣。

臣。

讀師。白河院皇女。郁芳門院根合(十番。寛治七年。左右持。)

判者。右大臣。(六條右府。)

講師。左。四位侍從藤原宗綱朝臣。右。右近少將源能俊朝臣。

讀師。左。藤原季仲朝臣。右。右中辨源師賴朝臣。

題者。匡房卿。

撰者。左。右大辨通俊。右。右大辨匡房。

清書。源大納言雅實書左右歌。

江記云。源大納言雅實書兩方歌。左方愁之。天德詩合時。道風書兩方詩。強不可爲愁事也云。

左以沉作鏡管。以懸枕爲和歌斷紙。續色之紙。以水精爲藉軸。

一卷書五首。右以枕几帳一本爲文臺。銀手歌云。居其帳白浮

泉綾。其上銀銅薄色紙形染之。書和歌云。

同院前裁合(嘉保二年。右勝。)

判者。左大臣。(堀河源左府。)

講師。左。左中辨宗忠朝臣。右。右近少將能俊朝臣。

讀師。不見。

撰者。同。

皇后宮春秋歌合(天喜四年。左勝。四條宮。)

判者。內大臣。(堀河右大臣。)

講師。左。權亮藤師基。右。亮藤師基。

讀師。左。頭中將源隆俊。右。頭中將顯房。

題者。

撰者。左。內大臣。右。民部卿長家。

清書。左。兼行。(以眞名書之。)

土記云。前一日左方人向內大臣家(判者。)

部卿家(長家。)

撰定。民部卿以自作多入。方人含咲者案云。

亦云。左方和歌書之人相違。忽議定云。日來定故入道中納言

皇。(行成卿女。)

而闕機云。仍語菅典侍故參議輔正女。稱所

勞不書云。仍有殿下御氣色。以兼行以眞名令書之云。左。銀

舟盛和歌葉子十帖。畫工圖歌意。右。鑲金銀鏡臺。以和歌二卷

爲鏡枕。各繪歌念。以金爲表紙。

同宮扇合(寬治三年。右勝。)

判者。民部卿源經信。

講師。左。侍從宗信。右。辨基綱。

讀師。

撰者。

野宮歌合(天祿三年九月二十八日。左勝。員八番。)

判者。前和泉守源順。有判狀。

講師。加賀掾橋正通。讀兩方歌。

祐子內親王歌合(永承五年六月五日。)

判者。內大臣。(堀河殿。)

講師。家經朝臣一人。讀兩方歌等。或不。

讀師。

以女房爲左。以男爲右。各相番合之。和歌又進各草。其間互施

風流云。

後朱雀皇女

正子內親王造帶合(三番。)

判者。不見之。

講師。左。四位少將。

右。兵衛佐。

左。銀透宮蓋入古今繪七帖。(此說誤)新繪銀造氏一帖。右。銀透宮納繪

造幣六帖。新歌繪銀草子一帖。

麗景殿女御歌合(十二番。左勝。)

判者。

講師。左。延光朝臣。

右。保寬朝臣。

弘徽殿女御歌合(長久二年。右勝。)

判者。大和守藤義忠朝臣。(有家經相摸等難判。)

講師。

京極御息所歌合(延喜二十一年三月。左大將殿敷。二十二番。)

左右放歌。

判者。大和守藤忠房。

春日詣以忠房所獻之歌返被合(云云。)

御堂歌合(長保五年。七番。右勝敷。常非歌合儀。)

判者。左衛門督公任。

講師。

三條太政大臣前裁合

無判者。

講師。左。紀時文。

右。平兼盛。

三十講歌合(長元八年五月十六日。左勝。)

判者。祭主二位輔親。

講師。左。左少辨經長。

右。右少辨資通。

讀師。左。右近少將行經。

右。中宮亮兼房。

左。扇十枚書和歌。納銀透宮。右。作銀墨麥栽櫃內。銀蝶各書

和歌十首云。

高陽院歌合(左勝。)

判者。帥大納言經信。

講師。左。右大辨基綱。右。右中辨宗忠。

女爲左。男爲右。相番合也。

一撰者故實。雖非秀逸。可然云公達并重代者歌必可入之。又雖

重代後生未詠晴歌(之誤)可有議之由。匡房卿所示也。但不秀逸之

時事也。於秀歌者不可依人。寬治根合。右撰者匡房卿也。件

記云。大理(俊實。)歌中五月雨歌頗宜。唯水押棹(得歌)水盆等若爲

病敷。仍不入之。戶部(經信。)邊歌須一首必入也。然而於不快

也。仍不入之。故伯母歌一首必可入之。是賴基。能宣。輔親。伊

勢大輔。伯母。安藝君六代相傳之歌人。兼候新院。爭無用意

哉。然而無宜歌。仍祝歌可收拾之由。度々示之。賴綱朝臣好此

道經年之者也。其掣能俊朝臣歌須入一首。而無宜歌。又讀左

方歌之由有風聞。仍不入之。抑女房歌中淺沼(人々云。太遠)

遠也。仍除之。件沼在陸奥。京都所爲一月余路也。不可逢今

日事。所引之富浦定黃損敷云。又云。大貳女房歌時鳥歌入

之。爲譜代歌仙之故也。紫式部。故大貳三位并件女房也。亦云。左方不得等一。以孝善(青衙門。)歌立一番。以成元盧橘之歌立二番。若非佳境者。如然輩歌不可必入之云云。長元歌合時。四條大納言入道居長谷。左方人々行向令撰歌。能因時鳥歌云。

時鳥きなかぬ宵のしるからはぬる夜も一夜あらまし物を入道云。歌合には不似云云。仍不入之。予案之。夜居と夜と尚不快之故歟。又月歌云。

月影の更にひろまともゆる哉朝日の山をいてやしぬらん此歌可入云云。而聞能因歌之後云。更字別標也。不可入云云。歌事古今依人歟。於秀歌者少々雖有瑕瑾可撰入歟。先蹤多存。天德歌合。順歌云。

こほりたにとまらぬ松の谷風にまた打とけぬ鶯の聲不留ヌ。不解ヌ。如近代之説は病也。但近代義難指南歟。三ノ講歌合に堀川右大臣歌に。

あふまてとせめて命の惜けれは戀こそ人の命なりけれ介禮。々々。又病也。亭子院歌合にらんらんを定病。是同事也。但大宮左府語云。此歌有病事。作者并方人不覺悟。講時判者又感歎云。歌者本來者也云云。此時作者大臣有病事を始覺悟して貴舂給之處。遂無沙汰勝畢。後日相改之。自筆集には命のおしきかなと被書。事外劣也云云。皇后宮春秋歌合に

大輔歌云。

さ夜ふかく旅の空にて鳴鴈はをのか羽風やよさむ成らん是は無左右病也。而作者縱雖誤。撰者若^(也)は多方人等不覺悟哉。唯不堪優美。取出之又入之歟。彼歌合假名記にも存之由見。件記者大輔歟。長家卿云。己か羽風や寒氣かるらんと可讀云云。區々末生猶不甘心事也。

重服人歌合作者以無何事歟。一條院御時。弘徽殿女御歌合。相摸爲重服者讀之。見摸之雖判也。判者骨法

雖存當仁之由。當座仰者一重者稱不堪可固辭歟。天德歌合判詞云。左右歌讀合畢。勅小臣曰。可定奏勝劣者。遂巡奏云。小臣雖纔備三十一字。難弁勝劣之義。伏請天裁。勅云。不定勝劣。已失今日輿結後代舊歟。速猶可定申者。遇天氣不許。表空慮之尤拙而已云云。又三番詞云。右講師博雅朝臣誤讀柳歌。左方云。須讀申鶯歌。而誤讀申柳。於今者不可讀申歟者。以左歌論申旨奏聞。仰云。可被定申者。小臣奏云。左方之所申非無謂。如是事只隨時之議。但依人之誤。何無其歌。乃令讀申。于時博雅朝臣頗變色。速不讀之。雖讀揚其音振被出。左方人咲云云。

左

忠見

右

兼盛

忍ふれと色にてにけり我戀は物やおもふと人のとふまで
 小臣奏云。左右歌共以優也。不能定申勝劣。勅云。各尤可歎
 美。但猶可定申者。小臣譚大納言源朝臣。（西宮殿也。）敬屈不
 答。此間相互詠揚。各以請我方之勝。小臣頗候天氣。未給勅
 判。令密詠右方歟。源大納言密語云。天氣若右歟者。因之遂以
 右爲勝。有所思暫持疑也。但右歌甚好矣云云。故老云。此日兼
 盛正衣冠參陣。終日祖候。聞此歌勝之由。拜舞退出。至自余歌
 勝負は不執云云。

長元八年三十講歌合記云。左右每講和歌。判者（輔親。）以相
 定。第四番題昌蒲。而左方先獻羅麥歌。次右方出昌蒲歌。依有
 乖違改獻同題歌。各判決之後。右方題之次第已以超越。待御
 定之後。可獻次歌者。殿下仰云。天德歌合時。（西卷）兩歌合時。一題依違。兩歌
 棄置。乃是勝負未決之前。辯論秀興之故也。而今評定之後。奈
 何論難。不致前詞。何有後求哉。仍右方獻羅麥歌。又至于講照
 射之比。右歌有燈之詞。左方云。以照射射燈。古今之什所未聞
 也。彼此交爭。左方遂勝云云。

永承四年歌合。判者土御門右府記云。次左頭中將。右頭辨。各
 自唐梨進居壽刺。（實辨）弁講者後取歌授講者。此間主上直勅下宣
 曰。可申歌善惡者。事起卒爾。既忘進止。因然之間。稽首稱唯云
 云。

同六年殿上根合。同人記云。二番左先進。右亦進。右方根少許

長歟。而相論未有一定之間。按察大納言押左詞云。被處持可
 定者。爰內府（判者。）大咲曰。勝負不定之時請持。是已稱負
 也。右方殊無陳詞。爲負畢云云。又云。一番菖蒲。左方先讀。方
 人舉聲詠之。次右讀一兩詠之後。內府（堀川右大臣。）被申云。
 今夜根事爲先。勝負在彼。主于和歌。必不可被定勝負歟。有猶
 可被定申之仰。仍被定持。二番時鳥歌也。右方讀云。右勝。五
 番歌。（最後番。）內府被申未列之由云云。

皇后宮春秋歌合。土記云。二番。右七夕。左春日祭。以春日祭
 不論善惡爲持云云。判者堀河右府。

都芳門院根合時。六條右府爲判者。一番左右歌講之後。左右
 方未申左右之間。判者被申云。可爲持。依爲一番也。二番歌讀
 了。後日左右可申各瑕。其後左右相互致難。後評定之。或時
 判者難之。又陳之。常事也。（可駭）承曆歌合時は。一番左右歌講畢
 後。關白殿仰曰。共有難事卅申。此後方人難陳之。

永承四年歌合時。一番左右歌讀畢後。內大臣殿大二條殿
 也。曰。春日と講歌は爭可負哉云云。于時殿下（宇治殿。）有廿

心氣。仍無左右爲左勝。歌曰。

（西卷）此歌合時金不見不勝也
 春日山岩根の松は君かため千年のみかは萬代そへん

此後無止事神明を奉懸歌をば定勝。左右共同詠つれば爲持。
 且是勝劣依有恐歟。

又寄祝たる歌をば不負云云。雖如此存。誠に秀逸之時定勝負

常事也。

三十謂歌合

一番 月

左 勝

長家卿

夏の夜も涼しかりけり月影は庭白妙の霜と見えつゝ

右

赤 染

宿からそ月の光もまさりけるよのくもりなくすめはなり梟

右は一番歌とよみたり。はしたなく思ひたれと有限て。左

そおかしきおほえありて勝になん云。

又野宮歌合。寄祝歌被定員。如此事隨時て可斟酌歟。一番左

歌は可優之由。故人所申也。然候哉。前大相國參議之時歌合

は故將作判也。其詞云。右勝と可申とも。左一番は愼思給て

持由云。古今歌合に一番右勝例多不見者也。但弘徽殿女御

歌合。義忠判之。

一番 霞

左

相 摸

春のくるあしたの原の八重霞口をかさねてそ立まさりける

右 勝

侍從乳母

春は猶千種に匂ふ花もあれとをしこめたるは霞なりけり

このあしたの原。ひとゝころにやへよりもまさりて立そ

ふとはへるは。かしこはかりに春の心いふせく見えはへ

り。

小野宮右大臣歌合

一番 春花色

左

少將君

露をきてあすもみるへき花なれと暮ゆくをしき花の色哉

右 勝

友 則

ほのかなるおりはわかれと花の色の霧たちまさる秋の夕暮

今殿下歌合

一番 旅宿鴈

左

俊 頼

限ありていそゝ立ぬる庵の内に誰をたのむの鴈したふらん

右 勝

源 定 信

武藏野に旅れする夜の淋しきにたのむの鴈の鳴そうれしき

野宮歌合

九番 蒨萱

左 勝

小 榮 人

行秋の風にみたるゝかる萱はしめゆふ露もとまらさりけり

右

菅原忠延

移しうへはつかのまもなく蒨萱のみちよの敷をかそふ計そ

此かるかやの歌は。忠延かみちよの敷といへる。秋のみか

るかやにてはあらて。春の山へにさきたるもの花とな

ん思いてらるゝ。どのほゝはく見ゆれと。すまひくさ露
にはうつる物にそ有ける。

顯昭考承曆後番歌合

一番 子日

左勝

皇后宮美作

ふた葉なる子日の松を引うへて花さく春は君そみるへき

右

匡房

けふよりは子日の松をひきうへてやを万代の春をこそまて
勅判云。尤可仰也。

此等之外殊不見及者也。義忠判は有由緒。右を多令勝之由。
彼持人申云。若件故忘法撰致偏頗歟。將優左歌之儀。近代之
會釋歟。次歌合等は依爲蜜儀。又不存故實歟。就中至俊頼は
依爲判者難優吾歌歟。又御製者不負云。古今之間有御製
之歌合。延喜十三年亭子院歌合。有御製二首。無左右爲勝。件
歌合勅判也。仰云。御製爭可負哉云。皇后宮春秋歌合。或

記云。左十番祝有御製云。滿座傾耳。所陳是非。已爲左勝。左
方人不同右歌而起座。頗有稱雄之氣色。是御乳母三位入左
方。俄申下御製歟云。左本紙破取歌程。押葉紙端。主上蜜々
渡御簾中云。右歌雖詠住吉松已眞畢。爲御製之池のみつく
きにこるよもなし。左せきいるゝわるしとてま。

五番 羅麥

左勝

定頼

とこ夏の匂へる庭はから國におれる錦もしかしと思ふ

右

赤染

庭のおもにからの錦をしく物はなをとこ夏の花にそ有ける
なをとこなつわるしとてま。

八番 照射

左勝

公賢朝臣

さ月やみ天津星たにいてぬ夜はともしのみ社闇にみえけれ

右

赤染

五月やみほくしにかくる灯火のうしろめたきか鹿やみる覽
右はとのはのきこえいみしうおかしとあるほとに。左と
もし火とある。うたかひあけて申せは。右ほくしにかけた
りといひたれば。ことさらにほくしといふことなしと申
に。ともしひは家なとにともしたるをいふとかたく申せ
は。とはりとして左勝。

予今案。非無證歌。萬葉歌に。

山のはに月かたふけはいさりする螢のともしひおきに
奈津左布云。同集。久かたの月は出にけりいとまなくあ
まのいさり火ともしあへるみゆ。又考。同集。きの國のさ
かひの浦に出て見れば國のともす火浪間よりみゆ。

九番 祝

左

君か代は白雲かゝるつくはれの峯のつゝきの海となるまで

右勝

藤原爲盛女眞房朝臣代敷

思ひやれやそ氏人の君か爲ひとつ心にいのりのりを

海も山になり。山も海にならばあしかりなん。海はうみ山

は山にてあらんこそよからめ。いま／＼しとて左負。

弘徽殿女御歌合(長久二年二月。判者義忠朝臣。)

七番 蛙

左勝

良 還

みかくれてすたく蛙の諸聲にさはきそわたる井手のうき草

右

赤 染

かへるへき道もとをきに蛙鳴さはへに日をもくらしつる哉

やまとうたは事のおこりやかてあるをよむなり。かはつ

は夕くれより鳴はしむるものとしりて侍るを。澤へに日

をくらしつと侍れは。つとめてより聞はしめて。をのゝえ

をくたしけん人のたとへにおほえ侍。さてすたく蛙は聞

ところもまさりて。末代にはかゝるとは有かたや侍ら

んとそ見え侍。

十番 祝

左勝

永成法師

君か代は末の松山はる／＼とこす白なみの數もしられす

右

赤 染

なぬかゆく濱のまさこの數とにいほとならん程なへも君

なぬかゆく濱のまさこといふとは。祝のかたはたしかに

侍れと。ふるこのかきりはへり。末の松山はうたすかたは

おかしけれと。男女のいかにそやある恨みの歌とおほえ

て。祝のうたにはきこえず侍れはとて持なり。

義忠朝臣歌合(萬壽二年五月五日於任國合之。白判之。)

七番 瞿麥句讀

左

なてしこの露に匂へるませの内に其色ならぬ草もめてたし

右勝

なてしこはとこ夏に咲草なれと露に匂へる色はことなり

左。ませのうちのとくきをさへめてたしとよめる心は。む

さし野のむらさきのたとへをひきて。この花のめてたき

よまんとするほに。心はあまりて詞のたらぬ也。右。ふ

ることなれは。歌の姿はあらばれにけれと。させることは

なけれは。すまひくきのかちかたにとるならん。

八番 水上夜螢

左

五月雨のやみはあやなし汀なる螢のひかりかくれなければ

右

いさり舟棹さしのほる水のうへにほたるは夜そ光ましける
左。やみはあやなしとよめる。色こそ見えれと云二の舞の
をかましさに。右いさり舟。さしすきてかゝり火の見え
れは。歌の面のつゝき心えかたくて。西の京のつゝみのこ
ゝちしてなん。

永承四年内裏歌合(判者土御門殿。)

八番 池水

左勝

侍従乳母

君かためのかにすめる池水にむれたる鶴は心してゐよ

右

伊勢大輔

池水によゝに久しくすみぬればその玉もゝ光見えたり

玉藻はひかりやはあるとて負。

皇后宮春秋歌合(天喜四年四月二十日辛巳。判者堀河殿。)

一番 臨時客

左勝

小式部命婦

春たては松引つれて諸人も萬代ふへき宿にこそくれ

右 八月十五夜月

伊勢大輔

くもりなき空のかゝみとみゆる哉秋の夜なく照す月かけ
空にさたまりて鏡のあるかとて負。

三番 櫻

左勝

内大臣

春雨にぬれて尋ん山櫻雲のかへしの嵐もそふく
右 駒迎 隆經朝臣
ひく駒の數より外に見えつるは關の清水のかけにや有らん
みつのかけにとある。心えすとて負。
予傳聞之。馬迎也と被難云。

四番

左

大 輔

山里のかきねに春やしるからんかすまぬ先に鶯の鳴

右勝 鹿鳴草

美 濃

おりやせんおらてやあらん秋萩の露も心をかけぬ日そなき
かすまぬ先に。こゝろえず。まつかすみこそとて負。

五番 子日

左勝

頭中將顯房

いつれをかわきて引まし春の野になへて千年の松の緑を

右 鴈

大 輔

さよふかく旅の空にて鳴鴈はをのか羽風や夜さむ成らん

まことに身にしむ歌也。藤内大臣殿おかしからせ給ふ。左

より右歌夜ふたつありとて右負。

六番 梅

左勝

相 摸

いはまもる水にそやとす梅の花木末は風のうしろめたさに

右 鹿

長家卿

高砂の尾上の鹿をゆく舟はうら悲しくや過かてにきく
しかをゆく舟と心えず。末はいま／＼しとてまよく。

公基朝臣歌合(康平六年十月。判者範永朝臣。)

三番 菊

左

いつのまに紫ふかく成ぬらん初霜はかりをけるしら菊

右

津守國基

我宿のまかきに菊をうへさらは花みぬ冬やさひしからまし
左。歌合のうたにしつへし。なたらかなり。されと右や思
ふ心あらん。右歌つゝきよからねと心あり。

四番 鹿

左

鹿の音をねさめの床にきゝそめてあやなくぬるゝ我袂かな

右 勝

夕されは峯のあらしやさむからん聲ふりたてゝ鹿の鳴なる
左右歌のこゝろにたるとやいふへからん。右。あらしの
さむさに鹿のなきたる證あるへし。されとうたからのけ
はひおかし。

承暦二年内裏歌合(判者六條右府。)

一番 子日

左 勝

實政朝臣

子日するあまたの人の引つれて君か千年をまつとこそみれ

右

公實卿

君か世に引くらふれは子日する松の千年も數ならぬかな
右人にて匡房申様。ひきくらふるに松の千年の不數と。君
からとせをまつのとこそ。おひ先あさきにそへて。左の
ちとせ數すくなくんと申。師賢一人してまたはこそす
くなからめ。天下の人の苦心をよせて待らん千年は。數し
りかたくなんあるへきといはふるに。あまたの人のまつ
ほと。けに無限事なりとて。判者左勝とのたまふ。

二番

左 持

藤孝善

谷河のをとはへたてすまかねふくきひの中山霞こむれと

右

伊家

いつしかとけさは霞のたなひけは春來にけりと空にしる哉
霞のたゝすまぬこそ心得す。籠といふ不隔といふ。同事な
れば病とて制たると也。霞は吉野山會坂山なとまちかく
はひかれたるをうちすてゝ。きひの中山まで。あまり除な
ん。順か判したるは。さか野を過てをくら山まで尋ゆきけ
んいかゝとそ申たれといふを。師賢。霞は所やはわく。奥
山と山の峯にも谷にもわかなん立を。如何にいつしか

とは何事にてしるへきにか云はかりにや。みよしのいと云こそけにとりきこゆれ。霞をすゝきにたとふへきなら

す。本歌あらんといへは。判者左も歌めきたりとて定持。

五方國經信記云。私家。專非難歟。不隔與籠非同事歟。予案之。此難

自順列出來事歟。延喜十三年歌台云。ふりはへて花見にくれは小倉山いとゝ霞の立かくすらん云。花歌に小倉山聞つかれと無其難。

四番 櫻

左

顯 季

尋ねこぬ先にもちらて山さくらみる折にしも雪とふるらん

右

通 俊 卿

春のうちばちらぬ櫻と見てし哉さてもや風の後めたきを

右人云。さくらはをしむことこそあれ。いとへる心ちす。

左云。貫之かこの下風はといひたる社櫻のすくれたる歌。

此うたとおなし。右云。かれはそらにしられぬといひて。

雪ふらしたれはこそめてたけれ。これは見ぬさきにとく

ちらてといひたりと云。師賢云。いとふにはあらす。古今

にとならはさかすやあらぬさくらはなといひたるは。は

なをかしむあまりとこそ見えたるを。さは花をいとひた

るにや。右歌は春よりのちは花をなしまぬころあり。右

云。かきりあれは春のうちこそ花ををしむめれ。たつこと

やすき花のかけかはといふ歌あり。

經信記云。私家。取積不可然。

六番 昌蒲

左

道時朝臣

あやめ草なにの例に引そめてかゝらぬ宿のつまのなからん

右

匡 房

けふよりはつまとそ頼むあやめ草かりそめ之と思はさら南子の日ならぬにためしとひきかくること。あやめしらぬ心ちすれと申せは。なにのともためしといふ事なくやはある。右。やともなくてつまをそたのむとあるに付てな

ん。さらにこゝろえられぬといへは。大納言けにきることゝて右負畢。

八番 五月雨

左

道時朝臣

五月雨に玉江の水やまさるらん

五月雨に玉江の水やまさるらん 芦の下葉のかくれゆく哉

右

爲 家

五月雨の隙なき比は伊勢の蟹のもしほの煙絶やしぬらん

左 おかし。右けふりたゆといふこと禁忌有と云云。

經信卿記云。又咎之絶煙本便事歟云。

十番 月

左

師賢卿

水草ぬてかけさへみえぬにこり江の底まで照す秋のよの月
右勝

匡房卿

おほつかなこや有明の空ならんよるともみえす照す月影
水のにこりたらんたに月のすまんとはうたかはし。まし
てひまなきみくさに。いつくよりかは水のそこにわけい
りてすみわたるらん。古人さやかなる月を心にいれて見
んには。よもすからこそみあかさめなと。たゞ今ねおきた
らんやうにおとろき心ちすなといへと。おかしとて勝畢。
經信記云。左方云。景不見江。月何浮景乎。此難左方雖存思。
作者所執。仍撰入也。諸人之所難。不知所避者也云。

十一番 鹿

左持

正家卿

夕さればをのゝ萩原吹風にさひしくもあるか鹿の鳴らん

右

公實卿

霧ふかき山の尾上にたつ鹿は聲計にや友をしるらん

聞人こそ心すみさひしき心地とせめ。鹿の心にはなにか
さひしくもあらん。右、山の尾上おほつかなき心ちしな
から持となん。

經信記云。右人難云。未字不快。私案。是右歌定詞也。

十二番 紅葉

左勝

師賢卿

吹からにちる紅葉はのしたかへはうらやましきは風のかせ
右

匡房卿

龍田山散もみち葉をきてみれば秋はふもとにかへるえけり
花もみちちるをおしむつねの事也。したかふ風をうらや
み侍こそ。右。あかて過ゆく秋のふもとにかへりきなは。
秋をおしむ人なくやといへば。これもかれもおなしやう
なれと。於左勝ぬ。
(霜散)

經信記云。此歌本入權辨伯耆守歌。不快事也者。以書改。不快
難不知所避。件歌は。

帚木の梢はいつこおほつかなみなその原は紅葉しにけり
十三番 雪

左勝

實政朝臣

ふる雪の日數つもればしからきの櫛の青葉も見えず成ゆく

右

通俊卿

雪ふれば見えしときはの山そなきみな白妙の梢のみして

松の葉白きよしの山といふも。山はかくれぬにこそとて
まけ畢。

二十番 戀

左

經信卿

わたつみにみるめ求むる蟹たにも千尋の底にいらぬ物かは

右勝

戀すとも泪の色のなかりせばしはしは人にしられさるまし

戀といふ事なしとて負畢。

經信卿記云。右難無意云々。私家之。上古歌未有一定。有如此

跡。而未知人若此難歟。呼喚^(呼喚)戀哉云々。又此事爲不知事之中。

非意事等多由所記也。

承曆後番歌合 勅列

十番 月

左 公 定

月影のいたらぬくまはなれとも遙に雲のうへはのとけし

右 公 實

くもりなき影をとめは山のはに入とも月を惜まさらまし

右人云。あめのしたにてこそあかしくらしもいはめ。雲の

上と下とをはいかゝくらへんとて。右勝とす。

^(讀卷) 寄祝心歟。然而負。

十一番 鹿

左 紀 伊

秋風そさわく吹らし妻こふる聲高砂にをしか鳴也

右 匡 房

戀わたる妻ならなくに山ひこのこたふる聲を鹿や聞らん

右。山ひこはなにの聲をこたふれば。鹿はきくといふことあるへし。但左よかられば持になりぬ。

^{堀河院中宮} 四條宮歌合(永保三年三月二十日。判者通宗卿。)

五番 藤

左 藤 仲 實

白露は色ますはひとなりにけりこきむらさきにさける藤波

右 源 有 賢^(源有賢)

日にそひて匂ひそまさる藤の花ちとせの春を思ひこそやれ

白露とよまれたる。あるましきとはあられと。このやう

にはよますも有なん。右。君かちとせといひたれば。とも

かくもいふへし。

六番 戀

左 仲 實

おもひかれつれなき人のはてみんと哀命のをしくも有かな

右 藤 時 房

我戀や末つむ花の色ならん紅にのみぬるゝ袖かな

末つむ花のもしつかひ。かみしもにわたりて。またなにに

ぬるゝそとおほつかなく。なみたとはまことなしとて負

畢。

賀陽院七番歌合(寛治八年八月十九日。判者經信卿。)

一番 櫻

左 中 納 言 君

山さくら匂ふあたりの春霞風をはよそに立へたてなん

右

通俊卿

春風は吹ともちるな山さくら花の心を我になしつゝ

判者令申云。左歌いとうるはし。右。花は心やあらんと
思ふたまふれば。左尙勝と申へし。

二番 櫻

左持

筑前

紅のうすはなさくら句はすはみな白雲とみてや過まし

右

匡房卿

白雲とみゆるにしるしみよしの吉野の山の花さかりかも

左歌心は違て雲とみつれと。近くみれば紅句ふ櫻なりけり

とよめる也。さらば山なとにかけて。となきことはやあり

へからん。右。めつらしけなけれと。別難不見。持と也。

顯昭考云。三の字五。のゝ字五也如何。

女房陳狀云。詠心は野邊に咲みちたる花の白妙に雲のこ

とくなる中に。紅のうすはなのましりたるに。櫻にこそ

と露也。山かならずあるへしともおほえすと云。又輔親

〔詞書〕萬葉云。筑前か母は六輔也。輔親也。然に母に申と云也。

か母に申しとな幼少にて承しかば。同字三はいかゝせん。

四以上あらん歌をば。歌にいともいたさしと申しに。右歌

しの字四候に。持と被定たるかくちをしきなりと云云。予

案之。内裏歌合に貫之。

櫻ちる木の下風はさむからて空にしらぬ雪を降ける

らの字四なり。寛和歌合彼先祖能宣歌云。

春のくる道のしるしはみ吉野の山にたなひく霞けり

のゝ字四つあり。此歌等皆勝如何。

三番 櫻

左持

周防内侍

山櫻をしむ心のいくたひかちる木のもとに行かへるらん

右

顯綱朝臣

花ゆへにかゝらぬ山そなかりけるこゝろは春の霞ならねと

かゝらぬ山といふと中ころの歌なり。昔人しれり。又霞は

かゝらぬとはよまれてやあらん。おほつかなしとて負。

四番 櫻

左持

讃岐

やちよへん宿に句へる八重櫻やそうち人もちらてこそみめ

右

正家卿

風のをとものときき宿の春なれば句ふ櫻をあくまでそみる

左句。上とにやもしや多からん。尤花をあかむはいかゝあ

らんとときこゆればとて持。

三番 郭公

左持

周防内侍

夜をかさねましかね山の郭公雲のよそにて一聲そきく

右

顯綱朝臣

あくる迄ましかね山の郭公けふもさかてやくれんとすらん
共に唯同事に侍な。左は時鳥聞たり。右はまたさかねは。
前にも聞たるをそ勝と申ける。

予今案之。在納言家歌合に令聞歌に不聞歌。或隣或持也。

一番月

左持

中納言君

くさりなき玉のうてなにてる月はいと光をみかく成けり

右

通俊卿

月影をひるかと思ひる秋のよをななき春日と思ひなしつゝ
晝と日とは若同事にやと申かは。通俊皆文字かはりたり。
同事不侍と陳申を。詞かはりたれと同やうなれば。於避と
こそ聞給るうちに。

山さくら咲ぬる時は常よりも峯のしら雲立まさりけり
といふ。歌合歌にてはいとよき歌也。それに猶さるへしと
こそ被定たれと申侍しか。ともかくも人申さしりしかと
も。左歌のいともまさささりしかば。殿下にいかゝと申侍
りしに。例なといかゝと侍りしかば。かゝるおり持なとに
定たるおりも坐よし申て。持と被定。

四番月

左持

讃岐

秋の夜はいとなくそ成ぬへき明るもしらぬ月の光に

右

正家卿

ときは山下葉の露の数とに影さしそふる秋のよの月
右。山のみやは露はをくらん。又下葉といふことはいかな
るにかとて負。

二番雪

左

筑前

ふみける鳩のあとさへをしきかな氷の上にふれる白雪

右持

匡房

みかり野にかつふる雪に埋れて鳥立もみえず草かくれつゝ
にほのふみけるといふ事。人こそふみも見め。にほの心
をほしりかたこそ。又あとさへをしきとは。あとををし
みたりとみゆるものを。右。たかゝりに草かくれといふと
は。鳥の草にかくれたるを申とにや。是は草をよみたると
こそ見えたれ。されと雪の草をかくしたるとも申らん。さ
らは右のかちにや。

一番祝

左持

中納言君

君か代は萬代までにさしてけり三笠の山の神の心に

右

通俊卿

君か代は天のこやねの尊より祝ひそめし久しかれとは
左右無止事神奉掛て侍めれば。勝負申かたし。

四番 祝

左持

讀 岐

萬代といのりそつくる君か代は山田の原のしたつ岩ねに

右

正家卿

きみか代はかねてそしるき春日山二葉の松の神さふるまで

左よろつ代又君か世。いかしとおもふたまふれと。おほか

た持と申へし。

郁芳門院根合(寛治七年。判者六條右府。)

二番 昌蒲

左持

藤孝 善實信

あやめ草引手もたゆく長き根のいかてあさかの沼に生けん

右

入道帥上

君か世のななき例にひけとてや淀の菖蒲のねさしそめけん

左人云。あやめをはなにをよめるにか。古歌にはあやめく

さところそよめれ。あやめは別物名なり。判者云。さうふを

あやめといふ事けふはしめす。いはれぬとなり。但右歌は

したゝかにつかうまつれり。左歌はあさかのぬまによせ

て。根をばひくてもたゆくなかしとよみたる。とたかひた

る心ちすれとも。すかた歌めきて侍れば持と申。

江記云。右方人云。浅鹿沼間在陸奥。自京一月路也。不可逢今

日事。所引之昌蒲黃損歟云。永承四年殿上根合退歌無草字。

而被撰入。況右大弁通俊已所撰之後拾遺入之。今所難先後不

覺云。

三番 郭公

左持

堀河殿

ふた聲となとかきなかぬ時鳥さこそみしかき夏の夜ならめ

右

雅俊卿

なかつとて打もふされず時鳥聲待人もねかたかりけり

左はいとくをかし。右。上下とたかひたる心地して。ま

たほとゝきすきかすとして負畢。

江記云。右方人云。於御前專不詠夜短詞。依濫於世之一首。鄙

詞三所なとか。さこそ。ならめ等也。如此詞二所於凡詠。三所

乎云々。

四番 時鳥

左持

大 貳

一聲をまたれくて郭公幾夜といふにこよひ鳴らん

右

匡房卿

夕つくひいれは小倉の山のはにをちかへり鳴ほとゝきす哉

左。いたくふるめきたれと。右。いとくみとをし。かゝ

るとはふるき歌合にもよからぬことはとありければ。い

つれもととりまさらずなん。

六番 五月雨

左持

孝 善

五月雨のひましなれば袖たれて山田は水に任せてそみる

右

匡房卿

つねよりも晴せぬ比の五月雨は天の河原も水やますらん

袖たれてといへる。なにこともきこえず。天河原に大水出も。あめしたゝめにくゝや。

江記云。右方云。袖たれての儀頗不優。又有弃申之義。可謂禁倖。又天河水や益れる。是後撰之歌なり。尤不可爲難云々。

九番 戀

左持

顯季卿

さりとともと思ふばかりや我戀の命をかくるたのみ成らん

右

小別 當 左兵衛 當俊實

思ひかねさてもやしはし慰むと只なをさりに頼めやはせぬ

左人云。右戀といふもしなし。いかゝ。右人云。天徳歌合朝

忠歌に。人をも身をもうらみさらましと有歌。世人の乗口

名歌。かの時又勝となん被定けると也。左人云。承暦歌合

時左戀歌。その詞なしとて負。即今日判者大いまうちきみ

なんかの時も判給へると申は。大臣云。かのうたはわたつ

みのはるかなるそこに。海士人のいれるよしをのみいひ

て。思たのむといふ事もなし。古歌にも詞にも戀ともなけ

れとも。その心あるはみな除とかにもせぬもの也。左右歌

同程なれば持となん。

國信卿歌合(康和二年四月二十八日。衆議判。)

十四番 夏戀

左持

俊頼朝臣

夜とも玉に玉ちる床のすか枕みせばや君に夜半のけしきを

右

基 俊

波のよる岩根にたてるそなれ松またねもいらて戀明しつゝ

れといふ事ふたゝひあり。またれつよきものにこそ。右

子松かくあたなるとにたとへられたる心得すとて負。

實行卿歌合(永久四年二月四日。)

判者修理大夫。

讀師。(家信。道經。)

講師。(俊頼。仲

實。)

一番 子日

左

俊頼朝臣

春日山ふもとの小野に子日してかをとを神にまかせてそみる

右

大夫上

子日する野への小松をもろ人の君かよはひに引かくるかな

左。子日の松をさしをきて神にとよするも。あしかるへき

事ならねと。今日の事にはかなはずや。また松といふこと

あらまほし。右。めつらしからねとなひやかなれば。勝と

申つへけれと。左一番なとは懼思給て。持とや申へから

ん。

二番 霞

左

宰相上

浅緑かすめる空のけしきにやときはの山は春をしるらん

右 勝

顯輔朝臣

年ことにかはらさりけり春霞たつ田の山の峯のけしきは

右。霞などはさほ山にこそよみまうてくれ。龍田山はもみ

ちのにしきなと申きたるなりと。左人のたまふは。さらに

くせなるへからず。立田の山の鶯の聲とこそよめれ。左。

ときはの山も春をしるらんとよめるこそ。をのれ鳴てや

なといへるをおもへるにや。にぬ事にてなん。かれは鹿の

心あるものにてしるにこそ。山はしらんとかたくなんと

て負。

金葉には。としことにかはらぬ物は春霞たつ田の山の

けしき之けり。

三番 櫻

左 持

少將實能

花さかり末の松山風ふけはうす紅のなみそたちける

右

仲 實

高砂の花のしら雲たちにけり我やまもりになりやしなまし

まちかき花さく山をきて。末の松山おもひかけす。又松

花とおほゆ。うす紅といふことは。そのかみよみたりし後
今はよます。右。花のしら雲といふ事。さたまりてあるや
うなりとて持とす。

六番 夏草

左

女 房

うつら鳴夏の、草はおひにけり朝ふす鹿も見えぬはかりに

右 勝

大夫上

行なれし道わすられて夏草の結ふはかりに成にけるかな

うつらは秋なんなく。夏はなかつと右人いへは。證歌こそ

はいたさるへけれど。不出はあやまてるにや。右。むすふ

はかりに成にけり。のかひし駒の心ちすといへれば。むね

とのふしにはあらねと。右勝にや。

八番 月

左 勝

俊賴朝臣

軒はよりもりくる月をわきもこか玉もの裾に宿してそみる

右

顯輔朝臣

いかばかりて月なれやまくつはふ杜の下草かすみゆく迄

たまものすそにやとしてそみるとある有かたし。水なと

にうつるをこそやとるとはいへ。光ばかりこそあらめ。月

の形はやとりかたくや。されと右古くて負學。

十番 雪

左

藤兼能

さらぬたにくる人もなきわか宿に路たえまさるけさの白雪

右勝

仲實

いつのまに降つもりぬる雪なればかへる山ちに道まどふ覽
雪にみちたえぬなとは。山里なといひてこそあらまほし
けれ。又雪にたえぬるをたえまさるとはいかなる事にか。
右。かへる山ちになと歌めきて勝にや。

十三番 祝

左持

爲忠

みつかさの久しかるへき君か代は天照神や空にしるらん

右

顯輔朝臣

限りても君か千年は岩清水なかれん世にはたえしと思ふ
伊勢八幡御事。をとりまさり申さんば。をそれ侍りとて
持。

同家歌合(元永元年六月二十九日。判者修理大夫顯季卿。)

一番 夏月

左持

俊賴朝臣

光をばさしかはしてやかみ山峯より夏の月はいづらん

右

大夫上

夏のよの月は心に入ぬれば明ゆく空のうらめしきかな
光さし末に月出げんとある。なかたえて思ひ出たるやう

也。右歌合にも山峯またかれりとて負にければ是同事也。

又右人峯より夏月は出らんとある。秋冬は谷よりいつる
かと侍る。さもある事ときこゆ。右はなひやかなれと。近
歌合歌と左方に侍は持と申へし。

二番 夏月

左持

實能

空さえて涼しき夏の月影は夜のみしかさそ秋にかはれる

右

長實

夏のゝの萩の下葉の下露のつゆくまもなく照す月かな

左。歌から心ゆかぬに合て。月歌によそへていひならはし
たる事也。夜みしかしとある無便心ちす。右。夏草の多か
るを覺なから。萩の下露。秋の歌とおほゆ。仍持なるへし。

三番 夏月

左

源仲正

夏の夜の空さえわたる月影に氷の衣きぬ人そなき

右勝

大進

見るからに光すゝしき夏の夜のかつらに風やふくらん
空さえわたりて氷の衣きぬ人なしと侍。冬の歌とおほゆ。
右。月のかつらうためきたり。

四番 夏風

左勝

實能

夕されはしのゝをさゝを吹風のまたきに秋のけしきなる哉

右

橘敦隆

夏衣たつ夕風のすゝしきにひとへに秋の心こそすれ

右方にしのゝをさゝといふとなしと云へと。さはある事なれと。くさなきものならは社なとてか。右ひとへに秋の心ちすといへる。あしく心えたる事也。夏といはんにこそいはれたれ。歌合などにはかやうの事はよくおもふへし。五番 夏風

左勝

琳賢

難波かたさゝなみよする浦風にてるみな月も涼しかりけり

右

修理大夫

から衣すそのゝ草は吹風におもひもあへす鹿や鳴らん
さゝなみ聞ならはす。しかといひてこそさゝなみとおもへるにや。となり。右。から衣といふ事かきたかへたるによりてまけぬ。
〔雨書〕

夏衣をかきかへたる也。

十三番 寄泉戀

左

右兵衛埃

逢ことは片山かけの石井つゝ結ふ心はいつかとくへき
我戀はむすぶ泉の水なれや絶すなかれて袖ぬらすらん

右勝

顯輔朝臣

むすふ心。うちきゝはきこえたるやうなれと。泉をむすふはものを結ふにはあらぬ事なり。水くみあけてなとする事なりとて負。

十四番 寄泉戀

左

下野守經兼

岩代の野中の清水むすへとも戀をはけたぬ物にそ有ける

右

人不知大夫殿

つれもなき人諸共に夜もすから結ふ泉とおもはましかは
いはしるの野なかの清水心得す。むすひ松なとこそ人し
りたれ。野中のしみつはいないひ野にこそありときこゆれ。

證歌やあらんといへと。出さるは負ぬ。

今殿下
内大臣家歌合(元永二年七月日。判者修理大夫。)

一番 草花

左勝

季通朝臣

さまゝの花にしをけは白露も秋は色をそきためさりける

右

基俊

白露りをりたす萩のから錦鹿のよるきる衣なりけり

左勝

〔右勝〕
露の心かちてなん。露をりたすとはいかに。露霜をたてぬきにこそよみたれ。露の錦をおるならんは人に侍る。

左 草花

道經

あたし野の萩の錦やとこならん露ふしあかす女郎花かな

露ふすこそめつらしく。露をくところ申つたへたれ。

左 晩月

宗 國

夕つくひいるやをそきと久かたの空すみわたる弓張の月

右 勝

忠 季

東路やふなきの山の木のまよりほのかにみゆる夕つくひ哉

左。ゆふつくひこそみゝにたちて。またゆみはりの月に空

すみわたるらんともかたし。右。はしめのくのや。はての

のこそよしなけれ。

左 月

尹 時

夕されや天津空なるしらま弓とみれば月を山のはにいる

右 勝

行 盛

出るよりさやけき月の光哉入日のかけの空にや有らん

左。しらま弓とよめれば。月とはきこえにたるに。とみれ

は月のとよめる如何。このころにては月ともしらさりけ

るにや。右。日の光のさしそふそ心えぬ。日の光あるほと

は。月の光はいかゝあらんと思ひ給ふれと。尙可勝にや。

左 持 月

女 房

よひのまに出る影たにさやかなり月みつ空を思ひこそやれ

右

基 俊

なくさむるほとこそなけれ宵のまにわれて入ぬる更科の月

月みつ空心えす。みたんおりこそと心はへばあるにこそ。

これはみつそら。みたぬ空のならひてあるにやとおほえてなん。右。さらしなとよみて。山なくてばよむことにや。

證歌不審也。

右 勝 尋失戀

忠 隆

過したにうかりし物をなそもかく行衛もしらすつらさそふ覽

始二句そふるき歌なれと。題心は侍なれば爲勝。

右 同

基 俊

思ひかれ清水くみにと尋ぬれば野中ふる道しをりたにせず

なにとにか戀といふ事は見えす。水くみにとてまどわた

るなんみゆる。仍左勝。

或所歌合(永久四年七月二十一日。仲實朝臣判之。)

一番 女郎花

左

源 經 兼

雄子たつ交野のみのゝ女郎花かりせめにたに靡かさらん

右 勝

道 經

女郎花露のをきかほみせしとやすそのゝ霧の立隠すらん

左。無風してなひくとよめるとはりなし。右。無山してす

そ野いかゝとみゆれと。ふるくもよめり。心おかしとて

勝。

六番 薄

左

忠 隆

しら露の玉ぬきかくるいと薄吹なみたりそ山嵐の風
右勝(マ、) 爲忠

むすひをくのへの朝露分行は玉ときちらす花薄かな
左。めつらしからねとさて有なん。右は露むすふといふとおほつかなし。秋のはしめには有かたくや。末つかたに露むすほゝれて。霜となるといふ事のあるなり。これはまたして負。

十五番 月

右

藤國親西住入道也

宿とに詠むる人はあまたあれと空には月そひとりすみける
もしやまひありとて負。

俊忠朝臣歌合(長治元年五月二十六日。判者俊頼朝臣。)

左持 郭公

筑前公

待人のやとをはしらて時鳥遠の山へを鳴て過なり

右

道經

まつほとも心そらなる時鳥いと雲井に鳴わたるかな

左歌はれてまつらめやと云古歌に心こと葉たかはすと。

右人の難さもとときこゆ。又左人云。右歌空と雲井と同心の

病と申。又さもきこゆめれと。これはふかきとかにあらず

とて持と申。

右戀

俊忠

我戀は海士のかるもにみたれつゝかはく時なきなみの下草
涙のした草は不審。もとにあまのかるもとよまれたる同
ものにや。さては病とや申へからんとてまぐ。

師頼卿歌合(天仁二年冬。判者俊頼朝臣。)

左勝 水鳥

橘敦隆

池水や夜半に冴らんうきれる鴨のはかひにつらゝぬに鬼
左おかし。かものはかひにつらゝぬるなとこそ。まどには
あらぬとなれと。歌のつねのことなれはとかにあらず。

左勝 霜

師頼卿

初雪のふるやとそみる難波かた芦の葉とにをける朝しも

右

敦隆

八重葎しけりし庭も荒はてゝいくたひ霜かをきかさねつる
左歌いひなれたり。右。心はおかしけれと。末のつるいか

ゝとみゆれば。基俊難判云。左。歌からおかしけれと。霜の
あしたに雪ふるかとそみゆる。うたかはれんは義ならぬ

こゝちなんする。

今下
内大臣家歌合(元永元年十月二日。判者俊頼。基俊。)

左持 殘菊

信濃

苔のむす岩ねに残る白菊は八千世咲とも君そみるへき

右

藤時昌

霜かれにわれひとりとや白菊の色をかへても人にみゆらん

岩根の菊心えす。兩判者ともに是を難なり。又俊賴判云。獨と人と未事切云。仍持也。基俊は不難也。

左 時雨

源 俊隆

さ衣の袂せせはしかつげとも時雨の雨は心してふれ

基俊云。さころも又せはしとよめる重言病也。仍負云。

左 時雨

攝津君

たえすたく室の八しまの煙にも名ををしまさる戀もする哉

右

顯 國

盃のしひて逢みんとおもへはや戀しき事のさむるまもなき

俊賴云。たえすたくといへる。僻事ともや申へからん。か

のむろのやしまはまゝに火をたくにはあらず。野中にし

みつのあるか。げのたつか煙とみゆる也。それをたくとい

はん事かたし。右はたくみにおもしろけれと。かならずよ

まるへきさまのなきなり。又のむといふと大切也。さきの

歌めきたれば勝ともや。基俊云。むろの八しまにたえず火

をたくと。なにゝ見えたるにか。むろのやしまといふ事有

二。一は下野にむろの山と云所あり。一は人の家になかへ

にむろぬりたるをよめりとぞ。或ふみにみえたる。たとへ

はいつれにてもたえず火たくといふ事みえす。有。こひし

きとのさむるまもなき。心えすとて負。

左 負 戀

兼 昌

戀せしと思ひならをに寄波のかへりてそれもくるしかり鬼

俊賴云。いつもし名歌なれはうちきくにおもひいてらる。

古人如此事はさるへしとぞ。されはなとるへきにや。

左 時雨

通 經

あふ事の今はかた野に成ぬれはかりに音せし人もとひこす

右 時雨

忠 隆

つゝめともあまる涙はもる山のなけきに落る雫なりけり

俊賴云。かた野となりぬれは。かりにことこそ云へけれ。

次歌。あまる涙。心有とて勝。基俊云。共難も無。心といめ

たる所もなく。なけうたなどのやうに侍れと。かりに音す

る人のなからんは。今すこし心ほそく侍り。

關白殿歌合(保安二年九月十二日。判者俊賴。基俊。)

左 持 山月

女 房

木間より出るは月のうれしきに西なる山のにしにすまはや

右

源 明賢

み空はれ所もわかす照月のかけもてはやすこしの白山

俊賴云。木の間より月いつるといふ事如何。本文歟。西な

る山のにしにすまはやもそこはかとなし。右。かけもては

やすこしのしら山と申は。雪あらまほし。白山の名はかり

にてはいか。基俊大略同之。

左 同

俊賴朝臣

こよひしもをば拾山の月をみて心のかきりつくしつるかな
俊頼云。をばすて山の月はなくさめかれつとこそよめれ。
心つくしにはあらず。基俊同之。

右 野風

宗 國

秋の野の花すり衣吹かへし色ならなくに風そ身にしむ

俊頼云。花すり衣とはなにの花してするそ。萩かはなす
りとこそよめれ。基俊同之。

左 庭露

宗 國

庭もせに玉ときちらす白露をみたれてぬけるいと薄かな

俊頼云。いとすゝきをよめる證歌を可進。基俊不答之。

五月雨にかさとり山はこえゆかし花すり衣かへりもそ

する

無動寺歌合(保安三年二月二十日。判者俊頼。基俊。)

左 負 櫻

僧 行 眞

里もあれよ人もふりよ山櫻見てこそをのゝえをもくたさめ

俊頼云。花さきそめては。ほとなくをのゝえのくちんば。

あまりなりとて右勝。基俊同難也。但爲持。

左 負 春雨

僧 俊 宗

しめく^{マ、}とふる春雨のなかりせはいかてかみまし花の濡色

俊頼云。ぬれ色はもみちなとこそめてたけれ。花はぬれて

まさると見えす。雨をはいとひこそすれとて左勝。
基俊云。左。あめこほる。見しらぬ心地す。右。しめく^{マ、}と
よめるとは。ふるうたに見えす。爲持。

右 苗代

僧 隆 實

かせかはを瀬々のいせきに堰とめて水引かくる小野の苗代

俊頼云。はしめの五字みゝにとままる。おもひかけぬ所の
名は。ことはにひかれて。思ところありてよむへきなりと
て左勝。

左 戀

隆 實

人しれぬ身のみ思へはうしまとに引ほす網のいはて過ぬる

左 勝

相 圓

世々ふとも誰かしろへきわたつみの底のみくつの思ふ心は

俊頼云。あみのいはて過ぬと云事全不知。暫爲右勝。基俊

云。あみのいはて。古歌に見えす。右。わたつみにみくつと

よむらんとおほえす。川にこそよむめれ。されとももしつ

ゝたる也とて右勝。

奈良花林院歌合(判者基俊。)

右 雪

中納言數縁俊頼作

雪ふれは青葉の山もみ隠れて常磐の名をやけさはおとさん

右一篇中に二の難有。あをはいふときはかならずみか
くれてと云也。萬葉には水隠とそかける。しかれは浪の下

くさかはつなとをそみかくるとはよめる。山をみかくるとよめる歌。いまたむかしにもあらず。

左 雪

僧 信 永

水の面もみなふる雪に埋れぬ立ぬやなけく池の鴉鳥水の面のみな雪にうつもれぬらん。またきかぬとにそ。鴉とりのなけくとよめらん。またこそ見いれて侍らぬとて左勝。

左 同

信 慶 得 業

うちきらしあまきる空とみる程にやかてつもれる雪の白山うちきらしあまきる空。已に重言也。又雪のしら山は夏冬わかすつもれる雪なり。今うちきらすにおとろきて。山となるへきにあらず。

右 同

式 部 君

卷向のあなしひはらも埋れてかゝるみ雪もふれはふりけりあなしひはらとよめる歌未見。あなしのひはらとこそよめ。

左 祝

数 縁

千年とは色にいていはし水流れんとは君か世なればちとせの色はいかやうなる色かして侍らん。色にいつといふことは。花もみちをこそよめ。水いろにといふは家々集に見。

左 祝

信 永

打むれて岩れにねさす小松はのきくの千年は君そかそへんうちむれてといへる歌に。小松葉のとよめる詞きゝつかすとして。右勝。

左 同

勝 超

うれしさはおほつの濱に立波の数もしられぬ君か御代かなおほつのはま無下に俗様也。

廣田社歌合(大治二年八月二十九日。判者基俊。)

寄 菊 祝

忠 季

君かため千代まつかけに住よしの神やうへけん岸の白菊すみよしのきく。かくよめらん歌不覺。住吉にはしのふ草。わすれ艸。松なとをこそよめ。證歌きいてそ勝負可申云云。

予案之。非無證歌。亭子院菊合是則歌云。

波とのみうちこそみゆれ住の江の岸にのこれる白菊の花顯輔朝臣歌合(長承三年九月十三日。判者基俊。)

右 食 月

亭 主

夜もすから富士の高根に雲きえて清見か關にすめる月影有二難。一は雲よもすからきゆるとよめり。雲は夜もすからきゆるものにあらず。須臾に生。須臾に滅者なり。二はふしのたかねをよむには煙をそよむ。雲をよめりとも

見えす。されば相摸歌に。

夜とゝもに心空なる我戀やふしのたかねにかゝる白雲とよめるをは烟をゝきて雲をよめり。無本意とて負云。

作者被證文云。朗詠集終夜雲盡月行遲と申詩侍如何。判者閑口云。予案。相摸歌不負持也。

〔顯考〕

顯昭考。万葉に富士ニ不讀煙ゝて。或雲或雪を詠歌多如何。イ本勸物。維摩經云。如空中雲。須臾散滅云々。崇徳院御製。定なき雲にこの世をふれはなみたの雨もとまらさりける。寂然。風にちるあなしの雲の天空にたしふふほとそ此世なるらん。寂昭。たなひくとみればきえぬるうき雲のありとこの世をたのむへきかは。

右 戀

顯 方

天河雲のかけはしとたえしていかてか月のすみわたるらん天河に無雲梯。只有鶴。詩にも烏鵲橋とつくれり。橋と梯とその儀不同也。河や池にわたすをは橋と云。此峯より彼谷にわたすをは梯と云。同事なれと義異也。但此難は侍れと。いひしりてきこゆとて。右爲勝。

〔顯考〕

顯昭考。瞻西上人漢晴月明歌。天河雲のかけはしかきたえてなにより月のすみわたるらん同。如何。

右 月

藤 雅 親

秋の山みれの嵐に雲はれて空さえわたる有明の月

一首中帶二巨病。一は蜂腰。一は鶴膝也。和歌作式。准詩八門立八病云。一首中同字有三爲蜂腰。有四爲鶴膝者。此歌阿字四。能字三有。左右古歌也。不及判。

予案之。不用。

櫻ちる木の下風はさむからて空にしらね雪そふりけるら字四。

春のくる道のしるへはみ吉野の山にたなひく霞なりける字三。の字四なり。是等皆歌合歌也。無其沙汰。或持或睦。

家成朝臣歌合(長承四年。判者某俊。顯仲等也。)

左 持 月

宗 國

三笠山あまきる雲のなきよにはさしくる月の影そのとげき

右

爲 眞

天河よとむ淵あらは久かたの夜わたる月をしはしとゝめよ某俊云。あまきる雲ひかこにこそ。雪をそよみはへる。右。久かたの夜わたる月又ひかことなり。よるをはむはたまとそよみはへる。共にひかことなれば持とすへし。

伯判云。左右共になたらかなり。なきよにそいますこし思ふへかりける。されとよとむふちも心ゆかねば。左勝とすへし。

〔顯考〕

顯昭考云。萬葉云。しらくものせんとにかあらん久方のよわたる月のみえすおもふは

同家歌合(保延九年。判者基俊。)

左 祝

季通朝臣

君そみんはこやの山に數しらすをのくたてる松の齡は
はこやの山に有無數松樹云々。此言出何書哉。非本文者作
者不可詠。又有證歌哉。

左 持 祝

少將内侍

高砂の尾上の松に吹風は萬代とこそかねてきこゆれ

右

忠 兼

位山生そふ松の年をへてたえずも君かさかゆへきかな
左。たかさこの松にいはひをよせて。たふ松の萬代なると
きこゆる。右。自古祝をよむには。長生久祝の心をなんよ
む。偏に榮官榮祿の心をよみて。已忘仙算還齡心あやしく
侍る。左右祝の心うすし。爲持。

或所歌合(保延四年。判者基俊。)

左 戀

新宰相中將公能

紅に袖の雪は成にけり身にしみわたるこひのなみに
上句の袖のしづく。下句の戀のなみた。同事侍。病とや申
へからんとて負。

右 持 戀

殿下參河

波のよるほのみしま江の芦のれのなかれて人を戀わたる哉
左右歌あはれに侍り。但右平頭病に侍めれ。なとて人を

とよまてはいかゝよむへき。此なんは判者のつみにて唯
持と申へし。

予案之。天德歌合云。

ことならは雲井の月と成なゝん戀しき影や空にみゆると
方人改訴申。殊非咎之由被定云々。

一故人和歌難

難後拾遺云。(經信卿所爲云々。)

田鶴のすむ澤邊のあしの下れとけ汀もえ出る春は來にけり
是は上手歌と被書付はいとおそろし。仰て可信とも。澤邊
と水際とは同事なるか上に。みきはにもえいつとこそい
ふへけれ。みきはもえ出とあれは。に文字三十入覺。けに
くはしかられと。かやうによみたるうたもあらん。

かりにこは行てもみましかた岡のあしたの原に雉子鳴なり
此歌詞に鳥多群居たる形かきたるとあるは。水鳥などに
や有けん。さらはきゝすとよまれたるはいかゝ。鳥なれ
は何も同じ事か。花鳥と詩題に有は。驚と思ひならひける
な。丞相の御時に鳥の方に鶴を被作事もあり。

行かへる旅にとしふる鴈金はいくその春をよそにみるらん
春は花のあるなとよまれたらばこそけにとも覺め。唯春
をなんよそにみるとあらん。なに事のいみしかるへきて。
又旅に年經とは。道路に年をへはこそかくはよまめ。

小萩さく秋まであらは思出んさか野をやきし春のそのひな
是は思ひても何事のいみしかるへきぞ。

櫻花盛になれば古郷のむくらの門もさゝれさりけり

古さととはたふふるくなれる家を云歟。然者有謂。若今是不
住家を云はいかゝあらん。是はならの都をよむよりおこ
りたることゝこそ聞たまへしか。

なかぬ夜も鳴夜も更に時鳥まつとてやすきいやはねらるゝ
此歌合には右方にて侍しかは。そのほととの事はくほしく
聞給ひし也。故宮内卿經長は藏人辨にて左方人にて。その
うたともを四條大納言の長谷籙居られたる所にもてまう
てゝ。とひあはせられけるに申されけるは。歌はあしうも
あらず。さらにと云詞を。よしもなういたつらことなれと
申されけると聞給へしこそ。さたあるとくおほえしか。

思ふてふとをはいはて思ひ覺つらきも今はつらしと思はし
おもふてふとをいはて思ひけりといはゝ。つらさをい
はしとなとはこそよからめと覺如何。

わか心かはらん物かかはらやの下たく煙下むせひつゝ

かはらんものかとをみたるは。人を思ふとのかはるまし
きか不審也。煙をはわくとはいふらんや。わきあかるやう
なりといふをおもへるか。

山のぼに入ぬる月のわれならはうき世の中に又はいてしな

此歌心はあれと。はてのいてしをこそたはふれことゝのや
うにてあさはかなれ。おほよそ月のまたいてさらんは。い
と不便の事也。かゝる事はよまずとこそ聞たまふれ。

後拾遺問答云。問は經信卿。答は通俊卿。

空になる人の心にさゝかにのいかにまたけふかくて暮さむ
問云。ふみとなくてたゝかゝさらんとはいひてんや。證歌
を可承。答云。此歌さゝかにのいかくと歌の面によみて。
それにかのふみかくことはそへたれば。なにしにかあな
かちにふみと云ふ詞は侍らん。そへたるとはかくのみこ
そ。猶問。あらはにふみやるときゝてとはへるめれば。た
ゝかゝさらんといへるは。猶ふみなとあらましかはまさ
りなまし。

後冷泉院御歌。

よそなれと杉の村立しるければ君か住家のほとそしらるゝ
問。いとおかしうみたまふ。但しるといふとやあまたあら
ん。答。しるきとしらるゝとは用心同歌と不覺侍と。くぜと被
仰成む人はけにさも申つへかりけり。

都へといきの松原いきかへり君か千年にあばんとそ思ふ
問。いきかへりといふことはいまゝしかるましや如何。
答。いきかへりといふはいまゝしき事とは如何に。ゆき
かへりといひたる心にこそ。蘇生の心にはあらぬにや。猶

間。往還の義こそ侍けれ。蘇生の義にてまうせるとあやし。但猶祝歌なり。さもよみなす人はへらはいかゝはへらん。いにしへ人もさることこそ哀れ。

絶にけるはつかなるれを繰返かつらのを社きかまほしけれ間。たえにけるはつかなるれとはいづれを云そ。又葛のむとはいかなる事にか。答。たえにけるはつかなるねは。御簾中のとの音あかぬ心をよめは。聲のやみぬればたえたるといふ成へし。かつらのをとは。葛弦は陶潜琴とこそ思給れ。此琴はまことにはひかず。口中の曲を勞なといひはへる。

おひたつを待と頼めしかひもなく波こそすへしときくは諺か間。若末松山と云ををよみたるか。その心ともなくて。唯なみこすとよみてはありなんや。證歌や侍らん。答。すゑの松なくてよむは常のこにや。

松かけて頼めし人はなけれども浪のこゆるは猶そ悲敷と伊勢かよみたるはさもいふへきにや。猶問。伊勢か歌はさ侍けり。但彼は題に松に池のこしたるをよみたると書たれはにや。又其後部類集ともに入て侍らんや。

けさはしも思はん人とはひてまし妻なき閨の上はいかにと問。女歌にてはつまとはよみてんや。たゝつまなき宿とよみたるか。さてはよしなうこそおほゆれ。つまなきこひを

われはするかなといふを思ひたるにや。それはいはれたるものを。答。これはいかに侍へきことにか。たゝ年來知給たるやうは。つまといふ事は。男女のならひはこれかれつまといふと知て侍つる也。男は女をつまといひ。女も男をつまといふなり。女をつまといふへしとなにに見えたるにか。是は證歌おほくや侍らん。まづ伊勢物語につまこもれりわれもこもれりといへる歌は女の歌にて。男のむさし野にこもりたりければ。野をやかんとしければ。女のみ侍けるなり。つまもこもれりとは。われか男をいへるなるへし。我もこもれりとは女のことにか。猶問。のたまはせたることいはれたり。世に歌枕とて侍めるに。おほくはめをつまといふ。若はまたわか草といふ。又或本にはのたまはするやうに。めおとこの中をつまといふともかくれたるやうに覺は。いづれか一定ならんと申かたし。さて伊勢物かたりはそのうたの心をあんし侍るに。若書たかへたるにや。又女の男にかはりたるにやとも思ひたまふる也。その故はこれおとこのむすめをぬすみて。むさしのにゐてくるほとに。ぬす人なりければ。國の守にからぬられにけり。女をば草むらの中にをきていにければ。みちゆく人この野はぬす人なりとて。火をつけんとするに。女のよむとかゝれて侍めり。されはふたりながら

花。

あやめくさかりにもくらんものゆへにねやのつまとや
人ばみるらん

予案之。萬葉集詠松浦佐夜姫歌云。

遠つ人松浦さよ姫つま戀にひれふりしよりおへる山の名
如此は男をもつまといふ歟。又云。

七夕のつま待宵の秋風にわれさへあやな人そ戀しき
かく侍はおとこをつまといふにこそ。

落葉隱路題を清成法印詠歌云。

紅葉散秋の山へはしらかしの下ばかりこそ道はみえけれ
懷圓君（道濟子。）云。無題心路已露顯云々。

良退歌云。

板まよりりくる月の影みれは宿はあらして住へかり鬼
同人云。歌の五文字と童女の頭とはすへらかなるへしと云云
木馬の字尤別様也。貫之かあれたるやとの板間よりとよめ
るは。歌の中間にて何共きこえず。こればおひたしと云云。
走井阿闍梨空源歌云。

今は唯れられぬ庵そ友とする戀しき人のゆかりと思へは
故將作難云。ぬるにとりてこそいと云事はあれ。ぬられぬい
といふとやはあるへき。不得心云云。

顯昭云。相如歌云。夢ならて又もあふへき君ならはれられ

こもれりとは見え侍らす。是先歌たかひたり。又わか草の
といふは。おとこのことはにてこそいはれてはへらめ。女
のたちまちにおとこをわかしといはんもいはれず。又わ
かくさといふとはへめれと。あしひきの山。あらたまのと
しなといふやうに。わかくさのつまなとはよまれて侍に
こそあめれ。このうたを古今に題よみ人不知とかきて。か
すか野となをされてはへめれは。これにつけてもうたか
ひのこれるや。日本紀にすきのをのいづもやへかきつま
こめにとよみ。又明日天皇の皇后に送歌に。あひおもふつ
まのとよみてはへるは。又萬葉にはよろつの事ともかう
もかゝれて侍ものなれは。さためかたう侍れと。妻と書て
つまとよみ。又嬌も嬌をもつまとこそはよみて侍めれ。さ
れは字書に妾の儀也とこそ釋せられてはへれ。さたまら
すといひなから。さすかに春字を秋とよみ。雪を霞とはよ
まれはへらぬものを。所名にも朝妻吾妻をはつまく
とこそはいひつたへて侍れ。したしきなつまとよまは。夫
宇父母兄弟の字をもつまとよまれて侍らんや。但式部は
なかに比の上手にて侍れは。おとこをつまとよみて侍はゆ
へ侍らん。されは偏に難すへきに侍らす。唯證歌を承て。
心のうたかひな^へは^ふやと思なり。
又和泉式部かおとこにつかはしけるうた。五月五日。詞

ぬいをもなけかさらまし

昔觀教寬祐兄弟共に詣竹生島之時遇洪水。大津小家清湖水て繩垣未計見けるに。寛祐詠云。

水うみと思はさりせは陸奥のまかきの島とみてや過まし
觀教云。此歌有大難。仍不知之。寛祐不然之由を同論。還向之時共父の公忠辨之許參て申此由。辨暫沉思云。なとかさも不讀。又難も有謂云。寛祐於有舊氣。辨云。難は離島と見ては留とこそ可讀けれ。過ぬるは彼島の恥也云。

凡和歌には不思議事若は不得心之詞なとは不可讀。能可斟酌也。然者勘解由安次官清行和歌式云。凡和歌者先花後實。

不詠古言并卑陋所名亭物異名。只華之中求美。玉之中擇玉。

長拋瓦礫之辭。先風月之思矣。入詞林舉花。少其榮氣者。捨兮不採。眩渴時汲泉。無其嘉名。忍而不飲。是詞人造風也。莫忽緒云。隨賀陽院七番歌合ニ。

時鳥今そきくなるとなりにも吹つる笛の音をはとゝめて判者不思議之由を被講稱。又時人嘲弄之云。延喜十三年亭子院歌合云。

かた岡の朝の原もとよむまで山郭公今朝よりそなく
とよむまでと講出時下。滿座解頤。仍不講終して止畢云。近の歌仙前金吾甚俊は。白露をしくけにぬける女郎花と讀て被咳。顯仲入道はたれこめてと讀て。病患兵衛佐と被云。古

今にある。たれこめて病時詠之故歟。前泉州道經は紫のにはへるいもとわすひさにと讀て。ぬすひさと被言。隆縁といひし僧はおほをそ鳥にとよみて。おほをそとりの僧と被云。如此事よくく可思慮也。故左京常被誡云。古讀とて無下に下劣の事は不可詠。先年白河院にて有和歌。師時卿くましれといふことを讀。院被仰云。無下にうたてあり。汝程のもの如此事知様やはある。歌には古もよめりとて。如此事は不可詠事也云。

此事不審。俊忠卿歌にそくましねと云事はよめる。

顯昭云。俊忠を思違給歟。

窓燈相似騒動二字之聲。仍禁之。雲取天末。文選月賦。相似天罰二字之聲。仍忌之云。

詩感禮と云事。昔常作之。近代忌之。人煙又近代忌之不作云云。風起于青蘋之末。(文選風賦。)相似清貧二字之聲。仍忌之。虎嘯風起。(孝經風おこるとは不讀。風は聲に可讀云云。

式部大輔正家語云。道雅三位の八條にて。人々鹿歌讀に國房歌云。(康平之比。)

秋のゝに萩咲ちりてすむ鹿は是や世にふるかひよとぞ鳴聞之。經衡云。此歌いとおかしくよめり。まして淳和院邊にて尼原中にて讀ましかは。いま少しおかしからましと云ければ。一座解頤。萬人鼓動侍けりと云。

〔附注〕

秋の野に妻なき鹿の年をへてなと我戀のかひよとそなく
近家に歌合に。或人。

よをへつゝいなみ野にたつ棹鹿は何をかいよと鳴明（音明）と覽
と讀む。判者基俊此事を爲證難。少以不重（不重）。彼國房歌はふる
かひと連たればこそおかしけれ。只かひよといふ字許は爭
可不詠哉。若忌之は古今淑人歌如何。

漢家筆にも如此事可侍。保胤庚申序云。古人守之。今人守之。
有國卿云。古の人もあり今の人もり。多人守哉と嘲哂（嘲哂）云々。
忠峯依宣旨獻歌云。

白雲のおりある山と見えつるは高嶺の花や散まかふらん
躬恒云。府生大誤歟。帝王に奏歌に雲下居とは爭詠哉。帝位
をは雲上と云。避位を下居給と申。就中に末句に散まかふと
讀る。尤可有禁忌云。

予案之。帝王御前にて下と云事。尤可有禁忌歟。但拾遺抄云。
康保三年二月二十一日。梅花下に御倚子立て有御宴時。源
廣信朝臣歌ニ云。

おりてみるかひも有かな梅の花いま九重に匂ひまさりて
此も可有禁忌歟如何。但彼は雲下居とつゝきたる故重歟。如
此物語多無實歟。但宋代之作法。如此事避には不如歟。

〔同書〕

顯昭考云。此事有俊賴髓臈。但大和物語云。延喜御時。召躬
恒仰云。月を弓張と云事は何心そと。是か由仕れと被仰

は。候階下仕し。照月を弓はりとしもいふ事は山へをさし
て入はなりけり。祿ニ大掛かつき畢。又。しら雲の此方に
しも下居は天津風より吹てきつらし云々。或人云。問。此歌
貫之難弓。但定說難知歟。但後撰歌云。しら雲の下居山と
見えつるはふりつむ雲のきえぬなりけり。

郁芳門院根合に周防内侍歌に。わか下もえのけふりなら
んとよめる。又人のもえんけふりの空にたなひく。有禁忌之
由人申けりと云。作者の山かと思ふに。先女院崩御之後に。
内侍は隠にしとそ。俊賴朝臣書置る。然而江記云。人々遺慶
賀之由於周防掌侍許如何。是十番歌宜之由也云々。
同根合時。右一番歌に多津の居と詠。後日左。

宗固云。

此一帖は清輔朝臣の袋双帯の遺篇にして。奏覽以前の本
なるへし。世上流布の袋双帯四帖の内。歌合事部立なく。
唯雜談の部に五ヶ條許入たるを。此遺篇には此事有上卷
と書入あり。此書類書多是顯昭の書入とみゆ。くましねの
條下に。顯昭云。俊忠を思遣給かとある。父顯輔卿の事。若
又兄清輔朝臣事か可考。二條爲定卿書入もあり。

世上流布本奥ニ。尋中云。囊草子名。令釋云。而此本ニ不候
如何。仰云。然也。件釋ハ頗戲言歟。仍奏覽本ニハ依有其憚

不書之歟。我ニ書テ給タリシ本ニハ。件ノ本ハシニ書たりき。其本六角東洞院炎上之時焼之。此名者智袋也。又才學袋也。入袋常隨身。仍有此名。又令書進事皆虛事歟。然者又虛言袋也ト釋タリシ。(下略)宗固云。今此遺篇の端に囊字四囊篇^{コモル}。一者其形囊也。一者知囊也。一者動納囊^{トキ}隨身也。一者多僻事。故虛言袋之義とアルニ合考て。此書袋双帯の遺篇たる事をしるへし。二條院へ奏覽本ニハ此釋を除れた

リとみゆ。流布本奥書。建久二年とあり。その筆者未詳とも。後に書たる物ゆへ。文に大同小異あれとも。此書の袋双帯たる事は分明なり。惜哉此書も又末脱簡とみゆ。今の流布本も疑に略本歟。中院家(通茂公)御本も流布の本にて。所々文字を直されたるやうにみゆる也。此一帖尤珍書たり。窓外に出すへからず。

續群書類從卷第四百六十二

和歌部九十七

井蛙抄第一

風舂事

新撰髓腦云。(公任撰之。)凡歌は心深くすかたきよけにて。おかしき所あるをすくれたりと云へし。ことおほくそへくさりてよみたるはわるきなり。一すしに姿すくよかなるへし。姿心相具する事かたくは。先心をとるへし。其姿と云は。うちきよきよけにて。ゆへ有て歌と聞へ。若はめつらしくそへなしたる也。いにしへの人多く歌枕をなきて。すゑに思ふ心をなんあらはしける。又云。凡詞いやしく。あまりおいらかなることはなと。(はからひてすくれたる事にあらすはよむへからず。かもイ)しらへらなとふるきも。つねによむまし。又古くよめると葉をふしにしたるはいとわろし。俊賴口傳に云。大方歌のよしと云は。心をさきとして。めつらしきふしをもとめ。詞をか

さりよむへき也。心あれ共詞かささらされば。歌おもてはめてたし共聞えず。詞かさりたれ共。させるふしなれば。よし共聞えず。めてたきふしあれ共。儼なる心詞なきはまたわろし。けたかくおもしろきを一の事とすへし。これらをくしたらん歌は。世のすゑにはおほるけには思かくへからず。金玉集といふ物有。其集などの歌こそはそれなくしたる歌なめれ。それを御らんして。御心をえさせ給ふへき也。

古來風舂云。歌のよき事をいはんとて。四條大納言公任卿はこかれの玉の集となつて。通俊卿の後拾遺の序には。詞ぬひものゝとくに。心うみよりもふかしなと申されためれと。必しも錦ぬひものゝことくならね共。歌はたよみあけ。もしは詠しもしたるに。なにとなく艶にもあはれにも聞ゆる事のあるなへし。もとより詠歌といひて。聲につきて能もあしくも聞ゆ

る物なり。

詠歌大概（被進梶井宮抄。）云。心はあたらしきをさきとす。人のいまたよまさる心をもとめて是をよむ、言葉はふるきをもとめて用ゆへし。ことは、三代集を出へからず。風舩は可效堪能先達之秀歌。不論古今遠近。よろしき歌を見て其舩にしたかふへし。又云。つねに「古歌の景氣を觀念して心にそむへし。殊にイ見習ふへきは。古今。伊勢物語。後撰。拾遺。三十六人集の中に。殊に上手の歌を心にかくへし。人麿。つらゆき。忠崇。伊勢。こまろ等のたくひ也。和歌の先達にあらずといへ共。（時節の景氣。世間の盛衰。物のよしをしらんためには。イ）白氏文集の第一第二の帙を常にとりもてあそふへし。深く和歌の心に通する也。和歌に師なし。たふふるき歌をもて師とす。心を古風にそめて詞を先達に習は。誰人か詠せざらんや。新撰髓腦云。いにしへのよき歌。

世中をなにしたとへん朝ほらけ漕行舟の跡のしら波
あまの原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出し月かも
貫之。躬恒。中比の上手也。今人のよむは此人の流なり。

つらゆき歌

思ひかねいもかりゆけは冬のよの川風さむみ千鳥鳴也

みつね歌

我宿の花見かてらにくる人は散なんのちそ戀しかるへき

かね盛歌

かそふれは我身につもる年月を送りむかふと何急くらん
此歌はつらゆきか云。歌の中の本舩にすへしといひけり。
攝津國のなからの橋もつくる也今は我身を何にたとへん
是は伊勢の宮す所の中務君に。なからむよにはかやうに歌
はよめといひけり。

戀せしとみたらし川にせしみそき神はうけすも成にける哉
是は深養父か元輔にをしへける歌也。かやうに歌はよむへ
きにこそ。

五條歌合の判に。歌はかならずしも才學をふるひて。繪師のふ
の具をつくし。つくもつかさの木の色をさま／＼にゑりすへ
たるやうにはあらざるへし。たふみあけうちなかむるに。け
にもとおほえて。おかしくも聞ゆるすかたなんあるへき。たと
へは在中將の月やあらぬとよみ。紀貫之かしづくにこると
いひをきたるやうなるへし。

京極被進右府將軍抄云。近世の人はたふ思ひえたる風情を三
十一字に云つゝけむとをさきとして。さらに姿詞の趣をしら
す。これによりて世の末の歌は。たとへば田夫の花の陰をさ
り。商人の鮮衣をきけるかとし。然者大納言經信卿。俊賴期臣。
左京大夫顯輔。清輔朝臣。ちかくは亡父卿則此道を習ひ侍りけ
る。其俊と申ける人。此輩末の世のいやしき姿をはなれて。常

にふるきをこひねかへり。此人々のおもひ入てすぐれたる歌は。たか代にもをよひてや侍らむ。

大納言經信

ゆふされは門田のいなは音つれてあしの丸やに秋風そ吹
君か代はつきしと思ふ神風やみもすそ川のすまん限は
おきつ風吹にけらしな住吉の松のしつえをあらふ白波

俊賴朝臣

山櫻咲にし日より久かたの雲井に見ゆる瀧の白糸

落瀧つ八十氏川の早き瀨に岩越波は千世の数かも

これははれの秀歌の本跡と申へきにや。

鶉鳴まのゝ入江のはま風に尾花波よる秋の夕暮

ふる郷は散紅葉はにうつもれて軒のしのふに秋風そ吹

是は幽玄に面影かすかにさひしきさまなり。

あすもこむ野路の玉川萩こえて色なる浪に月やとりけり

思ひ草葉すゑにむすふ白露のたま／＼きても手にもたまらず

是はおもしろく見所有て。上手のしことゝみゆ。

うかりける人を初瀬の山をろしよはけしかれとは祈らぬ物を

是は心ふかく。詞心にまかせて。學ふ共いひつゝけかたく。

誠にをよましき姿也。

顯輔卿

葛木や高間の山の櫻花雲のよそにみてやゝみ南

秋かせにたたな引雲の絶間よりもれ出る月の影のさやけさ
高砂の尾上の松を吹かせの音にのみやは聞わたるへき

清輔朝臣

冬かれの森のくちはの霜の上に落たる月の影の寒けさ

君こそは獨やねなんさゝの葉のみやまもそよにさやく霜よを
難波人すくもたく火の下こかれうへはつれなき我身なりけり
なからへばまた此比やしのはれむうしと見しよそ今は戀しき

先 人俊成事

又やみんかたのゝみのゝ櫻かり花の雪ちる春の明ほの

世中よ道こそなけれ思ひ入山のおくにも鹿そ鳴なる

住わひて身をかくすへき山里にあまりくまなきよはの月かな

なには人あしひたくやに宿かりてすゝろに袖のしほたるゝ哉

立かへり又もきてみん松島やをしまのとまや波にあらすな

思ひきや榻のはしかきかきつめて百夜も同じまろねせんとは

いかにせん室のやしに宿もかな戀のけふりを空にまかへん

基 俊

あたらしをいせの濱萩おり敷ていも戀しらに見つる月哉

契り置しさせもか露を命にてあはれとしの秋もいぬめり

八雲御抄云。第一に歌のよきやうは。只すくにえんなるへき

也。然るを此舛心にまかせていひかたき故に。心こもりて艶な
るは第二也。えんならんとすれは必心たらず。心すくならむと

すれば又艶ならさる也。只えんならずといふ共。心をたしかに
よむへし。返々やさしきをこのむへからず。

同御抄云。させる事なき事をよくいひつゝけ。めつらしからぬ
事をあたらしくいひなすへき也。むかしよりよみたる詞。いつ
れかいほゝめつらしかるへき。たゞいひなしからによりてめ
つらしき也。上句くたけたらは。下句かまへてすくに。下句く
たけたらは。上句をすくによむへし。上下共にすくなるは本
也。上下ともにくたけたるは秀歌にこれをきかず。

又云。詮する所。奥義の肝心。すくに歌をよめとなしふるをせ
んとする也。努々他のやうな好むへからず。

京極被送衣笠狀に云。まつ歌は只和國の風にて侍るうへは。先
哲もくれゝかきをける物にも。やさしくものあはれによむ

へき事とそ見え侍る。けにいかにおそろしき物なれと。歌によ
みつれば。優に聞なさるゝたくひえ侍る。それにもとよりやさ
しき花よ月よなとやうの物な。おそろしけによめらむは。なに
のせんか侍らん。扱も此十鉢の中には。何も心あるやうにすき
て。歌の本意と存る姿は侍らす。きはめて思ひえかたう候。と
さまかうさまにてはつやゝつゝけらるへからず。よくゝ
心をすまして。其一境に入ふしてこそまれにもよまるゝ事に
侍れ。されはよろしき歌と申歌。とに心のふかきなのみぞ申め
る。あまりに又ふかく心なれんとて。ねちすくせは。入ほか

のいかへり歌とて。堅固ならぬ姿の心えられぬは。心なきより
もうたてくみくるしき事にて侍る。此さかひのゆゝしき大事
にて侍る。尙々能々斟酌あるへきにこそ。

私云。心ある鉢といふ事能々心得へき事也。近日の人は風情
のめつらしく興ありてたくみ出したる。心あると思へり。さ
らにしからさる事也。風雲草木の感につけても。又世間盛衰
なにつけても。思入たるを心あるとは申也。故戸部申さ
れしは。貫之か櫻ちる木の下風のうた。風情おもしろくめて
たけれ共。是をは心ある歌とは申さす。遍昭僧正出家の時め
のとのもとへ。たらちねはかゝれとてしもむは玉の我くろ
かみをなてすやありけん。是こそ心ある歌の本よと申され
き。是すなはち家の庭訓也とたしかに申されし也。これにて
よくゝ心うへし。

六百番歌合 餘寒

左 持

季 經 卿

なをさゆるけしきにしろし山櫻また冬こもる梢なるらん

右

中宮權大夫

したふへき冬には雪のをくれゐて春ともいはすさえ渡るらん
右方申云。左歌。初五文字に題皆あらはれたる念なし。左
陳云。初五文字に題の字よむ事不勝計。左方申云。非珍。判
云。此兩首歌。姿は優にこそ見え侍るめれ。大かたは近來

の歌よみの輩。麥詞はしれるかしらさるか。偏曲折微妙の風情を不盡之外は非珍の由に被存申之條。不被甘心事にや。但右の歌。雪のなくれぬてといへる詞。いますこし思ふへくや侍らんと見え侍れと。末の句よろしく侍るにや。勝負不分明歟。

廣田社歌合 述懷

左

實家

右

登蓮

昔よりめくみひろ田の神ならばさりととも秋の心しるらん
いつまてと我世の程をたのみつゝはかなく過る月日成らん

左歌。めくみひろ田のなといへる心は。あまた見え侍る中に。秋の心をよせられて侍るは。いとおかしくこそ侍るめれ。宜將愁字作秋心といへる詩の心なるへし。右歌。ことはに花をもとめ。女に玉をかされ共。詞つゝきもしすくなに聞えて。よろしくこそ見え侍れ。誠之至深者其詞先詞。文之偏質者其跡少跡と云て。これひとつのすかたに侍るへし。左はさりととも秋のといへる心あはれに聞え。右ははかなくすくす月日なるらんとよめる凄風跡にかなへり。又猶持とす。

西行御裳澁河歌合

をしなへて花の盛に成にけり奥の端とにかゝる白雪

判云。右歌。うるはしくたけ高く見ゆ。左。こともなくうるはし。勝とや申へからん。

同歌合

花にそむ心のいかて残りけん拾はてゝきと思ふ我身に

判云。右歌いとおかし。但左歌なをともなくよろし。勝とや申へき。

同歌合

吉野山やかて出しと思ふ身を花散なはと人や待らん

判云。左歌ともなくよろし。勝とや申へからん。

同歌合

左勝

霜さゆる庭の木葉をふみ分て月は見るやととふ人もかな

右

山川にひとりばなれて住をしの心しらるゝ浪の上かな

右歌いみしく艶には聞侍れと。左歌猶姿詞よろし。かちと申へし。

私云。わつかに卅六番歌合に。こともなくてよろしと云事。三所にかゝれて侍る。判者本意爰にて侍るへし。

順徳院御百首

春よりも花はいく目もなき物をしめてもおしめ驚のこゑ
かやうにやすらかにともめ出しくさりつけ候ても。三

代集以上の姿は候物を。され共かたはらくるしく好み候輩。かゝる心の候へかし。

かけしあればおられぬ波もおられけり汀の藤の春のかさしに五句非新造。風情始出來候。如此事殊難有令悦目候。

ともしてこよひもあけぬ玉くしけ二村山の峯のよこ雲

五句卅一字悉秀逸。如擲玉。光明照耀殊勝候。

人ならぬ岩木もさらに悲しきはみつの小島の秋の夕暮

此卅一字又每字難押感涙候。尤玄之玄最上候歟。

中務卿親王文應三百首に。

音羽山はな咲ぬらしあふ坂の關のこなたに句ふ春風

毎句美麗に候。かくこそあらまほしく候へ。珍重。

雲拂ふ夕風わたるさゝの葉のみやまさやかにいつる月影

たゝかやうにやすらかに。うつしくこそ有たく存候へ。

當流撰者初度撰之時。自詠を撰入られたるは。定至極本意歌な

るへし。風舩本様の爲に書出之。

千載集には撰者初は十一首也。勅定によりて廿五首を加て

卅六首也。十一首殊玄之玄なるへき故に注之。

皇太后宮大夫俊成

みよしのゝ花のさかりをけふみれはこしのしらねに春風を吹

夕されは野への秋風身にしてみてうつら鳴なりふかくさの里

月さゆる氷の上にあられふり心くたくる玉川のさと

浦つたふ磯のとまやのかち枕きゝもならはぬ風の音かな
あはれたるのしまかさきのいほり哉露をく袖に波もかけけり
思ひきやしちのはしかきかきつめて百夜も同じ丸ねせんとは
たのめこし野への道芝夏ふかしいつく成らんもすの草くき
あふ事に身をかへてとも待へきをよゝをへたてん程そ悲しき
住わひて身をかくすへき山里にあまりくまなきよはの月哉
雲の上の春こそさらに忘れられ花はかすにも思ひ出しを
いたつらにふりぬる身をも佳吉の松はさりと哀しるらん

新古今京極歌は自余撰者并爲^{出イ}竊慮被入之間非自撰。仍新勅撰歌注出之。

權中納言定家

名もしるし峯の嵐も雪とふる山櫻戸の明ほのゝそら

久かたのかつらにかくるあふ草空のひかりにいくよ成らん

天の原おもへはかはる色もなし秋こそ月のひかり之けれ

あけは又秋のなかはも過ぬへしかたふく月のおしきのみかは

しくれつゝ袖たにほさぬ秋の日にさこそみむろの山は染らめ

ちりもせし衣にすれるさゝ竹の大宮人のかさすさくらば

松か根を磯邊のなみのうつたへにあらはれぬへき袖の上哉

戀しなぬ身のをこたりそ年へぬるあらは逢世の心つよさに

こぬ人をまつほの浦の夕なきにやくや藻鹽の身もこかれつゝ

くるゝ夜は衛士の焼火をそれとみよむろの八嶋も都ならねは

逢事は忍ふの衣あはれなとまれなる色にみたれそめけん
たれも此あはれみしかき玉のをにみたれて物を思はすも哉
しのへとやしらぬ昔の秋をへて同じ形見に残る月かけ
おさまれる民のつかさのみつき物ふたゝひきくも命なりけり
百敷のとのゑを出るよゐゝはまたぬにむかふ山の端の月

續後撰

前大納言爲家

明わたる外山の櫻よの程に花咲ぬらしかゝる白雲

あたになと咲はしめけんいにしへの春さへつらき山櫻哉

天河とをきわたりに成にけりかたのゝみのゝさみたれの比

龍田山よその紅葉の色にこそ時雨ぬ松の色も見えけれ

染あへすしくるゝまゝに手向山紅葉をぬさと松風を咲

いすゝ川神代のかゝみ影とめて今もくもらぬ秋のよの月

みしめゆふ三輪の杉村ふりにけり是や神代のしるゝ成らん

老らくのおやの見るゝと祈りこし我あましを神や受らん

逢までの戀そ命に成にける年月長きもの思へとて

たのましの思ひわひぬるゝゐゝの心はゆきて夢にみゆらん

みちのくのまかきの嶋は白妙の涙もてゆへる名にこそ有けれ

續拾遺

前大納言爲氏

はるかななるふもととはそこみえわかつて霞の上に残る山の端

吉野山いくよの春かふりぬらん尾のへの花を雪にまかへて

春の夜の霞のまより山の端をほのかに見せて出る月影

いまよりの衣かりかれ秋風にたか夜寒をか鳴てきぬらん
かけやとす月のかつらもひとつにて空よりすめる秋の川水
須磨の浦や關の戸かけて立波を月に吹こす秋の鹽かせ
露霜のをくとの稻葉色付てかり庵さむき秋の山風
紅葉はの秋の名残の形見たに我とのこさぬこからしの風
さゆるよのあらしの風に降をめてあくる雲間につもる白雲

餘情

忠峯十牀云。餘情歌。

我宿の花見かてらに來る人は散なむ後そ戀しかるへき

今こんといひし計に長月の有明の月をまち出るかな

思ひかれいもかり行は冬のよの川風さむみちとり鳴也

音羽川せき入て落す瀧つせに人の心の見えもする哉

和田のはら八十島かけて漕出ぬと人にはつけよ海士の釣舟

此牀詞標一片。義籠萬端。

四條大納言(公任卿。)和歌九品。

上々 言葉たえにしてあまりの心さへある也。

ほのゝとあかしの浦のあき霧に嶋かくれゆく船をしそ思ふ

春立といふばかりにや三吉野の山も霞て今朝は見ゆらん

上中 言葉うるはしくあまりのこゝろさへ有也。

太山にはあられふるらし外山なる正木のかつと色付にけり

相坂の關のしみつにかけみえて今やひくらん望月のこま

日吉社歌合奥書云。五條。(俊成卿。)

おほかたおかしきを云。この理を云きらんとせされ共。もとより詠歌といひて。たゞよみあけたるにも。うちなかめたるにも。何となく艶にも幽玄にも聞ゆる事のあるなるへし。よき歌になりぬれば。其とは姿の外に景氣のうかひたるやうなる事のあるにや。たとへば春の花のあたりに霞のたな引に。秋の月のまへに鹿のこゑを聞。かきれの梅に春の風にほひ。峯の紅葉にしくれのうちそゞきなとするやうなる事のうかひてそへる也。つねに申様には侍れと。月やあらぬ春やむかしのといひ。むすふての雲ににこるなといへる。何となくめてたく聞ゆる也。かやうなるすかた詞によみにせんと思へる歌は。ちかきよには有かたき事なるを。此ちかきとしより此かた見え侍りと云々。

六百番歌合 殘景

右 信 定

秋あさき日かけに夏は残れとも暮るまかきは萩の上風
判云。右は有餘情の跡侍るへし。なすらへて可爲持。
千五百番

左 有家朝臣

時雨には色もかはらぬ高砂の尾上の松に秋かせそふく
京極黃門判云。左歌雖有餘情。可謂無殊事。

井蛙抄第二

取本歌事

八雲御抄に。これ第一の大事也。上手とにみゆるなり。しかあれと。またいと上手ならぬ人も。ふる歌よくとる人も有。上手の中にもふる歌えとらぬも有。此二様有。一は詞を取て心をかへ。一は心なからとりて物をかへたるも有。言葉を取て風情をかへたるはよし。風情をとる事は尤見苦し。心を取て物をかふとは。たとへば古今歌に。月夜よしよしと人につけやらはこてうに似たりとよめる。萬葉に。我宿の梅咲たりとつけやらはこてふににたりちりぬともよしといへるをとれり。「是は心も詞もかへすして。梅を月にかへたる計也。かゝるたくひ」これにかきらす。詞を取て心をかへたるは又おほし。萬葉の歌などをは。本歌とるやうとしもなく。すこしをかへてよめるもおほし。人にと夏野の草のしけくともいもとわれとしたつさはりなはと云歌をとりて。とは夏野のしけくともとよめり。足曳の山たちはなの色に出て我こひなむをやめんかたなしといふを。山たち花の色にいつなととれり。めかり鹽やきいとまなみくしけのをくしとりてたに見すといへるを。なたのしほやきいとまなみとはとれり。須磨の海士の鹽やきぬの藤衣まをにあればいまたきなれす。是をしほやくあまの藤衣とは。さなから歌をとるとしもなくとれり。又雲ににこる山の井のと

いへる。人丸の結ふ手の石まをせばみおく山の岩かきしみつあかすも有哉といふ歌をとれり。しかのみならず。三々の山しかもかくすか。ゆく水にかすかく。みなせ川ありて行水。とに出ていはぬなといへる。萬葉集のふるき詞をとれり。古歌に衣たになかに有しといへるを。後撰歌につらからぬなかに有こそうとしといへるなとも数しらす。上古はかくのとし。中比は

歌取事まれ也。近代はまたおほし。其中にわきとめかしく耳に立て。これをとれたるを詮にて。わか心もとはもなきは返々此道の寃也。尤好むへからず。近代俊頼歌などはやう／＼とる事になりたり。それもなをかき歌をとるに似たり。歌をとらんには猶ふるき歌をとるへき也。東三條左大臣。(源常。嵯峨源氏。左大臣左大將。齊衡元年薨。卅七。)おりてかさ／＼ん老かくるやとといへるを。みつねか老もかくれぬこの春はとよめる。すこしちかきよのためしなり。こゑなかりせは雪きえぬとよめるは。谷より出る聲なくはといへるをさなからとれり。されとこれは歌を取作法にあらず。歌とるに自然にかよへるか。猶ふるき歌とる。とにまめなる人の所爲。まことに一事なれと。我とめつらしくよみたらんには。なをおとるへくや。すへて末代の人。いまは歌の詞もよみつくし。さのみあたらしくよき事は有かたければ。只よは／＼とある歌は。よろづ人にかはりたる處もなき事を。上手のけちめあらんとて。おそろしき萬葉の

詞。ふる歌とりなとして。まへかはらふは。かならずよくよめりと思はねと。すこしけちめあらんとするなめり。二句なとはいか／＼せん。三句とる事尤しかるへからず。凡古歌の詞いたく

とるを。先達なんする事なり。被進梶井宮抄に云。古歌をとりにてあたらしき歌を詠る事。五句の中に三句にをよは。すこふる過分めつらしけなし。二句のうへに三字四字是をゆるす。猶是を案せよ。同事を以て古歌の詞を詠るは頗念なし。花をもて月を詠し。月をもて花を詠す。四季の歌をもて戀雜の歌を詠し。戀雜の歌をもて四季の歌を詠す。かくのときの時古歌を取に難なし。

足曳の山郭公。 三吉野のよしの山。

久かたの月のかつら。 ほととぎす鳴やさ月。

玉ほこの道行人。

かやうの詞またく幾度なり共は／＼からず。

年のうちに春はきにけり。 月やあらぬ春やむかし。

櫻ちる木のした風。 ほの／＼とあかしの浦。

かくのとくのとくひを一句にてもさらに詠へからず。

私云。本歌をとれるやうさま／＼也。一の様は古歌の詞をうつして上下にをきて。あらぬ事をよめり。

名取川春の日数はあらはれて花にそしつむせの埋木
名取川瀬々の埋木あらはれはいかにせんとか逢見そめけん

なをさりの小野の淺茅にをく露も草葉にあまる秋の夕暮

淺茅生本歌の小野のしの原忍ふれとあまりてなとか人の戀しき

散花の忘かたみの峯の雲そをに殘せわすれかたみに

あかて本歌こそ思はん中ははなれなめそなたに後の忘かたみに

春のよのあけのそほ舟ほのくといく山もとを霞きぬらん

旅にきて物かなしきに山本のあけのそほ舟興に出見ゆ

大とものみつのはま風吹はらへ松ともみえし埋む白雪

いさ子共はや日本へ大とものみつのはま松まちこひぬらん

たをやめの袖もひあへす飛鳥風たいたつらに春雨そ降

乙女子かかさしの櫻咲にけり袖ふる山にかゝる白雲

をとめ子か袖ふる山のみつ垣の久しき世より思ひそめてき

見すもあらすみもせぬ影の半天にあやなく霞む春のよの月

みすも非す見もせぬ人の戀しくはあやなくけふや詠暮さん

一やう本歌にかひそひてよめり。

鶯のなけともいまた降雪に杉の葉しるき相坂の山

梅かえにきぬる鶯春かけてなけ共いまた雪は降つゝ

思ふとちそこ共しらす行暮ぬ花の宿かせ野邊の鶯

おもふとち春の山邊に打むれてそこ共いはぬ旅ねしてしか

きりくす鳴や霜よのさむしるに衣かたしきひとりかもねん

さむしるに衣かたしき今宵もや我を待らん宇治の橋姫

萩か花ま袖にかけて高圓の尾上の宮にひれふるやたれ

高圓の野への秋萩いたつらに咲か散らん見る人なしに

たへてやは思ひありともいかうせんむくらの宿の秋の夕暮

思ひあらは葎の宿にねもしなんひしき物には袖をしつゝも

深草の里の月影さひしさも住こしまゝの野邊のあきかせ

年をへて住こし里を出ていなはいとゝ深草野とやなりなん

一のやう。本歌の心にすかりて風情を建立したる歌。本歌

に贈答したる姿など。古くいへるも此姿のたくひ也。

消なくにまたやみ山を埋むらん若菜摘野も淡雪そ降

み山には松の雪たに消なくに都は野へのわかなつみけり

鳩の海や月の光のうつるへは浪の花にも秋は見えけり

草も木も色かはれ共わたつみの波の花にそ秋なかりける

卯花のまかきは雲のいつことて明行月の影つとるらん

夏の夜はまた宵ながら明ぬるを雲のいつこに月宿るらん

天ろ遠き渡りに成にけりかたのゝ御野のさみたれの比

あまの川とをき渡にあられとも君かふなては年にこそまで

久かたの中なる川のうかひふねいかに契りてやみを待らん

ひさかたの中に生たる里なれば光をのみそたのむへらなる

しかの浦や遠さかり行波間よりこほりて出る在明の月

さよふくるまゝにみきはや氷るらん遠さかり行志賀の浦浪

ゆく春もよるはこえしととまらなんくるゝまかきの山吹の花

夕暮の籬は山と見えなゝん夜はこえしとやとりとるへく
春よりも花はいくかもなき物をしぬてもおしめうくひすの聲
濡つゝそしぬて折つる年の内に春は幾日もあらしと思へは
うきよりは住よかりけりとはかりに跡なき霜に朽たてる門
山里は物の淋しきこそあれよのうきよりは住よかりけり
霞ゆく難波の春の明ほのに心あれなと身を思ふかな
心ある人に見せばや津の國のなほあたりの春のけしきを
人とはゝ見すとやいはん玉津島霞む入江の春のあけほの
玉津島よく見ていませ青によしならなる人の待とはゝいかに
一のやう。本歌の心に成かへりて。しかもそれにまつはれ
すして。妙なる心をよめる歌。是は拾遺愚草中につれにみ
ゆる所也。

大空は梅のにはひに霞つゝ曇も果ぬ春のよの月

照もせすくもりもはてぬ春のよの朧月夜にしく物そなき

胸とめて袖うち拂ふかけもなしさのゝわたりの雪の夕暮

にはかにも降くる雨かみわか崎さのゝ渡に家もあらなくに

高砂のおのへのしかのなかぬ日もつもり果ぬる松のしら雪

秋風のうち吹毎に高砂の尾上の鹿のなかぬ日そなき

名取川いかにせんともまたしらす思へは人をうらみつる哉

なとり河瀬々の埋木あらはれはいかにせんとか逢見初けん

秋の色にさてもかれなて昔邊こく棚なしをふれ我そつれなき

堀江こく棚なしをふれこきかへり同じ人にや戀わたりなん
やとりせしかり庵の萩の露はかり消なて油の色に戀つゝ

秋の田のかりほの庵の匂ふまで咲る秋萩見れとあかぬかも

白妙の袖の別に露おちて身にしむ色のあき風そふく

白妙の袖わかるへき日を近み心にむせふなきにしもあらず

秋はいぬ夕日かくれの岑の松よもの梢の後もあひ見む

山高み夕日かくれの淺茅はら後みんためにしめさらましを

契をきしすゑ野のはらのもとかしはそれ共しらしよその冬枯

石上ふるからをのゝもとかしはもとの心はわすられなくに

尋ぬれは思ひしみわの山そかし忘れねもとのつらき面影

三輪の山いかに待みん年ふとも尋ぬる人ゝあらしと思へは

白妙の衣手かれていくかへぬ草を冬野の夕暮のそら

本歌不見。道のへの草を冬野にふみかへし弱立待と妹に告せよ

一のやう。本歌の只一ふしなとれる歌。

朝日影にはへる山の櫻花つれなく消ぬ雪かとそみる

朝日影匂へる山に照月のあかざる君を山こしにして

玉ほこの道もやとりも白露に風の吹しく野路のしの原

しら露に風の吹しく秋の野はつらぬきとめぬ玉を散ける

うさぎをは我たにいとふいとへたゝそをたに同じ心と思はむ

あかて社思はむ中ははなれなめそなたに後の忘れかたみに

よもすから月にうれてへてねをそなく命にむかふ物思ふとて

たゝにあひて見てはのみ社玉きはる命にむかふ我戀やまめ
わすれしの人たにとはぬ山路かな櫻は雪にふりかはれとも

忘れしのゆく末まではかたければふをかきりの命とも哉

本歌二首を以てよめり。

千五百番歌合

定家

はてはたゝあまのかるもをやとりにて枕定むる宵／＼そなき

幾夜しもあらし我身をなそもかくあまのかるもに思亂るゝ

よゝ／＼に枕定むる方もなしにわしよの夢に見へけむ

信實朝臣

老となる物とはしりぬしかりとてそむかれなくに月をみる哉

大かたは月をもめてし是そ此つもれは人の老と成もの

しかりとて背かれなくにとしあれは先嘆かれぬあなう世中

一取古名歌句事

廣田社歌合

季定

こきはなれしほちを行は淡路島かくるゝまてになかめつる哉

五條判云。左歌。すかたはよろしくこそ侍な。下句やかの

かくるゝまてにかへり見しなといへる。名歌のめてたく

侍るなは。いかゝときこえ侍る也。ふるき歌一二句とるも

つねの事なれと。櫻散と置言葉。はゝかるへくはへる也。

私云。惠慶能因すてにさくら散とをきて侍り。かやうの

事人にしたかふへきにや。あかりての人は別の事にて。

今の世の人はなをはゝかるへしとにや侍らん。

下説
櫻は

水の面にはせきとむる花のしからみかくへかりけり

新古今
後集

櫻する春の山邊ばうかりけり世をのかれにとこしかひもなく

一本歌詞取過事

鴨長明抄云。御所の御歌合に曉庵讀侍し時。

今こんとつまつ契りし長月の有明の月にをししか鳴也

此歌はことからやさしとて勝にき。されと定家朝臣常陸にて

は被難き。彼素性が歌にわつかに二句こそかはりて侍れ。かや

うにおほく似たる歌は。其句ををかかへて。上句を下になし。

作りあらためたるこそよけれ。是はたゝもとの置所にて。むね

の句とむすひ句と計かはれるは。難とすへしとなん侍し。

京極被遣粟田口大納言基良卿消息云。近來諸人上手名譽之輩。

偏好詠候一樣。(風情術盡之時。自身同詠云々。)亡父不許候事。

三代集已下古歌之三句を取渡て用自歌事。同題同心殊禁制候。

萬葉集古歌長歌旋頭等之詞。頗其難可涉之由申候き。每人雖詠

之。少々覺悟事。

家隆卿

泊瀬山うつろはんとや櫻花色かはり行峯のしら雲

春霞たな引山の櫻花うつろはんとや色かはり行

範永卿

さひしさに柴折くふる山里ゝ身より思ひの煙やはたつ

さひしさに雪をたにもたゝしとや柴折くふる冬の山星
如此類作。

中務卿親王御歌云。

香羽山はな咲ぬらし相坂の關のこなたに匂ふ春風

民部卿毎句花麗。返々かくこそ有度候へ。珍重。

なとは山をとに聞つゝ會坂の關のこなたに年をふる哉

私云。此歌本歌已及三句。殊有賞美之詞。可謂不審。

九條前内府被付詞云。本歌似過候歟。古歌句之在所及三句

爲同處者候。先達中無念之由候歟。

六百番歌合

右

思ふとちそこ共いはす行暮ぬ花の宿かせ野邊の鶯

左右共に無難之山中之。

判云。右歌は素性法師の思ふとち春の山邊にうちむれて

そこ共しらぬ旅ねしてしかといへる歌を。とりすくせる

にや侍らん。是は鶯に花の宿かれる。あまりさへ艶なるに

や。ふるからすは持なとにや侍らん。

一萬葉本歌褒貶

千五百番歌合

左勝

左大臣

誰なけふまつとはなしに山陰や花の雫に立そぬれたる

右

雅經

山風の吹ぬるからに香羽河せきいれぬ花も瀧の白浪

左はかの萬葉の山の雫に我たちぬれぬといへる歌の心を

とりて。花の雫にたちそぬれぬると云る。心いみしく艶に

見え侍るを。右又人の心のみえもする哉といへる歌を思

へる。おかしからざるにはあらず侍れと。猶中古の歌は

萬葉の心にをよひかたかるへし。仍以左爲勝。

同歌合

左

有家朝臣

朝日陰にほへる山の櫻花つれなく消ぬ雪かとそみる

右

定家朝臣

櫻花うつろふ春をあまたへて身さへふりぬる浅茅生の宿

左。朝日かけとをき。つれなくきえぬ雪とみゆらん。風情

いとおかしく侍るへし。右。うつろふ春をあまたへてとい

ひ。身さへふりぬるあさち。心のやみのくらすにや侍らん。

あはれもかくへくやとおほえ侍れと。なを左の朝日かけ

も。むかしの夜の鶴の侍らましかはと。心なくかへておほ

え侍れは。勝負すてにまとひて。同科とや申へく侍らん。

同歌合

左

季能卿

駒なめてこそ春野を朝行はあほきか原に鴛子鳴也

右

俊成卿女

高砂のまつの緑もまかふまで尾上の風に花を散ける

左。こせの春野をなといへる。萬葉集などおほえて優に侍る。下句こそ何のはらといへるにか侍らむ。管見のものよみたにえよみとかめす侍れ。萬葉集にもこせの山野にはつらく椿などいへるやうにおほえ侍り。右はことなる事は侍られと。すかたことはとかなく侍るにや。大かたは萬葉集にも。おかしきやうなる事をとり詠なりとぞ。ふるきものも申侍き。巨勢のはる野。しゐてこひねかふへきにはあらざるにや。無事なるにつきて。右勝とや侍らん。

六百番歌合

左

定家朝臣

かはれたゝわかるゝ道の野邊の露。命にむかふ物も思はし判云。左。命にむかふや。萬葉集などに侍るめれと。殊に不可庶幾よし。

愚管抄云。(源承法眼。萬葉集歌取事)

寶治百首に

正三位知家

過ぎつる里をはるかに鳴鳥のかけるのをのかしのゝめの空今夜もやさのゝをかへの秋風にさゝはかりし独かもねんこれらは當家に申たかひて。彼萬葉の名所とりてよめる姿なり。此ふりの歌その比よりおほくいてきたり。

光俊朝臣

まきもくのあなしかは風よきてふけにほへる紅葉今さかり也

いもか袖まきもく山の朝霧に匂ふ紅葉のちらまくもおし

千早破神のをほまに舟とめて大崎みれば月そさやげさ

大崎の神のをほまはせまけれと百舟もこくすくといはなくに

是は石上乙丸配土佐國之時歌也。非吉事。

文永二年龜山殿五首歌合

岩倉の小野の秋つに立雲のはれまそ鹿の妻を戀らん

石倉のをのゝ秋つに立渡る雲にもあれや時をしも待

是は寄雲云々。有憚雲。

はりまかたあさこく船のほのかにも見え渡る山は淡路島かも

まゆのと雲井に見ゆる阿波の山かけて漕舟泊りしらすも

本歌をとる姿もあらはにそれときこゆ。とくしく立耳

を旁逸とおもへは。當家これをゆるさず。

前中納言定家

白雲の春はかさねて立田山をくらのみねに花匂ふらし

白雲の立田の山の瀧の上之小鞍嶺爾閑乎爲流梅花

駒とめて袖打はらふかけもなしさのゝわたりの雪の夕くれ

くるしくも降くる雨か三わか崎さのゝ渡に家もなくして

こぬ人をまつほの浦の夕なきにやくや藻鹽の身もこかれつゝ

淡路島松帆乃浦之朝名藝爾玉藻荳管暮菜す(二)藻鹽焼

管海未通女

新勅撰 石清水臨時祭 禁中

散もせし衣にすれるさゝ竹の大宮人のかさすきくらに
さゝ竹の大宮人の家にすむ佐保の山をはおもふやも君

海邊引綱

從二位家隆

波風ものとなる世の春にあひて綱の浦人たゝぬ日そなき

網能浦之海處女等之燒鹽乃念會燒吾下情

是らに本歌をとれる心詞。寶治以後の歌人の是をまなへ
る風躰。なすらへて是しりぬへし。

已上法眼抄。

古來風躰云。萬葉集の歌は。よく心をえて。とりてもよむへき
事そと。ふるさ人申をきたる也。

一物語歌取本歌事

後鳥羽院御抄云。歌合の歌をば。いたく思ふまゝによますと
そ。釋阿寂蓮なとは申しゝか。別の様にてはなし。題の心をよ
くおもはへて病なく。又源氏物語の歌の心をはとらす。詞をと
るはくるしからすと申き。すへて物語歌の心をは。百首の歌な
ともにとらぬ事なれと。近代はそのきたもなし。

六百番歌合 蟬 勝

女 房

鳴せみの羽になく露に秋かけて木陰すゝ敷夕暮の聲

判云。左歌。羽になく露に秋かけてなといへる。すかた詞

羽にえんにおかしくも侍るかな。尤爲勝。

同歌合 枯野

女 房

みし秋を何にのこさん草の原ひとつにかける野へのけしきに
右申云。草のはらきゝつかず。

判云。左なにゝのこさん草のはらといへる。艶にこそ侍る
めれ。右方人草の原を難申之條。頗るうたゝあるにや。紫
式部は歌よむ程よりも。ものかく筆はことに殊勝の上。花
のえんの巻はことに艶なるもの也。源氏見ざる歌よみは
遺恨事也。

千五百番歌合

左

俊成卿女

かけきよき花の所は有明の月もえならすめる空哉

左歌。花の所のあり明の月。えならす見え侍らん。ともに
女人のうたはかやうにこそとえんに見え侍に。よき持に
侍るへし。

源氏

琴の音り月もえならぬ宿なからつれなき人を引やとめける

正治百首

左大臣

よし野川岩もる水のわきかへり色こそ見えれ下さはきつゝ
源氏
思ふとも君はしらしなわきかへり岩もる水の色しみえねは

井蛙抄第三

代々宗匠不庶幾之由被申たる詞とも有。あるひは優美ならさるにより。或は義理のたかひたるにより。或は詞のあしきにはあらねとも。時俗のきほひよむによりてとゝめられたり。しかるを今の後學末生。禁制の詞と名付て。書もちて侍れ共。つや／＼其いはれをわきまへず。佛の制戒にも通風をあかし。法曹の律にも輕重をたてたり。其みなもとをわきまへずは。いかてかあやまりなからん。よて先達のいましめられたる濫觴。その後代々の用捨。管見のをよふ所。少々是をしるす。是につきて能々了見をくはへて。これをまもり是を可護。

一なかめ

中務卿親王文應三百首御歌に。

むら雲のうつればかはるななめ哉夕立しつる山のはの月

民部卿入道殿云。是はさせる難にては候はれ共。事次に申上候。あはれはあはれなる事。ななめはななむる事に詠候へし。あはれといふ物。ななめといふもの。別に有様に其跡は不可詠之由。亡父まさしく申候き。又第四句もつよくきこえ候にや。

六百番歌合 枯野

有家朝臣

いろ／＼の花ゆへ野へに立出しななめまでこそ霜かれにけれ
判云。ななめまでこそといへる。もしは枯野の野へをななめむれは。ななめてといはん。とかはなかるへけれど。すへ

てななめは強て不可庶幾にや。

同歌合

有家朝臣

あまの原春共みえぬななめ哉去年のなこりの雪の曙

判云。あまのはらとをける。宜はきこえ侍るを。此ななめ

哉といふ詞の近來みえ侍る。未甘心覺え侍り。定て僻心に

侍らんかし。雪の曙も。ちかくよりつねの事になれるにや

侍らん。

圓位上人勸進百首

定家朝臣

はれくもりをなしななめのためたのみにて時雨にたゆる遠の里人

左大臣家歌合 夜深待月

定家朝臣

よをかさねたゆます久にななめする山のはなをそき月を戀つゝ

六百番歌合 寄遊女戀

左曙

定家朝臣

心かよふゆきゝの舟のななめにもさしてかはかり物は思はし

判云。左歌。下句さしてと云る詞。舟の秀句にもとめたるや

うにきこゆらむ。

同歌合 春曙

左持

女房

見ぬ世まで思ひのこさぬななめより昔に霞む春の曙

右

定家

思ひ出はおなしななめにかへるまで心にのこれ春のあけほの

判云。兩方春曙。左はむかしにかすむといひ。右はこゝろにのこれといへる。心すかた共にいとおかし。よき持に侍るへし。

一けしき

中務卿親王文應三百首

雲までもあはれにたへぬけしき哉秋のゆふへのむら雨の空

民部卿入道殿云。是も次に申上候。けしきと云詞。強不可

好詠之由亡父申候き。

同御詠云。

しくるへきけしきをみする山風に先ききたちてふる木葉哉

けしき以前に申上候。

法眼(源承。)抄云。中野禪尼(俊成女。)建長元年に四十八願の

文を歌によみて。法文のとはり思ふやうありとて。點あふへき

よしきこえ侍しかは。いなひかたくて。しるしつかはし侍しと

き。歌見しれる神妙也とて。故實共をしへ侍りし中に。けしき

と申詞好よむへからすと申侍りき。先人に尋侍りしかは。同じ

やうに申侍りしか共。いまの世にははゝかる人も侍らし。漢語

わは不可好詠事歟。

六百番歌合 枯野

隆信朝臣

霜枯の野へのけしきを見ぬ人や秋の色には心そめけん

判云。右歌。心詞あしくはみえさるにや。但つね躰なるへし。

千五百番歌合に。

左勝

女房

歸雁かすみのうちに聲はして物うちめしき春のけしきや

五條云。左歌。かすみのうちに歸るかり。景氣とにみるや

うにこそ侍れ。

同歌合

三宮

行かよふ人たにあらはとひてまし山路の菊の秋のけしきを

京極之判云。歌の委詞よろしく侍るへし。

六百番歌合 賭射

右持

家隆

梓弓春の雲井に引つれてけしきとなるけふの諸人

判云。左。復舊^{舊儀}俄之由なるへし。右。又氣色ことなるなとい

へる。なにとなく朝儀をほめたるへし。亦持とや申へきに

つ。

圓位上人勸進百首

定家

あさなきに行かふ舟のけしきまで春をうかふる浪の上哉

一中くんに

中務親王

中くによそにも見しと思ふこそ人めをしのふあまりへけれ

民部卿入道殿云。是又上句うちとけてや候らん。

私云。雖不有他難。中／＼の事は其沙汰なし。

一みやまへのさと

一吹あらしかな

中務卿親王

きくなれぬ松の嵐もかねてより思ひしまゝのみ山への里

民部卿入道殿云。深山邊の里。吹あらし哉。不可詠よし。亡

父慥に申候き。随分加制止候。

一しろき

同御歌に。

波かくるむこのうら風音さえてあは鳥しろく雪を積れる

民部卿入道殿云。しろきと申詞。亡父申旨候き。

順徳院御百首

駒とめてしばしはゆかし八橋のくもてに白きけさの淡雪

京極黄門云。八橋のくもて。説々おほく候へと。古歌にも

詠來候。近年しろきと申詞。あしかるへきとには候はね

共。末生初學每人每首詠候故に。あまりに満耳で厭却の思

ひ候。

八雲御抄云。定家しろき。あをき。吹あらしかな。嵐ふくなり。

にて。のみ侍ると云も。詞のわるきにはあらし。人にとこのむ

なにくむなり。

私云。家持卿しろきを見れば夜そふけにける。秀歌本舛に

て侍れば。詞のわるきにてはあるへからず。優なるにつき

て。人ことに好みよみけるなるへし。所謂御製のすきのは

しろき相坂の關。式子内親王の初雪しろしをかのへの松。

慈鎮和尚のわか山のはに雪しろし。家隆の雲井にしろき

峯のかけはし。是等をはしめて。其比きはひよみける程

に。にくまれけるにや。殊に御製のあらしもしろき春のあ

けほの殊勝の間。向後可爲無念。不可詠之由。和歌所にて

きた有けるとそ語申されし。此字堅可憚憶者歟。

千五百番歌合

左 顯 昭

散まかふ花を雪かと思ふからに風さへしろし春の曙

左歌。風さへしろき春の曙といへる。下句よろしくこそ侍

るめれ。

秀能すゝめの五首に。

定 家

天津風初雪しろしかさゝきのとわたる橋の有明の空

正治二年九月院御歌合 曉雪

明ぬるか梢おれふす松かねのもとより白き雪の山のは

一一字の秀句聲のたかひたる事

中務卿親王御詠云。

雲のゐる遠山鳥のなそ櫻こゝろなかくも残る花散

民部卿入道云。麥詞珍重候。但山鳥の尾と存候。緒非本意候。

同御詠云。

山鳥のをたえの橋にかゝみかけななきよ渡る秋の月影

山鳥の緒の事。以前に申上候き。是麥詞たくみに候歟。

一まに

六百番歌合

左

季經卿

打まれてすみれつむまに飛火野の霞のうちにけふもくらしつ

判云。左歌のさまはよろしきやうに見え侍るか。すみれつむまにと云る。まにのことは不可庶幾にや。

同歌合 左

顯昭

この世には心とめしと思ふまになかめそはてぬ春の曙

右方申云。左歌のまにの詞。實に不足に聞え侍り。右をこそまさると申侍らめ。

同歌合

兼宗朝臣

散つもる花をふましと思ふまに道こそなけれ志賀の山こそ

右方申云。左歌。と思ふまに。不快歟。

判云。左の思ふまににも。右方申狀頗可然歟。

西行御蒙濯河歌合に。

足引の山かけなればと思ふまに梢につくる日くらしのこゑ

判云。左歌。梢につくる。心ふかくゆへ有て聞ゆ。但此まにといへる詞そ。人々よむ事なから。猶思ふへくやと覺え侍る。かやうの事は人かへりてわらふへき事也。しかれ共一身思所をつゐてに申出る也云々。

一あさあけ

衣笠内府御歌

おく山の谷の杉生の朝あけに獨きゝつる時鳥哉

京極黃門朝曙を七文字に詠候時。あさけの風はとよみ候。實正の字はあさあけに候。此詞猶三字に詠之。あの字書加之時。七字は八字に成候はきゝよく候。此あの字を五字に仕候事。頗不甘心思給候。

一なにかほ

西行御蒙濯川歌合 左

たちかはる春をしれ共見せかほに年をへたつる霞之けり

判云。左歌。姿心相叶て見ゆ。但見せかほにといふとほゝ。我も人もよむ事也。さは有なから。猶歌合ときにはひかふへきにやあらん。かつは歌のさまによるへし。

衣笠内府 わかものかほ

京極黃門。此詞自他雖非不詠事候。打解詞に候。

順徳院御首

花鳥の外にも春の有かほにかすみてかゝる山のはの月

鶯花之樓閣。錦繡之山川にあらすとも。臘月之景氣。煙霞の幽趣。見所まさり候歟。

院五十首 月照瀧水 定家

秋の月袖に馴にし影なからぬるゝかほなる布引の瀧

權大納言家三十首 旅泊

漕よせてとまる泊の松風をしる人かほにいそく夕暮

大納言典侍早世時 爲家

とはれてもことのはもなき悲しさをこたへかほにもちる涙哉

内裏秋五十首歌合 定家

おさまれる民の草葉を見せかほになひく田面の秋の初風

新後撰 法印定爲

はかなくも思ひ捨てしおなしみを世に有かほに何なけくらん

六百番うたあはせ 定家

白菊のちらぬは残る色かほに春は風をもうらみける哉

戀侘て我となかめし夕暮もなるれば人の形見貌なる

衣笠百首

よもすから花立はなな吹風のわかれ貌なる曉の袖

一つかれを

衣笠内府御歌之時。

京極黃門。束緒。雖古今歌詞。頗無品物候。

一ねるやねりそ

僻案抄云。ねるやねりそとは。何か申にかと尋申しかは。かく

とふはさる歌よまんと思ふかとかめられ侍き。萩かるおの

このゆふへきなはななけければ。枯たるえたをねちよりてゆはむ

とするよし。此歌まねひよむへからすと侍りし。

一ひうちて

僻案抄云。ひちてとはひたしてと云ふ也。此詞むかしの人

このみよみけるにや。古今にはおほく見ゆ。後撰にはすくな

し。今の世の歌によむへからすとそいましめられし。

一紅葉しにけり

寶治百首時。中納言爲經卿詠内々被見合之時。ふるく申たる事

は候はれ共。愚意にはしめて可斟酌之由被注付之云々。

一あたら夜

千五百番歌合

左 左大臣

明けては戀しかるへき名殘哉花の陰もるあたらよの月

右 内大臣

佐人の佐とはきけと足曳の山のかひある岩つゝし哉

左。花のかけもるあたらよの月。誠に名殘おほく侍るへ

き事也。右。山のかひある岩つゝし。おかしくは侍るへき

を。佐人のすむとはきけと云る。管見の老者不覺悟侍

り。其間暫も左まさるへきにやと可申侍處。極以難其愁多。

あたら夜の詞。雖爲舊艷事。強不可庶幾所存也。仍持とすへく侍るにや。如斯中狀尙恐惶々々。

八雲御抄云。あたら夜といふは。萬葉には新夜といへり。それにあらず夜也。風情なくあたらよ也。

一なさけ

千五百番歌合

左負

顯昭

さきぬとてたつねてみれば白雲のまふも花の情ならすや
五條判云。なさけの詞も。よせなくては。ことにこひねか
ふへからさるにや。

六百番歌合

左負

有家朝臣

さり共と待へき程のなさけかは人たのめなる蜘蛛のふるまひ
判云。兩方のくものふるまひ。ともに優なるに似たり。但
左中五字。詩などには優詞なれと。歌にはさまで侍らぬに
や。

玉葉集十六

前大納言爲氏

六十あまり老ぬる年のしるして君かなさけのみにあまる哉
一こもろ

千五百番歌合

右

寂蓮

あかつきの鴨たつまでもなかりけりいなはにこもる宿の夕暮
京極黃門判云。いなはにこもるといへる。霞外花の色。霧
中鹿。わか草のつま。おやのかふこならては。とはりなら
すやきこえ侍らん。

一かはす

順德院御百首

秋風や千草なからにみたれけん花咲かはす宮木のゝ原

宮城野の原の千草の花のみたれあへる氣色又美麗に候。
かはすの詞於愚意聊存旨候。

續拾遺

爲家

手枕にむす薄の初尾花かはす袖さへ露けかりけり

貞應二年

爲家

雁かねの羽うちかはす白雲の道行ふりは櫻なりけり

六百番歌合

定家卿

をちこちになかめやはすうかゝ舟やみを光のかゝり火の影

一月花をのれとよむ事

一いつくへなといふへの字

西行御蒙濯河歌合に。

世をうしとおもひけるにそ成ぬへき吉野の奥へ深く入なは

判云。大方は此いつこへと云への字は。是又ふるくもちか

くも人よむ事にはあれと。こひねかふへきにはあらさる

也。これも思ふ所を此次に申いつる也。

八雲御抄云。わか戀といひて。その心とをらす。あはれなりといひて。そのすゑにつや／＼哀なる事もなき歌おほし。すへて歌にはこゝろえてよむへき事のある也。いかなればおほつかなと云五文字は。けにもおほつかなき事なといひたるはよく。それかいともとならぬは。ゆく／＼しく見くるしき事也。又能も聞えぬともおほし。さもこそは。物さひしかる。物わひしかる。思ひかな。物ゆへに。ものにそ有ける。ありと思へば。いはまほしき。せまほしき。なになりなといへる詞はいとよくもなし。又あらましな。してしかな。見てし哉なといふ事はつねの事なれと。なにとやらんにくし。きくはまごか。あらんとすらんなども又にくし。おもほゆるかな。心地こそすれなとは。なか／＼狂したるかたも有ぬへし。又下句になに／＼有明の月といひて。なにを松ぞ吹なといへる。めつらしからぬ秀句は。むげのふせ歌よみの好む事也。俊頼抄にいへる。かくのときの詞の中に。わひしかりけり。悲しかりけり。へらなとは。まゑにさもと聞ゆ。みわたせば。まに／＼なとは。なにかばあなちにくるしからん。

千五百番

保季朝臣

山深き秋をみるにも思ふ哉是よりおくの夕暮の空

京極黄門判云。思ふかな。おもはまほしく侍るにや。

一玉のを柳

西行御裳濯河歌合

山かつのかた岡かけてしむる野のさかひにたてる玉の小柳

左歌。さる事ありと見る心地して。めつらしきさま也。末

句のなの字やすこしいか。さもよみて侍るかによ。

一みくとをき名所

中務卿親王文應三百首に。

春雨の降にけらしなとをつらのあとかは柳ふかみとりなり

是又あとかは柳。或人の詠之時。如此事癡忘。至愚難覃之

由。亡父申候き。

驚の物うかる音にうらふれて野上の方に春暮行

第四句不優候歟。

かけるふの岩かきふちの草かくれあるかなきかにとふ螢かな

上句不優歟。

かりほさすしつきの田井も露ちりて尾花吹しく秋の夕かせ

此田井も疎遠の間。不能申是非候。

家居して誰すむならし玉嶋の此河上に衣うつこゑ

夜半にふくうら風さむみあらしきたののさかの里は衣うつこゑ

已上二首憚と存候。

みなふちのはそ川山で時雨めるまゆみの紅葉今さかりかも

山の名やさしからす候にや。

こま山の嵐やさむきいつハ川わたりをとみ千鳥なく也
あへし^イの島岩うつなみのよるさえてすむとも聞ぬ千鳥なく也
むろの浦の鹽干の方のさよ千鳥なき鳥かけてせと渡る

已上三首憚と存候。

吹おろすあそ山あらし今朝さえて冬野をひろみ雪そ積れる
よもすから此市柴をおりたきて雪にそあかす大はらの里

已上二首憚と存候て罷過候。

古郷はときつのはまのいそ枕山こえてこそ波に成ぬれ

是又愚心迷て不分明候。暫罷過候。

ちとせ山これや昔のさゝれ石岩ほにふるき苔の色かな

此やま少似大嘗會歌候歟。

以上。

衣笠内大臣家御歌云。

五月雨にわたるあさせもなかりけりみな淵山の谷川の水

京極黃門。みなふち山谷其謂候。名所頗不庶幾候。

中務卿親王御うたに。

このねぬる朝露わけて玉垂のこすのおほ野に秋はきにけり
民部云。ことからたくみに目出度候へとも。猶憚候歟。

井蛙抄第四

一同名之名所

いなはやま

古今八

中納言行平

立別れいなはの山の岑におふる松としきかは今歸りこん

此名美濃因幡兩國に有。みのは稲葉と云所。因幡は當國一宮
宇倍宮山也。皆松有。行平卿因幡國司なり。任の時や詠しけ
んおほつかなし。新古今十。續拾遺六。又十六。新後撰三有。

此名所皆以在納言詠爲本歌。

千とせ山

拾遺十

能宣朝臣

ことしより千とせの山は聲たえず君か御代をそ祈るへらなる
丹波國也。又出羽有同名。千とせ十光範の歌も。大嘗會歌丹波
也。

をくら山、峯

萬八

関本天皇

夕されはをくらの山に鳴鹿のこよひはなすいねにけらしも

山城國。嵯峨邊也。

萬九短歌

白雲のたつたの山の流の上の小倉の峯にひらけたる櫻の花は
をくらの峰は大和國也。小倉山に不可混亂。

かみなひ山、御室山、杜

千載廿

義忠朝臣

ちはやふる神なひ山の神はをさしてそいのる萬代の爲

丹波國。大嘗會歌也。

古今五

忠 岑

神なひのみむろの山を秋ゆけは錦たちきる心地こそすれ

よみ人しらす

立田川紅葉はなかる神なひのみむろの山に時雨ふるらし

大和國也。神なひ山。神南のみむろの山不混亂。神なひの杜
とよめるも大和也。

古今五

神無月時雨もいまたふらなくにかねてうつろふ神南の森

是も大和といへり。但古今に源さねかつくしへゆあみんと
てまかりけるに。山崎より神南の森まで。みくりにまかりて
といへる。大和にてはあらし。みやこの西の方にやとおほ
ゆ。かうなひを云といへり。

をとほ 、、瀧 、、河 、、山

古今ひえの山なるをとほの瀧を見てよめる

たゝみね

おち瀧つたきのみなかみ年つもり老にけらしな黒き筋なし

拾遺十

い せ

音羽川せき入て落す瀧つせに人の心の見えもする哉

古今十二

よみ人しらす

やましなの音羽の瀧の音にたに人のしるへく我戀めやも

同十一

在原元方

音羽山をとに聞つゝ相坂の關のこなたに年をふる哉

續古今一

定家卿

音羽川雪けの水も岩越て關のこなたに春ばきにけり

西坂本。山科。ともに山城國也。瀧と川とは通雨所歟。をとほ

山は限山科歟。

ふしみ 、、里 菅原 、、山 、、田居

後撰十八

よみ人しらす

名にたてふしみの里と云とは紅葉を床にしけば也けり

後拾遺十九

俊綱朝臣

都人くるればかへる今よりは伏見の里の名をもたのまし

山城國也。

古今十八

讀人不知

いさこゝに我世はへなんすか原や伏見の里のあれまゝもおし

後撰十七

すかはらや伏見のくれになかわれは霞にまかふ小初瀬の山

大和國也。

新古今

俊成卿

ふしみ山松のかけより見たせはあくる田面に秋風ぞ吹

萬葉

大藏の入江ひくやいめ人の伏見の田居に臨わたるらし

伏見山。ふしみの田居は。みな山城の伏見也。新古今にふしみの野への草枕と侍るも。山城の伏見也。

たこのうらゝの崎

古今

するかなるたこのうら波たぬ日はあれ共君を戀ぬ日はなし駿河也。

萬十九

家 持（萬葉）

田子のうらの底さへ匂ふ藤波をかさしてゆかんみぬ人の爲越中國布勢海也。兩所不可混亂。先年或歌仙多古の浦藤浪にこひぬ日はなしの本歌によせて詠したりしを。故戸部被難侍き。

萬十八

たこの崎この暮しけき時鳥さなきとよめははた戀めやも是は駿河國也。

あきつ野 秋津の小野 のゝ秋津

萬四

三芳野のあきつのをのゝ野上には跡みすへをきてみやこには（萬葉）

同一

よしのゝくにの花散あひあきつのゝへにみやはしら

やまとの國也。

同四

かくてのみ戀やわたらん秋つ野にたな引雲の末とはなしに（萬葉）

同七

あきつ野に朝ぬる雲のうせゆけは昔も今もなき人おもほけ紀伊國也。子細見萬葉集。

同七

岩藏の小野の秋津に立わたる雲にしあれや時をしまさる（萬葉）山城國也。

さのゝ、渡ゝ、船橋ゝ、中川ゝ、岡

萬三

くるしくも降くる雨か三輪か崎さのゝ渡りに家もあらなくにやまとの國也。

萬十四

かみつけのさのゝ船橋取はなしおやはさくれと我さくるかへ千載十四 源仲綱

住なれしきのゝ中川瀬絶してなかれかはるばなみたえけり

三所別所歟。萬葉十四に。上野のさのゝくゝたちおりはやし我はまたんかとしこすとも。とよめるは。舟橋同所歟。

萬三

赤 人

秋かせのさむき朝けをさのゝ岡こゆらん君に衣かさましを

紀伊也。

眞野、浦、入江、萩原、萱原、濱

邊、池

萬四

まの、浦のよとのつき橋心にも思ふやいも夢にしみゆる

金三

としより朝臣

鶉鳴まの、入江の濱風に尾はな波よる秋の夕暮

萬三

いさやこらやまとへはやく白菅のまの、萩原手おりて行ん

やまとのくに也。

萬三

みちのくのまの、萱原とをけれと面影にして見ゆといふ物を

まの、浦のよとのつき橋は攝津國。又まの、浦同。まの、入

江は近江。まの、萩原はやまと。まの、かやはらは陸奥也。

先年宗匠亭會。或仁まの、かやはらを湖邊に詠し侍りしを。

故民部卿可詠直之由。子息を使にて被仰き。如此混亂尤可分

別事也。

萬七

とよ國のまの、濱邊のまさこ地のたゝにもあれは何か嘆かん

豐前國也。

萬十一

まの、池のこすけを笠にぬはすして人の子を頼まつへき物を
これは攝津國也。

しらすけのみなと

續古今

九條前内大臣

松陰の入海かけてしらすけのみなと吹こす秋のしほ風

遠江國しらすかといふ所を被詠云々。しらすけのまの、萩

原に不可混。

角田川

新勅撰十一

盛方朝臣

すみた川せきりに結ふ水のあはのあはれなにしか思ひ初けん

新後十八

法印清譽

都鳥いく世かこゝにすみた川ゆきゝの人に名のみとはれて

伊勢物語に。むさしの國としもつふさの國とのなかにある。

すみた川のほとりにいたりてと云り。

(三歌)
萬十四

辨基法師

まつち山夕こえくれていほさきのすみたかはらに獨かもねん

駿河國也。都鳥こゝにもあれやいほさきのすみたかはらも

名こそかはらねとよめり。

片岡、朝原、山、杜

萬二

かた岡のむかひのみねに椎まかはとしのなつの陰にせんかも

古今五

霧立て雁を鳴なる片岡の朝のはらは紅葉しぬらん

拾二十

しなてるや片岡山のいひにうへてふせる旅人あはれおやなし
片岡の朝原。かたをか山の同異はしりかなく侍れとも。皆大
和國なるへし。

新古今三

紫式部

時鳥こゑまつ程はかた岡の森のしづくに立やぬれまし
片岡の森は賀茂片岡社の杜にて侍れば山城也。新勅撰片岡
の杜の木葉も色付ぬと侍るも同所歟。能因か夏の目のかけ
にすゝみし片岡の梓は穠色色付にける。(續古今)西行。山か
つの片岡かけてしむる野のさかひにたてる玉のを柳。これ
らはかならずしも非名所歟。

しかの浦

拾二十

公任卿

さゝなみやしかの浦風いかはかり心のうちのすゝしかるらん

萬七

さいなみやしかつの浦のふなのりにのりし心につねに忘れずイにし心常忘れぬ
志賀。しかつ。共に近江國湖水同所也。しかの大わたも同し。

萬十五

しかの海士うしのひとひもおちす燒鹽のからき戀をも我はする哉

筑前國しほうみ也。しかの海士のめかりしほやきたとよめ
るも是也。近江志賀。筑前は志賀也。

わかのの浦 わかの松原

萬

赤人

わかの浦に汐みちくれはかたかなみ芦へをさして田鶴鳴渡る
紀伊國也。玉津嶋も此うらの内なり。

萬

聖武天皇

いもにこひわかの松ぼら見渡せば鹽干のかたに田鶴鳴渡る
河内國也。

續古今

光明峰寺殿

伊勢島や和歌の松原見渡せば夕鹽かけて秋風そ吹
是はいせ也。

よと 六田 大淀

古今

山城のよとのわかこもかりにたにこぬ人頼む我そはかなき
淀のわたり。淀川。淀野。皆山城國同所也。

萬七

吾にきゝめにはまたみぬ吉野川六田のなろイことをけふみづる哉

萬九

蛙鳴六田のかはの河柳れむころ見れとあかぬ君かな
やまとの國也。新古今に。たかせさす六田のよとの柳原みと

りもふかく霞む春哉。同所なるへし。但山城のよにも。むつたかはらと申所の有由申人有。あやしきやうにそ覺侍る。

萬七

いましくもみめやと思ひし三吉野の大かは淀をけふみつる哉

これも同所なるへし。

大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみも歸る浪かな

是は伊勢國海邊也。各別の事なれ共。山城のよと心得て。

人の不覺したる事侍し程に書加る也。よとのつき橋は攝津

國也。奥注之。

後西園寺

野上よりはるかにみれは八幡山ふもとの川や大よとの濱

是も亦如何。

玉川 野田、、野路、、、里 井手、、

拾十四

玉川にさらすてつくりさら／＼にむかしの人の戀しきやなそ

萬葉には此下句なにそこの比こゝたかなしきとあり。是は

武藏國也。

新古今

能 因

夕されは鹽風こしてみちのくの野田の玉川千鳥鳴也

千載四

俊頼卿

あすもこん野路の玉河萩こえて色なる浪に月宿りけり

後拾遺二

相 摸

見わたせは波のしからみかけてけり卯花吹る玉川の里

此三首玉川在所同異難知。或云。陸奥。或はつのくにか。

千載二

俊成卿

駒とめて翁水かはむ山吹の花の露そふ井手の玉河

此玉川は山城也。

續古今

後鳥羽院御歌

玉川のさしの山吹かけみえて色なる浪にかはつなく也

如此行歌は野路玉川井手玉川同所歟。

つき橋 淀、、まの、、、眞木、、

萬四

まの、浦の淀のつき橋心にも思ふやいもか夢にし見ゆる

攝津國か。金葉續古今以下連綿在之。

後拾遺

相 摸

ふみ見ても物思ふ身とそ成にけるまの、つき橋と絶のみして

これも同所か。千載俊頼朝臣歌。又まの、つき橋と詠す。

萬十四

あの音せすゆかんこまもか葛飾のまの、つき橋やます通はん

下總國也。此橋代々集連綿。

金二

顯仲朝臣

五月雨に水まさるらしさわた川まきのつき橋うきぬ斗に

やまとの國歟。此橋其名相似候。不可混亂。

大原、小鹽、さえの沼

詞花十

良 暹

大はらやまたすみかまらばれば我やとのみそ煙たえける
北山の大原也。

萬四

大原のこのいちしはのいつしかと思ふいもに今夜逢ぬかも
古歌枕に北山大はらにおなく書れたり。

古今

おほはらやをしほの山もけふこそは神代のとも思ひいつらめ
ともに山城國なれと是は西山なり。大はら社邊也。

後拾遺

良 暹

ほとへてや月もうからん大原やおほろのし水すむな計そ
これは北山大はら也。

金六

をしほ山松風さむし大原やさえのゝぬまやさえわたるらん
西山なり。

小野、篠原、船橋

金葉

公實卿

雪の色かうはひて咲る卯花にをのゝ里人冬こもりすな
大原ちかき小野也。惟高のみこの御くしおろしてすませ給

ひしも。けんしにうき舟のかくれて住しも此所也。松かさ
なともをの也。ふかやふか補陀落寺も小野也。ふかやふか住
けるゆへに。山里と申人もあり。さもやと覺ゆ。

古今

淺茅生のをのゝしのほら忍ふ共人しるらめや云人なしに

後撰

源 等

淺茅生のをのゝしの原忍ふれと餘りてなとか人の戀しき
古歌枕には山城國としるして侍り。大原小野と同所と思へ
るにや。

續古今

藻壁門院少將

露しけきをのゝしの原いかに又あまりて旅の袖ぬらすらん

續拾遺

定尊律師

旅人の宿かり衣袖さえて夕霜むすふをのゝしのはら
是等は都ちかき小野とはおほえぬ也。近江に小野といふ宿
有。しのはらと云所あり。これらはあつま路なれば。旅の歌
にも可相叶哉。但不聞先達説。推量の儀也。凡野をはいつく
も小野とよむ。非名所歌おほし。眞言小野流といふは山科の
小野也。小野古江は伊勢國也。

詞花

俊雅母

夕霧に小野の舟橋をとすゑたなれの胸の歸くるかに
共國不分明。

玉江 三島江の玉江

拾遺

重之

夏かりの玉江の芦をふみしたきむれゐる鳥のたつ空そなき
古臥枕に越前の圖といへり。

萬七

み鶴江の玉江のこもなをしめしよりをのかとそ思ふ来からねと
攝津國と云り。これはよと河也。みしま江にしほのみつたと
ゝむ人の有し。ひか事也。

みつの江 、、の吉野

後撰十五

よみ人しらす

あけてたになにゝかはせん水のえの浦島のこを思ひやりつゝ
丹後國也。

新古今十七

季能

みつのえの吉のゝ宮は神さひてよはひたけたる浦の松かせ
攝津國也。此よしのみよしのゝ吉野に不可混。

宇治 、、山 、、ま山 、、のつ

古今

我庵は都のたつみしかそすむ世をうち山と人はいふゝ
山城國宇治川の邊也。喜撰かすみかはみむろのおく也。河の
南北を宇治といふか。

萬一

うちま山朝風さむし旅にして衣かすへきいもゝあらなくに
古歌枕大和國としるせり。故法印定爲宇治ま山を宇治川の
邊のやうによまれて侍し。定有子細歟。

同

秋の野の尾花かりふき宿りせし宇治の都のかりほしそ思ふ
大くら 大くら山 、、の入江

拾十

能宣朝臣

みつきつむ大くら山はときはにて色もかはらす萬代をへん
近江國也。大嘗會歌也。後拾遺にも有。

萬九

大くらの入江ひゝく也いめ人のふしみの田井に鷹渡るらし
山城國宇治川也。俗にをくらといふ所也。

松山

後拾遺八

定頼

松山のまつのうら風吹よせばひろひて忍へ戀忘れ貝
讃岐國也。

後撰十一

贈太政大臣

松山につらきながらも波こさむとばさすかに戀しき物を
陸奥末松山也。

おほしま 、、峯

萬十五

筑紫ちのかたの大島しましくもみねは戀しき妹をゝきて來ぬ
備前國也。

萬二

いか家もつきて見ましを大和なる大島峯に家もあらましを
國分明也。
なくにイ

おきつしま、山、の濱

おきつ島あら磯の玉も鹽みちて隠るへゆかはおもほえんかも
紀伊國といへり。

あふみの海おきつしま山おきまへて我思ふ妹に戀のしけ行

國分明也。おきつの濱和泉國。

古十七

忠房

君を思ひおきつの濱に鳴田鶴の尋くれはそ有とたに聞

新古今

定家

ことゝへと思ひおきつの濱千鳥なくく出し跡の月影

三津、小島

古十七

をしてるや難波のみつに焼鹽のからくも我は老にける哉

萬十一

白まなこみつのはにふの色に出ていはすてのみそ我戀らくは

萬四

大とものみつとはいはし茜さしてれる月夜にたゝにあへり共

萬八短歌

難波かたみつのさきより大舟にまかしけぬき

後撰十七

難波津をけふこそみつの浦とに是や此世をうみわたる舟
以上攝津國也。

古廿

黒主

なくろ崎みつのこ嶋の人ならば都のつとにいさといばましを
陸奥也。

萬十

いさこ共けやひのもとへ大とものみつの濱松まちこひぬらん
攝津國也。

續拾五

祝部成賢

浪よするみつの濱邊の浦風にこよひもさむく衣うつこ

近江國坂本のみつのはま敷。

たかし山、浦、濱

新勅撰

鎌倉右大臣

雲のゐる梢はるかに霧こめてたかしの山にしかそ鳴なる

金葉八

紀伊

をとに聞高師の濱のあた波はかけしや袖のぬれもこそすれ

高師山。高師浦は遠江國也。

萬一

大とものたかしの濱の松かねを枕にすれといへしおもほゆ

古歌枕に和泉國と云り。(可考。此歌不見萬葉。管見歟。)

なこ、海、濱

萬七

なこの海あさけの名残けふもかも磯の浦はにみたれてあらん

越中國也。(私云。此歌攝津國と云。可考。)

萬

住吉のなこのはまへに駒なへて玉ひろひしてつれは忘れず

攝津國也。

おふのうみ おくの海 あふの浦、川原

萬四

あふの海の沙千の瀉のかた思ひいそきやゆかむ道のなかくてを

右門部王任出雲守時。娶部内娘子也。未有幾時。既絶往來。累

月之後更起愛心。仍作此歌。贈致娘子云々。仍此うみ出雲國

也。

新古今十四

定家朝臣

尋見るつらき心のおくの海よ沙千のかたはゆふかひもなし

若おふの海同所歟。以前歌被詠歟。又おくの海陸奥か。

續古今

順徳院御製

うし逆も身をはいつくにおくの海の鵜のぬる岩も波はかけ鳧

此國又不審。

拾遺十八

人丸

おふの浦に舟乗すらんわきも子かあかもの裾に鹽みつらんか

歌枕に伊勢國と云り。大の浦同所歟。

おふのうら、河原

萬十八

福丸

愚にそ我は思ひしおふの浦のありそのめぐりみれとあかれす

越中國也。布勢海云々。

古廿

伊勢

おふの浦に片枝さしおほひなる梨のなりもならずもねて語らはん

いせの國也。

萬八

聖武天皇御歌

おふの浦のそのなか濱による波のゆたけくも君を思ふ此比

遠江國也。

萬十一

まこもかるおふの川原のみこもりに戀こし君かひもとく我は

下野國也。但萬三に。おふの浦の川原の千鳥かななけはわか

さほ川の思はゆらくにとある。出雲國也。おふの川原も同出

雲國にや。

ふた見のうら、潟

古今九

兼輔卿

夕月夜おほつかなきを玉くしけ二見の浦は明てこそ見ぬ

言葉書に。たちまのへまかりけるときに。二見のうらにと
まりてと有。

金八

大中臣輔弘

玉くしけ二見の浦のかひしけみまさるにみゆる松の村たち

詞書に伊勢の二見の浦にてよめるといへり。

新勅撰

家衡卿

我戀はあふともしらす二見かた明くれ袖に波そかけゝる

尾張國と云り。

あさか、浦、瀉、沼、山、の山

萬

弓削皇子

夕されは鹽みちきなん住吉のあさかの浦に玉もかりてな

攝津國也。

萬十四

あさかかた鹽干のゆたに思へらはうけらか花の色に出めや

國不分明。

古十四

みちのくのあさかの沼の花かつみかすみし人に戀や渡らん

萬十一

あさか山かけさへみゆる山の井のあさき心を我おもはなくに

ともに陸奥國也。

萬八

市原王

ときまちておつる時雨の雨やみて朝かの山はうつろひぬらん
尾張國といふ説有。

かゝみ山、の宮

古十七

かゝみ山いさ立よりて見て行んとしへぬる身は老やしぬると
近江國也。

萬三

豐國のかゝみの山にいばとたて隠れにけらしまてときまさす

豐前國也。不吉所也。不可詠。此歌にて知ぬへし。

續拾

僧正隆辨

神代より光をとめて朝熊のかゝみの宮に澄る月影

伊勢也。

なから、橋、瀨、山、宮

古十五

逢事はなからの橋のなからへて戀わたるまに年そへにける
讀人不知

新古今十七

惠 慶

春の目のなからの瀨に船とめていつれか橋ととへと答へぬ

萬六短歌

うみをなすなからのみやにまきはしら

橋。瀨。宮。みな攝津國同所也。

後撰十七

世中をいとひかはらにこしか共うき身なからの山にそ有ける

拾十 能 宣

さゝ浪の長柄の山のなからへてたのしかるへき君か御代かな

あふみ也。

みしまゝ、江ゝ、浦ゝ、野

萬十一

みしますけいまたなへ之時またはきすやなりなんみ島すか笠

新勅十一 行 能

敷ならぬみしまかくれにくく船の跡なき物は思ひ成けり

攝津。伊豫。伊豆有同名。(私云。此歌名所水島かくれか。源氏

にも有。)

後拾一

みしま江につのくみわたる芹のねの一よの程に春めきにけり

これは攝津國みしまとは別所也。

續後撰十八 好 忠

浪の上にみしまの浦のうつせ貝むなしきからに我や成なん

攝津國也。但みしま江とは別所也。

萬十七 家 持

やかた尾の鷹を手にすふみ嶋野にからぬ隙なく月そへにける

越中國也。萬十七。みしま野をそかひに見つゝ。ふたかみの

山とひこえて。雲かくれ行と有は。大和國にもやとおほゆれ

共。萬十六に。しふたにのふたかみ山にわしそ子うむとい

ふ。さしはにも君かためにそわしそこうむといふといへり。

是はふたかみ山も越中ときこえて侍る也。

野路ゝ、篠原

後撰十六 長 能

あつまちの野路の雪まを分てきてあはれみやこの春をみる哉

近江國也。千載新勅撰等歌も同所と見ゆ。

新古四 基 俊

高圓の野路の篠原末さはきそらや秋風けふ吹ぬなり

大和國也。

あへゝゝの田面ゝゝ市路ゝゝ島山

萬十四

さか越てあへの田面にゐるたつのもしき君はあすさへもかも

古歌枕不注國。

萬三

やきつへにわか行しかは駿河なるあへの市路にあひしこらはも

國分明也。いづれも佳吉のあへのと同所にはあらざる歟。

續古十 爲家卿

あへ嶋の山のいはかれかたしきてさぬる今宵の月のさやけさ

大和國云々。

かつらゝゝ川ゝゝの里ゝゝ山ゝゝ宮ゝゝ湯

續後撰

實方

桂川かさしの花のかけ見えしきのふのふちそけふは戀しき

金葉

こよゐわか桂の里の月をみておもひのこせるとのなきかな

川里。同所。山城也。

新勅撰七

匡房

久方の月のかつらの山人もとよのあかりに逢にけるかな

丹波國。大嘗會歌也。

古今かくし題

秋くれと月のかつらのみやはなる光を花とちらす斗にをイ

是は山城歟。桂川邊也。今も桂宮院と申所有。

後九條内大臣

春のよのおほろの月のかつらかた山までつゝく海の中道

是はつくし也。

とは、田、田の浦、山松

詞花三

好忠

山城の鳥羽田の面を見わたせばほのかにけさそ秋風はふく

國分明也。

萬十二

郭公とはたのうらにしく波のしはしも君を見んよしもかな

國不霽。若伊勢とはの浦歟。

しら鳥のとは山松のまちつゝそ我戀わたる此月比な
是は山城の鳥羽也。

みむろ、山、の岸、外山

萬七

我きぬの色にそめたりあちさけのみむろの山は紅葉したるに

拾七

神なひのみむろのきしやくつるらん龍田の川の水のにこれる

いづれも大和國也。

萬三

大織冠

玉くしけみむろと山のさね葛されすは終にありとみましや

山城國也。

舊撰古今ニ如此入ニ是ニハ有カザマシナト有之

なきさはの森 なきさの森

萬二

弘作著万ニハ繪圖女玉ト有之
人丸

なきさはの森にみはすえ祈とも我大君はたかひしられす

續古今

衣笠

村しくれ幾しほ染てわたつ海の渚の森の色に出らん

ともに紀伊國也。若同所歟。なきさの院は攝津禁野の邊也。

まつち山

萬九

あさもよびきえ行君かまつち山みゆらんけふそ雨はふりそれ

やまと也。

る澤邊にはつなかぬ駒もはなれさりけり。其心おなしきゆへに。なはたつをふしにしたる。それも耳たつやう也。判云。左歌は俊恵法師歌に相似の由右方申云々。かやうの心はさらてもつねの事。但平定文か歌拾遺に。たゝにはよらて春駒のつな引するそなはたつときくと詠せるは。女によせて。なはたつとはいへる。是はひとへに繩をたつといへる。尤凡なるにや。

同歌合

左

女房

むさし野にきゝすも妻やこもるらんけふの煙の下に鳴え
右方申云。賴政歌に。霞をやけふりと見らんむさし野につまこもれりとさゝすなくといへるに歌似たり。

左陳云。不入撰集者。不見及有何難乎。

判云。左歌。賴政か歌之條誠不可避取事也。撰集の外はしめて不可引出。

千五百番歌合

左

顯昭

あつま路を雪に打出て見渡せば波にたゝよふ浮嶋か原
判云。左歌。雪に打出てといへる。波にもことよりておかしくは侍るを。すこし思ひ出らる事を侍る。作者は見をよはすも侍らん。

建久二年左大將家百首に。

あしからの關路こえ行しのゝめに一むら霞む浮島かはら

正治二年内大臣家歌合。

駒とめて打出の濱を見渡せば朝日にさはく志賀の浦浪

雖似昨今事。徐達遐邇之聽。打出見渡詞。東路眺望心。大略

相同此兩首歟。右歌。氷句雖頗無詮。風體似聊有心歟。

私云。二代判非一准歟。

六百番 旅戀

左持

顯昭

きさかたやいも戀しらにさぬるよの磯のね覺に月かたふきぬ
判云。左歌。始終いひくたして見え侍り。たゝし基俊と申ふる人の。伊勢のはま荻折しきてといひし歌を。土代とせるとやみえ侍らん。

同歌合

右

寂蓮

思ふよりうきに馴たる袂哉なみたや戀のさきにたつらん

判云。右は後二條殿女房筑前か歌心すこしをとれる也。千

載集所入也。伴歌裏注之。

思ふよりいつしかぬるゝ袂かな涙を戀のしるへにける

文字のをき所いく程なかはす侍るへし。

一をなしてにをばの字あまたある事

千五百番

忠良卿

浦ちかきあしやの里に日はくれて波路の霧に海士のいきり火

京極黃門判云。上下句のにの字。なきよりはいかにそやき

こえ侍るにや。

中務卿親王御歌

白雲の跡なき峯に出にける月のみふねも風を便に

にの字あまたさし合敷。小町か花の色はうつりにけりな

いたづらに我身よにふるなめせしまに。是は秀逸に候

へは別の事か。

一初五文字事

六百番

うしつらしあさかの沼の草の名よかりにも深きえには結はて

判云。初にうしつらしとをける。艶書などにはさも侍りな

ん。歌合には戲言なる様にや侍らん。

家成卿家歌合に

いのりつゝ五十鈴の川の水上にまかせても見る君か千年を

基俊判云。いのりつゝも。はしめの句の上にをくへしとも

おほえず。是等をしとにこそ侍るめれ。凡ふるくよめらう

つくしき詞をわさと讀んと侍る。これらは非道の事に

こそ侍るめれ。

西行御裳濯川歌合

左負

あやめつゝ人しるとてもいかゞせん忍ひはつへふ秋ならねは

判云。忍ひはつへきたといへる。すゑの句はいとおかし。

始五文字やいかにそきこゆらん。

左

なへてならぬよもの山邊の花はまつ吉野よりこそ種は取けめ

右

秋になれば雲の月のさかゆるは月のかつらに枝やますらん

判云。左初句。右中五文字。ことに歎美の詞にあらずやあ

らん。持なるへし。

井蛙抄第六

雑談

故宗匠被語申云。經古今は正元之年西園寺の一切經供養の時。

民部卿入道一人可撰進之由。直に被仰下侍しを。其後被加撰

者。結句眞觀下向關東。將軍家（中務卿宗尊親王。）此道御師範

と成て。毎年關東より被申とて。我思ふさまに中行へり。民部

卿入道。我撰の歌の外は。一事以上不有申子細とて口を閉侍

き。和歌評定の時治定の事も後又申改。かやうにこそ評定に

は治定侍りしに。何様事哉之由被申ければ。いさなにと候ける

哉らん。鶴の内府參被申行侍候と。眞觀返答しけり。仙人のわ

たましのやうに。鶴に物を負すれはと。民部卿入道利口し申されけると云々。集治定の後。所存相違の事とも一卷に書て。常磐井入道相國のもとにつかはす。爲兼延慶訴訟陳時。勅撰之者故實二百ヶ條秘事を祖父入道より相傳のよし書たる此事也。爲教卿常磐井相國に隨逐の間見及歟。詞書に百首にと侍るを。百首歌にとあるへきかなと舛の事共ふ。ちゝとしたる大旨なにか秘事にてもあるへきと云々。

民部卿被申云。寛元六帖人々歌大略誹諧の詞也。民部卿入道詠に誹諧舛多しと。常磐井入道相國。故京極中納言入道被申候。風舛には異としてしは不被請云々。彼六帖歌舛に諸人の歌なりて。暫は歌損して侍りける也。一條法印云。常磐井入道相國薨し給ひて後。入道民部卿人のもとへ遺狀に。此道の眼。年久の悲歎難休。就中寛元六帖俗に近く。續古今新撰者無秀逸と被申事。殊難忘事也云々。

故宗匠云。俊成は閑玄にて難及。定家は義理ふかくして難學。たゞ民部卿入道舛を可學の由。深相存也云々。

又云。民部卿入道被申けるは。亡父歌殊勝なれとも。歌見しらさん子孫みたりに撰入せは。あしかるへき歌多し。我歌はをろかなれとも。たとひ歌しらさんむ子孫の撰出たりとも。さまであしかるましき歌を詠し置て侍る也云々。

又云。二條左兵衛督敎定は此道門弟なる故に。縁者(爲氏舅)。

に成て細々會合しき。ある時酒宴の雜談に。敎定卿。故中納言入道殿御詠に。長月の月の有明のしくれゆへあきの紅葉の色もうらめしといふ御詠。染心肝殊勝におほえ候の由被申候時。禪門盃をもたれたるを打置て氣色あしく。是はなにか面白候哉らんと申されければ。それまでは白地にもかやうに被仰。無本意事也。是は百番歌合にも書入て候へ共。風舛不可然。勅撰なとに可入歌にあらざる由慥に申侍しに。是をしも被稱美之條不得其意云々。此歌玉葉に撰入。不思儀事也云々。

戸部云。歌は人にも見合可去禁忌也。中納言入道内裏御會行路柳に。道のへの野原の柳もえ初てあはれ思ひの煙くらへやと詠らる。彼一座仙洞御覽せられて後。定家卿可停出仕之由被仰下之旨被申禁裏。經日數後出仕をゆるされて後。殊更着陣して。道の事如此御沙汰。有氣味之由殊自愛云々。先達猶如此。後學可存知者也。

又云。中納言入道歌は心得られぬとて。後鳥羽院被御覽なけすてさせ給ひけるか。又被御覽時。深意ありけるとて御感ありけりと云々。以之思之。先達歌とも見侍らは。能々心を付て見侍るへき事なり。

又云。中納言入道慈鎮和尚に進ける狀に。我歌の事を書に。西行法師所誦(讀歌)日本第一歌人といふといへとも。亡父歌に比するに十分一に不及云々。

或人語云。西行白歌を番て。(宮川百首。)定家少年此判をこひけり。被判之後。西行人のもとに遣しける狀に。侍従こそ歌判していたして候へ。是もよからんするけにこそと云々。

後鳥羽院遠所より九條内大臣(于時權大納言。)へ被遣勅書を見侍しかば。歌事能々可有稽古。法性寺關白昔叡勝寺の額を書。老後に門前過る毎に赤面すと云々。

妙音院入道仁平御賀の時琵琶を彈す。孝博聞て。中將殿御琵琶こそ漸々ひはに成にたれと云々。われは鬼神をもひきへしつへく思ふに。孝博申狀頗無念の由思はれけるに。尾張左遷の後。孝博か詞を思合云々。物道如此。相搆て昨今の詠の見苦を覺るやうに可有稽古云々。

戸部云。新勅撰時。光明峯寺殿より鶴との歌事を執申さるゝ時。撰者御返事に。後京極殿鐘愛御子として。三十七にならせ給候。尤其仁と申へく候へ共。御風赫猶存旨之由被申子細云々。但なきぬへき夕の空を郭公またれんとてやつれなかるらん。是等は宜のよし被申云々。

又云。家隆は寂蓮か鐸之。寂蓮相具して大夫人道と歌門弟になりき。禪門被申云。此仁未來の歌仙たるへし。見參の度に難儀なといふ事をはとはず。いつも歌よむへきまさしき心は。いかに侍るへきそといふことをとて被感云々。

某任語云。土御門院小宰相(家隆女。)被申けるは。故二位の歌

には。心得にくき歌なとは候はず。高砂のおのへの鹿のなかな目もつもりはてぬる松の白雪といふ歌を。心得にくきやうに人思へり。深く思へば心得にくし。あさぐと心うれば。殊にやすくこころえらるゝ歌也と云々。

或人云。新勅撰えらはれける時。梅の歌に花やかなる歌なしとて。撰者周章せられけり。猶も壬生二品歌中にはあるらんとて撰はれけるに。いく里か月のひかりも匂ふらん梅咲山の峯の春風。といふ歌を見出て被入云々。

故宗匠語云。亡父卿の人とはゝ見すとやいはん玉津島かすむ入江の春の曙の歌は。建長詩歌合時。かむや紙のたてかみのうらに書て。祖父に見せ申されし時。見つとやいはんとかゝれたりしを。見すとやと。そばに被書たり。作者は猶所存とけすなから。みすとやと書て被出云々。

小倉黃門禪門云。後嵯峨民部卿入道に被仰けるは。爲氏卿は見すとやいはん玉津島袖ふる山にかゝるしら雲。有人口歎。そこには是程秀逸はいつれかあると被仰下云々。

戸部云。白川殿七百首の時。民部卿入道は御製の御數を見合て八十首詠す。冷泉大納言(爲氏。)は。わかものはおほく仕れと。禪門ゆるされて百首これを詠す。還御の時達者とこそ見えつれと。直に勅定有けり。

又云。彼七百首の時。眞觀まいりて。短冊を泉の水のなかに風

に吹入られ。てのこひ布のかせにてとりあけなとして見くるしかりけり。如此事尤可有用意云々。

祝部行氏語云。少年時祝部忠成(新勅撰作者)にあひて侍りき。草子なと見て歌よみ侍りしかは。たゝ歌はあを雲にむかひて案せよ。今より古歌にかゝりては。うるはしき歌よみには成ましと申き云々。

故宗匠云。民部卿入道は信實朝臣をは無雙の歌よみに思はれたりき。續後撰卷頭に入んとて。立春歌十首計書て給はらんと。云つかはされたは。それは何の御要にか候覽とて書ても出されず。卑下の心も幽玄なき。百首をよみ。民部卿入道に點をこひたる歌中に。はつせ山の谷ノと云歌。山法師のやうにや候らんと。詞を付てつかはしたは。其日夜に入て中院へ尋來れり。對面して只今何事に御渡そと被尋ければ。谷々山法師のやうなると承候事か面白候て參て候云々。すきのほとやさしかりき。

辨入道の書たる續後撰の難といふ物を先年見侍しに。成茂あつまへ下て。すてはてす塵にまはるかけそは。神も旅ねの床や露けきと云歌の詞に。涙のこほれければとかゝれたるを。よくそ其時涙のこほれける。一の幅さしの寂西か蚊蛇にて。詞かきなとにかやうの事あるそとかけり。誠に他に異なる門弟也。隆信と定家と一腹の兄弟也。それより殊にあさからぬ門弟

たる歟。

信實朝臣女三人あり。みなよき歌よみなり。藻壁門院少將は殊に秀逸也。をのかねにつらき別のありとたに思ひもしらて鳥やなくらんとといふ歌を感じて。京極黃門老後に古今を書てあたへらる。奥書に。國母仙院少將殿。依爲此道之堪能。不顧老眼之不堪書寫之云々。

少將内侍は先うせて兩人は残れる。藻壁門院少將老後に出家して。法性寺舊跡に住けるころ。平親清女あつまよりのほりて。さる名譽人なれば見參せんとて。法性寺宿所へ尋まかりけり。持佛堂にいりて。障子こしに。かやうに草ふかきすみかにわけいらせ給ふ御心さし。此道の御すきも殊におもしろくそ。老のすかたも見えまいらせたく候へとも。をのか年の心をとりせられまいらせしとて。げさんはし候はぬそといはれける。やさしく優にこそ侍れ。おなかつとなとつねは送りて文にて申承り。辨内侍は老後に尼に成て。坂本の北にあふきといふ所にこもりゐて侍けり。龜山院きこしめして。七夕御會の時。題をつかはされければ。七夕衣に。秋來ても露をく袖のせはければ。たなはたつめに何をかさまし。とよみて侍りけるを。けにこそとあはれからせおはしまして。つねに御とふらひなと侍りけるよし。あふきに行宣法印とて。ふるきものゝ侍りしかかり侍りき。

戸部云。弘長仙洞百首は。

西園寺

常磐井相國實氏

正二位源朝臣

九條前内府基家

正二位源朝臣

冷泉大納言爲氏

橘實朝臣也

寂西

正二位源原

衣笠内大臣家良

大納言源家朝臣中院法名源覺

民部卿入道

正三位行侍從源原

行家卿

清撰七人に被仰。世これを七玉集と號。常磐井入道相國老後の晴の歌之。所心及執してよむへし。から尾とりたる馬に唐鞍をきて。百疋引たてたる様に詠すへしと被申けり。誠に歌とにおほやけしく。たけたかくうるはしき舂之。當家二代歌も此百首殊規模之。百首は是を本にて詠すへし。さて衣笠前内府の歌殊勝之。多勲撰の中にあり云々。

故宗匠云。民部卿入道時。衛門督僧都なにかしとやらんいひし僧。歌の事とひに常に來き。歌は誠をさきとすへし。道理になふへきよし申さるゝを聞て。後日に來て。先日承りしにつきて。歌を一首詠して候。かやうに候へきかと申き。

富士の山同じ姿のみゆる哉あなたおもてもこなたおもても道理をさきとすへしとて。かやうの事にてはあるましとて。わらはれ侍りき。

又云。民部卿入道に古今の説をうけんとて參せし時。法師にて聞書などはしなれたる程に。其爲に定爲をくして侍しかは。今日はさし合事あり。後日に可參の由被仰て。内々なにとて人を

つれたるそと申されき。仍後日に一人まかりて説をうけ侍りき。

又云。民部卿入道申されしは。歌をは一橋を渡るやうによむへし。左へも右へもおちぬやうに斟酌すへき之。心のまゝによむへからず。又申されしは。塔をくむやうによむ。塔をは上よりくむ事なし。地盤よりくみあくるやうに。下句よりよむ也と云々。

龜山院官女

今出川院近衛局被語云。故大納言子共歌よませしに。伊賴卿。

覺道上人。實伊僧正など。わかくてさいいよみき。吾身は九に成し時。池水と云題を。兄共の歌をみれば。みなうす氷とよみて侍りし程に。同じさまにてあひなしと思ひて。池のみきは

のあつ氷とよみたりしを。大納言興に入て。此あつ氷の歌いつれよりもよし。いかにも始終歌よみになるへしと申されしか。

續古今より此かた。いきて五代勅撰にあひて。うた數もあまた入て侍るは。父の詞の末とをりて侍ると語られき。詩などもつくりて。兼作集にも入。佛法にも立入て。一生不犯の禪尼也。法

華經千部よまれたると聞侍りき。うるはしく宮仕なともせず。續古今時。五月に菖蒲かさねのきぬきて。今出川中宮と申候しにまいりて。權大納言となつきて。車よりもおりて。まかり出

て侍しなと申されき。誠にあつ氷山口しるくめつらしく。優美よまれし人也。

戸部云。京極中納言入道つねに被申けるは。歌は兼宗大納言束帶にて陣座に着て。公事をこなひたる様によむへし。資雅三位か水干かりやうにて。小鷹すゑて打出たる様にはよむへからすと云々。民部卿入道も。亡父はかつうにこそ申しかと。人毎に申されけりと云々。

又云。新勅撰の時。所望の仁歌を出したる。心にあふ事かたかりけり。撰者常にこりくつを給りて見侍らはやと被申けり。又云。中院禪門(爲家)わかくて此道不堪之。父祖のあととて。世にまはりても無詮。出家せんと思ひ立ていとま中に。日吉社にまうて給ひけり。其次に慈鎮和尚にまいりて。所存のおもむきをのへて。いとまを被申けるに。和尚年はいくつそとはせ給へり。廿五になり侍る由申されけり。いまた是非のみゆへき年にては侍らす。思ひとまりて。道の稽古をふかくつみてのうへの事と被仰ける。御教訓によりて出家をも思ひとまりて。先五日に千首歌をよまれけり。よみ終りて父に見せ被申ければ。先立春歌十首をみて。立春なとかやうに出来たる宜由被仰て。見終られて後。壬生二位に見すへき由被仰けり。つゝに道の宗匠として。父祖のあとをますくおこされたる事。慈鎮和尚の恩徳なり云々。

徳大寺には歌のまと云所あり。寝殿の西の角の間也。是後徳大寺左府西行に被對面ける所なり。一條法印云。左大將家六百番

歌合時。左右人数日々に參て加評定て。左右中詞を被書けり。自餘人数不參日あれ共。寂蓮顯昭は毎日に參ていさかひ有り。顯昭はひしりて獨銚を持たりける。寂蓮はかまくひをもたていさかひけり。殿中の女房例の獨銚かまくひと名付られけりと云々。

六條内府被語云。後鳥羽院御時。柿本栗本とてをかる。柿本はよのつねの歌是を有心と名付。栗本は狂歌是を無心といふ。有心には後京極。慈鎮和尚以下。其時秀逸之歌人也。無心には光親卿。宗行卿。春覺法眼等也。水無瀬の和歌所に庭をへたて、無心座あり。庭に大なる松有。風吹て殊におもしろき日。有心の方より慈鎮和尚。心あるとこゝろなきとか中にまたいかにきけとや庭の松風と云歌をよみ。無心のかたへ送らる。宗行卿。心なしと人はのたまへとみゝしあれはきゝさふらふと軒の松風と返歌を詠しけり。耳しあればかなまさかしきと。上皇勅定ありてわらはせ給ひけり。水無瀬殿御堂長老(至一上人)水無瀬三品の説とて被語云。此和歌所の軒の松は。上皇御こゝろをとめさせ給ふ木也。はるかの御所の後。此松にをしつくへしとて歌を送らる。いにしへは花であるしをしたひける松は人をも思はさりけり。此御歌を出されて後程なく。松はかれにけりと云々。

戸部云。還所十首御歌合。家隆卿詠に。

またやみん又やみさらん白露の玉をきしける秋萩の花

といふ歌を。京極禪門。あはれ大夫入道のまたや見むかた野のみの、櫻かりにはをととりたる物哉。又やみんにて。又や見さらんは不足なき物をと云々。

また云。秀能後鳥羽院寂慮には無双の歌よみと被思召けり。中納言入道は御所に被思召たる程はなし。家隆卿申程無下の歌よみにはあらずと被申けり。

又云。新古今に。父秀家身まかりて後。寄風懷舊をよめるとて。秀能歌被入たり。兄秀康これ程の面目なるへくは。首をもはねらるへしとて。うらやましかりけり。

六條内府被語云。歌よみにはみなつねに好詞あり。後久我相國はなにやと云とを。第一句にても第三句にてもこのみよまれけり。後鳥羽院勅定に。例の通光かやとおほせ喜有けり。千五百番歌合時の御百首には。此相國被申行て。端作陪太上皇仙洞といふ所を平出に書へしとて。皆其儀にしたかふ。其後は此義なし。只此一度也。

戸部云。大嘗會歌は仁安六條院踐祚時大夫入道詠之。貞應後堀川院御時被仰京極中納言。堅申子細。仁安も非嘉例之上。現任公卿不詠。儒者若は諸大夫などの家より出たる輩詠來故也。可舉申其仁之山。西園寺内々被申之間。家隆知家等可爲其仁歟之由申之。是皆自諸大夫家出たる故也。

又云。知家卿父顯家非堪能。此道事雖微弱。京極中納言取立諷諫之。使家説も父よりは不受。中納言入道其家説かやうなるそとをしへたてられ。器量たりとて。歌合などにも毎度稱美之。新勅撰歌數なとも被賞翫。老後まで尙門弟にて侍りしか。中納言入道逝去之後。向背の心出來て。實治御百首歌。非當家風體事共おほくよめり。不知思事之。文保大嘗會歌。隆教卿詠之。内々自御所戸部之允萩井をよめる歌に。露もろきと云詞有。もろき字懸意。又いはむらの杜に。みちありと木のもと草のかきは。また我君の世をいはむらの杜云々。此事日本紀に神あれて草木皆物いふといへる。非吉事。君か世をいはむらといへるも。かならず稱美ともさためかたし。山守はいはゝいはなんとよめる。とかむる心なりなと被申しを。やかて御不審ありて。作者に仰たつねありしに。大嘗會歌。彼卿いつの才覺にて難し申候哉らんとつふやくと聞れて。貞應大嘗會時。中納言入道記録。知家卿吹舉事などの所に。計算をさして被進き。いはむらの社は已日樂破歌也。其夜有時卿爲蜀曲所作參之時。於陣中横死畢。

關卿井宮御物語云。深山月。知家卿。

昔思ふ高野の山のふかきよに曉とをくすめる月かけ。敬感尤甚。なにかな纏頭にと被仰ける。折ふし可然物なしとて。厚紙を十帖下さる。給はるとき。いそぎ住吉御幣に可進と

申。人感之云々。

小倉(黃禪)云。隆博卿は行家には無題にをとりて世も思へり。誠にさこそ侍りけめ。龜山院御時。山城國名所を賦する百韻御連歌侍しに。よのつねのやさしき名所は大略過て。いまは俗にいひつけたる。からすきかはな。四の宮かはらなとやうの名所をもとるへしとさたありし時。爲氏卿ちきりしのみやかはらさるらんと被仰付たりし。寂感も有。諸人奇特におもひて。隆博卿すこしの相對にも及かたきよし。人々心に思ひたり。勅定に隆博つけよと仰事侍りければ。つらからすきかはなへてにたのまゝしと被付たりし。さすかなりといふ御沙汰侍りき。

基任云。中院禪門北野參籠之時に。北神までの社名を賦して連歌侍りしに。冷泉亞相中將殿といふを賦して。こひのみちうしやうとのみなけくかなと被付けるを。滿座感歎無極き。禪門柳と云句に。老松ちからよはき春かなと云句を付られたりし。様もなけれとも。そゝろにおもしろかりしと。觀意(基任父)其座席に候て語付き。

故宗匠云。民部卿入道被申候しは。歌合に人の許へ行には。連歌發句一二句案して。何人何木何舟様のつねの賦物にあてゝ用意する也。會の末さまにはかに連歌すへしなと云事あるに。そゝろに發句を案して。人またれなとすへからずと被申

候。

又云。民部卿入道眞觀かはや人の薩摩のせとなとよみて。人をおとすとて。つねに笑はれ付き。

或人物語云。中院禪門と阿佛房とゐられたる所へ。爲氏まかりて。ふんにてこはつくりて。あかり障子をあけていらんとせられけるを。阿佛房障子の尻をゝさへて。あかり障子をかくし題にて。一首あそはし候へ。あけ候ふんと被申ければ。とりあへず。

古しへのいぬき^{にイ}かかひし雀の子立あかりしやうしとみる覽とよまれば。あけてわらひて入られけり。たはふれなからしくき心にてそ有けん。源承法眼説とてかたりき。

故宗匠云。民部卿入道爲教を車の尻にのせて。さかより冷泉宿所へ出られけるに。爲教卿あにのあしさまなる事共被申けり。禪門ともかくも返事もなくて。みちにこえとる車のあるをみて。やせうしにこえ車をそかけてける。といふ連歌をせられけるを。爲教よりすちりあんしけれ共つゐにつけさりけり。冷泉にて車よりおりらるゝとて。つゐにえつけぬな。あにのとのならはつけてましと被申けり。

又云。後嵯峨院御幸の時。辨内侍。少將内侍。御連歌のれうに御車にめされけり。爲氏殿上人の時。御幸の御供にまいられしに。すてに御車の出る程に。櫻の枝を花かめにたてられたる

を。おりてとられけるを御覽せられて。爲氏か花をぬすむに。連歌ひとつしかけてよとおはせられければ。辨内侍。しら波の立よりておるさくら花といひければ。ちらしかけてそにくへかりけるとつけられたりける。とりあへぬ時分の狂句なから。こまかにつきたる。誠に達者所存也云々。

同院御時吉田泉にて御連歌ありけり。女房辨内侍。少將内侍めされて簾中に候けり。民部卿入道女房の申次に。簾のきはに祖候せられける。耳おほるにて。瀧のひゞきにまきれあひて。きゝわかれさりけるほとに。御連歌もしまきりけるに。爲教少將山より柴をおりて。瀧のおつる所にふたきて侍ければ。水の音聞えす成にけり。そのうち御連歌しみてけるよし。辨内侍日記に書て侍り。

六條内府被語云。龜山院御時。三代集作者賦物にて御連歌あるへしとて。宗匠に被仰て後進せられけるを。御前資平卿とわか身と祇候して書寫し侍しに。源當純を爲兼見て。あれは當純にてこそ候へと申。宗匠(爲世卿。)當純の條勿論。定家卿白筆本如然候よし被申候しな。猶當純之由申ける時。勅定に急古今本を可披見由被仰下ける時。召寄られて備叡覽。當純條無子細。定家卿貞應奉傳て。嫡孫可爲將來證本之由加奥書本也。爲兼卿閉口。事跡いゝしかりし由被語申き。

小倉云。文永龜山殿五首歌合。近比嚴重の公宴也き。大殿執柄

大臣あまた被參候き。其時山紅葉愚詠に。散ぬへき秋の嵐の山の名にかねてもおしき木々のもみちはと詠したりしを。再三御詠吟。叡感之氣。山階左府中座におりて。向御前揖して。案天徳之例。天氣依有右兼盛歌被付勝字畢。此歌可申請勝字由被申。人々同申之由。眞觀申云。相手歌。をくら山いま一たひもしくれなはみゆきまつ間の色やまさらん。今一たひのみゆきまたなんの芳躰も難被弃捐の上。紅葉にちりぬへきと詠す。古き歌合に多以爲難。仍難勝之由申候。仍被定持。眞觀義勢傍若無人也云々。

又云。連歌本歌二句にわたるへからさるよし有沙汰也。それも事によるへきにや。後嵯峨院御時。御連歌あやしきと云句に。ほともなくけふの日かけもくれはとりといふ御製つきて後。難句にて連歌つかすして程ふる間。難句をして及違亂。此句可返給之由有勅定しに。民部卿入道それも可爲撫民御計之由被申けるに。爲氏卿何條さる事は候へきそと被申けるを。上手つけ候へ。融覺かなひぬとも覺候はすと被申けるを。聞いれぬ牀にて。たゝにやこえむ二村の山と被付たりけり。叡感頗なり。滿座感嘆しき。是は本歌宜渡三句者也。

平中納言(惟輔卿。)云。圓光院殿仰云。諸道をうかゝひて見るに。いづれもおろかならずといへとも。とに無盡期事は除目の事と和歌の道と云々。わか身雖不携此道。於和歌者深信仰云

々。又云。伏見院後伏見院に申をかるゝ條々内。向後勅撰あらは。永福門院と不詳前關白とに可被申合云々。此條後照念院殿たしかに御物語ありし事也云々。伏見院御製と後照念院殿御歌とは御風鉢各別也。しかるにかやうに仰をかれける事。究竟にいたりぬれば。御意の通する事おもしろき事也。或人云。時代不同歌合に。定家卿被合元良親王ける時。元良親王といふ歌よみのおはしける事。はしめてしりけると利口被申けり。家隆は小町につかふ。まことに定家相手不被請もとほり也。但後鳥羽院常仰候。元良親王殊勝歌よみ也と仰有ければ。御意にはわろき相手共おほしめされさりけるにこそ。彼歌合に公任卿不入。秀逸三首なきゆへと云々。長徳寛弘比より空の月日をあふくにこそ侍りけるに。さすか御歌合にかゝる程の秀歌三首もなとかなからむ。後代不審也。

故宗匠被語云。はれの歌よまんとて。法輪にまいりてよみし也。若ものともゝ法輪へまいりてよむへし。所からのすこさにもとに歌出來するなり。

戸部被語云。建保五年四月十四日。院庭申五首時。御教書に非秀逸者可令獻給云々。京極黃門ひとり非秀逸者不可獻之由事。謹所請如件と請文を被進。希代事也。仍其時歌非殊深思。秀逸まどに出來せり。はなにそむくる春の燈。をのれにもにぬ夜半のみしかさ。あらは遠夜の心つよさに。これら皆此時の歌也。

其比家隆のもとより新院御歌を京極へ遣とて。庚申をもてあつかひて。あまりに風情つきて。古反古なと見候中に。此一巻を見出して候。思に點なとあへとて。人のたひたる物にてそ候つらん。むかしよりかしこき御目をろかなる目と。さのみかはりたる事も候はぬ程に。あしからず見候につけて。まいらせ候よしの狀をつかばず返事に。庚申いかゝし候へき。今はたゞくひほねいたく。水ほしく案しなりて候に此歌給て候。庚申さまたけん御ようなりとおもひて候へばとて。此御歌の殊勝なる事さまゝかきて。此道事禁裏の御事は申に不及。此御所に詩の御沙汰はかりとのみ思ひまいらせて候へは。かゝる不思議なる御事にて候ける。いまはたゞ下す歌よみ候は。私の太良次郎なと申ものゝいひかひなく候なと。さまゝにかゝれたる侍々。

戸部云。高雄文學上人歌五首詠て京極黃門許に持來。皆其心珍重へ。佛法練行。心通和歌歌之由。記錄被書載。都賀尾明恵上人は此道數寄異他へ。仍新勅撰に歌被撰入。又日遣心集といふ集を書て。歌をあつめられたり。文學上人數寄被相續歟。心源上人語云。文學上人は西行をにくまれびり。其故は遁世の身とならば。一すちに佛道修行の外不可他事。數寄をたてゝ。こゝかしこにうそふきありく條。にくき法師なり。いつくにても見あひたらは。かしらなうちわるへきよし。つねのあらましにて有

けり。弟子共西行は天下の名人なり。もしさる事あらは。可爲

参事となけきけるに。或時高尾法華會に西行まいりて。花の陰
なとなかめありきける。弟子とも是かまへて上人にしらせし
と思ひて。法華會もはて坊へ歸りけるに。庭に物申候はんと云
人有。上人たそととれければ。西行と申ものにて候。法華結
縁のために参て候。今は日くれ候。一夜此御庵室に候はんとて
参て候といひければ。上人うちに手くすねを引て。おもひつる
事かなひたる躰にて。あかり障子をあけてまち出けり。しはし
まもりてこれへ入給へとて。入て對面して。とし比承及候て見
参に入度候つる。御尋悦入候よしなと。ねん比に物かたりし
て。非時なと響應して。次朝また時なとすゝめて被歸けり。弟
子達手を争つるに。無爲に歸ぬる事悦思ひて。上人はさしも西
行に見あひたらは。かしらうちわらんなど御あらまし候しに。
殊に心閑に御物語候つる事。日來仰にはたかひて候と申けれ
は。あらいふかひなの法師ともや。あれは文學にうたれんする
物のつらやうか。文學をこそうたてんする者なれと被申ける
と云々。
(七題)

或人云。千載集の比。西行在東國けるか。勅撰あると聞て上落
しげる道にて。登蓮に逢にけり。勅撰の事尋けるに。はや披露
して御うたも多入たると云けり。鴨たつ澤の秋の夕暮といふ
歌入たりやととひければ。見えざりしとこたへければ。さては

見て要なしとて。それより又東國へ下りけると云々。

或聖西國よりのほりけるに。住吉に参りて通夜して侍ける。夢
に御社のまへに僧俗男女貴賤まいりあつまりたり。ゆゑしき
人もおほし。猶人をまたるゝ躰なり。しはらくありて黒衣僧一
人参たるを。御殿のうちへ召入られて後。けたかき御聲にて。
心なき身にもあはれはしられけり鴨たつ澤の秋のゆふくれ。
と云歌を講せられけると見侍るよし語けるとなん。

住吉神主國冬云。歌よみはおほく當社御眷屬となれり。和泉守
道經は鬼形にて紙筆を持て。とのわかきのいぬめの角のたん
の上に。西むきに座して。人に見えけると申傳たりと云々。

國助神主近は神羅寺のそはに社を作りて神とあかむ。今主神
と號す。近來此道の堪能也。敷島の道まもりける神をしもわか
神垣と思ふうれしさとよめる。けにさと思はんと覺ゆ。公宴を
ゆるされ。新後撰の時。新古今の秀能か例とて十七首入られ。
稽古も名譽も無双也き。しかるに家隆の詠歌六萬首ありける
事をうらやみて。已達の後歌をおほくよみけり。月次に千首を
よむ事をしけり。其比よりの歌優美ならず。おそろしき事まし
れり。かやうの事尤斟酌すへき由。今の宗匠語被申き。東入道
(行氏。)も毎月の百首とてよめる歌共は。さらに勅撰にえらひ
入ぬへき物も見えずと被申き。

故宗匠云。初心なる時は常に戀のうたよむへし。それか心もい

てき。詞をもいひなるゝ也。

又云。民部卿入道被申しは。古歌の一句をきりて題に出してよむか。初心の稽古にはよき也。古歌の詞にはりめなきやうにいひつゝけんとする程に。歌の體も能成。詞も優になる也。

右頓阿之抄二條家之内足也。努々不可外見。辛酉書寫。鳥跡可恥云々。

明應甲寅暮秋上旬

勅撰に異名とも有。後拾遺をば小鰐集と名づく。津守國基歌。小鰐をばこひて撰者の心になひて。歌多く入たるよしの異名也。金葉をば臂突集ヒテツキといへり。あせうたといふ心にや。新勅撰をば宇治川集と云けり。武士の多く入たる故也。續拾遺をば鶉舟集といふ。簞の多く入たる故也。新後撰をば傍家は津守集といひけり。住吉神官の多く入たる故也。今の世は勅撰せしる人はあれ共。名つくる程の力はなきにや。

戸部被語云。或人民部卿入道に對面の時。堀川院百首。人の口にある名歌は不及申。其外近日集などに入候は。更におもしろし。共覺え候はす。近來の歌にもおとりて覺候は。いかにと候哉らんと尋申ければ。殿上大盤はふりたれ共公物也。因幡かうしの塗りますまして。給うつくしくかきたるは人まへには出ししかたし。堀川院百首は殿上大盤のとし。近日歌は因幡かうしのと

しと申されけり。

又云。法師入道などの歌は。公宴にも端作たゝ詠何首和歌。官位も官にても位にても一方斗を書へ。仙洞十首に實伊僧正懷紙に。秋日陪太上皇仙洞同詠十首應製和歌。法師權僧正實伊上と書たるを見て。冷泉大納言（爲氏）臣藤原朝臣とはたと書ぬそと。利口被申けり。

又云。女房懷紙は端作も題も書事なし。只歌計畫へ。小侍從正治御百首の時。人にあつらへてかゝするに。春二十首と斗書たり。是うけたるすかたへ。其時の歌に。おもへたゝそちの年の暮なれはいかはかりかは物はかなしき。男懷紙は應製臣上の間一をはかゝさるへ。かゝは皆書へき。法師は上字はかりを書たると有。入道も書たり。嘉元文保の御百首には定爲法印上の字をかゝれたり。又かゝぬ人も有。

小倉云。頓覺歌はあまりに晴すくして。當座歌合の勝點數などはすくなきと云々。心は時の歌秀歌の跡を毎度心にかけて詠する程に。近日の人の心には不叶の由被申き。

故宗匠續千載集をうけ給て被撰し時。さして歌よみにもあらざる人の來るにも。勅撰こそ候へ。御歌やゝ出させたまへと由しを。故戸部其外の門弟も。勅撰は道の重事。秀逸を可被撰事にて侍るに。分明に歌もよまぬ者に歌をこはるゝ事。人の難も有ぬへき事なり。不可然之由つふやき申されしをかへり聞

れて。予に對面の時被仰しは。歌は此國の風俗なり。國に生れたらんもの誰かよまさらん。稽古して世にしられたるも有。獨吟して心をやしなふ者も有。能歌の出來事。うた讀ならぬ者もよみ出して。ふるき集にも入たり。後撰八子か類なり。勅撰を承てひろくよき歌を求む時。名譽なき人もいかなる秀逸をか詠してもちたらん。なとかあひふれてあるへきと被申し。返く面白覺侍りき。

能譽は故宗匠の被執し歌よみ也。故香隆寺の僧正の愛弟の兒也。佗人の心にならへ時鳥うきにそやす音はなかれけるとよめるうた。新後撰に隱名にて入たり。後二條院新後撰歌を御手つから屏風の色紙にあそはされたるにも。此歌を入られたるとそ承りし。故宗匠これかうたとおほへて人にかたられき。あふ坂やつむにとまらぬ月かけを關の戸あけてにしに見るかな。さとの犬のこゑするかたをしるへにてとかむる人に宿やからましなといへる歌なり。これはさして庶幾せらるへき跡とも覺えぬに。いかなる事にかとおほつかなし。東山雙林寺に住し比たつね來て。年月承及ながら未得參會之次。近程に筑紫へ罷下へし。又上洛の命もしらぬ程に。うねくしなから尋來たるなと申き。此道の事も如法卑下しかへりたり。さして稽古仕たる事もなし。詠歌も生得に其骨なきよしを存侍るを。宗匠あしからぬ由を被仰事。我ながら心得侍らず。此世ひ

とつならぬ宿習にて侍るやらんなとまておほゆると申き。しはし雜談して侍しか。物なといたく見たるものとは覺えず。よに申やさしき數寄とおほえ侍りき。

兼氏朝臣は稽古もよみ口も相かねたるよし戸部被申き。勅撰方の事は官外記にもおとり侍るましきよし。人のもとへの狀に書て侍りけり。續拾遺の時。和歌所より人にて侍りけるか。勅撰書終らざるさきに卒去して侍りき。朝臣寄橋戀に。おはたゝの板田のはしとこほるゝはわたらぬ中のなみたなりけりと云歌を可被入と云沙汰ありけるを。慶融法眼議を被申ける。其夜の夢に冷泉亭の中門の角の椽のほとにて。彼朝臣に慶融行逢て侍るに。腰にいたき付て。歌よみは没後をこそ執する事にて侍るに。此歌に議仰らるゝ事恨めしくといひけると見えけり。さめて後より法眼腰のいたはり出來て。終に平愈の期なし。おそろしく詮なき執心なり。子息の長舜法印も道を執したる事は更にをとらず。和歌所に小蛇か小鼠かに成へ候はんと覺餘。左様のものゝ見え候はん時。かまへて手かけさせ給ふたと申けり。續後拾遺の比。法印世をさりて後。和歌所の文書の中に小くちなわの見えけるを。すはや故法印御房よと人の云ければ。實性法印殊に恐れてむつかしかりけり。隆教卿わかくては非器なりき。住吉玉津島へ被參詣ふかく被祈けり。さる故にや近き比は道もさる程に成て人も知りたり

き。歌合の判の詞なとかゝれたるは。よにむかし覺えたるやうに見えき。先年宗匠亭の會にも被來き。披講の禮。歌もてなしたるさまなど。さる人と覺え侍りき。故宗匠も九條二位（親王殿）か披講席にある跡。維繼實信などにはさすか不相似とて被感き。

六條内府被語云。入道民部卿嵯峨中院亭にて發句一にて千句連歌をせられけり。其時發句の本をして後代まで残さんとて。にしきかと秋のさかのゝ見ゆる哉。今の發句いかにかやうになからんとそ覺る。

信實入道九月盡の日好士あまたさそひて。深草立信上人（位イ）許にまかりて連歌侍りけるに。禪門發句。けふはばや秋のかきりに成にけり。夜もすから連歌にあかして。次の朝歸駕をもよほしけるに。今日は初冬にて侍るに。いかゝさては候へきと上人被申て。また連歌有けり。自余好士に式代もなくて。又禪門發句を被出けり。けさははや冬のはしめに成にけり。

冷泉亞相（爲氏）。秋比立信上人の深草の寺にて。連歌をせられけるに。無生か彼所に有りけるを召出で。發句をせさせられけるに。なけや鳴露深草のきりくすとしたりけるか面々かんせられけり。いかに此比の花下の輩かやうにせざらんとそ覺る。

戸部被語云。俊惠大夫入道のもとに來て。御詠の中にいつれをか勝れたりとおほしめす。よそにはやう／＼に申せと。それは

用侍らす。まさしく承侍らんと申ければ。夕されは野への秋風身にしみて鶉鳴なる深草の里。是をなん身にとりておもて歌と思給と申されしを。俊惠又いはく。世にあまねく申侍るは。佛に花乃すかたをさきたてゝ幾重こえきぬ峯のしら雲。是をすくれたりと申侍るはいかにと聞ければ。よそにはさもやあらん。みつからはさきの歌にいひくらふへくも侍らすと被申けるを。俊惠後にいはく。かの歌には身にしみてといふ第三句いみしく無念に覺るなり。是程に成ぬる歌は景氣をいひなして。たゞそらに身にしみけんかしとおもはせたるこそ。心にくゝも優にも侍れ。いみしくいひもて行て。歌の詮とすへきふしをさはく／＼と云あらはしたれば。無下に事淺く成ぬるなりと云々。（長明無名抄ニ委有之。）これは及はざる難なり。身にしみてを歌の詮と心得て此難をいたす。みにしみても景氣のくそく。夕暮うつら秋風のたくひなり。この外に歌のさひしき心詮としたる跡あるをしらざる也。（此歌甚深。珍重々々。）又云。當時非成業歌よみには富小路。（實教。）中御門。（經繼。）兩大納言。富小路は父禪門はとのたけすかたはなかりしか共。歌とに案ししほりて。あたならずよむ人。中御門は勘解由次官など申ける比より。此冷泉亞相門弟にて常にとふらひ來りき。詠歌宜よし記録にも書置て侍り。風躰今もまよしくたゞしくみり。歌會などには富小路歌たひとに興有て目さむる

やうに。但勅撰の時撰入せんとするに。さりぬへき歌なし。中御門は當座なとははるかにはえなきやうなれと。撰歌の時は用ゆへき歌おほしと云々。今宗匠もおなしきさまに申さるゝ也。

後宇多院龜山殿千首時に。渡霞に經繼卿。津のくにの難波わたりの朝朗あはれ霞のたち所かなと詠せられたる由。戸部(于時侍從中納言。)語仰られし程に。かやうなるあはれを近比人不詠へ。まことに達者のしことゝみえて候と申侍しを。經繼卿參會の時。頓阿かやうに申と語られけるにや。吉田僧正參會の時。あはれ霞のたち所哉を被^{三河}稻美由。侍從中納言被語とて。中御門如法自愛のよし被語き。知房卿は伊家辨に御歌優なりといはれて。道にたつきはるはかやうの事かあちきなきとて。道を捨たる事も侍そかし。員外後學一言を自愛せられける。まとの數寄人と覺えておもしろく侍りき。

正中之比。中西彈正親王抑小路故殿吉田なる所にて和歌の御會有しに。當小路中御門參會せられき。御歌なと過て勸盃之間雜談之時。中御門被申は。歌のよきを知たる者候はす。宗匠なとは不及申。其外は小倉中納言入道なとそしられて候らんと云々。其後當小路白地に座を立れたるあとに。此大納言歌よみとて候へとも。よき歌は全分に知候まし。上さま宮殿もよろしるしめされ候はし。乗性(中御門法名。)こそ歌は知て候へ共。

其分は頓阿を證人にたて候へきよし被申き。

戸部云。京極禪門つねに被申けるは。亡父こそうるはしき歌よみにてはあれ。某は歌つくりなり。相構て亡父のやうによまんと思ひしか。かなはてやみにき。但澄憲と聖覺と風情ははなはた替りたれ共。ともに能説の名譽ありしかとく。片はらいたき事なれとも。亡父か歌のすかたにはかはりなから。愚詠をもなのつから目たつる人も侍る由被申云々。

此事卜部仲實入道も如此抄し置と云々。

又云。民部卿入道被申けるは。むかしこそ歌よみはありしか。今はみな歌つくりなり。つくるにとりて。いかにつくるそといふにこそ面々所存不同もあれと云々。

又云。京極中納言入道被進慈鎮和尚消息云。御詠又は亡父なとこそうるはしき歌よみの歌にては候へ。定家なとは知恵の力をもてつくる歌作へ。天下に歌をつくるものは皆以門弟也と云々。

故民部卿後宇多院に參らせられて。歌の風體の事なと御所よりも被仰出。戸部も申されけるに。歌は別の子細候はす。うつまさの法師か妻の世に有わひて年の暮に。身のうさをおもひしとけは冬のよもとゝこほらぬは涙なりけりと。はいの手習にして候。是か歌の本にて候よし申されけるを。後まで 歡感有けるよし。近習の人兩人語侍し也。さしたる歌よみにあらね

共。惑の至極しぬれは。詞のえんも自然により來て。誠にめて
たき歌と成也。

故宗匠被語云。續古今に撰者くはへられて後は。入道戸部物う
くおもはれて。撰歌の事冷泉亞相（當時侍從中納言）。讀與。其
狀云。勅撰の事一向可被沙汰。不可誇堪能事候也云々。其時向
後勅撰可被入者。兼長朝臣子孫。光行餘流。祝部者共云々。殊に
被讓與門弟也。

又云。民部卿入道出行の時。辨入道家前を被通に雀文車立た
り。以下部誰人の御車候哉と被尋候處に。日向守殿御車と云
々。（兼氏朝臣之。）以外腹立被歸。後直入和歌所。兼氏朝臣歌三
首被書入たるを悉被切出云々。

長舜と順教とは遁世して。勸修寺の奥松陰の別所に行て栖け
り。長舜は出て聖道に成て。青蓮院邊經曲。順教舜惠は關東に
下て。我本道の陰陽師をたて奉公。各立身云々。長舜初は遁
世體にて關東下向。號觀惠。大御堂邊時々出現。所々歌會交家。
あまりに歌平懷之間。平懷なる歌をは。關東にては觀公といひ
けり。

戸部云。京極大納言入道。俊言宰相雲客之時吹舉して。令勤仕
講師。而左大臣とよむ。ひたむのおほいまうちきみとよむ事を
しらす。亞相も不教不存知歟。比興と云々。

私云。近日内々會某講師可勤なといへは。彼は有聲人也。講誦

に可宜別の人をなと云。或は講誦にすまむとて。聲を損な
といひて。禮讃儀法などの誦聲なとせんするほとにいひあひ
たる。かへすく片腹いたき事也。日比は更に不聞及。無下に
此間の事之。

内々如讀歌講師勤る者。歌をよみはても敢ず座を起て。面々し
たる心地に思へり。此事京極中納言入道被書物にも。讀畢て急
に可起故實之。御製を別講師可讀故之云々。御製もなき下
様内會に。事有かほに急起。知一不知二と云はかゝる事にや。
歌をよみ畢上は。やかてに可立之條は子細なけれとも。物しり
かほにあはてたつ。毎度おかしく見ゆる事之。讀聲などのこと
／＼數も不宜也。

晴の歌は人にも見せあはせ。又我晴に出したる歌にも可校也。
一條法印嘉元御百首に。道のへに賤か門松荷ひもていそくと
見ゆる年の暮哉といふ歌。文保御百首に又此歌あり。さしもか
やらの事執せられたりし人の老後失錯也。又門弟などにあま
た見せられぬ故也。

めつらしき本歌名所。常にもなき五文字など。同事を不可詠。
拾遺愚草に此句出來なとつけられたる。後昆をいましめむた
め之。近きはとに人の詠したる本歌なども。耳に立は不可詠。
此事近日一人詠すれば。やかて人にとよみあひて侍り。うたて
き事之。

歌會時讀歌などの案を別物に書て人に見せ。又詠草を後の爲とおほしくて。書うつして懷中なとする事。ふろき堪能の人々さらにせられさりしと云、近日はやりたる事。剩短冊分取て後。料紙一枚つゝ人別にひく所もあり。返く見苦しき事。我歌をいみしきものかほに書付て持たる。おかしく見ゆ。當座歌をさのみ人に見せ合。人になをさせなとする事不可然。近日はかしらさしつとへて評定する躰也。見苦事也。

定爲事

一條法印云。勅撰は可然高位の人を賞し。譜代の輩をさきたてらるゝ間。歌よみ口數寄稽古なとは次に成て。道の賢愚あらはれかたし。打聞をえらひて。歌の善惡によりて可用捨之由。年來思企侍しかとも。打聞も人の恨は同事成へきほとに。終不思議云々。

冷泉相公云。公任卿。朝またきあらしの山のさむければちるもみちはをきぬ人そなきといふ歌を。花山院拾遺集に。もみちのにしきゝぬ人そなきとなをして被入たるを。公任卿の所存にたかひて。此歌を拾遺抄にちるもみちはをきぬ人そなきと被入たり。時の人集をさしをきて抄をもてなしけり。仍て通俊卿後拾遺も集にはつかずして。抄につきて後拾遺抄と題せり。其後年久しく抄を賞翫する事にて侍りけるを。京極黃門集もまゝとに殊勝とて。抄をさしをきて集をもてあそふ。此よしを後鳥羽院へも被申ければ。御所も御同心ありけり。其後集を

もてなす事になりて侍るよし。京極黃門委細被書置云々。公任卿拾遺抄をえらふ事も。我歌一首の故に被思立と云々。

後西園寺太政大臣殿故民部卿(爲藤)。對面の時。初心は歌には點の多きとすくなきと。いつれか始終器用にて有へきと御尋ありければ。すくなき猶器量の者にて候ぬへきと被申けるを。後までも被感仰ける由。或人被語申き。

冷泉殿云。風雅集被撰ころ。常に萩原殿參候之時。法皇御物語に。爲兼卿我には。鳥の音ものときき山の朝あけに霞の色も春めきにけり。所存歌にも本にもすへきやうに申き云々。

又云。爲家卿を宇津宮入道所望して聲にとりき。京極不被庶幾此三字本マ歟。あつとのみ物の下より目見出して。道の稽古せらるへきにあらすと申されけりと云々。

又云。順德院被遣京極。勅書に。あさのさ衣うつくしく。不庶幾之由被申。相叶愚意之由被仰下云々。又近江姫君のはこさきの松のやうなる歌おほし。寂慮に不叶之由同被仰云々。

右此書者頓阿法師對爲世卿所被聞書也。號井蛙抄。六軸合爲一冊。於二條家尤爲秘藏者也。

明應三年正月十一日

此一部當家雖爲秘說。依懇望令授兼載法橋畢。努々不可有他見者也。

明應七年三月三日

法印堯惠左列

此六卷（文明十八年五月十七日。）常德院以御內書御懇望之條備之。俄於燈下書寫之畢。然同八月正本被返下。重而在御內御自筆之書。同伊勢守貞家狀有之者也。

延德元年四月二日

法印判

明應九年令懇望或仁寫留之。正本在。禁裏之由承及之。此本曾以不可他借有之。書籍多以紛異者也。

行年七十三 沙彌判

聊病氣及數日。於于今忘當來之資痕。如斯苦執無其說。雖然別無佛法。別無和歌。可謂同一味而已。此六帖二部有之。一帖有他筆之間書改之。

右此本四條大納言殿（常泰。）御芳筆以逕校合畢。急之本之間。愚筆不憚。先中書寫留。重而可清書所也。

享祿三年三月十二日。勢州香取中郷於日光坊書寫畢。

右筆 任賢

〔右井蛙抄以圖書寮本及井蛙抄脫漏校合〕

續群書類從卷第四百六十三

和歌部九十八

清巖茶話

清輔供奉申されたりけるに。歌の御會ありしに。人々の歌はみな出來たれとも。清輔一人ひさしく案してをそく出されたり。清輔なれば人もゆるし。中々遅かりしもくるしからさりき。其歌は。

年經たる宇治の橋守ことゝはん幾世になりぬみつの水上此歌はうちの橋守より末はみな出來て。五文字かいかに案せられけれどもなかりし程に。久しく案せられける也。あまり久しかりし間。ちからなくて。年へたるの五文字を注にちいさく書て出されける也。これはけに不足なる五文字也。

一無心所著の歌は一句く別の事を云たる歌なり。萬葉集に。

我戀は障子のひきて峯の松火うちふくるにうくひすの聲(萬葉わがせとかたふさきにすつふた石のよしぬの山にひをそさかれる又わきも子我せこかたうさきのわのつふれ石とひの牛の鞍の上のかさかひたひに生ふるすくうくのことひの牛のくらの上のかさ)

法師らか髭のそりくひ馬繫くいたくなひきそ僧なからかも一宗尊親王は四季の歌にも。やゝもすれば述懐の歌をよみ給ひしを。難に申ける也。

一物哀躰を歌人必定する也。此躰は好てよまは。さこそあらんすれとも。生得の口つきにてある也。物あはれの躰をよまんとて。あはれなるかなといひて。あはれからせうとよむは。さらに物哀躰にあらず。たゝ何となく躰か物あはれなるか物哀躰にてある也。俊成の歌こそ物あはれの躰にて侍れ。

しめをきて今やと思ふあき山の蓬かもとに松虫のなくをさゝ原風まつ露のかりの世にこの一ふしを思ひをく哉さえやらてといへるは何となく物あはれなり。

一堀川院の作者は。たとひ近年の勅撰にいたりとも。本歌にて有へし。堀川院の作者の歌の勅撰にいらぬも。證歌とはな

る也。本歌にてはあるましきなり。

一ましみつはたゝし水也。まことのしみつといふことろなり。
一法樂の百首をよみ侍し時。何の法樂にてあるやらん。神によりて題をかくへしと云々。其謂は百首にも先例不吉の百首なと有て。わるく出しぬれば。人の難する事也。先例不吉は百首の終らすして。主上崩御なりなとせし事也。

一拾訓抄は爲長卿の作かと覺る也。歌仙有職能書にて有し也。官の廳にて侍しかは。文をもて先とせしなり。おもしろき事共を書たる物也。我も侍侍しを。新熊野にて焼侍しなり。

一枕草子は何のさほうもなくかきたる物也。三卷ある也。

一つれ／＼草は枕草子をつきて書たる物なり。とはゝとへかしと云たるは。にくいけしたる詞也。人のかたへ文書していはゝにくし。たゞ獨居てとはゝとへかしといひたらんは。あはれなりと書たりと云々。

一三鉢の歌にも。慈鎮和尚のねぬにめさますの歌そ。まことに玄妙なる物にて侍る。先ねぬにめさむるといふは。假令宵の間なとねもせてゐたるに。郭公の鳴を聞て。はやといひておとろくへければ。これはけにも寢いらねとも。驚きたるかめさむるにてある也。これを心得ぬ人は。ねいらては何とめさむへきそといはむは道理なれとも。其たくひはいふにおよはす。これは玄妙なれとも。上手は猶もおもひよる事あるへ

きか。此詞をえても。上句には夕暮の雲のはたてを詠ても。よひの間に月を見むともよむへし。しかるなまこもかるみつのみまきの夕間暮とあるそ。さらに凡慮もおよはす。理の外なる玄妙。さらに何ともせられぬ所にて侍る。かやうにかけはなれたる所をとりあはする事。自在の位にのりゐてのしはさなり。春の歌に。

よし野川花の音してなかるめり霞のうちの風もとゝろに花のをとしてといへるかおほきなるなり。また秋の歌に。

あきふかき淡路の島の在明にかたふく月ををくるうら風一匠作の家にて夏樹島に。

郭公又一こゑになりにけりをのかさつきの杉の木かくれ時鳥亦ひと聲に成にけりと云たるか。すこし大なる也。千聲百聲といひたりとも。ちいさき事も侍へきなり。或時の會に新戀に。

おもひねの枕の塵にましはらは歩をはこふ神やなからむあゆみをはこふといひたるか。ありきて祈る鉢か有てよき也。次日匠作の會に又新戀をとり侍しかは。人々題をかへさはやと申侍しかとも。よは／＼しくやと思ひて。

そのかみの陰神陽神の道あらは戀に御秋を神やうけましと六月のみそきなといひて。みそさかあまたあれは。戀にみそきとよみたる也。

一從門歸戀をははや度くよみ侍り。等思兩人戀をはいまたよみ侍りし事もなき也。惣して此題の出たりと云事もいまた聞侍らぬ也。從門歸戀は後撰に。なるとよりさし出されし船よりも我そよるへもなき心地するとあるなり。

一途中契戀に。

やとりかる一村雨をちきりにてゆくえもしほる袖の別路とよみ侍しを。飛鳥井殿も褒美有し也。

一もすの草くきは。忘住所戀にも途中契戀にも通してよむなり。

一憑媒戀難題也。

一慶運か子に慶孝とて。東山黒谷に侍し。花盛に冷泉爲尹いた宰相にて有し比。父爲邦了俊なと同道して。東山の花み侍しに。題を懷に入て。道すから案して。鶯尾の花のもとにて講すへしと有しに。さらは慶孝をさそふへしとて。庵室へ尋行しかは。折節内に侍しをいさなひつゝ。尋花といふ題を一首出し侍しかは。慶孝。

さそはれて木のもとに尋來ぬ思ひのほかは花や恨みむとよみ侍し。

一中比祖目とて禪僧の歌よみ侍し。是か歌只一首新後撰に入たり。一首なれともうらやましきうたなり。

思ひ出のなき身にはは、春毎になれし八十の花や恨みん

はなやうらみむといへる次に思出し侍也。

一懷紙の作者をは官姓名を書也。實名に上の一字をちいさく書は卑下の心也。題をはまつ和してよむか本なり。旅宿歸鴈をも。たひのやとのかへる鴈とよむへけれとも。餘に長ければ。旅宿歸鴈とよむなり。是もきかんをはかへるかりとよむへきなり。昔は山家をは山の家。田家をは田の家とよみし也。

一六百番に定家卿歳暮に。

たらちねや又唐土にまつら船ことしもくれぬ心つくしに歳暮に唐松浦舟なとをよめる。いかなる事にや。さりながら何となく親なとのもろこしにて。本朝のむかへを待居たるに。年もくれなんあり様は。さすかに心ほそくはきこふれとも。實には何事にかと心得かたく侍る也。もと松浦の物語といふ草子を見侍しに。松浦の中納言と云人。遣唐使にて唐へわたる事を書たり。これを下しきにしてよみ侍し。同歌合に。

夜もすから月に愁てねをそなく命にむかふ物思ふとて命にむかふといふ詞も。まつらの物語にある詞なり。かやう

に定家卿の歌は本説をふまへてよみ侍る也。

一何やらんに源氏をはとらす。心をとると書たりと覺侍るか。歌をもおほくとり侍る也。おもふかたより風や吹らむと有

を。

袖にふけさそな旅ねの夢もみしおもふ方よりかよふ浦風とよみ侍る。袖にふけとはねかひたる也。旅ねはれられねは。おもふかたよりの風は袖にふけと也。

俊成の家は五條室町にて有也。定家卿母にをくれてのち。俊成のもとへ行て見侍しかは。家をば秋風吹あらして。いつしか俊成も心ほそきありさまにみえ侍し程に。定家の一條京極の家より父のもとへ。

玉ゆらの露もなみたもとゝまきらすなき人こふる宿の秋風とよみてつかはされし。あはれきもかなしさもいふばかりなく。もみにもふたる歌さま。玉ゆらはしはしと云詞也。末に秋風と置たるにて。あはれに身にしむに。なき人こふるとあるも。かなしう聞えたるなり。俊成の返歌。

秋になる風の涼しくかはるにも涙の露そしのにこほるゝとすけなげによめるか。何ともえこらへぬ也。定家は母の事なれば。哀にもかなしうも。身をもみてよみたるは理也。俊成は我女房の事也。我身はや老體なれば。あちきなしかなしなといひては似あはねは。たゝかく秋になる風のすゝしくと。何となげにいへるか。なにもおほえず殊勝也。

一定家卿はとに戀の歌かしみ入て。何ともかともおほえぬかおほき也。惣して定家には有家。雅經。通具。通光ら及事にあ

らす。家隆そ戀の歌はしつうによみよせられ侍る。

一定家の中されけるは。歌を案せんときは。常に白氏文集の故郷有母秋風涙。旅館無人暮雨魂の詩を吟せよ。此詩を吟すれば。心かたけ高くなりて。よきうたのよまるゝ也云々。關省花時錦帳本。嵐山雨夜草庵中の詩をも吟せよと侍り。旅館無人暮雨魂といへる。旅のやとりになゝひとりゐたるに。ほろくくと雨の打ふりたるは。まことに心ほそき物也。なき人こふる宿の秋風の歌は。此詩の心になかひたる也。

一新羅明神の御歌は續古今に入たり。

唐丹に法尋ねにとこしかひは有ける物をこゝのとまりに弘法大師。

法性の室戸ときけと我すめはうぬの浪風たゝぬ日そなきの御歌は新勅撰に入たり。かやうにもろくの神明佛陀もみなことくくうたをあそはしたれば。歌はやうあるものにや。

一おもひきや我戀はと云五文字を。四五よりこのかたよみたる事はなき也。思へはいかにとしにくいけしたる詞也。我戀はといはすとも。誰か論すへきとおほしき也。おもひきやのかはりには。おもほすよ。しらさりきなとよむ也。

一人丸の御忌日は秘する事也。さる程にをしなへて知人はまれ也。三月十八日にて有也。影供は此日はなかりしなり。六

條顯季の影供夏六月也。

一上手になるものはまはしめからみゆるなり。家隆卿おさな
くて。

霜月に霜のふること道理なれなと十月に十のふらぬそ
とよみ侍るに。鳥羽院は重寶になるへき物なりとて御感有
し也。

一上手の歌を見をきぬれは。かならず心かまつ上手になる
程に。心のやうには詞か自在によまれぬ程に。心の上手に成
たるか一わろき也。詞は物をみるにもよらぬ物なり。又詞は
きいたれとも。心かきかねはよまれぬなり。さる程に物を見
るに心得あるへきなり。

一花の八重山は名所にはあらず。あしからにおほく八重山と
よみたる也。たゞかさなりたる山也。

一保名所百首題にて。初心の人歌をよむへからず。其所にむ
かしより詠しつけたる物あれば。今よむ歌も大略もとの物
なり。たゞちと我物か有也。初心の時名所の歌か好にてよま
るゝ也。それはやすきゆへ也。我も歌のよまれぬときは名所
をよむ也。名所をよめは。二句も三句も詞ふさかる物なれ
は。このみわか力かいらぬ也。高鵬やかちのゝはら。さゝな
みやしかの濱松なといへば。二句ははやふさかる也。我はは
や四十餘年歌をよみ侍しかとも。また此百首をばよみ侍ら

す。むかしの人はみな堀川院の百首を初心の稽古にはよみ
侍し也。さりながら堀川院の百首はちとよみにくき題也。初
心にては二字題などのなひくとしたるにて。よみつけた
るかよき也。月花などのうちむかひたるなにてよむかよ
きなり。弘長。弘安。建治。建久。貞永などの比ほひの題にて
よむへき也。初心の時は。寄月戀。寄花戀などの寄物の戀は
よみにくきやうに覺る也。見戀。顯戀など云。物にもよせぬ
詞はよみやすくおほゆる也。後心には寄花の題はやすくて。
たゞ聞戀。別戀など大事也。

建久。後堀川。貞永。後堀川。弘長。鳥羽。弘安。後宇多。建治。同上。

一幕春聞鐘。

此夕いりあひのかねのかすむゝ音せぬかたに春や行らん
音せぬかたに。此様にやすゝと讀習へきなり。さりながら
それは極足にいたりて後。初心の用地にかへる所に。かゝる
物に出くる意也。水中の月はとらんにやすけれとも。とれば
とられぬとく也。こゝの程は無左右得かたき事也。

一かびや。かびや。兩義也。かびやは俊成。顯昭はかびやと申り
る也。六百番の訴陳にみえ侍る哉。

一千五百番の時分は家隆の歌は聞えぬ也。

一寄河戀。(招月)

あたにしも人こそわたれやす川のうきせ心にかへる浪哉

うきせ心にかへる波哉の後句か好也。うき事はちや／＼とかへる物なり。

短夜月。(同。)

水浅き蘆間にすたつ鴨の足のみしかくうかふ夜半の月影鴨の足は歌には入ほかなるやうなれとも。短の字にめをかくてかく讀侍り。

寄山戀。(同。)

あふ坂の嵐をいたみこえかれて關の外山にきゆる浮雲或者此御詠戀の歌の様にもきこえ侍らず。風の歌とてかく讀ならはし侍也。

一停午月。空の眞中にある月也。いくかの月にてもあれ。空のまなかにある月はみな停午月也。

一祈戀をはいつれの神をもよむへき也。

年もへぬいのる契ははつせやま尾上のかねのよその夕暮と定家もよみ侍れは。佛にも祈るへき也。攝政殿の

幾夜われ浪にしほれて貴船川

きふねへは夜まいる程に。いく夜我と詠也。

一ひむろの在所あまたあれとも。富士の氷室いまた見及さる事也。順徳院御製も富士の氷室とはなきなり。

限あれはふしの深雪のきゆる日もさゆる氷室の山の下柴とあるは。萬葉に富士の雪はけにきえてくちにふるなとあ

れは。是はかきりあれば。富士の雪もきゆるとあそはしたる也。扱又さゆる氷室の山の下柴とあるは。氷室の在所にて富士の事をいひたる也。心はふしの雪のきゆる日も。氷室は猶さむしと云たる御製なれば。まつたく富士に氷室ありといひたる御歌にてはなき也。

一高嶋やあと川柳。

一おりふしよもす鳴秋もふゆかれしとをきはしはらもみちたになし。

は脊冠の折句の歌也。ちやとよまれし也。いかによまんとすれとも。よまれぬ時も有也。らりるれるのあるは。殊によまれぬ物也。天曆御時女御更衣あまたの御方へ。

あふ坂もはては往來のせきもあす。たつねてとひこきなはかへさし。

とあそはしてまいられしかは。みなえ心得給はて。ある女御は尋てとひことあれば。まいれといふ御製と心得て。其夜内へまいり給ひしもあり。又心得ぬ方の御返事申されし女御もおはしましき。其中にひとりひろはしの更衣と申ける御かたより。たき物をまいらせられけるを。觀慮にかなひておほしめされける。あはせたきものすこしといふ脊冠の御製にて有し也。

一體火の題にては埋火をもたく火をもよむなり。埋火の題に

て爐火をはよぬ也。

一寄虎戀にては時の寅をはよぬ事也。時の寅も虎の事なれ共。日よみのとらは字かはりたり。此題生たる虎の事なれば。虎ふす野へとも。石にたつ矢なと讀たるかよきなり。日よみのとらは寅のこゑなり。虎のいけはきと云事新撰六帖にあり。爲家卿大納言にて有しを。子の爲氏大納言に任せんとするに。當官あらはこそ任せめ。仍父の卿をは前官になして。爲氏當官に任せしかば。爲家はを述懐して虎のいけはきとよめり。

一巖苔。

みたれつゝ巖ほにさかる松かえの苔のいとなき山風そ吹苔のいとなき。さかりこけと云。卷て糸のさかるもの也。さて苔の糸とよみたる也。いとなくは。あしのいとなくなと云て。いとまなき也。

一懷紙をかくに。下をばあけぬ事也。上をはいかにもあけたるかよき也。

一舟子。

一首夏藤。(招月。)

夏きても匂ふ藤浪あらたへの衣かへせぬ山かとそみる萬葉集にあらたへの藤浪とよみたり。藤の花のふさのもととはあら／＼として。しかも妙なるものなれば。あらたへの藤

えといへる也。あらたへの衣とよみたる事は更になき事也。たゝ我はしめてよみたり。白妙の衣といふも。白く妙なる衣と云事なれば。あらたへの衣といはん事。何かくるしかるへきと存し侍る也。

一待郭公。

年もへぬ待にこゝろはみしかくて玉の緒なかけ郭公かな玉のをなかけはわか事也。七十まで生たれば。玉の緒長きに有也。毎年子規は待物なれば。年もへぬとは云也。かやうによみては。何の用そと存すれとも。同類をよましとしのく程に。數山にかゝりてよみぬるにて候也。

一寄夢戀。

涙さへ人の袂に入とみし玉とゝまらぬゆめそきたる若紫やらんに。紫の上のいまたいときなく侍るを。源氏わかへりと給ひし時。

わかぬ浦の心もしらぬ玉もなひかん程そきたるとよみたるは。いまたいときなき程の人をむかへとりて。そひはつへきやらん。又いとはれやすへきもしらす。むかへをきたるはけにうきたる事也。こゝを玉もなひかん程そきたるとよめる也。夢そうきたるといへるも。人の袖の中へわかつたましの入共。そのまゝとまりて有へきにあらねば。やかてかへる也。さて玉とゝまらぬとはいひたる也。たましぬ

か人の袂に入とみしか。夢かきむれはかへる也。夢を詠に。みる覺るなといへるは。安道あうちとてわるき也。入とみしといひたるに。みたりと云事は聞えたれば。さむるといばねとも。玉とゝまらぬといへは。さめたる所はきこゆる也。入とみれともとゝまらねは。夢かうきたる也。

一卯月郭公といふ題にて。

郭公をのか五月をまつかひの涙のたきも聲そすゑなき伊勢物語に。わか世をはけふかあずかとまつかひのなみたのたきといつれたかけん。行平の鼓の漣をみてよみたる歌也。それを時鳥の泪の漣と。ちやとなしたるはめつらしく侍る也。かやうにちと引かへてならてはよまれぬ也。まつかひはまつのあひた也。間の字也。

一あまきるはくもり也。目きりて。なみたきりてなといふも同事也。

一歌には秀句か大事にて侍る也。定家の未來記と云ふ秀句の事を書たるなり。雅經の燒鹽のからかの浦なと云たるか秀句也。

一殘月越ニルヲ關と云題をは人わろく心得也。殘月越關とよみて。月か關をこゆると心うるはわろし。月に人の關を越えて有也。さる程に殘月にとよむ也。

一歌には恨かおほき也。後をくゝりさきか思ひて。我本意なる

事なし。みな人のよしとてなす歌をよみたるは。いつまでも其分にてあるへく。又幽遠なる本意の歌をよめは。人か心得ずして。結句は難をさへくはふる族ある也。こゝの程か歌の恨にてある也。但をしなへてよしといふは。よくこそあるらめと也。

よしの川こほりて涙の花たにもなしの歌をよき歌とあまねく申侍れとも。其程の歌は朝夕よみわたる也。

一ねさめなとに定家卿の歌を思ひ出しぬれば。物狂になる心地し侍る也。もふたる躰をよみ侍る事。定家の歌ほとなる事はなき也。作者の歌はことはの外に影そひて。なにとなく詠するに哀におほゆる也。六百番に寄猪戀。

うらやます臥猪の床はやすくとも嘆くも形見ぬも契をこゝろは晝は終日に戀かなしひて歎くも人の形見。夜はすからにねもせて心をつくすも世々の契なれば。我はふすゐのやすくぬるもうらやますと云也。まことにあはれなる心也。

一友千鳥袖の湊にとめこかしもろこし舟の夜半のね覺にといへるは。

思ほえず袖に港のさはく哉もろこし船のよりしばかりにといふ伊勢物語の歌にてよめるなり。

一隱在所戀は人か在所をかくす也。在所をかくさるゝ也。厭戀も忘戀も。いとほし。わすらるゝ也。此體の題をはみな被と云字をそへて心得へきなり。

一廿首卅首すくなくよむには。ちと案せらるゝやうに。むすひ題をいたし。五十首百首おほくよむ時は。一字二字題を出したるかよきなり。

一憑人妻戀は人の妻をろさう事也。空蟬浮舟とかよかるへき也。或所の會に此題にて。

身を宇治とたのみこはたの山越て白浪の名を契にそかる
とよみ侍り。

一鶯の聲の匂ひをとめくれば梅さく山に春風そふく
さのみ遠からぬ集の歌也。匂といふは何にもあるへき也。句はゆうにてある也。

一晚夏は暮春暮秋に同し。末の夏を云也。暮夏といふは聞にく
き程に晩夏と云也。

一早苗(招月。)

旅行はさおりの田歌園により處につけて聲をかはれる
さおりは五月にゆるも也。旅行はゝ何とやらんしたる詞な
れとも。古歌にゝある詞なれはくるしからぬ也。

一本歌にとる事。草子には源氏の事中におよはす。こと物語も
とる也。住ゝし。正三位。たけとり。伊勢物語をはみな歌をも

詞をもとる也。堀川院の作者の外も。その時の人の歌をはみな本歌にとるへき也。西行は鳥羽院の北面にてありしかは。堀川院の御時代は澤山にあるへきなり。仍西行か歌をは本歌にとるへきなり。初心の程は無盡に稽古すへき也。一夜百首。一日千首などのはやきをも讀たり。又五首三首を五日六日に案する事もあるへき也。かやうにかけ足をいたいたる歌をもよみ。手綱をひかふる歌をも讀つれば。延促自在になりて。上手にも成へきなり。初から一首也ともよき歌をよまんとすれば。はては一首二首もよまれず。終に讀あかる事なき也。

一関中雲。花盛。まさかき。みれ。落花。

さけはちる夜のまの花の夢の内にやかて紛れぬ峯の白雪
幽玄體の歌也。幽玄といふ物は心に有て詞にいはいれぬものなり。月に薄雲の帶たる。山の紅葉に秋の霧のかゝれる風情を幽玄のすかたとする也。是はいづくか幽玄なると云とも。いつくといひかたき事也。それを心得ぬ人は。月はきら／＼と晴て。青き空にあるこそおもしろけれといはんは道理也。幽玄と云は更にいつくか面白きとも妙なるともいはれぬ所也。夢の内にやかてまきれぬは。源氏に源氏藤つほにあひて。

見ても又逢夜稀なる夢の内にやかて紛るゝ我身ともかな

とよみしも。幽玄のすかたにてあり。見ても又逢夜まれなるとは。もともあはす後にも逢ましければ。逢夜まれとはいふなり。此夢かさめすして。夢にてはてたらは。やかてまきれたるにて有へき也。夢のうちとは逢をさしたる也。此あふと見えつるは。夢の内に我身もまきれて。夢にてはてよかしと也。藤つほの返しに。

世かたりに人や傳へん類なく憂身をさめぬ夢になしてもとあり。藤壺は源氏の爲にはまゝ母也。さるにかゝる事ありしとは。たとひうき身は夢にてはてたりとも。うき名はとゝまりて。後の世かたりといひつたふへしとなり。夢のうちにやかてまきるゝ心を。よく打返してよみし也。さけはちる夜のまの花の夢のうちにとは。咲かともれは夜のまにはやちる物也。あけてみれば。雲はまきれもせずしてあれば。やかてまきれぬ峯の白雲とはいふ也。夢のうちとは開散あひたをさすなり。

一 田蛙。

行水に蛙のうたのかすかくやおなし山田に鳥もゐるらむ鳥とは鳴也。鳴は秋の物なれば。たゝ鳥といひたれば。何鳥やらんにてよきなり。苗代には萬の鳥かおりゐる也。

一夕日影のこれる山陰にひくらしの啼たる程。おもしろき物はなき也。蟋蟀のなく夕景のやまと撫子といひたるやうに。

轉する事か大事の物也。日くらしのなく夕かけとあれば。雲とも日影ともいふへきに。大和なてしこと轉したるは。ちとつかぬやうなれとも。おもしろく轉したる也。定家の。

らんせいの花の錦のおもかけにいほりかなしき秋の急雨の歌はおもへは面白也。らんせいの花の錦に秋の村雨。よく轉したる也。これは蘭省花時錦帳下。廬山雨夜草庵中の詩のこゝろ也。らんせいの錦帳は内裏などの事也。

一 鹽のやをあひとは八百合と書たる也。四方より汐のみちあふさかひをやをあひといふなり。

一 そよつにそゝや木からしなといふ詞は。上手めきたる詞なり。好よむへからす。にくいけしたる也。

一 深夜夢覺。

秋の夜はなからにつくるためし迄思ひねさめの夢の浮橋とよみ給しか。ね覺の夢と云詞はなき事也。ねさむる夢とよむへしとて。なをしたまひき。

一 一首懷帯は詠の字の下に題をかくなり。詠松有春色和歌。かやうにかくへき也。歌をば三行三字にかく也。奥をひろくあましたるも見にくきなり。一はいに書合せんとしたるもわろし。詠と云字より前のあきたる程に。歌の奥をも書残したるかよきなり。歌の行のあはひの廣きもわろし。三首の時の行程にてもわろし。ちとひろくのけて書へき也。俗人は春

日同詠、ゝゝと書間。一行あまる也。法師はたゝ詠ゝゝ、とはかり書なり。夏日秋日冬日とかくをはしつくりと云也。

一歌は極信によまほ。道にはたかふましき也。されともそれは勅撰の一體にてこそ侍れ。さしはなれては堪能とはいはれかたきか。是はたゝ流々わかれしから。かやうになりもて來る也。爲兼は一期の間終に只足をもふまぬ歌をこのまれし。同時爲世はいかにも極信なる跡をよまれし。頓阿。慶運。淨辨。兼好などゝいひし上足も。皆家の風をうくるゆへに。極信の體をのみ此道の至極とたゝしてよみ侍りしかは。此ころほひよりも歌は損しけるなり。流々わかれさりし以前は。三代共に何れの體をもよまれけるにや。里郭公。あやなくも夕の里のとよむかなまつにはすきし山郭公。夕は里かとゝといふ物なり。連歌ならは。人といはすしては。何かとよむそといふへきなり。

一 寄烟戀。

たつとてもかひなし室の八嶋守神たにけたぬむねの煙は室の八嶋もる神と。ちやと引かへたる所にて。めつらしく成たる也。是もふたゝひむろの八嶋守と云事をよむましと存へき也。中古には池にすむをし明かた。露のぬき夜半の山風なと云事。二度まなひては恥辱とおもひし也。

一實相院僧正入峯せさせ給ふとて。奈良の尊勝院へ立よりて。一夜とゝまりて。つとめて出させ給ひければ。院主てつから盃もて出で。首途をいはひ侍るに。實相院短冊を一枚もて。送行の歌一首うけたまはらんとて予に給りし。俄の事にて計會いふはかりなかりしかとも。とかくいなひ申に及はぬ事なれば。盃を靜に打すりて。かきつけてまいらせ侍し。

此度はやすくそえんすゝ分てもと踏なれし岩のかげ道今度は入峯の二度めにてありし程に。もとふみなれしとよみ侍しなり。

一慈鎮和尚の御弟奈良の一乘院にておはしましける。八月十五夜夕もしるくさやかなる月に。中門にたゝすみ給ひし折ふし。御力者あまた御庭をはきけるに。傍輩とちいかにこよひ慈鎮坊のうたよませ給ふらんといひあへり。さてあくる朝慈鎮和尚の御かたへ狀を進せられしやうは。恐ある申狀なから。又心底を残すへきにも候はす。一山の貫頂三千の棟梁にて御座候へは。眞言止觀の兩宗をこそ讃仰もせられ。興行もあるへき事に候へ。日夜風月のたはふれをもてあそはせ給ふ事。釋心の義にも背き。還而凡俗の跡に吟せられ候事無勿跡候。此室につかひ候奴原等。去夜の月に御身上申沙汰仕候。まして天下の物いひきこそと推量仕候へ。向後は此道を御さしをき候へかしと。教訓狀を進せられしかは。慈鎮和

尙其比天王寺別當にて。彼寺にわたらせ給ひしかは。あれへ御狀をもてまいりければ。御返事には悦入候とて。一首の歌を奥に書給へり。

みな人に一つのくせはあるそとよ是をはゆるせ敷嶋の道とあそはしてまいらせられしかは。一乗院の門主沙汰のかきりの限りとりてやみ給にき。

一 馴不逢戀。

よのつねの人に物いふよしなから思ふ心の色やみゆらむよのつねの人に物いふと云たるは。俗なるやうなれとも。かくもあるへき歟。

一 古寺灯。

法それこれ佛のためにともす火に光をそへよことのはの玉かやうによみつれば。古寺はある也。古寺の題にて。かならず寺とよむへしと存したるは。おかしき事也。古もたゝそへ字也。たゝ寺までなり。

一 社頭祝。

いほ原にあらずなからの太山もろみおの神松浦風そふくいほはらや三おの浦といふ所は駿河の國に有也。それにも松をよみたり。これも三尾なれとも。いほはらにあらずなれは。いほ原にあらずなからの山と云也。神のもるといへば。祝の心はある也。爰にもうら風ふくへければ。うら風を吹と

よみ侍る也。

一歌の數寄に付てあまたあり。茶の數寄にも品々あり。まつ茶數寄といふものは茶の具足を奇麗にして。建盞。天目盆。茶釜。水指などいろ／＼の茶の具を。心のをよふ程たしなみ持たる人は茶數寄なり。是を歌にていはく。硯。文臺。短尺。色紙などうつくしく暗て。何時も一續なとよむ會所など。しかるへき人は茶數寄のたくひなり。又茶のみと云ものは別して茶の具をはいはず。いつくにも十服茶なとよくのみて。宇治茶ならは三番の茶也。時分は三月一日わたりにしたる茶也とのみ。褥尾にては是はとはたの茵共。是はさかさまのえんとものみしるやうに。能々其所の茶を前の山名金吾なとの様にのみしるを茶飲と云也。是を歌にては歌の善惡をわきまへ。詞の用捨を存し。心の邪正を明にさとり。人の歌をもよく高下を見分なとせんは。いかさまにも歌の髓腦にとほりて。さとりしれりと心得へし。是を先の茶飲の類にすへし。さて茶くらひといふは。大茶碗にて。ひくつにても吉茶にても。茶とたにいへはのみ給ひて。さら／＼茶の善惡をも知らず。おほく飲居たるは茶くらひ也。これ歌にては詞の用捨もなく。心の善惡をいはず。下手ともましり上手にもましはりて。いか程ともなくよむ事を好てよみ給たるは。茶くらひのたくひ也。此三の數寄は。いつれにも一の類にてた

にあれば。座にはつらなる也。智蘊は我は茶くらひの衆也と申侍り。

一初心の程は先ましはりをとる歌をよむか最上の稽古也。後には獨吟しゐれば。心もとなき事もおほく。歌おもしろき事もなき也。一度に歌をおほくよむには。初一念に取得たる物をはなたすよみもてゆく也。かれこれと取捨すればよまれぬなり。

一天彦は日の事也。彦星をも天津彦星ともよみたり。津はやすめ字也。たゝは天彦也。

一たちぬはぬ日とは。七月七日はかり。七夕にははたをもをらす。裁縫をもせぬなり。と時は三世常住機を織也。衣手の七夕は。手といはんとて。衣手の七夕とつゝくるなり。是はかくも有へき歟とて。我料簡したる也。衣手の田上のやうなり。衣手とたにつゝかは。ともかくもよむへき也。

一手かひの犬は。男七夕は犬を飼也。萬葉の歌に見えたり。

一かさゝきの橋は。烏鵲か河のむかひにゐて。兩からはねをひろけてたなばたをわたす也。紅葉の橋といふもかさゝきの橋也。紅葉の木にてはなき也。七夕の別をかなしひてなく泪かかゝりて。鵲のはねか赤くなるか紅葉に似たれば。紅葉の橋といふ也。

一山ふみとは山をふむなり。山ふみといふ事。源氏に只一所あ

り。右近か初瀬へまいりて。玉かつらにあひたる事を。歸りて源氏にかたるとて。あはれたる山ふみにて侍しといひたる也。

一いかなるを幽玄體と申へきやらん。これぞ幽玄とて。さたかに詞にも心にもおもんばかりいふへき事にはあらぬにや。行雲廻雪を幽玄體と申侍れば。空に雲のたなひき。雪の風にたゝふ風情を。幽玄體といふへきにや。定家の書たる愚秘とやらんに。幽玄體を物にたとへていはゝ。もろこしに襄王といふ帝おはしましき。或時晝寢すといひて。ひるねをしたまふところへ神女天降りて。夢とも現ともなく。襄王とちきりをこめたり。襄王餘波をおしみてしたひ給ひければ。神女我は上界の天人也。前世の契有て今爰に來て契をこめたり。此地にとゝまるへきものにあらすとて。飛さらんとしてければ。王あまりにしたひかねて。さらはせめてかたみを殘し給へと有ければ。神女我かたみには巫山とて宮中にちかき山あり。此巫山に朝にたなひく雲。夕にふらん雨をなかめ給へとてうせぬ。此後襄王神女を戀慕して。巫山に朝にたなひく雲。夕にふる雨をかたみになかめ給ひけり。此朝雲暮雨をなかめたる體を幽玄體とはいふへしと書たり。これらもいつくか幽玄なるそといふ事。面々の心のうちにあるへき事なり。さらは詞にいひ出し。心にあきらかに思分へき事に

はあらぬにや。麗艷としたる跡を幽玄跡と申へきか。南殿の花の盛に咲みたれたるを。きぬはかまさたる女房四五人なかめたらん風情を。幽玄體といふへきか。これをいつくかきても幽玄なるそと問んに。爰こそ幽玄なれと申さるましき事也。

一 隆祐か歌。若年の比ほひは父の卿にもをとらず。このもしくおほえ侍しか。老後に成て無下にをとりたるよし。定家申さるゝと聞て。さらは老後の歌こそあらめ。なと若年の歌をは勅撰には入てたはぬそと。隆祐うらみけるとなん。家隆の歌をは。定家卿いさゝか亡室の妹ありとて。恐れおもはれしか。はたして家隆。隆祐。隆羈。わつかに孫までにて絶けるこそふしきなれ。

一 翫花。

一枝のはなの色香をかさすゆへいとゝやつるゝ老の袖哉雪の時わろき物を着たるか。殊にわろく見ゆる物なり。一家隆は四十以後はしめて作者の名を得たり。それより前も。いか程か歌をよみしかとも。名譽せらるゝ事は四十以後成し也。頼阿は六十以後此道に名を得たるなり。かやうにむかしの先達も初心から名譽なかりし也。稽古敦寄功積りて名譽有ける也。今の時分の人。いまた歌ならは一二首とみて。やかて定家家隆のうたを似せんとおもひ侍る事おかしき事

也。定家もゆかすして長途にいたる事なしと書たり。坂東鎮西のかたへは。目を経てこそいたるへきに。只出立一足にいたらんとするかとし云々。たゞ數寄のこゝろ深くして。晝夜の修行をこたらず。まつくなびく口かるによみつけないは。自然ともとめざるに有興所へ行着へき也。但後京極攝政殿は卅七にて薨し給ひしか。生得の上手にておはしまして。殊勝の物ともあそはしき。若八十九の老年迄おはしましたら。いかに猶重寶ともあそはされんすらんと申侍し。宮内卿は廿よりうちになくなりしかは。いつの程に稽古も修行もあるへきそなれとも。名譽有しかは。生得の上手にて有故也。生得の堪能にいたりては。剌發心時便成正覺なれは。修行を待所にはあらず。しからさん輩はたゞ不斷の修行をはけまして。年月を送なは。つゝに自得發明の期あるへき也。たゞ數寄にこえたる重寶も肝要もなき也。上代にも數寄の人々。は古今の大事をもゆるし。勅撰にも入られ侍り。まことに數寄にあらは。なとか發明の期なからん。

本云

此一冊招月雜談。蜷川新右衛門尉聞書也。以彼自筆本令書寫之畢。

慶長第三八月下旬

〔右清巖茶話以内園記錄課本校合〕

〔以宮内省圖書寮所藏堀氏原本再校了川邊勝哉〕

明治四十四年八月五日印刷

明治四十四年八月八日發行

大正十四年二月二十日再版發行

發行者

東京府西巢鴨町宮仲二千五百七拾番地
續群書類從完成會代表者

太田藤四郎

印刷者

東京府西巢鴨町宮仲二千七百拾三番地
大場幸吉

印刷所

東京府西巢鴨町宮仲二千五百七拾番地
續群書類從完成會 第二工場

發行所

東京府西巢鴨町宮仲二千五百七拾番地
續群書類從完成會

振替東京六二六〇七 電話小石川一三〇八

不許
複製



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03043 3619